鳴女さんの令和ロック物語

ディヴァ子

無限城での最終決戦――――愈史郎の血鬼術により脳を操られ、鬼舞辻 無惨に見捨てられる形で死亡した鳴女。

しかし、何の因果か、彼女は生前の記憶と能力を持ったまま、別世界へと転生してしまう。

そこは熱しやすく冷めやすいコンクリートジャングルに、無気力で場当たり的な人間たちが蔓延る「令和」の日本。周りを見渡せば暗い顔の洋服姿をした人、人、人。和服に琵琶持ちという目立ち過ぎる格好をした鳴女は、さっそく後にチャラトミを名乗る男とその友人に絡まれ、路地裏に連れ込まれてしまう。

むろん、鬼である鳴女が好き放題される筈もなく、今日の一曲を奏でる為の生贄として友人の男を虐殺。続いてチャラトミをも殺そうとするが、彼の情けない命乞いと「ウーチューバーになれば、働かなくても人気者になれる」という言葉を受け、人生をもう一度やり直してみようと決心。チャラトミを利用して〝大人気奏者〟となるべく、動き出す。

そこがどんな世界なのかも知らずに……。

タイトル画のようなナニカ（手描き）

女さんの和ロック語
鳴令ロック物

目次

鳴女さん、令和の世に立つ 1
鳴女さん、新居を得る 11
鳴女さん、夜釣りをする 19
零余子チャンカワイイヤッター！ 29
鳴女さん、抱き枕を得る 37
鳴女さん、悪戯に行く 45
鳴女さん、ユニットを組む 55
零余子ちゃんの鳴女さん観察記 63
鳴女さん、真剣勝負をする 71
鳴女さん、ママ活する 85
犬山まなと猫娘 93

姑獲鳥の鳴く頃に 105
野生の裏ボスが現れた！ 113
運命の戦い 123
零余子ちゃんのゲーム実況 133
不思議の夢の零余子 141
零余子ちゃん、大ピンチ！ 151
零余子ちゃんと愉快な仲間たち？ 161
？？？の無限なる新生活 169
鳴女さん、久々に主人公する 177
鳴女さん、狸料理に舌鼓を打つ 185
鳴女さん、強敵に遭う 195
鳴女さん、思い知る 203
鳴女さん、夜の一時 213

鬼太郎の家族会議 221
鬼太郎の武者修行① 229
鬼太郎の武者修行② 237
鬼太郎の武者修行③、そして…… 245
丸子、でーとするの巻 253
トリプル・コンタクト 261
真名のまなわんリポート 269
ニャニャニャのバトルガール 277
宿命の戦い① 285
宿命の戦い② 293
宿命の戦い③ 305
戦いの後、それから…… 313
箒星の彼方で 321

ある日見た夢
目覚めた悪夢
鳴女さん、湯治する
零余子ちゃんの悪夢再び
零余子ちゃんVSレアなハンター
零余子ちゃんVSン熱血指導ティーチャー
零余子ちゃんと大罪の二人
零余子ちゃんVSドクター・ジャドー診療所
零余子ちゃんと運命の白い闇
零余子ちゃんと運命の赤い絲
悪しき決闘者たち
悪夢の彼方へ
鳴女さん、再会する

鳴女さん、会談する 595
鳴女さん、試験をする 585
アデルとカミーラの鳴女式最終選別試験① 575
アデルとカミーラの鳴女式最終選別試験② 559
アデルとカミーラの鳴女式最終選別試験③ 545
アデルとカミーラの鳴女式最終選別試験④ 537
奈落の底から 527
在りし日の一時 519
審判の日 509
真実の扉 499
鳴女さん、バックベアードと対面する 487
鳴女さん、対話する 477
鳴女さん、思い知らせる 467

鳴女さん、新世界へ
鳴女さん、携帯獣の世界へ
鳴女さんの新たな旅路
鳴女さん、トゥハーデシティへ
鳴女さんのトゥハーデジム攻略
鳴女さんとスマイル団
幽霊電車、地獄行き
鳴女さん、マッタネーンシティへ
鳴女さんのマッタネーンジム攻略
鳴女さん、ドロンゴルシティへ
鳴女さんのドロンゴルジム攻略
鳴女さん、賭け事に興じる
鳴女さんの悪意とアデルの決意

823 807 787 767 743 721 697 677 657 647 627 613 605

鳴女さん、グラディエーターになる 841
血で血を禊ぐ戦い 861
影に潜む者たち 879
悪と正義の会談 887
我は訴え求めたり 901
鬼殺隊 909
一狩りしようぜ 917
クエスト①：拠点の確保 925
クエスト②：鎌鼬竜オサイズチの討伐 939
クエスト③：岩竜バサルモスの狩猟 953
クエスト④：千刃竜セルレギオスの狩猟 967
クエスト⑤：甲殻竜シェルレウスの捕獲 983
クエスト⑥：百竜夜行 1003

クエスト⑦：怨虎竜マガイマガドの討伐、そして！
鳴女さん、ママになる
終わりの始まり
終わる世界
混沌の最中
凍える世界
命を狩る者
這い寄る混沌
闇黒の使徒
東の都の眠れない夜
それぞれの戦い
1147 1135 1117 1109 1097 1077 1063 1049 1041 1031 1017

始まりの終わり 1313
最後の晩餐 1299
鳴女さん、新婚旅行する 1273
鳴女さん、結婚式を挙げる 1253
アデルとカミーラ、初めての夜 1235
ザ・ハウス・オブ・ザ・マッド 1221
ザ・ハウス・オブ・ザ・サイコ 1207
ザ・ハウス・オブ・ザ・キュリアン 1197
ザ・ハウス・オブ・ザ・デビル 1189
運命の戦争 1179
破壊神 1163

鳴女さん、生配信する
勇壮
鳴女さん、高みの見物をする
これが戦争
いもうと

1369 1363 1353 1345 1335

鳴女さん、令和の世に立つ

最近、「鬼滅の刃」を大人買いして一気読みした結果、何故か鳴女さんが気に入ったので投稿しまシタ。息抜きも兼ねての物なノデ、令和の未来くらい先行きが不安デス。

――――あっ、死んだわ、これ。

我が血鬼術「無限城」に鬼殺隊の連中を引きずり込んでの最終決戦。ふとした油断から珠世（たまよ）の腹心である愈史郎（ゆしろう）の術中に嵌まり、無限城の支配権を奪われてしまった。

当然、そんな事を許す無惨（むざん）様ではなく、最初こそ救出しようとしてくれたものの、鬼殺隊の柱たちによる猛攻に晒されるとアッサリ見限り、頭をパーンしてくれやがった。おかげで私は自分の根城ばかりか、人生からも退場する事と相成った。

『……ん？』

そして、見知らぬ土地で目を覚ました。

何だここは。建物が全部コンクリートとガラスで出来ているどころか、地面の全てがアスファルトだと？

それに街行く人間共の装いも大分様変わりしている。やたらとチャラチャラしている者もいれば、葬式でもないのに正装をかましている輩もいる。中には「何処の文化だ？」と言いたくなるような奴もいた。

そもそも、誰も彼もが持っている、あの平たいカラクリは何だろう。耳に当てて話す者もいれば、写真を撮る者、ガラス版を指で弄る者もいる。

どうやら、色々な機能を持った電話のようだ。何それ、私も欲しい。

……というか、周囲の劇的な変化に戸惑っていたけど、現状一番目立ってるのって、私じゃね？

大正の世でも充分に浮いていたが、今この場においては確実に浮き彫りとなっている。周りを必死に見渡してみても、着物姿の琵琶奏者なんかいねぇよ。

どうしよう、何か凄く居心地悪いんだけど。長い前髪のせいで一つ目である事がバレていないのが、せめてもの救いか。知れ渡ったら、確実に騒ぎになるからね。

「おっ、スッゲェ美人」「まさに大和撫子って感じしてるじゃ～ん♪」

とか何とか考えていたら、如何にも駄目な感じのチャラ男と、思わず右目が疼きそうな雰囲気の痛い男に絡まれた。

「やぁ、そこの君、渋谷のど真ん中で、そんな格好してどうしたの～？」「もしかして、誘ってる？　なら、ちょっとお茶しな～い？」

いや、何だこいつら。誰が誘い受けだこの野郎。「お茶しない？」とか言ってるけど、絶対ヤる気だろテメェら。

つーか、ここ渋谷なのか。「最近大分発展してるなー」とは思っていたけど、何時の間にこんな有様に……。

「ほら、来なよ！」「俺たちが女の喜びって奴を教えてやんよ！」

……って、無駄な事を考えてる内に、路地裏へご案内されてた。やっぱ身体目当てなんじゃん。

ムカつくわー。言動が物凄く元旦那（あのくそつぶし）にそっくりなんですけど。殺して良いよね？

『えい』

「ビッ!?」

とりあえず、痛い感じの方から殺してみました。撥で脳天を唐竹割り。汚い花が咲いた。

うーん、何度やっても心に響くわね、人を殺すのは。私は今生きているんだと実感させてくれる。

「へっ……カスパー？　えっ、死んだの!?　嘘だろ!?　つーか、一つ目!?　人間じゃないってのかよ!?　うぁあああああああああ！」

友人（カスパーというらしい）の死にチャラい方が漸く気が付き、腰を抜かす。安心しなよ、お残しはしないし、お前は頚を撥ね飛ばしてやるから。

よし、まずは素振りを――――――、

「ひぃいいいいいっ！　や、止めてくれ！　殺さないでぇえええええっ！」

すると、チャラ男が三つ指着いて命乞いを始めた。無惨様の集会でよく見たなぁ、この光景。

と言うか、涙と鼻水はもちろん、股間から黄色い液体を垂れ流しにしてやがるよ、この男。ここが夜の路地裏で良かったな。往来の真ん中でそれやったら、ただの生

き恥だぞ。

まぁ、命乞いされたからと言って、聞いてやる筋合いは無いがね。所詮、人間なんぞ曲調を上げる為のカンフル剤でしかないのだから。

『よし、殺すかー』

「うひょあああああ！　止めて止めて、お願いしますぅううう！　……あっ、何なら一緒にウーチューバーやりませんかぁあああ!?　ちょうど、そこに転がってるゴミと一緒にやる予定だったんですよぉおおお！」

『……〝ウーチューバー〟？　何だそれは？』

というか、友達をゴミ呼ばわりするのはどうなんだ。半天狗みたいな奴だな、こいつ。

「えっ、あ、ハイ！　ウーチューバーと言うのはですねぇえええええ！」

それから、チャラ男のたどたどしくも分かり易い、ウーチューバーについての解説が成された。

今の世の中、インターネットなる情報媒体によって全世界と繋がっており、ネット上での人気が現実での収益になり得るらしい。売れっ子作家みたいなものか。そ

れが全国どころか世界規模で名が売れるのだから、そりゃ大金持ちだろうよ。

さらに、インターネットにはウーチュブという〝誰でも作れる映画集〟があり、ウーチューバーはそれを自作する者の事を指すという。

えー、何それ、凄い贅沢。映画ってだけでも凄いのに、映像はカラーで音声付き。それが只で見られるとか、良い時代になった物である。

ああ、そうそう、チャラ男に確認した所、今は大正から百年以上経っており、「令和」という元号になっているそうな。天皇がお飾りになったり、国会が腐り切っていたりと、世も末な感じ。

うーむ、これは一から常識を学び直した方が良いかもな。大正が浪漫とか言われてる時点で、全然会話が通じないもん。

私は奏者として大成したい。無惨様に出会うまではそこそこ名は売れていたけど、所詮宿場町の一奏者としてだし、何より鬼になってからは誰も真面に聞いてくれなかった。無惨様も便利な女としてしか見てくれなかったしね。

だからこそ、今度こそは自由気儘に弾き語りたい。あわよくば超有名になって、チヤホヤされながらニートしたい。

幸い、今の私は無惨様の支配からは外れている。彼はおそらく殺されたのだろう。殺意ヤバかったもんなー、鬼殺隊（あいつら）。名が体を表し過ぎて、もはやあいつらが鬼だったわ。

つまり、今の私は数少ない「鬼」の生き残りにして、自由の身という事だ。

ならば、今世では好き勝手に生きるとしよう。今まではやって来なかったが、せっかく便利な情報媒体があるのなら、それを使ってもう一度「鬼（じぶん）」を見詰め直してもいい。詳しく知る事が出来れば、私でも無惨様のような始祖になれるかも。そうなれば、最早誰も私には逆らえず、邪魔される事なく音楽活動が出来るだろう。

そうと決まれば、

『よーし、ならば殺すのは待ってやろう』

「え、マ、マジですか!?」

『その代わり、私が売れるように努力しろ。私の為に働け。良いな？』

「ハ、ハイ……」

そんな感じで、私はこのチャラ男（チャラトミという芸名らしい）を従え、令和の世で返り咲く事を目標に、動き始めるのだった……。

◆鳴女

鬼舞辻 無惨のお気に入りである女の鬼。本名は不明。無限城という異空間を自由自在に操る能力を持ち、直接的な殺傷力こそ低い物の非常に厄介な存在である。最期は愈史郎と無惨の脳取りゲームの末に、面倒になった無惨の呪いで頭をヒートエンドされて死亡した。

しかし、何の因果かゲゲゲなあいつの居る平行世界に生前の記憶と能力を保ったまま転生する事となり、好き放題に生き始める。

人間時代は、賭ケグルイな夫のDVに悩まされる悲劇の奏者――――と思いきや、一度キレれば平然と人を殺し（しかも最初の殺人が夫の頭をトンカチでケーキ入刀）、それを演奏の華にしてしまう、マジもんのキチ〇イ。無惨との出会いも、「今日の一殺」をしようとしたら返り討ちに合う、という何とも言い難いもの。良くこんな奴を鬼（というか部下）にしようとしたな、無惨様。

この世界では無惨という絶対的なストッパーが居ない為、色々と箍が外れた挙

句、文字通りに暴走している。

鳴女さん、新居を得る

鳴女さん以外だと零余子と朱紗丸、姉蜘蛛辺りが好きデス。敵ばっかりヤン。

『ここがお前の家か』
「ハ、ハイ……汚い所ですが……」
『掃除しろ』
「はいぃいいいいいいいいいい！」
という事で、私はチャラトミの家に来た。やもめ暮らしが汚い事は分かり切っていたので、まずは掃除をさせる。少しでも私をイラつかせたらゲームオーバーの、無惨式クイックルだ。暴力は全てを解決するって、ハッキリ分かんだね。
そのおかげなのか何なのか、チャラトミは物の一時間で新築同然の部屋に磨き上げて見せた。凄いなお前。意外と家政婦の才能あるよ。
それにしても、狭いなぁ。玄関と台所が直結してて、居間（客間兼任）が六畳し

かないとは。

一応、ロフトなる一段高い開けた屋根裏みたいな場所が二畳分くらいある（下は納戸になっている）が、それでもこれは狭いぞ。

いや、確実に私の人間時代より良い生活してるけど、このチャラい男と一つ屋根の下で暮らすのはちょっとねぇ……。

『よし、今日からお前の部屋ここな』

「え、ここ押し入れじゃ……」

『返事は？』

「はい」

さて、部屋割りも決まった事だし、さっそく模様替えをしよう。

まずは琵琶を置く場所を確保して、布団はロフトの上で、居間には机と座布団を敷いてっと……。

『フム、中々の出来栄えだな』

何と言う事でしょう。手狭で圧迫感しかない小さな居間が、あっという間に質素で落ち着いた感じに様変わり。こうしてみると、狭いのは狭いので有りかもな。大

体の物が手の届く範囲にあるし、掃除も簡単。プロも（納戸に）いるしね。
『おい、チャラ男』
「ハイ！　な、何でしょうか!?」
『まずはパソコンとやらの使い方を教えろ。それから〝動画〟の作り方もだ』
「了解であります！」
身辺整理が出来た所で、私はさっそくチャラトミにパソコン講座を命じた。ウーチューバーの時もそうだが、こいつの説明は案外分かり易い。講師でもやればいいのに……と思ったけど、チャラ過ぎて駄目か。
まぁ、これからは精々私の為に扱き使わせてもらおう。よろしくねぇ、先生？
◆◆◆◆◆◆
やぁ、皆！
俺だよ俺、皆の主役チャラトミさんだよ！
さっそくだけど、運命って言葉に付いて、皆の意見を聞きたいんだ。
――――友達と大和撫子をナンパしようとしたら、彼女は一つ目の化け物で、友達を殺された上に奴隷にされたんだけど、俺はどうしたらいいんだろう。誰

か助けて。

だが、俺は知っている。こういう時に限って、誰も助けてくれないって事を。

だから、俺は素直に鳴女とかいうこの化け物に付き従う道を選んだ。逆らっても殺されるだけだし。何より一つ目以外の見た目はド直球で俺の好みだし。

正直、かなり興奮する。今思うと、一つ目ってのもアバンギャルドな感じがして、逆に良いかもしれない。何時かヤらせてくんないかなぁー。

ま、それは置いておいて。

どうもこの鳴女さん、「鬼」という種族であるらしい。もう何百年も生きていて、今はネットアイドルを目指しているんだとか。アグレッシブ過ぎませんかね？

というか、本人は鬼って言ってるけど、話を聞く限り、俺的には〝和風の吸血鬼〟って印象なんだよな。だって血を媒介にして増えるし、日光に弱いし。銀や十字架が効くのかは知らないが、少なくとも本人はニンニクが嫌いなようである。商売柄、強い臭いは駄目なんだとか。ただの好き嫌いじゃん。

それを鳴女さんに伝えてみた所、〝なるほど〟と納得して、器用にネットを使い調べ始めた。結構適当に教えたのに、よく使い熟せるな。本当に大正時代で知識ス

トップしてんのか？

それから、動画についての説明を交えながら、鳴女さんは己の種族に対して仮説を立てていく。曰く「今の自分は支配を逃れた従僕鬼。絶対の安心を得るには、力を高めなければならない」んだとか。現代に蘇って間もないのに、お疲れ様です。

しかし、ここで人間をオススメすると真っ先に俺が食われるので、俺は代案を用意した。

『……「妖怪」だと？』

そう、妖怪だ。目に見えないが、確かに存在する化け物。

何時だったか、ノリで「のびあがり」とかいう奴の封印を解いたらえらい目に遭ったので、まず間違いなくいる。その類の連中が、今もこの世の何処かに。

「鬼は人間しか食えないって話ですけど、あくまで〝人間の食い物〟が食えないだけなんですよね？　妖怪も人間を喰う、謂わば同類。食うならそっちの方が栄養あるんじゃないんですかね？」

おお、冴えてるぞ、俺。何の根拠もないけど、ファンタジーによくある設定を引っ張り出して、それっぽい説明が出来てる。人間、命が懸れば何だってやれんだ

ね。

『フム、確かにその通りかもな。吸血鬼の特性を鑑みれば、食事の質を上げるに越した事はない』

よいよし、上手く矛先が人間以外に向いてくれた。東京でグールみたいな真似されちゃ敵わないよ、いやマジで。

ともかく、これでヘマさえしなければ、俺の生活は安泰――――――。

『よし、まずは自己強化から始めるか。お前詳しそうだし、案内しろ』

「え？」

『そして、良い感じで囮になれ。安心しろ、一応は殺される前に妖怪の方を殺してやるから。間に合わなかったら知らんけど』

「……」

オーノーッ！

――――――こうして、俺の日常は一気に様変わりした挙句、命の危機が付き纏う毎日を送る破目になったのだった。口は災いの元……。

◆チャラトミ

ゲゲゲ世界の住人にして、鳴女が一番最初に接触した人間。

名前通りにチャラい上に渋谷のスクランブル交差点のど真ん中で自撮り中継したり、ノリで「のびあがり」の封印を解いたりなど、傍迷惑な行為ばかりしている阿保。まさに〝モラルの無い今時の人間〟そのもの。

そんな事ばかりしていた報いなのか、目の前で鳴女に友人（ゴミ）のカスパーを食われた挙句、奴隷生活を強いられるようになる。

しかし、一つ目である以外、鳴女は結構好みのタイプである為、密かに彼女へ欲情してたりする。

鳴女さん、夜釣りをする

鬼滅の刃に登場する妖怪染みた鬼たちの姿を見ていルト、この作品では「妖怪というニッチ」に無惨系の鬼が割り込んだ形で成り立ってるんだろうナァ、とちょこちょこ考えていまシタ。

おはよう諸君、音川（おとかわ）鳴女（なきめ）だ。

今時は苗字が無いのは変らしいので、とりあえず音川という姓を名乗ってみる事にした。何か音柱みたいで嫌だが、妙案が浮かぶ訳でもないので、このまま行くとしよう。どうせ偽名だし適当で良いでしょ。

そんな事より妖怪である。

チャラトミ曰く、この世界には物の怪が本当に存在するらしい。そんなの無惨様だけかと思ってたわ。話を聞く限り、栄養価は人間よりも高そうだし、手っ取り早く力を高められそうなので、積極的に狙っていこう。

さぁ、いざ妖怪ウォッチ――――――と言いたい所だが、今は朝。既に日が昇っている。日光に弱いのは相変わらずのようなので、探索は夜まで待とう。

とりあえず寝るかー。本来、鬼に睡眠は必要ないけど、暇な時は寝るに限る。寝る子は育つって言うし、起きてるとチャラトミを食べちゃいそうだし。

『私は夜まで寝る。お前は今の内に準備を進めろ』

「分かりました！」

という事で、ロフトの布団に横たわり、目を瞑る。

この部屋は日照権はどうなっているんだと言わんばかりに日差しが入らないので、連れ出されでもしない限り寝首を掻かれる心配はない。

本当は無限城に避難するのが一番安全なのだが、高が人間とは言え手の内を明かし過ぎるのもアレなので、今は使わないでおく。流石に触られれば気付くので、何の問題も無いしね。

ついでに、今後ついても考えを纏めよう。

私たち「鬼」は、チャラトミに言わせれば「吸血鬼」らしい。血を媒介に増殖し、親が死ぬと眷属も死ぬなどと言った特徴が、まさにそうなんだとか。

うん、確かに納得の答えだ。書物に載っている〝地獄の鬼〟とは全く違うし。無惨様は吸血鬼だった？

ま、そんな事はどうでも良い。重要なのは私が〝真祖〟になれるかどうかである。吸血鬼の従僕が自由になる条件は、主が死ぬか下克上を果たす事。私は少なくとも前者の条件は満たしている。

だが、それだけでは〝野良〟になっただけで、無敵の存在になったとは言い難い。弱点はそのままであり、何かの間違いで無惨様が復活したら再び支配されてしまう。

それを回避するには、私自身が真祖となる事だ。全ての始まりとなる事で、自己完結するのである。その為には己の力を高め、無惨様以上の鬼とならなければならない。

幸い、吸血鬼は同族も食えるし、食えば食う程力が上がる事も分かってる。本質的には無惨様の血が必要なのだが、本人が居ない以上、私の血を濃くするしかないだろう。

だから、私は妖怪を喰ってやるのだ。人間を餌にする者同士、カロリーが高いに違いない。

……と、そんなこんなで数時間経過し、夜。

「おはようございます、鳴女様ぁ！」

『おはよう』

うーん、良く寝た。ここまで安眠出来たのは久し振りだな。

……何も仕掛けて来なかったのは、正直意外だな。覗き見はされたようだけど、触りもしなかった。

まぁ、もし仮にお触りされたら、慰謝料として命を貰っていたけどね。

『それで、目星は付いたのか？』

本当は探知の使い魔でも事足りるが、夜でも明るい今の世の中では悪目立ちする可能性が高く、何より力を使うのが面倒臭い。結構疲れるのよ、アレ。

だからこそ、こいつを使うのである。木を隠すなら森の中。どんなに頭がアレな奴でも、人である以上、人間社会に紛れ込ませれば、幾らでも誤魔化しが利く。鬼である私には出来ない事だ。

「ハイ！　俺の調べによると、この辺りに――――」

――――さぁ、鬼狩りならぬ、妖怪狩りにでも行こうか。

◆◆◆◆◆◆

草木も眠る丑三つ時。

俺と鳴女さんは、自宅から程近い公園に来ていた。最近ここの池にお化けが出ると言う。何でも人の顔をした魚なんだとか。所謂「人面魚」である。

『……魚は食えないと言った筈だが？』

「人食いの妖怪なら別でしょ？　……まぁ、胃が受け付けない可能性もありますけど、逆に食べられれば何人、何十人分の栄養になりますよ」

噂話によれば、池を覗き込む人間を人面で驚かせ、怯んだ隙を突いて食ってしまうらしい。

それを信じるなら、この人面魚は子供騙しなアレではなく、本物の化け物という事になる。人の血肉が混じった実体のある妖怪であれば、人食いの鬼でも消化出来る筈。出来なくても知らん、それは俺の管轄外だ。だって、人間だもの。

『よし、さっそく餌になって来い』

「そうなりますよねー」

チクショウ、分かってはいたけど、嫌な役回りだなぁ。

でも、やるしかない。ここで逃げても殺される。前門の人面魚、後門の鳴女。嫌過ぎる……。

「こ、こんばんは～？」

一先ず例の池を覗き込んでみる。公園のど真ん中にあるだけあって結構広く、ネッシーは無理だがピラルクぐらいなら余裕で棲めそうなくらいに大きい。アオコが張っていてお世辞にも奇麗とは言い難いけど。思わず掃除したくなる。

『ウフフ……』

と、その時。夜でも分かるくらいに緑色になった水面に女の子の顔が浮かび上がった。赤い黒目と銀のショートボブに二本角が特徴の、とびっきりのカワイ子ちゃんである。カスパーが好きそう。

しかし、そんな感想は次の瞬間吹き飛んだ。

『キャアアアアアアアアアアアアアアッ！』

一瞬、顔が引っ込んだかと思うと、金切り声を上げながら飛び出して来た。その姿は、頭だけが鬼っ娘に挿げ替わったギャ〇ドスという不気味な物。雑コラ過ぎんだろ。

しかも、よく見ると胴体も魚のそれとは言い難く、人間の手やら足やら胴やらが滅茶苦茶に混じり合った肉塊が数珠繋ぎになっているという、かなりグロい物となっている。クトゥルフ神話辺りに出て来そうだなぁ。

だが、条件を照らし合わせてみると、こいつが紛れもない妖怪である事が分かる。角の生えた人面を持つ魚――――和式の「人魚」だ。淡水産だから「髪魚」か。形態的には「神社姫」が一番近い気がするが、とても厄除けしてくれそうもないので、おそらく成長し過ぎただけなのだろう。一体どれ程の人間を食って来たんだか。普通に怖い。

うーん、カスパーが神話や伝承に詳しかったせいで、俺までドップリ染まっちまったよ、全く。

◆『分類及び種族名称：怪魚超獣＝髪魚』

◆『弱点：頭』

……って、棒立ちしている場合じゃない。早く逃げなきゃ！

「『ゑ？』」

しかし、いざ後退しようとした瞬間、浮遊感に襲われた。

否、浮いてるんじゃない。落ちている。

下を見ると、足元が池の一区画ごと開けた襖になっていた。その先は歪な空間。上下左右が滅茶苦茶になった日本式の城内と言った感じで、その歪みの中心には琵琶を弾く鳴女さんが。

たぶん、これが彼女の妖術なのだろう。空間系の使い手って所か。

ホント、カスパーのせいで異能や超能力にも詳しくなっちまったよ。

というか、今思うとあいつ色んな事に精通してたよなぁ。オカルトの専門家と思いきや、歴史や科学にも詳しかったし。案外、死ぬには惜しい男だったのかも。キャラがアレだから別にいいけど。

つーか、このままだと俺、落下死するんじゃ、

――――――べべん！

と思ったら、いつの間にか鳴女さんの傍に座っていた。この空間は彼女の根城であり、自由自在なようだ。

それじゃあ、髪魚は？

『ギャアアアアアッ！』

すると、目の前にバラバラになった髪魚がボトボトと落ちて来た。まるで見えないピアノ線で刻まれたように、奇麗な輪切りにされている。琵琶の弦でも使ったのだろうか。

だが、これだけ切り刻まれても死なない辺り、やっぱり化け物である。

『なるほど、確かに生物だ。それに藤の花は効かないが、菖蒲の汁は毒になるようだし、私たちと似て非なる存在と見て良いだろう。言うなれば、人を生産者に見立てた食物連鎖の一員か。これは面白い。是非とも味わわせてもらおうか』

それでも、所詮は魚。鬼の敵ではなく、あっという間に平らげられてしまった。食い方が柱の女って感じなんですが……。

そして、鳴女さんが残る頭を丸呑みにしようとした、その時。

「復っ活ぅうううううっ！」

頸の切り口から人間の胴体が生えてきた。

◆髪魚

人魚の一種で水神の眷属。和式の人魚の仲間なので、頭だけが人間の人面魚形態である。こちらは基本的に淡水に棲んでいて、海の人魚にはある角が無い。たぶん、淡水魚と海水魚の違いみたいな物だろう。別に食べても不老不死にはならないし。

ちなみに、「神社姫」はアマビエのように「自分の姿を描くと無病息災になる」という特徴がある。とりあえず「姫」という名は付くが、可愛くはない。

零余子チャンカワイイヤッター！

家族が増えるよ、やったね鳴女さん！

私の名は零余子（むかご）。元は下弦の肆だった鬼だ。

しかし、お気に入りだった下弦の伍である累が討伐され、その八つ当たりとして下弦の鬼を解体する、という意味不明な結論に達した無惨様によって殺されてしまった。酷い話である。ちょっと鬼狩りの柱から全力で逃げようと思ってただけじゃん。心の狭い奴め。

だが、絶望の淵で死に至り、地獄に堕ちるのを待つばかりだった筈の私は、何故か転生した。遥か未来、前世の記憶を持った、人間の赤子として。

私は歓喜した。言葉にならない産声を上げてはしゃぎまくった。

不老不死の鬼では無くなったものの、日の下を歩け、美味しい物を食べられる。家庭は温かで、周囲も優しい人ばかり。何よりあの腐れ外道の陰に怯える必要がな

い。

まるで、今までの不幸な人生を取り戻すかのような、幸せな今世だった。

その後、私は何不自由なくスクスクと育ち、幸福な毎日を過ごして来た。

しかし、同時に不安もあった。あまりにも幸せ過ぎて、その内とんでもない不幸が来るんじゃないか、と。

そして、その懸念は現実となる。

私が十四歳の誕生日を迎えたその日に、大型トラックに撥ね飛ばされた。

否、そんな生易しい物じゃない。車体の下に引きずり込まれ、アスファルトとタイヤに削られて、見るも無残な生ごみと化した。

だが、私は死ななかった。挽肉になったその場で、逆再生のように元通りとなったのだ。

むろん、交差点のど真ん中でそんな事をやらかしたので、多数の人間にスクショされ、あっという間に拡散されてしまった。

私は混乱し、絶望した。人間に生まれ変わった筈なのに、今度こそ幸せな人生を歩めると思ったのに、どうして。

その後は最悪の一言だった。

あれだけ優しかった両親や周りの人々は掌を返すように化け物と蔑み、追い立てた。

しかも、無修正で動画を上げられたせいで、何処へ行っても顔バレしてしまい、一所に収まる事さえ出来なかった。

もう、この世に私の居場所は無いのである。これなら地獄に堕ちた方がマシだ。

だから、私は偶々通り掛かった公園の池に身投げした。盗み聞きした話によると、この池には人を丸呑みにする程の化け物がいると言う。そんな怪物がいるなら、楽に殺してくれるだろう。

私は涙と渇いた笑みを浮かべながら、池に飛び込んだ。

案の定、すぐに化け物に見付かり、一口で食べられ、私の二度目の人生は終わりを迎えた――――筈だった。

だが、私はまたしても死ねなかった。消化され、吸収されたにも関わらず、私の意思は滅ぶ事なく、逆に怪物の脳髄を乗っ取り、一体化した。顔も懐かしの下弦の鬼時代に戻り、池の底に潜みながら獲物が来るのを待つ日々が始まった。

嗚呼、何て事だ。せっかく人間として生まれ変わったのに、その結末がこれか。現世だと思っていたこの世界は、実は地獄だったのかもしれない。誰か助けて。

しかし、仄暗い水の底で己の不幸を嘆きながら過ごして来た私に、更なる不幸が襲い掛かる。

今日も今日とてチャラい男が晩御飯かと思い、水底から奇襲を仕掛けたら、ある筈の無い無限城に引き込まれ、いる訳が無い鳴女と出遭ってしまったのである。

だが、身体を切り刻まれ、化け物から分離されたおかげで人の姿を取り戻す事は出来た。

ついでに、知る前に死んだのに何で鳴女の事を知っていたのかも思い出した。殺される間際に、無惨様の細胞から記憶の一部が流れ込んで来たのだ。意図的か偶然かは不明だが、正直いい迷惑である。

しかし、復活したのは良いけど、どうしよう。最早真面な社会生活は望めないし、何より目の前のこいつが見逃してくれるとは思えない。チャラ男を部下にしてまで待ち構えていたのだから。

『久し振りだな、下弦の肆。……名前は零余子、だったか？　人間として生まれ

変わっているとは思わなかったが、一先ずの生還おめでとう。一体何がどうしてそうなったのか、詳しく話してもらおうか？』

とか考えて一人絶望していたら、鳴女にアイアンクローで捕まってしまった。

ぎゃおおおん、痛い痛い痛い痛い、止めて止めてぇえええええええ！

「鳴女さん、とりあえず引き上げません？　あんまり道草食ってると夜が明けちゃいますよ？」

『それもそうだな。今日はもう帰るとしよう。貴様にも来てもらうぞ、零余子』

そんな感じで、私は鳴女の自宅（？）にお持ち帰りされた。

つーか、この人こんなに高圧的だったけ？

まるで無惨様みたいなんですけどぉ～っ！

『おい、今失礼な事を考えなかったか？』

「い、いいえ！　考えてません、考えてません！　滅相もございませんんんんっ！」

『そうか。ならば良い』

……ここで「私の言葉を否定するのか」とか言って殺さないだけ、まだマシ、な

のだろうか？

いや、違う。この人、たぶん無惨様とは別ベクトルでヤバい奴だ！

だって、養豚所の豚を見るような目で見下して来てるもん。人間とか鬼とか関係なく、自分以外はどうでも良いって顔だぁ！

うわぁあああああっ、助けて、そこのチャラい人ぉ～！

「フッ……！」

サムズアップしてんじゃねぇ！

というか、何を勝手に人の裸を見てるんだ、この野郎！

嗚呼、やっぱり私は世界で一番不幸な美少女だぁ～ん！

◆零余子

下弦の肆を務めていた女鬼。下弦の伍「累」が討伐されて不機嫌極まる無惨に呼び出され、どんな血鬼術を使うのかすら分からない内に物語から退場した。その際のやり取りと絶望顔は必見。少なからず何処ぞの十一人衆が一人を思い出した人も

いる筈。あっちと違って食われて死んだけど。

常日頃から「その辺の人間や鬼狩りの一般隊士は殺すし食べるけど、柱とは戦わずに全力で逃げたい」という、謂わば「楽な仕事でお茶を濁して、美味しい所だけは頂く」事ばかり考えていた模様。思考回路がサイコロステーキ先輩と一緒である。

むろん、上昇意識の無い者に厳しい無惨が許す筈もなく、見苦しく言い訳しようとする彼女を「私に意見するのか」と一蹴して、血の絨毯にした。南無三宝。零余子は自分が誰の部下なのかもっとよく考えるべきだっただろう。

余談だが、このパワハラ会議に呼び出された者の殆どが「口先と小手先だけは器用な役立たず」ばっかりだったので、無惨の気持ちも分からんでもない。少しは響凱を見習え。

鳴女さん、抱き枕を得る

※若干グロい描写がありマス。ご注意くだサイ。

こんばんは、諸君。音川 鳴女だ。

チャラトミの謎知識と検索能力により、無事に髪魚なる妖怪を食す事が出来た。結構美味かったぞ、あれ。やっぱり人間を食ってる魚は違うな。

……正直、食えるかどうかは五分五分だったし、何よりチャラトミの情報は正しいのか怪しかったのだが、その両方が上手く行った。キチンと力も上がっているし、本当にビックリである。ただのチャラ男だと思っていたけど、何者なんだろう、あいつは？

というか、あんな馬鹿デカい怪魚が近隣の公園に潜んでいた事を、誰も何も思わないのだろうか。都会の人間は本当に無関心だなぁ。誤魔化すのが楽だから別に良いけど。

それよりも、今は零余子だ。まさか私以外の鬼が、人間として転生しているとは思わなかった。

さらに、取って食っても死なず、常に再生し続ける不死身の存在。どういう理屈でそうなったのかは知らないが、これ程便利な物は無いだろう。

「あぁあああああっ！　痛い痛い、止めてぇえええええっ！」

『煩い奴だな。どうせ生えて来るんだろう？　それに、何処までやったらアウトなのか、そもそもどういう体質なのか、知っておいた方がお前の為でもある』

「だからって食べないでくださーい！」

『嫌だね、食べちゃうよ～』

「フレンズになれない～！」

とりあえず、無限城に閉じ込めて、解体ショーに勤しんでみる。

こいつ、本当に死なないな。切っても潰しても、何なら焼いてみても、壊れた傍から再生していく。下手すると再生力だけなら無惨様を超えてるんじゃなかろうか。こんな有様でも肉体的には人間なので、藤の花も通じないし。

だが、身体は人間なので、鬼のような力は無い。チャラトミをパンチ一発でぶっ

飛ばす程度の腕力はあるようだが、それでも私には遠く及ばない。単に死なないだけの一般人である。

一応、その凄まじい再生力を活かして、相手を細胞的に乗っ取る事も可能なようだが、それは弱い相手だけであり、私には全く通用しなかった。本体とも言える脳髄を吸収しなければ問題ないだけなのかもしれないが、どちらにしろ脅威にはなり得ないだろう。所詮は元下弦の肆か。

しかし、その絶妙な弱さのおかげで、私には多数のメリットがある。

まず、いざという時の非常食が確保出来た事。

『お前、今日から私の抱き枕な』

「えっ、何で!?」

『あと、私の目が届く範囲で四肢を再生させるの禁止な。布団が狭くなるし』

「理不尽んんんっ！」

そして、安眠用の抱き枕が手に入った事だ。私、昔から何かを抱いてないと眠れないのよねー。

その点、こいつの身体は良い。肌はモチモチすべすべで、人間としての温かみが

ある。何か良い匂いもするし、これ程に抱いていて気持ち良くなれる枕もそうそう無いだろう。

という事で、今日からお前は達磨女（全裸）だ。再生力は致命傷でない限り調整が利くようなので、必要時以外はずっとこのままでいてもらおう。

嗚呼、何て充実した生活なんだろうか。自分だけの部屋があり、最高の抱き枕が手に入り、力を上げる方法も分かった。ここまで順調だと逆に心配になって来るが、今は考えないでおく。

そんな事よりも、音楽活動についてである。生活基盤がある程度出来上がったのだから、そろそろ奏者として名を売り始めたい所。

その為にも、まずは勉強だな。ネットの傾向から言って、ただ弾き語りするだけでは目立たないだろうし、自分なりの演出を考える必要がある。流行りを追い掛けてるだけじゃ、二番煎じだからな。

そうと決まれば、動画を見よう。アニメや実写、ＭＡＤなど、ジャンルを問わず、片っ端から視聴する。

「……」

零余子を抱き枕にしながら、ね。

◆◆◆◆◆◆◆

やぁ、皆。チャラトミさんだよー。

今日はとてもお目出たい日だ。家族が増えたよ、やったね鳴女さん！

……と、冗談はこれくらいにして。

鳴女さんに命じられるまま、髪魚を一本釣りした訳だが、何とその死骸から女の子が再生したのである。名前は薬師寺（やくしじ）　零余子（むかご）というらしい。鳴女さんの知り合いみたいだから、どうせ偽名だろうけど。

だが、肉体的には人間であるらしく、単に再生力が異常なだけなんだとか。その時点で人間辞めてるとか言ってはいけない。確か何かの小説で似たような名前と能力を持ってる奴がいた気がするが、偶然だろうか。

――――で、その意思を持った癌細胞みたいな零余子ちゃんだが、今は鳴女さんの抱き枕になっている。四肢の無い、生まれたままの姿で。

どうしよう、凄く煽情的なんですけど。鳴女さんも寝る時は裸族になるらしく、異形の女性と身体が欠損した女子が裸で抱き合うとか、物凄く趣味を選ぶ構図と

なっている。

……鳴女さんには零余子ちゃんを「使っていいよ」と言われているが、視線で人を殺しそうな勢いで睨まれるので、止めておく。それに筆を下ろすなら、鳴女さんが良いしね。

とりあえず、ご馳走様です。正直、見てるだけで抜けます。うっ……ふぅ……。

「……！」

「死ね、この変態がぁ！」という目で見られたような気がするけど、そんなの知らんなぁ。

何か言いたいなら口に出しなよ。無理だろうけどね。ガタガタ震えるだけでも鳴女さん怒るし、喚き散らしたら死ぬのは零余子の方だ。殺しても死ねないから、終わりもない。

いやー、実に素晴らしいおかずですわ。これからもよろしくねぇ、零余子ちゃん♪

◆鬼（鬼滅の刃）

無惨を頂点とした血で血を繋ぐ、真社会性昆虫のような生態の怪物。現世で疫病を齎す「瘟鬼」や地獄で呵責を行う「鬼人」たちとは全くの別系統であり、〝血を媒介に増殖する〟〝殆ど不死身だが日光に弱い〟〝始祖が滅べば眷属が諸共滅ぶ〟など、西洋の吸血鬼を思わせる特徴が多々見られる。その生命力と感染力は凄まじく、妖怪としてのニッチをまるごと奪ってしまう程。唯一無二の獲物が「人間」。他の物は摂取出来ない。

その正体は、薬学により生まれた人間の突然変異にして新種。ある意味、病気と言ってもいいだろう。

ちなみに、鬼は瞬きも睡眠も必要ないが、今作の鳴女はきちんと昼間に目を瞑って寝ている。これは「休息」と言うより「進化」の為で、睡眠中に物凄い速さで自分を作り変えている。

鳴女さん、悪戯に行く

そう言えば零余子や朱紗丸って何歳で鬼になったんでしょウネ？

やぁ、諸君。皆大好き（？）鳴女さんだ。

この時代にやって来て早半月。何だかんだで楽しく人間社会を生きている。

とりあえず、ウーチュブでは「鳴女さん」名義で活動している。主に琵琶の演奏をしており、他の楽器を使ったり、ゲーム実況をしたりもしている。音楽関連が「鳴女さんの「奏」の呼吸」、実況系が「鳴女さんの「操」の呼吸」で別れているから、観たい方を見てくれると良い。

ちなみに、今はファンタジーな世界でモンスターを狩るゲームに嵌まっている。筐体共々チャラトミに買って貰った。余談だが、彼と零余子は狩り仲間である。

――――って、おいコラ、ブレス吐くなこの野郎。大人しく部位破壊させろ。

上手に焼かれたいのか。

『……フム、今日はここまでだな。それでは諸君、また会おう』

《ラジャラジャー》《今日も素敵です鳴女様》《流石は操の呼吸の使い手》《奏の呼吸の方も待ってます》《初見ですけど楽しめました》《これからも頑張ってください》

ウムウム、初見さんも常連の諸君も楽しんで頂けたようで何より。再生数はまだまだだが、固定ファンが出来たのは素直に嬉しいな。投げ銭（スパチャ）して貰えるように頑張ろう。

「今日も盛況だったみたいっスねー」

と、録画の休憩中なのか、チャラトミが声を掛けて来た。

こいつは既に単独でチャンネルを持って活動しており、しっかりスパチャも貰えている。一番人気は「チャラトミさんの妖怪講座」だそうだ。お前、本当にチャラい癖に頭は良いよな。

『ああ。収益化達成までもう少しだ』

「この短期間でそこまで登録者増やせるのは、素直に凄いと思うっスよ。やっぱり、あの曲……えっと……紅蓮……ラガン？」

『ガンメンじゃなくて華だ華』

まぁ、人気は天元突破したいけどねぇ。

「ああ、そうそう、それが受けたんスね。デビュー曲ですもんねー」

『琵琶版もギター版も大人気だったぞ。ここまで人気が出るとは思わなかったがな』

蛇足だが、この曲は昔に無惨様が口遊んでいた鼻歌をモチーフにした物である。色々な趣味を持つ人だったが、音楽の才能まであるのはビックリしたなぁ。

しかし、イントロしか知らなかった鼻歌を、きちんとした唄に出来たのは、他でもない零余子のおかげだ。どんなに頭をかち割っても死なない彼女が、〝何度でも立ち上がる人間の強さ〟を連想させてくれたのである。本人は凄い泣き叫んでいたけど。

そうか、泣く程嬉しかったかぁ。後で可愛がってやろう。

『しかし、ここまで人気が出るとなると、せっかくだから歌声を付けたいな』

「……一応言っときますけど、俺かなり音痴っスよ？」

『大丈夫だ、頼む相手は決まっている』

という事で、

『ちょっと歌ってみないか？』

「いきなり何を言い出すのよ」

湯船に浮かぶ零余子へ尋ねてみる。

彼女とはお風呂もご飯も布団も一緒だ。最初は抱き枕にするだけだったが、何度も作曲の糧になって貰っている内に愛着が湧いてきた。普通に可愛い顔してるしな。

達磨だからスペースも取らないし、何なら世話をする楽しみもある。実に素晴らしい抱き枕である。

『ほら、お前のおかげで完成した、あの曲を歌って欲しいんだよ』

「ああ、文字通り私の血と涙の結晶ね……」

『そうだ。お前をイメージして作ったから、是非ともお前の声を吹き込みたいんだよ』

「……」

しばし、零余子は「マジかこいつ」という表情を浮かべていたが、やがて「どうせ断れないんでしょ」と了承してくれた。

うんうん、頷いてくれて何より。もし断られたら、とっても上手に焼いてやる所だったぜ。

『はい、あーん』「……あーん」

そんな可愛いお前はめいっぱい愛でてあげる。お風呂上がりの零余子ご飯は美味しいだろう？

『……さて、お楽しみはこれくらいにしておこう』

「おっ、もしかして〝ご飯〟っスか？」

『そうだな。頼むぞ、チャラ男ｗｉｋｉ』

零余子の餌やりも終わったし、そろそろ私も食事にあり付くとしようか。

◆◆◆◆◆◆

『「座敷童子」だと？』

無表情で首を傾げる鳴女さん。下弦の月をバックにする姿は実にふつくしい。

さてさて、夜の街からこんばんは、チャラトミさんだよ。

今、俺たちは、とある呉服屋さんの前にいる。もちろん、鳴女さんの食事の為だ。

『座敷童子ってアレだろ？　居ると儲かって、出てくと破産する、有難迷惑な子

供妖怪』

「はい、それで合ってるっス」

『そんなのが、ここに居るのか？　都会のど真ん中だぞ？』

「ファンからの情報提供もあったし、間違いないっス」

ここ最近、この呉服屋の売り上げが異常なまでに伸びている。少し前までかなり傾いていたのに。

さらに、〝訪れた買い物客が子供のような人影を見た〟という噂も流れている。実際に来店したファンが確かめたから、まず間違いない。確実に居る。

と言うか、座敷童子は基本的に商家に憑く妖怪だから、都会か田舎かは関係ない。そこに家があれば、何処にでも湧いて出る可能性がある。

『ファンの情報なんて当てになるのか？』

「俺のチャンネルでは、〝ファンからの情報を基に妖怪の分布図を作ろう〟って企画をやってるんスよ。だから、黙っていても常に情報が入って来ます。再生数も増えて一石二鳥っスよ」

『お前、チャラい癖に凄いな』

それは褒めてるんですか、貶してるんですか。
と言うか、このシステムを立ち上げたのはカスパーだから、本当に凄いのはあいつなんだよなぁ。
むろん、俺のアレンジも加えられているけどね。将来エンジニアでもやってけそうな気がする。
『まぁ、お前の情報は基本的に外れが無いからな。さっそく頂きに行くとしよう』
「了解っス」
そして、俺たちはとっくに営業時間を過ぎているであろう呉服屋にお邪魔した。
無限城の座標転移でね。

◆◆◆◆◆◆◆

こんばんは、零余子です。
生前は下弦の鬼、今世では不死身の人間、今現在は鳴女の抱き枕やってます。誰か助けてぇ。
ちなみに、鳴女と拠点の家主であるチャラ男は二人でお出掛けしている。手頃な妖怪をご飯にする為に。前菜代わりに私のお肉を少し食われたのは内緒。再生する

から良いけどさ。

……で、今の私はお留守番。部屋ではなく、無限城の中で。そこでは手足を生やして良いので、四肢を再生しつつ外の様子を見ている。例の使い魔のおかげで、何時でもライブ配信状態である。

フム、今回の獲物は座敷童子か。いきなり奥座敷に転移して接敵とか、本当にズルい血鬼術だなぁ。向こうもビックリ仰天してるよ。

――――――って言うか、あの座敷童子、朱紗丸（すさまる）ちゃんに似てない？

確か、十二鬼月に成る事を夢見ていた、鞠使いの女鬼だ。あんまり会話をした事は無いし、割とあっさり死んじゃったから、どんな性格だったかまでは知らないけど。

ほら、あれよ。名前と顔は知ってるけど、接点の無い同僚、みたいな感じ。

まぁ、あれが本当に彼女の生まれ変わりなのかは知らないけど、私ばりに運が悪い。腕を増やして鞠をぶん投げるという生前そのままの戦法を使ってるけど、たぶん勝ち目は無いでしょうねぇ。

『おお、カ〇リキーだ。どこかにモンスターボールは無い物か……ｵｯｯ』

「俺の股間見ながら言うの止めてもらえます？」
チャラトミの金の玉だからねってか。せめて真面目に戦ってやれよ。
つーか、鳴女パワーアップしてない？
無限城に転送して無力化するならまだしも、音速で飛んで来る鞠をキャッチして握り潰すとか、そんなアグレッシブな鬼だったっけ？
私の記憶では寡黙な仕事人って感じだったんだが……アレか、生まれ変わって弾けたのか。
あるいは無惨様という最大のストッパーが居なくなった影響か。
何れにしろロクでも無い。誰かあいつを止めろ。
『くっ……だが、ここは私の領域！　家の中で座敷童子に敵うと思うでない！』
『ほほぅ、ならば我が城にご案内しよう。そこでもまだ同じ事が言えるかな？』
そうこうしている内に、朱紗丸ちゃんが転送されてきた。裸の私と目が合う。何とも言えない空気が流れた。
「……えっと、久し振り？」
『いや、何の話じゃ……？』

とりあえず、前世の記憶はない模様。記憶以外は不死性ぐらいしか引き継いでいない私とは対照的である。

さーて、この子はどうなる事やら……。

◆座敷童子

東北地方を中心に伝承される子供の妖怪。商家の奥座敷などを好んで住み、彼らが家にいる間は栄えるが、出て行くと途端に没落するという。

正体は所説あるが、口減らしで死んだ子供が守護神化したというのが一般的。

その為、居るだけで何もしない奴や、そもそも子供の姿ですらない者、幸福どころか呪いを振り撒く「たたりもっけ」という亜種までいる。河童や天狗と同じく、意外と多種多様な連中なのだ。

鳴女さん、ユニットを組む

ハッハッハッ、おはよう諸君。ゆるふわ奏者・鳴女さんだ。

先日はチャラトミｗｉｋｉの情報により、カイ〇キーみたいな座敷童子をゲットした。本当はそのまま無限城でディナーを楽しむ予定だったのだが、零余子が気に入ったようなので、殺さず飼う事にした。

無限城は全て私の思うがままなので逃げられる心配はないし、〝居るだけで幸福になる〟という特性の恩恵だけを得られる。まさに良い事尽くめだ。そのおかげなのか、遂にスパチャも解禁されましたよ。わーいわーい。

――――子供サイズとは言え四人は多いし、逃がす訳にもいかないので実質的に無限城で軟禁状態だが、本人は奥座敷なら何処でも良いらしいので、問題は無いだろう。

ただ、結構な寂しがりみたいなので、誰か追加の人員が欲しいかなぁ。

ちなみに、ディナーそのものは、その場に居合わせた「たたりもっけ」という妖怪を頂いた。

チャラトミ曰く「座敷童子の派生妖怪だが、幸福は齎さず祟りしか為さない呪い子」らしい。何でも死んだ乳飲み子が梟に取り憑いて化けて出るのだとか。

何でそんな輩があの店に居たのかは知らないが、私が乗り込んだ時は丁度縄張り争いをしている時だったらしく、結果的に座敷童子を助けた形になる。

そう言えば、名前は何て言うんだろう？

『丸子じゃ！　朱紗丸子という！　宜しく頼むぞえ！』

……国民的アニメの主人公とか言ってはいけない。こんな踊るちんちくりんがお気に入りなのか、零余子よ。

まぁいいさ。これで腹も登録数も満たされたし、いよいよ軌道に乗って来たな。また新たな企画を考えねば。

『という事でユニットを組もうと思う』

「どういう事だってばよ」『ぬぅん？』

あれから三日後。無限城にて丸子と手毬唄で遊んでいた零余子が、素っ頓狂な顔でこちらを見て来た。丸子も同様。そこまで驚く事か？

『ほら、この前あの曲に歌を入れたろう？　今度はそれに丸子も参加させてみよ

うかと思ってな』

「えっ、この子も歌うの？」

『そのバージョンも有りだが、それよりも丸子には手数を活かして鼓とドラムをやって貰いたい』

「出来る出来ない以前に、そんな物を放映して大丈夫なの？」

『問題ない。無限城であれば、カメラ映りを操作するなど造作もない』

確かにそのまま放映したら単なる放送事故だが、血鬼術でちょちょいと視覚効果を弄れば、猛スピードで楽器を叩いているように見せるくらい簡単な事である。最悪、バ美肉化してもいいだろう。

ともかく、音の幅を広げたいのだ。流石に琵琶とギターだけってのも芸が無いしな。それに折角居るのだから、丸子にも楽しんでもらいたいじゃないか。

『……どうだ、出来るか？』

『出来ない事はない。これでも長く生きておるからのぅ。それに練習する時間は幾らでもあるんじゃろ？』

一応、楽器が出来るのか確認してみたら、叩けるらしい。手毬で鍛えた賜物か。

よし、そうと決まれば、
『ユニット名を決めよう。カルテットを目指しているから、あくまで暫定だがな』
「……例えば？」
『「無惨サマーズ」とか？』
「どうしてそこまで恐ろしい名前を思い付くのよ！」
そうかなぁ、悪くないと思うんだけど。
『わしは何でもいいぞえ』
『なら決まりで』
「マジで!?　丸子ちゃん、もうちょっと考えよう!?　お願いだから！」
だが断る。これは決定事項だ。私がそうしたいと思ったから、今日から我々は「無惨サマーズ」なんだよ。
『それが嫌なら、「童磨（どうま）ズデビル」にするぞ』
「そんなゾー○のパチモンのバッタもんみたいな名前は死んでも御免よ！」
『いや、お前さん死ねないだろうに』
「そういう問題じゃない！　魂が嫌だって叫んでんのよ！」

『童磨、嫌われ過ぎだろ……』

まぁ、私も嫌いだけど。馴れ馴れしいし、ウザい。

兎にも角にも名前は決まった。後は行動するのみ。

『さぁ、さっそくだが、音合わせをするぞ！』『おー！』「いやぁあああああっ！」

私たちの曲作りは、これからだ！

「ＧＯＯＤ……」

……チャラ男の意味不明な台詞が聞こえた気もするが、幻聴だろう。無限城に外の声が貫通する訳ないしね。

◆◆◆◆◆◆

私の名は朱紗丸子。今を時めく座敷童子じゃ。

生前の記憶は全く無いが、わしの知り合いっぽい零余子の「……」という何とも言えない表情から察するに、ロクでもない死に方をしたのじゃろう。だから気にしない事にする。良い事無いしの。

さて、そんなわしじゃが、今は鳴女という鬼の城で世話になっておる。

以前は豆腐屋の老舗で暮らしとったのだが、そこが断絶してしまったせいで引っ

越しを余儀なくされ、次は有名だが落ち目の呉服屋に居座ったのじゃけれど、そこに登場したのが鳴女じゃった。

鳴女は異空間を創り操る能力を持った鬼で、ある日の夜半に突然奥座敷に現れた。私も座敷童子だから領域では結構強いんじゃが、童子と鬼ではあまりにも地力が違い過ぎたわ。鉄より硬い我が鞠を握り潰すのは無しじゃろ。

結果、わしは大した抵抗も出来ずに捕らえられ、奴の配下となった。手下と言うより、飼い犬のような感覚のようじゃがな。

しかし、私としては静かな奥座敷なら何でも良いし、食べ物や遊び相手（零余子）も用意して貰ったから、文句は無いんよ。没落必須の呉服屋には悪いけども。

さらに、鳴女はうーちゅーばーなる職業に就いており、一緒に楽しまんかと誘うてくれた。鼓やどらむを叩くのは気分が良くなるし、げぇむはやってて面白い。

その上、私の手毬唄も動画にしてくれた。結構人気があるみたいで、またやってくれと言われたぞえ。

前世のわしがどんな人間だったかは知らんが、少なくとも今は楽しいから、ずっとこんな日々が続いて欲しいもんじゃな。

それでは、私は寝る。無限城はどんな寝相でも大丈夫だから良いのう。
……まぁ、独りで寝るのは、少しだけ寂しいけどね。

◆朱紗丸

元十二鬼月（笑）の女鬼。実際は無惨にそう煽てられただけで、そこそこ強いだけの一般鬼である。武器は凄まじい強度を誇る鞠（無限湧き）。肉体操作で増やした腕や脚を使い、剛速球で何もかもを破壊する。その威力は建物はおろか、並みの鬼なら肉体を粉々にしてしまう程。

ベクトル操作の使い手である矢琶羽と組み、変幻自在の死球で炭治郎たちを苦しめたが、珠世の血鬼術で「鬼舞辻」と言わされてしまった事により呪いが発動、身体から生えた「無惨の手」により握り潰され、朝日をトドメに死亡した。憧れの上司に煽てられ、戦わされ、最期はその上司に手を下されて自滅するという、中々に可哀想な鬼。事実、敵である筈の炭治郎にも同情されていた。

しかし、その魂は別世界へと流れ着き、「朱紗　丸子」という名前の座敷童子と

なった。今までの記憶は一切残っておらず、ほぼ別人だが、戦闘スタイルと能力は殆ど変化しておらず、大元の鞠を「生涯の宝物」として大切にしている。

零余子ちゃんの鳴女さん観察記

実況動画って下手なテレビ番組より面白い気がするんですヨネー。

とあるひ～♪

『よし、そこだ。行けムザン、「めらめらバーン」！』《ブッブ～イ！》

《おお、決まった！》《今日も鳴女様のムザンが大活躍だな！》《さすがムザン様！　アカザやドウマも凄いけど、やっぱりムザン様が一番だぜ！》

『当然だ。このモノクロカラーは伊達じゃない』

《そう言えば、色違いの個体（♀）なんだよなぁ、ムザン様》《一発で色違い引き当てるとか、鳴女様の豪運が凄まじい》《他の面子も全員色違いだしな》《むしろ、通常色に出会う方が珍しいくらいかも》《こうなるとどっちが原色なのか分からなくなるよねー》《うんうん》

『フッフッフッ、我が家には座敷童子がいるんでね。ＬＵＣＫにブーストが掛かっ

てるのさ』

《座敷童子？》《ああ、よくコラボしてる朱紗丸（すさまる）氏の事か》《確かに座敷童子っぽいけど、マジなん？》《いやいや、まっさかー》《つーか、同居してんの？》《そーいやぁ、零余子氏やチャラトミさんとも結構コラボしてるけど、近所だったりする？》《ならもっとコラボすればいいじゃないか！》《それな》

私こと零余子は、呑気にゲームを楽しむ鳴女の後ろを姿を見て、心の中で溜息を吐いた（本当に吐くとミンチにされるので我慢我慢）。今日は相棒と「Ｌｅｔ’ｓ Ｇｏ！」しているようだ。

ちなみに、今は手足が生えてます。鳴女が一人で配信している時は自由時間なんです、信じて下さい。一週間の謹慎は止めて下さい、心が死んでしまいます。

『ほほぅ、こいつが次のジムリーダーか。名前は……えっ、カツラ？　禿げてるのに？　禿げのカツラって事？』

《それギエピーや》《ヅラじゃなくて、植物の「桂」だよ》《ジムリーダーは大抵植物由来の名前になってる》

『なるほど。じゃあ、カスミは「カスミソウ」で、タケシは……芥子？　つまり、

今日もポピーって事？』

《たぶんそうだけど、「竹」がメインって事にしておいて》《やめたげてよぉ！》

つーか、鳴女の奴マジで楽しそうにゲームするわね。鬼でなくとも結構いい年した大人の女が。

というか、ゲームに限らず何事に対しても、以前の彼女からは考えられないくらいに喜怒哀楽がはっきりしている。表情は相変わらず「無」そのものだが。淡々と喜んだり、無表情でブチ切れたりする様は、正直に言って前よりも怖い。

だが、同時に観ていて面白くもある。だって、本当に子供みたいなはしゃぎ方するんだもの。丸子ちゃんとどっちが子供か分からなくなる時が、稀によくある。ある意味幸せな人よねー。

たぶん、元々そういう性格なんだろうなぁ。そうじゃなきゃ、ここまで自然体になれないわ。

『さて、本日の配信はここまで。次回の「鳴女さんの携帯獣戦記」シリーズを楽しみにしておいてくれ』

《了解でーす》《ラジャラジャー》《ブ、ラジャー！》《それはしん○すけや》《バ

イバイき～ん♪》

と、今日の配信が終わったらしい。なら、次は私で弄ぶ気か？

『さて、本日の配信も終わった事だし……今からお宝鑑定団を始めたいと思います！』

なーんて思ってたら、まーた意味不明な事を言い出した。今度は何をやろうってのよ。

『おっ、何かするのかえ？』

『ああ。お前を呉服屋から連れ出した時、ついでに骨董品も持って来たんだが、これがまた多くてな。せっかくだから整理して売りに出そうかと思って』

おい、それ普通に窃盗だろうが。

「……」

『何だ零余子、何か言いたそうだな？』

「……いや、それって泥棒じゃない？」

『盗んだんじゃない。拝借しただけさ、永遠にな』

「やっぱり泥棒じゃん！　ただの空き巣だからね、それ！」

『失礼な。あの呉服屋は倒産確定だし、どうせ売られるのなら、将来性のある私の軍資金になって貰った方が、骨董品も喜ぶってものだろう。呉服屋の財産は私の物、私の金は私の物だ』

清々しいまでのジャイアニズムだな。ここまで開き直れるのは、逆に凄いと思う。全く痺れず憧れないけど。

『そもそも、あの呉服屋の店主、趣味とは言え、やたらめったら骨董品を買い込み過ぎなんだよ。パッと見でも贋作が混じってたし、遅かれ早かれ首が回らなくなったんじゃあないかな』

実はあの主人、商才なかったりする？

「それで、どんなラインナップなんすか？」

すると、ここでチャラ男も参戦。自分の配信が終わったので、暇になったらしい。こいつもこいつで見た目詐欺よねー。無駄に頭良いし、機転も利く。本当に何でこんなチャラい見た目なんだろう。絶対損してるって。顔だけは良いんだからさ、もっと落ち着きを持とうよ。

『んーと、壺に皿……掛け軸……刀まであるな。見境なさ過ぎだろ』

そして、無限城に並べられる、骨董品の山、山、山。陶器や絵画ならまだ分かるが、明らかに刃のある真剣まで集めるなよ……。

「見た所、半数は贋作っスね。特に壺のパチモンぶりが凄い。これで「フム……良い……！」とか言ってるようだったら、マジで嗤っちゃいますねー」

『お前マジで凄いな』

鑑定まで出来るのかよ、お前。今度からチャラ男先生って呼ぶわ。

「でも、逆に刀は殆どが本気の名刀ですね。そこの一本なんか、たぶん妖刀の類っスよ」

「これの事？」

彼の凄さに感心していた私は、うっかりチャラ男先生の指差した刀を手に取ってしまった。

これが、いけなかった。

「はぅ……!?」

何か頭の中で「ギャーン」って音がしたかと思うと、私の意識はそこでプッツリと途絶えた。

◆「Ｌｅｔ'ｓ Ｇｏ！ ピカチュウ」＆「Ｌｅｔ'ｓ Ｇｏ！ イーブイ」

「ポケットモンスター ピカチュウ版」のリメイク版。所謂「第七世代」のソフトであり、「ポケモンGO」と連動したシステムを採用している為、一部を除いて野生のポケモンとのバトルが無く、ボールで捕まえるだけである。他にも「あく」「はがね」「フェアリー」が追加されていたり、幻の№１５２＆１５３のポケモンがいたりと、大筋こそ変わらないものの、結構違う部分が多い。何よりピカチュウに加えてイーブイが相棒枠に抜擢されたのが大きいだろう（アニメの影響？）。

ちなみに、鳴女さんの手持ちは以下の通り（全員色違い）。

・ムザン→イーブイ（♀）
・コクシボウ→リザードン（♂）
・ドウマ→ルージュラ（♂↑世界が認めたバグ）
・アカザ→サンドパン（♂）
・ギョッコ→アズマオウ（♂）

・ギュウタロウ→カブトプス（♂）

鳴女さん、真剣勝負をする

無惨様の言う通りじゃないケド、縁壱さんって規格外の化け物ですヨネー。本人はシャイな良い人なノニ……。

「あっ、ちょ……零余子ちゃん、それ手に取ったら……あーあ、やっちゃったよー」

チャラトミの制止も空しく、妖刀だという日本刀を手に取ってしまった零余子の目が裏返り、別人のような雰囲気を纏い始める。

……やぁやぁ、諸君。今日の配信を終えたばかりの、鳴女さんだ。

用事も済んだし、前々から片付けたかった案件を皆でやろうとしたら、零余子が面倒事を起こしやがった。どう見ても妖刀に意識を乗っ取られてます、本当にありがとうございました。馬鹿なんじゃないかな。阿保可愛いのは魅力だけど、流石に今回のは無いわ。唐突にトラブルをメイクするんじゃないよ。

『うっしゃぁあああああっ！』

零余子（OS：妖刀）がガッツポーズを取った。割と大きな雪見大福が二つ、ブルンと揺れる。久々の肉体が喜ばしいようである。子供（ガキ）か。

『えーっと、ハイテンションな所を悪いが、えーっと……「ジャッカル松本」？』

《いや、誰だよそれ!?　ワタシは「村正」！　由緒正しき妖刀だ！》

『村正で由緒正しきとか言われてもな……』

村正は江戸初期で大流行した刀剣。大体皆持ってたし、斬殺事件が起きれば凶器は必然的に村正、というくらいには普及していた。

だから、実際には妖刀でも何でもない。単にこの村正が人を斬り過ぎて自力で妖刀になっただけだろう。それはそれで凄いけどね。

《黙れ黙れ黙れぇい！　せっかく便利な身体を手に入れたんだ、貴様で試し斬りしてくれるわぁっ！》

と、零余子（村正）が構えを取った。零余子は剣技に関しては素人だった筈だが、中々どうして、様になっている。

おそらく、刀自身の記憶を基に、身体をコントロールしているのだろう。どれ程辻斬りしているのかは知らないが、千人斬ってからが一人前と言うし、案外と万人

斬りぐらいは達成しているかも。

まぁいい、斬りに来るなら殺すまでだ。どうせ器は零余子である。どんなに殺しても死なないから、躊躇なくバラバラに出来る。

《てぃやおおおぅっ！》

零余子（村正）が流転するように円を描きながら斬り掛かって来る。

……何か、どっかで見た事ある技だな。

『フン！』

しかし、見切れぬ程ではないし、このまま脳天から一刀両断してやろう、チョップでな！

《「幻日虹（げんにちこう）」！》

『何っ、残像だと!?』

だが、私がかち割ったのは質量を持った残像だったようで、見事にスカってしまった。

《「飛輪陽炎（ひりんかげろう）」！》

さらに、陽炎の如く前後感覚が分かり難い斬撃を放って来る。凄いなこいつ。妖

刀とは言え、ただの日本刀で私の手を斬り飛ばしたぞ。

しかし、幾ら斬った所で鬼である私には無意味――――――、

『……っ!?』

再生、出来ない!?

いや、何時もよりは遅いが、出来てはいる。切り口に掛かった力で再生が阻害されているのだ。おいおい、日輪刀でもないのに、鬼の身体を切り刻んだ上に再生力まで抑えるなんて、そんなの有りか。

……否、もしかして、これは!?

《ハッハッハッハッ！　気付いたようだなぁ！　ワタシは純粋な隕鉄を使用した流星刀でもあるのだ！　そして、この剣技が貴様ら鬼に特効なのは知れてるんだよぉ！》

『マジかぁ……』

流星刀って、日輪刀よりヤバいじゃん。

しかも、無惨様のトラウマ技である「日の呼吸」を使い熟しているだと!?

零余子本人が知っている訳が無いので、前世の死に際に流れ込んだという無惨様

の記憶を再現しているのか。そんな見稽古みたいな真似出来るのかよ。

『……裸で大立ち回りとか、恥ずかしくないのか！』

《いや、それはお前のせいだろうが！》

失礼な、零余子だって喜んでいたぞ（たぶん）！

『ドラァッ！』

《馬鹿め！　本気で当たると思っているのかぁ！》

『フゥンッ！』

《ぬっ!?》

私は猛烈な勢いで斬り掛かって来る零余子（村正）の足を払い、宙に浮かべた。空中なら逃げられまい。

《「斜陽転身（しゃようてんしん）」！》

『危なっ!?』

だが、日の呼吸は怪物・縁壱の編み出した退魔の剣技。人としての常識を軽く超えて来た。そう言えば、この技で猗窩座（あかざ）も殺られたんだっけか（正確には負けを悟ったらしいが）。頭突きで動きを止めて無ければ、今頃は頚チョンパだな。

それにしても、一刀毎に技の練度が上がっているような気がする。学習し、強くなっているのか。よく見ると、身体に痣が浮かんでるし。零余子は寿命とか無さそうだから、実質デメリット無しの完全強化状態じゃん。

《その通り！　ワタシは一度戦った相手には、絶対に、絶対に、絶ぇ～～～～～～～ッ対に、負けんのだァ！》

『ぬぉおおおお!?』

そして、再び繰り出される、日の呼吸による絶死の剣技。拾弐の型を連結させた無限ループ、「拾参ノ型」が襲い掛かって来た。流石にあの化け物の完全再現は無理らしく一巡りで終わったが、それだけで充分。

私は身体をバラバラに焼き切られ、頚を撥ね飛ばされた。

「鳴女さん!?」『鳴女ぇ!?』

驚き叫ぶチャラトミと丸子。

《取ったぞ！》

勝利を確信する零余子（村正）。

『……いいや、取られたんだ』

だが、それは甘い。甘い甘い。何故なら今からとっておきの新技というのを見せてやるのだから。

《ま、まさか、頚の弱点を克服しているだとォ!?》

空中でビシャリと元通りになった私に、零余子（村正）が目を見開いた。お前の記憶では信じ難い光景だわな。

『当然だ。私が何時までも鬼の常識に囚われていると思うな』

私がどれだけ零余子を食って来たと思う。気合いを入れれば、お茶の子さいさいよ。

それに、これくらいで驚いて貰っては困る。

――――べべん！

《にゃにぃ～!?》

琵琶の音が響き、零余子（村正）の手首を切り離した。刃の切れ味を持った襖に断ち切られて。衝撃で握っていた右手も吹っ飛んだし、刀だけになっては最早どうしようもあるまい。

《び、琵琶を持ってもいないのに、どうして……!?》

『何時から手に持っていないと弾けないと言った？』

私の玄上ちゃん（琵琶の名前）には、私の血肉が染み込んでいる。普段はきちんと弾いているが、別に触れて無くとも勝手に動いてくれるのよ。つまりは気分次第である。

《そ、それに、この切れ味は!?》

『私の好きな漫画に、物体を刃物に変える能力を持った妖怪が出て来てな。それを参考にさせて貰ったよ』

前々から、私の血鬼術は殺傷力が低い事を自覚していた。ならば、持たせてやればいい。無限城は私の思うがままなのだから。その発想が無かったというだけの事よ。

『さてと……』

《ヒィッ！　ま、待て、話せば分かる！》

操る身体を失い、いよいよ詰んでしまった村正が、典型的な命乞いを抜かし始める。

しかし、この鳴女、容赦しない。そもそも、命を取りに来たのだから、殺されて

も文句は言えんだろうに。
『よーし、折るかー』
《待て待て待ってぇ！　ワタシはこれでも長生きしているし、貴女の欲しい物の怪の情報もタンマリ渡せますよぉ！》
『フム、確かにそれは魅力的だな』
《そ、それじゃあ――――――》
『だが断る』
《何故ゆえにぃ!?》
『助かると思った所を叩き落してこそ、絶望は深まるだろう？』
と言うか、妖怪の知識ならチャラトミｗｉｋｉで事足りるしな。ロートルの自慢話なんぞ、何の役にも立たん。
『それに、私は私を傷付ける者を絶対に、絶対に、絶ぇ～～～～～～ッ対に、許さない。お前は億死に値する』
《万の万倍許されないの!?》
『当たり前だ』

《当たり前なんだ!?》

それじゃあ、そろそろ行きますかー。

《よ、弱い者苛め、良くない》

『私の身体をバラバラにしておいて何を言う。命乞いなど……無駄ァッ！』

《ギアッチョォオオオオオオオオオオオオオオオァッ！》

こうして、自称妖刀である村正は、私の無駄無駄ラッシュを左右の側面から受け、塵と消えた。

◆◆◆◆◆◆

「……はにゃん!?」

わ、私は一体何を……!?

えっと、ここは無限城、私は零余子。間違いない。

『……』

だが、鳴女が滅茶苦茶怒っているのは何でだ？

『零余子、バイバーイ♪』

「えっ、どういう事!?」

「……一応、やり過ぎないようには言っといたスから」

『私は何をされるの!?』

さらに、丸子ちゃんには何故か六本腕でバイバイされ、チャラ男先生には可哀想な物を見る目で肩を叩かれた。

『さぁ、覚悟の用意は出来ているか？』

そして、指先から刀を爪のように生やし、キリキリと研ぎ合わせながら歩み寄る鳴女。一体、何時の間にそんな技を――――というか、ま、待って……ちょっと待って！

「な、何だか知らないけど、話せば分かる！　弱い者苛め、良くない！」

『痣者が何を言うか。話し合いなど無意味だ。私は最初から、お前の失敗（ヘマ）を許す気は、無いのさ。……オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ

オラァッ！』

「ペッシィイイイイイイイイイイッ！」

こうして、私は千の肉になった。

ちなみに、今日の晩御飯は自家製サイコロステーキである。それ私ィイイイッ！

◆日の呼吸

無惨決戦兵器として時代が生み出した人外魔境「継国　縁壱」の編み出した、鬼滅の剣技。「透き通る世界」への入り口であり、鬼殺隊の使う「呼吸」の始祖。太陽の力を宿した呼吸によって繰り出される十二の技を、君が死ぬまで無限ループさせるという恐ろしい必殺技だが、負荷が凄過ぎて常人どころか鬼にも不可能な、実質的に縁壱の専用技である。後世には「ヒノカミ神楽」という形で伝わっていた。

ただし、こちらは十二の技を個別に覚える初心者向けの伝え方で、最高でも一巡す

るのみであり、延々と繰り返したりはしない。それでもやり過ぎると死ぬ。

今作では無惨が存在しない為に影も形も無いが、大正末期に同じような技を使う剣士が鬼退治をした逸話が残っている。

鳴女さん、ママ活する

皆さんは友情と愛情、どっちが欲しいでスカ？　私はお金が欲しいデス。

フハハハハハ、おはよう諸君！　今日も元気溌剌、鳴女さんだ！

前回の妖刀騒ぎから数日。丸子を仲間に据えたユニットで活動を始めたのだが、それが大いに受けたおかげで、日に万額を稼ぐ程の人気を得られた。大変喜ばしい事である。

座敷童子のブーストを加味したとしても、驚異的な数字と言えよう。機材も充実し、血鬼術や身体能力の成長も目覚ましい。拠点は相変わらず手狭だが、広過ぎても結局は扱いに困るので、今は考えないでおく。三つ子の魂は百まで続くように、貧乏性は早々治らんのよ。

ちなみに、ユニット名はチャラトミの提案で「鬼導隊（きどうたい）」になった。〝鬼が導く音楽隊〟みたいな意味が込められているらしい。ポエムやなぁ。

個人的には「無惨サマーズ」のままでも良いかと思ったのだが、あれ以降も零余子が全力で食い下がってきたので、仕方なく変えてやった。うーむ、解せぬ。

まぁ、それはそれとして、

『今日は「第一回：丸子ちゃんを考える会」を始めようと思う』

無限城のど真ん中で、私は会議を開いた。参加者は当事者である丸子と零余子、それからチャラトミ。八時じゃないが、全員集合だ。

「何よ、その小学校の学級会みたいな議題ヴァー」

……よし、零余子ハンバーグは放っておいて、会議を進めよう。

『知っての通り、丸子は無限城に一人で常駐している。それはとても寂しい事だ』

「誰のせいバァーッ！」

誰か零余子印のソーセージを冷蔵庫に仕舞っといて。

『そこで、そろそろ彼女の遊び相手を探しに行こうと思う』

『おお、わしのお願いを聞いてくれるのかえ!?』

『お前は色々と貢献しているからな。報酬を与えるのは当然だ。何処かの元貴族と一緒にされては困る』

「だったら私もォオオオン！」

とりあえず、零余子の叩きでも突き出しにしようか。

「えっと、零余子ちゃんじゃ駄目なんスか？」

『零余子は私の抱き枕だからな。手放せん』

「今はサンドバックみたいですけど……」

『兼用だ』

後ろで「酷い話だ」という台詞が聞こえたので、望み通りにしてやった。零余子サンドって完全に食べ物だよなぁ。

つーか、お前は少し反省しろ。大分やらかしたんだからな、前回。

「そうなると、人間じゃ駄目っスよね？」

『ああ。常駐して遊び相手になって貰う予定だからな』

人間は弱い。すぐに死ぬ。簡単に裏切る。世界の中心は自分じゃないと気が済まない。一人じゃ大した事は出来ない癖に。今の世の中、そんな奴らばっかりだ。寝言は寝て言え。

「じゃあ、妖怪を勧誘するとして――――どんなのが良いんスかね？」

『そこなんだよなぁ……』

初めは同じ童子系の妖怪なら良いかと思ったが、奴らは本能レベルで縄張り争いをしてしまう為、全く以て適していない。子供はすぐ喧嘩するからね、仕方ないね。

『それを何とかするのが、お前の役目だ』

「また凄い無茶振りして来ますねー」

だが、そこで投げ出さない辺り、流石はチャラトミである。チャラい癖に。

「……そもそも、丸子ちゃんは本当に遊び相手が欲しいんっスかね？」

『『はぁ？』』

ふと呟いたチャラトミに、思わず間抜けな声が出る。丸子も同様だ。

『何じゃお主、私が羞碌しているとでも思っているのか!?』

「いや、年は食ってるでしょ、座敷童子なんだから。だからこそ違和感があるんスよ」

『んん～!?』

すっかりメダパニ状態の丸子。無理もない。それくらい、チャラトミの発言は意味不明だった。働かせ過ぎて頭がおかしくなったか？

しかし、次にチャラトミの放った言葉に、私は衝撃を受ける事になる。

「だって、座敷童子は派生も含めて〝親に捨てられた子供〟がなる妖怪なんスよ？〝寂しさ〟と〝恨めしさ〟の違いはあれど、本当に欲しいのは〝親の愛〟だと思うんスよねー」

座敷童子は子供にしか見えないと言われている。それこそ遊び相手になってくれる、とも。

だが、彼らが恩恵を齎すのは家――――つまりは大人に対してだ。まるで、「もっと構って」「自分を見て」「頑張ったから褒めて」と言わんばかりに。

子供が、親に甘えるように。

そして、大人がそれを当たり前に感じ、見向きも感謝もしなくなった時、座敷童子は出て行くのである。〝また捨てるのか〟と……。

ウムム、これは目から鱗滝だわ――――って、何か嫌だなそれ。私は何を言ってるんだ？

ま、それくらい驚いたって事で一つ。信じられるか、これあのチャラ男なんだぜ？

『……！』

丸子が固まる。とっくの昔に忘れ去った、何かを思い出しているのかもしれない。

そう言えば、彼女が普通の遊びに使う鞠は〝生涯の宝物（たいせつなもの）〟なのだとか。

つーかさ、

『お前、本当にチャラ男なのか？』

「いや、別にチャラ男のつもりは無いんですけど……」

『嘘だッ！』

「何でぇ!?」

だったら、その見た目を何とかしろ。

しかし、親の愛かぁ……全然分からん。借金の片に売られそうになったから、撥で八つ裂きにした（非力だったから殺せなかったけど、再起不能（リタイア）にはしたった）記憶しかないんだけど。玄上ちゃんや演奏用の着物も、その時の戦利品だし。

だけどまぁ、子供はそういう物なのだろう。友情より愛情の方が欲しいのは、むしろ普通の事なのかも。微塵も理解出来んが。

『そうなると、〝親役〟が必要になるのか？』

何処の下弦の伍かな？

『……流石にロクデナシは嫌じゃぞ？』

『安心しろ、私も普通に嫌だわ』

それはあの旦那役だけで充分だ。

「だけど、そんな都合の良い妖怪いる訳――――――」

「いますよ。そういう都合の良い奴が、ね……」

疑問を呈す零余子に、チャラトミがしたり顔で答える。凄いぞチャラトミwiki。

「一先ず、これを見て下さい」

という事で、例の「チャラトミの妖怪講座」の「妖怪分布図（最新）」を皆で見てみる。そこには中々面白い情報が書かれていた。

「……どうスかね？」

『フム、良いだろう。今宵の獲物はこいつで決まりだな』

本当に便利な男だよ、お前は。

――――――さぁ、行こう。鵺（トラツグミ）の鳴く頃に。

◆この世界の漫画事情

大抵は存在しているが、物によっては「影も形もない」「漫画は無いがキャラクターのみが実在する」「どちらも存在する」の3パターンに分かれている。

「ゲゲゲの鬼太郎」は「どちらも存在する」パターンであり、基本的に6期のアニメをベースにしているが、1～5期の要素や漫画のみの要素などがミックスされた独自の歴史を辿っている（6期第1話が令和から開始されている、地獄童子がいる、妖怪四十七士の概念があるｅｔｃ）。

「鬼滅の刃」は「どちらも存在しない」扱いで、ワニ先生は別のタイトルで連載し大成している。その為、鳴女さんは完全な異物である。

しかし……。

犬山まなと猫娘

まなとユメコのどちらが良いかと言われレバ、私は祐子ちゃん（第４期の人間サイドの女子）が一番良いデス。飴とかあげタイ。

東京都調布市の、とある中学校。
朝のHR前のざわついた教室では、今日も様々な噂話が飛び交っている。こんな風に。
「ねぇねぇ、まなー、あの噂、知ってるー？」
一人の女生徒――――桃山（ももやま）雅（みやび）が、すぐ近くに座る別の女生徒に話し掛ける。
女生徒の名前は犬山（いぬやま）　真名（まな）。ウェーブの掛かった茶髪とクリクリとした瞳が子犬のように可愛らしい、今時の十三歳（サーティーン）。
だが、彼女には誰にも言えない……というより、言っても信じてもらえない秘密がある。
それは、この世ならざる者たちとの関り。ゲゲゲの森に住まう妖怪たちとの関係

だ。特に鬼太郎や、その仲間たちとは結構仲良くさせて貰っている。

少し前までは「妖怪なんてお伽話」程度にしか思っていなかったが、吸血木事件を引き起こした「のびあがり」との接触を機に、次々とお化け騒動に巻き込まれ、やがて「分からない事だらけだけど、だからこそ分かりたい」と考えるようになった。それに伴い妖怪たちの姿も認識出来るようになり、ますます関わる機会が増えている。本当に、色々あった。

だから、真名はこの手の話にも積極的に首を突っ込むようにしている。分からないモノを知り、正しい付き合い方を学ぶ為に。

「……どんな噂？」

「ほら、最近子供が誘拐される事件が続いてるじゃない？　テレビじゃ何も言ってないけど、攫われた親たちが「鳥を見た」って言ってるらしいよ」

「フーン……」

まさか鳥に攫われた訳でもあるまいに。

以前の自分ならそう考え、聞き流す所だが、今は違う。

（ちょっとねこ姉さんに相談してみようかな）

何だか知らないけど、第六感がそう言っている。だから、次の休み時間にでもＬＩＮＥしよう。真名はより詳しい話を聞きつつ、そう思った。

と、その時。

「皆、おはよう♪」

「あ、藤花さん！　おはよう！」「おはようございまーす！」「今日も奇麗ね～♪」

クラスのアイドル、茜雲　藤花が教室に入ってきた。途端に幾人もの生徒が挨拶を返し、にこやかに出迎える。誰にでも優しく、柔らかな雰囲気が人気の秘訣である。

「まったく、今日も大人気です事……」

まぁ、それを快く思わない人間も一定数いるのだが。

しかし、藤花は気にしない。真名も気にしない。世の中には「気に食わない」という手前勝手な理由で嫌う馬鹿がそれなりにいる事を分かっているからだ。そういう輩は無視するに限る。

そんな事より、今は妖怪である。雅曰く、被害はこの近辺に集中しているらしい。それはつまり、調布市に〝ナニカ〟がいるという事だ。またしても。

――――――今まで気付いていなかっただけなのかもしれないが、流石に多過ぎるような気もする。まるで、何かに引き寄せられるかのように。

（……いや、今は余計な事を考えてる場合じゃないわね）

真名はHRの鐘が鳴ったのをこれ幸いと切り替えた。幾ら考えた所で分からない物は分からないので、今は出来る事に集中すべきだろう。

そう、HRを眠らずに乗り切る為の心構え、とか。

「……それじゃあ、今夜ね」「分かったわ。お願いね」

そんな真名の寝耳に、水面のように静かで小さな会話が入って来る。そっと目を向ければ、藤花と誰かが約束事をしているようだった。今夜に一体、何をしようというのか。

（そう言えば、被害は何時も夜に起きているのよね……）

ようするに、そういう事なのかもしれない。

真名は放課後、二人の後を付ける事にした。

（そうと決まれば、まずはねこ姉さんに連絡ね）

さらに、休み時間まで待つのが惜しくなったのか、HR中にＬＩＮＥを送った。何

だかんだで、彼女も立派に不真面目である。
しかし、真名は今宵、酷く後悔し、恐怖する事となる。
……何故、自分たちならどうにか出来る、などと考えたのかを。

◆◆◆◆◆◆

放課後、逢魔ヶ時。

「……」

真名は藤花と名前も覚えていないクラスメイト（♀）の後を付けていた。

（何処に行くんだろう……）

ここは調布市でもかなり外れの方で、女生徒二人で夜歩きするには少々危ない場所だ。現れるのが不審者ならまだしも（それも良くないが）、妖怪の類だったら一溜りも無い。少なくとも一人は。

『まな』「ひゃいっ!?」

と、後ろから肩を叩かれ、真名は変な声を上げた。

「な、何だ、ねこ姉さんかぁ……」

振り向いた先にいたのは、彼女の憧れの存在である猫娘だった。

紫色の髪をシニョンに纏め、リボンで結わいでいる女の子らしいヘアスタイルに、まさしくお姉さんという顔立ちをした、可愛らしさと美しさを両立させた、素晴らしい相貌。高身長にくびれた腰、きめ細やかな肌と、モデル顔負けのスタイリッシュな体形。白いシャツにフレアのミニスカートという乙女チックな格好をしているのに、これでもかと見せ付けられる生足のせいで、妙に艶めかしい。赤いチョーカーとアンクレットが良い味を出している。

そんな絵から飛び出して来たような彼女だが、その正体は猫の半妖怪であり、猫由来の高い身体能力を持ち、並みの妖怪なら軽くあしらえる。めっちゃ強いのに、素敵で、綺麗で、すっごくかっこいい。それが猫娘なのである。

「――――――って言うか、驚かさないで下さいよー」

幸い先行く二人には気付かれていないようだが、危ない所だった。

『……突っ走り過ぎ』

「あたっ！」

だが、猫娘の返事はデコピンだった。地味に痛い。

しかし、それは自分を心配しての事であって、真名もそれが分かっているので、

「はぁい」と涙目ながらも素直に謝った。二人の仲の良さが窺える。……若干良過ぎるようにも思えるが、気にしたら負け。

『それで、あの子がそうなの？』

「はい。藤花さんって言います」

猫娘が藤花を睨め付けながら言い、真名が同意しつつ詳細を話す。

雅によれば、藤花は男女問わず気に入った子を見付けると、決められた日に夜間デートに向かうらしく、出掛けた生徒は二度と帰って来ないとか。

『思いっきり妖しいわね』

「そうですね」

むしろ、何で誰も気にしていないのかがさっぱり分からない。もしかすると、敵は認識を誤魔化す能力があるのかもしれない。

何れにしろ、藤花が妖怪と通じているのは間違いなさそうだ。

『……建物に入るわ』

それから尾行する事、数十分。藤花たちは、鬱蒼とした竹林の中にポツンと佇む、古びた屋敷に入って行った。一昔前は大地主だった事が窺える豪華さだが、今では

すっかり荒れ果て、朽ちている。庭に咲き誇る曼殊沙華も何故か真っ青で、不気味だった。

「何この臭い……」

しかも、屋敷の庭に一歩踏み入れた瞬間から漂い、充満している強烈な臭いが鼻を突く。

それは砂糖菓子すら及びもつかない程に甘く――――腐った死体のような臭いだった。

『……』

二人共、もはや喋る事すら億劫になり、唯々冷や汗を垂らしながら、屋敷の中へと歩を進める。腐った床は気を付けていてもギシギシと音が鳴り、今にも踏み抜いてしまいそうである。

「キャッ……！」『まな！』

とか何とか言っていたら、本当に床が抜けてしまった。間一髪で猫娘が真名の手を掴み、事なきを得る。

だがしかし、

「ひっ……！」『これは……！』

露わになった床下の有様に、真名と猫娘は血の気が引いた。

真名と同い年くらいの、小柄な人間――――その死体が、捩じくれ、絡み合い、腐り果てている。殆どは白骨化しているが、中には死んで間もないのか、生乾きの腐乱死体もあった。湧き出る蛆が腐汁の中で蠢き、生命力をばら撒いている。

「うっ……ぐぅ……！」

真名は思わず吐きそうになるが、こんな所でリバースしたらそれこそ止まりそうも無いので、我慢した。猫娘も酷い臭いに顔を顰めている。

とても妖怪の所業とは思えない。何故なら、妖怪であれば死体を残しておく筈がないからだ。

かと言って、人間業とも思えない。何せ死体が宿り木のようにギチギチに絡んでいるのである。人力ではまず不可能だろう。

では、一体誰の……何の仕業なのか。その答えが、この先にある。

知りたいけど、分かりたくない、そんな物が。

「……ぃぃ……気持ち良い！」

ふと、屋敷の奥から妙に色っぽい声が聞こえてくる。進んでみると、奥座敷から妖しい光が漏れ、声も漏れていた。

そして、そっと襖の間から覗いた二人の目に飛び込んで来たのは、

「ああ♪　好きです、大好きですぅ♪　藤花さぁあああん♪」

「ええ、私もよ、里子さん♪」

『ウフフフ……♪』

あられもない姿で絡み合う藤花と里子（クラスメイト）、それを愛おしそうに見下ろす美しく妖しい女性であった。

◆犬山　まな

漢字で書くと「真名」。前世・血筋・体質と、色々な宿命を背負わされた、結構可哀想な生い立ちの女の子。その上、今作では更なる業を背負わされた。

しかし、本人は天真爛漫（でも少し強か）な女子中学生でしかない。鬼太郎と出会って以来「分からないモノとも分かり合いたい」と考えるようになり、気難しい

鬼太郎やお姉さまな猫娘とも宜しくやっている。好奇心が旺盛で行動力もある為、常日頃から様々なトラブルに巻き込まれ、周囲を振り回していく。

男っ気がまるでなく、妖怪にしかモテない疑惑がある。

ついでに、猫娘に対して友情や憧れを超えた何かを抱いている可能性も指摘されている。

姑獲鳥の鳴く頃に

※若干悪趣味な描写がありマス。ご注意くだサイ。

「ね、ねこ姉さん、これは……？」

『み、見ちゃ駄目よ、まな……！』

そう言いつつ、じっくりとっぷり観てしまう真名と猫娘。

だが、無理もないだろう。母親と思しき人物に見下ろされる中で、喘ぎ声を上げ、潮を噴きながら、若い身空の少女たちがナメクジよりも濃密に交接しているのだから。ここまで異常だと、逆に興味が湧く。

しかし、お楽しみ（意味深）は長続きしなかった。

「ああ、逝くぅうううう！」

絶頂に達した里子が、そのまま昇天したのだ。直前まで絡んでいた、藤花のだいしゅきホールドで背骨と肋骨を粉砕骨折（バキバキ）にされて。

「はい、お母さんも♪」

『ありがとう、良い子ね』

さらに、藤花は里子の死体を両手で頭上に掲げると、とんでもない馬鹿力で雑巾のように捩じり、絞った血を女性と共に啜り始めた。凄まじいゴアっぷりだが、何故だかとても煽情的で艶美な絵面である。

(こいつら、吸血鬼なの!?)

そのあまりにあんまりな藤花たちの姿に、猫娘がドン引きする。

だが、藤花の匂いは間違いなく人間であり、妖気は微塵も感じられなかった。おそらく、あの妖しい女性によって肉体の箍が外されているのだろう。

「嗚呼、お母さん、お母さぁん♪」『よしよし、偉いわよ、藤花』

(甘えてる……親子みたいに……!)

何なんだ、この二人は。ほんの数十秒前はあれだけ異常な事をしていた癖に、今は普通に母子の如く抱き合っている。見ていて非常に気持ちが悪い。反吐が出る。

(……そう言えば、真名が随分静かね?)

てっきり怯え震えているかと思ったのだが、真名はただ静かに猫娘を見詰めてい

るだけだった。
「ねこ、姉さん……」
（いや、違う！　何かに中てられてる！）
しかし、濁った瞳と紅潮した顔から、すぐに正気を失っている事が分かった。雰囲気は流石に無いとして、原因はこの甘ったるい腐臭か。今気付いたが、匂いの元は奥座敷だ。
という事は、これはあの女性の妖術という事になる。
「ねこ姉さぁん♪」
（マ、マズい……！）
驚いている間に組み伏せられてしまった。これでは振り払えない。
『あらあら、お客さんかしら？』「そうみたいね、お母さん」
その上、倒れた時の音で、藤花と女性に気付かれてしまった。誰が触れた訳でもないのに襖がピシャリと開き、両者が面会する。片や裸で抱き合う血塗れの母子、片や今にもおっぱじめそうな少女と妖女。何とも混沌とした状況である。
『な、何なのよ、アンタたち！　この子に何をしたのよ!?』「ねこ姉さん、私、も

う……」

真名の良いように服を少しずつ脱がされるという締まらない恰好で、猫娘が叫ぶ。もはや羞恥しかない。

『私が誰かって？　私は姑獲鳥よ。そして、藤花は私の愛しい一人娘……』

すると、女性の身体が背中から裏返り、獣の耳と蟲のような瞳の無い丸い眼玉を持つ、巨大な怪鳥へと変じた。それまで以上の甘美な腐臭を垂れ流しながら。

◆『分類及び種族名称：死産怪鳥＝姑獲鳥』

◆『弱点：炎』

『グヴェェイァアアアアッ！』

そして、愛娘である藤花をくっ付けたまま、恐ろしい金切り声を上げて襲い掛かってきた。

『くっ……まな、もっと強く、しっかりと抱き締めて！』「はい、ねこ姉さん♪」

猫娘は妖気を解放し、真名にギュッと抱き締められつつ、跳びはねる。思った以上に強い力でガッチリと組み付かれていたので、いっその事もっとキチンと抱いて貰った方が安定する、と判断した結果である。抱き締める力が強まった時に、猫娘

の口から「あっ……♪」という甘い声が零れたのは内緒だ。
『ギャァヴォオオオッ！』『くぅっ！』「はぁん♪」
屋敷とは言え、狭くて古ぼけた奥座敷でそんな真似をしたので、たちまち屋根を突き抜け、夜闇の中へ躍り出る。双方共に腹に女子を抱えているという奇妙な格好だが、姑獲鳥も猫娘も至極大真面目である。お腹の二人は知らないが。
『何なのよ、本当に……！』
『ウフフフ、私はただ、娘の望みを叶えているだけよ』
猫娘が目を光らせ、爪を伸ばして威嚇するも、姑獲鳥は何でもないように答える。
『娘の望みですって？』
『ええ、そうよ。この子はとても可哀想な子なの』
さらに、異形である筈なのに、人間態時の笑みが想像出来てしまう程に嬉々として、己と娘の生い立ちを語り出した。
『この子はねぇ、自分と同世代の同性しか愛せないの。しかも、殺す事でしか愛情表現が出来ない、哀れな子供よ。だから、ワタシが引き取り、育てているの。今までは可愛がる事だけしか眼中に無かったけど、こんな面白い子が育ったらどうなるのか、

という楽しみに目覚めちゃってねぇ♪』

『な、何を言っているのよ、アンタ……!?』

姑獲鳥の発言に、絶句する猫娘。何を言っているのか、一から十まで分からない。姑獲鳥は死産した女のお化けだと言われているが、何処まで業を積み重ねると、これ程までに腐り果てるのだろうか。全く理解出来ないし、したくもない。

最早、元が人間だったかどうかなど関係ない……こいつは、存在してはいけない生き物だ。

『……お邪魔だったかな？　なら、お詫びに一曲弾いてやろうか？』

「そういうレベルじゃないと思うっスけど……」

だが、猫娘が姑獲鳥を八つ裂きにしようと、牙や爪を鋭くしたその瞬間――

――〝それら〟は現れた。

◆猫娘

ゲゲゲの鬼太郎における〝妖怪側のヒロイン〟。

半妖だったり完全な妖怪だったり逆に気病を患った人間だったりと、出自がぬらりひょんばりにあやふやだが、とある一件で寝子（人間）のように地獄に留まらなかった所を見るに、6期の彼女は少なくとも半妖以上ではあると思われる。

何れにしろ「鬼太郎の幼馴染」という側面は変わらず、鈍感系主人公の鬼太郎にヤキモキしているのはどの世界線でも一緒。6期は〝彼女〟が出来掛けているのは内緒。

6期の猫娘は戦闘能力が高く、過去作ならあっさり無力化されそうな相手にも善戦するどころか致命傷を与えるレベルまで上昇している。等身が伸びたおかげだろうか。

ねずみ男とは天敵同士だが、実は一番理解し合っている間柄でもある。まなとは、その……お察しください。

野生の裏ボスが現れた！

たブン、姑獲鳥にとっては死ぬよりキツい結末を迎える事になりそうデス。

琵琶を持った着物姿の大和撫子にチャラい男という、中々に異色の組み合わせ。しかも、よく見ると女の方は単眼の異形。チャラい奴は人間のようだが、そんなのと一緒にいる時点で堅気ではあるまい。

しかし、一番驚くべきは、その出現方法だろう。

突如、中空に襖が現れたかと思うと、中から男女の異色ペアが出て来た。何を言ってるか分からねーと思うが、猫娘たちにも分からない。実に異彩を放つ連中である。溢れ出る妖気も凄まじい。

〝野生の裏ボスが現れた〟。

まさにそんな感じなのだ、あの女は。

『な、何よ、あんたは！』「答えなさいよ！」

『おい、Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ、こいつで間違いないか？』

「最早チャラ男ですらないですね。……ええ、間違いなく、こいつが姑獲鳥っス」

姑獲鳥たちもそれを感じ取り、抱っこを止めて威嚇態勢に入ったのだが、琵琶の女は軽く無視。チャラ男に事実確認を始めた。その有様は、獲物を前にした狩人。姑獲鳥に対して何の脅威も感じていない事が明白だった。

そして、それは紛れもない事実であった。

『グヴェエエイヴァアアッ！』「死ねぇえええええっ！」

『煩いぞ鴨が』

『ガッ……!?』「きゃっ!?」

襲い来る姑獲鳥と藤花を、振り向きもせずに無力化する琵琶の女。藤花は伸びる髪で縛り上げ、姑獲鳥は四つの鋭利な襖で五等分にしたのだ。

（嘘でしょ……!?）

猫娘は驚愕した。

さっき接触したから分かるが、姑獲鳥の羽毛は肌触りの良さに反して、鋼鉄のように硬い。真面に引っ掻いたら、自分の爪でも刃こぼれするだろう。

だから、相手の目を狙って攻撃しようとしたのだが、まさかそれを絹ごし豆腐のように切断してしまうとは。恐ろしい殺傷力である。

その上、髪も自由自在に操れるとなると、近付く事すらままなるまい。接近戦オンリーの猫娘にとって、相性が悪過ぎる。

「……あ、あれ？　ねこ姉さん!?　私は一体何を……!?」

『おはよう、まな。さっきはお楽しみだったわね』

「何の話ですか!?」

一応、姑獲鳥が瀕死の重傷を負ったおかげで真名に掛かった妖術も解かれたが、喜んでばかりもいられない。

『嬉しや嬉しや。こやつが、約束の母か』『ヒッ……!?』

まず姑獲鳥が新たに出現した襖の中に引きずり込まれて退場。奥に六本腕の座敷童子が居たような気がするが、速過ぎて確認出来なかった。

『とりあえず、小腹でも満たすか』「え、あ……ちょ、待っ……！」

さらに、姑獲鳥の加護を失い、ただの人に戻った藤花が女の胸元に運ばれる。

「い、いや！　誰か助け……ぎゃあああああああああああ！」

『おいおい、殺人鬼が助けては無いだろ。むしろ、私にハグされて死ねる事を感謝して敬え』

そして、母親が子供を抱きしめるようにして食い尽くした。血の一滴すら残さずに。

『……うーん、妖怪の味を知った後だと、やっぱり人間って薄味に感じるな』

「まぁ、言って一人分ですからねー」

『まったくだ。何人、何十人殺していても、所詮は一個人。実に薄っぺらな、下らない人生の歩みを感じさせてくれるよ』

しかも、問答無用で食った相手を、これでもかと扱き下ろす。賞味期限が切れたスーパーの半額豆腐をそのまま食べたような感想だった。

これで確信出来た。この女は人も妖怪も関係なく、命を何とも思っていない。食われた事実よりも琵琶の女にハグされた事を羨ましがる、連れのチャラ男も同類だろう。

「な、何て事を……！」

これには真名もドン引き。常日頃から妖怪とも分かり合えると思っている彼女だ

が、この女はどうにも理解し難いようだ。ここまで見境の無い奴は流石に初めてだから仕方あるまい。

だが、そんな物はまだ序の口だった。

『何だ、食った事を怒ってるのか？　それとも味の品評が低過ぎたか？　自分を殺そうとした相手だろうに、お優しい事だ。だが、安心しろ。こんな薄味な奴でも、生まれた意味はある。こんな風にな。……ペッ！』

と、琵琶の女が口から何かを吐き出す。

『うぅぅぅ……』

それは藤花――――の頭を持つ蜘蛛だった。大きさはタランチュラ程度だが、頭部（及び胸部）が人間なので、非常に薄気味悪い。

『私は一体……何よコレ!?　どうなってるの!?　いやぁあああああっ！』

さらに、藤花としての意思はしっかりと残っているようで、己の変化に戸惑い、泣き叫んでいる。

『お前は今日から部屋の害虫駆除係だ。精々よく働け。うっかり潰されないようにな』

『そ、そんな……嫌よ！　これからずっと虫を食って生きろって言うの!?　だ、誰か助けて！　助けてまなさん！　……ぁあああああああああっ！』

しかし、そんなの知った事じゃないとばかりに、琵琶の女はべべんと藤花蜘蛛を襖にしまい込む。彼女が陽の目を見る機会は、もうあるまい。

「あ、悪魔だ……！」

それらの光景をまじまじと見せられた真名は、血の気の引いた顔で言った。未だに見た事は無いが、きっとこんな輩なのだろう。姑獲鳥や藤花の所業など、児戯に等しい。

こいつこそ、本当の悪魔だ。

『悪魔と言うより鬼なんだがね。とりあえず、お褒めに預かり光栄だ。……そんな事より、とても美味しそうねぇ、お嬢ちゃん？』

「ひぅ……っ!?」

すると、琵琶の女が標的を真名に変えた。今までの無表情が嘘のような、凄惨な笑みを浮かべている。

『こんな所で〝稀血〟に出会えるなんて、今日は実に素晴らしい日だ』

『シャアアアアッ！』

真名には手を出させ無い、と飛び掛かる猫娘だったが、

『引っ込んでろ野良猫。私はこの子とお話しがしたいんだよ』

『がっ!?』

女が琵琶を奏でた瞬間、真空の刃が無数に放たれ、猫娘の身体を切り刻んだ。全身から血が噴き出し、至る所が曲がってはいけない方向に曲がっている。刃だけでなく、衝撃波も打ち出していたようである。

『あ……ぁ……ま、な……』

「ね、ねこ姉さん！　そんな……そんなぁ……！」

たったの一撃。それだけで憧れの猫娘が虫の息だ。真名をかつてない絶望が襲い掛かった。

『さて、ちょっとお話をしようか、お嬢ちゃん』「……！」

そんな真名の傍に、琵琶の女がしゃがみ込む。どうやら目線を合わせて話してくれるようだが、一方通行になるであろう事は想像に難くない。

『君はねぇ、とても貴重な人材なんだよ。……人材と言うより、食材かな？』

「し、食材!?」

『そう、稀血という特殊な血液型の持ち主でね。たった一人でも何十、何百人分の栄養価があるのさ。特に君は、億人単位の濃度を誇る、〝稀に見る稀血〟なんだよ』

「……！」

今明かされる、衝撃の真実。

目玉おやじには「偶然力」という〝妖怪に近い体質〟を持っているとは言われていたが、その原因が自分の血液だとは。元々治せるものではないとは思っていたが、これで確定されたと言っていいだろう。

だが、それを今知った所で意味はなく、むしろ処刑宣告をされたに近い。何せ相手は人も妖怪も食ってしまう、とんでもない悪食なのだから。

『さっきのは味気なさ過ぎたからね。ここで美味しいディナーにあり付きたい訳よ。だから、ねぇ？』

「い、いや……！」

そして、話は終わりだとばかりに、琵琶女の唇が迫る。まるで、キスを求める乙女のように。

「鳴女さん！」『……！』

しかし、いい所で邪魔が入った。上空から無数の光弾が降り注いだのである。

◆姑獲鳥（鬼滅の刃）

柱になる前の不死川　実弥が、先輩格にして友人の粂野　匡近と共に赴いた古屋敷で出会った、下弦の壱の女鬼。

一見すると弱った子供を世話する慈愛に満ちた聖母のように思えるが、実際は面倒を見る振りをして虐待し、あまつさえそれを「看病」と称して周囲の心配と同情を得る事に快感を覚える、所謂「代理ミュンヒハウゼン症候群」を患った精神疾患者。人間時代も鬼になってからも、その本質は一切合切変わらない。

〝鬼になった母親を自ら手に掛けた〟トラウマを持っている実弥を篭絡し、食ってしまおうとしたが、匡近の捨て身の策で術を破られて逆上、匡近を殺したものの、それに激怒した実弥に頚チョンパされて死亡した。これにより実弥は風柱となった。姑獲鳥の後釜にはトーマス（魘夢）が就任している。

その後、何故か鬼太郎のいる世界で種族としての姑獲鳥の一個体となり、藤花という面白い玩具で遊んでいたが、何時までもそんな身勝手さが許される程、世の中は甘く無かった。

運命の戦い

6期の鬼太郎ッテ、弱くはないけど強くもない感じがするんですヨネー。斜に構えた小僧というか何というウカ……。

『……？』

素早い動きで回避した琵琶の女が空を見上げると、そこには一反の木綿に跨る、不思議な少年の姿が。

短めの茶髪で片目を隠したのっぺり顔をした、身長・体格共に小学生くらいの子供サイズだが、歴戦の勇士らしく、かなり鍛え上げられている。服装は紺色の学童服に縞柄（黄色と黒の二色）のちゃんちゃんこを羽織り、下駄を履いているなど、何処か昭和臭い格好をしている。学校では田中　ゲタ吉とか名乗ってそう。

『――――何だぁ、あの主人公面した野郎は？』

「いや、面も何も主人公ですからね？　彼がかの有名な「鬼太郎」っスよ」

『ほほぅ、あいつが……シンセサイザーの』
「あんた俗世に染まり過ぎだろ。そっちじゃなくて、妖怪の方」
『ああ、幽霊族の方か』
「はい。ちなみに、これが今分かる彼のスペックですね」
『なるほどなるほど』
そう、彼こそは幽霊族の末裔にして妖怪退治の専門家――――ゲゲゲの鬼太郎その人だ（チャラ男ｗｉｋｉ参照）。猫娘たちの危機を感じて、文字通りかっ飛んで来たのである。
『……遅れて済まない』
「き、鬼太郎！」「き……た……ろ……ぅ……！」
『一反木綿、まなと猫娘を頼む』『合点承知の助！』
さらに、まなと猫娘を空飛ぶ布切れ妖怪「一反木綿」に任せて退避させ、自分は琵琶の女と対峙する。その瞳には明確な敵意がありありと浮かび上がっていた。自分の大切な仲間を傷付けられた怒りからであろう。
まぁ、琵琶の人は、それくらいで怯むような女ではないのだが。今までもっとヤ

バい連中に付き纏われていたからね、仕方ないね。
『自己紹介は要らないようだな』
『ああ。代わりに私の紹介をしてやろう』
『必要ないね！　「髪の毛針」！』
そして、鬼太郎はさっきまでとは打って変わって無表情に戻った琵琶の女に、問答無用で髪の毛針を放つ。妖気を宿した髪の毛を針のようにして発射する技で、特別強力な技でもないが、それでもコンクリートブロックを粉砕する威力はある。真面に食らえば、並みの妖怪では一溜りもない。
――――――べべん！
だが、そんな針の筵も、琵琶の衝撃波によって一つ残らず薙ぎ払われてしまった。
『まぁ、そう言うなよ。自分を負かした相手の名前くらい、知っておきたいだろう？』
『うるさい！　「リモコン下駄」！』
しかし、鬼太郎も負けじとリモコン下駄を射出する。この下駄は彼の念力によって自在に宙を舞い敵を打倒する、牽制技である髪の毛針よりも殺傷力の高い飛び道

具だ。

『フン！』『なっ!?』

だが、それさえも琵琶の女には通用しなかった。

というか、衝撃波で防ぐどころか裏拳で殴り砕かれた。そこらの妖怪とは、根本的に肉体強度が段違いのようである。

『この……「体内電気」！』

こうなっては仕方ないと、必殺技の一つを切る。敵に髪の毛を伸ばして巻き付け、雷級の電撃を浴びせるのだ。

しかし、これも大したダメージにはならず、指先から伸びたで刀で髪を切断され、中止させられてしまう。感電している筈なのに、どうして動けるのか理由が知りたい。髪の毛をアースにでもしたのだろうか。

『「霊毛ちゃんちゃんこ」！』

ならば、これでどうだと、先祖の霊毛を編み込んだちゃんちゃんこを伸ばし、琵琶女の顔面を覆い尽くす。これにより敵は窒息し、その上で霊力を吸い取られて消滅する……筈なのだが、

『ドラァッ！』『がはっ!?』

琵琶の女は弱る素振りさえ見せず、ちゃんちゃんこをムンズと掴み、力いっぱい鬼太郎を投げ飛ばし、地面へ叩き付けた。リモコン下駄の時といい、とんでもない馬鹿力だ。

『くぅぅ……「指鉄砲」！』

それでも鬼太郎は諦めない。目隠しされている今の内にと、指鉄砲を放つ。霊力を光弾として発射する技であり、さっきの不意打ちで使った連射式の時とは違い、チャージした上での大玉である。思わず「霊丸！」と叫びたくなる有様だ。

――――べん！

『何っ……ぐわっ！』

だが、とっておきの必殺技も、襖の転移攻撃であっさりと跳ね返されてしまった。どんな攻撃も当たらなければ意味は無い。

『……はぁっ！』

『ほ～う、やるねぇ』

しかし、鬼太郎は咄嗟に霊毛ちゃんちゃんこを引き戻し、自らの手に巻き付け、

返ってきた指鉄砲の光弾を受け止めて吸収――――霊力を宿した光の剣に変えた。

さらに、そのまま琵琶女に叩き込もうと猛進する。飛び道具が充てにならない以上、直接身体に刻み込むしかない。

『てぁっ！』

『ぬぅうん！』

『ぐぼぁっ!?』

だが、琵琶の女は渾身の一撃をフワリと受け流し、合気道の要領でカウンターの拳と蹴りを殆ど同時に叩き込んだ。赤紫色のエフェクトが痛々しく重たい。これには鬼太郎も思わずダウン。立ち上がる事さえ出来ない瀕死のダメージを負った。

『ぐっ……くそっ……！』

『弱いな。所詮は再生力と地力頼みの喧嘩殺法か。今までの相手が相手だから仕方ないとは言え、対人戦闘という物を全く考慮していない。そんな事だから、こうして足元を掬われるんだよ』

そんな彼を冷徹に見下ろし、琵琶の女が罵倒する。

しかし、何も言えない。鬼太郎は今まで妖怪という異形の怪物を相手取ってきた。亜人型の者も多くいたが、大抵は野生の猿を思わせる獣染みた戦い方をする奴らばかりだった。

妖怪にとって人間はスナック感覚のご飯であり、相手をするにしても身体スペックのみで事足りてしまう。それ故の弊害である。

かと言って妖怪同士では妖術合戦になりがちで、やはり真面な技術のぶつけ合いにはなり難い。生存競争に「技を磨いて高め合う」暇など無いのだから。

だので、強大な妖力と人間としての体術を併せ持った琵琶の女を相手にするのは、例え鬼太郎であっても分が悪かった。

「そろそろ帰りましょうよー」

『そうだな。稀血を逃すのは惜しいが、あの子は特別だ。何れ機会はある。それに、煮ても焼いても切っても伸しても食えない奴を相手にするのも面倒だ。今日はもう帰るとしよう。それじゃ、バイバイキ～ン☆♪』

そして、止めを刺そうとして、あるいは欲をかいて食べてしまい、ビックリ仰天な逆転劇に繋がる事もなく、琵琶の女は襖で転移して去って行った。完全に勝ち逃

げだ。黒死牟がブチ切れそう。

『くそっ……！』

結局、名前を聞く事どころか相手にすらされず、鬼太郎はここ最近は無かった、苦い敗北を味わう破目になった。

雀の囀りと、キジバトのくぐもった鳴き声が、夜明けを告げる……。

◆◆◆◆◆◆

『……ここは!?』

すっかり身体を再生し終え、美女の姿に戻った姑獲鳥が目を覚ます。

見た事もない部屋。上下左右奥行きがあべこべな、あり得ない空間。

『おお、目を覚ましたか。なら、遊ぼう♪　丸子と鞠で遊ぼう♪　……朝も昼も夜も、永遠に♪』

さらに、その一角で手招きする、座敷童子が一人。

『あ……ぁ……！』

その瞬間、姑獲鳥は理解した。ここは地獄だと。

屋敷の中では座敷童子に敵わない。運命率を操作され、都合の良い結果に導かれ

てしまうからである。
そして、ここはあの琵琶女が用いる異空間。自分は二重に閉じ込められている。誰も可愛がれず、誰にも同情されない。全ては座敷童子と琵琶女の思うがまま。何も自分の思い通りに出来ないなんて、こんな生き地獄があるだろうか。
『いやぁあああああああああああああああああ！』
無限城では、姑獲鳥の悲鳴は誰にも聞こえない。

◆鬼太郎
フルネームは「墓場　鬼太郎」。世間的には「ゲゲゲの鬼太郎」で通している。妖怪退治の専門家として有名だが、人間に少し思う所があるだけで、別に人間の味方という訳ではない。悪人には容赦がないどころか、下手な妖怪より恐ろしい事をやってのける。こいつこそ本当の悪魔なんじゃねぇのって感じ。
その正体は、かつて世界の覇権を握っていたという妖怪の一族「幽霊族」の末裔。凄まじい生命力が最大の特徴で、切っても焼いても潰しても溶かしても食われても

死なず、ほぼ必ず復活する。むしろ、食ったら敵の死亡フラグである。

時期や年代によって性格が違っており、６期の頃は非常にニヒルでリアリスト（実際には斜に構えた子供って感じだが）。その為、人間への対応は歴代で一番冷たく、真名にも初めは辛く当たっていたが、その一生懸命さと天真爛漫な心に影響を受け、後に和解した。

……ちなみに、今作中では鳴女に負けてしまったが、ここで彼が駆け付けなかった場合、名無しが完全体になる事は無かったものの、その代わりにヤトノカミもビックリな邪神が誕生する所だったので、ファインプレーではある。今回は初見だった事も大きいが、鳴女の進化速度が異常だっただけ。

零余子ちゃんのゲーム実況

こんにちは、零余子です。決して零余子印のサイコロステーキではありません。

……とまぁ、ご挨拶はこれくらいにするとして。

つい先日、無限城の住人が増えた。鳴女曰く「丸子の母親役」らしいが、どう見ても元下弦の壱なんだよなぁ。名前も姑獲鳥だし。こんな奴（代理ミュンヒハウゼン症候群）を母親に宛がうのはどうかと思うのだが。

『さぁ、次はメンコをしよう！』

『えっと、そろそろ寝た方が……』

『えー、もっと遊ぶのー！』

『……ええ、分かったわ。好きにして頂戴な』

『わーいわーい！』

『……』

まぁ、無限城と丸子ちゃんの能力に囲われた状況では、何も出来ないだろうけどね。逃げられないし、逆らえない。何一つ自由は無く、飽きられたら文字通り終わ

りなので、常に〝丸子ちゃんにとっての甘えられる相手〟を演じざるを得ない。加虐趣味のあいつにとっては多大なストレスだろう。ざまぁ見ろって感じ。

ちなみに、無限城の主は何をしているのかと言うと、

《久し振りだな、ＡＭＳ諸君！　この傷の痛み、貴様らにも味わわせてやろう！》

『それはこっちのセリフだ。ここで決着を付けてやる。閣下の名は私が貰おう！』

《お、ラスボス戦か》《滅茶苦茶ノリノリで草》《鳴女閣下！》《でも、この超ハイスコア状態で勝てるのか？》《鳴女閣下なら大丈夫だ！》《総統閣下してるしな！》

……何だかなぁ。

確かにガンシューティングゲームは盛り上がる物だけど、あそこまでマジになれるもんかね。鬼ならハイスコア叩き出すくらい余裕だろうに。

とても鬼太郎を圧倒した女とは思えない、お気楽さだ。

――――そう、何とこの女、かの有名な妖怪界のエース、ゲゲゲの鬼太郎をコテンパンに伸したのである。

それも内臓破裂と肋骨及び脊椎の粉砕骨折という、普通だったら即死レベルの重

体に追い込むくらいのフルボッコだ。あの静かなる仕事人が、こんな化け物みたいな仕置人になるとはなぁ……。

まぁ、瀕死の重体程度なら、すぐに復活してしまうのが鬼太郎なのだけれど。噂によると溶かされたり食われたりしても死なないらしいので、こいつも大概化け物である。もう嫌だ、この世界。

……それにしても、あんなに目立つ真似して、大丈夫なんだろうか？

人気の無い場所だったから、当事者以外の目撃者はいないとして、鬼太郎ファミリーに目を付けられるのは良くない気がする。チャラ男先生曰く「妖怪界の任侠」らしいからね。日本（シマ）を荒らす輩は妖怪も人間も関係なくカチコミするとか。妖怪退治の専門家なんじゃないのかよ。やってる事がなまはげと大差ないんだよ。

一応、その辺りは鳴女も考えて……無さそうだなぁ。「負け犬の遠吠えなんか興味無い。関心があるのは味だけだ」とか言いそうだもんね。自分以外の知的生命体を食材としてしか見てなさそうだし。

ま、考えても仕方ないか。なるようになるでしょ。

そんな事より、私は自分の配信をしないと。今日はソロでゲーム実況するんだよ。

「……あーあー、皆さんこんばんは。零余子のゲーム実況、始まるよー」

《こんばんわんこソバ》《今日も相変わらず気怠そうで草》《零余子はご飯のお供、異論は認めない》《何の話やw》《零余子の話に決まってるじゃないか！》《※零余子は地上部に形成される栄養繁殖器官の事です》《何それ美味しそう》《実際、結構美味いよ》《零余子入りのご飯がまた良いんだ、これが》

クソッ、毎回馬鹿にしやがって！

ご飯ネタはもう良いんだよ。何だ、「こんばんわんこソバ」って。日々の鬱憤をぼやかして呟いていたら、いつの間にかリスナーから「私＝ご飯（またはオカズ）」みたいな扱いを受けるようになってしまった。解せぬ。

だが、リスナーはお客様だ。多少の事には目を瞑ってやろう。女性実況者の宿命みたいなもんだからね、これ。

余談だが、今回プレイするのは、小さな悪夢の世界を黄色いレインコートを着た小人ちゃんが探索する、ホラーアクションゲーム。不思議な世界観と不気味な演出が上手く組み合わさった良作との前情報があったので、ちょっとワクワクしている。こういう曖昧で幻想的な雰囲気って好きなのよ、不思議の国のアリスみたいで。個

人的に大工とセイウチの話がお気に入りです。
「えっと、ここはこれを掴んで登ればいいのかな？　……よしよし、順調順調……って、わぁあああああっ！　奥行きィイイイイッ！」
《あーあ、やっちゃった》《流石は零余子や》《常に落ちが付く有能な女》《芸人だなぁ》《まぁ、あるあるだよね、奥行き感のズレ》《最大の敵は奥行きだからな、このゲーム》《言うて死にゲーやし》《落ちてこその零余子やし》《それな》
チクショウ、嗤いやがって！
判定がシビアなんだよ、このゲーム！
あと、やっぱり奥行きが一番キッツいィィッ！
……そんなこんなで、意外と難しい操作に四苦八苦しつつも、監獄→隠れ家→台所→ゲストエリアとクリアしていく。
「――――――って、嘘でしょ!?　おま、それは……やめたげてよぉ！　……あぁー」
《遂にやっちゃったかー》《皆のトラウマ》《トンガリコーン美味しかった？》《トモダチはゴチソウなんだよ！》《それガ〇ートや》

さらに、マジで夢に出て来そうな食事シーンを途中に挟みつつ、遂にラスボス戦へ。ラーじゃないけど、鏡で現実を６回くらい見せ付けてくれるわ！

「ラスボス（こっち）も食うのかよぉおおおおっ！」

《やったぜ！》《検食のお時間だぁ！》《まるで零余子のようだ！》《でも、中身婆さんらしいよ》《↑ネタバレやめい》

クッソタレが、何で私は悪食に縁があるんだよぉおおおっ！

ああん、もう駄目ぇ……私の精神は２７２回は死んだ……もう、疲れたよ……何だかとっても眠いんだ……パトリック……いや、それ違う、コーラサワーや……。

「――――――はい、クリアです。もう駄目みたいなんで、今日はここまでにします。それでは、この動画を少しでも良いと思った方は、評価や登録をして頂けると幸いです。ではでは……」

《お疲れー》《いやー、零余子のホラゲー実況は良いなぁ》《尊い》《尊い》《お前ら絶対尊いの意味分かってないだろw》《またね、零余子ちゃ～ん♪》

ともかく、私はやり遂げた。主人公の少女が妙に鳴女臭い事もあって、かなり疲労はした物の、クリアしたったよ。ざまぁ見ろ、バン〇イめ！

……はぁ、マジで疲れたから寝よ。今日はもう配信予定は無いし、鳴女の方もそろそろ終わりそうだし。

それじゃあ、今日の私は明日の私に任せて、お休みなさい……。

「……はにゃん？」

そして、私は謎の場所で目を覚ました。

◆零余子の実況チャンネル

正式タイトルは「おクスリ零余子の実況シリーズ」。リスナーからの挨拶は「おはよう食」「こんにちハンペン」「こんばんわんこソバ」の三種類。全部悪乗りから定着した。

主にＲＰＧやＳＴＧをやっているが、一番人気はホラゲーの実況動画。本人がヘタレでビビりな上にマウントを取りたがるので、突拍子もない事を言い出したり、奇想天外な行動に出たりと、混沌とした内容がウケている様子。特に絶叫が素晴ら

しく、凄まじいとの事。

他にも雑談配信や鳴女たちとのコラボ動画を上げたりしているので、皆も一度は登録しよう（笑）。

不思議の夢の零余子

シックスちゃんの可愛さと理不尽さは異常だと思うンダ。

枯れた木々と岩肌が何処までも広がる、不毛の土地。常に霧が掛かっており、一寸先は白い闇である。

「……あー、これ夢だわ。明晰夢って奴ね！」

私はそう思う事にした。何故なら有り得ないからだ。

無限城は鳴女のテリトリーであり、そこには座敷童子の丸子ちゃんまでいる。全ては彼女らの思うがままで、閉じ込められたが最後、二度と陽の目は拝めないだろう。元下弦の壱のように。

仮に寝てる間にチャラ男先生の部屋へ移動していたとしても、鳴女が外敵の侵入を許す筈がない。彼女が健在である限り、あの手狭な部屋は安全地帯である。

まぁ、私を一番傷物にしているのは、その鳴女なのだが。

まぁまぁ、そんな事はどうでも良い。分かり切っている事に悩んでも仕方ないだろう。

それより、ここが夢の中だというなら、探検しない手はない。どうせ何時かは目覚めるんだし、それまではこの夢幻の大地を冒険するとしよう。さっきの実況で「不思議の国のアリスが好き」とか心の中で呟いてたけど、まさか自分がワンダーランドに入場するとは思わなかった。

さーて、この先にどんなワクワクが待ってるのかな～？

「何もないね……」

五分くらいブラブラして気付いた。ついさっき、自分で不毛の大地って言ってたじゃん。荒野にはイース○ウッドしかいないんだよ。

というか、いるならサイン欲しい。「零余子ちゃんへ、愛を込めて」って書いて。私、あの人のビジュアル好きなのよねー。漢らしさとイケメンぶりが絶妙にミックスされているというか、単純にお嫁さんにして欲しいと思った。鳴女に頼めば鬼にして貰えるかもしれないし、何の問題も無いよね？

つーか、いい加減何かあって欲しいんだけど。イベントの一つや二つ、起こって

くれないとつまらないよー。
「いや、待てよ」
ここが夢の中だというのなら、強く思い描けば反映されるんじゃないのか？
よしよし、そうと決まれば――――――、
「いざ行かん、不思議の国へ！」
アリス・イン・ワンダーランドだっ！
「おおー」
すると、枯れ木ばかりだった不毛な大地が、奇妙な場所が点在する鬱蒼とした七色の森へ早変わり。海や山に昼と夜が同じ領域に同居し、動物が人のようにお喋りして、草花が楽しそうに歌う。物が意思を持って動いたりもしていた。
まさに不思議の国。お伽話の世界である。
そうだよ、私は昔から、何なら鬼になる前から、こういう夢いっぱいの世界を探検したかったんだよ！
ウフフフ、まずは何処から行こうかな～？
『ぴきゅぅ～』「……ん？」

何か目の前を通って行ったな。気のせいでなければ、つい最近君の姿を見た事があるぞ？

『ぴきっ！』「ノームだぁ♪」

間違いない、このトンガリコーンは小さな悪夢のノームくんだ！

可愛いなぁ。悪戯好きなだけで何の害も無いし、すぐに懐いてくれる。まるでピク○ンみたいね。私だけに付いて来て良いのよ～？

「よ～しよし」『ぴきー？』

ゲームよろしく、後ろから抱っこしてみる。

『ぴきゅきゅっ♪』

思った通り、懐いてくれた。私と一緒にピョンピョンしてくれるんじゃ～♪

でも、何で不思議の国のアリスにノームがインしてるんだろう？

さっきまで実況してたから、世界観がごっちゃになったのかも。雰囲気が似てたからね。

「……あれ？」

という事は、この先に待ち構えているのって、ドードー提督とかチェシャ猫みた

いな可愛い系のキャラクターじゃなくて、管理人やゲストとかの化け物系だったりする？

いきなり行きたくなくなったんだけど。何で夢の中に来てまで食べられなきゃいけないんだよ！

『ぴきっ！』

だけど、ノームが行こうって言ってるんだ……進むしかないじゃな～い♪

ま、これ夢だもんな。死ぬ事は無いだろうし、そもそも私、死ねないし。今更と言えば今更なのよねー。

そうと決まれば、地底じゃないけど、GO！GO！GO！

◆◆◆◆◆◆

「……この人は、本当に何かやらかさないと気が済まないんスかね？」

もう三日もスヤスヤと眠る零余子ちゃんの姿に、俺は思わず溜め息を吐いた。

……はーい皆、チャラトミさんだよ～♪

さっそくだけど、この寝坊助をどうにかして欲しいんだ。例のゲーム実況から今日まで、三日三晩眠り続けている。下の世話が大変だったわ。ベッドを汚すし、鳴

女さん怒るし、「お前これ食え」とか言ってくるし。抱き枕が使えなくて癇癪を起した鳴女さんを宥めすかすのは苦労したぜ。

それにしても、流石に眠り過ぎだろ。これには鳴女さんも大人しくなった。どう考えてもおかしいからね。丸子ちゃんも心配している。

『鳴女ー、零余子はまだ寝てるのかえ？』

『ああ。手足を食っても反応しないし。これじゃあ、抱いて寝る以外使い道が無いじゃないか』

『つまらんのー。いっそ頭をもいでみたらどうかの？』

『もうやったよ』

……訂正。単に愛想が尽き始めているだけだった。これはマズいんじゃないかな？

『おい、チャラwi（ウィ）。どう思うよ、これ？』

「いや、そんなチェケラみたいな略し方されても……」

まーた、そうやって無茶振りするー。

しかし、考えない訳にもいかないしなぁ。ここで考えるのを止めたら、零余子

ちゃんが宇宙に投棄されちゃうし、夜のオカズを無くすのは俺も嫌だ。何とかしないと。

「――――思うに、これは夢に囚われてるんじゃないかと」

『夢に囚われる？』

「はい。意外と多いんすよ、夢に干渉する妖怪って」

夢は無防備である。魂が肉体から切り離され、剥き出しの精神がドリームランドを彷徨っている状態なので、心を守る物が何もない。干渉されたが最後、好き放題食い放題ないのだ。

だので、夢の世界を狩場にする妖怪は、かなり多い。日本だけでも獏や枕返しがいるし、海外には夢魔という小悪魔がいる。人の夢は、妖怪にとってもドリームランドなのである。

『なら、お前ちょっと連れ戻して来い』

「いや、どうやってスか」

『そこの姑獲鳥に頼めばいい。そいつ、人を夢の世界に連れて行く能力を持ってるからな』

「ほへー」『……』

ちょっと特別感のある個体だとは思っていたけど、そんな能力まであるのか、この人。確かに良い夢（意味深）を見せてくれそうではあるけど。

「それじゃあ、一丁お願いします」『はいはい、横になってねー』

さらに、その艶めかしい脚で膝枕までしてくれる！

まさに夢心地だわ。良い匂いもするし。クンカクンカするだけで微睡める。何て心地良いんだ。

嗚呼、ずっとこうしていたい……。

『今晩中に連れ戻せよ。じゃないと、お前と零余子を活造りにしてやるからな』

早く連れ戻さなきゃ！

◆リトルナイトメア

正式名称は「ＬＩＴＴＬＥ ＮＩＧＨＴＭＡＲＥＳ-リトルナイトメア-」。胃袋の名を持つ巨大な船「モウ」の中を、黄色いレインコートを羽織った少女「シックス」

が探索する、ホラーアクションゲーム。基本的に右へ進む横スクロールだが、キッチリと奥行きもあり、目測を誤ると落下死する（ある意味最大の死因）。操作も意外と難しく、「初見でそれは無理やろ」というフィールドギミックや敵も満載で、死んで覚えるしかないデスルーラ的なゲームである。

様々な謎が随所に散りばめられており、製作者が明確な答えを用意していないのも相俟って、考察のし甲斐があるのが最大の特徴。モウの住人やお客様もさる事ながら、主人公であるシックスが一番謎だらけで不気味だったりする。マスコットキャラのノームだけが唯一の癒しだ。別のゲームに出て来る処刑人に似ている気がするのは内緒。「2」もあるよ！

零余子ちゃん、大ピンチ！

ストレートなタイトルでスガ、これ以上言い様が無いのでこうなりまシタ。

はーい、皆おはよう食。まだ目覚めの時じゃないけど、零余子ちゃんだよー。
と言うかね、正直今は挨拶している場合じゃないんだわ。
「うひゃあああああ！」『ぴきゅきゅ～♪』
『グヴォァッ！』『ホワァッ！』『ノォオン！』『ハァァアアッ！』
だって、モウの住人とゲストの皆様に追い掛けられてるんだもの。居るとは思ってたけど、勢揃いするなよ。まるで、何処かの大運動会みたいじゃないか。あと、ノームが楽しそうなのが、そこ傍となくムカつく。
《デデデ～ンデデデ～ンデデデデ～ン♪》
「しまった、余計な事を考えちゃったぁっ！」
お前らの相手は迷子の七五三さん（二十代）だろぉ！

マズいマズい、どうするどうする!?
最早、夢を楽しんでいる暇はない。こんな悪夢の世界、さっさと抜け出すに限る。
だが、一体どうやって乗り切れば……、
「――――――そうだ！」
ここが夢の世界なら、失くした物も取り戻せる筈。私が呼び出すのは、これだ！
『うっしゃあああああっ！』
鳴女やチャラ男先生から伝え聞いた、あの妖刀。これさえあれば、どんな化け物も膾切りよ。痣者舐めんじゃねぇ！　食らえ、ヒノカミ神楽ぁっ！
『ハァ……ハァ……ふぅ」
危ない所だった。透き通る世界のおかげで、ほぼ一方的に殲滅出来たけど、見たくもない中身まで確認出来てしまった。とりあえず、無理すんなよ婆とだけ言っておく。
つーか、自分の夢で殺されるとか、洒落にならねぇんだよ、チクショウめぇーっ！
『きゃっきゃっきゃ♪』

楽しそうだね。

「それにしても、これからどうしたもんか……」

一先ず、状況を整理しよう。

ここは夢の世界であり、私はそれを夢と認識出来ているから、ある程度コントロール出来る。

だが、一度生み出した物は無くならず、襲われれば殺されてしまうかもしれない。夢で死ぬと現実でも死ぬとかいう俗信があるけど、もし本当にそうだとしたら、今の状況はかなり危険である。

そもそも、ここが自分の夢とも限らない。夢の世界は集合的無意識の産物だという話もあるし、誰かの夢に飛び込んでしまった可能性がある。だから微妙に不自由なのかも。

ともかく、早く脱出しないとヤバい。人の夢に閉じ込められるなんて、それこそ悪夢だ。私の夢は私だけの物なんだよ！

『……さい！　止めて下さい！』

「うん？」『ぴきゅ？』

森の奥から、声が聞こえる。可愛らしい女の子の声である。台詞から察するに、誰かに襲われているらしい。

正直、自分の事で手一杯だから無視を決め込みたいけど、夢の中では何が幸いするか分からないので、とりあえず助けよう。

『良いよ、君！　実に良い！　もっと見たい、調べたい！　君、ボクと一緒に来ておくれよ！』『嫌ぁ！　わたしはずっとここに居るのぉ！』

「うーわー」『ぴーきゃー』

ズンズン進んだ先に待っていたのは、継ぎ接ぎだらけの死体を思わせるマッドサイエンティストが、シニョンで着物というキュートな幼女に迫る、事案しかない光景だった。何しとんねん。

「止めんか」『ぐはぁっ！』

一先ず、一線を越える前にドロップキックを食らわせる。見た目より重量はあったが、それでも超強化状態である私の敵ではなかった。科学者なら、大人しく引き籠ってろよ。

『い、いきなり何をするんだ！　このボクの優秀な頭脳に傷が付いたらどうする

！　ボクはヴィクター・フランケンシュタインだぞぉ！』

「黙れ、ロリコンめ」

こんな可愛い女の子に鼻の下を伸ばして手を出すような奴に慈悲は無いんだよ。

それにしても、フランケンシュタインか。

確かに頭に螺子刺さってるし、継ぎ接ぎだし、完全に動く死体だけど、ヴィクター・フランケンシュタインは制作者であって、怪物自体に名前は無いんじゃなかったっけ。創造主を殺した時に名前まで乗っ取った、とか？

何れにしろ、生みの親と同様にイカレてるようだし、手を唇と舌に変えて幼女の味を確かめるような奴だから、ぶっ殺し確定だな。死ね、変態！

『うぅぅぅ……あァァんまりだァアアアっ！　ＨＥＥＷＹＹＹＹ！』

すると、ヴィクターが突然、大声を上げて泣き出した。マジもんのギャン泣きだ。

柱の男かお前は。家に柱の女みたいなの居るから、そんなに驚かないけど。

『怒る！　……ヴォオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

「うぇえええっ!?」『ぴきゃーっ!?』

だが、奴は弾けた。

スッキリするどころか、筋肉モリモリマッチョマンの変態になった。見た目は完全に色違いのハ〇クである。どういう事だってばよ!?

『そいつは大泣きすると、フランケンシュタインの怪物としての本性を現わすの！とんでもなく我が強くて夢見がちだから、わたしの力も通じないし……ともかく、気を付けて！』

と、シニョンの幼女からナイスな助言が。お前、見た目幼女だけど実は相当年月重ねてるだろ。冷静に解説しやがって、このロリ婆め！

つーか、何をどう気を付ければ良いんだよォ～!?

『――――「円舞一閃（えんぶいっせん）」、「幻日虹（げんにちこう）」「碧羅の天（へきらのてん）」、「灼骨炎陽（しゃっこつえんよう）」、「日暈の龍・頭舞い（にちうんのりゅう かぶりまい）」、「輝輝恩光（きききおんこう）」！』

『ガヴォオオオオオッ！』

ともかく、迎撃しないと話にならないので、次々とヒノカミ神楽を叩き込んでいく。

しかし、ヴィクターは元々死体で継ぎ接ぎだからか、斬った傍から再生し、巨体に見合ったパワーでどんどん攻めて来る。その姿はまさしくバーサーカーだ。ド

ロー、モンスターカード！

ヤバいヤバいヤバい、このままじゃ押し負ける！

殺されても死なないけど、その分色々とアカン事をされてしまうかもしれない。

くっころは勘弁なんだよぉ！

『うぉおおおっ、私の純潔は絶対に、絶対に、絶ぇ～～～～～～ッ対に、渡さないんだよぉおおおっ！』

『グヴォオオオオオッ！』

火事場の馬鹿力なのか、全身に痣が浮かんだ状態で日の呼吸・拾参の型を食らわせたら、ようやく大人しくなった。三千世界どころか万世極楽を教えてやったぜ！

『ヨグモォオオッ！　お前は絶対にゆ〝る〝さ〝ん〝！』

だが、許されなかった。瞬く間に再生した上に若干の理性まで取り戻してしまった。これもゴル〇ムの仕業か。全部ドン・サ〇ザンドって奴のせいなんだッ！

『行くぞ、ゲッターぁあああああっ！』

しかも、まさかのブラックゲッター（チェンゲ版）を召喚、自らパイロットを務める始末。どうしてこうなった。

『この幼女は素晴らしい！　どんな夢も皆みんな叶えてくれる！　まさしく〝あの子〟へのプレゼントに相応しい！　初めは潜入調査などという使いっパシリにされた事に腹が立ったが、〝あの子〟の夢を叶える為なら話は別だ！　どんな事をしてでも手に入れてやるぞ！　愛でＬＯＶＥだぁ！』

そして、意味不明な事を口走りつつ、スパイク付きの鉄拳を振り下ろして来た。

「だ、誰か助けてぇえええええ！」『ぴっきゃーっ！』

悪夢の世界では、私の悲鳴は誰にも聞こえない……かと思われた、その時。

――――――ガキィイイン！

「ゑ？」『ぴ？』

何かがブラックゲッターの拳を受け止める。火花を散らす、赤鬼のようなそれは、

『何ッ、ゲッター１だとぉ!?』

世界最後の日からやって来た、ゲッター１だった。

◆ヴィクター・フランケンシュタイン

メアリー・シェリーの小説「フランケンシュタイン」に登場するマッドサイエンティスト。〝新たな生命体〟を創る事に固執しており、継ぎ接ぎの死体に「サンダー・ボルト」を発動して蘇生させたが、最後はその怪物に殺されてしまった。後年では、この名無しの怪物が「フランケンシュタイン」と呼ばれるようになった。

6期の彼は西洋妖怪の一員であり、創造主の名前と人格を完全に乗っ取った存在である。その為、大泣きする事をスイッチとして怪物の本性を現わす能力が有る。

アニメでは真名に一目惚れしていたが、今作の彼には既に〝花嫁〟がいるので、恋愛対象としては眼中に無い（研究対象にはするかもしれないが）。

零余子ちゃんと愉快な仲間たち?

チェンジ・ゲッター！　……結局、ブラックゲッターが一番強くてカッコいいんだヨネ！

《転移完了！　零余子ちゃんは下がってて！》『ドワォ!?』

さらに、ブラックゲッターの腕を振り払い、見事なチョッピングライトを決めたパイロットは、まさかまさかのチャラ男だった。マジかよ。何だか分からないけど、ピンチに颯爽と駆け付けるなんて、ちょっとカッコいいじゃない！

「ど、どうしてここに!?」

《鳴女さんの命令だよ！　姑獲鳥さんの力で夢に干渉したんだ！》

「なるほど！」

《俺としても、夜のオカズは大切にしたいからね！》

「死ね、この変態！」

結局お前も食べ物（意味深）として見てんのかよ！
どうして私の周りには、ロクな奴がいないんだぁ！
『ぴきゅぃー』
嗚呼、君だけが私の癒しだわー。
ともかく、ここでボサッとしている場合じゃない。可哀想だから、シニョンの女の子も一緒に退避しよう。特別だぞん♪
《男なら、やっぱりゲッターだよなぁ！》
そう言って、ブラックゲッターと対峙するゲッター1（inチャラ男先生）。いや、知るかよ。
『ほざくなぁ！　「ゲッタートマホーク」！』
肩パットからトマホークを生成し、怒り心頭で襲い掛かるブラックゲッター。
『ヴォラァッ！』《ぬぅっ！》
ゲッター1も同じトマホークを手に取って、ブラックゲッターの袈裟斬りからの横薙ぎを防ぐ。
しかし、刃を交えるのに夢中になり過ぎたせいで、左腕のブレードを防げず、ト

マホークを切り払われる。これはチャンスとばかりに、ブラックゲッターはそのまま一刀両断にしようとしたが、

《「オープンゲット」！》

ゲッター1が三機の戦闘機（ゲットマシン）に分離し、致命的な一打を回避した。

そして、空中で再び合体し、ゲッター1に戻った。その手には二丁のマシンガンが。

『逃がすか！　「ゲッタービーム」！』

対するブラックゲッターはマントを翻しつつ、内部でゲッター線を乱反射させ、拡散式のゲッタービームとして放った。分散しているので威力は低下しているが、そもそもブラックゲッターはゲッターG並みのパワーがある為、普通に腹から撃つのと変わらない破壊力を有している。

《チィッ！》

そんな物を喰らったらアウトなので、ゲッター1はマシンガンで正確に撃ち抜く事で当たる前に暴発させて対抗した。流石チャラ男先生、ガンシューティングが上手過ぎる。

『グヴォオオオオッ！』《はぁあああああっ！》

さらに、空中を飛び交い、マシンガンやマグナムをガンガンぶっ放し、最後はハジキをかなぐり捨てて殴り合う。こうなると有利なのはスパイク&ブレードを持つブラックゲッターである。

《「オープンゲット」！　そして……ヴェッタァアアアヴィイイイム！》

『ヴォオオオオッ!?』

だが、分離機構を持たないブラックゲッターと違い、ゲッター1はオープンゲットからの不意打ちが出来る。背後に回り込んで、零距離からの腹式ゲッタービームで止めだ！

『このボクが、こんな所でぇえええええっ！』

そして、赤紫色のエネルギーを巻き散らしながら、ブラックゲッターは爆ぜた。ゲッター1、大勝利である。消える直前に何か迸ったように見えたが、気にしたら負けだろう。

《さ、早く帰るよ。じゃないと俺たち鳴女さんに刺身にされるよ》

「マジかぁ！」

アカン、早く帰らないと。

『ぴきゅー』『……』

「バイバイ。短い間だったけど、楽しかったよ」

私はゲッター1の掌から、こちらを寂しそうに見上げるノームとシニョン幼女に手を振った。大丈夫、また何時か会えるさ。目が覚めても、夢は消えないのだから。

◆◆◆◆◆◆

「――――って、思ってたんだけどなぁ！」

『ぴきー♪』『狭い部屋ねー』

ようやく目を覚ました零余子ちゃんが、何故か付いて来たトンガリ頭（手乗りサイズ）とシニョンの幼女（五歳児？）に文句を垂れている。出会った時と相対比が変わってるけど、仕様なのかな？

……やぁやぁ、俺だよ、チャラトミさんだよ。

三日振りだというのに元気一杯の零余子ちゃんには、本当に呆れちゃうね。普通、そんだけ寝たら逆に疲れると思うんだけど。

さらに、光の粒子が集まるように召喚された、夢の世界の住人たち。

零余子ちゃん曰く、トンガリ頭の方はノームという種族の一体らしく、シニョンの女の子については全く知らないが夢を実現する能力が有るんだとか。またとんでもない奴を引っ張ってきたねぇ。

ちなみに、あの継ぎ接ぎ野郎はヴィクター・フランケンシュタインと名乗ったそうだ。名無しの怪物が名実共に創造主の存在を食ってしまった、という所か。何れにしろ、夢の中で死んだのだから、現実でもくたばっているだろう。気にしても仕方あるまい。

まぁ、それはそれとして、

『ハーイ、こっち向いて。そこでアヘ顔ダブルピースな』

「いィィやァァあああっ！」「うーん、この……」

恒例の鳴女さんによる折檻のお時間である。今回は俺と零余子ちゃんによる男女盛り（裸）だ。彼女はともかく、俺にはご褒美でしか無いような気もするが、労ってくれているのだろうか。その素直じゃない所もまた可愛いなぁ。今度は鳴女さんとヤらせてね～♪

こうして、俺たちの夜は更けていった。零余子の悲痛な叫びを枕に、ね。

――――いや、別に彼女とヤってませんからね（オカズにはしたけど）？

◆◆◆◆◆◆

日本の何処か、闇の狭間にて。

『……おはよう、ヴィクター』

『おはよう、ベア子ちゃん♪』

二人の怪人が、目覚めの挨拶と抱擁を交わした。それはまるで、恋人同士のように……。

◆真（チェンジ!!）ゲッターロボ 世界最後の日

不朽の名作「ゲッターロボ」シリーズのＯＶＡ第一弾。

ゲッター線を餌に異形進化を繰り返す怪物インベーダーの魔の手から、地球を守れゲッター！

――――という感じの内容なのだが、監督のせいなのか何なのか、「何故イ

ンベーダーが……まるで意味が分からんぞ!?　俺に分かるように説明しろ！」→「そう、この時代は！　忍びが天下を取った江戸時代じゃあ！」みたいな状態であり、真面に説明する気が一切ない。

そもそも、第1話のタイトルが「復活!!　悪の要塞　早乙女研究所」である。たぶん、TV版から来た視聴者は精神が虚無る事だろう。真ドラゴンが登場する度に「出たなゲッタードラゴン！」って言いたくなるくらいに。

しかし、独特のセリフ回しとセル画とは思えない芸の細かさ、ブラックゲッターのカッコ良さに初代ゲッターチーム（開発者一同）のキャラクター、真ドラゴンの最終形態（笑）の姿など魅力的な所も満載で、根強い人気がある。根が深いと言うより、闇が深い感じだが。

???の無限なる新生活

一体誰視点なんでしょウネー。

やぁ、こんにちは。
ぼくはキッド。皆には、そう呼ばれていた。
少し前までは人間だったけど、今はただのマスコット。あのお婆さんの趣味らしいね、この姿。
しかし、ぼくは死んでしまった。あの地獄のような船の中で。ぼくは〝あの子〟の助けになれたのだろうか。
だが、全ては過ぎ去った出来事。結果を知る方法は、もう無い。
そして、ぼくは不思議な森で目を覚ました。枯れ木ばかりの不毛な大地。誰もいないし、何も無い。夢も希望も、何もかも。
しかし、〝あの人〟が来た瞬間、全てが変わった。枯れ木は潤い色付いて、草花

は歌い、動物は立って歩きだす。とても楽しそうな世界だった。

さらに、〝あの人〟が思い描く通りに風景や住人の姿が書き換わり、次々と騒動が巻き起こる。何て楽しい人なんだろうか。着物姿は誰かを思い出して嫌だけど、もっとずっと見ていたいと思ったんだ。

だが、何事にも別れがある。ちょっとアレな科学者と一悶着あった後、その時が来た。寂しそうな笑顔で手を振る〝あの人〟に、ぼくも手を振り返す。

……そして、ぼくは何故か〝あの人〟と居候する事になった。

何を言っているのかって？

うん、ぼくにも分からない。一度死んで、目を覚まして、また別の世界にやって来た。

ここは何処なんだろう？

あの船のゲストエリアのように和風だが、上も下も右も左もあべこべで、重力も一定ではない。誰も何もかもが、好き勝手に着地している。ある種の異空間みたいだけど、詳しい事はさっぱりだ。

まぁ、良いや。ぼくも結局は姿が変わったままだし、次があるのかも分からない。

それでも〝あの人〟と一緒なら、何処でだって楽しくやって行けるだろう。
というか、実際に面白い。今日はそんな〝あの人〟や、その周囲を取り巻く人々の様子を見てみようかと思う。
さっそく、まずは〝あの人〟――――零余子さん、なんだけど、
「えっと、印を消して……ぬっ!?　……へ、えへへ……わ、分かってるもんね！　どうせ、一回目は死ぬんでしょ!?　良い臀部しやがって……いくら決めポーズ取ったからって、私はぁあああっ!?　ちょ、いや、それはアスリート……ぱぁおおおおおん！　アニバーサリィーッ！」
《はっはっはっはっ！》《まぁ、最初は死ぬよね》《伝統だもんね》《ぴえんは超えられなかったか》《パワーアップしとったなぁ》《つーか、アニバーサリーって何だよ》《意味☆不明》
……何の記念日なんだろう？
相変わらずよく分らない人である。何時もゲームをしてるか歌ってるし、外に出る気配は微塵も無い。引き籠りかな？
あと、何で裸なのかなぁ。あの森ではちゃんと着てたのに。そういう趣味なんだ

ろうか。

しかし、何故か彼女の近くにいるとホッとするというか、親近感が湧くというか、魂に刻まれた何かを感じるというか……ともかく、零余子さんの傍に居たいという気持ちに嘘は無い。ホントだよ。服は着て欲しいけど。これでも男の子なんだよ、ぼくも。

ただこの人、言動や仕草が見た目よりずっと幼くて、思わずさんじゃなくて〝ちゃん〟付けしたくなっちゃうんだよねー。正直、デッカイ妹にしか見えないです、ハイ。間違いなく年上の筈なのに……。

そんな零余子さんだが、その人柄のおかげか周囲に色々な人がいる。

『あんたがたどこさ』『ひごさ』『ひごどこさ』『くまもとさ』『くまもとどこさ』『せんばさ』

仲良く鞠付きをしている二人は、丸子ちゃんと夢子(ゆめこ)ちゃん（↑本名ではないらしいよ）。丸子ちゃんは座敷童子で、夢子ちゃんはぼくと一緒に来た〝夢繰りの少女〟。どちらも着物姿で鞠遊びが好きなので、何時も二人で謡って踊っている。

傍らには姑獲鳥さんという奇麗な女性(ひと)が居て、ずっと丸子ちゃんたちを見守って

いる。とても慈愛に満ちた笑みを浮かべているけど、微妙に頬がヒク付いているのは何でだろう？

さて、次はちょっと〝外〟に出てみようか。

この異空間は「無限城」という名前らしく、特定の襖を開けると別の狭い部屋に行ける。その部屋は現実世界の一部――――曰く付きの格安アパートの一室、なんだとか。都会の駅近で家賃2万5千円って、逆に怖いよね。

「鳴女さん、シャワーまだかなぁ？」

このチャラチャラしている人が、ここの世帯主。零余子さんには「チャラ男先生」、他の皆には「チャラ男」とか「チャラトミ」とか呼ばれているけど、本名は知らない。無理して聞く気は無いから、別に良いけどね。

このチャラトミさんも、零余子さんと同じくゲームをしている事が多く、解説動画を撮っている場合もある。意外と生活力があるみたいで、家事全般を殆ど一人で熟している。これが「主夫」って奴だろうか。

『あ、ノームくん。お散歩かしら？』

おっと、藤花さんだ。

元は人間だったらしいけど、今はぼくと同じ手乗りサイズになっている。しかも、頭が人間で胴体は蜘蛛という、人面蜘蛛の状態。主な役目は害虫駆除で、毎日嫌そうに食べている。

そもそも、変えられた事自体が嫌みたいだけどね。気持ちは分かるけど、その内慣れるよ、きっと。

ちなみに、この子は基本的に部屋から出してはもらえない。無限城への立ち入りも禁止されている。無限城から出られない丸子ちゃんたちとは逆の扱いだ。

『ねぇねぇ、聞いてよ。この前さぁ……』

藤花ちゃんは、ぼくによく愚痴を言う。他の人だと告げ口されると思っているのだろう。ぼくがロクに喋れないのも都合が良いのかもしれない。内容が〝自分が如何に不幸で可哀想なのか〟って感じなので、同情は全く出来ないけど。蜘蛛に変えられたのは別として、後は自業自得じゃん。黙っとくけどね。

『……ふぅ、良い湯だった。あの入浴剤は当たりだな』

と、お風呂場の方から一つ目の鬼女が現れる。彼女が無限城の主にして、ここを牛耳っている鳴女さんである。ある意味全ての元凶と言えるかもしれない。

異空間を生み出す能力の他に、琵琶で音を操ったり、衝撃波を生み出したりと、かなり多彩なスキルを持っている。まだ見た事は無いけど、肉弾戦もかなり強いんだとか。

まさに全ての頂点って感じだ。仮にあのお婆さんと戦っても圧倒出来るだろう。それくらい凄いオーラを纏っている。

以上が零余子さんの周りにいる人々だ。家族とも友達とも言えないが、少なくとも仲間ではある、そんな間柄である。

ぼくは、零余子さんと家族になりたいなー。

『ぴきゅきゅ♪』

「あ、おかえり。一緒に動画でも見る？」

さぁ、今日も零余子さんと遊ぶぞ～♪

◆ランナウェイ・キッド

リトルナイトメアのＤＬＣ――――謂わば外伝作品の主人公。おそらくは

シックスと同じく、人間の子供。

何の特徴もない地味な男の子だが行動力はピカイチで、誰に言われるでもなく、船からの脱出を目指す。その度胸と（シックスとは違って）優しい性格からか、ノームにも人気。実は本編にも出演しており、シックスとも何度か遭遇している。

しかし、船の奥でモウの支配者：レディの秘密を知ってしまい……。

シックスが能動的トラウマの担当なら、こっちは受動的なトラウマ担当である。

可哀想過ぎるだろ、この子。

鳴女さん、久々に主人公する

※鳴女さんはこの物語の主人公デス。

やぁ、諸君。何時でも何処でもアルカイックスマイル（無）の鳴女さんだ。
何か久々に主人公をした気がするなぁ。最初はチャラトミと私だけだったのに、何時の間にか随分と賑やかになったものだ。主に零余子のせいで。
あいつ、色んな所でフラグを立てては魑魅魍魎を引っ張り込んで来るからな。幾らお仕置きしても治らないし、最近は天然物だと諦めている。結果的にプラスになっているから、別に良いんだけど。
『そんな事より、一狩り行こうぜ！』
「それはモンハン的な意味ですか？」
『食事的な意味に決まっているだろう』
「ですよねー」

言うまでも無かろうが。

さぁ、チャラトミｗｉｋｉの出番だぞ！

「――――――で、今晩のメニューは、どんな物をご所望で？」

こいつも大分染まって来たな。

だが、それで良い。順応性の高さこそ、生物として優れている証なのだから。

『そうだな……何かこう、ガツンと食いたい気分だ』

「深夜のドカ食いは太りますよ？」

『人間と一緒にするな。それに、私は元々夜行性だよ』

琵琶の演奏も、基本的に夜の街でやってたからな。そういう意味では、鬼になってからも生活スタイルは変わってないのかもしれない。殺す→弾くの間に〝食う〟が挟まっただけで。

「ドカ食いするとなると、ある程度の大きさか数が要るっスよね。うーん、河童は流石に居ないだろうし……」

チャラトミがうんうん唸っている。今までは一点物だったからね、しょうがないね。だけど、お前なら解決出来ると信じているぞ。

「……じゃあ、〝化け狸〟とかどうっスか？」

『狸か……』

仕事の関係上、臭みが有る物は食べる機会が殆ど無かったけど、逆に新規開拓するチャンスか？

とある漫画で読んで以来、ジビエ調理を食べてみたかったんだよねー。蛙とか蛇は微妙だけど、獣肉は普通に美味しそうだし。穴熊が意外とイケるんだっけ？

『でも、化け狸の本場って四国じゃなかったか？』

しかし、私が食べるのは妖狸であって、そこらの畜生ではない。有名処の偽汽車の狸はとっくに死んでるし、狸囃子や竹切狸も今はもう居ないだろう。それなら稲荷狐を探した方が早い気がするんだけど。

「所がどっこい、今は居るんですよ。……地下深くにね」

チャラトミが、ニヤリと笑って真下を指差した。

◆◆◆◆◆◆

チィーッス、皆のチャラトミさんだよ。

今日は久方振りの鳴女さんとデートだ。零余子ちゃんが来てから、猛烈な勢いで

住人が増えたからね。大半は無限城住まいで、残るは手乗りサイズだから、圧迫感は無いけどね。

ああ、そうそう。俺のプライベートスペースは相変わらずロフト下の物置なんだけど、隣の部屋との間に不自然なデッドスペースがある事が分かったから、拡張したんだ。広さにして四畳程。隙間なくセメントが敷き詰められていて、五体分くらいの人骨が出てきたけど、今更その程度じゃビビらないぜ。鳴女さんがふりかけにして食っちゃったし（主食はもちろん零余子印のステーキ）。

ちなみに、掘削作業は何と藤花ちゃんが担当した。彼女は口や糸疣から溶解液を分泌する能力があり、石灰質を吸収して内外の骨格を強化しているらしい。

そう、あの見た目で藤花ちゃんは内骨格を持っているのである。

だので、サイズに反して案外と重たいのだ。密度が高いのだろう。試しにトンカチで叩いたら「カン！」って音がしたし、相当硬いみたいだね。今なら拳銃程度なら弾き返せるんじゃなかろうか。

それでも藤花ちゃんと空間の相対比が大き過ぎるので、出来上がるまで一週間は掛かった。化学反応で物を溶かすには、相応量の液体が必要なんだよー。充分凄い

けどね。

そんなこんなで、俺にも真面な部屋が手に入った。窓も取り付けたし、床材や壁材も持ち寄ったから、少し狭い事を除けば文句の無い出来栄えである。元の居場所は物置兼出入口であり、藤花ちゃんの住処ともなっている。お疲れ様です。

……話を戻そう。

俺たちは今、東京都葛飾区亀有に在る「見性寺」という曹洞宗のお寺に来ている。ここには偽汽車の狸を祀る「貉塚（むじなづか）」があるのだが――――実はごく最近に、地下へ通じる空洞が出来た。

そう、八百八狸の築いた地下帝国への抜け道である。

筆頭の刑部狸（ぎょうぶだぬき）や妖怪獣の蛟龍（こうりゅう）は鬼太郎の活躍で完全に死滅したが、部下の化け狸たちは石化した状態（おそらく自分で化けた）で生き埋めにされている。

つまり、雑魚敵がわんさか今も閉じ込められているのだ。鳴女さんにとっては、まさに入れ食いである。……美味しいかどうかは別として。

『フン！』

という事で、鳴女さんに一発お願いした。人力で掘り起こすのは無理があるから

ね。指向性を持たせた音波で破砕して貰いましたとも。

あ、寺の住職や近隣住民は、姑獲鳥さんのお香を借りて深い眠りに着いてるから、バレる心配は無いよー。

『よし、穴も開いた事だし行くとするか』「了解でーす」

ポッカリと開いた奈落の洞穴に、俺と鳴女さんは何の躊躇も無く足を踏み入れた。狸が出ようが蛇が出ようが、本物の鬼である彼女に敵は居ない。

……この時は、そう思ってたんだけどねぇ。

◆刑部狸と八百八狸

ゲゲゲの鬼太郎に登場するオリジナルの狸軍団。

伝承の隠神刑部狸は義理と忠義に厚い漢なのだが、この刑部狸は第三帝国の某チョビヒゲ並みの野心家である。何せ目標が日本制圧と狸至上主義の独裁国家の設立であり、人間の女をメイドとして侍らせ、男はソーセージにして食ってしまおうと考えるなど、残虐非道な性格をしている。凄まじい神通力と妖術を持っていて、

鬼太郎も正面からは手も足も出なかった。
部下の化け狸たちは精々腕っぷしが強いくらいで取り立てて個性は無いが、知性と統率力に優れており、封印が解かれてからはあっという間に国会議事堂を制圧してしまった。
また、妖怪獣や大鯰と言った巨大で不死身の生物兵器まで有しており、彼らには核ミサイルも通じないので、人間では天地が引っくり返っても勝ち目がない。
まぁ、刑部狸たちを封印したのは天海　上人という高僧だったりするのだが。昔の日本には、錦田小十郎景竜みたいなバグ人間が沢山いたのだろう。

鳴女さん、狸料理に舌鼓を打つ

鳴女さんのあの目を見タラ、絶対に誰かは考えると思うンダ。

『うぬぬぬ……』『何だ、どうなった？』『刑部様が復活されたのか？』

おうおう、居るね居るねぇ、化け狸共が。寝起きなのか知らんけど、ちょいとボケが入っているようだな。

やぁやぁ、諸君。ディナーが良く似合う胸の大きいイイ女、鳴女さんだ。

さっそくだけど、頂くとしよう。

『えい』

『『『ぎゃあああああっ！』』』

一瞬で三匹の狸を頸チョンパして、まずは頭、それから胴体を丸齧りにする。

「お味の程は？」

『とりあえず、一杯やりたくなる味だな』

例えるなら、コンビニのおつまみって感じ。高級料亭の豪かさや、手料理の味わい深さは無いが、何となくお酒と一緒にカゴに入れたくなる、みたいな。

まぁ、不味くはない。取り立てて美味しくもないけど。ドカ食いするにはピッタリだが、途中で飽きそうではある。味付けを変える調味料が欲しい所だ。

「なら、零余子ちゃんでも呼びます？」

チャラトミが提案して来た。こいつから見ても零余子は食材扱いのようである。少し可哀想な気がしてきた。

『いや、今は配信中の筈だからよしておこう』

配信とは、謂わば最先端の創作活動。それを邪魔する程、私は野暮ではない。だので、零余子に限らず、配信の予定が入っている奴は連れ歩かないようにしている。今日はチャラトミが空いていたから引っ張って来ただけだ。便利だからってのもあるけど。

『その代わり冷蔵庫の零余子食品を使う』

「結局零余子ちゃん食うんじゃないスか」

べべんっと零余子印のワイン（血）とふりかけ（骨）を呼び寄せた私に、チャラ

トミが突っ込む。一部だから良いんだよ。ついでに藤花印のオイル（溶解液）も取り寄せておく。

これだけあれば、幾ら食べても飽きないでしょー。

「俺のは使わないんスか？」

『お前のは貴重品だからな』

それは最後に取っておく。大味な奴に使いたい所だな。

『……という訳でそーい』『ぐあああああっ！』』

そんな感じで、背後から飛び掛かって来た二匹の化け狸を処刑する。岩に化けて不意打ちするつもりだったんだろうが、妖気駄々洩れなんだよ。エコーロケーションもしているからバレバレである。

『おりゃー』『ぎょえええええっ！』

さらに、地面に同化してやり過ごそうとしていた化け狸を一匹、爪刀で一突きにする。妖気を隠すのは上手いが、臭いがなぁ。緊張で汗を流してたら意味ないと思うんだ。

『おのれぇ！』『貴様ぁ！』『死ねぇ！』

『お前らが死ね』

『『ずばぁあああっ！』』

そして、化け狸としてのアイデンティティーをかなぐり捨てて、真正面から襲って来た連中を音波でミンチ肉にした。血が零れないように中身だけシェイクしたった。

『そろそろ調理もしようか』

それから、キッチンと洞窟を繋げっぱなしにする事で、料理を出来るようにする。ハンバーグとソーセージでも作るとしよう。

「はいはい」

むろん、チャラトミがな！

うーむ、炊事洗濯掃除も出来るとか、こいつ本当に主夫だなぁ。あの駄目亭主とは比べ物にならない。色々と便利だし、本当に旦那にしちまうか？

……いや、結婚はもう良いかなー。あの頃は独り身だと面倒事が多かったからしただけだし。このままが一番だろう、お互いに。

「はい、零余子食品と藤花食品を組み合わせたケチャップにソース」

『おう、ご苦労だ』

……ちょっと迷って来たな。籍だけでも入れとく？

『つーか、お前は何を食べてんの？』

「狸肉入りの麻婆豆腐っスね。流石にそのまんまは無理なんで。臭みはあるけど、山椒を強めれば案外イケるっスよ。鳴女さんも食べます？」

そう言って、自分の分までしれっと作るチャラトミ。ちょっと覗いてみたら、元が化け狸とは思えない、実に美味しそうな見た目の麻婆豆腐が出来上がっていた。

『美味い……』

化け狸の妖気が溶け出し、零余子や藤花の血肉で煮込まれている為か、普通に食べられた。味覚や消化器官の改造を施して来た甲斐があるという物である。

――――どうしよう、マジで婿取りする？

旦那を掴むなら胃袋掴めって言うけど、逆もまた然りだな。ガッチリ鷲掴みされちゃってる気がする。こいつ、本気で料理上手いんだよ。人食い鬼の味覚に合わせて調理出来る人材なんて、早々居ないぞ。

うん、少なくとも食材候補からは外すかな。食べてしまうには勿体無い。

『ふぅ……』

「賢者タイム？」

『阿保か。まだまだ満足出来ねぇよ』

美味しいチャラトミ食堂の料理を平らげ、次の食材を探す。まだ腹二分目くらいだからな。もっと食べるぞ～♪

『こ、こいつ……！』『何て残虐なの！』『化け物めぇ！』

怯え、隠れ、逃げ惑う雑魚共をどんどん食材に変えて進んだ先の広間に、色物な狸が三匹居た。タキシード、着物、法被と褌って、どういう組み合わせなんだよ。

つーか、散々人間相手に好き勝手やってたお前らが言うな。

「おっ、こいつら八百八狸の幹部三兄弟っスよ。タキシード姿が「団一郎」、着物姿が「団二郎」、法被に褌が「団三郎」っス。かの有名な「団三郎狸」の子孫ですね」

さらに、ここに来てチャラトミｗｉｋｉにより知りたくもない事実が判明。一匹オカマなのかよ……食欲無くすなぁ。

『うぉおおおっ、死ねぇ！』『ウザい』

と、団一郎が刃仕込みのシルクハットを投擲して来たので、普通に切り捨てた。

こいつはクセェ、ゲロ以下の臭いがプンプンするぜ。
『キェエエエッ！』『うるぁあああっ！』
続いて、団二郎が簪と鉈で、団三郎が棍棒で殴り掛かって来る。
『フン、トゥッ！』
『『ギャォオオッ！』』
もちろん、襖ラッシュで細切れにしてやった。弱いなぁ。これで幹部とか笑える。
『お前もだ』
『させるかぁ！』
ただし、団一郎はそこそこやるらしく、身体を膨張させて巨大化した上、一部を金属に変換する事で刃を防いだ。
『食らいやがれぇえええっ！』
そして、場所が場所なのか、小振りな機関車に化けて突進して来た。
なるほど、そんな使い方もあるのか。幅を利かせる事で襖に取り込まれるのを防ぐとは、中々考えてるじゃないか。
『お前が食らえ。今必殺の目からビーム！』『ごばぁあああっ！』

だが、無意味だ。私の目から放たれた破壊光線によって、団一郎の偽汽車は木端微塵になった。

……実際はビームではなく、体内電気の電磁力による高温高圧で体液を飛ばしているので、正確にはレールガンなのだが、何時かは本当のビームを撃ちたいと思っている。

さてさて、たぶんこれで化け狸は品切れだろうし、チャラトミに料理をさせて

『ガァヴォオオオッ！』

と、団一郎のミンチが散らばる地面から、鎧武者のような怪人が現れた。

◆偽汽車

鉄道が普及した明治時代に全国区で発生した怪奇現象。棲み処を荒らされた動物妖怪たちが引き起こした物で、狐や狢の場合もあるが、殆どは狸の仕業である。

見た目こそ汽車だが、所詮は似せただけの虚仮威しなので、勇気を出した運転手

により轢殺される個体が多かった。命を賭した彼らの抵抗も、人間の科学力には勝てなかったのだ。

ちなみに団一郎の偽汽車は、小さいが側だけはきちんと金属に変えている（血中の鉄分を使用している）為、相応の威力があるものの、鬼太郎の体内電気をパクって目からビームを習得した鳴女さんの敵ではなかった。

鳴女さん、強敵に遭う

鳴女さん、今回は割とピンチだッタリ。

『……何だこいつ？』

非常にコメントし難い。見た目はさっきの通りなのだが、真紅の鎧を着た武者と言うより、鎧自体が動き出したように見える。着地の衝撃からして、中身はギッチギチなのだろうが……。

こいつは一体何だ？

「おそらく、「槐の邪神」ですね」

すると、チャラトミｗｉｋｉから情報が。「邪神」ってお前、何それ大物っぽいんですけど。

『どんな妖怪なんだ？』

「主に槐の根元にある祠に棲んでいる妖怪で、通りすがる人間から有り金を巻き上

げる習性があるっス」

『ただのチンピラじゃねぇか』

滅茶苦茶に小物だった。

つーか、妖怪のお前が人様の金を巻き上げて何に使うんだよ。

「ちなみに、正体は育ち過ぎたカブトムシです」

『面影が一つも無いだろ』

いや、まぁ細かい部分に面影は有るけどさ、そういう問題じゃないと思うんだよ。兜しか合ってないじゃん。

「いやー、でも侮れないっスよ。見た目通りに鋼鉄の身体を持っていて、金属を吸収して強化する能力がありますから。あと火を噴けます」

『それは生物なのか？　器物の間違いじゃないのか？』

しかし、チャラトミの言う通り、油断出来ない相手なのは確かである。

おそらく、昔は集めた銭を吸収していたのだろうが、今はもっと強力な合金がそこら中にある。それらを吸収・強化しているのだとしたら……。

◆『分類及び種族名称：鉄鋼愧（てっこうき）＝槐の邪神』

◆『弱点：左目の眼帯部』

というか、何で火を噴くんだ貴様。金属と関係ないやろ。

『グヴァオオオッ！』『ズワォ!?』

クソッ、マジで噴いて来やがった。火炎放射というより、火山の噴火に近い爆発力だ。アレか、内部に溶けた金属でも仕込んでやがるのか？

『ゴァアアアッ！』『速いっ!?』

さらに、鈍重な見た目に反して、身体をスピンさせて襲い掛かって来た。忍者ロボみたいな事しやがって。刀を高速回転させるとか、普通に危ないわ。

うーむ、食べる所が無い奴を相手にするのは嫌だが、歯向かうというなら仕方ない。ボッコボコにして進ぜよう。

『ドラァッ！』

という事で、私は赤紫色の妖気を纏った鉄拳を叩き込んだのだが、

――――ゴシャッ！

『……！』

嫌な音がして、拳が砕け、腕の骨が折れた。

『一本くらい何よ！』

残った方で爪刀を形成し、斬り付けたものの、こちらもパキンと砕け散る。

……久々だよ、こんな痛みはぁ！

『ぶっ殺してやる！』『ゴヴァアアォッ！』

そして、完全にトサカに来た私は、腕を再生しつつ、槐の邪神に襲い掛かった。

◆◆◆◆◆◆◆

やぁ、俺だよ、チャラトミさんだよ……と、挨拶をしている場合じゃない。

ヤバいヤバいヤバい、こいつはヤバいぞ！

まさか、鳴女さんの拳が砕かれるとは思わなかった。分かっていた事とは言え、痛いのが嫌だからって防御力に極振りし過ぎだろ。あの槐の邪神、ニューZくらいの超合金で出来てそうである。

本来は伝承通りの小物にして俗物妖怪なのだが、最近の金属事情のせいで、とんでもない強敵になってしまっている。貫通ダメージも受けていない事を鑑みるに、衝撃を外に逃がす能力までありそうだ。

さらに、ファイヤーと言うよりボルケーノな火炎攻撃。炎が赤いので温度はバー

ナーよりも低そうだが、液体は気体よりも熱を伝え易いので、こっちの方が厄介である。半分はプラズマ化している事を考えても非常に危険だ。

だが、一番の脅威はその重量だろう。ゴリラ並みのパワーを持つ鳴女さんが殴っても微動だにしなかった事から、相当な重さに違いない。相手が直立二足歩行をする場合、かなりのハンデになる。

『ガァヴォオオオッ！』『ぐっ……！』

と、言うが早いか、槐の邪神が体当たりをかます。鳴女さんもガードするが、耐え切れずに吹っ飛ばされる。骨の折れる音や袋が破裂する音が聞こえた。衝撃が貫通して中身がかき混ぜられたのだろう。

いやいやいや、本気で強敵だぞ、こいつ。ただのチンピラ妖怪の癖にぃーっ！

『ゴヴァアアアッ！』『ぐぁっ！』

そして、再びのボルケーノ（またの名をカブトムシファイヤー）。鳴女さんの半身が焼け落ちた。燃えるだけでなく纏わり付くの、本当に厄介だなぁ！

『ガァヴォオオオッ！』『……っ！』

さらに、間髪入れず大回転魔弾を繰り出す。再生途中で攻撃されたので、鳴女さ

んはロクに耐えられず、細切れにされた。明らかにダメージレースで負けている。鳴女さんにも限界はあるし、このままでは――――クソッ、マズいぞ……これは本当に、ひょっとしてしまうのか!?

ヤバいヤバいヤバい、どうする、どうすれば良い……!?

「――――そうだ！」

溶岩を噴出している事を鑑みるに、外部装甲の耐熱性は相当な物だが、熱に強いからと言って化学反応にも強いとは限らない。

今、俺の手元には藤花ちゃんの溶解液がある。効くかどうかは不明だが、少なくともセメントは泡を立てて溶けるぐらいだから、何かしらの反応はあるだろう。

鳴女さんがピンチなんだ、今使わずして何時使う！

「頼む……頼むから通じてくれ！」

いや、効かなかったら切れるからな、大マジで！

「よし……っ！」

狙うは左目の眼帯らしき部分。鳴女さんの動きに対して真っ先に反応しているのがあそこだから、おそらくはセンサーの役割を果たしていると思われる。精密な場

所はそのまま弱点となり得る筈である。
「おらぁあああっ！」
俺は投げた。鳴女さんを甚振る事に夢中となっている、槐の邪神目掛けて。
『ガァヴォァッ!?』
すると、藤花印のオイル瓶は見事に槐の邪神の眼帯部にヒット。大ダメージという訳ではなさそうだが、大きな隙は生み出せた。
しかし、実際は悪手だったのかもしれない。何せ、槐の邪神が怒り心頭な様子で、俺を睨み付けて来たのだから。
あっ……これはマズいんじゃ――――――、
『グァヴォルァアアアアッ！』
槐の邪神が三度のボルケーノを噴射する。小規模な火砕流が、俺目掛けて迫って来た。
――――――あれ？　これ……俺……死、

◆槐の邪神

名前通り、槐の木の近くに潜んでいる邪神。信仰を失った社や祠を乗っ取り、あたかも自分が主のように振舞う横着者。

そして、通りすがりの旅人からカツアゲを行う。もうこの時点で、こいつの小物振りが分かるだろう。正体は甲虫系の虫けらだし。

伝承ではマジもんの天罰覿面を喰らって死んでしまう雑魚妖怪だが、金属を吸収する能力が有る為、様々なレアメタルや合金に溢れる現代社会に適応し、非常に厄介な存在となっている。あと、何故か火を噴く。虫の癖に。

ちなみに、鳴女さんたちの出遭った槐の邪神は、超合金ニューZ級の装甲と溶岩魔人クラスの攻撃力、ソール11遊星主の忍者並みのスピードを持つトンデモ個体であり、物理攻撃は一切受け付けず、特殊攻撃に対しても耐性が高い。

鳴女さん、思い知る

鳴女さんは総統閣下していマス。

『ガルヴァアッ！』

「汚物は消毒した！」とばかりに、槐の邪神が嬉しそうに雄叫びを上げる。

『……』

そして、私の足元に転がって来た、この黒焦げの物は何だ？

周りを見渡してみても、チャラトミは居ない。何処に行った？

――――いや、分かっている。理解はしているんだ。ただの人間が、例え上手く反応したとしても、掠っただけで火達磨になる事ぐらい、私にも分かる。

『……ッ！』

もちろん、無惨様のように血を与えてみても、結果は同じ。動かないし、起き上がりもしない。

だが、理解と納得は別物である。

『……おい』

何を勝手に殺している？

私の物は全部私の物だ。それを奪って、どうなるかも分からんのか、貴様は。

『ゴヴァアヴゥ！』

しかし、この鉄鉱石頭は、相も変わらず私を殺す事しか考えていない。異常なまでの執着心である。元が守銭奴だからな。狙った獲物は絶対に逃がさないのだろう。

『ハーッ……！』

もういい、分かった。結局、お前も全部欲しいんだろう？

――――ならば、死ねぇっ！

『ドラララララァッ！』

私は妖気を纏った拳を連打した。どれだけ砕け、へしゃげようと構わない。一発殴って再生する間に、進化し続けてやる！

『グヴゥゥウウッ！』『チッ……！』

だが、やはり通じない。衝撃も妖気の貫通弾も、全て足元から地面へ逃がされている。

『ゴヴァアアッ！』

さらに、再び大回転魔弾を仕掛けて来る槐の邪神。

『オラァッ！』『ガヴォッ!?』

私は強化した動体視力で、刀の横面を殴り付ける。槐の邪神が空中で一瞬だけ制止した。

……やはりな。足から逃がしてるって事は、接地してないと効果が無いと言っているような物だ。

つまり、奴を空中に止めた状態で拳を叩き込めば、貫通ダメージを与えられる。尤も、それが決定打になるとは限らないが。

『ガヴァアアォッ！』

すると、大回転魔弾は無意味と悟ったか、ボルケーノで視界を塞ぎ、体当たりして来た。耐熱性と防御力任せのゴリ押しだが、私にとっては充分に脅威である。

何せ、幾ら耐熱性を上げても、冷えた溶岩に拘束されて動けなくなるからな！

これなら、焼かれる方がマシだ、チクショウが！

『グァヴォルァアアアッ！』『……！』

完全に身動きが取れなくなった私に、赤熱化した槐の邪神が猛然と迫る。この一撃でケリを付けるつもりらしい。

――――ちくしょう……！

と、その時。

《グルァアアアッ！》

いよいよ年貢の納め時かと諦め掛けた私の前に真っ黒な何かが現れ、物凄い力で槐の邪神を食い止めた。

それは、漆黒の粘液が人の形を成した、怪物だった。体格は筋骨隆々の3メートル。吊り上がった昆虫のような白い眼に、鋭い牙が並ぶ裂けた口など、その顔立ちは怪獣染みている。胸元の蜘蛛のようなマークが印象的だ。

いや……あの、何と言うかね？

『……チャラトミか!?』

《We are VENOM！》

『何でだよ！』

《冗談ですよ、鳴女さん》

――――この声、間違いない。中身はチャラトミである。

『何でヴェノムなんだよ！』

《ほら、男はやっぱりダークヒーローに憧れるもんなんスよ》

まるで意味が分からんぞ!?

《鳴女さん、そんな事より、今は！》『ああっ！』

詳しい事は後で聞くとして、今は害虫退治が優先だな！

《ギャオオオオオッ！》『グァヴォォォッ!?』

ヴェノム（チャラトミ）が渾身の力で槐の邪神を持ち上げる。所謂パワーリフトだ。どんな筋力してるんだ、お前は。

『ハァアアアアッ！』

そして、すかさず私が拳を叩き込む。一発ではない、五発だ。同じ場所へ殆ど同時に連打を当てる事で、分厚い鎧の奥底まで妖気を浸透させ、爆裂させるのである。

『グォレンダァアアアアッ！』『グルォォオッ！』

今の今まで微動だにしなかった槐の邪神が、面白いくらいに吹っ飛び、岩盤にめり込む。よく見ると、拳の当たった胸部の装甲が凹んでいた。今度こそダメージ判定があったのだ。

しかし、それでも槐の邪神は倒れない。というか、あれだけやって凹むだけとか、ふざけてやがる。

そんな貴様には、こいつをプレゼントだ！

『死ねぇっ！』

私の目からビームが槐の邪神の眼帯部に直撃した。液体の伝導率の高さは、お前が証明済みだからなぁ！

『ガルァヴォオオオッ！』

《鳴女さん！》『ドワォ!?』

だが、顔半分をグズグズに溶かされたのにも関わらず、槐の邪神は弱るどころか火砕流を吐いて反撃して来た。ダメージよりも優先すべき殺意があるらしい。チャラトミが何十枚もの粘膜の盾を張ってくれなければ、危なかった。

……表面を焼くだけでは駄目だ。分子レベルで崩壊させてやる！

『ドラァッ！』

私は体液から酸素を分離、極限まで微小化し、それを粒子ビームとして発射した。

マイクロ化した酸素は接触した分子の結合を破壊し、その後元の大きさに戻りつつオゾンとなって周囲の全てを腐食させる。

これには、さしもの槐の邪神も耐性は持ちようが無く、胸部装甲が完全に融解した。

『……ォオオォオオッ！』

《このっ！》『ぐぅ……！』

それでも、槐の邪神は反撃する。私が死ぬまで、殺すのを止めない。

『いい加減しつこいぞ！　そろそろ死ねよやぁっ！』

しかし、これ以上は耐えられまい。トドメだぁ！

『ガァヴォォルァアアア……ォォ……ォ……！』

最後の破壊光線が直撃し……ようやく、槐の邪神は倒れた。

さらに、グズグズと溶け崩れ、完全に沈黙する。しぶと過ぎるぞ、この野郎……！

『――――――ハァッ！』

息が上がり、眩暈もする。気持ち悪い。妖気を使い過ぎた。体液もかなり減っている。このままではマズい。

早く、何か食べないと……！

――――――べべん！

私は最後の力を振り絞って、無限城に転移した。

「ちょ……ちょっと、何事よ!?」『ぴきゃー！』

配信を終えたらしい零余子（とノーム）が駆け寄って来た。おーし、丁度良いぞぉ！

『零余子ぉ！』

「な、何よ!?」

『食わせろぉおおお！』

「何でだぁあああああ！」

《俺にもだぁあああ！》

「何でだぁあああああ!?」

そして、「つーか、誰だぁ!?」という言葉を残して、零余子の頭以外の全てが、私とチャラトミの腹に収まりましたとさ。チャンチャン♪

◆ヴェノム

宇宙から来た寄生物体「シンビオート」が、人間と一体化した状態の名称。最初の宿主がスパイダーマンだった事、次の宿主がボディービルをやっていた事が重なり、〝漆黒でマッシブなスパイダーマン風の化け物〟という容姿が基本形態となる。

シンビオートが蠢く粘菌状の生物な為、割と自由に姿を変えられる。もちろん、蜘蛛の巣も張れる。スパイダーマン涙目である。

作品によって出自がハッキリしないが、その辺はご愛敬。大人の都合って奴だ。

初めこそ単なる悪役だったが、後々ダークヒーローとしてキャラクターを確立させ、絶大な人気を誇るようになる。

鳴女さん、夜の一時

夏ももうすぐ終わりでスネー。

やぁ、諸君。芹沢博士に真っ向から喧嘩を売りに行くスタイルの、鳴女さんだ。

前回は深夜のコンビニ飯を買いに行くノリで化け狸料理を食べに穴場（洞窟）へ向かったのだが、通りすがりのチンピラ妖怪のせいで、まさかの大ピンチに陥ってしまった。おかげで色々成長出来たから結果オーライだけど、そういう事じゃないんだなぁ……。

つーかさ、

『結局、お前は何処でどうやってシンビオートと一体化して来たんだ？』

私はカルビを焼きながら、チャラトミ（ヴェノム）に尋ねた。ジュージュー。

《別にシンビオートは見付けてませんよ。そもそも、あの時は〝俺たち〟とか言っちゃいましたけど、別にもう一人の俺とかは居ません。単にヴェノムに変身する能力

を得ただけです》

チャラトミがハツを引っくり返しつつ答える。ジュワジュワ。

『どういう事だ？』

《端的に言ってしまうなら、〝同じ釜の飯を食い過ぎた〟って感じですね》

『同じ釜の飯……ああ、そういう事か』

何となーく分かった。

おっと、ホルモンも育てておこう。内臓系は時間が掛かるからね。パチパチ。

『つまり、それがお前の血鬼術なんだな？』

ようするに、そういう事である。鬼殺隊にも似たような奴が居たしな。

よし、カルビは回収して、ホルモンの様子を見つつ、次はハラミでも焼くか。ジュワァアッ！

《はい。俺もちょくちょく零余子食品や藤花オイルを使った料理を食べてましたし、鳴女さんの血を貰ったのがトリガーとなって、能力が固定化したんでしょう。言うなれば、〝不死身の鬼蜘蛛〟って所っスかね？》

ハツを皿に乗せ、新たにランプを焼き始めるチャラトミ。パチチチチ。

そう、実はこいつ、こっそりとカニバリズムをやらかしている。〝私と同じ物を食べたい〟という願いからしたらしいが、思い切った事をしたものだ。零余子肉は美味しいが、食い過ぎると身体が乗っ取られるので、かなり危険な行為である。藤花オイルに関しても、配分を間違えると硫酸を一気飲みするような物であり、普通はやらない。

だが、チャラトミは大分イカレている。私のような悪鬼羅刹とここまで上手く付き合って来れるような奴が、正気な訳がないだろう。初めから人間性を疑うような発言ばかりしていたが、私と関係を持つ事で、より悪化したようだ。

さらに、前回の死に際で私の血を受け入れた結果、今まで溜まっていた零余子や藤花の血肉と反応して一つとなり、チャラトミを守る盾としての機能を果たすようになった。彼の不足を補う能力と言ってもいい。

詳細は本人にも分からないみたいだけど。

つまり、ヴェノムを構成する黒い流動体はあくまで彼の一部であり、シンビオートのような意思がある訳ではなく、むしろ血鬼術に近い物である。もしくは「パワーを持った像（ヴィジョン）」だ。

しかし、シンビオートと同じで燃費が悪く、腹が空くとチャラトミ自身を侵食し始めるらしいので、完全な同一体とも言い難い。ある程度コントロールの利く癌細胞みたいな感じだろうか。その内マジで「俺たち」になっちゃうかも。

……内心、零余子の事を散々〝動く癌細胞〟呼ばわりしていたこいつが、自分の癌細胞で身を守るようになるとは、何とも皮肉である。文字通りに。

《別に、俺だけを守る為じゃないっスよ》

『そうかい』

嬉しい事を言ってくれるね。

『まぁ、絶好調なようで何より……あ、それ焦げるぞ』

《おっと、あざ～す》

「――――――って、コラァッ！」

《『おや、生首が何か言っているぞ』》

「お前らがそうしたんだろうがーっ！」

随分と元気が良いねぇ、何か良い事でもあったのかい？

「もういい加減にしてよ。本人の目の前で焼肉するとか、気が狂ってるわよ」

《『今更？』》
「今更だろうと何だろうと、何回だって言ってやるわよ！」
もぐもぐもぐもぐ。
「言ってる傍から食うな！」
《『あむほまも』》
「呑み込んでから言えや！」
まったく、しょうがないなぁ。通算で８零余子は食べたから、そろそろ勘弁してやるか。
『……そう言えば、槐の邪神は何であんな所に居たんだろうな？』
食器を重ねつつ、チャラトミに聞いてみる。
《単に休眠してたんじゃないスかね？　甲虫が居るなら、何処にでも発生し得るのが槐の邪神ですから》
触手を器用に使い、食器と七輪を全部持ち上げながら、チャラトミが答えた。
……嫌だなぁ、その設定。あんなのがそこら中に眠ってるとか、マジで御免被るんだけど。人殺しは大好きだが、自分が殺されるのは絶対にお断りだ。

やっぱり、まだまだ力不足だな、私も。前回の戦いで実感出来た。これからは破壊力に焦点を当てて強化するとしよう。食べる妖怪も多少は吟味した方が良いかもしれない。あんまり厳密にする気は無いけどね。

力不足と言えば、鬼太郎は今頃は何してるんだろう。案外、強化合宿とかしてたりして。

『まぁいいさ。食事も済んだし、寝るとしようか』

《そうっスねー》

ちなみに、お風呂にはもう入りました。今回の焼肉は風呂上りのおつまみです(笑)。

「……まったく、好き勝手にして」『ぴきゃー』

と、達磨モードに再生した零余子がブツブツと呟く。そんな彼女を必死に慰めているノームが何か可愛い。

だが、私は待ったを掛ける。

『いや、お前は来なくていい。ノームと遊んでろ。もしくは一緒にお寝んねしてな』

《……》

夜はまだまだこれからである。

◆無限城

上下左右があべこべな異空間。鳴女の旋律に合わせて自在に姿を変え、襖により現実世界と行き来する。この空間は鳴女の力その物であり、彼女が死ぬと諸共消える運命である。

本来の殺傷力は高くないが、今作では鳴女が色々と超進化している為、刃仕込みの襖に襲われたり、刺出しの壁に迫られたりと、イ〇ディー・ジョーンズもビックリな攻撃力を有している。

鬼太郎の家族会議

一方その頃、鬼太郎さんハ……。

ここはゲゲゲの森。

そして、その奥深くにある、立ち枯れた木の上に建てられた、茅葺屋根の家。通称「ゲゲゲハウス」。

もちろん、鬼太郎と目玉おやじの住処である事は間違いないのだが、今ここにはそれ以外の妖怪――――猫娘、砂掛け婆、児泣き爺、一反木綿など、所謂「鬼太郎ファミリー」が一堂に会している。ぬりかべはデカ過ぎるし重たいので、窓の外から参加。何故かねずみ男もいるが、気にしてはいけない。

さらに、特別ゲストの真名も交えた、報告会及び対策会議の始まりだ。

『さて、今回皆に集まって貰ったのは、他でもない……例の琵琶女についてじゃ』

むろん、議題の中心は琵琶の女についてである。

素性は一切不明だが、高い知性と摩訶不思議な妖術を使い、正面からでも鬼太郎を戦闘不能に出来る凄まじい怪力を誇る、恐ろしい妖怪だ。

『急な呼び出しじゃったから、詳しい話は分からんのだが、そこまでの相手だったのかの？』

と、まずは砂掛け婆が話を振る。大抵の場合、目玉のおやじや鬼太郎が議題を上げ、砂掛け婆が議会を進めるのが通例になっている。今回もそんな出だしだった。

『……正直、単純な破壊力だけなら、以前戦った妖怪獣の方が上だ』

妖怪獣……否、蛟龍（こうりゅう）とは、狗神刑部狸が率いる八百八狸が使役する大妖怪の事であり、ビルをも見下ろす巨体と全てを薙ぎ払う強大な妖術を使うのが特徴である。刑部狸たちは蛟龍が持つ凄まじい力を利用する事で四国全土をテリトリーとし、遂には日本全土を乗っ取ろうと画策、行動を起こした。

それ自体は鬼太郎たちの活躍で鎮圧されたが、力の根源である要石が人間にしか破壊不可能だったのも相俟って、真名無しでは勝ちえない壮絶な戦いになったものだ。

なので、被害を鑑みれば、琵琶の女が齎した物は無いに等しく、地力に関しても

蛟龍の方が断然上である。大きさが違うから当たり前なのだが。

『でも、危険性は琵琶の女の方が遥かに高い』

しかし、鬼太郎は蛟龍よりも琵琶女の方が危険だと説く。

琵琶の女は蛟龍のようなどうしようもなさは無い。大きさも人間程度で、攻撃が通じない訳でもない。少なくとも指鉄砲は効き目がありそうだった。防ぐのではなく避けたという時点で、有効打になり得ると言っているような物だからだ。通じるとも言ってないけど。

だが、持っている能力はどれも厄介であり、おまけに体術まで会得している。力が及ばずとも、技術で往なされてしまうのだ。真面な対人戦の経験が殆どない鬼太郎やその仲間たちでは、肉弾戦に持ち込んだとしても軽くあしらわれてしまうだろう。

これが今までの十把一絡げの妖怪たちとは一線を画す部分である。

『それに、奴は……異常だ。妖怪らしく人間を襲うでもなく、かと言って人間らしいとも言い難い。まなの言葉を借りる訳じゃないが、あいつは「悪魔」だ』

あそこまで命を何とも思っていない奴はそうそういない。真名が震え上がって完

全に拒絶するなど、はっきり言って異常事態だ。
それ程までに、あの琵琶女は恐ろしい存在なのである。
『たぶん、今のままじゃ、誰が挑んでも勝てない』
『むぅ……』
鬼太郎の言葉に、一同が押し黙る。何時もお手上げする真名でさえ、今回は何も言えなかった。それはそうだろう。猫娘が一撃で糸の切れたマリオネットにされ、駆け付けた鬼太郎でさえ中身をシェイクされて倒れ伏した相手なのだから。
『……って言うかよぉ、お前ら何であいつの事を「琵琶の女」って言ってんの？「鳴女」ってきちんとした名前があるんだから、そっちで呼べば良いだろ。色々と紛らわしいし』
すると、そこでねずみ男が何でもないように驚きの発言をした。
『何じゃ、ねずみ男！　あやつの知り合いだったのか!?』
『この裏切り者！　何時もの事だけど！』『あっぶな！』
もちろん、無用な混乱を招いたのは言うまでもない。目玉のおやじが憤慨し、すっかり元気になった猫娘が八つ裂きにしようと襲い掛かった。

『ちげぇよ！　……ああ、そうか。お前ら動画なんて見ないもんな』
『動画じゃと？』
『そうそう。鳴女って奴、ネット上じゃ結構な有名人だぜ？　つーか、それこそ猫娘やまなちゃんが知ってるもんだと思ってたけど……？』
『「あっ……！」』
と、ねずみ男の指摘で猫娘と真名がハッとする。
『どういう事なんだい、猫娘、まな？』
「あー、えっとねぇ……」『すっかり忘れてたけど、あの鳴女とかいう女、ネットに動画を投稿してるのよ。ほら、これ見て』
そう言って、猫娘は自分のスマフォを操作し、ウーチュブのとある動画チャンネルを開いた。
『……っ、間違いない、こいつだ！』
そこには、実にイキイキと琵琶を奏でる鳴女の姿があった。他にも可愛らしい少女や座敷童子と思しき幼女とコラボしている動画もある。かなり手広くやっているようだ。

『――――――いや、お前ら情報に疎過ぎるだろ。こんな目立つ奴に気付かなかったのかぁ？』

『『『『『……』』』』』『ぬり～』

ねずみ男がジト目で見ると、全員がサッと顔を逸らした。確かに彼の言う通りだ。知恵袋の目玉のおやじも、文明の利器が相手では役に立たない。

『……う～む、あまり実況動画は見ないからのぅ』『父さん!?』

否、単に動画の視聴傾向が違うだけだった。意外とミーハーなんですよ、この目玉人。

『と、ともかく、この鳴女に対抗するには、今の僕ではあまりに力不足だ。具体的に言うと、技量が圧倒的に不足している。そこでなんだけど――――――』

鬼太郎がコホンと咳払いをして、弛緩した空気を戻しつつ、新たな提案を上げる。

『し、正気か、鬼太郎!?』『そんな事をしたら、このゲゲゲの森にも災いを齎すぞ!?』『何考えてんのよ、鬼太郎！』

だが、その内容は他の皆には受け入れ難い物だった。口々に鬼太郎へ文句を垂れる面々。

『もう決めた事だ』

しかし、鬼太郎の意思は固かった。こうなったら、もう誰にも止められない。

『……当てはあんのかよ？　〝出す方〟じゃなくて、〝止める方〟だぞ？』

すると、唯一文句一つなく聞いていたねずみ男が、片目を瞑り、如何にも呆れたような顔で尋ねた。

『それは――――』

言い淀む鬼太郎。こういう微妙に頭の足りない所が、彼のアイデンティティーである。

『しょうがねえなぁ。……ギャラは高いぜぇ？』

そして、それを上手く悪知恵で補ってくれるのが、ねずみ男という半妖だ。ビビビっと髭を揺らしつつ電話を掛け始める。

『……ありがとう、ねずみ男』

そんな彼の姿に、鬼太郎は久方振りに軟らかい笑みを浮かべた。やはり、持つべき物は友達である。

◆ゲゲゲの森

鬼太郎とその仲間たちが住まう、「隠れ里」の一種。人間と仲が良い輩が多い為か、電波が届いたり、横丁があったりする。基本的に人間は立ち入れないが、気に入られれば招かれる事も。

そして、最奥の泉の畔に、我らが鬼太郎の家「ゲゲゲハウス」が立っている。

流されたり、焼かれたり、戦わされたりと、割と不憫な目に遭う事も多いが、ゲゲゲハウスは今日も静かに佇んでいる。

ちなみに、あの世とこの世の境にある為か、住民の機嫌を損ねると地獄流しにされるので注意。

鬼太郎の武者修行①

今回は懐かしい連中が出て来まスヨー。

ここは日本の何処か。断崖絶壁の谷底にポッカリと存在する、外界から隔絶された陸の孤島。常に菖蒲の花が咲き乱れる、この世とは思えない景色が広がっている。そんな浮世離れした場所に、幾つかの影があった。一つは鬼太郎。もう一つはねずみ男。

『……どういうつもりだ、鬼太郎？』『オレたちの封印を解くなんて、どういう風の吹き回しだぁ？』『……』

それに対峙するは、大小三人の妖怪たち。

如何にも不機嫌な顔で睨み付けるのは、「ラクシャサ」。青く不利乱れた髪の毛と巨大な頭が特徴で、そこから丸太のように頑強な手足が生えている、サイコジ〇ニーみたいな体形の妖怪だ。インド出身なので、額に宝石、手足に金の輪、腰に赤

い布という僧侶染みた格好をしている。大中小の中を担当。

鬼の形相ながら何処か愛嬌もある赤ら顔は、「天邪鬼」。強靭な赤い皮膚と山のように盛り上がった筋肉が自慢の怪力無双であり、５メートルはあろうかという巨体を誇る、角の無い鬼である。腰蓑一着だけだが、彼の筋力の前では下手な装備は枷にしかならないだろう。大中小の大を担当。

特に何のコメントもしなかったのは、「手の目」。目を閉じた黒髪の少年という風貌だが、掌にギョロッとした目玉があるのが特徴だ。恰好も数珠を下げた旅の僧と言った感じで、かなり地味である。大中小の小を担当。

彼らは皆、過去に一度は鬼太郎と対峙し、封印された者たちだ。つまりは敵である。

だからこそ、分からない。こんな地獄のような場所に敵妖怪と面を突き合わせるなど、殺してくれと言っているような物だ。

『――――――どうもこうもねぇさ。こいつは単に、お前らと戦いたいだけだよ』

すると、何処からともなく現れた、蒼い行脚僧の恰好をした男が不敵に告げる。頭頂部の一本角と閉じられた額の第三の眼が、只者ではない雰囲気を漂わせる。

『誰だ、貴様は？』

『俺かい？　俺は蒼坊主。鬼太郎（こいつ）の兄貴分さ』

彼の名は蒼坊主。日本全土を巡礼しつつ、行く先々で悪い妖怪を封印している退魔師である。その実力は折り紙付きだ。方向音痴だけど。

『……退魔師が何の用だ？』

姿恰好と滲み出る強者の風格から、彼が退魔師だと見抜いたラクシャサが、訝し気に訊ねる。退魔師と鬼太郎が兄弟分なのは置いておくとしても、自分たちの封印を解いた理由が分からない。そんな事をして、一体何の得があるのか。

『俺はただの後始末さ。用があるのは鬼太郎の方だ』

だが、蒼坊主は取り合わない。あくまで事後処理の為にいるだけだと。

ならば、鬼太郎の目的とは？

『……お前たちと、手合わせを願いたい』

『何だと？』

『いや、手合わせなんて生温いな。殺しに来てくれ。……で、僕が負ければ、自由にしてやる。蒼兄さんには手を出させないさ』

『……！』

つまり、ちょっと殺し合いをしてもらいます、という事である。何処のバトル・ロワイ○ルだ。

『ヴァッハッハッハッ！　面白れぇじゃねぇか！』

今までの鬼太郎からは考えられない台詞に、天邪鬼が豪放に笑いながら前に出る。最初は自分から、と言わんばかりに。

『どういうつもりかは知らねぇが、良い度胸だ。立ち塞がると言うなら、潰すまで。オレはもう閉じ込められないぞ。……前にも言ったな。オレは誰からも自由だぁあああああっ！』

『……来いっ！』

さらに、余計な詮索は一切せず、真正面から突っ込んでいく。彼は出会った時からそうだった。捻くれ者だが、自分を嘘偽りなくぶつけて来る。言葉の上でも、物理的にも。

シンプル・イズ・ザ・ベスト。「力尽く」という単純明快な遣り方が、天邪鬼のポリシーである。

『ドラァッ！』『くっ……！』

野太い腕が岩を砕き、大地を揺らし、文字通り鬼太郎に手も足も出させない。髪の毛針は歯が立たず、ちゃんちゃんこは掴み取られ、リモコン下駄（修復済み）は払い除けられる。以前戦った時もそうだった。

『フフッ……！』

しかし、今宵の鬼太郎は一味違う。

『何がおかしい！』

『いや、ふと思っただけだよ。……〝あの女〟は砕いたのに、お前は払い除けるのが精一杯なんだってな』

敗北の味を知った彼は、実にムカつく悪ガキだった。

『言ったな、小僧！　なら、オレ様の本当の恐ろしさを見せてやる！』

『見せられる物なら見せてみろ、脳筋野郎！』

そして、指鉄砲やオカリナ剣を織り交ぜながら、必死に食らい付く。時には本当に噛み付き、食い下がったりもした。その荒々しい戦い方は、まさに狂犬だ。

（良いぞ、鬼太郎。今はそれで良い）

そんな彼の有様を見て、蒼坊主が満足そうに呟く。

（お前は忘れてしまった。我武者羅な正義感を。勝つ為なら何でもして、勝つまで戦い続ける力強さを。……ユメコちゃんと共にいた、あの頃を思い出せ！）

蒼坊主は知っている。昔の彼を。天童（てんどう）　ユメコと共にあった頃の姿を。

あの頃の鬼太郎は、明確な正義感と意志を持って戦っていた。弱きを助け、傲慢な強きを挫く。そこに妖怪も人間も関係ない。きちんと向き合い、正面からぶつかっていた。

だが、時が経ち、人の闇に触れ続ける内に、彼は人間と距離を置くようになった。色々と理由はあるが、単純に嫌気が差したのだろう。ユメコと死に別れてしまったのも大きい。今の鬼太郎は、まるで世捨て人である。

だから、この武者修行で思い出して欲しい。ヤンチャだった頃のお前は、もっとずっと輝いていたぞっ！

『ウォアアアアッ！』『はぁあああああっ！』

――――鬼太郎と天邪鬼の死合は続く。

◆天邪鬼

「捻くれ者」の代表選手的な存在。四天王像が踏み付けにしているアレ。

簡易な読心術と凄まじい怪力を誇り、かつては鬼太郎でさえ手も足も出なかった。自由奔放な性格で、己の邪魔立てする物を一切許さない。祖先は、完全無欠の読心術に捻くれた心、神すら投げ飛ばす超力を持つ、暴虐の女神「天探女（アメノサグメ）」。

鬼太郎の世界観では〝燻製肉が大好物の怪力無双な妖怪〟として描かれており、特に第４期の彼は小賢しい読心術など使わず、腕っぷしだけで鬼太郎を完全に無力化した、とんでもない奴である。「オレは誰からも自由だぁ！」とは彼の信条だが、どこら辺が捻くれ者なのか怪しくなってくるのは気のせい。

鬼太郎の武者修行②

初めて大人の猫娘を見てから十数年、まさか本当に大人のお姉さんになってしまうとはナァ……。

それから、戦い続ける事しばし。

『ぬぐぉ……こ、こんな……ものぉ……っ！』

遂に、天邪鬼が倒れた。

腹に焼け爛れたような切り傷があり、そこへ突き刺された髪の毛槍が海栗の如く内臓を食い破っていた。それでも死なない。倒れて気絶しただけだ。

『ハァ……ハァ……ッ！』

それに鬼太郎の方も無事ではない。左の膝から下が引き千切れており、もう一本の髪の毛槍を支えにやっと立っている状態である。右腕は雑巾を絞ったように捩じくれ、右の頬肉が抉れて奥歯と舌が見えている。腹にも穴が開き、内臓が零れ落ち

ていた。

これ程のダメージを受けなければ、天邪鬼を倒す事が出来なかった。今の彼はその程度という事だ。

『足りない……もっとだ……ッ！』

こんな物では、あの化け物は殺せない。

髪の毛針やリモコン下駄はもちろん、体内電気も霊毛ちゃんちゃんこも通じない。指鉄砲なら掠り傷を付けられるかもしれないが、あの再生力の前では無意味である。

そもそも、肉弾戦ではパワーでもタクティクスでも劣っている。手足が千切れる程度で怯んでいては、真面に組み合う事すら不可能だろう。

だからこそ、まず鬼太郎は天邪鬼との戦いを選んだ。〝捨て身の戦い〟という物を学び、〝絶対に負けない〟という執念を思い出す為に。

次はラクシャサだ。

筋力こそ天邪鬼に劣るが、武芸に秀で、髪の毛を操り、どんな攻撃にも一切怯まないというタフネスさが、最大の特徴である。

『どうするよ、鬼太郎。少し休憩するか？』

しかし、誰がどう見ても、鬼太郎は戦える状態ではない。それどころか、今すぐ妖怪病院に連れて行った方が良いくらいだ。

『……いいや、このまま行くよ』

だが、鬼太郎は戦闘継続へと固辞した。その眼は手負いの蛇よりも爛々と輝いている。

『はぁあああああああああっ！』

さらに、妖力を全開にして再生力を高め、手足を生やし、腹の傷を塞いでしまった。

ただし、大分無理をしたのか、息切れを通り越して過呼吸になっており、体力は回復するどころか更に減ってしまった。ここまで来ると、普通なら妖怪ですら倒れるだろう。

しかし、鬼太郎は倒れない。霊毛ちゃんちゃんこを左腕に巻き付け、右手に髪の毛槍を持ち替え、ラクシャサを睨み付ける。

『フハハハハハハハッ！』

そんな彼を見て、ラクシャサが実に嬉しそうに笑う。
『素晴らしい闘志だ。その純粋無垢な敵意、称賛に値する！』
『へぇ、お前さんが鬼太郎を褒めるたぁね』
と、蒼坊主が茶々を入れた。
『……当然だ。敵への殺意は戦いの礼儀。安っぽい正義を語るなど言語道断。以前の奴は腑抜けで、最近のこいつは腰抜けだった。しかし、今のこ奴は違う。すぐにでもこの俺を殺そうと燃え上がっている。それこそ、悪鬼羅刹のようにな』
それに対して、ラクシャサが鼻を鳴らしながら答える。
『ならば、それに応えるのみ！　行くぞ、鬼太郎！　妖怪は人間を苦しめてこそ、人間界にての存在理由がある！　妖怪同士もまた然り！　今の貴様は王道だ、鬼太郎！』
『黙れ外道！　地獄で僕に封じられたお仲間に泣き付いて来るといい！』
そして、ラクシャサと鬼太郎の戦いが始まる。
『ヌゥウウン！』
まずはラクシャサの攻撃。髪の毛を振り乱し、幾つもの刀剣に変えて斬り掛かる。

『舐めるなぁ！』『何ッ！』

だが、鬼太郎はそれを避けようともせず、勢いのまま突っ込んで来た。当然、身体はバラバラになるが、それらを念力で操り、斬撃の壁を掻い潜って、再び一つに戻る。

『はぁあああっ！』

さらに、驚き開いたラクシャサの口に左腕を叩き込む。巻いてあるちゃんちゃんこを体内に送り込み、内部から殺してしまおうという算段である。

『甘い！』

しかし、そこは元八部鬼衆が一柱。即座に狙いを読み取り、素早く腕を掴んで地面へ叩き付けた。そこへ間髪入れず刀剣で串刺しにして縫い付ける。

『うぉおおおっ！』『何だとぉ!?』

だが、鬼太郎はそれを逆に利用し、何でも溶かす胃液を解放する事で拘束を解き、ついでにラクシャサ本体も溶かし食ってしまおうとした。それ自体はラクシャサが機敏に飛び退いたので失敗したが、おかげで反撃のチャンスをもぎ取った。

『てりゃあああああっ！』

まずは髪の毛槍を投擲。ラクシャサがそれを受け止めたのを見計らってリモコン下駄を飛ばし、槍を押し出す事で彼の眉間を貫いた。

しかし、鬼太郎はまだ止まらない。生物は簡単には死なないし、ましてや相手は妖怪だ。その程度で動けなくなるような軟な敵ではないのである。

『うぉおおおおお！』『ぐぬぅうううっ!?』

鬼太郎は髪の毛槍にオカリナロープを巻き付け、体内電気を発揮。数億ボルトの電圧を掛け、その隙に接近し、オカリナを打ち石代わりに全力で槍を押し込む。切っ先がラクシャサの頭を貫通した。

『地獄へ落ちろぉおおおっ！』

『ぐわぁあああああああっ！』

そして、残った左手でラクシャサの右目を突き刺し、全妖力を込めて指鉄砲を連射。彼の頭を爆砕した。誰がどう見ても決着は付いただろう。流石のラクシャサも、頭部を粉々にされては暫くは再起不能である。

『ハーッ……ハァーッ……ぐふっ！』

しかし、目標を完全に沈黙させた所で鬼太郎にも限界が訪れ、まるで糸の切れ

た人形のようにドサリと倒れ伏す――――――直前に、蒼坊主がフワリと受け止める。お姫様をそうするように。

『お疲れさん。一先ず、今日はもう休みな』

……その手には、天邪鬼とラクシャサの描かれた札が握られていた。

◆ラクシャサ

インド神話に登場する人食い鬼の一族。仏教では悪鬼羅刹と呼ばれている。同じルーツを持つ夜叉（ヤクシャ）は親類であり、同僚であり、ライバルでもある。主な役割は人を苦しめ、痛め付け、絶望させる事。大義名分こそ様々だが、何処へ宗旨替えしても、その本質は全く変わらない。まさに悪鬼に相応しい所業だが、神聖な儀式をぶち壊しにして喜ぶような一面も。ヒャッハー！

アニメでは４期に登場。夜叉と近しいからか、同じく髪の毛を武器に使う。これが非常に強力で、〝相手の大切な人に化けて不意打ちする〟という搦め手に加え、鬼太郎の霊毛ちゃんちゃんこすらバラバラにしてしまうパワーを持っている。イン

ド行者の円陣で弱体化していなければ、鬼太郎は仲間諸共殺されていたかもしれない。

「妖怪は人間を苦しめてこそ、人間界にての存在理由がある」という心情を持つ武断派で、趣味の悪い搦め手を使う悪辣さ、鬼太郎を真正面から叩きのめす力強さも相俟って、たった1話のゲストとは思えないインパクトを残した。

鬼太郎の武者修行③、そして……

今回出て来た手の目さんは特殊個体デ、人間だった頃の姿を色濃く残していマス。その容姿はまさシク……。

『これは、儂の〝不戦勝〟という事で良いのかのう？』

すると、ここぞとばかりに手の目が提案をしてきた。掌の目玉に矢印が浮かび上がり、倒れ伏す鬼太郎を見据え、捉えている。何時でも殺れるぞ、という合図だ。

『ああ。今回の契約は、あくまでお前ら三人を倒したら鬼太郎の勝ち、だからな。休憩を挟まずに挑み続けた、こいつ自身の落ち度だ。……けどよぉ、約束は約束だ。その事は忘れるなよ？』

だが、蒼坊主は特に反抗も引き止めもせず、何なら振り向きさえしないで、淡々と告げた。

今回、蒼坊主は妖怪たちと以下のような契約を交わした。

①三人は鬼太郎と戦い、勝てたら解放するが、負ければ再び封印する。勝利条件は相手を戦闘不能にする事。

②鬼太郎は三人全員を倒したら勝ちであり、負けた場合は如何なる理由があっても今後は手出しをしない事。

③ただし、人を取って食うような真似をした場合、②の約定は破棄される。

つまり、手の目は完全な不戦勝である。

休憩時間が記載されていないので、幾らでも取り様はあるのだが、それを断って続け様に勝負を挑んだのは、鬼太郎自身だ。不退転の覚悟で臨んだ故の失言だろうが、蒼坊主の言う通り、彼の落ち度である。手の目に文句を付ける事は出来ない。

しかし、手の目も完璧な勝ち逃げとは言えない。人を襲った場合、②の約定が破棄され、再び討伐の対象となるのだ。否、今度はワイルドになった鬼太郎によって地獄へ落とされるだろう。

……妖怪の約束事は悪魔との契約と同じく、解釈の余地を多く残している方が拘束力が強くなる。話は単純な方が分かり易い。ラクシャサ、天邪鬼、手の目（特殊個体）と言った凶悪で強力な妖怪を縛り付けるには、③の条件を緩めるしか無かっ

たのである。〝取って食う〟とは、〝直接手を下したら〟という意味でしかないのだから。

『分かっておる。あの粗野な連中と一緒にするでない』

それを手の目も分かっているのか、ニヤリと笑い、立ち去って行った。

『――――――まぁ、当てはあるしのぅ』

不穏な言葉を残して。

『……何だよ、負けちまったのかよ、鬼太郎』

と、陰から様子を見ていたねずみ男が、やれやれという顔で出て来た。

『言うじゃねぇかよ。戦いが始まったら、真っ先に隠れてた割には』

『知るかよ。オレっちは平和主義者なんだ。そもそもオレは斡旋しただけなんだから、戦う筋合いがねぇだろ』

『確かに』

『ま、それこそ悪さしたら、鬼太郎が何とかするって事で』

『……だな』

窘められても毛程も気にしない彼の言動に、蒼坊主が楽しそうに笑う。何だかん

だ言って、ねずみ男が鬼太郎を信頼しているのは、分かっているからだ。〝発破を掛けられる友人〟というのは人生の貴重な財産である。

『とりあえず、今は休ませてやろうや。どうせ、監視は鴉天狗警察に任せときゃ良いし。それに、まだ会わせる奴がいるんだろう？』

『おうよ。たぶん、ビックリするぞ、鬼太郎も』

『お前も良い性格してんなぁ……』

そんなこんなで、蒼坊主とねずみ男の会話は続く。鬼太郎が再び目を覚ます、その時まで。

◆◆◆◆◆◆

所変わって、千葉県某所――――夢の国。

「ねこ姉さん、次はあそこに行きましょう！」『はいはい、分かったから、少し落ち着きなさい』

真名は猫娘と共にいた。

何故二人が、二人っきりで、夢の国で遊んでいるかと言うと、護衛の為だ。情報を統合し、鳴女は夜にしか外を出歩けない事が判明した為、猫娘が真名の家に上が

り込む形でガードしている。流石に人気の多い所で事は起こさないだろう、という判断である。

だが、一番の理由は鬼太郎が武者修行に出掛けているからだ。

鬼太郎は数日前から、ねずみ男が呼び寄せた蒼坊主と共に、「奈落の谷」と呼ばれる秘境へ旅立った。行き方は彼らしか知らないし、特訓が終わるまでは戻らない。付いて行こうとしたら見事に断られた。

ようするに二人は今、非常に暇なのである。応援する事も出来ないとなれば、手持ち無沙汰にもなるだろう。相変わらず女心の分からない男だ、鬼太郎は。

一応、鬼太郎も彼なりに心配しての行動なのだが、ここは危険でも連れて行くべきだったと、世の淑女は思う事だろう。暗に足手纏いだと言われて置いて行かれる方としては、面白くも何ともない。

なので、真名に誘われる形で、猫娘は夢の国へ来ていた。鼠が治めるランドに猫の半妖が訪れるのはどうかと思うが、気にしたら負け。

「……ねこ姉さん、ひょっとして余計なお世話でしたか？」

休憩所で座っていると、真名が申し訳なさそうな顔で猫娘に尋ねた。

『そんな事無いわよ。まなと二人で出掛けるのは久々だしね』

猫娘は取り繕うように、笑みで返した。

鬼太郎を心配する（ついでに不満も持っている）猫娘を気遣い、少しでも鬱憤を晴らそうとしてくれている真名に対して、素っ気無い態度を取っては失礼だ。自分も命を狙われているだろうに……優しい子である。

『……それじゃ、次はあっちに行きましょうか』「は～い♪」

こうして、二人のデートは更に盛り上がりを見せる――――と思われた、その時。

『久し振りじゃのぅ、六部（むっぺ）。封印されとったと聞いたが？』

『ツキの目が回って来たのじゃ。それより、お前そこ儂の豆腐屋を出たそうじゃないか』

『仕方ないじゃろう、まさか断絶するとは思わんかったし。……言っとくけど、わしから出た訳じゃないぞぇ？』

『分かっておる。どうせロクでも無い理由で絶えたのだろう。今は鳴女とかいう輩の家におるんじゃったか？』

『家というより城――――いや、異空間じゃな。〝本体〟は今もそこにおるでな。結構便利じゃぞ？』

『ほほぅ、儂も見てみたいのう』

何か聞き捨てならない台詞と、見逃せない姿が通りすがった気がした。振り向けば、何時ぞやの座敷童子と、似たような格好の地味な男の妖怪が。

「ね、ねこ姉さん、あれって……」

『見なかった事に――――は、出来ないわよねぇ……』

真名と猫娘は、渋々と後を付ける事にした。

◆手の目

鳥山石燕の「画図百鬼夜行」に登場する妖怪。文字通り手に目がある化け物で、野盗に殺された盲人が化けて出たモノだという。江戸時代の怪談集「諸国百物語」にも親戚っぽい何かが出ている（こっちは盲目ではないが）。

ゲゲゲの鬼太郎では原作漫画から登場する古株の敵。原作では「通りすがりのサ

ラリーマンを操って強盗殺人させる」という完全な悪役で、後のアニメシリーズでも大体同じような役回りだが、第3期の彼だけは別で、〝人間の都合で地獄の餓鬼を自分の住処に放り込まれて諸共封印され、それに怒って暴れたら駆け付けた鬼太郎にぶっ殺される〟、普通に可哀想な被害者である。ついでに言うと、棲処に湧く「命の泉」という霊水を餓鬼に狙われ、人間側にも奪われそうになってたりする。

一応、「人間の生き血をワインにしてやる！」と宣う妖怪らしい残虐さも見せたものの、そもそも飢えた狼の群れみたいな連中を家に投げ込まれた上で閉じ込められたら、それくらい言いたくもなるだろう。泥棒被害にもあってるし。血涙を流し過ぎて貧血になったのかもしれない。

だが、そんな理屈は、一度こうだと決めたら聞く耳を全く持たず、割と手段も択ばない3期の鬼太郎さんには、1ミリも聞き入れてもらえなかった。それで良いのか正義の味方。

丸子、でーとするの巻

……タイトルに他意は無いでスヨー？

キャハハハ、わしじゃよわし、座敷童子の丸子じゃよ～♪
今日は久方振りに封印を解かれた、六部（むっぺ）とでーとじゃ♪
あ、六部というのは、今わしの目の前で零余子印のわいんを飲んでおる、この〝手の目〟の事じゃ。ふるねーむは矢琶羽（やはば）　六部（むっぺ）という。以前世話になっていた「矢琶羽豆腐」の跡取り息子だった男じゃ。
六部との出会いは、大分昔――――――大正時代の話じゃ。彼は盲目ながら手先が器用で、豆腐作りの上手い男じゃった。家に上がり込んで来たわしとも遊んでくれる、良い男じゃったよ。
しかし、ある晩、突如押し入って来た、正体不明の化け物に殺されてしまった。両親が用事で遅くまで出掛けていた日に起きた、哀しい出来事じゃ。

その後、両親は嘆き悲しんだものの、何時までも泣いてはいられないと、何処からか養子を迎えたのじゃが、こいつがまた、どうしようもない男でなぁ。とにかく女癖が悪く、夜な夜な抜け出しては何処ぞの女と遊んどった。

そんな屑男だが、仕事だけは出来る奴であり、おかげで両親も強く言えず、済し崩し的に跡取りとなった。

さらに、夜遊びばかりしていた成果なのか、後継ぎにも恵まれ、何だかんだでそやつの一族が矢琶羽豆腐を取り仕切るようになっていった。

……正直、わたしとしては、六部が殺された時点で家を出ても良かった。屑野郎は元より、彼を忘れようとする六部の両親が許せなかった。

だが、今わの際に六部から店を頼まれてしまったから、しょうがなく見守る事にしたんじゃ。彼を助けられなかった負い目もあったしの。

しかし、屑の子孫は穀潰しじゃった。わしがどんなに頑張って店を盛り上げようと力を使っても、稼いだ傍から金を使いよる。先祖と同じく女と酒に溺れておった。これには後に手の目となって蘇った六部も苦笑いしとったよ。

それでも見捨てず、我慢に我慢を重ねて、陰から支え続けた。六部がやらかし過

ぎて、退魔師に封じられてからも、長い間ずっと……。

だが、駄目男は何処まで行っても駄目糞野郎じゃった。

何と奴の末裔が、火遊びのし過ぎで殺されてしまったんじゃ。十六人の女から滅多刺しにされて息絶える光景は、流石のわたしも絶句したわ。何しとるんじゃい。

結果、お家は断絶。せっかく守って来た店も潰れてしまった。それからは皆の知るような顛末じゃよ。

――――――うん、もう矢琶羽豆腐関連の話はよそう。飯が不味くなるし、気分も悪くなる。

それよりも、六部じゃよ、む・つ・べ♪

彼は化け物に殺された後、無念を晴らすべく、盲人のなる妖怪「手の目」となった。文字通り手に目がある怪異で、それを使った妖術を使うのが特徴じゃ。

大抵は催眠術や目晦ましなど、〝目を光らせて〟発動する補助技が殆どじゃが、中には目玉を弾丸のように飛ばしたり、敵を撃ち貫く怪光線を放つ者など、攻撃的な技を習得する場合もある。

そして、無念の度合いが段違いだった六部は、殊更に特異な能力を得た。〝周囲

に生じる力の向きを自在に操る〟という物で、色々と応用の利く妖術じゃ。目玉の矢印がその証。本人にしか見えない「紅潔の矢」なる力場が全てを引っ張るのじゃとか。

凄いのう、かっこいいのう、一方通行って呼ぼうかのう♪

しかし、そんな強くてかっこいい能力を得た六部じゃったが、時は既に遅かった。己の仇は誰とも知らぬ者に討たれ、とっくの昔に死んでおった。

捌け口を失くした彼は荒れに荒れ、人を取って食って殺しまくり、既に活動を始めていた鬼太郎や、蒼坊主という退魔師に見付かって討伐・封印されてしまい、それっきり会う事はなかった。

……寂しかったわよ、本当に。

『そう言えば、本体のある無限城という異空間は、安全なのか？』

と、わいんを飲み干した六部が、わたしの心配をしてくれる。相変わらず身内には優しい奴じゃのう。大好きじゃ♪

『問題ない。城の主は正真正銘の化け物じゃからのう』

わしら座敷童子は、己の分身を作る能力が有る。亜種であるたたりもっけや呵責

童子もそれは変わらない。

ただし、それは謂わば肉体の予備であり、魂の宿っていない肉人形じゃ。だから自意識は持ち合わせておらず、幽体離脱の要領で取り憑く事で、初めて動かす事が可能となる。

だが、その間は本体が無防備になるので、本体を見捨てなければ助からないなど余程の理由がある場合か、安全が確保されていない限りは使わない事にしておる。

今は無限城に囚われている形なので、安全ではあるが逃げられない状態であり、外界にはこうして分身に憑依して出歩いとるのじゃ。魂が分割で本体にも残っておるから、見捨てる訳にもいかんし。鳴女も上手い事考えよるのー。

『それはそうと、そろそろ飯を食わんか？　わいんばかりでは飽きるじゃろ？』

『そうでも無いが……何か注文でもするのかの？』

流石は零余子印。あの潔癖で味に煩い六部をも唸らせるとは。……ちょっと嫉妬しちゃうわ。

『いいや、弁当を持って来たぞぇ』

『ほーう、お前の手作りかのう？』

『いや、ちゃらとみの手作りじゃ』
『そこはお前が作っておけよ……』
「主夫かそいつは」と呆れる六部じゃが、気持ちは分かるぞえ。悔しいが、あやつに料理の腕で敵う奴は、我が家には一人もおらん。何時かは超えてみたいが、少なくとも今ではない。
じゃから、今回は涙を呑んでちゃらとみ弁当で手を打った。六部にはやっぱり美味しい物を食べて貰いたいんじゃよ、悔しいけどぉ～！
『『美味い』』
うーん、何だかなぁ……美味しいんだけど、心が嬉しくない。遠い空の向こうで、ちゃらとみが白い歯を光らせながら笑顔を浮かべているような気がする。
どうしよう、凄くぶん殴りたいんだけど。
でも、今はあいつも化け物だしのぅ……。
――――うん、今度はちゃんと手作りしよっと。
『ふぅ……』『ごちそうさま』
さぁ、腹も満たされたし、でーとの続きじゃあ！

◆矢琶羽

朱紗丸と同時期に登場した、男の鬼。こっちも無惨に煽てられただけの、自称：十二鬼月。妖怪「手の目」の如く、矢印の描かれた眼球が掌に在り、ここを開閉する事で血鬼術が発動する。能力はベクトル操作で、自分（または見破る能力持ち）にしか見えない「紅潔の矢」という矢印を放ち、触れた物体をその方向へ強制的に移動させる。かなり応用の利くスキルで、攻撃だけでなく追跡にも使われた。

無惨の命令で、出会ったばかりとは思えないくらい相性の良い朱紗丸と共に炭治郎たちを襲ったが、兪史郎の機転で分断され、最期は自分の能力を逆用される形で炭治郎に討伐された。確かに強い事は強いのだが、後の本物の十二鬼月と比べるとやはり見劣りする。

ただ、成長すれば一方通行さん並みの脅威になった可能性も否めない。能力の自由度はこっちの方が上っぽいし。

その後、朱紗丸とほぼ同時期（こっちの方が僅かに後）にゲゲゲ世界へ転生、矢

琶羽豆腐の跡取り息子「六部（むつべ）」として生を受けたが、元服前に謎の化け物に襲われ、食い殺されてしまった。その無念により妖怪「手の目」として蘇ったものの、仇はとっくに討伐されており、やり場のない怒りを周囲にぶつけまくった結果、鬼太郎と蒼坊主に見付かってしまい、封印された。

彼を襲った化け物は〝人の血肉を好んで食らう人間そっくりの姿をした鬼〟だったらしいが、暗がりでの事だったので詳細は不明である。

ちなみに、今も昔も潔癖症で、令和の現在は消毒セットを常に携帯している。よくそんなんで豆腐作れたな。

トリプル・コンタクト

？？？：『このロリコンどもめ！』

（何か普通にデートしてる……）

バッタリ出会った二人の妖怪をストーキングしていた真名と猫娘だったが、あまりに普通のお付き合いっぷりに毒気を抜かれてしまった。食べている物やファッションは別として、口出しすべき所は何も無い。むしろ野暮であろう。あの鳴女の仲間とは思えない信じ難い光景だが、目の前の現実が全てだ。

『六部は何時もそれを持ち歩いているのかえ？』

『当然じゃ。誰とも知らん奴が使った物に腰掛ける趣味はない』

『相変わらずの潔癖症じゃのう』

……消毒液とポケットティッシュを常に持ち歩き、事ある毎にせっせと消毒するのは置いておくとして。

「どうしましょう、ねこ姉さん？」
『うーん、どうしたら良いかな？』
「私たちも普通にデートします？」
『君は一体何を言ってるのかな？』
普通は同性同士でデートはしない。人はそれを百合と言う。良いぞもっとやれ。
しかし、本当にどうしたものか。向こうが何かしない限り、こちらからは手出し出来ない。そんな事をしたら、自分たちが悪役である。
（いや、そもそも事を起こすのを期待しちゃダメでしょ、アタシ）
というか、後を付け回している時点で充分にアウトなので、猫娘は張り込みを止める事にした。何が哀しくて、仲の良いカップルを女二人でストーキングしなければならないのか。人の恋路は、好きにさせたらええやん。
『……もう止めにしましょう。虚しくなってくるし』
「えーっ、あの二人が今日何処まで行っちゃうのか、見ないんですか!?」
『野次馬根性丸出しね。馬に蹴られたくなかったら止めなさい』
「ちぇ～。なら、あの二人の事を忘れられるくらい、目一杯遊びましょう！」

『はいはい、分かった分かった』

今時女子の真名は多少ごねたものの、最後は渋々了承した。他人の恋より、自分の愛（？）を優先したようだ。

――――――だが、そうは問屋が卸さないのが宿命であり、真名クォリティーである。

「おや～？」

踵を返して己のデートを再開しようとした真名の視界に、不思議な二人組が映る。

『いや～、割と面白かったねぇ、「スマグラーズ・ラン」』

一人は継ぎ接ぎの肌に頭の螺子が特徴的な、マッドサイエンティスト風の少年。身長は真名と然程変わらない程度しかなく、年頃も同じくらいだと思われる。

『そうね。個人的には「ＴＩＥファイター」の方にも乗ってみたかったけど』

もう一人は薄紫色の髪をツインテールにした、赤い瞳の可愛らしい女の子。身長は鬼太郎と同じで、彼とは逆に右目側を髪で隠している。胸はあまりない。何故か耳が悪魔のように尖っている。

服装としては、ゴスロリ風の裾がギザギザしたワンピースを着こなし、パーティー

に使うレースの手袋を嵌め、ｗｉｔｈガーターベルトなソックスとヒールを履いている。何れも闇のような漆黒だ。

一応、二人揃って人型だが、遠目からでも分かる。こいつら人間じゃない。おそらく、両方共に妖怪である。

『ベア子ちゃんは相変わらず帝国派だねぇ。結構ブラックだと思うんだけど、あの組織』

『それ言ったら、レジスタンスの方がノワールブラックシュバルツだと思うけどねぇ？』

『いや、黒すぎでしょ。気持ちは分かるけどね。名誉しか貰えないし、割とよく死ぬし』

『そう言うヴィクターは何処が良いのよ？』

『惑星カミーノでずっと研究をしていたい』

『凄く分かり易いマッドサイエンティスト』

『それ程でもある！』

『それでこそよね♪』

名前は男の子がヴィクターで、女の子がベア子というらしい。
こっちもこっちでデート中らしく、今はミレニアム・ファルコンに乗って来た帰り道のようだ。次は舞台裏の映像でも観に行くのだろう。滅茶苦茶満喫してますね。
『どうしたの、まな？』
「いや、あの、あれ……」
『うん？』
と、ここで猫娘も二人の存在に気付く。
『『おっ？』』
『『あっ！』』
さらに、食事を済ませ、席を立った丸子と六部もバッタリ遭遇。ヴィクターとベア子も反応を見せる。
今ここに、三組のカップルが一堂に会した。一つだけ百合色だけど。
（（今すぐ立ち去りたい……！））
たぶん、この中では一番の最弱組である猫娘と真名は早々に逃げ出したくなった。

しかし、そうは行かないのが世の中の常。

『アンタたち、猫娘と犬山 まな、よね？』

「「な、何故バレた!?」」

『お父様とヴィクターから聞いてた』

しっかりとベア子に素性がバレていた。猫娘に限らず、鬼太郎ファミリーは有名処だから仕方ない。

『そして、そっちは鳴女の所の座敷童子だね！』

『初対面の筈じゃが、何で知っとるんじゃ～？』

『動画で見た。スパチャもした』

『ご視聴ありがとうございます』

ついでに丸子の素性も筒抜けになっていた。鳴女一家は売れっ子ウーチューバーだからしゃーない。

（（このまま何事もなく解散してくんないかなー））

猫娘と真名は空を見上げながら、心の中でボソリと呟いた。

いやー、無理ですねぇ。

◆ベア子

西洋妖怪の総大将「バックベアード」の一人娘……という設定の二次創作キャラ。世界中のロリコンどもを撲滅する為に活動しているらしい。

今作の彼女はヴィクター・フランケンシュタインと健全（？）にお付き合い中。割と親日家で、ロリコン以外の日本文化を受け入れている。愛称をベア子にしているのもその証。

ちなみに、今作におけるベア子のフルネームは「ベアトリス＝バックアップ・コアソウルズ」。製造番号は「Bb-8」。

真名のまなわんリポート

バトルしようゼッ！

皆さん、こんにちは。真名（まな）です。初めましての人は、改めましてよろしくお願いします。

本日は例のランドでねこ姉さんとデートを楽しんでいたのですが、何故か妖怪のカップルに二組も出遭ってしまい、現在私たちを間に挟んでメンチを切っております。誰か助けて。

『……一人のファンとして、あまり傷付けたくはないけど、仕方ないわね』

『そうだね、仕事をしよう。……ハァアアアアアア！』

すると、ベア子&ヴィクターの西洋組が戦闘態勢に入りました。ベア子ちゃんは紫色のオーラを纏い、ヴィクターくんは進撃しそうな奇行種に変身しましたよ。怖っ！

『フム、やるしかないようじゃな』

『うー、りすなーさんとやり合うのは嫌なんじゃがのー』

それを見た六部&丸子の東洋組も臨戦態勢を取りました。丸子ちゃんは上着をはだけて腕を六本に増やすという分かり易い形態になりましたが、六部くんは特に変わっていません。地味です。

というか、何故彼らは争うのでしょう。東洋と西洋の違いはあれど、同じ妖怪なのに……。

いや、妖怪同士だからかもしれません。生き物は同じ種類の生き物に縄張りを渡そうとはしませんから。悲しいですね。

――――まぁ、単に今すぐ自分の住処に帰れって意味でしか無いんですけどねー。

『ヴォオオッ！』

まず仕掛けたのは、ヴィクターくんでした。その巨体に見合った突進を繰り出します。科学とは一体。

『ぬぅううんっ！』

彼の相手をするのは、まさかの丸子ちゃんでした。確かに見た目がカイリキーだから違和感はありませんが、そこは男の子の出番だと思うのですが……。

いいえ、もしかしたら、ベア子ちゃんの方が厄介な能力を持っているのかもしれません。オーラ出てますし。

『アナタがワタシの相手なの？　……丁度良いわ。やっぱり、丸子ちゃんに直接手を下すのは嫌だったからね！』

それどころか、黒くてモヤモヤした妖気弾を放ちました。

『舐めるでないわ。飛び道具で儂に挑む事の愚かさを教えてやろう』

ですが、六部くんも負けていません。彼の掌にある目が閉じると、何故かベア子ちゃんの妖気弾が偏向し、彼女自身に跳ね返って行きました。

どうやら、六部くんにはベクトル操作の能力が有るようです。一方通行さんとお呼びしても？

『ええ、是非とも教えて欲しいわ』

しかし、ベア子ちゃんもベア子ちゃんで、普通に殴って妖気弾の軌道をズラしました。手のオーラが強まった所を見るに、彼女は妖気を纏って戦うのが得意なよう

です。

さらに、噴き出す妖気で周囲の重力を歪め、空まで飛び始めました。六部くんも重力の方向を微調整して、後を追います。何かこっちだけドラ〇ンボールしてますね。

「ね、ねこ姉さん、どうしましょう？」

『帰りましょうか』

「全力で逃げようとしますね、ねこ姉さん」

『だって、関わったら絶対にロクな事になりそうにないんだもの』

気持ちは分かりますが、ここで踵を返すのはマズいでしょう、鬼太郎サイドとして。

『……まぁ、冗談は程々にして、避難誘導をしましょうか。参戦するにしろ撤退するにしろ、こうも人が多くちゃやりにくいからね』

「おお、流石ねこ姉さん！」

逃げるという選択肢は絶対に外さないんですね！

ただ、人がいっぱいだと戦い難いのは事実です。押し合いへし合い我先にと逃げ

出すような輩は正直死んでも良いと思いますが、我が子を守ろうと必死になっている家族連れとかを巻き込むのは可哀想ですしね。

『ヴォラアアッ！』『うぐっ！』

「きゃあああっ!?」

と、丸子ちゃんが私のすぐ傍まで吹っ飛んできました。どうやらヴィクターくんにパワー負けしたようです。手数は上でも地力が劣っているみたいですね。女の子ですからね、仕方ないです。

『よくもやってくれたのう！　これはお返しじゃあ！』『グヴォオオッ!?』

「わきゃーっ！」

いいえ、全然仕方なくありませんでした。何と丸子ちゃん、鞠を無限湧きさせながら、ヴィクターくんに一方的なドッチボールをし始めたのです。一発一発が身体を抉るデッドボールです。それでもすぐに再生しちゃうヴィクターくんが凄いのは分かったから、あっちでやって下さーい！

『まな！』「ねこ姉さん！」

よ、良かった、ねこ姉さんが御姫様抱っこをして離脱してくれました。ヒャッホ

ウ！

『アハハハハハ！』『ぬぅ、やるではないか！』

「『ギャーッ!?』」

ですが、退避した先に妖気弾の雨あられが降って来ました。ベクトル操作が間に合わないように、ベア子ちゃんがグミ撃ちしているようです。これだけ連打されても被弾していない六部くんは凄いですが、頼むから向こうでやって！

『ほらほら、もっとワタシを楽しませなさいよ！』

『……舐めるなよ、小娘がぁ！』

しかし、二人は話を聞いてくれません。ベア子ちゃんに煽られた六部くんが、天を仰ぐように頭上へ光を集め、無数のビームを放ちました。

しかも、このビーム攻撃、折れ線グラフのようにホーミングしながらベア子ちゃんを射抜こうとしていますよ。六部くんのベクトル操作は射程距離が長いようです。

『ガヴッ！』

ですが、ベア子ちゃんは避けるのが面倒になったのか、ある程度引き寄せると、

何とガッツリ食べてしまいました。暴食のベア子ちゃん！

『ハァアアッ！』

そして、今度はチャージした妖気をビームとして撃ち出しました。どう見てもあの波です、本当にありがとうございました。

『シャアアッ！』

しかし、六部くんも掌が前になるよう腕を十字に組んで、同じく収束したビームを発射しました。彼は光の国が出身地なのかもしれません。

「きゃうぅーっ！」『まな！』

さらに、正面からぶつかり合った光線が大爆発。凄まじい閃光と熱を放って来ました。ねこ姉さんが庇ってくれなかったら、丸焼きになっていたかも……。

ああもう、誰か何とかして下さーい！

そう思った、その時。

《虚ろな器……》「……！」

突然、瘴気のような物が集まって人の形を成し、黒いローブを纏い帽子被った、不気味な仮面の男となりました。

◆名無し

アニメの第６期で初登場した怪人。愛の虚しさを演説しそうな重みのある声が特徴。

呪術に長けているようで、様々な強豪妖怪たちの封印を解き、それらを利用して真名に呪いを植え付けるなど、物語の黒幕として暗躍している。幽霊染みた見た目の通り実体が無いらしく、大抵の攻撃はすり抜けてしまう。

その正体は……。

ニャニャニャのバトルガール

バトルガールが通うハイスクールが存在するらシイ。

アタシ、猫娘。猫又と人間の合いの子なの。

そして、鬼太郎のパートナーでもある……幼馴染とか、戦友止まり、だけどね。

昔は「僕が貰ってやる！」とか言ってくれた時もあったけど、ユメコ（あのこ）が死んだ頃から大分変っちゃったわ、彼……。

だが、奈落の谷へ行く時の鬼太郎は、何かが違った。帰ってくる頃には、かなり様変わりしている、と思う。

……嗚呼、こんな事を考えてしまうくらい、アタシは今とても混乱しているのね。

この場に居ない彼を頼った所で仕方ないし、そんな調子ではまなを守る事も出来ないでしょうに。

《虚ろな器虚ろな器……五つ揃うのは何時の日か……》

そう、例えばこいつから、とかね。

『……！』「ねこ姉さん!?」

アタシは迷わず、まなの前に立った。

こいつが何なのかは分からないが、只者ではない事は感じ取れる。確実にヤバい奴である。声が良い仕事してますもの。勝てる気がしない。

それでも、アタシは退かないわよ。鳴女の時に見せた無様な姿は、二度と晒さないわ。

こんなアタシを、姉さんと呼んで慕ってくれる、まなを守る為に！

『――――おーい、丸子。せっかく用意してやったのに忘れてるぞー、ゴム』

《ばぶぅふ》

「『ゑ？』」

と、我ながら悲壮感のある覚悟を持って構えたのだが、突如現れた襖が仮面の男を跳ね返して、中からもっとヤバい奴が現れた。ついでに向こうから『わざと置いて行ったんじゃー！』という声が聞こえた気がする。

オマエ、初日からゴム（それ）が必要って、爛れ過ぎじゃない!? 妖怪とは言え、子供

に何を勧めてんだ！

いや、しかし、今はそんな事を言っている場合じゃない。何てタイミングで現れるんだ、鳴女の奴……！

《うぅぅ……誰ぞ……？》

『いや、お前こそ誰だ？』

おい、幾ら何でも、それは無いだろう。飛び出して来たのはオマエなんだよ。

《邪魔を……！》

『邪魔なのはお前だ』

《オオオォォ……！》

だが、理不尽そのものな鳴女に、仮面の男の事情など知った事ではなかった。口から火砕流のような炎を吐いて、あっという間に仮面の男を火達磨にしてしまった。

何時の間にそんな技を習得したのかも気になるが、どう見ても実体の無い幽霊みたいな奴にダメージを与えられるとか、そんなの有りかと言いたい。妖気でも混ぜているのだろうか？

《うぅぅぅ……ぁあああっ！》

そんなこんなで、仮面の男は赤ん坊のように叫びながら消え去った。これで死んだのかどうかは分からないが、少なくとも撤退はしたものと思われる。結局、彼は一体何をしに来たんだろう？

しかし、仮面の男が消えた所で、安心は全く出来ない。中ボスの代わりに裏ボスが現れたような物だからね。

『フーム、転移先を間違えたか。こんなランドの中心で花火をする破目になるとは。せっかく丸子が告白した辺りで背後から「チィーッス、保護者でーす」とか言ってやろうかと思ってたのに』

鳴女が若干眩しそうに周囲を見渡しつつ、悪魔的な発言をしている。羞恥で泣くぞ、丸子が。

え、というか、ちょっと待って!?

「『太陽はっ!?』」

『え、眩しいよ？』

「『知ってるよ、この世の誰もが！』」

そんなの、お天道様が一番分かってるわ！

『私が何時までも日ノ本を歩けないとでも思っていたのか？』
無表情なのにドヤってるのがよく分かる顔で宣う鳴女。とてもムカつく。
それはつまり……どうしよう、勝てる気じゃなくて、生きて帰れる気がしないんだけど。
――――いや、いや、違う、そうじゃない。誰が相手かどうかは関係ない。鬼太郎がこれまでそうして来たように、まなは……まなだけは、アタシが守る！
『フゥゥゥ……ッ！』
『何だ、邪魔だぞ野良猫。私はそこのお嬢ちゃんに用があるんだよ。一緒に食事がしたいんだ』
アタシの威嚇など気にも留めず、悍ましい笑みを浮かべながら、鳴女が近付いて来る。言っている事が完全に変態な件について。一緒にって言うけど、アンタがしたいだけでしょ。
「ね、ねこ姉さん……！」『大丈夫、今度は守ってみせるから……！』
それしか言えないのが悔しい。鬼太郎から戦力外通告される訳だ。
でも、だけど、アタシは――――、

『……！』

すると、上空から何かが飛んで来て、鳴女を後退させた。あれは、

『リモコン下駄!?』「という事は!?」

まなと殆ど同時に空を見上げる。そこには、今一番見たかった彼の姿が。

『済まない、遅くなった！』

「『鬼太郎！』」

力強い声で言いながら、アタシたちと鳴女の間に着地する鬼太郎。ここに彼がいるという事は、修行は終わったのだろうか。

いいえ、言わなくても分かるわ。

だって、前は砕かれていたリモコン下駄で、鳴女を下がらせたんだもの。これで弱い訳がない。

『……久し振りだなぁ、鬼太郎』

『そして初めましてだな、鳴女』

互いに妖気を迸らせながら対峙する、鳴女と鬼太郎。両者共に以前とは全く違う雰囲気を纏っていた。覇気が違う、と言ってもいい。まだ一年も経ってないのに。

『わざわざこんなランドまで飛んで来るとは、またお仕置きされたいのかい？』
『まさか。そっちこそ、せっかく日光浴が出来るようになったのに、奈落の底へ叩き落されるとは、可哀想だな』
……鬼太郎、ちょっとやさぐれた？
『じゃあ死ね』
彼の態度が気に食わなかったのか、鳴女が琵琶を退避させ（動けたの!?）、両手の指先から刀を生やして構える。アダマンチウム製だろうか。
『お前が死ね』
対する鬼太郎は、霊毛ちゃんちゃんこを棒状に纏めると、両端から霊力の光刃を形成、棒術の体勢を取った。平和を愛する騎士が暗黒卿に転職しちゃった。やっぱりグレてるよね？
『『……！』』
そして、殺る気満々の二人は大地を蹴り、宙を舞い、火花を散らせて激突した。

◆シスの暗黒卿

調和を重んじるジェダイの騎士と対立する、フォースのダークサイドを操る者たち。

暗黒面に触れて粋がっているだけのダーク・ジェダイと違い、きちんとした教義を掲げ、己の技を磨く「真面目な悪役」である。

所謂「必要悪」のような物で、感情のまま暴れるような馬鹿ではなく、理性的に暴力を振るえてこそ、理想のシスと言える。ようするにフォースのバランスを保つ為の暴力装置である。

とは言え、攻撃的な事に変わりはなく、フォースライトニングやフォースチョークなど、ジェダイじゃ絶対に思い付かない技も平然と使う。

ついでに言えば、理想通りの暴力装置になれる者は早々おらず、一ヶ所に集まるとたちまち同士討ちを始めてしまうので、「二人の掟」が定められたりもした。

ちなみに、ダースは「ＤａｒｋＬｏｒｄｏｆｔｈｅＳｉｔｈ（シスの暗黒卿）」の略なので、うっかり「ダース・ヴェイダー卿」とか言っちゃうと、元アナキンに締め上げられるので注意。

宿命の戦い①

鳴女さんVS鬼太郎、二戦目開始！

『……』

鳴女が左から指刃を振るう。鬼太郎はそれを受け払い、鳴女の右からの突きを首振りで躱し、左から袈裟に切り付けて反撃。

だが、鳴女も上体を逸らして避け、右脚で蹴りを放つ。鬼太郎はちゃんちゃんこの部分で受け弾いて、次なる左右からの連続斬りも光刃捌きで跳ね返し、膝蹴りを鳴女の腹に入れて動きを止め、頭で顎を突き上げ、間を取った所でミドルキックを左から見舞って更に引き離し、最後にドロップキックを放って完全に突き放した。

――――――べべん！

追撃を許すまいと鳴女が鬼太郎の足元に襖を召喚。

『フゥン！』

しかし、開かれる前に鬼太郎が右手の指先から電撃を放ち、雁字搦めにして無理矢理押さえつける。これは体内電気の威力を上げ放電させた物であり、妖気を多分に含んでいる為、疑似的に霊毛ちゃんちゃんこでの拘束を再現している状態である。こうなると襖は開閉不可能で、一時的に鬼太郎の支配下にすら置かれる。

『ハァッ！』

さらに、鬼太郎は電撃をさながらマジックハンドの如く操り、襖を目の前に浮かび上げると、妖気の波導を衝撃波としてぶつける事で、フリスビーのように発射した。

『……！』

だが、鳴女は少し驚きはしたものの、すぐさま切り替え、口から火砕流の炎を吐き出して襖を爆砕し、更には目から微小化酸素粒子光線を鬼太郎へプレゼントする。この間、約一秒。普通は避けるどころか反応すら出来ないが、鬼太郎は〝嫌な予感〟を覚えて咄嗟に行動、見事に躱した。

しかし、鳴女の攻撃は続いている。視線を合わせるように、目からビームで鬼太郎を追撃する。進攻先のあらゆる物体が分子破壊されて溶けて行き――――、

◆◆◆◆◆◆

ほぼ同時刻、都内某所。

「総理！　今回発覚した密会について、何か一言！」「総理、ちゃんと答えて下さい！」「国民が見て、聞いてるんですよ!?　国の代表として、言うべき事があるんじゃあないですかぁ!?」「前回の政権奪取事件についても詳しくお願いします！」「総理！」「総理！」「総理！」「大統領……あ、間違えた、総理！」

スーツにネクタイを締めた偉そうな男たちと歩く、ちょっとお年を召した一人の女性が記者に囲まれ、質問攻めにあっていた。

彼女の名は大空（おおぞら）つばめ。現在の内閣総理大臣だ。

だが、今の支持率はかなり悪い。はっきり言って崖っぷちである。原因は多々あるが、やはり刑部狸率いる八百八狸による日本政権の乗っ取り事件だろう。あれは本当に痛かった。何せ妖怪とは言え、狸に負けたのだから。

そして、今回発覚してしまった政府与党幹部との密会事件。議論の内容は「妖怪との今後について」という至って真面目な物だったのだが、幾ら摩訶不思議な存在に関する事とは言え、裏でコソコソとやってしまったのがマズかった。公平性とい

う意味で、野党や野次馬に突かれるのも仕方無い。

仕方は無いが……、

（……もう疲れたわ。アイドルを目指していた、あの頃に戻りたい）

ハイエナのような報道陣の喧騒に晒される中、つばめは現実を逃避し始めていた。

彼女は〝美空 ひばりの再来〟とも謳われた天才歌手、大空（おおぞら） ひばりの一人娘だ。プライド高く自分にも厳しく接する母親を恨めしく思っていなかったと言えば嘘になるが、同時に大舞台でスポットライトに照らされ多くのファンから喝采を浴びる彼女の事を、つばめは誇りに思っていた。

しかし、ひばりは突如現れた凶暴な妖怪「水神」の最初の犠牲者として、自分の目の前で溶かされてしまい、妻を失ったショックでやさぐれてしまった父親の暴力に晒されるようになる。

さらに、その父親も後に妖怪に殺されてしまい、とうとう天涯孤独の身になってしまった。

その後は父親の友人である元総理大臣に引き取られ、政治についての手解きを受けつつも、〝母親のようになりたい〟という想いから、周囲の揶揄や反対を押し切っ

てアイドルを目指すようになる。
だが、才能こそあったものの、ある意味政治より厳しい芸能業界で勝ち残る事が出来ず、養父との約束である「アイドルでも政治でも日本一を目指す」という誓いを果たす為、泣く泣く夢を諦め、政治の世界に足を踏み入れる。
そうして長年努力を重ね、ようやく念願叶って総理大臣にまで上り詰めたというのに、
（この有様か。本当に、無様な物ね……）
結構年が行っているつばめだが、更に老け込んでしまったような気さえする。それ程までに、彼女は人生に疲れ果てていたのである。
「あっ……」
そうやって上の空になっていたのがいけなかったのか、それとも思わず流した涙のせいか、左目のコンタクトレンズが落ちてしまった。
そして、慌てて腰を屈め、何とか見付けて立ち上がった時、
「……え？」
報道陣も、役に立たない取り巻きの議員も、皆纏めて上半身を失くしていた。

「え、え、え……!?」

周囲を見渡してみれば、幾つものビルや通行人の背丈が短くなっており、例外なくドロドロに溶けていた。まるで、水神に消化されてしまった、母ひばりのように。

スマフォで状況を確認してみれば、あのランドを起点として亀戸駅から東京駅が扇状に壊滅してしまっているとの事。ついでに、夕方から開かれる議会の為に集まっていた政府関係者が軒並みお釈迦になったらしい。

「えっと……つばめちゃん、大勝利？」

まるで意味が分からないので、とりあえずガッツポーズを取ってみる、つばめなのであった。

◆◆◆◆◆◆

そして、視点は某ランドへ戻り、宿命の戦いへ。

『ハッ！』『……ッ！』

やりたい放題に溶かしまくっている鳴女の顎と目を、鬼太郎のリモコン下駄が跳ね上げて、ビームを中断させた。

さらに、光刃の一方を引っ込め、逆側へ妖力を一転集中させる事で、光る大剣を

形成。回復したばかりの鳴女に猛然と襲い掛かった。

『チッ……！』

鳴女もそれに応じる形で指剣を収納、手そのものを大型の柳葉刀へ変換し、応戦。鬼太郎が放った地面スレスレからの振り上げをシフトウェイトで躱し、物凄い速さで斬撃を放つ。

だが、鬼太郎は大剣を器用に動かして、鳴女の反撃を全て防ぎ切り、上段から叩き付けるように振り下ろした。鳴女は柳葉刀をクロスさせて、どうにか受け止める。

――――べべん！

そして、鍔迫り合いになった瞬間を狙って、再度襖を足元に召喚。自分諸共、無限城の夢幻回廊へ落とした。

しかし、その程度で止まる鬼太郎でも、好き勝手にさせる鳴女でもない。互いに周囲の壁や柱を操り、四方八方から襲わせ、隙を突いて相手を殺そうと躍起になる。刃の襖や槍の手摺、畳の手裏剣が飛び交い、鬼太郎の薙ぎが、鳴女の回転斬りが、蹴りが、拳が、電撃が、ビームが、光弾が、火砕流が、あらゆる物を破壊しながら、二人を深い深い奈落の闇と送り出す。

さらに、闇へ突入する事しばらく、突如として眩い閃光が鬼太郎と鳴女を包み、

『『……！』』

無数の残骸と共に、二人は雲より高い上空へ投げ出された。

◆大空 つばめ

アニメ「墓場鬼太郎」で水神に溶かされちゃった歌手。モデルはむろん美空ひばりで、漫画では〝大空 ひばり〟だったが、流石に一文字違いはヤバかったのか、名前がつばめに変更された。だから何だって話だが。

本作では「大空 ひばりの一人娘にして6期の女性総理役」として登場。6期では妖怪に振り回されているのに誰も味方をしてくれない可哀想な彼女だが、こっちの世界では幼少期のトラウマまで背負わされてしまった。挫折に挫折を重ねながらも遂に頂点へ登り詰めたというのに、あまりにあんまりである。

宿命の戦い②

一方その頃、丸子たち居残り組ハ……。

『鬼太郎……』

アッという間に何処かへ行ってしまった鬼太郎に想いを馳せる猫娘。

彼は本当に凄い。この短期間で、あの鳴女と互角に戦える程にパワーアップした。自分はまだ一つしか妖術を獲得していないというのに。

いや、今は止そう。嫉妬している場合ではない。鳴女という最大の脅威が離れただけで、状況は全く良くなっていないのだから。

『ヴォルァアアッ！』『きゃあああっ！』

というか、更に悪化した。丸子の攻撃がヴィクターに通じなくなり、捕まってしまったのである。

たぶん、耐え忍んでいる間に丸子の手の内を調べ尽くし、再生に乗じて己の身体

を改造していたのだろう。実際、背丈や体格が二回りくらい大きくなっている。身長差が三倍もあれば、そりゃあ勝てない。

ちなみに、捕獲方法はまさかの鯖折り。痛そう。

『……子供相手に、何やってんのよ、アンタは！』『グォオオオッ!?』

と、見かねた猫娘が、新技をお見舞いした。

『ヌゥゥ……火を噴くとは、味な真似を！』

『これでも猫又の血が半分入ってるからね』

そう、この火炎放射こそが、猫娘の新しい妖術。

亜種に火車や五徳猫がいるように、猫又を含む化け猫は火を操る事が出来る。油などの燃料を体内に溜め込み、静電気を利用して着火、息に乗せて放射するのだ。形式としては、弱火のガスバーナーである。

むろん、威力は鳴女の足元にも及ばない。気体の方が高温にし易いが、纏わり付く事が出来ない分、熱伝導率は液体よりも悪いのだ。

だが、この技は猫娘の努力が結実したもの。半妖という大きなハンデを背負いつつも、鬼太郎に追いつき肩を並べていたいという、彼女の健気な願いが叶ったので

ある。

もちろん、付け焼刃も同然の妖術では大したダメージにはならず、精々怯ませる事しか出来ないが、丸子は解放された。

『ありがとうなのじゃ！』

『……良いのよ』

ここで「どうして助けた？」とか言い出さない辺り、丸子は素直な子だ。デートの時から思っていたが、やっぱり毒気が抜かれる。

『フン！　それがどうしたというのだ！　二対一になろうと、結果は変わらん！』

しかし、頭数を増やして勝てる相手かと言うとそうでもない。個々の戦闘能力では、猫娘と丸子に勝ち目は無いだろう。

『それはどうかな？』

だが、二人は不敵に笑い返した。

猫娘も丸子も、日本妖怪だからこそ分かっている。この組み合わせは、単純な足し算ではないという事を。

『舐めるなぁあああっ！』

ヴィクターが巨体に見合わぬ瞬発力で殴り掛かって来る。
『シャアアア！』
『……ズワォッ!?』
しかし、〝何故か〟途中で躓いてしまい、そこに上手く猫娘が滑り込んで、炎のパンチをカウンターとしてヒットさせた。〝運良く〟体勢的に力が抜けている部分へ、クリティカルに。
さらに、〝偶然にも〟寸断され漏電していた配線の上にヴィクターが倒れたので、猫娘はすかさず燃料を吹き掛け、彼を火達磨にした。
『こ、これは……！』
『気付いたみたいじゃのう』
『でも、もう遅い！』
そして、対策を講じられる前に、丸子と二人で上空へ投げ飛ばした。
そこでも〝不幸〟がヴィクターを襲う。〝突発的に〟発生した火災旋風によって高速で回転しながら巻き上げられ、ベア子と六部の間に〝運悪く〟入ってしまい、両者の妖気弾と光線に挟み撃ちされ、大ダメージを受ける。

さらに、弱って元に戻ったタイミングでランドのベーカリーコーナーへ落下、舞い上がった多量の小麦粉に引火し、粉塵爆発を起こした。まさに〝踏んだり蹴ったり〟である。

『……誰かと組んだ座敷童子に、真正面から挑むのが間違いなのよ』

そんな可哀想な目に遭ったヴィクターに、猫娘が吐き捨てる。

そう、座敷童子は家の外では大幅に戦力がダウンしてしまうが、コンビを組んだ場合は例外だ。〝限定的な空間の運命率を操作する〟という条件を、誰かに委託する事で外界でも発揮出来るのである。

頭数の関係上、六部と別々に戦わなければならなかった為、真価を発揮出来ずにいたが、猫娘が手を貸してくれた事で発動条件を満たせた。こうなると〝物語の主人公〟でも無ければ、良いようにあしらわれてしまう。

これで一先ずヴィクターとの対戦は終わった――――のだが、それはもう一方の戦いには火に油だった。

『ヴィクター……！』

ヴィクターが負けた事、その一端を自分が担ってしまった事に、ベア子の堪忍袋

の緒が切れる。
『アリ、アリアリアリアリアリアリ、アリーヴェテルチィィィッ！』
『ぐわぁっ！』
激おこぷんぷん丸となったベア子は、反射されるのもお構いなしで（というか妖気のオーラで全て防いだ）、とんでもない量の妖気弾をグミ撃ちし、遂に六部に致命的なダメージを与えた。
『うぐっ……！』『くぅっ……！』
これには座敷童子の運命操作も追い付かず、二人も纏めてダウン。西洋妖怪の大統領が一人娘というアイデンティティーは主人公に匹敵するくらいに強かったらしい。
『よくも丸子を……許さんぞぉっ！』
だが、丸子まで傷付けてしまったのが仇となり、怒りが瀕死の六部を奮い立たせた。周囲に発生した光と熱を全て集め、最高の破壊力を溜め込んでいく。
『――――無駄な事を。今楽にしてあげる』

しかし、それがどうしたと言わんばかりに、ベア子も妖気を全開にする。溢れ出ていたオーラが凝縮され、彼女の掌に収まった。

『はぁあああああっ！』『フン！』

そして、L字に組んで放たれた六部の破壊光線と、投げ捨てるように撃ち出されたベア子の妖気弾が激突した。

『……！』

その瞬間、ベア子の妖気弾が一気に膨張し、黒い太陽となった。その形はまさしくバックベアード。六部のビームをドンドン呑み込み、押し込んでいく。

『六部！』

だが、押し込まれる前に目を覚ました丸子が六部に抱き着き、己の運気を注ぎ込む。

『……くぁあああああっ！』

さらに、ズタボロの身体に無理を押して立ち上がった猫娘も加わり、妖気を譲渡した事で光線の威力が飛躍的に上昇。逆にベア子の黒い太陽を押し返し始めた。

『フフフ……キャハハハハハハハハハ！』

しかし、ベア子が狂笑しながら駄目押しの妖気弾を次々と追加。黒い太陽を更に膨張させ、潰しに掛かって来た。どうにか拮抗はしているが、このままでは六部たちが押し負けるだろう。その暁には、ここが更地になるに違いない。

「ね、ねこ姉さん……ど、どうしよう!?　何とかしなくちゃ！」

そんなランド最後の日と言わんばかりの光景を前に、真名は何か手は無いかと、焦っていた。

だが、運が良いだけの一般人である真名に出来る事が有る筈もない。己の無力に絶望し、打ちひしがれる。

「――――――えぇぇい、ままよ！」

……何て事は無く、もうどうしたら良いか分からなくなった真名は、考える事を止めて走り出した。こういう時は、無心で動くに限る。

そうすれば、運命が味方してくれる事を、真名は経験的に分かっていた。

だから、

①威勢よく走ったはいいものの、コードに引っ掛かって派手に転ぶ。

②その衝撃で接続先の物が取れて吹っ飛び、閉鎖され今はもう動ない筈のゴー

カートを直撃し、暴走させる。
③誰にも止められないゴーカートが、今までの憂さを晴らすようにスペースマウンテンの会場へ突入。
④自爆して装置を無理矢理に起動させ、スペースマウンテンのコースターを暴走特急へ変貌させる。
⑤戦いの余波でレールの一部が壊れていたので、コースターは勢いのまま弾丸の如くコースアウト。
⑥妖気弾を追加しようとしていたベア子に直撃、一時的に動きを止める。
という事が起こっても不思議ではない。そんな馬鹿なー。
『今よ！』
こういう時にやらかす子だと信じていた猫娘が、六部と丸子に合図を送る。
『『『ハァアアアアアアッ！』』』
そして、全身全霊全妖力を掛けた、最後の一押しを発揮。追加の妖気を得られず、少しずつ相殺されていた黒い太陽が砕け散った。
『なっ……うぁあああああっ!?』

完全に隙を突かれたベア子は、それでも何とか妖気弾を数発撃って反撃するも、今更その程度で止まるような勢いではない。

『……べ、ベア子ちゃん！』『ヴィクター!?』

ギリギリで気絶から覚醒したヴィクターが割り込み盾になるも、無駄無駄無駄である。

『『ぐがぁあああああああああああ！』』

咄嗟に張った二人分の妖気バリアも一瞬で叩き割られ、ベア子とヴィクターは光の奔流に呑み込まれた。

『……おのれ、日本妖怪がぁあああああっ！』

世界が元の明るさを取り戻した時、そこに西洋妖怪たちの姿は無かった。

『はぁ……た、助かったぁ……』

それを確認した猫娘が腰を抜かすと、他の皆もへたり込み、ランドは一先ず静かになった。

後は、鬼太郎と鳴女の宿命の対決が残るのみ……。

◆偶然力

真名が持つ不思議な力。まさに〝運任せ〟といった感じの曖昧な発動条件こそ難点だが、一度でも許してしまうと座敷童子もビックリなピタ〇ラスイッチが起動し、直接・間接を問わず敵を全力で殺しに掛かる。真名が直接手を下す訳ではないのがミソ。

はっきり言って完全な不意打ちであり、殺気もクソも無いので防ぐのはまず不可能。というか、運命を操作して〝絶対に防げない形〟で相手を死に追いやる。仮に躱したとしても、それは次なるトドメのお膳立てでしかない。

最初の犠牲者は「のびあがり」。文字通り「真名が空き瓶を踏んだだけなのに」自身の弱点が露呈してしまい、鬼太郎に跡形も無くぶっ殺された。

宿命の戦い③

？？？？？：「スゲェ……あの二人、落ちながら戦ってる……！」

遥かなる空の彼方で。

『てぁっ！』『……！』

鬼太郎と鳴女が刃を交える。一刀毎に朱色と紫色が混じり合った美しい花火が上がり、稲妻のような爆音が轟く。大剣と双剣という、男の子なら誰もが手に汗握る戦いが、白昼堂々、成層圏よりもずっと高い天界で繰り広げられる。オゾンより上でも問題なかった。

『はぁっ！』

何度目かの剣戟を終えた所で、鬼太郎が蹴りを放つ。リモコン下駄で加速させた、ヘビー級のミドルキックだ。

しかし、鳴女はそれを肘で防ぎ、もう片方の柳葉刀で鬼太郎の足を切り裂いた。

『がっ、ぐっ、げっ……うぐぁっ！』

さらに、肘を梃子にして鬼太郎のバランスを崩し、無理矢理人中を晒させた所へ妖気を纏った破壊拳を三連打、もう一つオマケに裏拳で顎を跳ね上げ、最後は宙返りからの踵落としでフィニッシュ。溶けた鉄ですっかり塗り固められた襖だった残骸の上へ叩き落し、自らもそこへ着地した。

『ふぅ……！』『……』

そして、お互いに切っ先を向け、改めて対峙する。雲の下は、まだ見えない。

『ハッ！』『……！』

先制攻撃を仕掛けたのは鬼太郎。髪の毛を針ではなく小さな槍として纏め上げた、十二発の貫通弾である。素早い鳴女には体軸ズラしで躱されたが、その隙を突いて一気に接近、破竹の勢いで斬り掛かる。

『……ッ！』

袈裟斬りを躱し損ねた鳴女の脇腹が裂けた。赤黒い血が噴き出し、千切れた内臓が零れ落ちる。

『はぁあああっ……うぐぁっ!?』

だが、これはチャンスと見て襲い掛かる鬼太郎を、鳴女はサマーソルトキックで迎撃、逆に決戦のバトルフィールドから追放した。

しかし、鬼太郎も大人しく退場する気は無く、近くに飛来していた残骸にオカリナロープを巻き付け、まるでスパイダー○ンのような空中ブランコ振りで帰還。鳴女の眼球に重い膝蹴りを食らわせた。

さらに、鳴女が「目がぁ！」と怯んでいる間に、大剣を輪刀に変形させ、フラフープの如く華麗に振り回し、右乳房を切り落として、左大腿部を二枚に卸した後、体内電気を放出して落雷級のダメージを与えた。

だが、鳴女は恐ろしい速度で自己再生し、妖気を体内で爆発させ、鋭い切れ味を持った衝撃波として放ち、鬼太郎をズタズタにした。

――――――べんっ！

そして、琵琶の爆音波で自らを超高速で吹っ飛ばすという、とんでもないやり方で斬り掛かる。それも一発や二発ではない。

べん！　べん！　べん！　べん！　べんべんべんべんべんべんべんべんべんべんべんべん、べべん！

まるで鼓を打つようなノリで、四方八方から一気に20コンボを繰り出したベン！

『ぐっ……！』

鬼太郎は再生に集中する事で何とか耐えていたが、このままでは反撃出来ないまま、嬲り殺しにされてしまう。何だかんだで地上も近い。

――――――ベん！

（……今だ！）

そこで、鬼太郎は防ぐのも耐えるのも諦め、

『てやぁっ！』『……がっ!?』

タイミングを見計らって自分の腹に大剣を突っ込み、背後から飛んで来た鳴女の脳天を串刺しにした。

さらに、自らの傷口に連射式の指鉄砲を撃ち込む事で、胃液と光弾の雨あられを食らわせる。これには流石の鳴女も動きを止めざるを得ず、鬼太郎は体勢を立て直した。

『『ドワォッ!?』』

ちょうど、その時に鉄板襖が着地。全てを切断する物騒な回転板となって滑走し

始める。何十もの車や建物が犠牲となり、それ以上の人数がミンチとなった。

『はぁあああっ！』『……！』

それでも鬼太郎と鳴女は戦い続ける。相手の息の根を止める、その時まで。

『うぁっ!?』『ぬぉっ!?』

と、徐々に失速していた鉄板襖が桜田門に引っ掛かり、投げ出された二人は二重橋の対岸へそれぞれ着地した。

『『おおおおおおおおっ！』』

そして、すぐさま起き上り、最後の一閃を同時に放つ。一瞬の静寂。

『ぐっ……！』

膝を折ったのは鬼太郎だった。右腕以外全てを切り飛ばされたので、崩れ落ちたと言う方が正しい。

『うぐぉ……ぉ……っ！』

しかし、鳴女の方も胴体を上下に両断されており、こちらもグチャリと零れ落ちた。

さらに、完全に克服し切っていなかったのか、傷口が陽光焼けを起こし始めてい

る。致命傷だったのは、鳴女の方だった。

《鳴女さん！》『……』

だが、全身が気化してしまう前に、上野方面から突っ走って来たチャラトミヴェノムが彼女を優しく包み込み、そのまま何処かへと跳び去って行った。何の用事でそっちに行ってたのかは不明だけど、よく間に合ったね。

『……仕留めそこなったか』

悔しそうに歯を食いしばる鬼太郎。

しかし、チャラトミの助太刀が無ければ、確実に鳴女は死んでいた。それだけ強くなれたのだと、今はそう思うしかないだろう。

「『鬼太郎！』『鬼太郎ど～ん！』

そして、粗方の事が片付いた猫娘たちが一反木綿に乗って駆け付け、１ミリも動けない鬼太郎を回収。

こうして、偶然に偶然が重なって始まってしまった宿命の戦いは、〝痛み分け〟という形で決着した。

◆落ちながら戦ってる

数ある空中戦の中でも、飛べない奴らによる熱いバトル。高所から叩き付けられるという恐怖も何のその、自分が死ぬ前に相手を殺してやると言わんばかりの激しい戦いが約束されている、素晴らしい展開である。大抵は問題なく着地するか、叩き付けられても生きているパターンが多いが、気にしてはいけない。

ちなみに、初めてこの言葉を呟いたのは、ある意味伝説的なアニメ「ＭＵＳＡＳＨＩ-ＧＵＮ道-」が主人公の子分、ニンジャ太郎。気持ちは良く分かるが、驚いている場合か。あのじいさんは今まさに落ちてるんだよ！

戦いの後、それから……

弩シリアスかつ激重な展開、ハッジマルヨ～♪

宿命の戦いより、しばし後の事。

『鬼太郎……何なのよ、それ……!?』「あ……ぅ……っ!?」

戦いの傷を癒し、ゲゲゲハウスで鬼太郎に再会した猫娘と真名だったが、彼の顔を見た二人は言葉を失った。普段は髪の毛で隠されている、本来なら瞼がある筈のそこは、肉がゴッソリと削げ落ち、眼窩が露出している。

そう、左目周辺が白骨化しているのだ。

さらに、よく見ると一部の毛髪が白くなっている。病気も何にもない妖怪が白髪を持つなど、最初から白毛でもない限り有り得ない事である。

その筈なのに、どうしてこんな……？

『特訓の代償さ。天邪鬼たちとの手合わせの後、僕は久し振りに〝地獄童子〟に会っ

た。そこからは文字通り地獄を見たのさ』

『地獄を見た？』

『そう。僕は地獄童子、と言うよりは閻魔大王と契約して、一日だけ「無間地獄」に落ちてきた。他の亡者と同じようにね』

『何よそれ……』

鬼太郎は淡々と語っているが、全然意味が分からない。

無間地獄（別名「阿鼻地獄」）は八大地獄の最下層で、他の七つ――――等活・黒縄・衆合・叫喚・大叫喚・焦熱・大焦熱の責め苦を全て課せられる阿鼻叫喚の地獄であり、落ちるだけでも二千年は掛かると言われている。

だが、鬼太郎はそれを一日だけ体験して来たと言う。それも亡者と同じルートを通って。

二千年を一日って、そんな馬鹿な話があるだろうか？

『それは〝体感時間〟だよ。実際は二年で落ちる。つまり、無間地獄に落ちる亡者は、二千年分の苦痛を、たった二年で味わう事になるのさ』

ようするに、通常の二千倍の速さで魂が摩耗するのだ。

まるで「精神と時の部屋」のような仕様だが、あちらが神の修行場なのに対して、無間地獄（こちら）は亡者を拷問する為の監獄であり、負担の掛かり具合が天と地程に違う。そこに慈悲は全く無い。

落ちるだけで二千年分の苦しみを味わい、落ちた後はこの世の終わりまで殺され続ける。それが無間地獄である。

その凄まじい精神的な苦痛は、半永久的に生き続ける妖怪の魂すら無に還し、最強の生命力を持つ幽霊族の命でさえ歪めてしまう。

その結果が、今の鬼太郎だ。魂が死に始め、白骨化しているのがデフォルトになっている。二千年分を二年に、二年を一日にまで圧縮すれば当然である。

何せ７３００００年分の負荷が、一気に圧し掛かったのだから……。

『何よ、それは……』「……」

鬼太郎から告げられた残酷な事実に、猫娘が泣き崩れる。真名は沈黙しているが、それは唇から血が出る程に歯を食いしばっているからだ。

『……僕はそろそろ修行に戻るよ』

しかし、現実は更に非情だった。修行はまだ、終わっていないのである。

『どういう事よ!?　もう終わったんじゃないの!?』

『いいや。閻魔大王と契約した日数は七日間だ。後六日残っている』

つまり、鬼太郎は合計で５１１０００年分、魂を摩耗させるという事だ。

『そんな……そんなぁ……っ！』

これには、猫娘も号泣するしかなかった。真名の前だとか、もはや言っていられない。何百万年なんて、そんな負荷が掛かったら、鬼太郎の魂は完全に死んでしまう。妖怪は魂さえ無事なら蘇るが、砕ければ消滅してしまえば、二度と生き返らない。

例え、どうにか生き延びたとしても、確実に後遺症が出る。人並みしか余命が無くなるかもしれないし、永久に枯れ木のように動かなくなるかもしれない。何れにしろ、無事な彼の姿は、二度と拝めないだろう。

そんなのは、

『……嫌よ！　どうしてそこまでするの!?　何でそんなに死に急いでまで、強くなろうとするのよ！』

『あの女が強過ぎるからだ。ここまでやっても奴を殺しきる事が出来なかった。魂

を削って手に入れた強さを、あいつは平然と超えて来ている。……命を捨ててでも挑まなければ、奴には勝てない』

だが、猫娘の慟哭を前にしても、鬼太郎は小動もしなかった。既に覚悟が完了している。相討ちになってでも、鳴女を討伐する心積りである。

こうなったら、止めても無駄だろう。ここで再起不能にでもしなければ、彼は絶対に止まらない。最後の最期まで。

それだけ鳴女を危険視している、という事だ。

確かにその通りではある。鬼太郎が死ぬ思いで手にした力も、鳴女を仕留めるには至らなかった。進化のスピードが異常なのである。

加えて、鳴女は一人だけでは無い。仲間がいる。彼女程ではないが、仲間たちも充分に異常だ。特にチャラトミ。

一騎当千の実力と、百人力の仲間が揃う、闇の主人公。それが鳴女だ。

力に付け過ぎは無いし、むしろ全く足りない。

だからこそ、鬼太郎は妥協せず、命を懸けて修行をしているのである。

『――――何処までアタシを置き去りにすれば、気が済むのよ……！』

しかし、理解と納得は別物。頭で分かっていても、認められない事はあるのだ。

『……済まない。軽蔑してくれても、怨んでくれてもいい。それでも、僕は行くよ。地獄童子と……〝ユメコちゃん〟が待っているんだ』

だが、鬼太郎は猫娘に目をくれる事は無かった。背中でのみ語り、振り返らず出て行った。

「……」

続いて、彼を止めるどころか言葉を発しさえしなかった真名も、黙ったままで去っていく。恨みにも似た、ドロリとした決意を秘めて。

『……いいわよ……いいわよ……相手にしてくれなくたって』

最後に残された猫娘も、血の涙を流しながらゲゲゲハウスの暖簾を潜る。

そして、誰も居なくなった。

◆◆◆◆◆◆◆

その後、三人はそれぞれの道を歩む。

『――――悪いな、猫娘。だけど、行くしかない。〝大逆の四将〟が逃がされたとあってはね。……さて、よろしく頼むよ、地獄童子』

『……死ぬなよ』

『そんなつもりはないさ。……今は、ね』

一人は旧き同胞との契約を果たす為に無間の地獄へと舞い戻り、

「……〝エロイムエッサイム、我は求め訴えたり〟」

『おやおや、千年ぶりだね、犬神家の一族よ。いや、今は犬山か。……それで、今更ボクに何の用だい？』

「〝天国に至る方法〟を知りたいの。かつて、貴方がそうしたように」

一人は古い実家の物置に眠っていた摩訶不思議な異本で天使のような悪魔を呼び出し、

『……この試練を乗り越えた時、お前の望む力を得られよう。だが、これに挑んだが最後、お前は地獄以上の苦しみを受ける事になるぞ？』

『それがどうしたって言うの。鬼太郎はもっと苦しんでいるわ。これくらい乗り越えられなきゃ、アタシは一生彼の横に立てない！』

『ククク、愛か。まぁ、それも良かろう。ならば、行くといい……』

一人は何処かの魔窟で〝妖怪王へと至る試練〟を受けようとしていた。

それぞれの歩む道が、この物語にどのような結末を導くのか、それはまだ誰にも分からない……。

◆悪魔くん

「世界を平和にする為に悪魔の力を借りよう」とか考えちゃう、今時の小学五年生。ファウスト校長先生曰く「一万年に一人の天才児」。一歩間違えれば新世界の神と大差ない所業だが、彼は至って良い子です。専用アイテムは悪魔を使役する力を持つ魔笛「ソロモンの笛」（ファウスト校長からの贈り物）。

悪魔くんに味方する者は「白悪魔」、敵対するのは「黒悪魔」と言い、人間に悪さをするのは後者で、それらを退治しつつ理想郷を目指すのが、悪魔くんの目的である。最後の敵は人間とか言ってはいけない。

ちなみに、皆が良く知る〝玉ねぎ頭〟の悪魔くんは「埋れ木 真吾」という少年で、実は先代が二人いる（二人共、何処か鬼太郎に似ている）。

箒星の彼方で

一方その頃、西洋妖怪ハ……。

この世でもあの世でもない、無数の彗星が飛び交う宇宙を思わせる亜空間。
その中に揺然と浮かぶ、巨大な土星型の円盤――――超時空要塞「ブリガドーン」の内部にて。

『ハァ……ハァッ……！』

ベアトリス＝バックアップ・コアソウルズことベア子が、右上半身と頭部しか残っていないヴィクターを抱きかかえながら、ブリガドーンの中心部にある玉座の間を目指して直走っていた。自身も左腕が吹き飛び、腹部から夥しい量の血と臓物が零れ落ち、全身が火傷塗れという酷い有様であったが、そんな事などどうでも良いとばかりに進み続ける。

『――――ベアトリス様!?　その御姿は一体……!?』

すると、玉座の間に通じる一本道に差し掛かった所で、バックベアード軍の最高司令官、魔女のアデルと接触。当然、何がどうしてそうなったのか聞かれたが、

『ワタシの事はどうでも良いぃいいいっ！　早く彼を父上の所へぇえええっ！　ワタシノ魔りョクが、サイ生をソ害してイ〓――――――げぶはぁっ　！』

ベア子は自分の事など一切省みず、〝自分の強い魔力に中てられてヴィクターが身体を再生出来ない状態にある〟事だけを伝え、アデルに彼を託すと、滝のように吐血して気絶した。

『何て事……衛生兵！　早くベアトリス様を！　緊急搬送だ！　ヴィクターは私がベアード様の下へ連れて行く！』

『『『了解（ラジャラジャ）了解』』』

それを見たアデルは、即座に錬金生物（ホムンクルス）の医療班へベア子を託し、自身はヴィクターを主であるバックベアードの下へ運ぶ。

（まさか、ベアトリス様とヴィクターが、ここまでの深手を負うとは……！）

長い廊下を進みながら、アデルは思う。

ヴィクター・フランケンシュタインを含む三人衆は、何れも不死身に近い生命力

を持ち、ベア子に至ってはそれを遥かに超える魔力と不死性を有する、〝死なずの一人軍隊（ワンマンアーミー）〟だった筈である。

しかし、急な帰還を果たしたベア子とヴィクターは死に体だった。特にヴィクターは心肺が停止し、最早死んでいると言ってもいい。一応、ベア子の魔力を浴び過ぎて再生出来ないだけらしいが、助かるかどうかは微妙だ。

（確か、二人は日本へ先行調査に向かっていた筈……）

実際には調査と銘打った単なるデートだが、そこは言いっ子無しだろう。

問題は平和ボケした極東の島国に、ベア子たちに重傷を負わせる程の戦力があるという事実である。これは「ブリガドーン計画」は中止……いや、延期した方が良いのではないか。自身の胸に秘める決意を抜きにしても危険過ぎる。

（――――進言するだけしてみよう）

あのバックベアードが簡単に諦めるとは思わないが、事はそういう問題でもない。ベアード軍の進退が掛かっている。

『……ベアード様、お忙しい所、失礼致します』

アデルは息を飲みつつ、玉座の間の扉のベルを鳴らした。

『入れ』

たった一言。それだけで重厚な魔力が、扉越しにもアデルへ圧し掛かる。震える手を落ち着かせながら扉のロックを解除して進み入れば、そこには悪魔の如き単眼を持つ黒い太陽が。

彼こそが西洋妖怪の総大将にしてベアード軍の皇帝「バックベアード」だ。

『ベアード様、無礼を承知でお願いしたく――――――』

『良い。分かっている。まずはそやつの治療からだ』

言うが早いか、ベアードは念力でヴィクターを自分の近くへ運び、彼の再生力を邪魔しているベア子の残存魔力を取り除き、代わりに自身の魔力を純粋なエネルギーとして与え、瞬く間に傷を癒した。

『……無から有は生み出せない。あくまで私の細胞とエネルギーで補った仮初の物だ。助かるかどうかはそやつ次第だ。……下がって良し』

『……』

まるで神の如き力を発揮し、全てを一瞬でやり終えたベアードは、ヴィクターを運んで下がるよう言い付けたが、アデルは動かない。

『「ブリガドーン計画」は中止も延期もせんぞ。むしろ早める事にした』
『……!?』
だが、彼女の心中などお見通しだと言わんばかりに、ベアードが告げる。表情こそ保ったが、アデルの首筋を冷たい汗が伝った。
しかし、それでも言わねばならない。何せ最愛の妹の命が懸っているのだ。ここで退くなど、見殺しにするのと同じである。
『……お言葉ながら、ベアトリス様も重傷を負っております。彼女とヴィクターをここまで痛め付けるような連中が居るようでは、危険過ぎます』
『確かにそうだな。ベア子の視界を借りて観察させてもらったが、あれらは異常だ。敵対するのは得策ではないかもしれん』
『それでは――――』
『だが、私は先日〝夢〟を見た』
『夢、ですか……？』
突然何を言い出すのだろう？
アデルは正真正銘、心の底から首を傾げ、疑問を呈したものの、バックベアード

が次に放った言葉に戦慄した。

『……「来訪者」の夢だ。今までは断片的だったが、今回の物はかなりハッキリしていた。奴の復活が近い。日本の地獄に任せてなどおけるか。だからこそ、我が盟友を送り出したのだ』

『来訪者……！』

それは大正末期に突如現れた、世界の最後を告げる者。

当時、日本妖怪は大陸妖怪（「チー」率いる中国妖怪軍）の侵攻を受けており、その混乱に乗じて諸共滅ぼそうとしていたのだが、いざ三つ巴の戦いに臨もうとした時に来訪者が出現。三軍は壊滅状態へ陥り、一時的に共闘。現場に馳せ参じた伝説の剣豪の力を借りて、何とか来訪者を封じた後、ベアード軍は日本から完全に撤退……というより敗走し、長い雌伏の時を強いられる事となった。

病魔に侵される前の鬼太郎の父親、白面銀毛九尾の狐であるチー、西洋妖怪の総大将バックベアードの三者が揃っていながら手も足も出なかった、本当の怪物――

――来訪者。

その復活が近いとあっては、アデルも口を噤むしかなかった。

もはや、妹がどうこうですらない。世界最後の日が間近なのだ。

（それでも、私は……！）

どうしても妹を諦めきれないアデル。ブリガドーン計画が発動してしまえば、妹は……アニエスは死ぬ。たった一人残された肉親が、この世からもあの世からも、存在そのものが消えてしまう。

『……アデル。お前にチャンスをやろう』

『えっ……？』

と、内心で葛藤に揺れるアデルに、ベアードが温かくも底冷えする声で提案をする。

『こいつを生かして連れて来い。さすれば、お前の妹を候補から外してやろう』

さらに、魔力を中空に固めて創り上げた映像を見せた。そこに映っていたのは、『名前は「朱紗丸子（すさまるこ）」。力そのものは大した事は無いが、面白い星の巡り合わせをしているようだからな。こいつなら、アニエスの代わりも務まるかもしれん』

『……！』

ベア子とヴィクターを瀕死へ追い込むのに一役買った、座敷童子。この少女を連

れてくれれば、アニエスは見逃される。
『承知致しました。すぐにでも日本へ向かいます』
『精々励むと良い。妹の命が惜しいならばな』
『……はい』
何もかも見透かされている。
だが、出来る事は何もない。丸子を生贄に捧げる以外は。
アデルは恐怖に苛まれながらも気丈に振舞い、ヴィクターを抱えて、今度こそ玉座の間を後にした。
『――――――さて、死ぬとは思えんが、ベア子の様子でも見に行くとするか』
それを確認したベアードは、普段は誰にも見せる事のない人型の姿を取り、娘の下へ転移する。
『お前も見ているのだろう、慎吾(シンゴ)よ……』
消え入る前に虚空へ呟きながら。

◆バックベアード

西洋妖怪の総大将（もしくは大統領）を務める大妖怪。無数の触手が生えた黒いボールに眼を描けば、それがベアード様です。光化学スモッグがその正体と言われているが、考えたのは水木先生なのでもう確かめようがない。悲しい話である。

原作では微妙に小物臭さが拭えない奴だったが、アニメでは評価が爆上がりし、「どう足掻いても絶望」なボスキャラクターとなった。その知名度と人気具合は、2期（実質的な1期の続編）を除けば、全てのシリーズに登場している程。

視線を媒介にした強力な妖術を操り、肉体強度も半端じゃないという、「素で強い」を地で行くお方。その分かなり傲慢な面も見受けられ、それが仇となる事もあった（特に6期）。あとロリコンが許せない。

ちなみに、本作では病気になる前の目玉おやじと一戦交えていたりする。あの頃おやじは強かった（by バックベアード）。

ある日見た夢

１００年後の君たちへ……。

『ヴァアアアアッ！』

燃え盛る帝都で、毛先が赤み掛かった少年が、凄まじい雄叫びを上げている。

背丈はバックベアードどころかチーの人間形態時よりも低く、爪や牙が鋭い事を除けば姿形は人間と大差ない。

しかし、その強さは折り紙付きである。儂もチーも敗北した。儂は魂を歪められる程の致命傷を負い、チーは半ば殺生石になり掛けている。

『私は消えぬぞ……我らが宿願の為に……！』

バックベアードはまだ戦えているが、間もなく人型を維持出来なくなるだろう。

そもそも、少年の発する破壊的な邪気を、妖気の壁で防ぐのが精一杯の様子だ。

勝ち目がまるで無い。儂と互角の戦いを演じた、あのバックベアードが防戦一方と

は信じ難い光景である。

だが、それが事実。これが現実。もはや絶望しかなかった。

……結局、儂は誰も守れなかった。共に戦った仲間は死に絶え、最愛の妻たる岩子も深手を負っている。身重ながらに儂らを支えようと、前線に付いて来てしまったのが災いした。お腹の子共々、もう長くはないだろう。

それはチーやバックベアードも同じ事。中国妖怪は全滅し、ベアード軍の空中要塞「ブリガドーン」も陥落した。無事な者は一人もおらず、動いているのは儂ら三人だけ。

これが絶望と言わずして、何と言うのか。長らく日本を陰から支え、他国の妖怪たちによる侵略から日ノ本を守り続けた、その結末がこれとは……。

人間を真似る気は無かったが、思わず思ってしまう。神も仏もいないとはこの事か、と。あのいけ好かない男もせせら笑っているに違いない。生きていればの話だが。

嗚呼、マズい。視界がぼやけて来た。身体に力が全く入らない。

――――死ぬのか、儂は……こんな所、で……。

そして、意識諸共に絶望の淵へ落ちようとした、その時。

『グヴウゥゥッ！』

突如、少年が邪気の放出を止めた。

さらに、何処からともなく振るわれた、大地を切り裂くような斬撃。少年は素早い身の熟しで躱し、死の刃が飛んで来た方向を睨み付ける。

「……とうとうこの日が来たか」

この日、少年が初めて〝回避〟を行う程のそれを放ったのは、一人の剣豪であった。儂と変わらぬ背丈だが、正真正銘の人間であり、見た目だけなら時代に取り残された武家の青年でしかない。

しかし、その身に宿る力は凄まじく、何より背負った〝想い〟の数がとてつもない。

儂には見える。顔に炎の痣を持つその青年に寄り添う、無数の魂が。一人は彼の妻なのだろう。他は志を同じくした仲間だった者たちと言ったところか。

おそらく、青年も戦ってきたのだ。儂の知らぬ所で、少年の眷属たちと。多くの仲間を失い、愛する者を亡くしても、立ち止まる事無く進み続け、ここまでやって

来た。全ての敵を蹴散らして。

『ムザァアアアアアアン！』

そんな青年の姿を見て、少年が誰かの名を叫ぶ。

「それが誰かは分からぬが、君にとっては許せぬ相手なのだろう」

だが、青年の名前という訳でもなく、勘違いをしているらしい。

「しかし、私は君を討つ。我が妻うたの為、散っていった仲間の為」

《大丈夫、わたしは何時もあなたと共にありますよ》

《……頼む、今度こそアイツを死なせてやってくれ》

《俺からもお願いします》《お兄ちゃんを救って下さい》《済まねぇ、オレの迷いのせいで》《それは言いっ子無しよ》《……これで終わりにしよう》

背後の守護霊たちと共に、青年が刀を構える。

『グルルル……』

その姿に触発されたのか、少年も初めて武器を持った。己の骨を蛇腹の剣に変えたのである。

「行くぞ！　我ら、鬼滅の刃の下に！」

『ノヴァアアアアアアアアッ！』

そして、青年と少年が正面から刃を交え――――――、

◆◆◆◆◆◆◆

『……ハッ！』

儂は目を覚ました。じっと手を見る。何時もの小さな手だ。周囲を見渡す。相も変わらず、何もかもが大きい。儂から見ればの話だが。

この目玉に胴体が生えた小人の姿になってから、早数十年。実に無力で情けない有様であるが、これもまた世界最後の日を生き延びた証。誇りこそすれ、卑下する物ではない。そんな事をしては彼に失礼だろう。

人の身でありながら、儂ら妖怪を含む全てを業を背負って来訪者と戦い、命と引き換えに奴を封じた、あの日の青年に対して。

彼には感謝しかない。全ての命を救い、未来へ繋いでくれた。おかげで儂の息子も生きている。

しかし、ここ数日でハッキリと見るようになった悪夢が、激動の時代を伝えている。世界最後の日の再来が近い事を。鳴女の出現は、その予兆だったのかもしれな

い。

『目を覚ましたか、おやじ殿。……親子共々無理をし過ぎじゃ。見ている方は生きた心地がせんよ』

と、調べ物を手伝ってくれていた、砂掛け婆が苦言を呈して来た。

彼女もあの日が来るまでは若く美しい姿を保っていたのだが、来訪者の呪いのような邪気に中てられ、老化を抑える事が出来なくなってしまった。魂が歪み、死が近しくなってしまったのである。

いや、砂掛けだけではない。子泣きも塗り壁も一反木綿も、あの日を境にして急激に弱ってしまった。生き残れただけで儲け物だが、それでも申し訳なく思う。今もそうだ。

『済まんのぅ。……悪いが、もう少しだけ付き合ってくれ』

だが、止める訳にはいかない。今も息子が命を削っているのだから。

『分かった分かった。もう何も言わんわい』

不貞腐れつつも手伝ってくれる砂掛けには、本当に感謝しか無いのう。子泣きは……見なかった事にするか。

ともかく、何としても今日中に、この妖怪図書館で何らかの〝手掛かり〟を見付けなくては。

――――来訪者を完全に殺す為の方法を。

それが、今は何の力もない儂なりの、息子への協力じゃよ。

◆目玉おやじ

妖怪界の名門「幽霊族」の末裔。彼はその中でも王族に当たる血筋で、相応しい実力とルックスを持ち合わせた完璧超人だったが、後に〝身体が腐っていく不治の病〟を患い、アイデンティティーである目玉以外の全てを失った。それでも生きている辺り、幽霊族のしぶとさが窺える。

今作では来訪者との戦いによる後遺症でこの姿となった。人型のバックベアードと、鳴女VS鬼太郎を超える激闘を繰り広げる強さを持っていたが、来訪者には勝てなかった。

ちなみに、知識欲が殊更強い為か、割とミーハーである。スマフォもパソコンも

使えるぞ！

目覚めた悪夢

そう言えば何で6期はチーが出なかったんでしょウネ？　妖怪反物の話、結構好きなんでスガ。

『指鉄砲！』『しゃらくさい！』

わたしは今、幽霊族の末裔と戦っている。それも王族の者である。日本妖怪の頂点とでも言うべき相手に様子見などしていられる訳がない。初めから妖狐形態だ。

『フハハハハ、そんな狐にばかり構っている場合か!?』

『くっ……！』『ウヌゥ……！』

さらに、この場にはもう一人の敵がいる。西洋妖怪の大統領を自称する、バックベアードである。こちらも既に黒い太陽のような姿から、一つ目で黒紫色の逞しい肉体をした人型の形態を取っている。これが奴の本気の姿だ。

日本妖怪、大陸妖怪、西洋妖怪。三人の妖怪王たちが、極東の島国を巡って争っ

ている。

帝都はもはや焼野原。人間たちは恐れ戦き、蜘蛛の子を散らすように逃げていった。遅れた者がどうなったのかは言うまでもないだろう。部下の妖怪たちも、それぞれの役目を果たす為に散っていて、手を貸す余裕はない。

つまり、王たちの、王たちによる、王たちだけの頂上決戦である。善も悪も関係ない、勝った者が正義だ。

しかし、わたしは負けるつもりなど無い。殺生石と化し、地獄に魂を囚われた姉を助ける。その為に、わざわざこんな僻地までやって来たのである。わたし自身も封印されていたせいで、相当な時間が経ってしまった。

だが、愚かな人間共が勝手に始めた戦争により、世界中に陰の気が満ち溢れたおかげで、日本へ攻め入る事自体は割と簡単だった。文明開化によって人の出入りが増えたのも影響しているだろう。

しかし、その混乱に乗じて西洋妖怪までもがやって来た。彗星が関連しているとの事だが、詳細は不明だ。何にせよいい迷惑である。

わたしはただ姉を救いたいだけだというのに。

『慎吾（シンゴ）！』

と、包囲網を抜け出したらしい、別の幽霊族の女が現れた。王の証たる黄色と黒の縞模様が施された装飾品を身に付けていない事を鑑みるに、おそらく奴は分家筋の戦士だと思われる。少なくとも雑魚ではあるまい。

『助太刀なんてさせないわよ！』

だが、こちらの部下も一人駆け付けてきた。名は明美（ミンメイ）。見目麗しい中華美人という出で立ちだが、その正体は画皮という人食い鬼。絵を実体化させる能力が有り、その力によって常に人の姿を取っている。本来の姿（空飛ぶ鬼瓦みたいな生首）が嫌いだからだ。

まぁ、飛行能力を考慮しても、的がデカ過ぎる上に手足が使えないので、自由度という意味では人型の方が戦い易いのだろう。特に幽霊族のような達人の域に達した者を相手に獣のように襲い掛かっても、往なされるだけである。

『来なよ、不美人（ブサイク）！』『何ですってぇえええっ！』

幽霊族の女戦士と明美が刃を交える。一方は霊力の剣、一方は血生臭い墨の柳葉刀だ。

『フン、ちょこまかと……纏めて薙ぎ払ってくれる！　来い、ブリガドーン！』

《攻撃開始》

　すると、自分だけ助太刀がいないのが気に食わなかったのか、バックベアードが満月のような形をした空中要塞「ブリガドーン」を動かし、全てを消し飛ばそうとする。強力な魔女の魂を核に起動するというだけあって内包する魔力は凄まじく、それを一点に収束して放つ主砲は容易に大地を抉る威力がある。事実、そのせいで我が軍の半数が吹き飛び、帝都は阿鼻叫喚の地獄絵図になった。あれをこの場で撃たれる訳にはいかない。

《――――帝都上空に時空の歪みが発生！》

　しかし、主砲が撃たれる前に、更なる異常事態が発生した。

『な、何だ、あれは!?』

　ブリガドーンの通信を傍受したバックベアードが空を見上げ、呆けている。

　だが、これ幸いと攻めるには至らない。何故なら、わたしも天を仰いで絶句してしまったからだ。

『空が割れた!?』

幽霊族の王が〝それ〟を見て驚愕した。
そう、空が割れたのである。まるで鏡のように。絵画の世界でもなければ有り得そうもない、その異様な光景に誰も彼もが動けずにいた。
そして、破れた世界の向こう側から、凄まじい邪気が渦を巻いて放出され、やがて一人の少年を形作る。
毛先が赤く、全身に炎を思わせる痣を持つ事以外は何の変哲もない、小柄な日本男児。
ただし、かなり珍妙な格好をしており、黒い詰襟に様々な装飾品を付けている。左肩に猪頭の毛皮を当て、頸から竹筒と孤蝶の首飾りを下げ、腰に色取り取りの布切れ（おそらく羽織だった物）を巻き付け、耳に太陽を描いた耳飾りと、統一感が全く無い。
まるで、思い出の品をごそって取り付けたようだ。
武器の類は無い。精々、爪や牙が鋭いくらいである。
しかし、わたしには――――否、この場にいる全員が感じている。
あれは、ヤバい！

『フゥゥゥ……』

思わず耳を塞ぎたくなる怪電波のような邪気を振り撒きながら着陸した少年が、我々をゆっくりと一瞥すると、

『コクシボウ……ドウマ……アカザ……ナキメ……』

誰とも分からぬ者の名を呟き、

『ムザァアアアアアン！　ドコダァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！』

悍ましい雄叫びを上げたかと思うと、

『ヴォオアアアアアアアアッ！』

『なっ……ぐぁっ！』

瞬きする間に懐へ飛び込んできて、わたしの腹を殴り付けた。

『がっ……！』

たったそれだけで致命傷だった。拳に込められた邪気が身体を蝕み、腐らせていく。どうにか殺生石の秘術で全身に至るのは食い止めたが、わたしはもう駄目だろう。

そこからはまさしく地獄絵図だった。どいつもこいつも、幽霊族の王やバックベアードでさえ、倒れていく。

――――嗚呼、姉さん……助けられず、申し訳ない。役立たずな、不出来な弟を許してくれ……。

◆◆◆◆◆◆

『起きなさい、チー』

『はっ!?』

そして、わたしは目を覚ました。完全に殺生石と化してから何時振りかは分からぬが、再びこの世に生を受ける事が出来た。妖狐の姿でこそないが、人型は取れている。

いや、それはどうでもいい。そんな事よりも、今は！

『ね、姉さん!?』

『久し振りね、チー。おはようのキスでもしてあげましょうか？』

妖艶に笑う、美しい姿。間違い、姉さんだ！

『一体どうやって……』

『さぁね。いけ好かないあいつが頑張ったんじゃないの？』

詳細は不明だが、誰かが地獄から彼女を逃がしたようだ。ならば、他の三将も逃げた事だろう。これはいい。

『さーて、さっそくだけど、あたしと一緒に天下を取ってくれないかしら？』

『喜んで！』

さぁ、始めようか。我ら妖狐族による国盗り物語を……。

◆チー

かの有名な白面金毛九尾の狐の弟にして、中国妖怪を束ねる長。普段は若干胡散臭い中国オヤジの姿を取っているが、その正体は姉と同じく莫大な妖気を持った、白面銀毛九尾の狐である。

妖怪を反物にしてしまう丸薬を作ったり、言葉巧みに人間たちへ反物を売り込み洗脳して部下にするなど、今までの木端妖怪など足元にも及ばぬ知性を見せ付け、いざとなれば妖狐としての力をフルに発揮して敵を纏めて殲滅するなど、文武両

道っぷりを視聴者に印象付けた。特に3期の彼は軍事力が飛び抜けて凄まじく、攻め入られた日本妖怪たちは「気分は元寇」であった事だろう。

本作では交戦する前に殺生石になっていた為、鬼太郎とはまだ接触していない。おやじとはガチでやり合ったが。

鳴女さん、湯治する

ちょっと秘境で休憩。

ドンタコヤッホーイ♪

やぁ、諸君。皆の偶像（アイドル）の歌姫、鳴女さんだ。またしても久々になってしまったような気がするが、主人公をやっていくぞ。

……とは言え、今日は特に何かする気は無い。休憩だよ休憩。あれだけ落ちながら戦ったんだから、少しくらい良いだろう。危うく昇天し掛けたし。

そんな感じで、私は今温泉に来ている。人里離れた山奥にある、秘湯中の秘湯である。

まぁ、この私に掛かれば、距離など問題ではないのだがね。使い魔の目玉っちたちが頑張って見付けました。

目的は当然ながら湯治だ。この温泉、龍脈の真上にあるのか、やたらと気に満ち

溢れており、浸かっているだけで力が漲って来る。まさか、この世に本物の回復の泉的な場所があるとは思わなったが、探してみるもんだね。

『ふぅ……』

「良い湯ですねー」

ちなみに、人目に付かない秘湯なので、当たり前のように混浴である。ヤッタネ！

『それにしても、今回は参ったわねー』

「そうっスねぇ。鳴女さん、シャインス〇ークしそうでしたしね」

『そうだったか、とは言わねぇよ？』

理解したら死ぬ系じゃん。ゲッターはクトゥルフとも仲良く出来るかもしれない。もしくは同属嫌悪して殺し愛しちゃうかも。

……って、そんな事はどうでも良いんだよ。

『鬼太郎の奴、馬鹿みたいに強くなってたなぁ……』

ついこの間までは私にボッコボコにされてた癖に。一体どんな裏技使ったんだろう。

「でも、代償はあったんでしょう？」
『ああ。左目周辺が白骨化してたな』
お化けは病気も何も無いんじゃなかったっけ？
「たぶん、「精神と時の部屋」みたいな物でも使ったんじゃないですか？」
『え、あれ実際に有るの？』
何それ、私も欲しい。チートはイカンでしょー。
「いや、鳴女さんも充分チートだと思いますけど。何だかんだで鬼太郎もボロボロだったじゃないっスか」
『そうかなぁ～？』
私は真っ当に動画投稿してるだけなんだが。皆、どうして私を殺そうとしてくるんだろう。まるで意味が分からないんですけど。
「……そう言えば、何か「大逆の四将」とか言うのが、地獄から抜け出したみたいっスよ」
『何だ、そのナントカ四天王みたいなキャラクターは。雑魚なの？』
「そんな訳無いでしょう。古代から現在に至る中で、トップ４に入る極悪妖怪た

ちの事ですよ。やらかし過ぎて地獄が直接動いたらしいですね」
『で、地獄に収監されていると？』
「未来永劫にね」
うーん、それは退屈そう。ネットが繋がってれば別だけど、地獄じゃなぁ……。
『ちなみに、ラインナップは？』
「鵺、黒坊主、伊吹丸、玉藻の前、の四体です」
『割と大物が出て来たな』
黒坊主と伊吹丸ってのはよく分からんけど、鵺と玉藻の前は知ってるぜ。日本版の合成獣（キメラ）と九尾の狐の事だろ。
……封神演義の妲己、良いキャラしてたなー。ライバルでラスボスでヒロインとか、てんこ盛り過ぎなのよん♡
「ただし、黒坊主と伊吹丸に関しては情報が錯綜していて、若干眉唾物ですね。伝承に出て来る本人なのか、そもそも地上まで逃げ延びたのかも不明です。鵺と玉藻の前に関しては本物でしょう。特に玉藻の前――――というか、白面金毛九尾の狐が誰かと一緒にいるのが地上で目撃されてますからね」

『……前々から思ってたけど、どうやってそこまで正確に分かるんだ？　ネットの書き込みだけじゃ無理があるよな？』

「企業秘密です♪」

『可愛く言うなよ』

ある意味お前が一番のチートキャラだよ。あくまでも血鬼術みたいな物というだけで、身体は人間だからか、陽光に完全な耐性あるし。ズルいぞコラ。

――――まぁ、彼のおかげで私も少しずつ陽光を克服し始めてるから、良いんだけどね、別に。

『それで……どういう問題があるんだ？』

「そりゃあ、色々と悪さをするんでしょうよ。地獄の指名手配犯みたいな物ですし。この中では玉藻の前が一番ヤバいんじゃないですかねー。元が華陽太后で、妲己ですし」

『三国伝来とはよく言った物だよなぁ……』

インド、中国、日本と、バカンス気分で国を傾けて来たんだから、とんでもない話だよな。最後は蝉に化けてやり過ごそうとしたけど、水面に正体がバレバレに

映ってたせいで殺されるという、中々面白いやられ方をした訳だが。殺生石になった後は玄翁で叩き割られるし。真面な死に方を出来んのか、お前は。

「そう言えば彼女、弟がいるらしいですよ。チーっていう、白面銀毛九尾の狐です。たぶん、地上で落ち合ってたのって、コイツなんじゃないですかねー」

『フーム、割と面倒そうな話だな、それ』

姉が姉なら、弟も弟だろうし、組んだらロクな事にならない気がする。

「他にも、伊吹丸っぽい奴が鬼道衆の里を滅ぼしたり、鵺らしき妖怪が京都でコソコソ何かしてたり、かなり賑やかになって来ましたよ。黒坊主についてはよく分からないけど、今の所は静かみたいですね」

『なぁにそれぇ……』

超面倒臭い事になってるじゃん。誰だよ、そいつら逃がした奴。

「それで、鳴女さんはどうします？」

と、チャラトミが零余子印の血酒（零余子の血を日本酒に混ぜた物）をお猪口に注いで渡して来た。今日の夜に乾杯、という事だろう。喜んで受けようじゃないか。

『……そうだな』

私はクイッと一気に煽った後、チャラトミに注ぎ返してやる。ウム、良い呑みっぷりだ。

ならば、しっかりと応えてやらねばなるまい。

『いっその事、どれかに接触してみるかな。中立を受け入れるような連中でもないだろうしね。……そいつらを逃がした奴も気になるし』

「ま、そうなりますか」

『ウフフフ、そうだよ』

だから、今夜は寝かせないぞん♪

◆秘境の温泉

地下に野太い光脈筋が流れている温泉。妖怪やそれに纏わる職業の人たちが、よく訪れる場所の一つ。鬼太郎だって来るし、花子さんだって来る。

浸かるだけで力が漲る回復の泉（温）であり、濾して寝かせると光る酒に早変わりする。これもやっぱり回復アイテムで、またの名をエリクサー（ｍａｄｅ ｉｎ Ｊ

ＡＰＡＮ）と言う。

ちなみに、ここでの殺生沙汰は禁物であり、破ると生死を司るヌシ様（巨人サイズ）の天罰を喰らう。とりあえず、生きろ。

温泉に入る時は、ちゃんとルールを守ろうね。

零余子ちゃんの悪夢再び

※実際のカード名とは一切関係ありません。

やぁ、こんばんわんこソバ。零余子だよー。ミ○じゃないよー。

さてさて、早速だけどサービスシーンね。湯煙の向こうで疲れを癒す、水も滴るイイ女。つまり私である。

……えっ、何時もサービスしてるから、あまり意味がない、もっと過剰にしろ？それはミ○トさんの仕事だ。だらしのない大人の女代表だよね、あの人。深夜アニメとは言え、あそこまでヤッちゃって良いんだろうか。確実に加持さんと次元連結システムONしてただろ。見せ場こそ少ないものの、絶対に創聖のアレよりエロかった。異論は認める。

そんでもって、外出禁止令の出ている私が何故ゆえに温泉に来ているのかと言うと、単純に鳴女の付き添いである。

毎度お馴染み、怪我した鳴女が帰って来る→私を食べて回復する、みたいな流れを汲んだのだが、今回は殊更酷かったらしく、傷が治り切らなかったので、前々から目を付けていたらしい、この山奥の秘湯までやって来たのだ。

もちろん、無限城のワープ能力である。本当に便利よねぇ、この血鬼術。最近はお風呂や洗濯機にトイレまで設置され、益々便利になった。もうここだけで生活出来るんじゃないの？

ちなみに、当の鳴女は少し離れた所でチャラ男先生と混浴している。何だか難しい話をしているようだが、半分は単なるイチャコラだろう。リア充爆発しろ。

まぁ、そんなこんなで、私は――――否、私たちは秘湯へ旅行に来ている。

そう、オマケがいるのだ。それも割とたくさん。

『ぴきー』

まずは最近私と相棒化しているノームくん。今日も可愛い三角頭のマスコットである。

『良い湯ねぇ……』

さらに、無限城の掃除係、藤花。何時も通りの人面蜘蛛だ。この所、良質な金属

を吸収し過ぎたせいか、身体がメタル化している。槐の邪神かお前は。

本来は私と同じく出入り禁止の身だが、流石にちょっと可哀想に思ったので、鳴女にお願いして連れて来たのである。

……姑獲鳥はどうしたかって？

むろん、留守番だとも。今頃は夢子とよろしくやっている事だろう。ざまぁ無い。私、あいつ嫌いなんだよねー。

――――――で、ここからが問題なのだが、

「「……」」

非常に無口な、ノームくんと殆ど同じサイズの、男女の小人。

男の子は暗色系のシャツとジーンズに茶色のロングコートを纏い、素顔を穴あきのゴミ袋を帽子代わりにして隠している。

女の子は黒っぽいセーターとハーフパンツの上から黄色のレインコートを羽織っている。こちらも陰りで素顔が見え難い。

どう見ても、シックスとモノです、本当にありがとうございました。

何がどうしてこうなったのか。まだ鳴女にも話していない、その理由を説明する

には、少し時を遡る事になる……。

◆◆◆◆◆◆

数日前、無限城にて。

《よし、オレのターン！　オレは「真紅の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）」を特殊召喚し、攻撃！》

「ウフフフ、掛ったなアホが！　お前の攻撃したこのカードは、「ダイス・ポット」！　出目は私が「6」でお前が「5」！　6000のダメージを受けるがいいわ！」

《イワァアアアク！》

以前より企画していた「リモートデュエル」をやってみたのだが、中々の接戦を繰り広げた上で、地雷的なバーンで仕留めたった。

《クソーッ、「リフレクト・ネイチャー」は卑怯だぜ。おかげで「黒炎弾」が使えないだけじゃなくて、「ダイス・ポット」の効果もデメリットが殆ど消えちまうじゃん》

「それもまた戦略よ。アンタもギャンブル好きなら、少しは考えてやりなさいな」

《ちぇ～、また説教かよ。でも、今度は負けないからな！》

「何時でもいらっしゃいな。ちなみに、これ二日後くらいに動画として投稿するから」

《そうか、楽しみにしてるぜ！》

「自分の負け試合をたっぷりと楽しむがいい！」

《うっせーぞ！　良いんだよ、復習にはなるからな。それじゃ、あばよ！》

「アバ茶～♪」

まったく、あいつもまだまだ甘いわね。座敷童子の加護が付いた、この私にギャンブルで挑もうなんて、一万光年早いのよ……って、それは距離だわ。

いやー、でもギャンブルが成功すると気持ち良いわね。全国のロクデナシが嵌まるのも、分かる気がするわー。

まぁ、それはそれとして。

「夢子ちゃーん、終わったよー。今日もお願いねー」

『はいはーい』

今宵もまた、夢子ちゃんと夢の世界を冒険しよう。

最近は鳴女がチャラ男先生と一緒に寝る事が多くなり、その分自由時間が増えた

ので、せっかくだから暇を持て余しているであろう夢子ちゃんを誘って、ドリームワールドを楽しむのが、この所の日課だ。

「ノームくんもおいでー」『ぴきゅー』

もちろん、ノームくんも一緒だよ。一人きりになんてしないからね♪

えっ、姑獲鳥は誘わないのかって？

いやぁ、知らない人ですねぇ～。むしろ、孤独になれてホッとしてるんじゃないですかぁ～？

「それじゃ、お休みなさい」『ぴき』『ねむねむ……』

という事で、三人揃って夢の世界へ。今回の舞台は、どんな所かな～？

だが、慣れのせいか、私はこの時スッカリ忘れていた。シニョンが可愛らしい幼女の夢子ちゃんが、本当は老獪なロリババアだという事を。

「こ、ここは、まさか……!?」『ぴきゅ？』

霞み掛かった、罠だらけの黒い森。そこら中に犠牲者やその遺留品が転がっており、森全体が不気味な程に静まり返っている。

そして、すぐ傍にある古めかしい箱型テレビ。

「ここ、ハンターの森だぁ！」『ぴきゃー』
しかも、夢子ちゃん居ねぇし！
さては、自分だけ安全圏から高みの見物をするつもりだな！
チクショウ、どうしてこうなったぁ！

◆リトルナイトメア2

正式名称は「LITTLE NIGHTMARES Ⅱ -リトルナイトメア2-」。リトルナイトメアの続編にして前日譚（諸説あり）。電波塔から発せられる怪電波によって何もかもが歪んでしまったディストピアを、紙袋を被った少年「モノ」が「シックス」と共に駆け抜ける、ホラーアクションゲーム。前作と同じく基本的に右スクロールだが、やっぱり奥行きという罠がある。物理的な罠もわんさかあり、相変わらずデスルーラを強要してくる難易度高めのゲームである。

本作最大の特徴は、前作主人公であるシックスとコーププレイを楽しめる所であり、あらすじを読まずに始めたプレイヤーは、とある場所にて色々な意味で胸がド

キドキしてくる事だろう。前作の事を思うと手を繋ぐのも怖い。

今作も前作と同じく謎が散りばめられており、それらを自分なりに解釈して楽しめるのも魅力の一つ。今回はマスコットのノームが不在かと思いきや……？

あと、モノが不憫でなりません。どうしてああなった。

零余子ちゃんVSレアなハンター

????:「今回のハンターはレアだぜ！」

「……って、絶望してる場合じゃないわね」『ぴきゅ！』

しかし、何時までも呆けている場合ではない。ここがハンターの森ならば、いずれは遭遇する筈である。そうなったらお終いだ。今の私はノームくんたちとほぼ同じサイズだからね

「いや、大丈夫じゃないかしら？」

だが、よく考えると不思議の森に迷い込んだ時もレディ一派を妖刀で迎撃出来たし、今回もワンチャン行けるのではなかろうか。

「――――――って、今の私丸腰じゃん！」

何故か今回に限って妖刀が召喚出来ないし。呼ぼうとしても、謎の力で妨害されるのだ。

そこまでやるのか、夢子ちゃん。〝チートは使わせない〟という強い意志を感じる。やめちくれー。

一応、痣を浮かべて身体能力をブーストする事は可能だが、この大きさでボスキャラ相手に徒手空拳で勝つのは無理があるだろう。小人がどんなにパワーアップしても、巨人には敵わないのですよ。

そうと決まれば、スニーキングである。万が一にも見付からないよう、ゆっくりこっそり歩を進めよう。小枝を踏んでエンカウントとか笑えないし。その前にトラバサミを踏まないよう気を付けなくちゃ。

『ウォオオオッ！』

と、ノームくんと協力しつつ、不気味な山小屋に辿り着いた辺りで、ハンターの声が聞こえて来た。

えっ、何で……まだ家に入ってないのに!?

「あっ……」『ぴき……』

何かおかしいと思い、家を回り込んで裏口の方へ向かうと、二人の小人がハンターに狙撃されているのが見えた。

おいおいおい、あれってモノとシックスじゃん！
という事は、私は二人の逃避行よりも後からやって来たのか。何で私たちまでテレビから出て来たのかは知らんけど。
しかし、どうしたものか。私は結末を知ってるし、手助けした所で結果は変わらないだろう。モノは自らの殻に閉じこもり、シックスは見失った己を取り戻しに暴食を繰り返すだけ。救いなんて無い。
『ぴききー』
だけど、ノームくんが助けてあげてって言ってるんだ……！
「ああっ、もう、しょうがないなぁっ！」
『ムォオオッ!?』
突如背後から飛び出した私の姿に、ハンターが一瞬だけ気を取られる。
だが、それで充分だ。その隙にモノとシックスは無事に逃げ果せたし、何よりハンターの標的がこちらに変わった。もはや二人を追う事は無いだろう。
何せ、活きの良い獲物が、目の前にいるのだから。
――――――さぁ、どう出る？

正面切って勝つのは体格差的に不可能だが、猟銃を躱す事ぐらいは出来るし、振り切れる自信もある。後はゲームのように、逃げた先で別の猟銃を使ってハンティングしてやるまでだ。

『フウォオオッ！』

しかし、ハンターは銃口を私に向ける事は無く、それどころか猟銃を何か別の物に変形させる。

「「決闘ディスク」!?」

それはどう見ても決闘に使うアレだった。何でやねん。

……しまった、さっきまでリモートで決闘していたせいで頭が決闘脳になって、夢がごっちゃになったのか!?

まぁ、猟銃で殺り合うより数倍はマシである。ならば、こちらもカードで応えよう、

「……って、だから私、丸腰じゃん！」

ディスクどころかカードも持ってねぇよ！

ど、どうしよう、カードが無くちゃ、決闘もクソも――――――、

『ぴきーっ！』

すると、ノームくんが空を見上げるよう手を引いてくる。こんな時に何を……？

――――――ザシュッ！

「ズワォッ!?」

見上げた瞬間、空から妖刀「村正」が降って来た。律儀に私と同じサイズに縮んでいる。

さらに、柄の縁頭には、やたらとメカメカしい空のカードケースが括り付けられていた。

「おい、もしかして、これ……」

試しに触れてみると、村正は禍々しい決闘ディスクに、カードケースには現実で私が持っているデッキの一つが召喚される。決闘ディスクって、盾じゃなかったっけ？

ま、まぁいいや。デッキが揃い、ディスクも有り、敵が対峙しているというのなら、やる事は一つ。

「決闘だぁあああああっ！」『ムォオオオオッ！』

そして、私とハンターの決闘が始まった。
《さぁ、闇のゲームの始まりだぁ！》
「テメェ、降りて来いこのヤロウ！」
さらに、空に映る歌舞伎役者みたいなメイクを施した、夢子ちゃんのドアップ。
お前、それは化粧が下手過ぎるだろう。
とにかく、決闘だよ決闘！
「運命のダイスロール！」
まずは先攻・後攻、決めるべし。私は「6」、ハンターは「5」。先攻は譲ってやるぜぇ！
『フォオオオッ！』
そして、相手のメインフェイズ1。ハンターが繰り出したのは、
「エクゾディアの右腕」!?」
まさかのエクゾディアパーツだった。それはハンター違いだろ。レアになっちゃったよ。
つーか、「予想GUY」でリクルートしたって事は、ビートダウン系の【エクゾ

ディア】か!?

一体どういうチョイスなんだよ！

『ファアアォッ！』

さらに、「ジェスター・コンフィー」と「黒き森のウィッチ」を場に出し、「ウィッチ」を「聖魔の乙女アルテミス（マギストス・メイデン）」に変換する事で「召喚神エクゾディア」をサーチしてから、デッキの「究極召喚神エクゾディオス」をコストに「マジシャンズ・ソウルズ」を展開。

その後「右腕」と「メイデン」を「魔界の警邏課デスポリス」に変え、「魔術師の再演」を発動して「右腕」を蘇生し、「ソウルズ」で「再演」をコストに「魔術師の右手」をサーチ。

そして、「右腕」を「リンクリボー」に変換してから、「リンクリ」「警邏」「ソウルズ」をコストにして「ライトロード・ドミニオン キュリオス」をリンク召喚し、「Emトリック・クラウン」を墓地送り&１０００ＬＰで自己再生した後、デッキトップを3枚墓地へ送った。その中に「闇・道化師のペーテン」が混じっていたのか、別の「ペーテン」をリクルート。

さらに、「ペーテン」と「コンフィー」で「トロイメア・フェニックス」をリンク召喚し、それから「キュリオス」と「クラウン」を素材に「トロイメア・グリフォン」を「フェニックス」と相互リンク状態で召喚して、「右手」をコストに墓地の「魔神火炎砲」をセットした上で1ドローし、それを伏せた所でようやくハンターはターンを終了した。

……って、回し過ぎだろ!?

先攻1ターン目から完封殺する気満々じゃん。ビートダウンとは言え、【エクゾディア】で「トロイメア」を相互リンク状態で展開するな！

こんな状況でどう戦えば良いんだ!?　もっと腕にシルバーとか言ったら殺す！

「……私のターン、ドロー！」

だが、相手は泣いても笑っても容赦はしてくれない。決闘には勝者と敗者しかいない。デッド・オア・アライブなんだよ！

『ぴきゅー』

それに、私の肩には文字通りノームくんの命が懸っている。必ず勝ってみせる。ギャンブラーを舐めるなよ。

やぁあああってやるぜぇえええっ！

「私は「融合派兵」を発動し、「時の魔術師」を特殊召喚！」

まずはこのデッキの切り札、「時の魔術師」をリクルート。

『ムモォオオオッ！』

当然、相手は「魔神火炎砲」で妨害しようとしてくる。

しかし、それは甘いぞ！

「ならば、それにチェーン発動、「超融合」！　「時の魔術師」と「トロイメア・グリフォン」を素材に、「時の魔導士」を融合召喚！」

私は「魔神火炎砲」の効果にチェーンして、「時の魔導士」を「超融合」した。これで「魔神火炎砲」はバウンズ効果を使えず、「グリフォン」は消え去り、「フェニックス」は耐性を失った。今がチャンスだ。

「行くぞ！　「セカンド・チャンス」を出してから、「時の魔導士」の効果を発動、「タイム・ルーレット」！　……成功だ！　「タイム・ソーサリー」！　１９５０のダメージを受けろ！」

『ムォオオオッ！』

さっそく、「時の魔導士」の効果で「フェニックス」を葬り、１９５０のダメージをハンターに与える。

「まだだ！　墓地の「時の魔導士」と「百年竜（ハンドレッド・ドラゴン）」を「円融魔術（マジカライズ・フュージョン）」して、「ミュステリオンの竜冠」を融合召喚！　ダイレクトアタック！」

『ブムァアアッ！』

そして、「円融魔術」で呼び出した「ミュステリオンの竜冠」でダイレクトアタックを決めてやった。

「……これで終わりだ！　「簡易融合」を発動！　１０００ＬＰを支払い、もう１体の「時の魔導士」を召喚！　当然、成功！　「タイム・ソーサリー」！」

『グギャアアォッ！』

さらに、「簡易融合」した２枚目の「時の魔導士」で「タイム・ソーサリー」を食らわせ、勝負を決めた。後攻１ターンＫＩＬＬだぜぇ！

『ァ……ォ……』

ＬＰを失ったハンターは、どす黒い血を吐きながら倒れ、それきり動かなくなった。闇のゲームの敗者に待っているのは、「死」である。

「ほへぇ……」

ヤバい、腰が抜けた。もはや夢子に文句を言う気も起きない。当の本人はテレビを消すようにフェードアウトしてしまったので、元より抗議のしようが無いけどね。

それより、これからどうするかなぁ？

『ぴきゅきゅー』「……だよねー」

――――――ゲーム的にも、先に進むしかないよねぇ？

◆ハンター

リトルナイトメア２において、死の森で狩りを続ける猟師。獲物は人間の子供（小人）。ズタ袋で顔を隠しており、片目しか見えていない為、索敵能力は若干低いが、狙撃力自体は高い。元は獲物である小人たちと同じ存在だったかのような描写があるが、詳細は不明。自宅に家族の剥製を作っている、執拗に小さな物を追い掛けるなど、何処か〝寂しがりな子供〟のような一面もある。

森で出遭ったシックスを捕らえ、剥製作りをしていた所に、モノが自宅へ侵入。

しつこいぐらいに猟銃で追撃し続けたが、最期は予備の猟銃で自分が撃ち殺された。同じ最初のボスである「1」の「管理人」よりはしつこくないので、まだマシな方である。

零余子の小さな悪夢では、彼女が寝る前に動画撮りをしていた影響で、何故かレアなハンターになってしまった。

使用デッキは、ビートダウン軸の【エクゾディア】。パーツの「低レベルの通常モンスター」と、派生モンスターの「高レベルかつ守備力0の闇属性：魔法使い族モンスター」という特性を生かし、序盤に「トロイメア」系モンスターと「魔神火炎砲」でロックを決め、準備が整い次第「超弩級砲塔列車」系統で砲撃する、案外とパワフルなデッキ……の筈だったが、零余子のコイントス軸の【ギャンブル】に後攻1ターンKILLされた。

所詮はハンターの中でも最弱の男か……。

零余子ちゃんVSン熱血指導ティーチャー

????：「エンジョイデュエル！」

零余子：「嘘吐けぇ」

そして、私は仕方なくシックスとモノの後を追った訳だが、

「もう学校に入ったのか……」

二人の足はかなり早く、既に第二ステージ「学校」へ突入していた。

このステージは「いじめっこ」がそこかしこに蔓延り、「ティーチャー」が首を長くして待っている、社会の牢獄。入学したが最後、二度と卒業出来ない、公共施設としては問題しかない場所だ。

つーか、汚いなここ。全体的に年季が入っていて黴臭いし、いじめっこがティーチャーの目を盗んで散らかしまくってるから、そこら中ゴミだらけである。ハンターの森とは別方向で歪んでるよなぁ、ここ。

いや、今はそんな事よりもシックスたちだ。

幸い、二人が先に行っているおかげで、パズル要素は大体解決しているから、迷いなく進める。

『ウ～ヒャォ～ッ！』『ギャーギャーッ！』

「うーわー」

まぁ、見付からないかどうかは別だが。ホーム・ア○ーンなポイントは跳んで躱せるけど、この脳味噌空っぽ軍団は馬鹿みたいにいるから、シックスとモノが通過していたとしても、無限に湧いて来る。なるべくしてなった奴らは、幾らでもいるのである。

「オラオラァッ！」

『バッ！』『ギャッ！』

とは言え、普通に勝てるが。シックスに素手で殺されるような連中に押し負ける筈が無いだろ。

「あっ……！」『ピキィ!?』

『クワァッ！』

そんなこんなで、脳足りんの群れを粉々にしつつ、何も学べない校舎を突き進んでいると、授業の準備をしていたティーチャーとバッタリ遭遇。相変わらず気持ち悪いビジュアルしてますね。ノームくんも怖くて固まってるよ……。

『クケェーッ！』

さらに、当たり前のようにティーチング定規セット（黒板用の取っ手が付いている定規類）を決闘ディスクに変形させ、決闘を挑んで来た。首をゆらゆらと伸ばしながら。だからキモイって！

《君は、生き延びる事が出来るか？》

「墜ちろカトンボ！」

もちろん、隈取夢子ちゃんも覗き見。うわー、スッゲェ殴りたい。

ま、それは後でだ。今は決闘が先である。話し合いなんて必要ない。何でも決闘で解決すれば良いんだよ！

「運命のダイスロール！」『キィッ！』

ダイスの結果は私が「6」でティーチャーが「1」。お前、運悪過ぎるだろ。

とりあえず、先攻は私ね。ハンターの時は後攻だったからさ。

ちなみに、同じデッキは使えないらしく、今回は別の物を使用している。

「メインフェイズ！　モンスター1体とカードを1枚セットし、1000LPを払って「サモン・ダイス」を発動！　ダイスロール、「5」！　出でよ、「ゴッドオーガス」！　効果発動！　出目は「3・3・4」！　カードを2枚ドロー！　更に3枚伏せてから、ターンエンド！」

まずはT配置をしてから、このデッキの切り札の一つ、「ゴッドオーガス」を特殊召喚。手札を補充しつつ、場を整えてからターンを明け渡した。先攻は攻撃出来ないからね。

さぁ、お前のターンだぞ！

「あ、ドローフェイズで「出たら目」を発動するね」『……』

このデッキの要だからね、これ。

……だが、こいつ何を使ってくるんだろう？

定規繋がりで「ブンボーグ」を使うのか、もしくはン熱血指導でもしてくるのか。

ろくろ首みたいだから、「魔妖」という可能性も――――、

『キィィッ！』

しかし、ティーチャーが繰り出したのは、「ブンボーグ」でも「熱血指導」でも「魔妖」でもなく、

「「ギミック・パペット―ハンプティ・ダンプティ」だと!?」

「ギミック・パペット」だった。ン熱血指導じゃなくてファンサービスとは。造形的にはドクターが使いそうだけど、あえてこっちが「ギミック・パペット」を使用する辺り、ティーチャーが児童をどう見ているのかがよく分かる。所詮、熱血教師だったのは過去の話か。今はもう児童をいびって愉しむだけの老害だ。

そんなクソ婆は、この私が退職させてやる！

「でも、ちょっとくらい遠慮してくれませんかねぇ！」

「ハンプティ・ダンプティ」から「シザー・アーム」を出したって事は、「ギガンテス・ドール」出す気満々じゃん。させるかぁ！

「リバース罠発動、「無差別崩壊」！　出目は「2・3」！　消えろ、人形共！」

「無差別崩壊」の効果で、全力で阻止する！

『クァアアッ！』「何ィ!?」

だが、そっちは囮だったらしく、まずは「ビスク・ドール」が登場し、追加で「ネ

クロ・ドール」が暴走召喚され、「ネクロ・ドール」と「ビスク・ドール」でオーバーレイ・ネットワークを構築、「No.15 ギミック・パペット―ジャイアントキラー」がエクシーズ召喚された。

そして、増えた「ゴッドオーガス」を砲撃して、2体を破壊。

さらに、「RUM―アージェント・カオス・フォース」で「CNo.15 ギミック・パペット―シリアルキラー」にカオス・エクシーズ・チェンジ。最後の「ゴッドオーガス」を殺しに掛かって来た。

「……リバース罠発動、「リフレクト・ネイチャー」！　「ゴッドオーガス」の恨みを受けろ！」

しかし、ただ破壊されるのも癪なので、「リフレクト・ネイチャー」で反射ダメージを与えてやった。

『キィィイイイッ！』

私の反撃により確信した勝利の誇りに傷が付いたのか、ティーチャーが「ネクロ・ドール」2体で「No.40 ギミック・パペット―ヘブンズ・ストリングス」をエクシーズ召喚し「アージェント・カオス・フォース」を再発動、「CNo.40 ギミッ

ク・パペット―デビルズ・ストリングス」へカオス・エクシーズ・チェンジさせ、怒り任せに「シリアルキラー」と「デビルズ・ストリングス」で殴り掛かって来た。

――――そういう所が素人だってんだよなぁ。

幾らカードパワーが高くとも、使用者が馬鹿では、その力を活かせない。教師として失格である。

「……ぶち抜かれるのは、お前のLPだ！　殺れ、「ダイス・ポット」！」『レロレロレロレロ！』

サイコロ軸のバーン型【ギャンブル】を相手に、「出たら目」を真っ先に破壊せず、リバースモンスターへ攻撃を仕掛けるなんて、ド素人もいい所なんだよ！

結果はもちろん、私が「6」でティーチャーが「1」。さっきのダメージも相俟って、一撃で彼女のLPは吹き飛んだ。あんだけ派手に展開した癖に、ハンターどころか凡骨より手応え無いな、こいつ。

さて、罰ゲームとして、レロレロと便所掃除でもしてもらおうか。

『キヒヒヒ』『ギャーギャー！』『ケキャーッ！』

いや、その必要も無いわね。陰からコソコソと様子を窺っていたいじめっこたち

が、敗北し倒れ伏したティーチャーに駆け寄る。
むろん、助ける為などではない。
『ギァアアアアアアアアアアッ！』
「誰にも慕われない教師は、哀れね。さようなら」『ぴきゅー』
そして、今までの恨みを晴らさんと襲い掛かるいじめっこたちに嬲り殺されるティーチャーをバックに、私たちは学校を卒業した。
さぁ、次は病院ね。やだなぁ……。

◆ティーチャー
リトルナイトメア2の第二ステージ「学校」の支配者。年季の入った女教師であり、何処ぞの校長先生のように首を長く伸ばせる。男女差別が激しい上に児童をいびる事が大好きという、どうしようもない人物であり、互いの信頼関係は無いに等しい。「いじめっこ」も頭空っぽのなるべくしてなった馬鹿だから、どっちもどっちだが。「ベリーリトルナイトメア」を見る限り、シンマン（ノッポ男）と何らか

の関りがあるようだが、やっぱり詳細は不明。プリテンダーにでも聞いてみて。

今作での使用デッキは純正の【ギミック・パペット】。そこはドクターが使えよと言いたい所だが、もしかしたら彼の所から逃げて来たマネキンを使っているのかもしれない。

だが、ファンサービスを出来る程の腕は無いらしく、零余子のサイコロ軸バーン【ギャンブル】の地雷を踏みまくり、あっさりと敗北した。

本編では追撃しないだけで倒される描写は無いが、こちらでは闇のゲームをしたばかりに、今までの報いを受ける破目になった。

零余子ちゃんと大罪の二人

モノって心なしかシックスより貧弱な気がしまセン？

「うわっ、酷い雨だ」『ぴきー』

――――で、ボコボコに歪んだダクトを抜けて、いざ外に出てみれば、凄まじい土砂降りだった。建物は歪んでるし、そこら中がゴミだらけの穴だらけだしで、非常に歩き難い。

分かってはいたけど、これは堪える。本当に小汚いな、怪電波街（ベイルシティ）は……。

「ノームくんは、私の服の中に隠れててねー」『きゃっきゃっ♪』

まぁ、最初からレインコートを着ている私には何の問題も無いがな。学校を出る前に空へ注文したら、ハラリと落ちて来ましたよ。今回私、裸のままだったからね。その辺の布切れで誤魔化してたけど、いい加減に寒いし、恥ずかしい。

一応、シックスと間違えられないように、赤い物を選んだ……のは良いけど、何

か殺し屋みたいだな。ｇｏｏｄ-ｂｙｅ（グッバイ）交渉人。流石に雨の中、傘を差さずに踊る気はありません。

それはそれとして、シックスたちは何処まで進んだんだろうか。「病院」に突入したかな？

「おお……」『ぴきー』

と思ったら、意外とすぐそこに居た。丁度シックスが廃屋でアイデンティティーの黄色いレインコートを着用している場面である。ここプレイヤーとしてはビックリだよね、色んな意味で。

さて、作中の名シーンを拝んだ事だし、顔合わせと行こうかね。

「やぁやぁ、お二人さん。さっき振り」『ぴきゅー』

「……！」「……」

私が声を掛けると、モノはあからさまに警戒し、シックスは振り向きもしなかった。

うーん、温度差が凄いな。モノが〝物語の主人公を気取っている〟のに対して、シックスは〝歪んだヒロイン兼もう一人の主人公〟だからね。

互いに噛み合ってるようで、何処かズレている。手を繋いでいるのに、きちんと向き合っていない。

……これじゃあ、あの結果も仕方ないわよね。

ま、どう思われても良いさ。私は私とノームくんの為に動くまで。この悪夢の街から脱出するには、物語を終わらせるしかない。例えどんな結末が待っていようと。

それには、この二人と付かず離れずの距離を保って、行動を共にするのが一番である。

だが、実行するにはモノをどうにかしなくてはならない。こうも警戒されちゃあね。分からせる必要がある。

「ぐっ……！」「甘いよ、坊ちゃん」

勢い任せに殴り掛かって来たモノを、一瞬で制圧。力を抑圧した君じゃ、私には勝てないよ。シックスにも勝てないけど。というか、彼が素手で勝てる奴はいるんだろうか……。

「――――とまぁ、私はそれなりにやれる。そして、私はさっさとこの街を抜け出したい。一緒に居た方が、便利だと思うよ？」

「……」

モノには言うまでも無いので、シックスに尋ねてみる。答えは沈黙だった。なら、勝手に了承と見做そう。

「それじゃあ、しばらくの間だけ、よろしく」

「「……」」

何も言ってくれなーい。いいよ、もう……。

そんな感じで、私たちは服屋だったと思われる廃屋を抜け、ドクターの待つ第三ステージ「病院」へ裏窓から突入する。

ここはドクターが天井を這い回り、闇の中では彼の患者たちが救いを求めて彷徨っている、学校に負けず劣らずに不気味な場所だ。患者が光で固まるという特性上、物凄く暗くて超絶に見難いのが特徴である。

というか、私懐中電灯持ってないんだけど。

いやでも、モノだって途中でライトを拾うんだし、私も適当に何か回収して使うか。ともかく進もう。

「「「ごくごくごく」」」『ぴきゅん』

自販機で喉を潤してからね。ゲームではシステム的に飲めなかったけど、この世界では普通にイケるよ！

その後はサクサクと抜け、怪電波イベントを熟しながら、レントゲン撮影でぬいぐるみの中にある鍵を確認。皆で透けてみました（笑）。シックス、尾てい骨長いね。あと、ノームくんのシルエットが……うん、良そうか。

さらに、鍵を取り出し、腕や脚のマネキンがタップリぶら下がっている気色悪い場所へ入り、走るお手々をあしらいつつ、エレベーターの起動に必要なヒューズの一つ目をゲット。

「ほら、行くよ」「……」

時間が掛かりそうなので、二つ目はモノと二人で取りに行く事にした。どう見てもシックスとペアが良かったようだけど、知らんがな。

「「……」」

会話は無い。お互いに自分と相方の事ばかり考えているからね。

「おら、こっちだこっち！　そいつは頼りないぞぉ！」「……（怒）」

ただし、連携は完璧だ。たぶんシックス以上の身体能力を持つ私が患者を引き寄

せ、その隙に貧弱なモノがヒューズを回収する。それぞれの役割をきちんと熟せば、こんなにも早く進むんですよ。ここのだるまさんが転んだにはイライラさせられたから、スンゴイ爽快。実に晴れやかな気分だわー。

それにしても、こいつらもヤバいビジュアルしてるよなぁ。クチビルゲみたいな奴おるし。どういう〝治療〟を施したらこうなるんですか、ドクター。

さぁて、患者たちとの握手会や鬼ごっこも乗り越えた事だし、そろそろかな。

『ホォォォン！』

エレベーターを降りた先――――最後のマネキンハンドたちを叩き潰し、突入した闇の中に、そいつは居た。

芋虫を思わせるパツンパツンのボディを持つ、上だけ禿げてるおっさんが、蜘蛛のように天井を這いずり回っている。彼こそが病院の支配者、「ドクター」である。

うーん、何時見てもキモイですね。たぶん、貴方がリトルナイトメア２で一番気色悪いボスだと思いますよ。

そして、出遭ってしまったという事は、始まるのだ……決闘の時間が。

『ホギャォン！』

案の定、ドクターは（逆さのまま）患者だったであろうガラクタを決闘ディスクに組み替えて、私を見下ろした。焦点合って無いけどね。

「……行って！」

「「……！」」

とりあえず、二人を先に行かせ、私も村正を決闘ディスクに変形させて対峙する。

所謂〝後から追い掛ける〟って奴だ。

普通なら死亡フラグだが、私は死なないぞぉ！

という事で決闘だぁ～！

《……楽しい？》

「楽しくねぇよ！」

とにもかくにも、決闘だぁっ！

◆シックスとモノ

それぞれ「1」と「2」の主人公。ハンターの居る死の森で二人は出会い、ペ

イルシティの電波塔で永遠に別れた。二人が互いをどう思っていたのかは不明。作中の描写から、「1」のラスボス「レディ」の若かりし姿がシックス、「2」の元凶「シンマン」がモノと考えられるものの、やはり詳細は明かされない。そもそも過去の自分が未来の自分と同時に存在している事になるので、時間を遡行したか、それこそ悪夢の世界の〝ナニカ〟が本体に取って代わろうとしたのかもしれない。

何れにしろ、無限の闇に囚われてしまった二人に救いはなく、モノは延々と過去の己に殺され続け、シックスは未来の自分を食ってでも生き残ろうとして本来の彼女を見失った。

果たして、零余子が見たこの小さな悪夢では、一体どんな過程を経て、あの結末に至ったのだろうか……。

零余子ちゃんVSドクター・ジャドー診療所

ドクターなら【ギミック・パペット】を使うと思ッタ？　残念、違ウヨー。

まずは先攻・後攻、決めるべし！

「運命のダイスロール！」『オォォン！』

ダイスの結果は、私が「6」でドクターが「6」……って、ゾロ目だとぉ!?

クソッ、こうなったらジャンケンだ！

「負けた！」『ホッホッホォ！』

普通に負けました。私、何故かジャンケンは弱いんだよねぇ。あと、ムカつくな貴様。ドヤ顔するな、白目を剥いて！

『ホォオオン！』

ドクターは先攻を選んだか。

しかし、こいつは何を使うのかな。ハンターもティーチャーも予想の斜め上を

行くようなカテゴリーだったし、彼も額面通りではあるまい。少なくとも【ギミック・パペット】では無いだろう。

予想では、【お注射天使リリー】か【Ｈｅａｒｔ-ｅａｒｔ（ハート・ランド）】だと思います。私の中でＯＣＧ化されてるドクターのイメージって、この二人くらいなんだよねぇ。頼むから【ローズ・ドラゴン】は使わないで欲しい、見た目的に。アキさんだけは穢さないたげてー。嫁を穢して良いのは蟹だけなんよー。

そんなドクターの使用カードは、

『ホホゥッ！』

「最初からカオスＭＡＸだと!?」

まさかの「ブルーアイズ・カオス・ＭＡＸ・ドラゴン」だった。市長じゃなくて社長なのかよ！

しかも、「光の霊堂」を採用しているらしく、「青眼の亜白龍」と「青き眼の賢士」から「青眼の精霊龍」に繋ぎ、「蒼眼の銀龍」を繰り出して、「太古の白石」まで並べて来た。

その後は「太古の白石」を「転生炎獣アルミラージ」に変換し、エンドフェイズ

にデッキから「青眼の白龍」を特殊召喚してから、ドクターはターンを終了した。
銀龍ってお前……Dr・コ〇ーってか。いやいやいや。大空 ひばりさーん、あなたの曲ですよー、何とかして下さーい！
ま、待て、落ち着け、落ち着いて羊を数えるんだ、その内安らかになれる……って、死んじゃう死んじゃう、永眠しちゃう。
本当に落ち着こう、上を向いて決闘しよう。画角が怖いけど。
とりあえず、ドクターはターンを終了した。場には「霊堂」が張られ、「カオス・ＭＡＸ」「銀龍」「白龍」「アルミラージ」が並んでいる。伏せカードはない。手札が「白龍」一枚だけなんだから当たり前だが。
うーん、どうしたものか。「カオス・ＭＡＸ」は元々破壊出来ないし、「白龍」は「銀龍」で破壊耐性を得ている。「アルミラージ」を狙っても、さっさと墓地へ逃げられるだろう。中々に鉄壁の布陣である。流石は三番目のボス、一筋縄では行かないか。
――――――1ターンで全員倒すのは無理ね。あんまりにも硬過ぎる。かと言って放置するには「カオス・ＭＡＸ」も「銀龍」も能力が厄介だ。少なくとも、どち

らかはこのターンで始末しないと。

「私のターン、ドロー！」

よし、良いカードを引いた。畳み掛けるぜ！

「メインフェイズ！　まずは「宣告者の神巫」を召喚し、「虹光の宣告者」を墓地へ送って、「高等儀式術」をサーチして発動！　「デーモン・ソルジャー」「ハロハロ」「異次元トレーナー」を供物に、現れろ「闇の支配者ゾーク」！」

まずはこのデッキの切り札、「闇の支配者ゾーク」を高等な儀式で召喚。

「そして、手札から「デーモンの召喚」を供物に、「高尚儀式術」を発動！　出でよ、「デーモンの降臨」！　更に「宣告者の神巫」と「デーモンの降臨」でオーバーレイ・ネットワークを構築！　エクシーズ召喚、「デーモンの超越」！　バトルフェイズ、「転生炎獣アルミラージ」を攻撃！　「超雷弾」！」

さらに、「デーモンの召喚」を「デーモンの降臨」→「デーモンの超越」と進化させ、「アルミラージ」を攻撃。当然サクリファイス・エスケープされるが、それは予定通り。メインフェイズ2に移行するのが目的なのだから。

「――――――メインフェイズ2で「デーモンの超越」に「天霆號アーゼウス」を

重ね、効果を発動！　「アーゼウス」以外の全てを墓地へ送る！」
『ウァアアッ!?』
そう、これが私の狙い。対象耐性も破壊耐性も、「墓地に送る全体除去」には意味を為さない。消え去るがいい！
むろん、ゾークも墓地へ行くが、これも想定内。蘇生制限はクリアしてるからね。何時でも蘇りますよ。何処ぞの冥王とは違うんです。
一先ず、カードを一枚伏せてターンエンド。
「さぁ、お前のターンだ！」
『ホォオゥン！』
そして、ドクターのターン。
『ホッホォウ！』
「くっ、「トレード・イン」か……」
ここで手札交換を引くとか、ティーチャーと違って、運が良過ぎませんか？
さらに、「太古の白石」を除外して「カオス・ＭＡＸ」を回収し再度降臨させ、その後「亜白龍」と「白龍」の2体をコストに「龍の鏡」を発動して「青眼の究極亜

竜」まで融合召喚して来た。マ、マジかよ！

「リバース罠発動、「デーモンの呼び声」！　手札の「デーモン・ソルジャー」をコストに、蘇れ「ゾーク」！」

このまま攻撃を受けると大ダメージなので、「ゾーク」を一時復活させ肉盾とした。それでも半分近く持って行かれたが。

……良かったぁ、焦って先に「呼び声」発動しなくて。最悪、「究極亜竜」で慎重に処理されてたかもしれないしね。

とは言え、相手の場には対象と破壊に耐性を持った攻撃力４０００超えのモンスターが2体。対するこちらは「デーモンの呼び声」が発動しているのみ。

このドローで何か引かなきゃ負ける……！

「ドロー！　……これは」

ヤバい、サイコロやコイントスとは別方向で怖いギャンブルカードが来ちゃったぞ。

だが、もうやるしかない。奴らを葬り、逆転するには、〝コイツ〟に任せるしかないんだよぉ！

「墓地の「デーモンの降臨」「デーモンの超越」「異次元トレーナー」「宣告者の神巫」の4体を除外し、現れよ「天魔神 ノーレラス」！」

腹を括った私は、このデッキの隠し玉である「天魔神 ノーレラス」を特殊召喚した。一本角が生えた髑髏の顔を持つ悍ましい姿の悪魔が、手札もフィールドも自分自身さえも巻き込んで、墓地の闇へ消えていく。

そして、たった1枚だけだが、私にドローを許される。墓地以外の全てがリセットされたので、この引き次第ではとんでもない泥仕合が始まるだろう。

まさに、これが最後の希望。私の命運は、この1枚に懸っている。

大丈夫だ、自分を信じろ。何時もそうだったでしょ。こんな酷い時にこそ、最悪の時にこそ、「チャンス」というものは訪れる。

「追いつめられた時」こそ、冷静に物事に対処し、「チャンス」をものにするのよ、零余子！

『ぴきゃーん！』

ほら、ノームくんも応援してくれてる。これは勝つるぞぉ！

「ドロォオオオオッ！」

三回転するような勢いで、デッキトップを引く。

「――――――よしっ！」

引いたのは、「死者蘇生」だった。よっしゃあ、勝ったぞぉ！

「手札から、「死者蘇生」を発動！　我が下に来い、「青眼の究極亜竜」！　「アルティメット・バーン」！」

『ブヴォオオオッ！』

さっそく「究極亜白竜」を蘇生して、ドクターへダイレクトアタック。これでLPがほぼ横並びになった。

さぁ、今度はお前が賭ける番だぞ！

『ホォオオン！』

「くっ……「貪欲な壺」！」

しかし、ドクターも大概に豪運なようで、「貪欲な壺」でドローしやがった。

『フォオオオッ！』

「嘘だろ!?」

さらに、「青き眼の威光」で「究極亜竜」の攻撃を封じ、「死者蘇生」で「白龍」

を蘇らせてきた。クソッ、社長並みに愛されやがって！

こうなると「究極亜竜」が邪魔だな。「白龍」は消せるが、攻撃出来ないんじゃ壁にしかならない。レベルが高過ぎて素材に使えないし。

ならば、このドローで……！

「よっしゃ、私も「貪欲な壺」！」

もちろん、カードは鼻から出る！

「行くぞ、墓地の「虹光の宣告者」を除外して「執愛のウヴァループ」を特殊召喚！　更に「デーモン・ソルジャー」を召喚し、チューニング！　王者の咆哮、今天地を揺るがす。唯一無二なる覇者の力をその身に刻むがいい！　シンクロ召喚！　荒ぶる魂、「レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト」！」

そして、引いたカードで「スカーライト」をシンクロ召喚して、「白龍」を爆殺。５００ダメージを与えてから「灼熱のクリムゾン・ヘル・バーニング」を食らわせ、ドクターを火炙りにした。

『ォオォォ……オ……』

LPを失い、地に落ちるドクター。闇のゲームで命を焼かれた為、起き上がる事

は二度となかった。

『『……』』

さらに、そんな彼の遺体を、わらわらと集まって来た患者たちが、神輿を担ぐように運んでいく。一体何処へ連れて行くのだろう。

だが、私がドクターの末路を知る必要はない。彼がどうなろうと、〝私たち〟の目指すべきゴールは一つしか無いのだから。

「……行こう、ノームくん」『ぴきゅー』

さぁ、そろそろ物語も佳境だ。

◆ドクター

「リトルナイトメア2」の第三ステージ「病院」の支配者。ムッチムチで白目を剥いた禿げ頭のおっさんが天井を赤ん坊の如く這いずり回るという衝撃的なビジュアルを誇るボスキャラで、その最期もまたインパクト大。とりあえず、シックスの正気を疑ってしまう。

彼の病院には「患者」という名の生きたマネキンモンスターが蔓延っているのだが、少なくとも「ティーチャー」よりかは「患者」を大事に思っているようで、とある場面で「患者」の一人が危篤になった際は脱兎よりも素早く駆け寄り救命措置を行い、それを実行したであろうモノたちを殺す気かつ死に物狂いで追い掛けて来た。

そんな彼は、この世界ではまさかの儀式軸【青眼の白龍】を使用。決闘の腕も中々で、零余子に初めてダメージを与えたばかりか、かなりギリギリまで追い詰めた。

闇のゲームに敗北し息を引き取った彼を、「患者」たちがどうしたのかは、もはや誰にも分からない……。

零余子ちゃんと運命の白い闇

？？？：『時よ止まれ！』

「……っ、げほぁっ！」

正規ルートを通るのが面倒だったので、力尽くで壁をぶち抜いて退院した直後、込み上げて来る物があって、私は思い切り血反吐を吹き出した。

肉体的に死ぬ筈の無い私が吐血とは……これがもしかして、鳴女が言っていた〝魂が死ぬ〟という奴だろうか。闇のゲームにおけるダメージは、魂に直接傷を付けるらしい。

魂の傷は、不死身の鬼太郎ですら死を刻む。

やはり、闇のゲームの敗者に待っているのは「死」である。これは絶対に負けられないわね……。

『ぴきゅきゃー！』

「大丈夫だよ。ありがとね」

ノームくんは誰よりも優しいなぁ。

それにしても、シックスとモノは何処まで進んだのだろうか。ドクターが意外と手強くて、結構時間が掛かってしまった。

確かこの後は、シンマンにシックスが攫われて、モノは彼女を救出しようとペイルシティを彷徨う事になる筈だが、問題は今どの時点かという事だ。タイミングによっては、未来のモノにして全ての元凶であるシンマンと鉢合わせしてしまう。彼は他のクリーチャーと違い、レディのような超能力持ちなので、正面切って戦っても勝ち目の無い相手だ。

私としては、退治はモノに任せて、電波塔に入る辺りで合流したい所だが……。

「……あれは！」

街を見渡す為、建物の屋上へ移動したのだが、少し離れた場所にある廃電車の中を駆け抜けるモノと、それを追うシンマンの姿が。もうそこまで進んでいたのか！

どうする……待つべきか？

「いや……」

シックスと違って彼は曲がりなりにも一途だし、そこまで嫌いじゃないから、少しくらい手助けしてやるか。ここで見て見ぬ振りをするのもアレだしね。

「……！」

しかし、モノの下へ駆け付けようと、屋根伝いに疾走する私の前に、霊体（スタンド）みたいな物が現れる。

たぶん、シンマンの仕業だろうな。迫る敵意を感じ取り、足止めの分身を召喚したのだろう。あいつ、空間に干渉する能力があるみたいだからね。

あくまで、過去の自分（モノ）の相手は今の自分（シンマン）という事か。

良いだろう。予定調和だし、どうせお前は自分と向き合えない奴だからな。彼（シンマン）は彼（モノ）に任せるとする。

なら、私はこの分身体を蹴散らしてやる！

さぁ、正体を表せ。実像を結んで、私の相手をしろ。何時までもモヤモヤしてるんじゃねぇ！

『フン、ドアくらい開けて出ていけ』

「何でＤＩＯ様!?」

すると、それに応えるように、分身体はバリバリの存在感を放つ奴になった。どうしてそうなった。

もしかして、リモート決闘の前に読んでいた第３部のせいか!?

だが、所詮こいつは夢幻の偽物。本物の彼ではない。影ＤＩＯならぬ偽ＤＩＯである。遠慮なく粉砕玉砕してくれるわ！

《第３部、完！》

「勝手に終わらすな！」

と言うか、チャプターはもう４に移っとるわ。

――――――コホン。それでは改めまして、

『「決闘！」』

あ、ちゃんと言ってくれた。思えば、この世界で真面に喋る相手は初めてかも。

「運命のダイスロール！」

『当然「６」だ！』

「げっ、振り負けた!?」

出目は私が「５」で偽ＤＩＯが「６」だった。流石はＤＩＯ、偽物でも運命力

は健在か。声優同じだもんね。

あれ、という事はもしかして？

『私の先攻。まずは「ヘカテリス」を捨て、「神の居城―ヴァルハラ」をサーチし、発動。更に「テラ・フォーミング」で「光の結界」を呼び出し――――見せてやろう、我がスタンド「アルカナフォースXXI-THE WORLD」！　当然、正位置！』

「スタンドじゃねぇよ！」

声と姿の時点で来るとは思ってたけど、やっぱり【アルカナフォース】かよ！

何か、律儀に「THE WORLD」のコアがハートマークになってるしさぁ！

と、というか、待って、ちょっと待って……このパターンは、もしかして!?

『更に、「創造の代行者ヴィーナス」を召喚し、効果を発動！　1500のLPと引き換えに「神聖なる球体」3体を特殊召喚し、時よ止まれ「THE WORLD」！』

「やっぱりかい！」

「DIO」で「アルカナフォース」と来たら、絶対に出て来るわよねぇ。能力的にキング・クリムゾンとか言ってはいけない。

つーか、言うてる場合か。このままじゃ、私は……！

『無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄ァッ！』

「ぐわばぁあああああああああああああっ！」

そして、偽ＤＩＯの「ＴＨＥ ＷＯＲＬＤ」による〝ずっと俺のターン〟が発動した。

まずは「球体」２体で先攻１ターン目をすっ飛ばし、ダイレクトアタックを決めてから「ヴィーナス」と「球体」で更に１ターンかっとビングして、「神秘の代行者アース」を召喚して「命の代行者ネプチューン」をサーチしてから「ヴィーナス」を蘇らせ、三連打ァを食らわせた後に再スキップ。最後は「ＴＨＥ ＷＯＲＬＤ」のダイレクトアタックで、私に止めを刺した。

『所詮、貴様が私に勝とうなど、無駄無駄無駄なのだ』

「かはっ……」

こうして、私は手も足も出ないまま敗北し、生命活動を停止……死んだのだ。

◆シンマン

「リアルナイトメア２」の舞台「怪電波街（ペイルシティ）」を支配する大ボス。あくまでラスボスではない。どう見てもスレンダーマンである。

テレポートやサイコキネシスに加えて、時空を操る超能力が有るようで、周囲の建物すら歪める程の力がある。誰かを探して彷徨う時の旅人らしいが、詳細は不明。過去の自分（モノ）と自分を袖にした女（シックス）を探しているとも取れるが、やはり明確な答えはない。

今作では直接的な決闘こそしないが、とんでもない分身を召喚して決闘を任せた。

零余子ちゃんと運命の赤い絲

？？？？：「Ｒ」は「ＲＥＤ」、「Ｄ」は――――」
？？？：『「ＤＥＳＴＩＮＹ」！』

何もない。
何も見えないし、何も聞こえない。感じられる物が何一つない。
……久し振りだなぁ、本当に死ぬのは。前世のパワハラ会議以来か。何度同じ目にあっても、慣れる物じゃないわね。今世は絶対に殺される筈がないと思ってたのに。
――――嗚呼、敗けたんだな、私は。
まさか、「ＴＨＥ ＷＯＲＬＤ」で３ターンスキップＫＩＬＬされるとは思わなかった。出目で敗けたあの瞬間から、私の運命は決まっていたのか。ちょっと理不尽過ぎませんかね。

くそぅ、絶対にこの悪夢から抜け出すって決めてたのに、こんな所で躓くとは。
私はともかく、取り残されたノームくんはどうなるんだよ。あんな小さくて優しい子が、この不条理な世界で生き延びられる訳がない。
だから、私が必ず外の世界へ連れて行く、その筈だったのに……チクショウ……。
……。
「――――――はっ!?」
だが、私は目を覚ました。死の闇から、悪夢の世界へ。一体どうして……!?
『きゅ……』
「ノームくん!?」
しかし、すぐに分かってしまった。目の前で腹部から血を流して倒れている、ノームくんの姿を見て。私の唇に付いている血と、舌に残る鉄の味。間違いない。
そう、彼は自分の命を私に捧げたのである。
「そんな……嫌だよ、こんなのって……」
だが、幾ら後悔しても、もう遅い。彼は、このまま死ぬ――――――、
「駄目だぁあああああっ!」

そんなの絶対に認めないぞ！

「……応えろ、私の細胞！　生かせぇえええええっ！」

私は村正で切腹してから、その傷口へ押し付けるように、ノームくんを抱き締めた。強く強く、命が零れないように、血を交わらせる。肉体だけなら不死身の私なら、ノームくんの傷くらい癒せる筈だ。そう思わないと、やってられない。

……これまでの人生で、誰かの為に命を懸けようなど、考えた事も無かった。前世の継母も今世の両親も結局は掌を返したし、周囲の人々も大体同じだった。

だけど、ノームくんは違う。私の為に、私なんかの命を救う為に、自らの命を差し出した。まるで、お伽話の白い兎だ。ここまで自己犠牲を実行出来る者など、これまでもこれからもいないだろう。

だから、私は自分の命をあげる。魂を分かち合って、運命共同体になる。

『うっ……』「……！」

私が心の底から願ったからか、奇跡が起きた。ノームくんは傷が塞がったばかりか、人としての姿を取り戻した。

そう、彼はキッド（かれ）だったのである。薄々そんな感じはしてたけどね。

さらに、その胸元には私たちにしか見えない、お互いを繋ぐ赤い糸が伸びている。二人で一人になった証拠だ。死がふたりを分かつまで、ずっと一緒である。

「行こう！」『うん！』

さぁ、いい加減にこの下らない茶番劇（リトルナイトメア）を終わらせるとしよう。

モノは恐らく電波塔までの一本道へ到達しているだろうし、魂が五分になったせいで体力が恐ろしく減っているし、色々な意味で時間が無い。早く現実の肉体へ戻らなければ。

『また貴様か』

「それはこっちの台詞だ」

まぁ、居ますよねぇ。何気にちょっと向こうでモノがシンマンとタイマンしてるし。いよいよクライマックスって感じだ。

『何度やっても無駄だ。最後に勝つのは、このＤＩＯなのだ！』

『「それはどうかな。やってみなくちゃ分からないっ！」』

そう、私はノームくんと二人で一人。運命共同体となった私たちは、無敵だ。負ける気が全然しないぜぇ！

『「運命のダイスロール！」』
まずは先攻・後攻、決めるべし。
『む……』
「だから言ったでしょう。やってみなくちゃ、分からないってね」
結果は「6」のゾロ目。次はジャンケンである。
『ジャンケン……』『ポン！』『何ィ!?　チョキだとぉ!?』
ジャンケンに弱い私に代わり、ノームくんがチョキを出して、偽ＤＩＯから先攻をもぎ取った。私たちは二人で一人だから、全く問題ないわね、うん。
しかし、これも仕方のない事。どうせ卑怯な運命力で「ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ」するだろうし、先攻は渡せないなぁ！
という事で、メインフェイズ！
「「闇の誘惑」を発動！　カードを2枚引き、「Ａ・Ｏ・Ｊ　Ｄ.Ｄ.チェッカー」を除外！　更にモンスター1体とカードを1枚セットして、ターンエンド！」
とりあえず、場を整える。消極的と思われるかもしれないが、布石は打った。後は畳み掛けるのみ。

『「A・O・J（あしたはおはようジャンピング）」だと？　そんな産廃シリーズを使うとは、勝負を捨てたか？』

「あんたあのギャルゲープレイしたのかよ……」

よっぽど暇だったんだろうなぁ、偽ＤＩＯ（シンマン）の本体。

『私のターン！　まずは「ヘカテリス」をコストに「神の居城―ヴァルハラ」をサーチして発動し――――』

その動き……やっぱり握ってたか。信じてたわよ！

「その瞬間、リバース罠発動「闇次元の解放」！　帰還せよ、「Ｄ・Ｄ・チェッカー」！」

『何ッ、我が「ＴＨＥ ＷＯＲＬＤ」を封じるだと……!?』

「ＴＨＥ ＷＯＲＬＤ」を出そうとしていた偽ＤＩＯの動きを止める。「Ｄ・Ｄ・チェッカー」は〝光属性モンスターの特殊召喚を封じる〟対光化学生命体（ワーム）用偵察機だ。破滅の光にとっても厄介な兵器だろうさ。

『だったらこうするまでだ！　出でよ、「アルカナフォースⅠ-ＴＨＥ ＭＡＧＩＣＩＡＮ」！　当然、正位置！　更に「天空の聖水」で「創造の代行者ヴィーナス」をサーチし、攻撃力を倍加させる！』

だが、偽ＤＩＯは焦らず、冷静に「アルカナフォースⅠ-ＴＨＥ ＭＡＧＩＣＩＡＮ」を召喚し正位置の効果を得て、「聖水」で「ヴィーナス」をサーチする事で元々の攻撃を倍にした。直接殴り倒しに来たか。

しかし、「ＭＡＧＩＣＩＡＮ」を通常召喚した以上、このターンは「ＴＨＥ ＷＯＲＬＤ」を展開する事は出来ない。最低限の役目は果たしたと言える。

「……「銃砲撃」を発動！」

『だからどうしたのだ！　消えろ、ガラクタめ！　「アルカナ・マジック」！』

こうして、可愛いホタル型ロボットは破壊され、次元の闇へ追放されたが、

「……その瞬間、「デスペラード・リボルバー・ドラゴン」を特殊召喚！　「ロシアン・ルーレット」！　消え失せろ、破滅の使者と神の居城よ！」

『ぬぅ……ターン終了だ！』

おかげで、手札の「デスペラード・リボルバー・ドラゴン」を呼ばせて貰った。結果は、当然大当たり。「ＭＡＧＩＣＩＡＮ」と「ヴァルハラ」を蜂の巣にしてやった。

ついでにカードを１枚ドローし、偽ＤＩＯのヴィーナスを墓地へ叩き落して、ＬＰ

に５００ダメージを食らわせる。

つーか、こいつ「ＴＨＥ ＷＯＲＬＤ」だけじゃなくて、「ＴＨＥ ＤＡＲＫ ＲＵＬＥＲ」まで握ってやがった。「ＤＡＲＫ ＲＵＬＥＲだッ！」ってか。やらせねぇよ？

『おのれぇ、よくも下衆なダメージを！　よくもおのれぇえええええっ！』

プークスクス、怒ってる怒ってる～♪

でも、もう遅い。手も足も出ない屈辱を、今度は貴様に味わわせてやる。

「私のターン、ドロー！　そして、メインフェイズ！　手札を１枚捨て、「Ｄ・Ｄ・Ｒ」を発動！　再び帰還せよ、「Ｄ・Ｄ・チェッカー」！　更に「融合派兵」で「リボルバー・ドラゴン」をリクルートしてから、「ＢＭ-４ボム・スパイダー」を反転召喚し……行くぞ、「デスペラード」「リボルバー・ドラゴン」「Ｄ・Ｄ・チェッカー」「ボム・スパイダー」でダイレクトアタック！」

そして、私のターンに「デスペラード」「リボルバー」「Ｄ・Ｄ・チェッカー」の４体を展開し、荒ぶる偽ＤＩＯへ直接攻撃を決めた。この時ばかりは、私も悪魔のような顔をしていたかもしれない。

だが、私に死の恐怖を思い出させてくれた貴様に送る言葉は、たったの一つ。
「ｇｏｏｄ-ｂｙｅ（グッバイ）、運命の白い闇（ディストラクター）！」
そんなに結果（せかい）が気に食わないのなら、二度と夢枕に立つな！
『このＤＩＯが……このＤＩＯがぁあああああああああああああ！』
こうして、偽ＤＩＯは闇へと還った。
丁度その時、シンマンもモノに敗北し、心半ばに膝を折り、光に消えた。ざまぁ見さらせ。
「かはっ……！」
と、またしても吐血。やはり無理をし過ぎたか。クソッ、モノの奴どんどん先に行きやがって……。
『零余子ちゃん』
すると、キッドくんが肩を貸してくれた。自分だって辛いだろうに。そんな事されたら、惚れてしまうやないか。
「キッドくん……」
『ノームで良いよ。人間としての僕は、とっくに死んでいるからね』

「なら、ノームズ・キッド・ランナウェイって事で」
『何か不思議とむず痒くなる名前だなぁ……』
そんな感じで、キッドくんは「ノーム」という愛称の「ノームズ・キッド・ランナウェイ」に決定した。
その後、私たちは互いを支え合いながら、音を頼りに電波塔を彷徨い、遂にモノへ追い付いたのだが、
『ウギャゥウウウッ！』「うぅっ……！」
ビーストモードのシックスに滅茶苦茶殺されそうになってた。本当に情けない奴だなお前は！
「……ていやっ！」『オギャゥウウッ!?』
という事で、モノを締め上げる捩じくれた長い腕にドロップキック。ダメージには繋がらなかったが、驚いたシックスはモノを手放した。
『グルルルル……！』
獲物を取り上げられたシックスが威嚇してくるものの、そんなの知らんなぁ。
ここは私が見た悪夢の世界。最後に物を言うのは、カード（これ）なんだよ……ってヤバ

い、そう言えばもうデッキが無いんだった。

「……」

と、ノームくんに肩を借りて立ち上がったモノが、黒い光の塊を差し出してくる。

私が受け取ると、それは一つのデッキとなり、村正にセットされた。

なるほど、これがアンタなりの誠意って訳ね。今一信用ならない私に力を貸してでも、シックスを頼むと。本当に一途よね、君。

正直、ファンデッキも良い所なデッキ内容だけど、託されたからには、勝ってやるさ。

『ウギャアアヴヴヴッ！』

それを見たシックスも、決闘をする態勢を取る。周囲の残骸や肉壁を強殖装甲して、金色のアンモナイトを思わせる外骨格を形成した。

さらに、崩れかかった地面を叩き壊して異次元への扉を開き、様々な玩具が飛び交う異空間へと私たちを呑み込む。不思議と見えない足場が存在し、空を歩いているような気分になる。

そうか、これがお前の決闘のバトルフィールドか。

ならば、私もそれに応えよう。
「決闘！」『ウキャォオオオッ！』
これでフィナーレだ、シックス！
決闘開始ィイイイイイイイイ！
【リトルナアイトメアーズ】VS【ザ・シックス・デイ】

◆R・D

１９９９年に放映されたロボットアニメ「ＴＨＥビッグオー」に登場する殺し屋のアンドロイド。物語のヒロインである「Ｒ・ドロシー・ウェインライト」と同型の機体で、まるで赤ずきんのような格好をしており、バケットに入れている拳銃が得物。名前は「赤い運命」を意味している。

己がメモリーに従い、忌むべき「40年前のメモリー」を思い出した人間を〝雨の中差すくらいに当たり前〟に次々と殺害し、〝神の乗り物〟を操る自覚に欠ける主人公の「ロジャー・スミス」を凄まじい顔芸を添えて抹殺しようとしたが、最後

はドロシーと共に〝勝手に動いた〟ビッグオーに殴り潰された。
決め台詞は『ｇｏｏｄ-ｂｙｅ、交渉人（ネゴシエーター）！』。

悪しき決闘者たち

いあ！　いあ！　はすたあ！

今始まる、赤い少女と金色の闇の最終決闘。アンティは互いの命という、闇のゲームである。

「運命のダイスロール！」『ギィイイッ！』

まずはダイスによる先攻・後攻の決定戦。

しかし、出目はお互いに「6」。続くジャンケンも「グー・チョキ・パー」のあいこばかり。

ならば、これでどうだと行った「あっちむいてほい」により、ようやくシックスの先攻が決定した。何故コイントスをしないのかは置いておこう。

『グギィイイッ！』

という事で、シックスのメインフェイズ。

まずは「暗黒の招来神」を召喚し、「幻魔皇ラビエル」をサーチ。その後「七精の解門」を発動して「カオス・コア」を、「悪王アフリマ」を捨てて「闇黒世界―シャドウ・ディストピア―」をそれぞれ引っ張って来て、「闇黒世界」を張った。

そして、「招来神」で「カプシェル」を召喚してから、「招来神」を「リンクリボー」に変換した上で「解門」の(2)の効果により「招来神」を蘇生。

さらに、今度は「招来神」を「サクリファイス・アニマ」に書き換え、「リンクリボー」「アニマ」「カプシェル」で「ライトロード・ドミニオン キュリオス」をリンク召喚して、2枚目の「七精の解門」を墓地へ送った。

最後に「カプシェル」の効果で引いた死者蘇生で「混沌の召喚神」を蘇生、リリースする事で手札から「幻魔皇ラビエル」を特殊召喚し、「解門」で「解門」を回収して、「シャドウトークン」を1体呼び出してからターンを終了した。

1ターンが、とても長い。

だが、それは最近の決闘ではよくある事。気にせず零余子にターンを移そう。

「私のターン、ドロー！　「ダーク・サンクチュアリ」と「エクトプラズマー」を発動！　更に「怨念のキラードール」を召喚し、「手札抹殺」を発動！　手札を2

枚捨てカードを2枚ドローする！　そして、カードを1枚伏せ、「キラードール」を射出してターンエンド！」

　こちらはそこまで長くはないが、非常に嫌らしい布陣を築いた。あえてモンスターゾーンがガラ空きというのが逆に怖い。

『ギャヴヴウウッ！』

　しかし、翼をもがれた獣（ビースト）は恐れない。

　まずは「解門」で「解門」を再度回収し発動。「招来神」をサーチして召喚、最後の「解門」をサーチしてから、それを捨てて「カプシェル」を蘇生し、「カプシェル」と「シャドウトークン」で「見習い魔嬢」をリンク召喚して1ドロー。その後「招来神」で「混沌の召喚神」を追加召喚して、次に墓地の「死者蘇生」と「手札抹殺」を除外して「カクリヨノチザクラ」を特殊召喚し、「魔嬢」「招来神」「混沌」「カクリヨ」の4体で「閉ザサレシ世界ノ冥神（サロス＝エレス・クルヌギアス）」を呼び出す。

　そして、零余子が全く動かない事を確認し、伏せカードを〝攻撃反応型罠〟か〝ブラフ〟と判断して、「ハーピィの羽根箒」で厄介な永続カードごと一掃、一気に攻めへ転じようとする。

「甘いぞシックス！　お前が壊したこれは、「ミラーフォース・ランチャー」だ！　底知れぬ絶望の淵へ沈め！」

だが、それもまた零余子の罠であり、セット状態で破壊された事により「ミラーフォース・ランチャー」の効果が起動、自身と共にデッキから「聖なるバリア―ミラーフォース―」をセットした。「羽根箒」も使ってしまったし、これでは攻撃出来ない。

『グギギギ……！』

シックスは「悪夢再び」で「招来神」と「カプシェル」をサルベージしてから、とても悔しそうにターンを終了した。

「私のターン、ドロー！　スタンバイフェイズで「怨念のキラードール」を蘇生！」

『アギャァアアアゥ！』

一応、せめてもの嫌がらせとして「冥神」の効果で「キラードール」の蘇生を妨害したのだが、それは囮人形だった。

「メインフェイズ！　「相愛のアンブレカム」を召喚し、「ノーマテリア」を蘇生して、チューニング！　名状し難き魔風なる神よ！　闇に蠢く邪悪なる触手をエル

ダーサインの下に集め、「黄衣の王」として顕現せよ！　シンクロ召喚！　「古神（コシン）ハストール」！」

そう、この「黄衣の女王（レディ）」を召喚する為の。

これぞ【リトルナイトメアーズ】の主人公、レベル4風属性シンクロモンスターの「古神ハストール」だ。モノに託された、シックスを倒す為のデッキに相応しいカードである。

「更に手札から「月鏡の盾」を装備し、「閉ザサレシ世界ノ冥神」を攻撃！「魔境怪風波（ミラーフォース・ブル・ストーム）」！」

『ヴギィイイイッ！』

さらに、「月鏡の盾」で「邪神アバター」と同じ戦闘能力を得て、「ハストール」は「月鏡」を翳すように黄金の波動を放ち、「冥神」を粉砕、玉砕、大喝采した。スゴイぞー、カッコいいぞー！

「さぁ、お前のターンだ！　倒したいんだろう、私を？　やれるものならやってみなぁ！」

そして、「ハストール」と一緒に、これでもかと言わんばかりに煽りまくって、零

余子はターンを終了した。

『ヴギィイイイッ！』

遠目からでも分かるくらいにピキピキしながら、シックスがドローする。

しかし、直ぐには動かない。当然だろう。「ハストール」は下手に墓地へ送ると、黄衣に封じていた触手を巻き付けて無力化する上、引き剥がそうとすると洗脳されてしまうのだから。

だが、「月鏡」を装備したモンスターは戦闘で無敵化するので、どちらにしろ居座られると面倒である。特にシックスのデッキはパワーがある分、メタを張られると失速し易い。

問題は何を切り捨て、どれを生かすか、だ。

『ギャアアヴヴ！』

シックスは決断した。

「ハストール」をリリースして「天界蹂躙拳」を回収し、触手が「ラビエル」に絡み付いたのを確認すると、「解門」で最後の「解門」をサルベージしてから発動して、「暗黒の召喚神」をサーチ。

さらに、「招来神」を召喚して別の「ラビエル」を持って来て、「カプシェル」を召喚しつつ「解門」の蘇生効果を二連打し、「混沌」と「カクリヨ」を並べ、「ラビエル」「カクリヨ」「招来神」「カプシェル」で「鎖龍蛇―スカルデット」をリンク召喚、5枚ドローして3枚デッキに戻した。これで「ハストール」の脅威は無くなった。「月鏡」はデッキボトムに戻った。

そして、「混沌」の効果で「ラビエル」を特殊召喚し、「クリティウスの牙」で「デストロイ・ドラゴン」を呼び出した。

その後、「悪夢再び」で「カプシェル」と「カクリヨ」を回収してから、「スカルデット」の効果と自力でそれぞれを特殊召喚し、「魔界の警邏課デスポリス」に変換して、自らを犠牲に「警邏カウンター」をラビエルに乗せる。

さらに、「デストロイ」で零余子の「ミラフォ」をデストロイして、「ラビエル」「スカルデット」「キュリオス」の4体で一斉攻撃を仕掛けた。

「墓地から罠カードを発動！　「光の護封霊剣」！　直接攻撃を封殺する！」

『グヴゥゥゥゥッ！』

しかし、たった1枚のカードで防がれてしまう。「手札抹殺」で姑息に落として

おいた、「光の護封霊剣」の墓地効果を使ったのである。

「……私のターン、「命削りの宝札」を発動！　カードを3枚引き、「サンダーボルト」と「ハーピィの羽根箒」を発動！　「ラビエル」以外の全てを破壊する！」

『ギャァオオオッ！』

その上、次のドローで「ラビエル」を除いた全てを一掃されてしまった。ギリギリで「天界蹂躙拳」だけは回収したが、それだけだ。先にモンスターを破壊されたせいで、「解門」を1枚もサルベージ出来なかった。

「更に手札から「ダーク・サンクチュアリ」を発動！　ターンエンド！」

しかも、「ダーク・サンクチュアリ」がまたしても出現。これで「天界蹂躙拳」がとんでもないギャンブルカードになってしまった。成功すれば一撃で倒せるが、失敗すればLPが半分以上吹き飛んでしまう。「死者蘇生」や「ハーピィの羽根箒」どころか、デッキにカードが殆ど残っていないシックスにとっては、まさにデッド・オア・アライブである。

『ギャギャアアアッ！』

だが、シックスはあくまで攻める。彼女は欲望に忠実なケダモノなのだ。結果は

「コインは「表」だ！」『ギィイイッ！』

セルフ４０００バーンだった。運命はシックスを選ばなかったのである。

そして、この失敗がシックスに破滅を齎す。

「私のターン、「強欲で金満な壺」を発動！　カードを２枚ドローし……「死者蘇生」で「ハストール」を復活させ、「月鏡の盾」を装備して、「ラビエル」を攻撃！」

『ギッ……！』

零余子のマジックコンボにより復活した「ハストール」が、「ラビエル」を討った。

もはや、シックスに打つ手は無い。伏せカードはブラフであり、デッキも残り僅か。その中にも１枚で逆転出来るようなカードは無い。後は「ハストール」に嬲り殺されるだけ。

一応、ドロー次第では悪足掻きも出来るが、

『……ッ！』

流れを掴み損ねたシックスに、未来は無かった。「闇黒世界」を無意味に発動し、

ターンを終える。

「私のターン！　「ゲイシャドウ」を召喚し、「ハストール」と共にダイレクトアタック！　「終点（ファイナル・デスティネーション）」！」

『ヴギャアアアアァゥゥッ！』

そして、今の自分と未来の自分を思わせるモンスター2体の攻撃を受け、シックスは決闘に敗北した。

◆ハスター

「クトゥルフ神話」に登場する魔の風。初登場時は悪戯好きな風の妖精（一応、放牧の神らしい）という感じだったが、後に「旧支配者」の一柱である事が判明。本来の姿は無数の触手が絡み合った「名状し難いナニカ」で、「ニャルラトホテプ」程ではないが様々な形態に変化する事が出来る。世界中に信者が居たり、褒め称えられると部下の「ビヤーキー」を派遣してくれるなど、邪神の割りには結構人気がある模様。

「黄衣の王」という姿を取る場合があり、〝黄色いローブを纏った白い仮面の人型〟という容姿が特徴。もちろん中身は触手三昧である。

ちなみに、外道で有名な「ニャルラトホテプ」も「黄衣の王」の姿を取る事がある。どっちが先でパクリなのかは、「卵が先か鶏が先か」くらいに意味が無いので注意しよう。たぶん、指摘したらＳＡＮ値が直葬されます。いあいあ。

悪夢の彼方へ

人の血は鉄の味。人の不幸は蜜の味。人の幸せは甘酸っぱい。
なら、自分の幸せは？

――――――――――

――――肉塊が蠢き迫り来る、崩壊の廻廊。
「……！」
シックスは走っていた。
心の底から憔悴し、直走っていた。悪夢の出口である光のゲートへ向かって。
「……」
何だったんだ、あの赤い女は。今も身震いしている。彼女が最後に放った言葉に。
「――――逃がさないぞ。悪夢の果てまで逃げても追い掛けて、地獄を……見せてやるからな……！」
異常者め。

どうしてそこまで関わろうとする。何故そんなにしつこく迫る。

何で、自由にさせてくれない。

しかし、あの女はもういない。決闘では敗けたが、あいつも力尽きて倒れ、そのまま肉壁に呑まれた。一緒にいた、男の子ごと。モノは……どうしただろうか。

いや、今はいい。自分が助かる以外の全ては詮無き事である。

明らかに出遅れていたし、今頃は彼も肉の中だろう。助けに戻る義理も意味も無い。……少しだけ、残念ではあるが。

そう、何も考えるな。そんな事をしている場合じゃないし、暇もない。早く、あの扉から抜け出さなければ。

「……！」

自由だ。そうすぐ解放される。邪魔者はもういない。

「……ハァッ、ハァッ……！」

と、後ろから聞こえてくる誰かの息遣いと足音。一瞬あの女かと思ったが、モノだった。無事だったのか……。

「「……！」」

崩れ落ちる石橋から跳んで来たモノの手を思わず取ってしまう。何故そうしたのかは分からない。やはり見捨てるのは偲びなかった、のだろうか？

「……」「あっ……」

だが、光のゲートをバックに、彼の顔を間近で見たら、気が変わった。無理……これは、無理だ。さようなら。

（自由になる。私は自由に――――――）

何処かで見た顔をしたモノが、奈落に落ちるのを見送り、シックスは光のゲートへ飛び込んだ。

「カッ……はぁっ!?」

――――かと思われた、その時。彼女の腹を一本の刀が貫いた。

さらに、刃には返しが、柄の縁頭に鎖がそれぞれ付いており、闇の中から引っ張る何かが、奈落の底へ叩き落そうとする。

「あ……が……ぐぅううっ！」

それでも、シックスは耐えた。ゲートの端へ掴まり、必死に食い下がる。飢えた獣のように。死にたくない、と。

（嫌だ……嫌だ……わたしは、自由になるんだ！　何者にも縛られない、広い夢の世界で！）

しかし、シックスが踏ん張れば踏ん張る程、彼女は身の破滅を引き寄せてしまう。

『……言ったでしょ。〝それじゃあまた後で〟ってね』

鎖をロープのように使い、遂にご対面したそいつは、あの赤い女だった。

否、彼女だけではない。脇にはモノを抱えているし、何より女の顔立ちがさっきと微妙に違う。まるで、あの少年と混じり合ったかのようである。

（何で……何でぇ……っ！）

殺される。このままでは、自分に自由は無くなる。シックスは一瞬そう思ったが、現実はそんなに甘くなかった。

『お前は殺さない。私の血肉を腹に溜めてやる』

「がはっ!?」

胃袋に、甘美な腐肉が流れ込んで来た。血は一瞬で巡り、身体中を支配する。

シックスは分かってしまった。この血肉は己を縛る首輪であり、これ以外では命を繋ぎ止められなくなったと。

『お前は死ねない。空腹に抗える人間はいないし、私がいる限りお前に終わりは来ない。だけど、人間は群れる生き物だ。特に自分を見失った奴にとって、自由とは「死」も同然なんだよ』

「…………！」

『だから、お前は殺さない。外に出たかったんだろう？　……出してやるよ、今すぐに。私たちも一緒に、ね』

「ぐっ……！」

どうしてそこまで。何でそこまでやるんだ。自分が一体何をした。

あまりに理不尽な結末を齎そうとする赤い女に、シックスは悔恨の籠った眼で睨み付けたが……、

『何でって顔してるな？　〝クソガキに振り回されてイライラしたから〟以外の理由なんてないわよ。大人が子供に手を上げる訳なんて、そんなものだ』

「……ぅああ！」

シックスは叫んだ。泣いて、鳴いて、哭き叫んだ。
それでも、赤い女……零余子は止まらない。シックスをモノと脇に抱き合わせて、光のゲートへ進んで行く。さっきまでは希望の光に見えていたそれは、もはや破滅の光としか思えなかった。
事実、シックスにとっては絶望でしかない。
外には出られるが、血の鎖で縛られる。かと言って完全に縛られる訳でもなく、世話をしてくれる気も無い。自由で不自由。放置という名の拷問。ネグレクトだって、もう少しマシだろう。
そんな中途半端な自由が、未来永劫に続くのだ。こんな悪夢があるだろうか。
そう、未来(げんじつ)に希望(ゆめ)など、無いのです。
「嫌だぁああぁっ！」
幾ら泣いても喚いても、もう遅い。

◆◆◆◆◆◆

こうして、零余子たちは現実世界へ戻って来た。

シックスとモノは小人のままなのに、ノームはキッド形態と姿を自由に入れ替えられるようになるというミラクルも起こったが、それはそれ。
「オラァッ、夢子ぉ！　覚悟は出来てんだろうなぁ!?」
『……いきなり何よ。そっちこそ覚悟は出来てんでしょうね？』
「へ？」
怒り心頭で事の発端である夢子に詰め寄った零余子だったが、何故か逆切れされてしまい、思わず言葉に詰まってしまった。化粧こそしていないものの、怒った顔があの隈取バージョンと同じくらい凶悪である。ｶﾜｲｲ……。
「……ちなみに、どうして？」
『どうして？　ちゃんと夢の中で待ってたのに、1時間しても現れなかったのは誰かしら？』
「ゑ？」
『流石に待ちくたびれて起きてみたら、勝手に夢の世界を楽しんでたようだし、仕方ないから丸子ちゃんと遊んでたわよ。中々に楽しい夢だったわ』
「えぇ……」

何それ怖い。零余子は考えるのを止めた。

◆◆◆◆◆◆◆

日本の、とある深い森の山奥。まるで似付かわしくない、古びた洋館にて。

『上手く行きましたか？』

妖艶な女吸血鬼――――ベアード軍三幹部の一人、カミーラが尋ねる。相手は己の上司であるアデルだ。さっきまで眠っていたのか、眼が心なしかしょぼくれている。可愛い。ギャップ萌えだ。

『いいえ、失敗よ。ヴィクターの集めたデータを基に、丸子を夢から分からせてみようかと思ったけど、当てが外れたわ』

すると、急にシャキッとなったアデルが、とても悔しそうに舌を打った。相変わらず切り替えの早い人である。

『……と言うと？』

『干渉しようとしたら、何故か座標をズラされて、別の人間にチャネリングしてしまった。せめてそいつだけでもと思ったけど、失敗したわ』

『……！』

これにはカミーラも素直に驚いた。

アデルは自分にとって恩義のある、憧れの上司だ。マッドサイエンティストだった父親に、〝初代カーミラの遺骸〟の粉末を混ぜたオカルト満載な薬を打ち込まれたせいで吸血鬼として蘇り、一人生き埋めにされて泣いていた所を救ってくれた、命の恩人である。

そんなアデルでさえ阻害される運命力の持ち主が、この日本にいる。もうそれだけで、腸が煮え繰り返って来た。

自分を悪夢の底に沈めた、あの隻眼のクソガキを見た時以来の憤怒だ。

『大丈夫ですよ、アデル様。今度はワタシも協力します』

『カミーラ……ありがとう』

ああ、その笑顔だ。今では殆ど見られない、その微笑みに惚れたのである。本当に、とても美味しそうだ。

『それで、如何致しましょう？』

『……こうなっては仕方が無い。直接出向く』

「お供しますよ、何処までも」

そう、地獄の底……悪夢の果てまでだって。何故なら、貴方は希望（さいこう）の光（ゴチソウ）なのだから。

『ウフフフ、そうと決まれば、まずは身を清めなくちゃ♪　ンフフフ、キャハハハハハッ！』

装備と考えを整える為に部屋を出て行くアデルを見送ったカミーラは、それはそれは楽しそうに服を脱ぎ、真っ赤なワインのような湯に浸かった。

その顔は、まるで初めて誕生日のケーキを目の前にしたような、はち切れんばかりの満面の笑みだった。

◆カミーラ

ベアード軍三幹部の一人。ウェーブの掛かった黒髪に赤い瞳を持つ、妖艶な女吸血鬼。ドラキュラ伯爵の恰好をボディコン風にアレンジした服を着ている。無数の蝙蝠に分裂したり、血を吸った相手を眷属化するなど、伝承されるヴァンパイアが持ち得る力は全て備えている。日本妖怪を下等と見做す傲慢さと、可愛い女の子を

人形に変えてしまいたいと思う下衆な精神を持つ悪女で、自分の美しさに絶対の自信があり、「おばさん」と言うとメッチャ怒る。

6期で登場した彼女の詳細な出自は語られなかったが、「初代ドラキュラ」がいるように、カミーラも「初代カーミラ」の血を引く何かだと思われる（カーミラは葛飾北斎ばりに名前をコロコロ変える事で有名）。

今作では純粋な吸血鬼ではなく、死後に「カーミラの粉末入りの蘇生薬」で転生した存在であり、最終的に生き埋めにされて封印されていた所を、アデルに救われヘッドハンティングされた。その為、自分を封印した〝隻眼の少年〟を含む日本妖怪を毛嫌いし、アデルに〝肉欲〟を抱いている。

ちなみに、彼女を吸血鬼に変えた父親の名前は「ロイ・キュリアン」で、年の離れた「ダニエル」という実兄がおり、彼女自身の本名は「キーエフ・キュリアン」。なるべくしてなったとか言わないで。

鳴女さん、再会する

誰と再会するんでしょウネー？

「――――――ごめんなさい」

湯治を終え、無限城で零余子印の苺ミルク（意味深）を飲んでいたら、突然その本体に土下座された。本当に三つ指付いて這いつくばるのが良く似合う女である。

というか、急にどうした。

「この子たちについてなんだけど……これには深い理由がありまして……」

そう言って、ススと差し出された小人が二人。シックスとモノと言うらしい。

何でも「リトルナイトメア」というホラーゲームの主人公たちで、またしても見てしまった悪夢から拾ってきたとか。

いやいやいや、捨て犬拾ってきたみたいなノリで小人を出すなよ。困ったちゃんだな君は。今更だけど。

『……ちゃんと餌はやるんだよ』

とりあえず、最低限度の指示は出した。飼い主の責任だからね。

「そりゃあ、もちろん」

すると、任せておけと言わんばかりに、零余子がニタリと笑った。何がそんなに楽しいんだか。シックスがビクッと震えた気がしたが、見なかった事にしよう。あと、ノームに苺ミルク飲ませる時に頬を染めてたのは何でだ。恋でもしたの？

まぁ、良いさ。無限城には風呂もトイレも洗濯機も冷蔵冷凍庫もあるし、生活には事欠かない。それこそ藤花と遊ばせとけ。ちっちゃい物クラブみたいな感じで。

「それで、今日はどうするの？」

ふと、零余子が尋ねてくる。抱き枕にするか否かの確認だろう。最近は半々の割合だからな。

『今日はいい』

「またイチャコラかよ……」

『イチャコラなんて初々しい真似するかよ。もっとこう、ニュルニュルのウネウネでジュポジュポにヌルヌルな――――――』

「何その生々しい擬音!?　聞きたくないんですけど！」
顔を薬缶より赤くして逃げる零余子。乙女か。
何だよー、自分から下世話な事を聞いてきた癖にー。へーん、混ぜてやらないよーだ。
さーてとぉ♪
◆◆◆◆◆◆
そんなこんなで、ねっとりとした眠りに着いた私だったが、
『随分と元気そうだな、鳴女』
何故か夢の中で無惨様と再会した。前々から変わった人だとは思っていたが、まさか私の夢枕に立つとは、中々にいい趣味をしている。寝付いた時からそうだから今も全裸なんだが、男として思う所はないのかねぇ？
ま、挨拶くらいはしようか。
『お久しぶりです、無惨様』
『……別に敬語は必要ないだろう。今は私の部下ではないようだし、何よりその恰好じゃ締まりがなかろう』

そんな事を言われましても。好きで立ち裸ってる訳じゃないし、基本的に寝ている私は全裸待機なんだよ。

『一応は恩義がありますので』

そう、彼には鬼にして貰った恩がある。最後に頭をパッカーンしてくれた事は今でもムカつくが、それはそれだ。半永久的な命と人を確実に殺す為の力を貰った事に比べれば、些細なものである。

『ならば、丁度良い。恩義を感じているなら、その肉体をよこせ。今すぐにだ』

ただ、こうやってすぐに調子に乗るのが玉に瑕だ。

『出来るものなら』

やってみろ、とは敢えて言わなかった。必要が無いからな。

『――――フン。ならば、後付けでも構わん。肉体を用意しろ。この際、年齢は問わん。今のお前なら出来るだろう？』

それが分かっているのか、無惨様は私を睨め付けた。セクハラやぞー。

『まぁ、別にそれで良いなら、全く問題ありませんが……』

今まではおやつ代わりに食ってきたが、そろそろ残すべきか？

『ですが、何故急にそんな話を？』

そもそも、この人はどの世界線の無惨様なんだろう？

この世界じゃ無惨様の「む」の字も無いし、かと言って私の知る「無惨様の鬼」が全くいないかというと、そうでもない。チャラトミｗｉｋｉ曰く、大正時代に似たような輩がいて、何処かで聞き覚えのある剣豪っぽいのが退治したそうな。

その鬼が無惨様じゃないとしたら、そいつは誰で、どうして存在しない無惨様が私の夢枕に立っている？

『……私はもうすぐ解放される。その時に受け皿となる器が必要なのだ』

『ようするに今は魂だけで、しかも封印されているような状態だから、解放された時に備えて肉体が欲しいと？』

『その認識で相違ない』

フーン、封じられてたのか。どうりで影も形も無いと思ったよ。

とは言え、名前すら出て来ないのは流石に不自然な気がする。この人は色々と空回りする人だから、動けば絶対に目を付けられる筈なんだよなぁ……。

『おい、貴様。今かなり失礼な事を考えていただろ？』

『あれ？　もう読心術は使えない筈では？』
『何年行動を共にしたと思っている。お前が上の空で何を考えているのかなど、手に取るように分かるわ』
『凄いなアンタ』
正直、意外と言うか、他人の事を考える度量があったんですね。
『それで、今は何処に居るんです？』
封じられているというのなら、その場所が必ず存在する筈である。
『……地上ではない』
え、まさか宇宙とか言わないよね？
『地下だ。それも深い深いマグマの中にな……』
『貴方は何時から怪獣王に転職なさったので？』
『今も昔も私は「鬼の始祖」だ、馬鹿者めが！』
いや、だってマグマの中もチャラ☆ヘッチャラなんて、怪獣王か伝説のスーパーサ○ヤ人くらいしか知らないもん。
『では、何故そんな所に？　温泉じゃないんですよ？』

『それくらい分かるわ。……とある者の肉体と共に沈んでいる』
『誰ですか、それは？』
『この世界では「来訪者」と呼ばれている存在だ』
あー、例の大正時代に出たっていう「鬼の王」ね。何だってそんな奴と抱き合わせでマグマに浸かってんのよ。ホモなの？
『――――――そいつは、私の全てを受け継ぐ者だった。しかし、暴走の果てに世界一つを滅ぼしてしまった。支配すべき世界を焼き尽くすなど、愚かの極みだ。こんな事なら、託すのではなかった……』
実に悔しそうに語る無惨様。ようするに人選ミスって事？
と言うかさ、
『……聞きそびれましたけど、力を託して魂だけになっているという事は、やっぱり討滅されたんですね？』
『やっぱりとは何だ、やっぱりとは。……まぁ、その通りだ。だからこそ、才能溢れる奴に、力を託してやったというのに……』
『そんなに凄かったんですか？』

『数十秒で太陽を克服し、数分で私の全盛期を凌駕した上に、次々と新たな血鬼術を生み出した』

『化け物じゃないですか』

何そのチーター。異世界転生した勇者だってもう少し自重するぞ。私だってまだ克服し切ってないのにズルいー。

でも、そりゃ確かに勿体無いよなぁ。それだけ才能があるんだから、ちゃんと世界を牛耳れば良かったのに。化け物なだけに馬鹿者だったのかな？

『まぁ、最後に見た風柱の姿は滑稽で抱腹絶倒したがな。肉親や仲間どころか、自分以外誰一人いなくなったんだからな。ククク……』

『えー、何それ、私も見たい。録画とかしてなかったんですか、無惨様。インスタ映えしそう』

『お前は俗世に染まり易い奴だな、本当に！　鬼の口から「インスタ映え」なんて聞くとは思わなかったぞ！』

『そう言う無惨様だって結構ミーハーだったじゃないですか』

『「多趣味」と言え「多趣味」と。信長だって南蛮渡来の品を好んでたんだから良

いだろうが』

つーか、あんた信長とはズッ友だっただろうがよ。御茶会とか乙女チックな事しやがって、ミーハー共め。

『フゥ……やはり、力だけでは駄目だな』

と、喋り疲れたのか、無惨様が一度深呼吸してから、真面目なトーンで言った。

『そういう意味では、やはりお前に託すべきだったか』

『いやぁ、私などでは無惨様のような自滅芸はとても』

『ぶっ殺すぞ貴様。いいから、真面目に聞け！』

はいはい、分かりましたよ。久々にお話しするのにつれないなぁ。

『――――「来訪者」の復活が迫っている。奴はお前の想像を遥かに絶する化け物だ。何せ、あの忌々しい日の呼吸でさえ掠り傷一つ付けられず、バラバラにしてマグマに沈めた今も、噴火に乗じて舞い戻ろうとしているのだからな』

『もう生物じゃないでしょ、そいつ』

『それはそうだろう。奴は「鬼の王」であり「鬼神」なのだ。生半な力など、振るう事すら許されない。だから――――』

だから、その時に備えて強くなれ。鬼舞辻の血統を継ぐのはお前だ。
無惨様は激励とも押し付けとも付かない、臭い台詞を吐いて消えた。
『託されても困るんだけどなー』
正直、血統には全然興味ないし。
だが、無惨様を超える鬼となるのは転生当初からの目標だし、近い未来に訪れるであろう災厄を知り得たのは大きい。事前に準備出来るだけでも、大分違うからね。
そういう意味では、会えて良かったですよ、無惨様。
『とりあえず、もう一発頑張るかー』
私はそう決意して、夢から覚めた。
◆◆◆◆◆◆◆
――――――ピンポーン。
しかし、そんな崇高な決起を遮る、インターフォンの音が。誰だ、こんな真昼間に。
『今は仕込み中でーす。後にして下さーい』
「ほぅ、勤勉ではないですか。素晴らしい」

適当に返事をしたら、何か盛大に勘違いされた。これバレたら絶対お互いに恥ずかしい奴だよ！

『……仕方ないわねぇ。どちら様～？』

誤魔化す意味も兼ねて、私は（もちろん服を着て）玄関の扉を開けた。そこに居たのは、

「初めまして、鳴女さん。私はベアード軍の最高司令官「アデル・フォン・アスワング」。こっちはベアード軍三幹部の一人「カミーラ」」『よろしくお願い致しますわ』「……本日は、是非とも交渉したい事が有って参りました。少々お時間を割いては頂けないでしょうか？」

何かスゲェ偉そうな西洋妖怪たちだった。なぁにこれぇ？

◆鬼舞辻 無惨

「鬼滅の刃」のラスボスにして、全ての「鬼」の始祖。

平安貴族という勝ち組出身だったものの、生まれた時から死にそうな虚弱体質で

あり、二十歳までは生きられないと言われていたが、ある日出会ったかかりつけ医の調合した薬が彼の運命を変えた。強靭で朽ちる事のない肉体を手に入れた代償に日の下を歩けぬ人食い鬼となってしまい、今日まで太陽を克服する為に様々な努力を重ねて来た。まるでカー○様である。

西洋の吸血鬼の如く、血を与えた人間を鬼（というか眷属）に変える力が有り、全ての鬼は無惨と共に在り、彼が死ねば諸共滅ぶ運命にある。

また、始祖というだけあって戦闘能力も凄まじく、珠世の齎した毒薬で弱体化してもなお、殆どの鬼殺隊士は手も足も出なかった。掠り傷が致命傷って、それは卑怯でしょ。

特に再生力に関しては異常の一言で、〝斬った傍からくっ付くから切断出来ない〟〝肉片からでも元通りになれる〟〝治るのを良い事に身体中のあらゆる臓器を武器にする〟など、意味不明な業を次々と披露した。もしかしたら、弱体化さえしなければ「輝彩滑刀」とか「血管針」とかも使えたのかもしれない。

しかし、やはり弱体化した影響は大きく、最期は鬼殺隊の異常なまでの執念に根負けする形で消滅した――――――かに思えたが、最後の最期に己の血肉を主人公

に全て与えて「鬼の王」に変貌させるという、スーパー悪足掻きを敢行、鬼殺隊士どころか読者すら唖然とさせた。なぁにこれぇ？

とは言え、元より誰も信じず信頼もされていない彼が、鬼殺隊の絆を断ち切れる筈も無く、炭治郎が人間へ戻るのと同時に、無間地獄の底へ消えていった。

しかし、この世界――――否、〝前の世界〟では……。

鳴女さん、会談する

今回より物語が段々と加速しマス。

やぁやぁ、諸君。今人気沸騰中のネットアイドル、鳴女さんだよ。

いやー、世間一般的には、そろそろランチタイムかな？

だが、そんな真昼間だというのに、来客が二人もいるんだ。それも人間じゃない。魔女と女吸血鬼という、西洋妖怪の組み合わせである。

しかも、こいつらは結構な身分らしく、「ベアード軍」とかいう軍隊の最高司令官と幹部の一人らしい。チャラトミｗｉｋｉ曰く「バックベアード率いる西洋妖怪軍団」だか何だか。

バックベアード自体がかなり有名な妖怪みたいで、「西洋妖怪の大統領」なんて呼ばれているそうだ。〝大統領〟とは、また大層な肩書である。さては米国出身だな？

ま、それは一先ず置いておいて、

『粗茶ですが……』

「あ、どうもありがとうございます」

お茶くらい出すよ、姑獲鳥（メイド）がな。

そんな感じで、私たちは無限城の大広間で向かい合っている。胡坐も掛けるように大きな卓袱台を挟んでね。座ってるのは私とアデルだけで、他の面子は脇に控えて突っ立ってるけど。

『それじゃあ、改めて自己紹介をしようか。私は鳴女。琵琶が趣味の「鬼」だ。で、こっちがチャラトミ。本名は控えさせてもらおう』

「どうも～♪」

ウム、相変わらずチャラい感じで何より。

『このチビ助が、我が陣営の食糧事情を一手に担っている、零余子だ。一応は人間だ。実質化け物だけど』

「説明に悪意を感じるんだけど」

『事実だろ』

今では無惨様を遥かに超える不死性を得ておきながら何を言うか。
『そんで、こっちのちんちくりんが丸子。見ての通りの座敷童子だ』
『よろしくなのじゃー』
ウムウム、マスコットらしい溌剌とした笑顔がよろしい。
「……」
と、僅かだが、アデルの〝興味の視線〟が強くなった気がする。私に対する〝警戒心の表れ〟とはまた別の感情だ。
ははぁん、なるほどね。本命は丸子か。何がそんなに気になってるのかは知らんがね。
まぁいい、紹介を続けよう。
『その隣が、「手の目」の六部。丸子の彼氏くんね』
『『/////』』
本当に初心だね君ら。もうヤッちゃいなよー。
『それから、こいつらは「無限城ちっちゃいものクラブ」。それぞれ、藤花、ノーム、シックス、モノ、夢子だ』

『よろしくお願いします』『ぴきゅー』「「……」」『何でわたしまでその括り？』

今更だけど、小っちゃい奴増え過ぎだろ。何時の間にこんなに増殖したんだか。ちなみに、会長は夢子にしてある。半数が夢の世界（そっちがわ）だからね、しょうがないね。

『以上が、今ここに居る全員だ』

とまぁ、一頻り紹介をした訳だが、改めて見渡してみると、とんでもない面子だな。

鬼だけでも上弦、下弦、（笑）がいるし、小っちゃい連中も半分くらい主人公だし。これ「鳴女一派」として通じるんじゃなかろうか。戦闘員は半分もいなけどね。

「ご丁寧にどうもありがとうございます」

全員の顔と名前が一致した所で、アデルが奇麗な所作で頭を下げる。正座も様になっていたし、名前に「フォン」があるからには、ドイツ系の良い所出身なのだろう。貴族なら外国の礼儀も出来て当たり前って事か。

控えているカミーラの方も身分が高そうだが、アデルとは生まれから主従関係なのかもしれない。そういうのって憧れちゃうよねー。カッコいいと言うか、何と言

うか、単純に羨ましい。

……ウチの面子、悪友が屯しているだけっぽいからな。

『――――さて、長話は好きじゃないし、そもそもお昼寝時だし、単刀直入に行こう。私に何を求める気だ？』

いきなり最高司令官が幹部を連れ立って来たからには、重要案件なのだろう。流石に動画のファンとかじゃないだろうしなぁ……。

「分かりました。それでは、こちらも率直に。……鳴女殿。貴女に「ベアード軍」最高司令官の立場をお譲りしたい」

おっと、これは大きく出たな。それを本人が言うからには、冗談では無いんだろうな。後ろのカミーラは結構驚いているようだけど。

『条件は？』

そんな重役を只で譲る訳ないよね。

そもそも、高がネットアイドルに最高司令官を任せて、「ベアード軍」……ひいてはバックベアードに何の得があるんだ？

まさかとは思うが、「歌は世界を救う」とか言い出したりしないだろうな。

「「日本の地獄」を陥落するのに協力していい頂きたい」
『「日本の地獄」？』
何故にそうなる。それを日本の妖怪に頼むとかどうなの？
「――――鳴女殿は、「来訪者」をご存じでしょうか？」
『ああ。夢枕で聞いたよ』
また「来訪者」か。無惨様の話を聞く限りマジで化け物だけど、古今東西どいつもこいつもビビり過ぎやろ。
つーか、それが日本の地獄と何の関係があるんだよ？
「「来訪者」が噴火に乗じて封印を抜け出そうとしている事も？」
『それも聞いた』
「……ならば、その現象が日本だけで起きている事は？」
『いや……？』
そうなんだ。どうなの、チャラトミｗｉｋｉ？
「そうですね。確かにそういう傾向の噴火は、日本でしか起きていないようです」
『「……！」』

チャラトミがスマフォを操作してスラスラと答えるのを見て、アデルたちが目を見開いて驚いた。傍目にはただのチャラ男だからねぇ。これでも参謀役なんですよ、彼は。

「……と、とにかく、「来訪者」の〝藻掻き〟が日本でしか起きていないのは事実です。では、何故日本でしか起きていないのか？」

『日本で封印されたからじゃないの？』

「「来訪者」が封印されているのは下部マントルの中。日本で埋められようが、別の地域で起きないのは変ですよね？」

『それもそうだ』

というか、未だにマントルの中を生きたまま漂っているとか、本当に化け物だなぁ。生物なら死んでおけよ、そこは。

『なら、どうしてだ？』

「――――日本の地獄が、「来訪者」を繋ぎ止めているからですよ」

『はぁ？』

まるで意味不明なんですけど。

「日本は狭い。なのに、人口だけはどんどん増えている。子育てはロクにしないのに。幾ら効率良く転生したとしても、最早パンパンなんですよ。無から有は生まれないですからね。……地獄にも、拡張した領土が必要だ」

『それって、もしかして……』

「その通り。地獄を広げ続ける為のエネルギー源として、「来訪者」を利用しているんですよ。資源として見るなら、実質的に永久機関のようなものですからね」

『……』

今明かされる、衝撃の真実ゥ。

――――頭が悪いというか、頭痛が痛いというか。そりゃ攻められても、あんまり文句は言えんよな。一国だけ水爆を多量に保有しているような物だし。何時爆発するかも分からんようだしね。

『……つまり、日本地獄の代わりに、お前らが管理したいと？』

「というよりも、完全に滅ぼすのが目的ですね。利用するにはあまりにもリスクが大き過ぎる。……管理ミスに巻き込まれて死ぬのは、こっちとしても御免なんですよ」

『そりゃそうだわな』
実にアメちゃんが考えそうな暴論だが、確かに地球破壊爆弾ばりにユルユルな管理状態じゃあ、安心は出来んわな。普通に怖いわ。足元に核弾頭が埋まってるよりおっかない。自分ではどうしようもないからね。
「鬼太郎ファミリーやぬらりひょん一派と違って愛国心や地獄への忠義がまるで無い、貴女だからこそ頼みたいのです」
『ぶっちゃけたな、お前も』
「率直に話すと申し上げたので」
そういう失礼極まる態度、嫌いじゃないぜ。分かり易くていい。
「それで、返事の程は如何に？」
『……』
そして、私は答えた。

◆ちっちゃいものクラブ

アニメ「おじゃる丸」に登場する会合。正式名称は「月光町ちっちゃいものクラブ」。おじゃる丸を会長とした、しみったれた愚痴会。他の面子は電ボ（蛍）、公子（ハムスター）、カタピー（エスカルゴ）、トメ&カメ（亀）、貧ちゃん（貧乏神）と、見事に人外ばっかり。彼らに憧れて（そんな要素あるか？）結成された、「月光町ちっちゃいちっちゃいものクラブ」も存在する。

対する「無限城ちっちゃいものクラブ」は、夢子を会長として、藤花、ノーム、シックス&モノと、魑魅魍魎の類が集合している。ノーム以外の連中は自分の事しか考えていない。主に藤花が話題の起点となる事が多く、ノームやモノが付き合ってあげてる感じ。夢子は基本的に見ているだけである。意外と藤花とシックスは仲が良く、「鏡を見ろ」と言いたくなる関係を築いている。

鳴女さん、試験をする

「鬼滅の刃」を読んでてつくづく思ってましたケド、落第＝死って普通にヤバいですヨネ？

べつのひ！

「あの、鳴女殿？」『……』

アデルが何とも微妙な顔をしている。同伴したカミーラもそんな感じである。無理もない。

「何故、急にこんな山の中に？」

突然、人里離れた山中に連れて来られたのだから。

「というか、ここは何処ですか？」

『ここは「奈落村」。地図に無い廃村さ』

そう、ここは釣りの名所……ではなく、地図に無い村だ。菖蒲の花が一年中咲い

ている、不思議な谷底にポツンと存在している廃村である。辛うじて形を残している荒ら屋が数軒だけ立つ寂しい場所で、人の気配はまるでない。ほぼ全てが自然へと回帰している。

「はぁ……それで、我々にここで何をさせようと？」

まぁ、当然そうなるわな。

『――――――〝選別試験〟だ』

「〝選別試験〟？」

『ああ。お前は最高司令官なんだろう？　ならば、それが譲り受けるに値する立場なのか、試してみたくてな』

「ようするに、私たちの実力を見せて欲しいと？」

『有体に言えばそうなる』

実を言うと、私はアデルの返事を保留にした。〝試したい事がある〟と。それがこの選別試験だ。

だって、そうだろう？

私は弱い奴と取引する気は無いし……何より、嘘吐きと真面に話すつもりはハナ

から無い。
『お前たちには、この奈落村で三日三晩過ごしてもらう』
『こ、こんな場所で、ですか？』
如何にも潔癖症っぽいカミーラが、とても嫌そうに尋ねてくる。
イカンよ、時には泥を啜る覚悟を持たなきゃ。人生、小綺麗に済む事なんて早々無いんだからさ。吸血鬼だろう、お前は。
「別に良いじゃないっスか。前にアンタが住んでた場所と大差ないでしょうよ、キーエフ・キュリアンさん」
『なっ……何故その名前を……!?』
しかし、チャラトミが入れてきた横槍に驚いて、それどころでは無くなったようである。
『えっ、誰それ？』
「その人の本名ですよ」
『そーなのかー』
私もビックリしたわ。何処の誰情報なんだよ、それは。当たってるみたいだし。

ま、まぁ、いいや。それより話を進めよう。
『お前さん、サバイバルの経験は？』
「修行の一環で崖から突き落とされた事なら」
『スパルタ人か』
流石にそれはスパルタ過ぎる。
たぶん、こいつのフォンは実力で勝ち取った名前だな。実に良い。
『なら、問題は無いな。ここで三日三晩、自給自足で生き残れ。その結果次第で、お前の提案を受け入れるかを考えよう』
「その程度でよろしいので？」
『……油断は大敵だぞ、アデル・フォン・アスワング』
気分はゆるキャンのアデルに、一言物申しておく。
『何でわざわざこんな所に連れて来たと思う？』
「……つまり〝何かが居る〟という事ですね？」
『そういう事だ。菖蒲は魔除けの植物。一部の妖怪……特に蟲系統の怪異が苦手としている。……言いたい事、分かるよな？』

「ええ、とても」

つまりはそういう事だ。ここには〝食べ残しておいた妖怪〟を放し飼いにしている。餌もしっかり用意した。今頃は立派な〝縄張り〟を形成している事だろう。一種の〝実験場〟であり〝牧場〟でもある。そんな場所だ。

アデルとカミーラは、今からその最中へ飛び込む。どうなるかは、想像に難くない。

「ようするに、そういう意味でのサバイバルという事ですか」

『そうだ。この廃村に巣食う妖怪共を蹴散らし、生き残れ。なぁに、優しい私は〝ゴール〟を用意してある。村を抜けた先にある、廃れた神社の鳥居を潜れ。そこに三枚のお札があるから、失くさずに私の下へ持って来い。そうすれば、一日でだってクリアと見做そう』

「何だか肝試しみたいですね」

『否定はしない。私の旧い宿敵（ともだち）の考えた最後の選別式を参考にしつつ、アレンジしたんだよ』

本来の期間は七日間でゴールなど無く、妖怪ではなく鬼が出て来るのだが、そこ

まで再現する必要はないだろう。一週間も待つなんて、暇でしょうがないし。

『まぁ、尻尾を巻いて逃げ出したくなる時もあるだろう。道に迷うのも可愛そうだ。その時の為に、この「メダマッチャくん」を付けてやろう』

さらに、親切極まりない私は、使い魔の一匹をナビゲーターとして付ける事にした。名前は「メダマッチャ」。こっちに来てから四番目に生まれた個体で、今では最古残の一匹である。あの鬼太郎との空中戦からも生還した強者だ（他の参加した50匹の使い魔たちは戦いの余波で全滅した）。これ程頼りになるナビゲーターは居まい。録画に命を懸けてるからな。

《よろしくダッチャ！》

しかも、こいつ喋るぞぉ！

「語尾に色々問題があるような気がするのですが……」

『……お前、本当にベアード軍の最高司令官なのか？』

実はただのオタクだったりしない？

「上司が好きなもので」

『ああ、ベア子か……』

上司の趣味趣向に付き合うとは、君も律儀だねぇ。

『と、とにかく、そういう感じだ。……私に捕まるような妖怪に、まさか遅れは取らないよなぁ、最高司令官殿？』

「……その喧嘩、買いますよ」

おうおう、中々気概があるじゃないか。ますます気に入ったわ。だからこそ、まずは実力で示してくれ。そうすれば、見え透いた嘘は許してやる。

「――――――言いたい事は分かりました。確かに、口だけでは信用出来ませんよね。ましてや、自分より遥かに劣るような輩と、対等に話すなど言語道断だと」

『そういうこった』

「……では、最後に一つだけ」

『うん？』

すると、さっきとは打って変わって、心の底から疑問符が浮かんでいる表情で、アデルが聞いてきた。

「何故、菖蒲が苦手な筈の藤花氏を？　今にも死にそうなんですが？」

『いやー、苦しむかなぁって……』

「……では、行ってきます。付いて来い、カミーラ」『了解ですわ、アデル様』

アデルは聞かなかった事にしたらしい。悪霊どころか、魑魅魍魎の跋扈する廃村に突入して行きましたよ。

それじゃあ、鳴女さん式〝最終選別〟、はっじまるよ～♪

◆最終選別

「鬼殺隊」の入隊試験の事。

藤の花が一年中咲き乱れる「藤襲山」で七日間もサバイバルするのだが、問題はそこに仕掛けられた罠で、トラバサミとかクレイモアとかそんなレベルではなく、何と（一応は雑魚の）鬼がいっぱいいる。しかも、管理不行届きのせいで異能の鬼が一匹いる。産屋敷ちゃんと仕事しろ。文字通り、落第＝死である。

ちなみに、鬼を沢山倒せばそれでいいという訳ではなく、〝どんな方法でも良いから七日間生き延びる〟のが条件なので、死んだらまるで意味がない。生き意地汚い鬼共を相手にする以上、自分の身も守れないような奴では務まらない、という事

だろう。それがトラウマになっている奴もいるのだが、それは良いのか？

鳴女式はもっと簡単で、明確なゴールと合格条件が有り、それさえ満たせば三日も待つ必要はない。

……ただし、待っているのは、彼女が魔改造を施したガチの生物兵器（＝妖怪）だが。

アデルとカミーラの鳴女式最終選別試験①

地球上で最も繁栄している生物は昆虫でアル。

諸君、初めましての人は初めまして、既知の方は改めまして。

私の名はアデル・フォン・アスワング。ベアード軍の最高司令官を務めている。生まれはフィリピン、育ちはドイツとアメリカ、今はベアード様のお膝下と、我ながら数奇な人生を辿っているな。

そして、私は今、日本の何処とも分からぬ「奈落村」という僻地に来ている。連れて来た鳴女曰く〝地図に無い村〟だそうだ。都市伝説とかで良くある系統の話である。

だが、ここには幽霊の類ではなく、妖怪が居るという。それも鳴女が手を加えたであろう、化け物たちが。

そんな魑魅魍魎の跋扈する廃村を抜け、寂れた神社から三枚の札を持って来ると

いうのが、今回鳴女から提示された条件だ。

言うまでもなく、彼女を〝こちら側〟へ引き込む為の条件である。彼女はこのゲームをクリア出来たら、我々に協力してくれると約束してくれた。道中の活躍にもよる、とも言っていたが。

ようするに、こちらの実力を示して分からせてみろ、という事だ。非常に分かり易い。

とても分かり易く、こちらを舐めている。

この廃村に棲み付いている妖怪は、鳴女が敢て食べずに捕獲し、放し飼いにしている者ばかり。番犬どころか家畜以下の存在である。

その程度なら何とか出来るよね、という挑発が透けて見える。

しかし、だからこそやる気も出る。ここまで煽られて黙っているようでは、ベアード軍失格だ。

……それに、私には〝丸子の確保〟という重大な任務がある。こんなお遊びで躓く訳にはいかない。鳴女は外部協力者になり得るかもしれないが、あくまで最後は対立する敵同士なのである。

『へぇ、貴女使い魔じゃ最古残なの。だからそんなに流暢に喋れるのね』

《そうだッチャ。現存する使い魔は約千体だけど、同期と呼べる一桁台の兄妹はもういないッチャ。一番近い数字でも35番だし……皆、動画撮りの最中に殉職したッチャよ》

『戦場カメラマンみたいな人生を送ってるわね、貴女たち』

だと言うのに、何を仲良くお喋るしているんだ、こいつらは。意気投合してるんじゃないよ。

「カミーラ……」

『あっ……す、すみません！　ついつい話し込んでしまいました』

「いや、あのねぇ……」

『で、でも、妙な親近感というか、赤の他人のような気がしないんですよ！　何と言うかこう、ベアード様と楽しくお喋り出来ている喜びと言うか……』

必死に言い訳をしているカミーラ。心身共に成長しているが、根本的には初めて出会ったあの頃から何ら変わりないようだ。三つ子の魂百までって言うからな。

「……」

だが、確かに言われて見ると、ベアード様に似ているような気も……ちっちゃいベアード様に角と手足が生えたような姿をしているし。仲良くする？

――――――いやいやいや、言ってる場合か。私はお話じゃなくて、お札を剥がしに来たんだよ！

「……集落に着いたな」

そうこうしている内に、奈落村の集落跡に到達した。どの家も荒れ果て、蔦が巻いている。私だったら絶対に住みたくないが、逃避行中はこんな物でも有難いと思ったものである。

しかし、ここに棲み付いているのは人間でも動物でもなく、もっとずっと恐ろしい妖怪だ。鳴女の性格的にロクな奴が居ないだろうから、気を引き締めて行かないと。

『……しかし、アデル様。売り言葉に買い言葉で来てしまいましたが、本当に苦戦を強いられるような展開になるでしょうか？　高が極東の島国にいる木端妖怪ですよ？』

と、ゲーム自体には乗り気ではなかったカミーラが、不満を漏らす。

まぁ、言わんとしている事は分かる。正直、私もこんな辺鄙な場所に閉じ込められている野良妖怪に遅れを取るとは思っていない。

「油断は大敵よ、カミーラ。獅子は兎を狩る時も全力で挑む。……それに、見せ付けるには丁度良い」

良質なカメラマンも随伴している事だし、ね？

《二人共、あんまり舐めて掛からない方がいいッチャよ？　蟲妖怪は想像の百倍くらいは怖いッチャ》

だが、使い魔のメダマッチャは慎重に忠告して来た。鳴女サイドだから、という理由だけではなさそうである。

『どういう事、メダちゃん？』

「メダちゃんって……」

『ああっ、す、すいません！』

頼むよ、おい。

《そうねぇ、あたしとカミュちゃんの仲だし、少しだけあたしの経験談を聞かせてあげるッチャ！》

あんたもかい。何なんだお前ら。

しかし、古残の戦場カメラマンの体験談というのは為になる。文字通りの生き証人だからな。そこに国籍など関係ない。是非とも聞かせて貰おう。

《あたしが初めて接触した蟲系の妖怪は「槐の邪神」。伝承では通行人から金品を巻き上げる小物な奴だッチャ》

『「ただのチンピラじゃん」』

何だ、その拭い様の無い小物臭さは。「邪神」の名は飾りなのか。

《ところがどっこい、その小物に、鳴女様は一度殺され掛けてるッチャよ》

『「ゑ？」』

だが、メダマッチャから返って来た言葉は、想像を絶する物だった。

あの鳴女が……鬼太郎とも互角に張り合ったという鳴女が、殺され掛けただと？

「俄かには信じ難いな」

《本当の事だッチャ。気持ちは分かるけどね》

『というか、主人の黒歴史をバラしちゃって良いの？』

《あの人は基本オープンだから気にしてないッチャよ》

何それ、器が広過ぎませんかね？

……話を戻そうか。

「それで、何がどうしてそんな事に？」

《槐の邪神は、年月を重ね鋼鉄の鎧を持つようになったカブトムシだッチャ。昔は小銭を巻き上げて食っていたみたいだけど、今の世の中は良質な合金だらけだッチャ》

『だから、物凄く硬くなったと？』

《個体差は大きいけど、少なくとも10トントラックが衝突したらトラックの方が大破するぐらいのスペックは皆持ってるッチャ》

『「それはヤバくない!?」』

《しかも、何故か口から火砕流みたいな火を噴く上に、短距離なら素早く飛び回れるッチャよ》

『「もうロボットじゃん」』

《だから言ってるッチャ、油断するなって》

うん、日本の生態系舐めてたわ。よくよく考えれば、オオスズメバチとか居るよ

うな環境だもんな。そりゃあ魔窟になるに決まっている。

《次に遭遇したのは「火間虫入道」ッチャね》

「何だ、そのニートみたいな妖怪は」

《まさにその通りだッチャ。火間虫入道は、穀潰しが生まれ変わった妖怪と言われているッチャよ》

『ニート・オブ・ニートじゃないの』

選ばれしニートって、救いがなさ過ぎるだろ。

《だけど、こいつも馬鹿には出来ないッチャ。火間虫入道は元々、中国の「蜚虫（ヒムシ）」って妖怪が適応拡散した種族なんだけど……その正体は、真社会性のゴキブリだッチャ》

『「イヤァアアアアアアアアアアアアアアアア！」』

別の意味で怖過ぎるぅ！

《伝承ではあくまで〝生まれ変わり〟だけど、実際は見捨てられて野垂れ死んだ穀潰しの死体を食って姿をコピーしてるんだッチャよ》

『「その情報はいらない！」』

ちょっと想像しちゃったじゃないの！

ウェッ、吐きそう……。

《しかも、最初こそちっぽけなゴキブリだけど、数を増やすと群体生物として行動するようになって、砕いても砕いても死なない上に、口から何でも溶かす粒子光線とか吐くようになるッチャ。あと飛ぶし》

デスト〇イアかな？

芹沢博士に怒られるぞ。

《他にも「常元虫」や「絡新婦」、「疱瘡神」……色々な現場に立ち会ったッチャねぇ》

『「害虫退治の専門家じゃん」』

下手すると、鬼道衆や鬼太郎より妖怪退治をしているのでは？

良いのか、それで。

《……と、さっそくお出ましだッチャ！》

すると、メダマッチャが退避の態勢を取った。流石に駄弁り過ぎたか。

『「……！」』

私たちも戦闘態勢に入ったのだが、
『アァァ……』『オォォ……』『ヴァァァ！』
『「何でゾンビ!?」』
廃屋の中から這い出て来たのは、まさかのゾンビの群れだった。何故にWhy（フォワイ）!?

◆アデル・フォン・アスワング

アニメ第6期に登場した、西洋妖怪軍団の最高幹部。種族としては魔女だが、バリバリの魔女っ子なアニエス（妹）と違って、甲冑と軍服で身を固めた、サーチ・アンド・デストロイしそうな見た目をしている。実際、潜在魔力こそアニエスに劣るものの、最高幹部の地位に相応しい実力を持っている。

表向きはバックベアードに忠誠を誓い、ブリガドーン計画に必要なアルカナの指輪を持ち逃げしたアニエスにも厳しく当たっているが、本心は自らを犠牲にしてでも妹を生かそうとする、不器用な人物である。ツンデレって奴か。

今作では本編では不明だったミドルネームやラストネームを勝手に設定。フィ

リピン生まれのドイツ育ちで、今はアメリカ妖怪の傘下に居るという、よく分からない生い立ちを得た。大分スパルタかつサバイバルな人生を送って来たようで、カミーラもその過程で救出した。

ちなみに、「アスワング」とは英国圏でいう「ヴァンパイア」に相当する。

アデルとカミーラの鳴女式最終選別試験②

実は日本にも「ゾンビ」っているんでスヨー。たぶん本場の奴より質が悪いタイプのガネ。

《ゾンビじゃないッチャ。そいつらは「死人憑き」に寄生された動く死体だッチャ》

さらに、空中へ退避したメダマッチャより注釈が入る。浮遊していた時点で分かっていた事だが、飛べるのか。

というか、動く死体ならゾンビではないのか？

殭尸（キョンシー）やグール、ワイトと何が違うのだろう？

……あと、動く死体の容姿が、どいつもこいつも零余子とよく似ているのは何故なのか。このゾンビ（ゾンビとは言っていない）って、もしかして――――――。

《もちろん、素材は零余子だッチャ！》

『配下の扱いに落差が有り過ぎない？』

本当にね。チャラトミや丸子は丁重に扱ってるのに……。

いや、それよりも今は目の前のビンゾー共だ。誰に似てようが、実はゾンビじゃなかろうが、襲って来ると言うのなら、迎え撃つまで！

……でも、直に触るのは嫌だから、魔法剣で！

「ハァッ！」

私は一瞬でゾンゾンの群れを駆け抜け、擦れ違い様に全員を切り捨てた。動く死体に後れを取る程、鈍間じゃないのよ。

《あっ、そいつらに接近戦は……あーあ、やっちゃった》

しかし、それは間違いだったらしい。メダマッチャがやっちゃったー、という顔をしている。

「えっ、それはどういう……ぷぱぁっ⁉」

一体何の事だと思ったら、直ぐに答えが分かった。

「蛆だぁあああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！」

何と切り掛かったゾビンの中から、大量の蛆が降り掛かって来たのである。
そう、こいつらの中身は骨以外の全てが蛆の塊だったのだ！
《死人憑きは死体に寄生する蠅の妖怪だッチャ。孵化と同時に幼虫のまま無性生殖して、肉を余す事無く食い尽くしてから、数珠繋ぎになって筋肉を代行して動き出すんだッチャよ》
『気持ち悪過ぎない!?　日本妖怪ってそんなのばっかりなの!?　……というか、アデル様ぁ！　い、今、お傍に……い、いいい、行きたくないけど……参りまぁあああぁす！』
「本音が漏れてるぞぉおおおおおお！」
いや、でも、マジでお願い、助けてカミーラぁっ！
『「はぁ……はぁ……」』
《だから油断するなって言ったッチャ。蟲妖怪はこういう初見殺しな要素が結構あるから、慎重に行かないと駄目だッチャよ》
『「ハイ、以後気を付けます……」』
その後、物凄く嫌そうな顔のカミーラに蛆を払ってもらい、どうにか一息付けた

が、当然ながらメダマッチャから駄目出しを喰らった。言い訳の仕様が全くない。これには画面の向こうにいる鳴女もニッコリだろう。

クソッ、私はベアード軍の最高司令官なんだぞ……様々な艱難辛苦を乗り越え、軍の実質的なトップに立ったんだぞ……っ！

そんな私が、こんな無様な姿を衆目に晒すなどぉ……おのれ……謀ったな鳴女ぇえええっ！

《ちなみに、鳴女様からは『ノーコメントで』って言伝られたッチャ》

「おのれ鳴き女ぇえええええっ！」

『お、落ち着いて下さい、アデル様！』

※しばらくお待ちください。

「済まない、カミーラ……幻滅したか？」

『い、いいえ、そんな事は……役得です』

「……何て？」

『アデル様は何時だってアタシの憧れの上司です！』

嘘吐けぇ。

だが、これで脅威は去った。ビンビンゾンビーはもういない。後はゴールを目指して進むのみ。

そう、私はやれば出来る子なんだ……ひ、ひとりでできるもん……ね、舞ちゃん!?

《ボサッとしてる場合じゃないッチャよ。ほーら、おかわりが来たッチャ》

『「ヴェ!?」』

ま、まさか、またサンゲリアが!?

『グヴォオオッ！』『カァルヴァッ！』『キィイイ！』

「あ、普通のモンスターだ」『何か逆に安心しますね』

しかし、廃村の奥にある森から現れたのは、まさしく魑魅魍魎と称すべき化け物たち。牛鬼、濡れ女、太歳、唐獅子、馬頭鬼など、様々な他の妖怪の姿を取っているが、所詮はコケ脅し。気配で分かる。こいつらは死人憑きが化けた偽物である。

そうと分かれば、

『「汚物は消毒だぁ！」』

『ヴギャアアアアア！』

私たちは魔法攻撃で魑魅魍魎の群れを焼き尽くした。例え中身が蛆のままだったとしても、破れる前に燃やしてしまえば良かろうなのだぁ！

『「ヤッタァーッ！」』

嗚呼、こんなに嬉しい事は無い。私たちは、勝った！

《その考えは流石に甘いッチャよ》

『「エ、エスパー!?」』

《いや、今のお前らを見たら誰でも分かるッチャ……》

すると、メダマッチャに物凄く呆れられた。何でだよぉ、ちゃんと敵倒したじゃんよぉっ！

《蠅は完全変態する昆虫だッチャ。死人憑きの成虫は内骨格を持っているから、厳密には昆虫じゃないけど、成長過程は昆虫の蠅と殆ど同じだッチャよ》

「え……？」『それはどういう――――』

《動く死体は「幼虫」、さっきの怪物は「蛹」。なら、その先もあって然るべきじゃないかッチャ？》

『「それってつまり……」』

ここからが本番って事？

――――ブゥウウゥゥンッ！

森の奥から、無数の羽音が聞こえる。蜂や蜻蛉の類ではない。……蝿だ。

『キャハハハハ！』

『「うわぁ……」』

そして、現れる――――蠅の翅が生えた零余子の大群。

なるほど、成虫になると〝自分の内骨格〟を持つ、という事か。衝撃の展開が続き過ぎて、もはや驚きもしないわ。ドン引きはするけど。

……多過ぎだろう、幾ら何でも。一体、何零余子が犠牲になったんだ？

まぁいい、今楽にしてやる！

《馬鹿、下がるッチャ！》

その時、メダマッチャが声を上げた。

『「……っ！」』

ほぼ反射的に飛び退くと、さっきまで立っていた場所が陥没した。倒壊寸前だった廃屋が完全にバラバラとなり、渦潮のようになった地面に呑み込まれていく。

『クヴォオオオン！』

さらに、その渦中から土砂を間欠泉の如く噴き上げながら、とんでもない怪物が現れた。

シラミバエを土台に、ツェツェバエやチョウバエにキノコバエなどの蠅類を雑多

に組み合わせた、化け物としか言えない異形。体高だけで40メートルを超し、全長は１００メートル以上もある巨体。胸部に備えられた零余子顔の卵たちが、どうしようもなく精神を抉る。

まさに、蠅の邪神とでも言うべき姿だ。蠅の王は知っているが、まさか邪神までいるとは思わなった。世界は広いね、日本は狭いけど。

――――――って、考えとる場合かぁっ！

『「何コレェエエエ!?」』

《これが死人憑き――――――引いては魍魎の成長し切った姿……彼らの女王たる存在、「蠅声為邪神（サバエナス）」だッチャ！》

『クヴヴヴ……キャァアアアアアアアアアッ！』

そして、「奈落村」の女王――――――「蠅声為邪神（サバエナス）」が雄叫びを上げた。

◆『分類及び種族名称：宇宙大怪獣＝蠅声為邪神（サバエナス）』

◆『弱点：不明』

◆死人憑き

文字通り人の死体に取り憑く正体不明の存在。動いていても身体は腐っており、とんでもない臭いや汁に蛆を振り撒く傍迷惑な奴で、その癖に食べ物やお酒を遺族に請求してくる最強のニート。念仏やお祓いも全く通じないので、退治するには完全に死んでしまうまで閉じ込めておくしかない。

鬼太郎のアニメでは「魍魎」が取り憑いた結果の存在として登場。最初は憑いた身体で動き回るだけだが、その内に仲間を呼び寄せ、近隣の住民にまで取り憑いて行き、最終的に村や町ごと呑み込んでしまう。

今作での正体は、死体に食い込んだ蛆その物。無性生殖で瞬く間に死体の筋肉や内臓を食い尽くし、自分たちがその代役を務めて動き出す。やがて魑魅魍魎な蛹の形態を経て、人間に近い成虫となる。

アデルとカミーラの鳴女式最終選別試験③

悪魔のお耳は地獄イヤーッ！

「こ、こんなの有りか……！」

目の前に聳え立つ、蠅の邪神に言葉を失う。こんなの聞いてなーい！

《蠅声為邪神は、遥か太古の昔に存在した邪神の一柱。素戔嗚（スサノオ）率いる神の軍勢に滅ぼされるまで、古代日本を支配していた、正真正銘の怪物だッチャ》

「本当に邪神なのか……！」

太古の邪神と言えば、かつて閻魔大王が封印したという夜刀之神（ヤトノカミ）と同類じゃないの！

「日本の妖怪は、かつての邪神が零落した存在だと聞いてはいるけど……だからって、何で滅んだ筈の邪神がこんな所に!?」

《確かに、オリジナルの個体はとうの昔に滅び、今はその残滓である死人憑きた

ちが残るのみだッチャ。……だけど、鳴女様が捕獲して、ここで餌を与え続けてたら、いつの間にか最初の個体が進化したんだッチャよ》

「カブトムシみたいな感覚で邪神を育むなよ!?」

夏休みの思い出にしてはスケールが大き過ぎるわ。鳴女の奴め、何て事をしやがる。

「これじゃあ、来訪者が復活する前に日本壊滅でしょうがぁあああああっ！」

『ギゴォォオオアアアッ！』

だが、蠅声為邪神は私の嘆きなど聞いてはくれない。問答無用で襲い掛かって来る。サイズ差を考えて!?

「くっ……食らいなさい！」

接近戦は１００億パーセント無理なので、代わりに鉄硬弾（アイアン・バレット）を食らわせた。周囲の金属を弾丸状に圧縮して撃ち出す、謂わば砂礫砲（ストーン・バレット ロック・ブラスト）や岩石砲の上位互換である。

――――カン！　カン！　カン！　カン！　カン！　カン！

「ふざけるなよ貴様ぁあああっ!?」

しかし、元が蠅とは思えない外骨格に弾かれてしまった。

いや、マジでふざけるなよ貴様。高射砲（アハト・アハト）の連射を至近距離で浴びたような物だぞ。なのに、何で無傷なんだよ。ちょっとで良いから、掠り傷でも構わないから、ダメージがあってもいいじゃん！

つーか、それは本当に鋼鉄の塊が当たった音なのかぁ!?

『アデル様！　このぉおおお……嘘ぉおおおっ!?』

さらに、見兼ねたカミーラが即座に特大の火炎弾（ファイヤー・ボール）を放ったのだが、蠅声為邪神の表面に妖気の電流が走ったかと思うと、当たる直前に火炎弾を相殺してしまった。

おそらく、一瞬で魔力の質を見抜き、相反する妖気をぶつける事で無力化したのだろう。ただでさえ硬いのにバリアまで張れるとか、流石は邪神、やる事が違うわね。

「飛ぶわよ！」『了解です！』

どう考えても真面に戦って勝てる相手ではないし、このままだと普通に踏み潰されるので、とりあえず空中に退避したのだが、

『キャハハハハ……ギィシャアアアアアア！』

『「気持ち悪っ！」』

顔面を縦に御開帳した零余子型死人憑きに群がられた。お前ら絶対に出る神話を間違えてるぞ!?

「ハァッ！」『タァッ！』

『グギャァアアアア！』

だが、流石に蠅声為邪神程の脅威ではなく、魔法剣や魔法攻撃で迎撃可能ではある。

なるほど、普通ならこの段階までに討伐されてしまうから、神の領域には足を踏み入れられないのか。完璧に鳴女のせいじゃん。

しかし、この数を相手にするのは厳しいぞ……！

『ホォォォォオオオ……ッ！』

『「おかわりを寄こすなぁ！」』

すると、外敵に対する緊急措置なのか、元より備わっている能力なのか、蠅声為邪神が胸部の卵から、幼虫や蛹をすっ飛ばして成虫の群れを追加しやがった。ふざけるなよテメェらぁっ！

「カミーラ、使い魔をっ！」『分かりました！　出番よ、お前たち！』

『キャキャキャキャキャ！』

これでは埒が明かないので、カミーラに眷属の魔蝙蝠軍団を召喚して貰い、死人憑きたちの相手をさせる。どれ程持つかは分からないが、この間に本体を叩かないと！

『コヴォォォ……キャァアアアアアアアアッ！』

『「ズワォ!?」』

だが、蠅声為邪神は何と味方諸共、使い魔たちを吹き飛ばしてしまった。頭部の触角が正面で組み合わさったかと思うと、集束したマイクロ波をビームと放ち、薙ぎ払ったのだ。

ちょ、ちょっと待って……妖力と魔力の違いはあるけど、威力が初代ブリガドーンの主砲並みなんですけど!?

こんなのに勝ったとか、嘘だろ鳴女ぇ!?

「仕方ないわね……」

『……やるおつもりですか？』

「背に腹は代えられん！」

本当なら〝その時〟まで露見するのは控えたかったが、そうも言っていられない。〝最終手段（きりふだ）〟を使う。

『ハァッ！　……弾けて、混ざれぇ！』

まずはカミーラに、圧縮した魔力を変じた特別な光球を作ってもらう。この球は簡易な満月のような物で、我々夜の一族の力を飛躍的に上昇させる効果がある。

そして、私にとってはどんなドーピングよりも劇薬だ。

『セァアアアアアアアアッ！』

そう、月の光が私の正体を暴き出す。輝く闇が我が身を怒髪天を衝く程の巨神へと変じさせる。地を見下ろす、血を吸う鬼こそが、我が血族の証である。

つまり、月光の力で蠅声為邪神サイズに巨大化したのだ。まさに絶好調である！

さぁ、未だに増え続ける死人憑きはカミーラに任せて、反撃開始だぁ！

『グヴォゥヴヴヴッ！』

『フヴゥウウウウッ！』

真っ向から組み合う、私と蠅声為邪神。地力は向こうの方が僅かに上だが、私には今まで培ってきた経験がある。大きさが同じなら、お前みたいな気持ちの悪い化

け物、何体も屠って来たわぁ！

『キャァヴォオオヴッ！』

蠅声為邪神が、手数に物を言わせた連打を放って来るが、当たらない。

『キャアアアアアッ！』『フゥン！』

さらに、至近距離からのマイクロ波ビームも、魔力を最大限に纏ったクロスガードで防ぎ切る。

『ハァアアッ！』

そして、お返しとばかりに、頭部目掛けて魔力光線をぶちかました。

『ゴヴォヴヴヴン！』『くっ……！』

しかし、一発では斃れず、光り輝く触手のような物で反撃してくる。掠っただけでも皮膚が蒸発したので、直撃したら膾切りだろう。

『テァアアッ！』『ガァアヴヴ！』

さらに、隙を突いてもう一度攻撃を仕掛けたが、尚も斃れない。今度は身体の至る所から簡易なマイクロ波ビームを乱れ撃ちにしてきた。カミーラに当たったらどうすんだこの野郎！

『いい加減にしろぉっ！』『ガギャォォォ……！』

そして、三度目の正直なのか、蠅声為邪神は三発目でようやく斃れた。限界を迎えた身体は粉々に砕け、塵も残さず消えて無くなる。死人憑きたちも、カミーラと使い魔たちが何とか退治してくれた。

現代に蘇ってしまった太古の邪神は、今この時ようやく滅びたのである。

『――――――はぁっ！』

私も限界を迎えて元通り。今の所、この形態を真面に運用するのは三分間が限度なのよね。

『お疲れ様です、アデル様』

と、一仕事を終えたカミーラが労ってくれた。彼女も無事なようだし、これでようやく一安心――――――、

「ええ、貴女こそお疲れ様……って、あっ！」

そこで、私はハタと気付いた。

『……ど、どうされました？』

「これ、絶対にお札も吹っ飛んだだろぉっ！」

周りを見渡せば、菖蒲なんか一凛も残っていない焼野原。これでお札が無事なら奇跡に近いし、そんな事がある筈ない。

何てこった、オーマイガーッ！

◆蠅声為邪神

古代日本に蔓延っていた邪悪な存在の一柱。名前の意味は「蠅のように煩い声で喚く邪悪な存在」。謂わば八岐大蛇や土蜘蛛と同類であり、土着の神だった存在。素戔嗚が率いる神軍に滅ぼされたと言われている。絵では「T字頭の小鬼」のような姿をしているが、それが本当の物かは不明。

今作では、蠅の合成獣を思わせる姿をしている。蠅の妖怪である死人憑きの最終到達点で、本来は死人憑き⇒魍魎⇒雷鳴蠅⇒蠅声為邪神と変化するのだが、大抵は雷鳴蠅までに討伐される為、復活する事はなかった。

しかし、鳴女の面白半分の実験により人知れず再臨した……のはいいが、結局は誰にも知られる事なく倒された。

ただし、高射砲でも焦げ目すら付かない装甲や妖力によるバリアも持ち合わせている他、マイクロ波に変換したビームを撃ち出すなど、その力は邪神と呼ぶに相応しい。

アデルとカミーラの鳴女式最終選別試験④

本日にて試験終了（早）！

――――――と、その時。

『お前さんたちの探している札ってのは、この三枚かい？　山奥の廃神社に納めておいたんだがなぁ……』

『「……！」』

何処からともなく、青髪の退魔師が現れた。その手には、「天邪鬼」と「ラクシャサ」が描かれた物、白紙の物、計三枚のお札が。

こ、こいつは、まさか……!?

「え、えっと……どちら様でしょうか？」『……』

一先ず、知らない振りをする。カミーラにも動かないよう指文字を送った。

『俺かい？　俺は蒼坊主。流離いの退魔師さ』

『「……」』

やはりそうか。過去の記録に度々出て来た、鬼太郎の義兄にして戦いの指南役、蒼坊主。まさか、こんな所で、こんなにも消耗した状態で出くわすなんて……！

『見た所、アンタらは西洋の妖怪みたいだが、「奈落の谷」で一体何してやがった？』

「「奈落の谷」？」

え、何それ知らないんだけど？

『……知らずに来たのか？　呆れた奴らだな。いいかい？　「奈落の谷」ってのは、地獄の亀裂だ。あってはならない、奈落の綻び。だから、こうして幾らでも再生する』

「なっ……!?」

蒼坊主が呟いた瞬間、荒野と化した筈の奈落村が、元の姿を取り戻した。菖蒲の花が咲き乱れるのはもちろんの事、塵芥となった廃屋までもがテープの逆再生の如く復活する。この世の物とは思えない、異様な光景だった。

なるほど、確かに〝地獄の綻び〟だ。奈落村を含む、この巨大な谷間の全てが次

空の裂け目なのか。

『そんで、ここは「奈落の谷」の最南端。かつて〝盗賊村〟とも呼ばれた集落の成れの果てさ。ここには人間どころか、現世の妖怪すら近付かねぇ。そんな場所で、おたくら一体何してたんだい？』

「……ッ！」

どうしよう、史上最大の肝試しをしてたなんて、口が裂けても言えない……！

『――――まぁ、事情はどうあれ、感謝はしてるさ。「奈落の谷」は妖気が乱れ易いし、何より鬼太郎の面倒を見ていた最中とは言え、あんな化け物が息を潜めていたなんて、思いもしなかったぜ。本物の蠅声為邪神なんざ、妖怪図書館の資料でしか見た事ねぇよ、まったく……』

ただ、鳴女が飼っていた蠅声為邪神とその一族の存在は、蒼坊主にとっても想定外だったらしく、何とも言い難い表情を浮かべていた。何か、ウチの協力者（予定）がスイマセン……。

つーか、ここ鬼太郎の修行場だったのかよぉっ!?

おのれ、マジで謀ったなぁ、鳴き女ぇえええっ！

『だからこそ、問いたい。太古の邪神をも打ち倒す西洋妖怪の二人組が、こんな所で札を探して、一体どうするつもりだったんだい？　……道に迷って間に合わなかった身で手前勝手だとは思うが、場合によっちゃあ生かして帰す訳にはいかねぇなぁ？』

「うぐっ……！」『アデル様、お下がりを……！』

マ、マズい、こんな方向音痴に捕捉されてしまうとは……ッ！

カミーラも大分草臥れてるし、本格的にヤバいのではないか!?

――――――べべん！

『そういう訳にはいかんなぁ、蒼坊主さん』

まさに絶体絶命というその時に、鳴女が襖を開いて現れた。配下のチャラトミ（ヴェノム）や零余子（痣者）を引き連れて。……藤花たちは居ないようだ、良かった。

『……お前さん、鳴女か』

出現と同時に放たれた、怪電波のような妖気を感じ取ったのか、蒼坊主が冷や汗を垂らしながら、錫杖を構えた。

『ほぅ、自己紹介の必要は無いようだな。大方、鬼太郎から話でも聞いてたって所か』

だが、鳴女は気にも留めない。まるで、蠅でも見るかのような冷やかさである。

『鬼太郎からは瀕死に追い込んだって聞いてるが？』

『そんなもん、湯治したら全快したよ。むしろ、前よりもっと身体が軽いくらいさ。いやー、素晴らしい効能だわ』《また入りに行きます？》『……いや、今度は海に行きたいな。サンオイルでも塗ってくれ』《喜んで♪》

「あんたら、真面目にやれよ……」

さらに、このふざけっぷりだ。内容が完全に世間話である。

……そう言えば、ベア子様とヴィクターが丸子たちと交戦した時、鬼太郎に胴を一刀両断されて殺され掛けたんだっけな。

話を聞く分には、おそらく魂まで傷を付けられた筈なんだけど、例えその温泉がエリクサーだったとしても、湯治だけで回復するのはおかしくないかな!?

あと、せめて蒼坊主を会話に混ぜてあげて。物凄く真剣な分だけ、可哀想になってくるから。

というか、逃げて蒼坊主、これ絶対に勝ち目無いから！

『フーム、それにしても、まさか鬼太郎とバッティングしちまうとはな。便利だから使って来たけど、やり過ぎた感もあるし、そろそろ別の実験場でも探すかぁ……』

おい、〝新しい部屋でも探すかぁ〟みたいなノリで、地獄を量産しようとするな。普通に迷惑だろ。

『俺がそれを許すとでも思ってんのかい？』

『お前の許可なんぞ必要ない。そして、アデルたちも渡さない。この二人には充分に楽しませて貰ったからな。札は勝手に取られてたようだし、合格としてやろう』

『「……！」』

しかし、ここでこの混沌過ぎる場に暁光が。

「鳴女殿、それはもしや……!?」

『ああ。正式にバックベアードと会談してやろう。細かい事はそれからだな』

「……ッ！」『やりましたね、アデル様！』

――――やった！

まだ話し合いの段階だが、こちらのテーブルに着いてくれる気になったか！

明らかに無様を通り越した醜態を面白がったってのが丸分かりで滅茶苦茶腹立つけど、それはそれ、これはこれだ！

……ならば、最早この場に用はない。

「それでは、日程の調整に入りましょうか」

『そうだな。立ち話も何だし、この場は退散しよう』

そういう事になった。

『くっ……！』

黙って見ているしかない、蒼坊主を尻目に。流石に戦力差は覆せないわよねぇ？

ともかく、やってやったぞ。このまま上手く話しを持って行けば、アニエスは……！

「アニエス……」『……』

そう、私たちの戦いは、これからだッ！

◆奈落の谷

かつて闇魔大王がヤトノカミを封印した時に出来た戦いの余波であり、千年以上経った今でも残る爪痕である。ここでは地獄から漏れ出る瘴気により妖気が乱れまくっており、基本的に何が潜んでいても、直接五感で確かめない限り発見する事は出来ない。また、妖気と瘴気が混じった結果なのか、永遠に枯れる事の無い菖蒲が咲き乱れ、どんなに焼かれても元の風景に戻ってしまう。

奈落村はその最南端に位置し、在りし日は「盗品で富を得た蛇神信仰の村」だったのだが、朝廷により討伐される寸前に腹癒せとして復活させたヤトノカミによって諸共滅びた。ポツポツと並ぶ廃屋は数少ない当時の名残だ。

ちなみに、鬼太郎が修行していたのは最北端で、奈落村からは大分距離があった為、アデルたちが暴れるまで、鳴女が夏休みの宿題をしている事は、物理的に気付きようが無かった。それどころじゃなかっただろうしね。

奈落の底から

個人的に地獄童子の親は分家筋か王の従者だったんじゃないかと思ってマス。

深い深い闇の底。

『ハァ……ハァ……』『しっかりしろ、もう少しだ！』

「奈落の谷」の最北端にポッカリと開いた、地獄へと通じる秘密の抜け道を、ゆっくりゆっくり一歩ずつ、肩を組んで上る者が二人。幽霊族の末裔、鬼太郎と地獄童子である。

否、訂正しよう。肩を貸しているのが地獄童子であって、鬼太郎は息も絶え絶えに肩を借りている状態だ。

つまり、立って歩くことすら儘ならない死に体の鬼太郎を、地獄童子が肩で支えているのである。

まぁ、無理もあるまい。修行は今日で六日目。一日置き程度の休憩を挟んではい

るが、殆ど焼け石に水だ。修行を終える度に力は着実に上がっているものの、それ以上に疲労の方が大きい。

何せ左半面が完全に白骨化し、髪の毛は全て白く染まり、身体の至る所が干からびているのだから。

むしろ、これでよく生きていられるものだと、鳴女なら呆れる事だろう。それ程までに、鬼太郎の魂は摩耗していた。

（……次に一戦交えたら、その時が最期かもな）

その事を鬼太郎は正確かつ冷徹に判断していた。次しかない、それっきりだと。だが、やらねばならない。大逆の四将が何者かに逃がされ、来訪者の復活が間近となっている。弱音を吐いている暇など無いのである。

『もう一度だけ聞くぞ。……お前は本当に、それで良いのか？』

ふと、地獄童子が尋ねる。今自分が肩を貸している鬼太郎の身体が、悲壮で重い覚悟に反比例するかの如く、あまりにも軽過ぎたせいだろう。

それに、彼には仲間がいる。たくさんの友人や家族が、今も鬼太郎の身を案じ、悲痛な想いで待っている。

その人たちに対して、こう言っては何だが、今の彼はかなり不誠実だ。自分の命を顧みず、心と魂を擦り減らし、一時の肉体的な頂点を得ようと足掻いている。こんな奴を心配する身になったら、遅かれ早かれ絶対にノイローゼになる。

事実、約二名程その傾向が見られている。鬼太郎が修行の真実を告げてから、パッタリと行方が知れなくなった、真奈と猫娘がそうである。目撃者によると、真奈は実家の奥から奇妙な本を引っ張り出し、猫娘は怪しげな老婆と落ち合っていたらしい。一体何をするつもりなのかは不明だが、誰にも相談せずに姿を晦ました事を鑑みるに、真っ当な事ではないだろう。

後には退かず、誰にも媚びず、自らを省みない、この三人はどうなってしまうのか。サポートに徹している地獄童子からしても、気が気ではなかった。

『ああ。今更、後悔しても遅いし、する気も無い。……僕は僕の選んだ道を行く。猫娘やまなだってそうさ』

『……知ってたのか。話した覚えはないんだがな』

『地獄耳なんでね』

『そうか……』

しかし、鬼太郎はブレない。命を削った代わりに、かつての矜持を取り戻した彼に、迷いなど一欠けらも無かった。

最早、自分から言えることは何もない。仮に声を掛けるとしたら、それは真奈や猫娘になるだろう。

地獄童子はそう判断し、それ以上は何も言わなかった。

『だけど、これだけは言っとくぜ。……お前、絶対に地獄行きだぞ』

最後にそう皮肉って。

『無事に行けたら、それ以上の幸いは無いね』

まぁ、倍返しされた訳だが。

（本当に気に食わない奴だよ、お前は……）

そんな鬼太郎だからこそ、地獄童子は手を貸し、肩を貸しているのだ。

（何処までも分家筋だな、俺は）

王の行く道を、逸れる事の無いよう脇から支える。両親がそうだったように、自分もまた鬼太郎の歩む道を並んで歩いている。

その事実が、何処までも地獄童子を虚しくさせた。出来れば、切磋琢磨し合うだ

けのライバルで在りたかったと。それなら、ここまで虚ろな気分になる事も無かったろうに……。

『さぁ、着いたぞ』『ああ』

そんなこんなで、二人は奈落の穴を抜け出したのだが、

『……』

そこには、重々しい表情の蒼坊主が立って待っていた。

『……どうしたんだい、蒼兄さん？』

様子がおかしい。何時もの飄々とした態度は微塵も見受けられず、それどころか何かに怯え、震えているように見える。この無茶苦茶な修行をねずみ男経由で持ち掛けた時も、ここまで動揺する事なんて無かったのに。

『ついさっきの事だ。……「奈落村」で、鳴女に出くわした』

『『……！』』

だが、蒼坊主が口にした言葉に、逆に鬼太郎たちの方が狼狽してしまった。何故、鳴女がそんな所に？

『前に封印した、天邪鬼とラクシャサの札があったろう？　暫くここを離れられ

ないし、とりあえず地脈の影響が強い「奈落神社」に奉納してたんだが、妙な胸騒ぎがしてな。様子を見に行こうとしたら、案の定ヤバい事が起きていた』

『一体何が……？』

『――――「奈落村」に、いつの間にか「死人憑き」が根付いていやがったんだ』

『なっ……!?』

そんな馬鹿な。死人憑きは文字通り死体に取り憑く妖怪。滅んで久しい「奈落村」に、依り代となる死体は無い筈である。

『まさか!?』

『そう、鳴女が秘かに持ち込んでいたんだ。餌も含めてな。奴さんは〝自由研究〟が好きらしい』

『自由研究って……』

軽いノリで厄介なモノを持ち込むな、と言いたくなる。餌は十中八九、零余子とかいう化け物染みた人間だろう。再生力を思うがままに操れると言うし、間違いあるまい。

しかし、話はそれで終わりではないようだ。

『――――で、その持ち込まれた死人憑きの1体が、成長と進化を重ねて、蠅声為邪神になってやがった』

『『ブフッ!?』』

これには地獄童子共々吹き出した。草が生えるとはこの事である。

『しかも、第一発見者は、何故だか迷い込んでいた西洋妖怪の二人組だ。俺が駆け付けた時には蠅声為邪神を倒していたから、消耗の事を考えても、かなりの手練れだな。おそらくはバックベアードの所のお偉いさんだろう。奴らは実力主義の集まりだからな』

その上、限りなく嬉しくない情報が追加される。何がどうしてそうなった。

『奴らは……バックベアードと鳴女は、何某かの盟約を結ぶつもりだ。二人組が「奈落村」に来ていたのは、その為の〝実力テスト〟らしい。詳しい事は分からんがな』

そして、この結末だ。ふざけた話である。全く以て笑えない。

『……済まねぇな、鬼太郎、地獄童子。何も出来ずに、突っ立っててよ』

だが、蒼坊主は苦笑いを浮かべていた。笑わないとやっていられない、という感じだ。

『そんな事無いよ、蒼兄さん』『そうだぜ。多勢に無勢だったんだろう？』

『いいや、それでもだ。〝あの妖気〟を感じたなら、命を懸けてでも挑むべきだった。……だが、俺は動けなかった。情けない事に、足が竦んじまったんだよ。鳴女の放つ妖気の質に』

『えっ、それはどういう意味だい、蒼兄さん？』『んんっ、何じゃそりゃ!?』

『――――丁度良いから、話してやるよ。あの日……皆が皆、〝世界最後の日〟と呼ぶあの時に、俺が何を見たのかを……』

さらに、苦々しく語り出す。己が見た、本当の最期という物を……。

◆地獄童子

原作版鬼太郎の番外編「最新版」及びアニメ第３期に登場した、生者より生き生きした亡者にして、地獄の用心棒。現世では嫌われ者、地獄ではあぶれ者として

大暴れした結果、何か気に入られて雇用されたらしい。

何処ぞのマスターが如くマフラーを自在に操り、何故か髪の毛針を使用出来るなど、出自には謎が多いが、そんな事はどうでもいいくらいに目立っている。お前は本当に原作にいないオリキャラなのかと言いたい。

「最新版」の最期は「にせ鬼太郎」染みた呆気ない物だったが、〝幽霊族のもう一つの末裔〟である可能性が示唆されているので、普通に復活するかもしれない。アニメ版では生存し地獄に残っているが、後に肉体を乗っ取られたりする（たぶん元に戻れた）。何れにしろ、ロクな目に遭っていない。

今作では鬼太郎たちの王族に対する分家筋の末裔として登場。性格はとある事情で幾分か落ち着いている。

彼の両親は謂わば王族の近衛騎士のような物であり、目玉おやじがまだ現役だった頃は何だかんだと共闘する事も多かったが、世界最後の日に戦死した。その結果、地獄童子は自動的に天涯孤独となり、荒んだ人生を歩む事になる。

その後はアニメの流れで宿敵と書いて友と読むような関係になり、最新版の如く一度死に掛けたが生き残り、その代わりに――――――。

在りし日の一時

あの頃はまだ平和だッタ……。

――

――――今ではない何時か、ここではない何処か。

『おやっさんよぉ』

『何じゃ、蒼よ？』

『幾ら何でも、今日のこれはやり過ぎじゃない？』

在りし日の蒼坊主が、まるで蜂にでも刺されたように腫れ上がった顔で、自分を完膚なきまでに叩きのめしてくれた銀髪の男を見上げる。

何れ全てが終わる、あの頃……蒼坊主はまだまだ若造だった。

実力自体は申し分なく、退魔師としてバリバリ働いてはいたものの、目玉おやじと妻の岩子、更には地獄童子の両親までも健在だったので、正直影が薄かった。周りが凄すぎたのである。

だから、彼は努力した。どうしようもない劣等感を拭う為に。親の顔も知らず、天涯孤独の流浪人だった己を養ってくれた、幽霊族の者たちへ親孝行をする事を誓って。

まぁ、今はその親代わりの人からタコ殴りにされた訳だが。手合わせとは言え、これは酷い。将来ぬらりひょんになったらどうする。

『そうは言ってものぉ。〝本気で来て欲しい〟と頼んだのはお前じゃろうに』

しかし、後に目玉おやじになるイケメンは、バツが悪い顔はしているものの、知らんぷりを決め込むつもりのようだ。本当に加減を知らない親父である。

『いや、でも『流石にやり過ぎですよ、慎吾さん。これ以上蒼が禿げたらどうするんですか！』』

もちろん、お嫁さんは黙っていません。もうすぐ臨月だというのに、家事も手当も人の5倍は熟す岩子は、今日も元気にイケメンの夫――――慎吾（シンゴ）を叱り飛ばしている。

ちなみに、蒼は禿げていません。僧侶だから剃ってるだけです。

『はい、仲直りする！』

『うぬぅ……ス、スマンのぅ、蒼や』
『いや、良いって事よ。俺も結構調子に乗ってたからな』
だが、そんな事など知らんよとばかりに、あっという間に仲直りさせられてしまった。人も妖怪も関係なく、肝っ玉お母さんには誰も敵わないらしい。この世の真理ね。
『ウフフ、良く出来ました。それじゃあ、特訓の後はご飯よ！　さぁ、いらっしゃい！』
『おお、もうそんな時間か』『おっ、待ってましたぜぇ！』
そして、何時も通りの日常が過ぎていく。
人間に棲み処を追われ、地下に隠れ潜んでから幾星霜。穴倉暮らしは確かに大変だが、それでも慎ましやかに、彼らは幸せを謳歌していた。
『た、大変です、慎吾様！』
そう、空の彼方から凶報が届くまでは。
『ハァ……ハァッ！』
『どうしたんじゃ、黒鴉!?　そんなに息も絶え絶えに……』

知らせに来たのは、鴉天狗警察の若きエース「黒鴉」。まだ己の出自を知る由もない頃の彼だ。

『たった今、帝都に「妖怪城」が出現しました！　中国妖怪の侵攻です！』

『何じゃと!?』

「妖怪城」とは水陸両用の〝動く城〟であり、城の建つ地盤の真下に軟体動物のような足を無数に持つ生命体の事である。主に中国妖怪が運用し、海中や地中を自在に移動して奇襲を仕掛ける、中華驚異のメカニズムだ。

『しかし、何故こんな急に!?』

『先遣隊の報告によれば、城主は白面銀毛九尾の狐との事！』

さらに、今明かされる衝撃の真実ゥ！

『「チー」じゃと!?　だが、奴は封じられていた筈……』

『詳細は不明ですが、間違いありません。指揮官は奴です』

『……ならば、目的は「姉」の解放か』

「チー」こと「白面銀毛九尾の狐」は、妲己や玉藻前として知られる「白面金毛九尾の狐」の実弟であり、姉が吉備 真備と共に渡日する手伝いをした後、唐に残り

悪さをしていたが、「靖難の変」が起こった際に姉の後を追うように殺生石と化したという。

しかし、アヘン戦争が勃発した頃より石の行方が分からなくなり、戦火による記録の紛失も相俟って、完全に滅んだものとされていた。

だが、実際は長い間ずっとずっと力を蓄え続け、今日の侵攻に至ったのだろう。人界の混乱による弊害が出た結果と言える。

『――――――お願いします、力をお貸しください！　今も大天狗様と鴉天狗警察が奮闘していますが、幾何の時間もありません！』

『分かった。岩子は『もちろん、ご一緒しますよ。戦場に医師は付き物ですよ』仕方の無い奴じゃ。ならば、行くぞ！』

そういう事になった。

『……何でぇい、俺はまた置いてきぼりかよ』

しかし、面白くないのは蒼坊主である。折角の家族団欒を邪魔された上に、お留守番と来れば、年頃の男なら誰でもそうなる。

『いいや、蒼には別の方を対処してもらいたい』

だが、それは慎吾も承知している。なので、〝別の餌〟で釣る事にした。不謹慎だけど。

『何だい、別の方って？』

『最近、巷で謎の気狂いが多く発生しているが、チーが来たとあれば話は変わる。十中八九奴の仕業じゃ。「妖怪反物」じゃよ』

「妖怪反物」。九尾の一族が良く使う、〝妖怪を反物に変えてしまう〟妖術だ。

しかも、それを着た人間は彼らの意のままに動く奴隷となってしまう。解放するには服を脱がすか、大元を叩くしかない。

『なるほどね。合点承知だ！　呼子と一緒に、ちょちょいと片付けて来るぜ！』

『ウム、任せたぞ（誤魔化せて良かった）！』『気を付けてね（不謹慎ですよ、慎吾さん）！』

『おうよ！　おーい、呼子ぉ！』『呼んだー？』『おし、来たな！　行くぜ行くぜ行くぜぇ！』

何だか心ここにあらずと言った感じに送り出され（というか丸め込まれ）、蒼坊主はナビゲーターの呼子と共に、帝都とは正反対の方へ駆け出した。

それが、幽霊族の夫婦と実質的な今生の別れとなるとも知らずに……。

◆蒼坊主

ご存じ名探偵鬼太郎の兄貴分。中の人はマジュニアでありムジナであり、今はねずみ男をやっている。アニメ第５期のオリジナルキャラクターで、モデルはおそらく「青坊主」だろうが、本人は似ても似つかないハンサム野郎である。

流離いの退魔師（もしくは封印師）であり、卓越した棒術と封印の札を使う他、額の第三の眼が開かれた時に相手へ幻術を掛けられるなど、鬼太郎とは別方向で多彩な人。特に身体能力だけなら鬼太郎ファミリーでも１、２を争う高さ。

そんな頼れる兄貴分な蒼坊主だが、超人的な能力を持っている癖に「東西南北が分からない」レベルの方向音痴という、行脚僧として致命的な欠点を持つ。皆と合流するには毎度の如く呼子の力を借りねばならない程の重傷である。急がば回れとよく言うが、流石に「四国を経由して北海道」は空回り過ぎる。

今作では、現役時代の目玉おやじと岩子の養子になっている。目玉おやじは組手

の師匠でもあるが、割と負けず嫌いな彼には今まで一度も勝てた事はなく、そして、一生勝つ事が出来なくなった。

審判の日

彼はあの日何をしてどうなってしまったノカ。

「うがぁあああああっ！」
「うわぁっ、止めろぉ！」
人が人を襲っている。違いは妖怪反物を纏っているか否か。それだけで襲う側と襲われる側に分かれていて、その上襲撃する側の方が圧倒的に多い。チーの反物に魅了された者が多い事の証左であり、洗脳された人間が半ば妖怪と化している事が分かる。妖術で箍が外されているのである。人体を素手で引き千切るなど、真面な状態では不可能だろう。
そんな地獄絵図が帝都を中心にドンドンと広がり、今も拡大し続けている。
「ぎゃおおおお！」
「や、やめてぇっ！」

そして、また一人の淑女が、気の狂った暴徒に引き裂かれようとしていた。

『止めねぇかぁ！』「ぇはん!?」

「えっ……？」

しかし、ギリギリの所で蒼坊主が割り込み、暴漢を気絶させた。人間では感知不可能な、一瞬の早業だ。

「……ッ、ま、待って下さい！　その人を殺さないで！　今はおかしくなってるけど、私の恋人なのよ！」

と、呆けていた女性が、暴漢を掴み上げる蒼坊主を引き止める。何と暴漢は彼女の恋人だったのである。

『安心しな。殺しゃしねぇよ。……単に素っ裸になって貰うだけだぁ！』

「それはそれで問題があるような気がしますが!?」

だが、元より操られているだけの人間を手に掛ける気の無い蒼坊主は、神の手捌きで彼氏さんを下着一丁にした。

『そぉら、解放してやるぜぇ！』

『……ハァッ!?』

さらに、混乱の最中にある女性の前で、特製の聖水で反物を妖怪に戻すという、更に意味不明な事を断行した。当然ながら女性は絶句し、目を見開いている。

『いやぁ、助かったよ、蒼坊主』

『オメェさんも、もう少し人を疑えよ。明らかに胡散臭いだろ、あのチーとか言うおっさん』

『ハッハッハッ、悪い悪い』

『ああ、もういいから行ってくれ。協力する気があるなら、とりあえず妖怪反物を着ている奴をひん剥いといてくれ。治すのは後でやるからよ』

『分かったぜー』

しかし、申し開きをしている余裕はないので、蒼坊主はさっさと話を進めた。

そう、彼の方針はただ一つ。妖怪反物を剥ぎ取って、元に戻す。やる気のある奴には手伝いをしてもらい、それ以外は撤退してもらう。うろつかれても邪魔だからだ。

『……って事で、アンタも早く避難してくれ。悪いが、今は一人一人守ってる余裕は無いんでね』

「わ、分かりました」

それは人間に対しても同様。というか戦力には成り得ないので、実質的に避難一択である。

「で、ですが、その――――」

『……仕方ねぇなぁ。手伝うよ！』

だが、申し訳なさそうにチラリと彼氏を見る女性に、蒼坊主は頭をボリボリと掻いて、彼氏くんを担ぎ上げた。流石に淑女に男一人を運べなど、面と向かっては言えない。

しかし、仕方なしに留まった事が、彼にとって幸いとなった。

――――バシュゥウウウウッ！

『ズワォ!?』「きゃあああっ！」

頭上を一筋の閃光が走り、行く先の街並みを地盤ごと蒸発させる。一体何人の犠牲者が出たのか、見当も付かない。反物にされていた仲間も、街中に散開していたであろう中国妖怪も、根こそぎ殺られた。

「な、何なんですか、あれは……!?」

『俺にも、分からねぇ……』

発射点へ目を向けてみれば、そこには地表スレスレに浮かぶ積乱雲が。こんな馬鹿デカい雲がここまで低い位置に発生する訳が無いし、何より全体が不気味なピクセル光を放っている。どう考えても自然現象ではない。まさに怪気象だ。

そして、時間と共に雲が途切れ、中から巨大な球状の空中要塞が現れる。直径がキロ単位という意味不明な大きさである。

さらに、瞬く間に空中要塞を黒い太陽のような映像が覆い尽くし、〝宣言する〟。

《愚かなる者共よ。我ら悪魔族の宿願の為、諸共滅びるがいい。見よ、「ブリガドーン」の火力を凄まじさを！》

そして、映像が消えたかと思うと、再び閃光を放ち、さっき以上の被害を齎す。

『ギャアアッ！』『クケァッ！』

更には無数の使い魔たちを召喚し、眼下の僅かな命を次々と刈り取っていく。地獄絵図は阿鼻叫喚で上塗りされた。これがほんの数分の出来事だと言うのだから質が悪い。夢なら覚めて欲しいが、現実はそう甘くなかった。

『ギャキャッ！』『ギャオオッ！』

『このっ……！』

思わず呆然としていた蒼坊主たちの所へ、カボチャ頭と死神風の使い魔が襲撃して来た。

むろん、負けたりはしないが、数が多過ぎる。倒しても倒してもおかわりが来る。その上、退避して来た中国妖怪たちに鉢合わせたりと、最早彼一人でどうにかなるレベルではなかった。

『――――――チクショウ、退くぞ！　掴まれ！』「は、はい！」

〝お荷物〟を抱えての進行は不可能だと判断した蒼坊主は、悔やみつつも撤退戦に移行した。せめてこの二人を安全圏に降ろしてからでなくては、ロクに戦えない。

（……頼むから生きててくれよ、おやっさんたち！　こいつら避難させたら、すぐに行くからよ！）

島津の退き口が如く、追い縋る使い魔や中国妖怪を蹴散らしつつ後退する蒼坊主。慎吾からは反物回収を任命されていたが、ここまで混沌としてしまえば任務もクソも無い。こうなったら、日頃の恩を返す為にも、慎吾夫婦の下へ馳せ参じようと、彼は決めていた。

だが、世界は何処までも非情で、容赦が無かった。

『なっ……!?』

撤退開始から一刻程。事態が急展開した。

『どうなってんだよ、こりゃあ……』

後ろから迫って来る敵が、バタバタと倒れ始めたのである。

さらに、その異常事態に追従して帝都側から押し寄せて来る、怪電波のような妖気。

（――――これは、ヤバい！）

嫌な予感がする。蒼坊主は自らの直感に従い、全力で結界を張った。頑張れば慎吾の溜め撃ち指鉄砲も何発かは耐えられる、強固で聖なるバリアだ。

『ぐぉおおおっ!?』「うぅぅ!?」「……、……！」

しかし、この怪電波を思わせる妖気は、その壁をも乗り越えてきた。脳を直接溶かされるような、不快な激痛が三人を襲う。

だが、彼らはまだマシな方だった。

『グォオオオッ！』『グガァアアッ！』

何せ、死んだ妖怪や使い魔たち、更には逃げ遅れた人々が、まるで吸血鬼のような容姿となって、敵も味方も関係なく殺し合い始めたからだ。

おそらく、怪電波のような妖気に中てられ、脳が溶かされた上に書き換えられて、眷属のような物に変異させられてしまったのだろう。その間も電波は何処までも伝播していく。

このままでは関東地方どころか日本全土――――否、世界中が混沌の渦に呑み込まれる。その先に待っているのは滅亡である。

世界最後の日。

そんな言葉が、頭を過ぎった。否定したくとも、その要素が全くない。

割れるような痛みに頭を抱えながらも結界を維持しているが、周囲は完全に眷属たちに取り囲まれ、この場から一歩も動けなくなっている。大分距離のあるここですらこの有様なのだから、発信源はまさしく地獄だろう。

一体これからどうすればいいのか。分からない、何も。

混濁し切った意識の中で、蒼坊主は諦めそうになった。

『……!?』

しかし、蒼坊主が倒れそうになった瞬間、妖気の流れが止まった。帝都で何か動きがあったらしい。

『ハァアアアアアアアアッ！』

『グゲェッ！』『ゴアォッ！』『ギィ！』

蒼坊主は最後の力を振り絞り、今度こそ眷属たちの包囲網を強行突破した。死に体同然だったものの、これを逃したら後は無いと悟っていたからか、どうにか貫く事が出来た。

『蒼坊主！』『……黒鴉!?』

と、蒼坊主が空中に躍り出た所で、黒鴉が猛禽の如く鋭く回収。そのまま一気に距離を取った。

『オメェさんが、何でこんな所に!?　戦いは……おやっさんはどうなったんだよ!?』

『――――まずは落ち着け！　今は自分たちの事を考えろ！　今抱えているその人たちは、飾りじゃあるまい！』

『……！』

混乱から立ち直っていない蒼坊主はゴネたが、黒鴉の彼らしからぬ一括で押し黙る。

詳しい事は分からないが、一つだけ理解出来た。自分はもう蚊帳の外なのだと。そんな事を気にしている暇があるなら、ほぼ唯一に等しい人間の夫婦を連れてさっさと下がれと、そう言われているようだった。

事実、既に満身創痍の蒼坊主にやれる事は無い。駆け付けても、足手纏いになるだけ。

『チクショウ……！』

蒼坊主は歯噛みした。何にもならないと分かっているが、せずにはいられなかった。こんなに惨めな気持ち、今まで味わった事が無い。

『俺は、弱い……どうしようもなく……！』

『……そうか。そんな君に、慎吾様から伝言だ』

だが、そんな弱音を吐く彼を黒鴉は蔑んだりはせず、かと言って同情をする事もなく、ただ託された言葉を伝える。心の中で激しく憤り、後悔しながら。

『〝元凶は儂らで何とかする。お前は眷属を斃してくれ。奴らを拡散させる訳には

いかんが、儂はもう戦えん。だから、お前に後を託す〟との事だ。……やるべき事は、分かるな？』

『ああ……』

それは遺言なのかもしれない。あれだけの妖気渦巻く最中で戦ったのだ、少なくとも戦闘不能にはなっているのだろう。生きていても、虫の息という可能性もある。

しかし、蒼坊主は信じない。尊敬すべき師匠にして、愛すべき家族が後を託したのだ。せめて、その願いだけでも叶えなければ。

『行こうぜ、黒鴉』『もちろんだとも。……その為に、私は逃がされたのだから』

こうして、蒼坊主は戦地から逃げ延び、人間の夫婦を鴉天狗警察に託した後、黒鴉と手分けして、分散しようとする眷属たちを狩っていく。

だが、眷属たちの逃げ足は早く、数が多過ぎる事も相俟って、結構な数を逃してしまう。それら全てを退治するのに、何年も何十年も掛かってしまった。

その間、蒼坊主は慎吾と岩子の行方を追う事はしなかった。任務が完遂していないのもあるが、彼らがどうなったのかを知るのが怖いという、後ろめたい気持ちがあったからである。

そして、黒鴉と共に虱潰しに探し続け、どうにか全ての眷属を狩り尽くした昭和の世にて、蒼坊主は変わり果てた慎吾――――目玉おやじと再会する事となる。

懐かしい人間の夫婦とその息子、それから後の義弟となる幽霊族の末裔を伴って。

◆「来訪者」の眷属

「来訪者」の放つ怪電波のような妖気に中てられ、変異させられた者たち。対象は生者なら妖怪も人間も関係なく、どんな生物も「吸血鬼のような存在」に変貌してしまう。変質の際に脳が一度溶かされて再構築される為、話し合いの類は一切通じず、殺す以外の救いは無い。そもそもかなり凶暴化しているので、変に頭が回るだけの〝血に飢えた獣〟も同然であり、殺さなければ殺される上に食われた被害者も眷属化してしまう、世界に終焉を齎す〝疫病〟である。

大正時代に帝都を中心に大発生し、「来訪者」が封印された後は各地に拡散して、夜闇に乗じて同族を増やしつつ日本を脅かし続けたが、蒼坊主と鴉天狗警察の尽力

により、第二次世界大戦の終戦より10年後、ようやく最後の１体が討伐され、「来訪者」の眷属は全滅した――――かに思われたが、実際にはもう１体だけ密かに生き残っており、その個体は後に鬼太郎と地獄童子により討伐された。

真実の扉

※とんでもなく鬱なお話になりマス。

『そんな事があったのか……』

鬼太郎は今宵、初めて蒼坊主の隠された過去を知った。世界が終わり掛けた、あの日の真実を。墓場から生まれて来た自分を世話してくれた、あの人間たちが、まさか蒼坊主と関りがあるばかりか、世界最後の日を生き延びていたとは。もう少し胸襟を開いて話すべきだっただろうか。

いや、あの頃はまだまだ赤子だったし、何より幽霊族特有の〝幼少時の妖力暴走〟に巻き込んでしまったのだから、親密になり過ぎずに済んで良かったのかもしれない。

まぁ、彼らの息子は自分を主人公にした漫画を描いて、大成したようだが。……ちょっと恥ずかしいが悪い気はしなかったから、良いのだけれど。

『――――――そして、今日感じた、鳴女の妖気は「来訪者」の物とそっくりだった。むろん、出力は比べるまでも無い程度が、性質は完全に同じだったよ。脳が直接揺さぶられ、溶けちまいそうだったぜ……』

『なるほど……』

それなら足が竦むのも無理はない。よく膝を折らなかったものだ。

『最悪、あいつが第二の「来訪者」になるかもしれん』

『冗談じゃない所が、また何ともね……』

というか、もうそこまで進化しているのか。地獄童子伝いに聞いた話によれば、鳴女は「来訪者」と似通った存在らしいから、本当に成り上がってしまうのかも。

さらに、バックベアードと何某か話し合うようだし、例え鳴女が「来訪者」に至らずとも、厄介な事に変わりは無かった。まさに最悪の展開である。

『鬼太郎よぉ、どうするつもりだ？　このまま修行だけ続けても、鳴女しか倒せねぇぜ？』

と、一緒に聞き入っていた地獄童子が、そんな疑問を口にする。

確かに彼の言う通りだ。鳴女を道連れには出来ても、その後が続かない。修行に

集中したいから、なるべく考えないようにして来たが、流石に何の手も打たないのは違うだろう。

そう、後悔は後先に立たないのだから。

――――ユメコを自ら手に掛けた、あの日のように。

◆◆◆◆◆◆

あれは、もう何年前だったか。

あの日、地獄から日本全土を支配しようとしたぬらりひょんの陰謀を解決し、胎内道で危うくユメコが落盤に巻き込まれそうになった所を地獄童子に助けてもらい、どうにか無事に地上へ生還した。母親の岩子は、しぶとく追い縋るぬらりひょんの魂を延々に封じる為に力を使ったせいで共に来る事は出来なかったが、それでも想いと願いは受け取ったし、何よりようやく平和を取り戻せた事に安堵していた。

『ありがとう、地獄童子。君のおかげで、ユメコちゃんが死なずに済んだよ』

『良いって事よ。……俺も嫌な予感がしてたからな』

『――――それはユメコちゃんに死相が見えてたって事か？』

『伊達に地獄暮らしは長くない、とだけ言っておく』

鬼太郎の質問に、地獄童子がぶっきら棒に答える。共に戦った仲ではあるが、やはり宿敵と書いて「とも」と読む間柄を崩す気は無いようである。

そこが彼らしいと言えばそれまでだが、せっかく生き延びたのだから、もう少し歩み寄っても良いと思う。自分と同じ、幽霊族の末裔なのだから。

「……ほら、二人共！　せっかくのお祝いなんだから、もっと仲良くする！」

そんな鬼太郎の思いを汲み取ったのか、ユメコが二人を台所に引っ張っていく。

そう、鬼太郎たちは今、天童家にお邪魔している。無事に事件を解決出来た、お祝い会のような物を開いてくれたのだ。相変わらず誰にでも優しい女の子である。

『……仕方ねぇなぁ。幽子もご馳走になってる事だし、付き合ってやるよ』

これには地獄童子も毒気を抜かれ、渋々という感じでされるがままになった。

ちなみに、幽子とは地獄童子がお付き合いしている亡者だ。彼に会う為に地獄までわざわざ来ているだけで、堕獄するような性悪ではないので悪しからず。

そんなこんなで、三人は台所にやって来た。リビングは妖怪大パニック状態で喧しいから、ここで少しコーヒーを飲んでまったりしよう、という考えである。

「それにしても、地獄童子さんも大変よね、これから。地獄の復興、忙しいんでしょ

？」

『まぁな。とは言え、お前らのおかげで被害は最小に留められたからな。そこまで時間は掛かるまいよ』

「そうなんだ。なら良かった。……それはそうと、残念だったわね、鬼太郎さん。お母さん、生き返らせてあげられなくて」

『良いんだよ。母さんもそれは覚悟の上だったし、何より君が無事で良かった』

「あらまぁ、鬼太郎さんったら♪」

『おい、人を挟んで惚気るなお前ら』

コーヒーを淹れながらする会話は、思ったよりも弾んだ。そうしている内にコーヒーが出来上がり、皆で乾杯する。

『コーヒーって飲んだ事ねぇんだよな。どれどれ、どんな味なんだか――――』

一番手は地獄童子。長年地獄に居たからか、現世の飲み物が物珍しいようで、誰よりも先に口を付けようとした。

「……ッ、駄目よ！」

しかし、何かに気付いたらしいユメコが飛び付き、カップを叩き落す。

そう、彼女は見てしまった。地獄童子の後ろにある水道にふと目をやった時に、蛇口の水が生き物のように蠢いていた事を。確実にこの世の者ではないし、そんな物を使ったコーヒーを口にして無事で済む筈がない。ユメコはそう判断し、殆ど反射的に地獄童子の命を救った。

だが、あまりに咄嗟の事だった為、割れたカップで切り傷が出来た上に、そこにコーヒーが掛かってしまった。

「あっ、が……!?」

突如苦しみ出すユメコ。

『えっ、な、何が……!?』『どうなってんだよ、こりゃあ!?』

驚く鬼太郎と地獄童子だったが、事態は彼らの理解が及ぶのを待ってくれなかった。

『グガァッ！』

『うわぁっ!?』

一度苦しむのを止めたかと思うと、鬼のような形相かつ人間ではあり得ない素早さで、ユメコが地獄童子に襲い掛かる。どうにかマフラーで食い止めはしたもの

の、今にも引き千切って暴れ出しそうだ。
『地獄童子！　クソッ、何がどうなって……！』
『どうしたんじゃ、鬼太郎!?』『何じゃ何じゃ!?』『何があった!?』『何事よ!?』
『おいおいおい!?』
と、騒ぎを聞きつけた鬼太郎ファミリーの残りが駆け付ける。
『……これは、まさか!?』『どうやら、そのようじゃの……』『何て事じゃ……！』
そして、様変わりしたユメコの姿を見て、目玉おやじ、砂掛け婆、子泣き爺の三人が、何かを察した。
『と、父さん……ユメコちゃんが、コーヒーを浴びたら、こんな事に……これは一体、何がどうなって……!?』
その中でも一番の知恵袋である目玉おやじに、鬼太郎が狼狽えながらも問う。それが地獄への入り口だとも知らずに。
『――――「来訪者」の眷属じゃ。生き残りがいるとは思わなんだが、まさか以前封じた水神の精神を乗っ取っていたとはの』
『水神!?』

水神とは、水に似た身体を持つ透明な高等生物。水に擬態して近寄る人間を溶かして食べてしまう、恐ろしい妖怪である。鬼太郎はこれまで三度出会っているが、何れも葬り去っている。一番時期が近いのは、地獄の騒動が起きる直前の、有名歌手の大空 つばめが犠牲となった時だ。

『水神は元々凶暴な性格じゃが、自分から大掛かりに事を起こすのは好まん。擬態する意味が無くなるし、何より疲れるからの。余程怒らせたり、誰かに操られでもしない限り、街に出張って来るのはおかしいとは思っていたが……今回もまた、厄介な奴に操られていた訳じゃな』

『――――って、解説してる暇があるなら助けてくんない!?』『グガアアッ！』

すると、地獄童子からヘルプミーが。そりゃそうか。現在進行形で襲われているからね。マフラーが今にもはち切れそうだし。

『砂掛け、子泣き、絶対に逃がすんじゃないぞ』『分かっとる』『……仕方が無いの』

だが、目玉おやじは助け船ではなく、砂掛け婆と子泣き爺に包囲を命じた。

『と、父さん!?　何をする気なんですか!?』

『……仕留めるんじゃよ。「来訪者」の眷属は生かしておけん』

『なっ!?』

さらに、何時もの彼らしからぬ、非情な決断を下した。ユメコを見捨て、殺そうと言うのである。

『そ、そんな事……出来ないよ……な、何か方法は――――』

『無い。「来訪者」の眷属は、まず寄生する相手の脳に相当する中枢部を破壊し、自分好みの物に作り変えてしまう。……見た目こそあまり変わらないが、ユメコちゃんはもう、死んだのじゃよ』

鬼太郎の懇願に対しても、冷徹に事実を伝える。

『それでも、僕には……嫌だ！　そんな事、やりたくない！』

『いいや、やるんじゃ。器にしていた水神を斃され、地獄童子を乗っ取り損ね、只人に取り憑いてしまった奴には、もう後がない。こうなったら、やけっぱちに同族を増やそうとするじゃろう。儂らや天童家の人間を殺してな』

『……！』

つまり、もうどうしようもないのだ。

このままでは地獄童子が同族にされ、この場の全員も後を追う事になる。そう

ならないようにするには、今の内に――――――ユメコの身体を改造し切っていない、初期状態である今の内に、殺すしかない。

『「来訪者」の眷属は、返り血を浴びただけでも乗っ取られてしまう。余程法術に長けた者か、霊毛で守られた者……つまりは、お前にしかやれんのじゃ』

『うぅぅ……っ！』

理屈は分かる。

しかし、納得は出来ない。どうしても、身体が動かない。精神が全力で拒否しているのである。

『……頼む、鬼太郎……！』

『……ッ！』

だが、最後に目玉おやじが絞り出すように呟いた懇願が、鬼太郎の足から震えを取り除いた。

そう、彼とて本当は自分の息子にそんな事はさせたくないのだ。

しかし、「来訪者」の眷属は、謂わば「病原体」。死を巻き散らす疫病のような物。どんな情けや容赦も通じない、相互理解や共存が不可能な存在なのである。

だから、殺すしかない。その器となる肉体が、ユメコだったとしても。人類と妖怪、双方にとっての癌なのだから。

『グガァッ！』『うわっ!?』

そうこうしている内に、ユメコが地獄童子のマフラーを引き千切り、彼ではなく鬼太郎に襲い掛かって来た。今の会話を聞いて、自分に手出しは出来ないと判断したのだろう。

これが「来訪者」の眷属の恐ろしい所だ。どう見ても血に飢えた獣なのに、非常にズル賢く、心の弱みを的確に突いて襲ってくる。そのせいで鴉天狗警察の半分はノイローゼになり、蒼坊主や黒鴉も深い傷を負った。

そして、今は鬼太郎にその魔の手が迫っている。ユメコに勝とうが負けようが、彼にとって致命傷なのは間違いが無かった。

『ギャオオオオオオッ！』

『うわぁあああああっ！』

鬼太郎は血の涙を流し、泣き叫びながら、霊毛ちゃんちゃんこを腕に巻き付けて迎撃した。霊毛に編み込まれた記憶なのか、弱点はすぐ分かったのだが、それは何

の救いにもならなかった。

　何せ、頭を潰すしか無かったのだから。

『うぁああ！』

　自らが叩き潰したせいで頭の無くなってしまった、ユメコだった物を抱き締め、絶叫する鬼太郎。

　だが、世界はそんな今の彼にさえ、救いの手を差し伸べる事は無った。

「何だよこれ……何で、姉ちゃんが……うぁぁあああっ！　何で……何で殺したんだぁ！　この人殺しぃっ！」

『…………！』

　何とか見せまいと猫娘たちに抑えられていた、ユメコの弟：星郎が、とんでもない馬鹿力を発揮して駆け付け、全てが終わってしまった現場を見てしまい、鬼太郎

を糾弾したのである。

むろん、本心からでは無い事は、鬼太郎でも分かる。まだ小学生である星郎に、自制を求めるなど酷な話だ。ましてや、自分の姉が死んだとあっては、尚更の事。

『……そうだね。僕は、人殺しだ』

「あっ……」

しかし、その一言は、心が弱り切っていた鬼太郎にとっては止めの一撃だった。星郎も自分が何を言ってしまったのか理解したが、もはや手遅れ。何もかも終わったのだ。

その後、鬼太郎は天童家と関わる事は二度と無かったし、人間とも距離を置くようになった。呆れでも怒りでもなく、唯々恐ろしくなって……。

◆◆◆◆◆◆

だが、鬼太郎は地獄でユメコと再会し、久し振りに話す事が出来た。己の胸の内を明かし、彼女が何故地獄に居座っていたのかも知った。

だから、もう鬼太郎に迷いはない。何でもやれるし、何でも出来る。そう思えた。

『ねずみ男、居るんだろう？』

『呼んだかにゃ～？』

だからこそ、鬼太郎は決断し、我関せずと引っ込んでいたねずみ男に、ある頼み事をした。

『〝奴ら〟に手紙を届けてくれ。文面は任せる』

『……まったく、人使いが荒い奴だぜ』

その宛先は――――――。

◆天童 ユメコ

ご存じアニメ第3期の〝人間側の〟ヒロイン（妖怪側は猫娘）。とても優しい性格で、自分を襲った妖怪でも反省すればきちんと許せる大人な女の子。ただ、自分の容姿に結構自信があるのか、普通に色仕掛けをする事もある（実際かなりの美少女ではある）。ついでにやる時はやる女でもあり、とある劇場版では、何とゴルフクラブで火車を殴打して気絶させた。守られているだけのヒロインでは無いのである。

猫娘とは鬼太郎を巡るライバルではあるものの仲は良く、事件の際は大抵行動を共にしている。ねずみ男は……うん、アレだね。

最終回では地獄から脱出する際に一度死んでしまい、鬼太郎の母親が命を与えてくれた事で生き返りはした物の、それまでの記憶や思い出を失ってしまった。ただし、それでも会いたいという想いがあった為か、無事に鬼太郎たちと再会した所で、物語は終わっている。

しかし、今作では地獄で死ぬ事無く生還出来た代わりに「来訪者」の眷属に身体を乗っ取られてしまい、〝鬼太郎の手で頭を潰されて殺される〟という最悪の末路を辿った。

これにより鬼太郎は一生拭えないトラウマを負い、地獄童子は自分を庇ったせいでユメコを死なせたばかりか鬼太郎に心の傷を負わせてしまった罪悪感により大人しくなっている。

ちなみに、死後は天国ではなく敢て地獄で働く道を選んだ。その真意は――――――。

鳴女さん、バックベアードと対面する

今回、ようやくラスボス同士が接触しマス。イヤ、鳴女さんは裏ボスでしタネ。

YA―HA―ッ！

こんばんはだ、諸君。アメフトは別に好きじゃないけど、アメフト漫画は大好きな鳴女さんだ。今日も何処かで鬼太郎が鬱なダークサイドに足を踏み入れているような気もするが、そんなのどうでも良いぜ！

さて、本日は超時空要塞「ブリガドーン」にお邪魔している訳だが、凄いなこりゃあ。いきなりドデカいザルに乗せられ（チャラトミによると、本来魔女は「箒」ではなく「カゴ」や「ザル」で空を飛ぶんだそうな）、不自然に浮かぶ積乱雲に突っ込んだかと思うと、彗星煌めく宇宙空間みたいな所に案内されたんだからな。その中で悠然と構える「ブリガドーン」を見た時は、素直に感動した物である。〝「LH（カゴ・ホーラー）-3210」じゃん〟ってな。ロマンだよなぁ、あの貨物戦艦。

さらに、内部も要塞のような堅苦しさは無く、どちらかと言うと貴族的な煌びやかな内装をしている。床はレッドカーペットだし、天井は失楽園の絵巻物だし、壁には高そうな絵画や骨董品が飾られているし。机や椅子なんかの調度品も良い仕事をしていて、一緒に連れて来たチャラトミが凄い目移りしてたな。曰く「これ全部売ったら先進国を2、3は買える」とか。ヤバいじゃん、逆に怖くて触れないよ。今の稼ぎじゃ、1個壊しただけで破産しそう……。

『お、このダイヤ、奇麗じゃのう』『何カラットあるのかのう？』

だから、気安くアクセサリーを観るような感じで近付くな、子供組ぃ！

少しでも傷付けたら、しばき倒すからな、オラァッ！

『……しっかし、よくもまぁ、こんなに美術品を集められたな』

「殆どはヴォルフガングの趣味ですよ。彼、芸術品に目が無い物で……」

『よく破産しないな、そいつ』

「世渡りが上手いんですよ。今も正体を隠して、とある大企業の名誉会長をやってますからね」

ほぅ、丸子の居た呉服屋とは雲泥の差だな。やっぱり高い趣味は相応の金が無い

とイカンよ。

『ちなみに、そのヴォルフガングって何なんだ？』

「幹部の一人で、狼男ですよ。あ、噂をすれば……」

すると、廊下の角から、紅色スーツのダンディな貴族様が。こいつ、絶対にモテるな。で、思わせ振りな態度をしつつも最後は袖にして、独身を貫くタイプだ。

『そうなんだろ？』

『いや、あの、いきなり、そうなんだろう、と言われましても。……ところで、貴方はもしや、鳴女様では？』

『おう、そうだが？』

何だ何だ、完全に初見の幹部にまで顔と名前が知られているとか、どういうこった。

『……「奏」の呼吸」のファンです。是非、後程演奏をお聞かせ下さい』

『あっ、あんたもしかして、何時も５００００円のスパチャしてくれる「大尉」さんか!?』

『はい。何時も名演奏を聴かせて貰い、心を満たされておりますよ』

『ご視聴ありがとうございます。これからも頑張りますので、よろしくお願いします！』

『いえいえ、こちらこそ。……さて、何やら用向きがあるようですので、私はこれにて失礼いたします』

そう言って、仏のような笑みで一礼し、大尉殿は去って行った。

『よし、一丁地獄滅ぼすか！』

「急にやる気満々ですね……」

『ファンの為なら努力も協力も惜しまないのが、私の方針だ』

「凄く分かり易い人だなぁ……」

いや、だってさぁ、会うどころか恩義すらも無い奴の為に頑張るとか無理でしょ、普通は。そんな知らない奴よりも、私の演奏を確かな形で応援してくれる人の方が１００億倍は価値あるわ。

『というか、バックベアードの所にはまだ着かないのか？　結構歩いてる気がするんだけど』

「すみません、何分艦の中枢におられますので」

馬鹿と煙は高い所に何とやらってか。

「……しかし、確かにこのまま歩かせるのも何ですね。〝足〟を呼びましょう。衛兵、例の物を」《了解了解（ラジャラジャ）》

と、流石に客人を長歩きさせるのはどうかとアデルも思ったのか、近くの衛兵（錬金生物）に何かを準備させる。やがて、何処からかフヨフヨと半透明な物体がやって来た。見た所、クソデカいミズクラゲみたいだが……。

『何だこれ？』

「「クリッター」の幼生です。大丈夫、品種改良していますから、安心して乗れますよ」

『そう言う問題なんだろうか』

クリッターと聞くと、どうも「トモダチ」と称して食われる気がしてならないんだよなぁ。

つーか、クリッターって海月だったのか。空飛ぶ海月なんて有りなのか？

「一応、日本にも「海月の火の玉」って妖怪が居ますよ」

『解説どうも』

チャラトミｗｉｋｉは何でも知ってるねぇ。

まぁ、問題が無いというのなら、有難く座らせていただくか。

おっ、案外良い座り心地じゃん。プルプルで軟らかいから、背中を預けて寝そべっても全然問題無いし。ヒンヤリスベスベで、とても気持ち良い。ついでに微弱な電気で全身をマッサージしてくれたりと、至れり尽くせりだ。子供組なんて、もう寝ちゃってるよ。

『きゅん♪』

あと、何か鳴き声が可愛い。……一匹、家で飼っちゃ駄目かな。後で相談しようっと。

そして、抗い難い眠気と戦う事、数十分。

「鳴女殿、着きましたよ」

『……んはぁゆ？　ああ、そうなの』

イカン、あんまりにも寝心地が良過ぎて、変な声が出てしまった。恥ずかしい。

――――で、ここが艦の中枢部か。如何にも大魔王が居ます、って扉だな。開けたら暗黒世界だったとか言われても納得出来る。

「……ベアード様、鳴女殿をお連れしました」
『入れ』
アデルが扉越しに一礼すると、中から渋い声が聞こえて来た。
さらに、扉を開けてみれば、そこには目玉の付いた黒い太陽が。こいつがバックベアードか。圧が強いんだよなぁ……。
『とりあえず、初めましてだな、鳴女』
『こちらこそだ、バックベアードさん』
自己紹介されたので、一先ずさん付けで呼んでみる。直ぐに呼び捨てになるかもしれんけどね。
……それにしても、圧迫感が凄いわ。部屋はエネルギーコアを中心に天球儀が描かれたドーム型で、結構な広さがある筈なのだが、こいつのせいでかなり狭く感じる。どうにかなりませんかね。
『フム、このままでは話し難いか。ならば、本来の姿を示そう』
すると、空気を読んだバックベアードが、人型形態を取った。一気に広くなりましたよー。

『さて、それではさっそく話し合いと行こうか？』
『いや、その前に一つだけ聞きたい事がある』
『何だ？』
うん、意外と話が通じるボスキャラだな。無惨様だったら絶対キレてたし。
『……ピカチュウとイーブイ、どっちが好き？』
「何故いきなりそんな事を!?」
いやぁ、少しでも親交を深めようかと。
ちなみに、私はメタモンが一番好きです。あのプルプルした間抜け顔が堪らんのよ。
『私はピッピが一番好きだ』
「嘘ぉ!?　あ、いや、申し訳ありません！　黙ってます！」
コメディアンかお前ら。
それにしても、ピッピが好き……というかゲームを知ってるんだな。カンナさんのぬいぐるみ好きが発覚した時以来の衝撃を受けたわ。流石はオタクなベア子の父親である。

『それはそうと、次の「携帯獣」はどのバージョンをプレイする気だ？　あとやっていないのは例のリメイク作くらいだろう』

『ゑ』「……ベアード様？」

その発言、もしや――――、

『毎回５００００円は落としているんだから、「操」の呼吸」もきちんと励めよ、鳴女』

『最近やたらとスパチャしてくれる「お父様」ってあんたかい！』「ベアード様ぁ!?」

さっきは知らない奴とか考えてすいませんでした。

よーし、鳴女さん、頑張って会議しちゃうぞ～♪

◆鳴女さんの実況動画

チャラトミに勧められて始めた、鳴女の動画チャンネル。

実演動画を纏めた「鳴女さんの「奏」の呼吸」と実況動画を纏めた「鳴女さんの

「操」の呼吸」の2つに分かれており、「操」は無表情な顔でイキイキとプレイするギャップが人気で、「奏」は純粋にその技術力（と、時折見え隠れする美しくも逞しい肉体美）に注目が集まっている。コラボ動画としては、チャラトミとの「お勉強シリーズ」、零余子との「食物連鎖の二人プレイシリーズ」の再生数が多い。

ちなみに、「奏」には「大尉」、「操」には「お父様」という大御所登録者が居るのだが、その正体は……。

鳴女さん、対話する

苛める側はその事実をすぐ忘れるガ、苛められた側は一生忘れナイ。

『さて、そろそろ本格的に話し合いをするとしよう……と言いたい所だが、アデル』
「はい」
『私は一度こやつと二人きりで話がしたい。実物を目の当たりにして、少し興味が湧いた。会合はその後にしようと思う』
「承知致しました。それでは皆様方、スミマセンが……」
と、バックベアードが私以外の面子を退出させた。残るは私とバックベアード、両陣営のトップだけ。腹を割って話したいのか、それとも腹を括れという事か。
何れにせよ、やる事に変わりはない。面と向かって話すだけだ。
しかし、こんな駄々っ広い部屋に二人きりとは――――さてはて、何を話すつもりやら。

『……お前は、我々が何の為に戦っているのか、知っているか？』

すると、バックベアードが今更過ぎる事を尋ねてくる。つまりは、そういう意味ではないのだろう。アデルが語っていた、〝日本の地獄を滅ぼし来訪者を斃す〟という表面的な物ではない、彼が抱く根本的な問題……それが分かっているか、という事である。

『知らないね』

だが、私はそれに対する答えを持ち合わせていない。チャラトミ曰く「宿願の為に戦っている」らしいが、それが何かすら知らないのだ。動画作りの最中にした世間話だったから、大して興味が湧かなかったしね。

『そもそも、私はあんたの事をよく知らんしな。チャラトミ曰く、妖怪としての歴史は浅いんだろ？』

そう、バックベアードはごく最近に生まれた妖怪である。「最近」とは言っても１００年以上前の話だが、それでも下手すると千年単位で存在する妖怪から見れば、明らかに新米の部類だ。

しかし、西洋妖怪の誰もが彼を大統領と認めている。

もちろん、心の底では認めていない者もいるだろうが、表立って逆らう者は無い。横槍を入れる奴さえいないのである。

これは、流石におかしいだろう。単に腕っぷしだけで伸し上がった独裁者なら、必ず何かしらの反発がある筈だ。

だが、バックベアードにはそれが無い。一体どういう事なのか……それを今夜、本人の口から聞けるのを期待している。飯時の世間話のタネにはなるでしょ。

『確かに、私は歴史の浅い妖怪だ。……しかし、私は西洋妖怪の全てなのだ』

と、バックベアードが力強く言い切る。そこだけは譲れないと。

『まるで意味が分からんのだが？』

『そうだな。順を追って説明しよう。……「地底人」の知識はあるか？　悪魔族との関係は？』

『とりあえず、〝今の人類とは別系統の知的生命体で、かつて地上の悪魔族を滅亡させた〟とだけ』

と言うか、ホモ・サピエンスどころか妖怪や悪魔が誕生する以前から存在しているので、正確には最古の先住民である。

姿こそ人間そっくりだが、不老不死の肉体と共有意識を持つ、バ〇タン星人みたいな連中であり、ＵＦＯを建造する程の科学力と亡者を蘇らせる神秘の力を有している。はっきり言って、〝実は宇宙人です〟と言われた方が納得出来る奴らだ。

『そう、彼らは人間どころか妖怪や悪魔とも違う、地球最古の知的生命体――――

――つまり、「神」だ』

『は？』

『正確には、地球へ降り立った神々が大地より生み出した「神人」と呼ばれる者たち。ようは「最初の人間」だよ』

『ええぇ……』

今聞かされた、衝撃の真実ゥ。

ようするに、彼ら地底人は「最初の人間」という事である。流石にそれは知らんかった。

さらに、バックベアードは滔々と語る。誰も知る由もない、〝神話以前の歴史〟を……。

『神は元々、何処とも知らぬ銀河系より飛来した地球外生命体だ。彼らの文明は何

らかの事故で滅び去り、結果的に放浪の民とならざるを得なかった。だから、天より舞い降りた神々は、水と緑に溢れたこの楽園に、自分たちの足跡を残そうとした。同じ過ちを繰り返さず、繁栄して欲しいと願って』

『それが「最初の人間」か』

『そうだ。神々はそれぞれが各々の好みで「最初の人間」を創った。大いに趣味が反映されているから、一応は人型だが姿も多種多様だった。不老不死の者もいたし、環境に合わせて姿を変える者もいた。その両方を持ち合わせた者も、もちろんいたさ』

『なるほどね……』

それが今の「地底人」や、後の悪魔や妖怪の祖先となる「ナニカ」だった訳か。

『西洋妖怪の祖先たる悪魔族は、「地底人」と同じ時期に生まれた。姿形は同じだが、悪魔族は変化を、「地底人」は不変を願った。だからこそ、彼らは種族レベルで相容れる事が無かった。最初こそ地上と地下とで棲み分けていたが、諍いが絶えなかった。しかも、同じような事が世界全土で頻発した。そこで神々は、より自分たちに似せつつ、有限の命しかない〝知恵のある〟存在を、現生する動物の中から

意図的に生み出し、それ以外の知的生命体を駆逐しようと考えた』

『それが今の人類って訳だ』

『その通りだ。幾つかの猿の遺伝子に〝言語〟と〝社会性〟の情報を書き加え、見事それを物にしたのがホモ・サピエンスだ』

原始人の中でも虚弱な部類だったホモ・サピエンスは、その分「言語能力」と「社会性」を発達させ、〝集団戦〟を挑む事で他の人類を絶滅させ、唯一の人となった。

しかし、彼らは賢いが、とても弱い。悪魔族に対抗するなど、不可能に近い――

――かに思われた。

『人間は弱い。知恵は回るが、脆弱な肉体と有限の命しか持たない、神人としては失格の存在だ。だが、奴らは寿命が短い分、高等知的生命体にあるまじき速度で増える事が出来た。その上、知恵だけはあるから、狡賢く立ち回り、悪魔を神と崇めつつ勢力を増やし、魔法や超能力などの対抗策を練った上で袋叩きにして、地表から駆逐していった』

つまり、とんでもない数の暴力で悪魔祓いをしたって話だ。幾ら個々の力が凄くとも、弱点を集団で突かれてはどうしようもない。しかも、〝神の入れ知恵〟があ

れば尚の事。

だが、逃げた先の地下にいるのは「地底人」。受け入れて貰える筈もなく、多くの悪魔が異教の神として滅び、玉砕覚悟で挑んだ神々への戦争にも負け、西洋の悪魔はとうとう七柱を残すのみとなった。

『しかし、悪魔も滅びを甘んじて受け入れる気など無い。人間の遣り口を学び、狡猾さを覚え、後に地獄――――つまりは「地底人」の地下世界を奪い、そこに自分の帝国を創った。……では、追い出された「地底人」は何処へ行ったと思う？』

『まさか……』

『そうだ。後にシルクロードと呼ばれる道筋を辿り、同じ境遇の仲間を集めながら、極東の島国へと渡った。そこに居た「地底人」――――当時の幽霊族を駆逐してな。慎吾は何か勘違いしているようだが、幽霊族は確かに何度か地上で栄えはしたが、それは周囲の知的生命体に〝持ち上げられた〟だけに過ぎんのだよ』

『おいおいおいおいおいおい……』

今の地獄の十王がどうかは知らないが、少なくとも日本にやって来た当時の地獄

関係者って、ただの悪役じゃん。

『まぁ、「黄泉」の時代は法整備も何も無かったから、統治という意味では良かったんだろうがな』

『そうだけど、そうじゃねぇだろ』

『まったくだ……』

「来訪者」の事を抜きにしても西洋妖怪の日本地獄への執着心は気になっていたが、それなら納得である。親の仇みたいなもんだからな。そりゃあ、恨み骨髄だわ。

『――――そして、遺伝子レベルで刻み込まれた恨みと憎しみが、ある日偶然通り掛かった彗星が願い星となり、私が生まれた。〝日本の地獄を滅ぼせ〟〝祖先の仇を討て〟とな』

『だから、西洋妖怪……というか悪魔族の全て、という訳ね』

『そういう事になる』

なるほど、歴史は浅いが根は深いって事か。ハレー彗星も、とんでもない願いを叶えたなぁ……。

『フムフム、為になったよ。確かにこんな黒歴史、そうそう他言は出来んわな』

まぁ、それはそれとして――――――確かめる必要は、あるよなぁ？
『……その宿願を叶える為に、ウチの丸子を「ブリガドーン」の燃料に使いたいって訳だな、アデルは』

◆地底人

文字通り地下に住む知的生命体。鬼太郎の世界では人類以前の「知恵ある人」で、不老不死の肉体と共有意識を持つ神に近い存在である。「他の文明との接触は滅びを招く」と考えており、かつて探りを入れようとした西洋妖怪や悪魔を滅亡させ、今は増え過ぎた地上人を駆逐しようとしているらしい。その詳しい正体は不明だが、少なくとも異星人ではない、純粋な地球の生物なのは確か。

今作では「最初の人類」の一種族となっており、悪魔族の祖先とは同期で同じ故郷を持つ間柄。とは言え、上記の考えを持っている為に仲は最悪であり、後に人類と神々に嵌められて逃げ延びて来た悪魔族を地上へ追い返し、滅亡させてしまった。

まぁ、後に「追放」という形で復讐される訳だが、それでもしぶとく生き残り、

後に人間がシルクロードとして通る道のりを辿って渡日し、当時の日本の地底人＝幽霊族を地下から追い出して居座るようになった。

この時の幽霊族は一度人間により地下に駆逐され、地下帝国を作る事で何とか生き残っていたのだが、今度は生活基盤ごと奪われた上で地上に放り出された為、更なる衰退を余儀なくされた。切羽詰まった彼らは、目玉おやじが生まれた頃にもう一度地下暮らしを選択したものの時既に遅く、「来訪者」の出現が止めとなって、事実上の絶滅と相成った（純粋な女性の幽霊族が居ないので）。

今の閻魔大王がやたらと幽霊族を贔屓するのは、祖先が過去にやらかした事を知っているからである（目玉おやじは誰にも教えられていないので知らない）。

鳴女さん、思い知らせる

※鳴女さんはサイコパスではありません。

『何だ、知っていたのか』

しかし、バックベアードは何の事もないように返した。こいつは……。

『――――大方、あいつの身内がコアに放り込まれる筈だったんだろう？だから、身代わりが必要だった。それが丸子という訳だ』

『全く以てその通りだ。一部の間違いもない。本来コアに選ばれたのは、あやつの妹であるアニエスだ。まぁ、下らん正義感を抱いて、現在は起動キーたる「アルカナの指輪」を盗んで逃亡中だがな』

『身から出た錆びじゃねぇか』

そっちの内輪揉めにこっちを巻き込むなよ。

『言っておくが、私は普通にアニエスを捕らえてコアにぶち込むつもりだぞ。それ

に待ったを掛けたのはアデルの方だ。その割に代案を用意出来ないから、こっちでチャンスを与えてやったに過ぎん。……というか、既に指輪もアニエスも居場所は把握してるし、最悪「アルカナの指輪」だけなら予備がある』

そう言って、バックベアードは自らの左薬指に「アルカナの指輪（予備）」を召喚した。何故そこに嵌めたし。

つまり、今のアデルは、謂わば上司に無理を言って社運を賭けた事業をストップさせている状態だ。その上、代案をその上司に用意して貰う始末。

『よく処罰しなかったな……』

普通はクビにすると思うんだけど。

『あやつは妹の事を除けば優秀だ。そもそも、いきなり最高司令官を処分したら組織が回らなくなるだろうが』

『確かに……』

今の日本政府と国民に言い聞かせてやりたい。〝職場を荒らして楽しいかい？〟と。不正は確かに頂けないが、だからと言って組織のトップをトントン拍子でクビにしてたら、困るのは部下だろうに。引継ぎという言葉を知らんのかね。

まぁ、今回の事案をどうにか出来なければ、確実に処罰対象だろうが。たぶん、バックベアードもピキピキしてるだろうし。

『ちなみに、「ブリガドーン」を使わないという選択肢は？』

『それは無いな。「ブリガドーン」を使わずに攻略出来る程、甘い相手ではない。というか、それに関しては私ではなく七大魔王に言うべき事案だ。私がやらずとも、何れ彼らがやる。私はその先頭に立っているだけに過ぎん』

『ですよねー』

というか、宿願の具現体である彼が手抜きをする筈ないわな。幾ら西洋妖怪の大統領と言えども、悪魔たちから見れば〝優秀な部下〟でしかないし、結局何時かはこうなっただろう。魔女って元から悪魔の部下らしいしね。

こう言っては何だが、自分たちの境遇を知っていながら何の対策もしていなかった、アスワング姉妹が悪い。最近は何でもパワハラで片付けようとする輩ばかりだが、上司にも立場って物があるんだからさ。

つーか、願い星の化身たるバックベアードが諦めたらアイデンティティーを見失う事になるのだから、最初から止めようは無かったんだろうな。そこに倫理観や常

識なんぞ関係ない。生存競争に難癖を付けるくらいの野暮である。

『まぁ、話は分かった』

『そうか。……それで、全てを知ったお前は、どうするつもりだ？』

すると、バックベアードが、まるで試すように尋ねてくる。そう言われちゃあ、答えるしかないよな。

『良いよ別に、丸子をコアに使っても』

『軽く言ったな』

そんな事を言われましても。

『「ブリガドーン」のコアに必要なのは、あくまで「燃料」なんだろう？』

『ああ。だが、きちんと魂も必要になる。魔力や妖力だけでは意味が無いのでな。あくまで星の巡りに選ばれた、丸子という「一個人」が要るのだ』

設計者、ロマンチスト過ぎるだろ。占星術は西洋の嗜みなんだろうが、起動するだけでも特殊な条件が必要とか、欠陥にも程がある。それを補って有り余る火力があるみたいだけどね。この大きさなら、一都市くらい簡単に落とせる。

ま、何れにせよ、ノープログレムだ。

『「燃料」って事は、例え「一個人」が必要なんだとしても、明確な自意識は要らない訳だ。なら、その部分だけを切り離して、分身体に移植すればいい。座敷童子は魂の分割が出来るからな。足りなくなった分は、私の魂をくれてやればいいさ』

『……お前にそんな事が出来るのか？』

自分は出来る、みたいな言い振りだな。知らんけど。

『私が一体何匹の妖怪を食って来たと思う？』

最初こそ1日1匹くらいだったが、すぐに2匹になったし、槐の邪神を殺してからは、きちんと3食は喰っている。1食の量もドンドン増え、死人憑きを含む数ヶ所の「養殖所」を確保した後は、スーパーで買い物をするくらいの手軽さで良質な食糧が手に入るようになった。

それもこれも、ウチの面子が優秀な奴ばかりだからである。丸子のＬＵＣＫアップ、姑獲鳥の幻惑術、零余子の無限飼料、藤花の化学薬物&糸……それから、チャラトミという万屋さん。これだけ揃っていれば、やれない事など無い。

何より、私は妖怪を魂ごと食べている。人の魂は食べても大してプラスにはならないが、やはり年月を重ねた妖怪の魂は内包するエネルギーが強く、食べれば食べ

る程、自分の魂を強化出来る。以前、致命傷を湯治だけで回復させた秘密がこれだ。負傷した分のストックを削れば、死の淵からでも蘇れる。

むろん、デメリットもあるが、それは精々〝死者の断末魔や怨恨〟が怪電波のように精神を苛んで来る程度だから、何の問題も無い。鬼である以前に、私は生粋の人殺しだからな。人の悲鳴は子守歌、恨み節はインスピレーションにしかならんのよ。

……そう言えば、鬼太郎は何で妖怪の魂をわざわざ逃がすんだろう？

取り込むのが嫌なら、せめて砕いておけば、二度と復活しないのに。〝命までは取らない〟とか〝僕はどちらの味方もしない〟とか、下らん厨二病でも発症してるのかな？

ま、どうでも良いか、あんな根暗のちんちくりんなんぞ。

『最悪、私が産み直せばいいからな』

私は己の下腹部を優しく撫でた。

そう、私は何れ母になる。全ての「鬼」の母体となるのだ。本来ならば不可能だが、今の私には出来る。種馬もいるしね。あいつのあいつ、マジで馬だもんなぁ……。

そして、これは無惨様との約束でもある。可愛がれる自信は全く無いけど。
『なるほど、〝母は強し〟か。分かり易い』
そう言う問題なんですかね、バックベアードさんや。
『つまり、協力はして貰えるのかな？』
『ああ。……だが、アデルが力尽くで脅したり、策を弄して嵌めようとしてきた場合は、協力しない。その時は大人しく妹さんを上手に焼いてもらうとしようか』
『……では、どうしたら首を縦に振るつもりだ？』
随分と拘るな。譲れない一線はあるものの、基本的に部下には優しい、上司の鏡みたいな奴である。本当に悪の親玉なのか、お前は。
まぁ、何だかんだと聞かれたら、答えてやるのが世の情けだ。
『真摯に頼まれたら、聞いてやろう。「お願いします、助けて下さい」ってな』
『……』
私の返答に、バックベアードが沈黙する。
ま、そうなるよね。だって、それが一番難しいもんな。アデルは既に一度攻撃を仕掛けているし、嘘まで吐いている。〝敵〟に心から頭を下げる程、プライドを傷

付けられるものは無い。

だが、本当に妹を助けたいと思うなら、ヘドロも一気飲み出来るくらいじゃないと、話にならんよ。私はしないけど。

私なら、自分が殺される前に相手を殺してでも奪い取ってやるさ。結果をな。

結局、今のアデルはどっち付かずなんだよな。そんなんじゃ、何も救えんよ。

……そんな葛藤に苦しみ、のた打ち回る姿を見るのは、最高に愉しいわぁ♪

『クックックック……』

すると、バックベアードが急にクツクツと笑いだし、

『フハハハハハッ！　素晴らしい！　期待以上だ、鳴女よ！』

やがて、心底愉しそうに高笑いながら、告げて来た。

『――――お前こそ〝本当の悪魔〟だ』

『いいや、私は「鬼」だ。一緒にするなよ』

しかし、私はそれを否定する。そこだけは譲れないんでね。

『まぁ、そうだろうな。……さて、世間話は終わりだ。今度こそ、〝会議〟をするとしよう』

『ヘイヘイ』
そういう事になった。

◆本当の悪魔

七大魔王は七つの大罪を〝それぞれ〟司る悪魔であり、ソロモン72柱は各々で得意分野が細分化されている。どの悪魔も、全てを兼ね備えてはいない。そもそも、悪魔は契約の穴を突いて騙してくるが、決して嘘は吐かない。元が異教の神であり、「神」の被害者なのだから、当然と言えば当然だが。

七つの大罪をコンプリートし、平気で嘘を吐く存在。愛を語り、正義を語り、未来を語り、だけど結局は自分を語っている、そんな奴。それこそが、本当の悪魔である。

そう、例えば――――――そこの誰かさんとか。

鳴女さん、新世界へ

今回、久々にあの単語が出て来マス。この作品、バトル要素が増えに増えまくってますもンネー。

その後は大会議室へ移動し、三幹部も交えた本格的な議会と相成ったのだが……正直な所、あまり語る事は無い。精々これからの予定が決まったって事ぐらいかな。

『流石にこれ、リスキーじゃないか？』

まぁ、若干計画に違和感を覚えはしたが。

『問題ない。慎吾も動いているだろうからな』

『随分と持ち上げるじゃないか。〝敵の敵は味方〟とでも言う気か？』

『いいや。〝敵の敵は分かり易い強敵〟というだけの事よ』

『なるほど』

好敵手（ライバル）してるなぁ。私と鬼太郎（あいつ）に、そんな関係は望めないだろうけどね。

『ちなみに、次のアップ予定はどうなっている？』
『えーっと……明後日の夜だな。おそらく、21時くらいになる』
『そうか、楽しみにしている』
あと、明らかに蛇足な議題も上がったが、私はもう何も言わない。視聴者は悪魔様だからね。
そんなこんなで、ベアード軍との会議は円滑に終了したのだが――――――本番はこれからよ。
◆◆◆◆◆◆◆
所変わって、「ブリガドーン」の大食堂「トリスケル」。
騎士団が座りそうな円卓が幾つも並び、銀河系を具現化したかのようなシャンデリアが天井に小宇宙を形成する、王侯貴族を鼻で嗤う程に豪奢な大広間である。収容人数は、６個師団は下るまい。掃除が大変そうだ。
『う～ん、ｄｅｌｉｃｉｏｕｓ！　素晴らしいの一言に尽きるわ！』
「滅茶苦茶旨いですねー」
「……材料には目を瞑るわ」『ぴきゅん』

『美味いのじゃー！』『偶には洋食も良いのう』
『久々に外出れたわー』『今回限りだと思うけどねー？』
『こういうのなら、美味しく食べられるかも』「「……」」
そんな「トリスケル」にて、私たちはご相伴に与っていた。
何かもう、出された料理が凄い。イベリコ・オークって、こんなに美味しいんだ。流石は餌に拘っているだけの事はある。こっちのクラーケンのイカ墨パスタも良いし、グリフォンのソテーやドラゴンのサーロインステーキもイケる。気紛れ出してやった姑獲鳥が頬張ってる、スプリガン・ア・ラ・モードも後で食べよう。零余子の飲んでいる生命の実のワインも欲しい。
ともかく、全部に目移りしちゃって、手当たり次第に食い付いてしまう。何だ、案外「妖怪料理」って西洋じゃポピュラーなんじゃん。日本でも積極的にやればいいのに。
これは是非ともレシピや育て方を教えて貰いたい。何組か畜産物を分けて貰えたら尚良いな。頑張って育てちゃうよ～♪
『父上、ワインのおかわりは如何ですか？』『貰おうか』

『ベア子ちゃんもジュース注ごうか？』『お願いするわ』

悪玉親子と義理の息子たちも楽しんでいるようで何より。

「ウフフフ、「トリスケル」の出すワインって、どうしてこんなにグラスが空いちゃうのかしらぁ～♪」

『ア、アデル様？　そろそろお止めになった方が……』『グラスと言うか、ボトルで50本は流石に……』

「良いんだもん！　無礼講だから幾ら飲んでも怒られにゃいもん！」

『『無礼講とは、そういう名前の気遣いの事ですよ、アデル様』』

最高司令官殿と残りの幹部連中は、見なかった事にしよう。アルハラ駄目、絶対。

《さて、宴もたけなわですが、ここで特別ゲストによる演奏をご披露して頂きたいと思います》

と、シルクハットと燕尾服が良く似合う吸血鬼ラ・セーヌが、マイクを片手に司会進行する。傍ではしゃいでるのは息子で、それをあやしてるのは従者かな？

『おい、出番だぞ、お前ら』

だが、催すのは奴らじゃない。私たち「鬼導隊」である。

そう、今から始まるのは「鬼導隊」による演奏会だ。スッカリ料理を食べ尽くした無限城のメンバーを連れ立って、大舞台へと上がっていく。楽器は転移で持って来た。

《こちらが本日の特別ゲスト、「鬼導隊」の皆様です。本来なら我々が演奏すべきなのですが、鳴女様の強い要望により、このような形と相成りました。曲目は、配布されたスクロールをご覧下さい》

ラ・セーヌの言葉に、円卓の西洋妖怪たちが一斉にスクロールへ目を通す。

ちなみに、曲目はこんな感じ。

①【Ｄｅｓｔｉｎａｔｉｏｎ】
②【ＰＲＥＤＥＳＴＩＮＡＴＩＯＮ】
③【雷牙～ｔｕｓｋ ｏｆ ｔｈｕｎｄｅｒ～】
④【ＤＲＡＧＯＮ】
⑤【ＳＴＲＯＭ】
⑥【ＨＥＡＴＳ】
⑦【紅蓮華】

『……何故こんな熱苦しい曲ばかり選んだ』

バックベアードがポツリと漏らす。

『盛大に上げてこうかと思ってね』

というか、単に好みの曲を集めただけである。全て私たちで作曲したりアレンジした物ばかりだ。場の空気に合わせたクラシックなんて弾いてやらねぇぜ！

さて、一丁やったるかぁ！

『行くぜ、「鬼導隊」！』

私らの歌を聴けぇ！

◆◆◆◆◆◆

そんなこんなで、私たちは非常に盛り上がり、ドンチャン騒ぎとまでは行かないが、とても楽しい一夜を過ごした。ここまで歌って飲んで食べたのは、生まれて初めてかもしれない。

その後は帰るのもアレな状態だったので、バックベアードの勧めもあり、折角だから泊めさせてもらったのだが、

『……んぁ？』

目覚めると、何故か見知らぬ場所にいた。
とりあえず、建物の中ではあるのだが、家具や生活用品がどう見ても子供仕様で、ついでに私の肉体まで縮んでいる。服も着物ではなく、そこらのガキンチョが来ていそうな半袖短パンだった。
何なんだろう、これは。確か私は寝心地抜群のクリッター式ロイヤルベッドで、チャラトミと一緒に熟睡していた筈だが？
「な、鳴女殿、ですか？　どうしてこんな所に……？」
しかも、どういう訳だか、幼女化したアデルまでいた。なぁにこれぇ？

◆牙狼
雨宮 慶太の監督作品「牙狼―ＧＡＲＯ―」に登場する、黄金騎士の名前。「ＧＡＲＯ」の世界は「陰我（人の邪心）」をゲートにして魔界より現れる魔獣「ホラー」が蔓延る恐ろしい場所であり、その悪魔たちを物理的に退治するのが「魔戒騎士」と呼ばれる狩人たちである。「牙狼」はその中でも最強の騎士に送られる称

号で、主人公は例外なくこの称号を受け継いでいる。

魔戒騎士は所謂変身ヒーローに類する役回りなのだが、彼らにとっての「変身＝鎧召喚」は〝必殺技〟であり、生身の時点から物凄い強さで、「ハイパーミッドナイトアクションホラードラマ」というキャッチコピーに違わぬ、とんでもないワイヤーアクションによる殺陣が最大の魅力となっている。

当然、最強の黄金騎士たる「牙狼」の立ち回りは凄まじく、主人公のスタイリッシュなヤクザキックはひたすらに痛そう。

ちなみに、歴代主人公は必ず何かしらの「掟破り」をしており、たぶんキッチリ守っているのは第４期の雷牙だけだと思われる。特に初代主人公である鋼牙（雷牙のお父さん）の破戒振りは視聴者ですら「……」となるレベルだったりする。反面教師にしたのかな？

鳴女さん、携帯獣の世界へ

ポケモン、ＧＥＴだぜ！

『おい、そこの幼女』
「いや、幼女って言わないで下さい。好きでこうなってる訳じゃないですから」
『あ～ん？』
　こいつは何を言ってるんだぁ？
『……お前のせいじゃないのか？』
「違いますよ。確かに私はサキュバスの血も入ってますが、自分の夢をコントロール出来る程に濃くは無いんですよ」
『〝自分の夢〟？』
「はい。おそらくですが、ここは私の夢の中です。この身体は、たぶん酒に溺れていた時に喚いていた言葉が原因かと……」

『お前、酔ってる時の事を覚えてるタイプか。なら、あんなに飲まなきゃいいのに』

カミーラとヴォルフガングも、かなり心配してたぞ。滅茶苦茶ドン引きもしてたけど。

「――――――面目次第もございません。嬉しくって、つい……」

『……』

ああ、こいつの中ではアニエスを救う目途が立ったと思ってるのか。実際は、まだ十三階段を数えながら上ってる状態なんだけどね。何時気付くかなぁ～？

それはそれとして、

『状況を整理しようか。今、私はお前の見ている夢の中に居て、その設定に従った姿になっている。ただし、お前の夢とは言っても初期設定以外は弄れない、半ば閉じ込められているような状態だと』

「はい。私が自意識を持ったのは鳴女殿より少し前ですが、会うまでに色々と確かめてみたものの、身体能力が超人レベルというだけで、魔法の類は一切使えなくなっています」

『つまり、お互いに雑魚って事か……』

一応、身体能力は凄まじいようだが、あくまで〝人間にしては〟だろうし、何より妖術や魔術の類が一切使えなくなっているのが痛い。無限城に引き籠れないじゃないか。

いや、と言うかさ、

『そもそも、この夢はどういう舞台なんだ？』

今の所は普通の家からスタートしているが、ゲーム内容によっては地獄が始まるからな。バイオハザードとかだったら、さっそく詰んじゃいそうな気がする。

「えっと、ですねぇ……」

すると、アデルが言い難い……というより恥ずかしそうに、告白した。

「――――――「ポケットモンスター　L&D（ライト　ダーク）」というゲームです」

地獄どころか、夢と冒険の世界だった。いい歳した魔女が何を夢見とんねん。

いや、つーかさぁ、アデルさんや、

『そんなタイトル聞いた事無いけど？』

「はい。前にベア子様と話が盛り上がった時に考えた、謂わば「二次創作ゲーム」なんですよ」

『……』

お前、本当はただのオタクだろ。上司の趣味に合わせたとか言ってたけど、実際は自分の趣向も多分に含んでるだろ、絶対に。そうでなきゃ、こんな凝った作りにならんわ。

と言うか、待てよ。二次創作と言えど、ここがポケモンの世界だとしたら、殿堂入りしないと、夢から覚めないのでは？

うーわー、これからこいつと一緒にジム巡りして、悪の組織をぶっ倒してからリーグ戦に挑まなきゃならんの？

クソ程に面倒臭いんですけど……。

『……フゥ、まぁいいや。とにかく、ここが何地方で、どういう設定なのか教えてくれ』

「は、はい。実を言うと、私も若干うろ覚えなので、あまり期待しないで欲しいのですが――――」

その後、私たちは今知り得る情報を擦り合わせた。

ここはオーストラリアを90度回転させた三日月型の大陸「ティアーザ地方」で

あり、オセアニア神話とクトゥルフ神話が入り混じった、不気味で陰気な闇の深い社会が成り立っている場所らしい。普通に嫌だな、その設定。夜に窓の外を見たら死んだりしない？

ジムは従来通り８個で、四天王とチャンピオンをぶっ倒す流れは同じ。悪の組織は「スマイル団」と「ネオ・ボランティア」の２つがあるそうな。

パッケージはクレセリアとダークライの進化形が飾り、他の伝説ポケモンはオセアニア系とクトゥルフ系で大別され、結構いるんだとか。既存のポケモンもそこそこ出て来るらしく、主にカントー&ジョウトやアローラのポケモンが多いらしい。リージョンフォームも存在し、それらは「ティアーザのすがた」と表現される。

ちなみに、主人公の少女は私で、ライバルポジションはアデルである。

選択肢が無かったから仕方ないとは言え、こんな姦しい面子で良いのか？

『ちなみに、クリアするのにどれくらい掛かるんだ？　配信に間に合わないと困るんだが』

「配信に命懸けてますね」

『当然だろう。つーか、お前ん所の幹部以上の奴はほぼ全員登録者なんだから、お

前こそもう少し焦った方が良いぞ』

私のチャンネルはバックベアードとヴォルフガングが、零余子にはヴィクターが、丸子にはベア子が、チャラトミには何故か目玉おやじが、それぞれ登録しているので、現状何処にも属していないのはアデル(こいつ)だけだったりする。ボッチやないか。

「た、確かにィ！　ベア子様やヴォルフガングに怒られるぅ！」

イヤンイヤンと首を振る幼女アデル。可愛いなぁ、こいつ。肉体に精神が引っ張られてるんじゃないか？

「いや、でも、現実とは時間の流れが違うので、おそらく一夜の夢で済むかと……」

『そうか。なら、何時までもこんな所に居ないで、さっさと御三家貰いに行こうぜ』

「そうですね！　そうしましょう！　レッツだゴーです！」

『可愛い奴だなぁ……』

そういう事になった。

さーて、何が貰えるのかな～っと。

……で、ポケモン博士の居る研究所にやって来たのだが、

「ようこそぉ♪　我がアマリリス研究所(ラボ)へ♪　可愛い新米トレーナーちゃんたちぃ

～♪」

「『すいません、間違えました、帰ります』」

「あ～ん、待ってぇ～♪」

全力で踵を返したくなった。何だ、この変態は。

「君たち、ポケモン貰いに来たんでしょ～？　ほら、こっちに取りにおいでぇ♪　図鑑もあげるよぉ～♪」

どうしよう、本当に気持ち悪いんですけど。見た目はパープルのロングヘアーが奇麗な絶世の美女なのに。

しかし、ポケモンを貰わない事には話が進まないので、渋々かつ嫌々に近付いて行く。

「ようやく来てくれたねぇ♪　それじゃあ、この中から好きなのを選んでねぇ♪」

『ゑ……？』

だが、アマリリスなる博士が差し出したのは、ゴミのような小さな３つの化石。モンスターボールではなかった。

『おい、アデル。これはどういう事なんだ？』

「えっと、ティアーザの御三家は、外来生物のせいで一度絶滅してるから、化石から復活させる必要があるんですよ。ティアーザ地方にはそういうポケモンが結構います」

『設定が黒過ぎるだろ……』

何で最初から倫理観を問うような展開になるんだよ。

『ま、まぁいいや。それじゃあ、私は「ハウボル」を選ぶかな』

私は考えるのを止めて、御三家のくさタイプ「ハウボル」を選択した。尻尾がタンポポの葉によく似たユウレイヒレアシナナフシみたいな姿をしており、タイプはいわ/くさの複合らしい。

『いわタイプが複合してるとは珍しいな』

「ティアーザ地方は熱帯や乾燥地帯が多いから、いわ・ほのお・くさタイプのポケモンが多くて、技も充実してるんですよ。後はどくタイプがかなり強化されてますね。逆にこおりタイプは極僅かで、はがねとフェアリーへの風当たりが若干強いです」

『ふーん……』

ほのおタイプはともかく、不遇ないわ・くさ・どくが大幅強化されるのは素直に嬉しいな。私、どくタイプが好きだからねぇ。

「ちなみに、貴女はどうするぅ～？」

「あ、じゃあ私は「ウルフル」でお願いします」

アデルはほのおの「ウルフル」を選ぶようだ。尻尾が燃え上がった、フクロオオカミの幼獣を思わせる容姿で、いわ/ほのおの複合タイプである。素早さ高そう。

「よーし、それじゃあ、復活させちゃうよ～ん♪」

私たちが選び終わると、アマリリス博士は超獣製造機みたいなマシンに化石を放り込み、メモリをセットした。

さらに、怪しげな音を立てながら機械がピカペカと動き、やがて「チン！」とポケモンたちが復活した。何かコンビニの冷凍食品をレンジ掛けしたみたいだな……。

『ボルボルゥ～♪』『ウルフゥッ♪』

「『おおぉ……』」

しかし、実際に動いている姿を見ると、やっぱり感動するし普通に可愛い。そのジト目が良いんよ、ハウボルちゃ～ん♪

「……あら、今回の化石は当たりみたいね。２匹とも隠れ特性持ちよ」
『え、そうなの？』
その上、この２匹は隠れ特性であるらしい。調べてみると、ハウボルが「てきおうりょく」で、ウルフルは「もらいび」だった。良い特性じゃないか。
「化石系のポケモンは、１／２の確率で隠れ特性で復活する設定なんですよ」
『いわタイプを優遇し過ぎじゃね？』
「好みの問題です」
『お前のせいかよ』
まぁ、強いから良いか。
『……ちなみにだけど、アマリリス博士。残りの１匹はどうするんだ？』
「うん？　捨てるよ？　裏庭辺りにね♪」
『普通に言いやがったな！　だったらくれよ！』「私も欲しいです！」
「なら、庭先でバトルして決めなさいな。勝った方にあげるわよん♪」
『やってやらぁ！』」
こうして、私たちは恒例のライバル戦をする事となった。いそいそと外に出て、

決戦のバトルフィールドにて対峙する。
『行け、ハウボル！』『ボルッ！』
「頑張って、ウルフル！」『ウルフゥ！』
そして、お互いにボールからそれぞれの御三家ポケモンを出した。
レベルは双方共に5で、ロクな技を覚えていない（ハウボルは「たいあたり」「まるくなる」「このは」、ウルフルは「たいあたり」「すなかけ」「ひのこ」）。ここはガンガン行こうぜ、だ！
「ウルフル、「すなかけ」！」『ウルッ！』
『あ、姑息な真似を！』『ボルゥ……ッ！』
素早さは向こうが上か。
つーか、図鑑で調べたら、ハウボルの素早さ種族値が10しかなかったわ。その分、かなり硬いみたいだけど、砂掛けで運ゲーに持って行かれると辛い物があるぞ。
「畳み掛けろ！　「ひのこ」！」『ウルルゥッ！』
さらに、火の粉で火傷を負わせてきた。タイプの関係上、等倍ダメージしか通らないが、攻撃力半減はヤバいって。

「よし、もう一度「ひのこ」で止めよ！」『ウルファァッ！』
『ぐわばぁっ！』『ボルゥン！』
クッソー、普通に惨敗したわ。素早いいわタイプってだけで面倒なのに、ああも搦め手を使われると勝ち目が無い。せめて、真面ないわ技がないと、ウルフルの弱点が突けないんだよねー。
というか、やっぱりお前オタクだろ。このバトルの上手さは確実にポケモンをやり込んでいる。
「決まりねぇ。「クラトン」はアデルに贈呈しまーす♪」
「やったー！」『ちぇ～』
バトルに勝ったアデルに、みずタイプ御三家のクラトンが贈られる。ゼニガメとスッポンモドキを融合させたような、若干情けない目付きをした、いわ/みずタイプのポケモンである。
「それじゃあ、夢と冒険の旅に行ってらっしゃいな♪」
「『おーっ！』」
そんなこんなで、私たちの旅は始まった。目指すはここから西に進んだ先にあ

る、ミンディアル州の「トゥハーデシティ」。
ちょっと出鼻を挫かれた気もするが、どうせ夢物語だし、サクサクと進めましょー。

◆ポケットモンスター L&D

ベア子とアデルの趣味が多分に反映された二次創作ゲーム。あくまで同人作品だが、バックアップが充実し過ぎている為、クオリティは無駄に高い。
陰謀渦巻く暗黒大陸「ティアーザ地方」が舞台であり、政府が倫理観を問われるような政策を打っていたり、勃発する犯罪のレベルが冗談じゃなかったり、ジムリーダーや四天王たちの秘められた過去が闇黒世界だったりと、真面に発売したら色々と問題がある作品となっている。オーストラリアがモチーフになっている為か、いわ・ほのお・くさ・どくタイプが強化されている。
ちなみに、「C（カオス）」というマイナーチェンジ版まで考えているらしい。ガチガチである。

鳴女さんの新たな旅路

旅は道連れ世は情ケ。

そして、最初の町「ナイラーアタウン」から旅立ち、道路に沿って歩き始める事、1時間。

『一本道だな』「一本道ですね」

何処にも辿り着かなかった。見渡す限り、鬱蒼とした森に両脇を挟まれた一本道があるのみ。

いや、広過ぎるだろう。そこまで原典に従う必要無いから。こんなんじゃ日が暮れても街に着かないだろうが。

「本来は定期便のバスか、ライドポケモンで移動するんですが」

『最初からそれに乗れよ。しっかりしてくれよ、最高司令官殿』

「いやぁ、もうお譲りしたので、ヒッチハイク頼みますよ先輩」

『お前ふざけんじゃねぇぞ。都合の良い時だけ後輩面するなよ』

だが、背に腹は代えられない。車かポケモンが通りすがるのを信じて、ヒッチハイクだっ！

『よし、脱ぐぞ！』

「止めましょう!?　夢と冒険の世界だっつってんだろ！　それより脇道に入って、ポケモン捕まえましょうよ。そもそも「たいせつなもの」に「キャンプセット」が入ってるんだから、じっくり野宿しながら行きましょうよ」

『むぅ、仕方ないな……』

まぁ、冒険に野宿は付き物か。それに手持ち1匹で次のジムに挑むのは無謀過ぎるか。

『じゃあ、ちょっと寄り道してくか』

「はい。81番道路には所謂「序盤ポケモン」が沢山出ますよ」

『お、良いね。私、序盤ポケモンを最低1匹は最後まで使う主義なんだよねー』

という事で、81番道路の両サイドに広がる森の中へ。ファー・ノース・クイーンズランドを参考にしただけあり、熱帯雨林が広がっている。

マップを見る限り単に90度回転しただけに思えるが、実際はこの付近が赤道に来るくらいに大陸全土が北上しているのだろう。あるいはポケモン世界の不思議な力で気候だけは変化していないのか。

何れにしろ、ここが深い森だというのなら好都合である。それだけポケモンの種類も多いだろうからな。

『ヤムヤム』

『おっ、さっそく何か出たぞ』

と、木の枝を移動する、自然薯みたいな芋虫を発見。

「「やむいもポケモン」の「ヨルウィ」ですね。所謂「序盤むしタイプ」のポケモンです」

アデルのゲンガー図鑑（この地方は何故かロトムではなくゲンガーを使っている）によると、むし/くさタイプの序盤虫の一種らしい。タイプの組み合わせとしては最悪だが、特性が「だっぴ/さいせいりょく（隠れ特性）」なのでそこそこ使えるポケモンである。

ちなみに、この形態は蛹を兼任しているようで、成長すると三種類の蝶に分岐進

化するそうな。これは捕まえるしかないっしょー。
『行け、ハウボル！　「たいあたり」だ！』『ボルボル！』
『ユキュゥケェン！』
ハウボルの体当たりを受けたヨルウィが意味不明な悲鳴を上げたが、気にせずモンスターボールを投げるぜ！
――――――コロ、コロ、コロン、カチッ☆！
『よし、ヨルウィ（♀）をゲットだぜ！』
流石は序盤ポケモン、面白いくらい簡単に捕まるな。
『ボルルル！』『おっ、「ころがる」を覚えたか』
さらに、レベルが7になった事でハウボルが転がるを習得。ようやく真面ないわ技を手に入れた。
「タイプが偏ってません？」
『良いんだよ、進化させればタイプが変わるんだから。つーか、お前こそ何か捕まえないのか？』
「そうですねぇ。ほのおとみずが揃ってるし、くさかじめんタイプが欲しい所で……

おっと！」『ハッパーッ！』

　すると、今度はアデルの前に、葉っぱがシダ植物になったナゾノクサみたいな奴が現れた。名前は「シダッパ」とそのまんまで、タイプもくさ単体だ。

　しかし、種族値はどちらかと言うとハネッコに近く、そこそこ素早いのが特徴。将来的にワタッコみたいな子になるのだろうか。くさ/ひこうは厳しいなぁ……。

　もちろん、大した苦労なくゲットである。

「ちなみに、この子は進化するとドラゴンタイプが付くんですよ」『マジか』

　メガジュカインかよ。もしくはアローラナッシーか。どちらにせよ可愛い姿は期待出来そうもないな。要らん。

『おや、こっちの鳥は何だ？』『ハッピー♪』

　次は私の番らしく、ピンクみの強いハチドリのようなポケモンが現れた。名前は「ハービィ」。ハッピーな鳴き声に違わず、フェアリー/ひこうの複合タイプという、実にファンシーな奴だ。

「だけど、そいつ進化すると、どく/ひこうになりますよ」

『そこが良いんじゃないか』『ハッピ～？』

図鑑によれば、進化すると「ヒドクーイ」という「しちょうポケモン」になるそうな。ニューギニアに帰れ。

そんなこんなで、森のポケモンをしこたまゲットした。その内の何匹かはレギュラー入りを果たした。面子はこんな感じ。

《私のメンバー》

◆ハウボル（いわ/くさ）　Ｌｖ１４（♀）：「ストーンロール」「まるくなる」「このは」「ころがる」

◆ヨルウィ（むし/くさ）　Ｌｖ９（♂）：「いとをはく」「たいあたり」「かたくなる」「このは」

◆ハービィ（フェアリー/ひこう）　Ｌｖ９（♀）：「うたう」「なきごえ」「つつく」「チャームボイス」

◆アズレーン（くさ/みず）　Ｌｖ１３（♀）：「みずでっぽう」「すいとる」「せいちょう」「あまごい」

◆ムコニャ（あく/どく）　Ｌｖ１０（♀）：「なきごえ」「ひっかく」「どくが」「ちょうはつ」

◆ティアーザレディパ（むし/かくとう）　Ｌｖ６（♀）：「たいあたり」「マッハパンチ」「みきり」

《アデルのメンバー》

◆ウルフル（いわ/ほのお）　Ｌｖ１３（♂）：「アクセルロック」「すなかけ」「ひのこ」「いわおとし」

◆クラトン（いわ/みず）　Ｌｖ１０（♀）：「たいあたり」「からにこもる」「みずでっぽう」「アクアジェット」

◆シダッパ（くさ）　Ｌｖ１２（♂）：「ひっかく」「このは」「たくわえる」「みずでっぽう」

◆イオーム（エスパー/ひこう）　Ｌｖ８（♀）：「ねんりき」「チャームボイス」「かぜおこし」「うたう」

◆ティアーザイトマル（むし/あく）　Ｌｖ４（♂）：「どくばり」「とどめばり」「いとをはく」

◆ジャカロップ（フェアリー）　Ｌｖ６（♀）：「たいあたり」「おねだり」「チャームボイス」

まぁ、こいつらを最後まで使うかは未定だが。少なくともヨルウィ、ハービィ、ムコニャはレギュラーにしたい。余談だが、ムコニャは黒い猫又といった感じで、ニャースに近い種族値になっている。

――――――さて、とりあえず手持ちを６匹揃えた所で、そろそろ現実と向き合おうか。

『おい、日が暮れたぞ』

「奇麗ですねぇ……♪」

『よーし、折るかなー』

「ごめんなさいぃっ！」

調子こいてポケモンを捕まえまくったせいで、バッチリ日が暮れてしまった。夕陽が地平線に半ば沈んでいる。夜目はそこそこ利くが、あくまで人の身だから、このまま暗くなられると困るぞ。

『よし、こうなったら、やっぱり脱いで……』

「止めろってのに！　ＳＮＳにアップすんぞ！」

『望む所だ！』

「露出狂か！」
と、駄弁りながら、どうにか81番道路に戻った時、
「おや、こんな所に子供が二人で……迷子かなぁ？」
何かエーテル財団っぽい服装の少年に声を掛けられた。
『お前も子供だろ』
「う、うるさいな！　これでもボクは、「ネオ・ボランティア」の隊員なんぞ！」
思わず突っ込んだら、所属を明かされてしまった。
『……おい、アデル。確かネオ・ボランティアって、悪の組織じゃなかったっけ？』
「はい。エーテル財団と似通ったポジションですね。下は真面だけど、上の一部がヤバい系というか。この子は下っ端だから、たぶん大丈夫ですよ」
『フーン……』
服装だけでなく、役割も似ているのか。本当に大丈夫なのか、こいつ。
「何をコソコソ話しているのかは知らないけど、キミたち迷子なんでしょ？　なら、ボクに付いて来なよ。近くに本部があるから、そこで保護して貰おうよ」
『え……』「あ、そう言えば、ネオ・ボランティアの本部が近いんだった」

おい、そういう事は早く言えと何度言えば――――というか、悪の組織の総本山が近くにあるのか。このゲーム、ハードル高過ぎない？

だが、野宿と宿屋のどちらが良いかと問われれば、間違いなく泊めて貰った方が良い。旅において一番大切な事は、如何に消費を抑え補給を怠らないかである。備蓄が無くなったら、野垂れ死ぬしか無いからな。

敵地だろうが何だろうが、有難くお世話になろうじゃないか。

『よし、今すぐ案内しろ、モブ』「失礼過ぎるだろ」

「誰がモブだよ!?　ボクは「ボブ」だ！　……ほら、行くよ！」

という事で、私たちは次の町へ行く前に、ネオ・ボランティアの本部へお邪魔する事と相成った。

「ここがネオ・ボランティアの本部だよ」

『へぇ、ここが……』「早乙女研究所みたいですね」

81番道路とG1番道路の境目――――丁度、森が少しずつ疎らになる辺りに、その建物は立っていた。誰がどう見ても早乙女研究所にしか思えない外観をしている。異論は認めない。だって、制作者がこう言ってるんだもの。理解したら同化す

る奴だ。

……とまぁ、冗談はさておき、ネオ・ボランティア本部の設備は素晴らしく充実している。

エーテル財団と同じくポケモンに関する研究施設はもちろん、食堂やお風呂、憩いの広場に娯楽施設と豊かな生活を支える基盤が整えられており、更には個室まで用意されている。

むろん、個室は階級差による広さの差はあるが、それでも１人につき二畳半は用意されている為、トイレと風呂が共同である事を除けば、生活するには充分だろう。所属人数の事を考えると、個室があるだけ贅沢と言える。普通は相部屋かタコ部屋だからね。

そんな人に優しい施設だからか、何の問題も無く受け入れてもらえた。

「……ここに来て、確信しました。この夢は「ライト版」のルートを辿っています」

『何だ、既定路線なのかよ。というか、「ダーク版」とはルートが違うのか？』

「はい。ライト版ではネオ・ボランティア本部で、ダーク版ではスマイル団の拠点で旅の必須アイテムを揃えるんです」

というか、寄らなければいけない基本ルートだったようである。博士の所では最初のポケモンと図鑑を、ここではキャンプセットや穴抜けの紐など、旅の必須アイテム（たいせつなもの）を手に入れるそうな。

『――――――って、キャンプセット無いじゃねぇかよ、コラァ！』

「す、すいませんでしたぁ！　つい過去作のノリで考えてました！」

危ねぇ、もう少しで遭難する所だった。こいつ馬鹿じゃねぇのか。ぶっ殺すぞ、マジで。

「おい、そこで何をコソコソ喧嘩してるんだよ？」

『いや、喧嘩じゃない、処刑しようとしてるんだ』

「もっと駄目だよ!?　それより、流石に個室は用意出来ないから、怪我人を収容する為の相部屋で我慢してくれよ？」

『いいや、構わんさ、サブよ』「そうですね。泊めて貰えるだけでも有難いです」

「……ボブだからな？　少しだけランクアップされても余計にムカつくからな？」

という事で、今夜はネオ・ボランティア本部の病室的な場所に泊めてもらう事となった。部屋は割と広めであり、２人合わせて八畳くらいはある。これなら圧迫

感も無いだろう。

『さて、これからどうするよ？』

そして、２人きりとなった所で、私は話を切り出した。

ちなみに、アデルは今、手持ちのポケモンと呑気に戯れている。お気に入りはクラトンのようだ。泣き虫で甘えん坊な所が、彼女の庇護欲を刺激しているのだろう。昔はアニエスもこんな感じで甘えてたっけ、みたいな？

ま、私もハウボルに背中を踏んでもらっているから、人の事は言えんがね。

「どうする、とは？」

すると、アデルはクラトンを撫でながら、小首を傾げた。可愛いな。

『ここは悪の組織なんだろう？　そんな所から支給された品を使って大丈夫なのか？』

「たぶん、大丈夫だと思いますよ。設定的に問題ない筈です。……というか、ここでアイテムを揃えないと、マジで遭難する上に、時間が掛かりますから」

『さっきみたいに？』

「許して下さい……」

断りたいなぁ～。

『そもそも、この世界を素直にクリアする必要とかあるのか？』

「ええ、そこは守った方が良いと思いますよ。夢に囚われた場合、あまり横紙破りな事をすると、一生出られなくなります。最悪そのまま死ぬ可能性すらありますから」

『フム……』

正直、時間の概念が現実と異なるとは言え、バッチを８個も集めてリーグまで進むのは面倒だったんだけど、そう上手くは行かないか。こういう時にチャラトミが居てくれたらなぁ。アデル、変な所で抜けてるから、あんまり頼りたくないんだよね。

「大丈夫ですって！　これでも制作者ですから！」

『そこ傍となく不安だなぁ……』

だが、考えても仕方ないのも事実。精々ストーリーから外れ過ぎないよう気を付けながら、物語を進めるしかないだろう。嗚呼、面倒臭い……。

◆◆◆◆◆◆◆

つぎのひ！

「へぇ、アナタたち、ポケモン図鑑を埋めてるの。まだ若いのに、頑張り屋さんね。なら、これは餞別の品よ。受け取って」

「『わーい』」

とりあえず、旅の必須アイテムは、中間管理職っぽいお姉さんから問題なく受け取れた。キャンプセット、穴抜けの紐、ポケモンボックス、レボリアルバンド――

――レボリアルバンド？

「『レボリアル』って何だよ？」

「あら、知らないの？　ガラル地方のダイマックスみたいに、ポケモンを巨大化させる技術よ。まぁ、細部は結構違うんだけどね」

「『へぇ……』」

このゲーム、ダイマックスもあるのか。彼女の言葉を信じるなら、色々と違いはあるようだが、そこは後でアデルに聞きつつ、実際に体験してみればいい。聞くのと見るのでは、大分違うからな。

「それと、これも分けてあげるわ。これを使うと、野生のポケモンを鎮静化したり、

協力して貰えたりと、かなり便利よ」、

さらに、「ピクシーリング」なる腕輪を頂いた。内部に「エルダーサイン」が描かれた「トラペゾヘドロン」を宝石代わりにくっ付けた金属製のリングという、何処までも不安になるデザインである。

使用する際は、ポケモンレンジャーのキャプチャーよろしく、トラペゾヘドロンの部分が光の軌跡を描きながらポケモンの周囲を飛び交い、同化すると一定期間だが服従させる事が出来るのだとか。

ネオ・ボランティアはこのピクシーリングでポケモンと人間の距離感を保ち、諍いや事故を無くすよう努めているらしい。考えが人間寄りのポケモンレンジャー、といった所か。

そう言えば、ネオ・ボランティアの隊服って、エーテル財団の物に似ているけど、手甲や足甲で防御を固め、マスクにバイザーで粉塵や毒への対策をしているなど、よりゴツくなっているんだっけな。

おそらく、ポケモンからの反撃を想定しているのだろう。何処まで効果があるかは知らないが、ピクシーリングで抑えてしまえるので、その間を持たせられれば良

いのかもしれない。

何れにせよ、ポケモンレンジャーやエーテル財団の職員よりも命懸けなのは確かだ。装備が避けたり逃げたりする事を考えていないからな。下っ端たちが真面目というアデルの話も、信用出来るかもしれない。

まぁ、逆に言えば、上層部の怪しさもより強まったのだが。少なくとも話してみた感じ、中間管理職ぐらいなら大丈夫そうだが、その上にいる「三賢者」なる連中は胡散臭さＭＡＸである。自分で「バルター」「カスパー」「メルキー」を名乗っちゃう辺り、頭の中が非常に心配だ。

――――そんな奴に付き合わされる、このお姉さんやボブが可哀想だな。

根が真面目で、職務にも実直かつ誇りを持って臨んでいるだけ、余計にそう思う。

何時だって、損をするのは正直者だ。

「……それと、これはお願いだなんだけど、ボブを一緒に連れて行ってくれないかしら？」

とか何とか考えていたら、お姉さんからボブをお願いされてしまった。何故そうなる。

「彼、真面目なのは良いんだけど、ちょっと根を詰め過ぎなのよ。……過去にポケモンの暴走で家族を失ってるから、仕方なくはあるだけどね」

いや、重いわ。何で鬼殺隊みたいな過去持ってるんだよ。どう見てもモブの癖に。

「でも、そんなやり方じゃ、何時か無理が出る。人間、そうなってからじゃ遅いのよ。だから、お願い」

『何で私たちに頼むんだよ？』

「……そうねぇ。〝女の勘〟かしら。アナタたちなら、あの子の心を救ってくれる気がするのよ」

お前はお前で、何で産屋敷みたいな勘を発揮してるんだよ。

しかし、ストーリー的に私は主人公であり、アデルはライバル。付いて来るだけで様々な冒険が待っているし、人生という名のドラマを彩る事だろう。人選は間違っていない。

『分かったよ。色々と貰ったからな』「そうですね」

「ありがとね♪　さっそく、ボブに準備させるわね」

仕方が無いので、ボブを旅の仲間に加えた。両手に華とは、羨ましい奴め。

「『という事でよろしく』」

「う、うん、よろしくね？」

その後、ボブと合流し挨拶を重ねたのだが、疑問符を浮かべられた。何でだよ。何処が不満なんだこの野郎。

まぁいいさ。こいつが組織の真実に気付いた時、どんな曇り顔を浮かべてくれるのか、楽しみではあるしね。

さぁ、チュートリアルはここまで。さっさとジム巡りを制覇して、夢から覚めてやるぞーっ！

◆ハウボル

・ティアーザ図鑑№００１

・分類：しんりょくポケモン

・タイプ：いわ/くさ

・性別：あり

・特性：しんりょく/てきおうりょく（隠れ特性）

・種族値

HP：60
こうげき：50
ぼうぎょ：70
とくこう：55
とくぼう：65
すばやさ：10

・図鑑説明

草食性の大人しい性格。普段は木の葉に擬態しながらゆったりと暮らしているが、敵に襲われると腹部をしならせ、両腕を大きく広げて威嚇する。それでも逃げない相手には腹部から種爆弾を発射し、撃退する。

乱開発により絶滅したと思われていたが、つい最近とある小さな孤島に僅かながら生き残っている事が判明した。昔はもっと凶暴なポケモンだったと言われている。

鳴女さん、トゥハーデシティへ

案外、片田舎が一番暮らしやスイ。

そんな感じで、私たち3人はトゥハーデシティを目指して出発した訳だが、
「え、ポケモン？　必要無いよ。ボクには「ガリトラップ」があるからね」
何となしに『ポケモンは持たないのか？』と質問すると、ボブは当たり前のように首を捻った。
確かに、ガリトラップ（ネオ・ボランティア内での「ピクシーリング」の隠語）さえあれば大抵解決するが、それじゃあ旅に出た意味がないと思うんだけど。これはお前のトラウマ克服の旅でもあるんだぞ？
「というかキミたち、次の町まで歩いて行く気かい？　何事も無く進んだとしても、夜まで掛かるよ？」
『そうだな。私としてはライドポケモンが欲しい所だけど』

「なら、その辺でポケモンをキャプチャしよう。ここらには丁度良いポケモンが結構いるから、すぐに足が手に入るよ」

『……』

ポケモンを当然の如く道具扱いするボブ。台詞が完全に悪役のそれなんですが。過去の事があるとは言え、これは闇が深そうだなぁ……。

まぁ、それは追々何とかすれば良いさ。そんな事より乗り物である。こんな果て無き一本道を素直に徒歩で進む気は無い。

『モォオアアンドォオオヴ！』

「お、さっそく「パイモンド」が現れたな！　よく見ててね、ネオ・ボランティアの科学力を！」

すると、地面を突き破り、材質がダイヤモンドに変化して角が無くなったイワークっぽいポケモンが現れた。名前は「パイモンド」。種族値は、まさに防御と特防を入れ替えただけのイワークだ。

だが、ピカブイをプレイした事のある身としては、こいつの乗り物としての性能は何となく分かる。たぶん、三人乗っても疲れない、優秀なライドポケモンとして

運用出来そうである。

「行け、ガリトラップ！」『ドワヴォッ!?』

旧神印のトラペゾヘドロンがパイモンドの周囲で光の軌跡を描き、あっという間にボブの支配下に置かれる。

うーん、この……。

『どう見ても悪の構成員です、本当にありがとうございました』「あんまり言わないであげて」

「どうしたの？　それよりほら、早く背中に乗って。効果は昼間でしか持たないから、その前にトゥハーデシティに辿り着こう！」

という事で、私たちはライド化したパイモンドの背に揺られ、トゥハーデシティへ高速移動――――、

「おっと待った！　目と目が合ったら勝負するのが礼儀だよ！」

しようとしたら、通りすがりの短パン小僧のルイに勝負を挑まれた。彼もエミューっぽいポケモンに跨っており、その名も「エミューン」というらしい。タイプはじめん/ひこうである。

『うるせぇガキだなぁ！　面倒臭いから死ねっ！』
「出会って早々それは酷くない!?」
『今まさに次の町へ行こうって時にタチフサグマするのが悪いんだよ！　行け、ハウボル！』『ボルボラァッ！』
「何か納得行かないけど、頼んだ、オニスズメ！」『ホォクゥウン！』
対戦カードはハウボル（Ｌｖ１４）とオニスズメ（Ｌｖ９）。
『エミューン使わないのかよ!?』
「これはライドポケモンだから！　瀕死になったら僕が野垂れ死ぬから！」
『まぁいい、どっちにしろ殺す！　殺れ、ハウボル！　「ストーンロール」！』
『ボルボルボル！』
「ギャース！」『オニィォォン!!』
まぁ、やる事は変わらない。ストーンロール（威力60で、当たる毎に威力が上がるいわ物理技。効果は殆ど「ころがる」と一緒だが、「かくばる」「かたくなる」「まるくなる」のどれを使ったかによって追加効果が変化する）で轢殺してやるだけさ。完全に格下だし、さっさと経験値になれや！

「くっそーっ、行け、ミロミス！」『ミロチュゥッ！』

お次はティアーザ地方の電気袋組のミロミス（Ｌｖ１０）。交尾のし過ぎで絶滅必須な有袋類「アンテキヌス」を派手にしたような見た目で、タイプはデデンネと同じでんき/フェアリー。

ただし、能力はピカチュウ以上に尖がっており、攻撃面は進化前としては言う事ないが、耐久力が壊滅的に低い。何ならコラッタより脆い。流石は絶滅危惧種。ねずみ花火みたいな奴だな。

『だから何だぁ！　そのまま「ストーンロール」！』『ボラァッ！』

「アッー！」『ミローン！』

結局は轢き潰すんだけどね。バイバイ、ミロミス。

『おっ、レベル上がったか』『ボルボル～ン♪』

と、ハウボルがレベル15にアップ。足止めされた割には合ってない気がするが、まぁ良いだろう。よし、今度こそは――――、

「きゃっ！　貴女今アタシを厭らしい目で見たでしょ！」

「『ミニスカートォッ！』」「お、落ち着いて二人共!?」

……ヤバ～い、とっても殺る気が出て来たぞぉ～っ♪

◆◆◆◆◆◆

『ここがトゥハーデシティか』「緑がいっぱいコレクションって感じですね」

その後も何人かトレーナーに絡まれたが雑魚ばかりだったので、私とアデルで順調に撃破していき、何だかんだでお昼前くらいには、次なる町「トゥハーデシティ」に到着した。

現実で言えば「チャールビル」に相当する場所であり、周囲を疎らな森に囲まれている片田舎だ。とは言え「シティ」が付く程度には発展しており、公共施設やデパート類は一通り揃っているし、何なら小さな空港もある。この広過ぎるティアーザ地方では、空港が有るか無いかでシティとタウンが分かたれるので、どんなに田舎臭くても都市扱いなのである。アデルの受け売りだけど。

「じゃあね、パイモンド」『モンドォオオッ！』

パイモンドも無事解放され、野生へと帰っていく。別にポケモンだから大嫌いという訳では無いみたいだが、やはり手持ちにする気は無いようだ。捻くれてんなぁ。

まぁ、今は気にしても仕方ないか。一朝一夕でどうにかなる問題でもないからな。

そんな事よりもジム巡りだ、ジム巡り。時間も良い頃合いだし、せっかくだから昼食を祝勝会にしたいんだよ。あと邪魔された腹癒せがしたい。

「ここがそうだよ」

ボブに案内された場所に立っていたのは、炎のように燃え上がる意匠を施されたバトルスタジアム。規模はガラルの物と同じくらいだ。

言うまでもなく、ほのおタイプのジムなんだろうなぁ……。

「いいかい？　ジム戦では「レボリアル」が使えるし、相手も使って来る。だから、ちゃんと使い方を予習しておくんだ」

「『ほーい』」

そんな訳で、レボリアルバンドに添えられた説明書に目を通す。

①レボリアルは1度のバトルで1回限り。持続時間は3回技を使う（3ターン経過する）まで。

②レボリアル中は全能力が1・5倍になる。怯む事は無いが状態異常は通用する。一部の技と道具を受け付けない。

③交代すると解除される。また、変化直後のみ「レボリアル技」以外のあらゆる

技を受け付けない状態になる。

④覚えている技が全て必中になる。その内の1つを1度のみ「レボリアル技」に変換出来る。

仕様はダイマックスと殆ど同じだが、HPが倍加するのではなく全能力が1段階アップで固定されるのか。加えて、変身したターンは実質無敵状態だから、ダメージを通すなら自分もレボリアルするしかないと来た。これはダイマックス以上にタイミングを選ぶな。時には諦めて生贄を用意するのも一つの道。

だが、一番の違いはレボリアル技の仕様が「Z技」と同じであり、必殺以外の技が必中化するという事だろう。ダイマックス技のように一辺倒ではない代わりに威力が元のままなので、これまた使い方を考えないといけない。

総じて、初めから〝切り札〟を想定した運用をしないと宝の持ち腐れになってしまう、玄人向けの仕様である。

分かり易いのは、〝確定状態異常を食らわせる不安定技〟を使う事かな。特化する分、絶妙に痒い所へ手が届かないんだけどね。

ともかく、何となく使い方は分かった。後は実践するのみ。

「『頼もーっ！』」「いや、ドアを蹴るなよ!?」
そして、私たちは最初のジム――――「トゥハーデジム」の門戸を叩いた。
というより蹴りを入れた。ムカつくから。
さぁ、いよいよジム戦開始だぜぇっ！

◆ウルフル
・ティアーザ図鑑№００４
・分類：ふくろいぬポケモン
・タイプ：いわ/ほのお
・性別：あり
・特性：もうか/もらいび（隠れ特性）
・種族値
HP：45
こうげき：50

ぼうぎょ：30
とくこう：60
とくぼう：30
すばやさ：65

・図鑑説明

尻尾の炎は命の証。消えると死んでしまう。子供ながらに気性が荒く、積極的に攻撃を仕掛ける凶暴な捕食者。

国際交流の過程で持ち込まれたイワンコに棲み処を追われるようになり、最終的に外国人たちに家畜を襲う害獣と勘違いされ、駆除され尽くして絶滅した。遥か太古の昔は、もっと大規模な群れを作り、大陸全土を縄張りとしていたらしい。

鳴女さんのトゥハーデジム攻略

第2のジムって結構鬼門。

さてさて、お邪魔しましたよ、トゥハーデジム。
内部は煮え滾るマグマの海。所々に小島が浮かんでおり、その上にジムトレーナーが待ち構えている。
『――――って、どうやってあそこまで行くんだよ！』
つーか、落ちたら死ぬだろ!?
「大丈夫です。これ、グツグツに煮えたシロップなので」
『それはそれで死ねると思うのだが』
いや、熱湯に叩き落ちた時点でアウトだろうが。
「島を渡るには、あの宙を浮かぶ足場に運んでもらうしかないですね」
アデルが指差す先には、なるほど、それらしい小さな足場が一定のルートで常時

動いている。

『何か暗黒面に堕ちそうだなぁ……』

アンタが憎くなりそう。

でもまぁ、最初のジムなだけあって、ギミックは簡単だな。落ちないように気を付けて渡るだけだもん。

ちなみに、挑戦は1人ずつなので、先ずは私から。それじゃあ、行ってみよう。ヒョイッとな！

《第1問！　「かこうポケモン」は次の内のどれ？　「バクフーン」「リザードン」「ヒードラン」》

『ゑ？』

何これ、浮島に足を踏み入れた途端、クイズが始まったんだけど。

「頑張って下さーい！　正解すれば、トレーナーと戦わずに進めますよー！」

『グレンジムと一緒じゃねぇかよ』

ジムリーダーは禿げのカツラとかじゃないだろうな。

しかし、うーん、「かこうポケモン」ってどれだっけ？

どいつもこいつも火山に棲んでそうだし、そもそも分類まで覚えてねぇよ。ポケモン勝負に全然関係ないもん。

『えーっと……「バクフーン」？』

《バッカモーン！　外れだぁっ！》

『うるせぇなぁ、声が！』

バカ外れです、ぐらいで良いんだよ！

《そんな馬鹿者には厳しく指導しなければな！　という事で、お出でませシラヌイ！》

「チェーストォァッ！」『トレーナーの方もうるせぇなぁ！』

あと、何か見た目のせいで、マグマ団と戦ってる気分になるんだよね。このクソ熱い場所で平然とフードを被ってる感じが、まさにそう。色んな意味で暑苦しい。

――――ジムトレーナーのシラヌイが勝負を仕掛けて来たッ！

「行け、ガーディ！」『ガウッ！』

『殺って来い、アズレーン！』『ホォロロゥ！』

ジムバトル最初の一戦は、ガーディ（Ｌｖ１５）ＶＳアズレーン（Ｌｖ１５）。同

レベルの対決だ。狛犬みたいな奴と、スカイブルーの空飛ぶエチゼンクラゲが対峙する様は、物凄くシュールである

とは言え、タイプ相性的に負けは無い。さっさと片付けてやろう。

「ガーディ、「かえんぐるま」！」『ガウルルルッ！』

……と思ったけど、意外とヤバそう。一発目から火炎車はアカンやろ。こっちは等倍ダメージで通っちゃうんだぞ！

『ヤローッ、「みずのはどう」でお返しだ！』『ハロォオオン！』

だが、アズレーンもレベル15で水の波動を覚えたから、効果抜群取っちゃうもんね。威嚇されようが、こっちは特殊寄りの耐久型だからノープログレム。

『アォォ～ン？』

しかも、上手い事混乱も入った。このまま仕留めてやる。

『アズレーン、「すいとる」！』『ホォオオン！』

『ウガゥッ！』「くっ、ガーディ……！」

フハハハ、勝負ありだな。金と経験値を置いて、マグマの海に沈むがいい！

《第2問！　ロケット団の最高幹部と言えば？》

と、次の浮島で、またしてもクイズが。こんな赤道直下の大陸で、カントー地方の犯罪組織の事情をお題目にするなよ。

『「サカキ」！』

《バケギャモーン！　外れだぁっ！》

『そっちも問題あるだろうが！』

しまった、サカキは首領だった。えっと、そもそも誰さんだっけな。ポアロ？

《そんなウツケ者にはン熱血指導だぁ！　お出でませ、エンテン！》

「芸術はぁ、爆殺だぁあああっ！」

『いや、殺しちゃイカンだろ……』

――――ジムトレーナーのエンテンが勝負を仕掛けて来たッ！

「燃えよ、ロコン！」『コォオン！』

『ドラマチックにするな！　行け、ハウボル！』『ボルンガァ！』

ジムバトル二戦目は、ロコン（Ｌｖ１６）ＶＳハウボル（Ｌｖ１６）。これまた同レベル対決だった。向こうだけが弱点を突かれるのも同じ。

「ロコン、「やきつくす」！」『ロコァアアッ！』

『ワハハハハ！　ほのお技など、無駄無駄無駄ァ！　ハウボル、「ストーンロール」！』『ボラボラボラァッ』

「ギェエエエッ！」『ロコォオン』

あっという間に汚い花火だ。ロコンは物理耐久が壊滅的だからなぁ。

《さぁ、これがラスト、第3問！　技マシン28とは、「しねしねこうせん」である？》

『……、……はい！』

《判断が遅いぃっ！　そして外れだぁ！　お出でませ、キエン！》

「もっと熱くなれよ！」『黙れ修○！』

――――ジムトレーナーのキエンが勝負を仕掛けて来たッ！

「行け、ウルフル！」『ウルッ！』

『今更そんな物……リベンジだ、ハウボル！』『ボルッシャアッ！』

ジムバトル三戦目は、ウルフル（Ｌｖ１６）ＶＳハウボル（Ｌｖ１６）。まさかのライバル戦の再現である。

しかし、真面ないわ技を手に入れた私に、負けは無い！

「ウルフル、「おにび」！」『ウルッ！』
『甘い！　「まもる」！』『ボルゥッ！』
ハウボルが鬼火を放って来たが、それは守るで防いだ。
「ならば、「はじけるほのお」！」『ウファッ！』
『「まるくなる」からの「ストーンロール」！』『マルボローッ！』
さらに、弾ける炎を受け切り、丸くなってからストーンロールを発動。これで威力が倍になるから、実質的に一撃必殺も同然だ。
『ウルゥ……！』「戻れ、ウルフル！」
そして、最後のジムトレーナーが倒された事で、私はジムリーダーへの挑戦権を得た。一際大きな孤島にある階段を上り、スタジアムへの入り口に歩を進める。
さぁ、来やがれ煩い人！
――――――ワーッ、ワーッ！　イェーイ！
観客席は最初のジムとは思えない程に満員御礼。ガラルと同じく、地方興しの一環なのだろう。ならば、有終の美で飾ってやろうじゃないか。
……で、肝心のジムリーダーであるが、

「よく来たな、チャレンジャー！　オレはジムリーダーのアマレ！　よろしくな！」

炎を思わせる焔色の髪と眼力のある瞳が特徴的な、キリッとした顔立ちの女性で、途轍もなくスタイルが良い。胸部ミサイルが無ければ、男と間違えていた事だろう。身長も元の私よりずっと高いし。

だが、何よりの特徴は、その恰好である。ロングのセーラー服に指開きグローブを嵌めているというスケベン全開なコスチュームに、炎が描かれた朱色の羽織を纏っていて、おまけに刀まで持ってると来た。

いやぁ、何と言うかねぇ？

『何やってんスか、煉獄さん……』

思わずチャラトミみたいな口調になってしまった。

それ程までに、アマレは女性版の煉獄 杏寿郎をしていた。これがおっぱいの付いたイケメンって奴か。とりあえず、鬼にならない？

「これまで何人もの挑戦者を見て来たが、オレのクイズに全問不正解する奴は、お前が初めてだ！」

『やかましいわ！　死になさい、煉獄 杏寿郎！』

つーか、割と難しかったぞ、お前のクイズ。あと、最後の問題は引っ掛かるのが礼儀だろうが、馬鹿者めぇ！

「……しかし、幾ら知識が有ろうと、実戦で活かせねば意味は無い！　さぁ、お前の強さを示して見せろ！」

『言われずともやってやらぁ！』

――――――ジムリーダーのアマレが勝負を仕掛けて来たッ！

「行けッ、キュウコン！」『クォオオオン』

アマレが繰り出したのは、日照り持ちのキュウコン。登場と同時に強い日差しが差し始め、快晴状態となった。

最初のジムなので、アマレの手持ちは2匹。ゲームと違い、ジムリーダー戦に限っては、ポケモンの頭数を揃えなければいけないらしいので、私も2匹のみだ。

面子はハウボルとアズレーン。他は戦闘力が足りないので、大人しく経験値だけを吸わせて貰おう。

よーし、バトルじゃオラァッ！

『殺るぞ、アズレーン！』『ホロワーッ！』

いやー、嬉しい鳴き方するねぇ。

「敵は鈍重なアズレーンだ！　何かされる前に畳み掛けるぞ！　「あやしいひかり」！」『キュォオオン！』

しかし、素早さは圧倒的に負けているので、先手は譲ろう。なけなしのチーゴの実（ネオ・ボランティアからの支給品）を持たせているから鬼火でも良かったんだが、贅沢は言えないか。所詮、混乱は運ゲーだし。

『アズレーン、「あまごい」しないと煮て焼いて食うからなぁ！』『……ホォオロッ！』

そんなもの、私とアズレーンの絆には通用しないぜ！

「くっ……雨が降り始めたか！」

降り始めた雨を前に、アマレが眉を顰める。

そりゃそうだ、ほのお技が半減される上に、私のアズレーンは「うるおいボディ」だからな。元々キュウコンの火力はそこそこ程度だし、天候変化を特性に頼っているポケモンは日本晴れを持っていない筈。ダメージが回復に追い付かず、競り負け

るのが目に見えている。勝てない要素が鬼火くらいしかない。

さぁ、処刑の時間だぁ！

「キュウコン、「じんつうりき」！」『キュオオオッ！』

『アズレーン、耐えて「みずのはどう」を当てないと酒に漬けてやるからな～♪』

『ホワワッ！』

『コォォン……！』「キュウコン！」

よっしゃ、混乱入った。あとはアクアリングを張って耐えるのみ！

「しっかりしろ、キュウコン！　「れんごく」！」『キャォオオン！』

『危なっ!?』『ホワァアアォゥ!?』

こいつ、混乱しているのにロマン技撃って来やがった。一見するとただのヤケクソに思えるが、ポケモンの確率は０と１００以外は信用出来ないから怖いんだよ。１／２の確率で確定火傷を叩き込まれるのは厳しい。

これはアクアリングを張ってる暇は無いな。面倒な事になる前に、さっさと仕留めてしまおう。どうせ、次のポケモンはレボリアルしてくるだろうからな。

『アズレーン、「みずのはどう」！』『テョワワワァン！』

『コォォン……』「くそっ、戻れキュウコン！」

これでキュウコンは倒したが、問題は次だ。一体何を使って来る？

「これで終わりではない！　始まりなのだ！　行くぞ、ルージュラ！」『ムラムラジュラジュラムラジュラジュラ！』

アマレの繰り出した切り札は、まさかのルージュラだった。

しかも、このルージュラ、青い。蒼い炎が闘気となって燃え上がっている。図鑑によると、これはティアーザの姿で、ほのお／エスパーの複合らしい。マフォクシーと同じタイプってマジか。

「燃えよ、アマレ！　焼き尽くせ、ルージュラ！　煉獄の炎で火柱を打ち立てろ！　「レボリアル」だ！」

『ジュラァアアアアアアアッ！』

さらに、予想通りレボリアル化し、とんでもない大きさになった。これ程嬉しくない巨人っ娘がいるだろうか。観客席は沸いてるけど。

『アズレーン、こっちも「レボリアル」だ！』『ホロォオオオオン！』

むろん、このままだといいように嬲られるだけなので、こちらもアズレーンをレ

ボリアルさせる。炎の巨人と水の超獣が相対する様は、まさに大怪獣バトルである。

「食らえ、我が奥義「れんごく」！」『ジュラァアムッ！』

と、ティアーザルージュラが投げキッスの要領で煉獄を撃ち出してくる。これは必中化しているので、避けようがない。通常種と同じく特攻が高いのか、結構削られてしまった。

『ホォォォ……！』『耐えろ、アズレーン！　そして、今度こそ「アクアリング」だ！』

だが、そのくらいでアズレーンは落ちない。既にキュウコンを起点に場は整っている。アクアリングも張った。火傷もチーゴの実で消えている。仮にもう一度食らったとしても、雨は私の味方だ。回復出来ない状態異常など無い。

あとは、攻め続けるのみ！

「そうはさせない！　ルージュラ、「ばくれつパンチ」！」『ジュラムラァッ！』

『何ィ!?』『ホロァッ……！』

また混乱かよ。というか、何故に爆裂パンチ。レボリアルに特化させ過ぎやろ、煉獄さん！

『ホァン！』『クソッ！』

しまった、自傷して持続時間を減らしちまった。潤いボディは〝状態変化〟は消せないからな。

「今だ！　炎の呼吸・玖ノ型「レボリアルフレア」！」『ジュルゥウウッ！』

その隙に、ティアーザルージュラが煉獄を変化させた「レボリアルフレア」を放って来た。ダイバーンと同程度の威力と日差しを強くする効果によって、一気に追い詰められた。

その上、レボリアルも時間切れ。お互いに元通りになった事で、益々こっちが不利になった。

「仕留めろ、ルージュラ！　「サイコキネシス」！」『ジュララララッ！』

そして、雨乞いをされる前に仕留めてしまおうという算段か、ティアーザルージュラがサイコキネシスで畳み掛けて来る。

『……ホロォッ！』

しかし、何とアズレーンは悲しませまいと持ち堪えた。まさかのリアルタスキ状態だ。そこまで懐いてたのか……もしくは後が怖いと思ったか。どちらにせよ、こ

のチャンスを逃す訳にはいかない。
『アズレーン、「あまごい」だ！』『ホロロッカァッ！』
「ルージュラ、「サイコキネシス」！」『ジュラァッ！』
さらに、サイコキネシスを喰らうと同時に雨を降らせ、アズレーンは遂に力尽きた。良い仕事をしたぞ、アズレーン。後はボールの中で見ていろ。私が勝利する瞬間を！
『仇を討て、ハウボル！　「まるくなる」からの「ストーンロール」！』『ボルボルボルッ！』
『ジュルァアアアッ！』「くっ、戻れルージュラ！」
そして、ハウボルのストーンロールコンボが決まり、ティアーザルージュラは倒れた。どうやら種族値の傾向は通常種と同じらしい。
「ハッハッハッハッ！　煉獄よりも熱い、素晴らしい試合だった！　ワッショイ、ワッショイ！」
こうして、割とギリギリの試合運びではあったが、トゥハーデジムをクリアする事が出来た。

「まさか、このオレが負けるとはな！　「フレアバッチ」を受け取ってくれ！　それと、これはオレの奥義「れんごく」だ！　是非とも使ってくれ！」

『……どうも』

さらに、最初の１つ目たる「フレアバッチ」と、あんまり嬉しくない技マシン45「れんごく」を貰った。誰に使えば良いんだよ、こんなロマン技……。

「ジム巡りはまだ始まったばかりだ！　誰もが頂点を目指し、強くなろうと足掻いている！　時には己の弱さや不甲斐なさに打ちひしがれる事もあるだろう！　だが、そんな時こそ心を燃やし、歯を食いしばって前を向け！　君ならそれが出来ると、信じているぞ！」

『アッ、ハイ……』

本当に最後まで暑苦しい奴だな、こいつは。

まぁ、賞賛は素直に受け取っておくよ。褒められるのは普通に嬉しいからな。

さぁーて、次はアデルがジムに挑む番だし、ゆったりと見学してますかねー。

◆◆◆◆◆◆◆

――――超時空要塞「ブリガドーン」、来賓用寝室にて。

『……上手く行くでしょうか、父上』

フヨフヨのクリッターベッド（キングサイズ）でスヤスヤと眠る鳴女とアデルの姿を見ながら、ベア子が不安そうに尋ねる。傍らではヴィクターが何かしらの機械（マシン）をせわしくなく弄り、夢の世界を安定させている。

『さてな。……あくまで、これは鳴女とアデルの問題だ。最後のチャンスを物に出来るかは、こ奴次第さ』

ベア子の質問に、バックベアードは淡々と答えた。

そう、これは彼らが用意した、アデルにとって一世一代の晴れ舞台（プレゼンテーション）。ここで鳴女の信頼を勝ち取り、アニエスを救う一手となるかを試されているのだ。

二人の悪夢は、まだまだ続く……。

◆クラトン

・ティアーザ図鑑№００７

・分類：ぶたばなポケモン

・タイプ：いわ／みず
・性別：あり
・特性：げきりゅう／そうしょく（隠れ特性）
・種族値
HP：65
こうげき：46
ぼうぎょ：67
とくこう：48
とくぼう：67
すばやさ：22
・図鑑説明
非常に大人しく臆病なポケモンだが、食欲はかなり旺盛であり、常に水草を食んでいる。時には陸に上がってまで草を食べる食いしん坊。足がヒレになっている為、陸上では動きが殊更鈍い。
人間による環境破壊に加え、持ち込まれたゼニガメとの餌の取り合いに負けて絶

滅した。今こそ水中以外では鈍間なポケモンと認知されているが、昔はもっと素早く動けたらしい。甲羅に含まれる成分の一部が隕石に似ている為、宇宙から来たのではないか、とも言われている。

鳴女さんとスマイル団

スマイル０円！

さて、煉獄さん擬きから必須バッチと要らん技マシンを貰い、次なる町へ旅立とうとした時、ちょっとした問題が起こった。

『ギギャアアアォヴ！』

何と、進化したハウボルが暴走したのである。

アマレとの決戦後、ハウボルが進化して「ボルデビサス」になったのだが、祝福のつもりなのか、アデルがクラトンを抱えて近付いてきたのが良くなかった。この時まで彼女も忘れていたようだけれど、ハウボルとクラトンの祖先はかつて大陸の覇権を賭けて血で血を洗う生存競争を繰り広げていたらしく、その時の記憶が遺伝子に刻み込まれているとの事で、進化直後という色々と不安定な時に両者を傍に置いておくと、暴走する場合があるんだとか。流石は古代ティアーザ語で「疾風の通

り魔」という意味を持つ名前の持ち主だ。

だから、そういう大切な事は早く思い出して、早急に伝えろと……本当にこの女は。

『ギギギ……ギァアアヴォッ！』

『おいおいおいおい……』

しかも、あろう事か私を標的にしやがった。

おい、こんな幼気な少女をポケモンと同列で扱うなよ。槐の邪神といい、こいつといい、どうして虫けらは私を殺そうとしてくるのか理解に苦しむ。

まぁ、だからと言って、大人しく蹂躙されるつもりは無いがね。

『フン！』『ギギャヴォッ!?』

私は斬り掛かって来るボルデビサスの鎌を流すように受け止め、勢いを利用する形で引っくり返し、そのまま地面へ叩き付けた。何時も通り、女子の嗜みって奴よ。

『――――逆らうな。OK？』『ギ……』

さらに、〝次やったらマジで殺すぞ〟という威圧を込めて睨み付けてやれば、ボルデビサスはすっかり大人しくなった。進化の暴走を乗り越えたのだろう。私に対

する畏怖の念によって。

そうそう、ペットは主従関係をしっかりと教えてやらないとね。絆だけでは乗り越えられない問題など、幾らでもあるのだから。

「あ、ぅ……あ……」

今のボブみたいにね。

本来ならこういう時にこそ彼のピクシーリングが輝くのだが、生憎とボブは動けなかった。過去のトラウマが蘇り、彼の腰を抜かしてしまったに違いない。

これ、思った以上に致命的な問題じゃないか？

「ウム、見事な腕前だ！　よもや、キミのような少女が、ボルデビサスを手懐けてしまうとはな！」

すると、その事態を黙って見ていたアマレが、相変わらずの煩い声で賞賛してきた。

『いや、見てないで手を貸せよ』

「そこの少年が襲われた時にはそうしただろうが、ボルデビサスが向かって行ったのはキミたちだ！　詰まる所、それは飼い犬に噛み付かれたような物！　彼らの

命を預かっている以上、きちんと管理するのはキミたちの役目だ！　まぁ、流石に本当に殺されそうな時は止めたがね！　生憎とその必要が無さそうだったから、見守らせて貰った！」

『その根拠は？』

「勘だ！」

『わーお』

清々しいまでの無責任な発言だった。

だが、生き物を飼うとは、そういう事である。彼らの命を手中に収めているのだから、適切な管理が出来なければ、相応のしっぺ返しが来る。実に当たり前の事で、それ故に何も言えなかった。呆れ半分、というのもあるが。

と、そんな感じで、ちょっとしたトラブルはあったが、アデルもトゥハーデジムに挑戦し見事にクリアして、この町には本当に何の用もなくなった。

だから、私たちは祝勝会も兼ねて豪勢な夕食を取り、格安ビジネスホテルに泊まって疲れを癒してから、次の町を目指す事にした。とりあえず、ビフテキの材料が何なのかは気にしないでおく。

その間、ボブはビックリするぐらい静かだった。晒してしまった醜態を恥ずかしく思っているのかもしれない。

しかし、翌朝にまたしても事件が起こる。

「アナタ、人として生きる価値がありませんよ」

「う、うるさい！　お前に何が分かるんだよ！」

目覚めの時を迎えたら、何故かボブの姿が無くて、早朝の空気でも吸いに行ったのかな、と思っていたらこれだよ。

何だか知らんが、顔の半分だけを仮面で隠した、道化師風の男を前に、ボブが再び腰を抜かしている。何処までも情けない奴だな、お前は。

そもそも、この男は誰なのだろう。こんな朝っぱらからピエロを演じている時点で真面じゃないが、もしかしてペニーワ〇ズの親類か？

「あ、こいつ、「スマイル団」の幹部だ……」

だが、アデルがポツリと漏らした言葉により、全てを理解する。

「スマイル団」とは、このティアーザ地方における悪の組織の片割れであり、NGO染みたネオ・ボランティアに対して数十人程度の小規模な集団で、表向きはサー

カス団として活動している。

しかし、その実態は少数精鋭の戦闘集団であり……殺人鬼の集まりである。

スマイル団に所属するのは、ポケモンが親代わりだった、ポケモンしか信用出来ない、〝ポケモン至上主義〟の人間たちだ。αなアクア団を突き詰めたような連中だと思えばいい。

しかも、〝実はポケモンを独り占めしたいだけだった〟プラズマ団みたいな似非慈善団体ではなく、ポケモンを傷付ける者は容赦なく殺害してしまう、マジもんのキチ〇イ共である。

だが、誰彼構わず殺戮するようなトリガーハッピーでもなく、奴らが〝処刑〟するのは救いようのない人間だけであり、〝ポケモンとちょっと喧嘩した〟だの〝ポケモンに怪我をさせてしまった〟程度で手を上げる事は無い。特に子供に対しては寛容で、悪い事をしたら叱るくらいには良識のある大人なのだ。言うなれば、〝ポケモン世界の仕置人〟みたいなものである。

つまり、ボブは子供に甘い彼らでも見逃せないような事を仕出かした、という事だ。

『おい、そこのペニーワ○ズ』
「おや、おはようお嬢ちゃん。ワタクシはジェフリル・マーダーです。以後お見知りおきを……」
　ミルウォーキーの殺人鬼みたいな名前してやがんな。
『そんな事はどうでもいい。そいつをどうするつもりだ？』
「おやまぁ、アナタのお友達でしたか。それでは、最期のお別れをどうぞ」「ひっ……」
　うーわー、話が通じなさそう。友達にお別れしろとか言うか、普通？
『……じゃ！』「じゃ!?」
　まぁいいや、迷惑を掛けるような連れを生かしておく理由は無いしな。それ言っちゃうと、こいつ以上に捨て置かなくちゃならん奴が居るが……。
「な、鳴女さん、それはちょっと……」
『えー、助けなきゃ駄目ー？』
「駄目というか、イベントが進まないのですが……」
　メタな理由だなぁ。
『とりあえず、理由を聞いても良い？』

「それはご本人にどうぞ。これで最後ですからね」
『……』
悪い大人だ。周りの大人たちもね。何をしたのか知らんが、子供が殺されそうになっているのに知らんぷりとか。いい歳して。
ここまであからさまだと、逆にボブ(こいつ)が一体何をやらかしたのかが気になるな。
『お前、何をしたんだ？』
「ボクは悪い事なんてしてない……！」
しかし、ボブはこの調子である。仕方ないわねー。
『行け、ボルデビサス』『ギガァアアヴォッ！』
「な、何をする気だよ!?」
『悪いかどうかは関係ない。何をしたか言え。さもないと、ピエロの前に私が処分してやる』「ええぇ……」
「そ、そんな……！」
だけど、今のお前はそれくらいしないと喋らないだろ。意固地になったクソガキは、恐怖を味わわせてやるのが一番だ。私は親でもなければ友達でもないんでね。

遠慮なく脅させてもらう。

「な、何なんだよ……ただ、ゴミ捨て場で喧嘩してたポケモン同士を、〝本気〟にさせただけじゃないか！　害獣と害鳥を、誰の手も汚さずに〝処分〟しようとしたただけなのに、どうしてボクがこんな目にぃ……！」

『いや、普通に動物虐待だろ』

ようするに、お互いに死ぬまで殺し合わせたって事だろうが。そりゃあ温厚なスマイル団も怒るわ。バリバリ逆鱗に触れてるもん。

『よし、じゃあね！』「だから助けなきゃ駄目ですって！」

えー、もういいじゃん、死んでも。

「お話は終わりましたか？　では、離れて下さい。血で汚れますので」

ほら、ジェフリルさんもこう言ってるし。

「そこまでだッ！」

だが、そこへ水を差す――――というより火を投げ入れる、暑苦しい女が。

ジムリーダーのアマレの登場である。挑戦者を試すだけでなく、町の治安を守るのも仕事だから、来るのは当然だが。

「ウム、危ない所だった！　運悪く月の物が来ていたせいで遅くなってしまった！　怖い思いをさせて済まない！」「うぅぅ……うぁあああっ！」

そして、とんでもない事をサラッとカミングアウトしながら、ボブを抱き締めて保護。……何か私からも守ってない？

「おやおや、ジムリーダーのアマレ様ではありませんか。何時も治安維持に尽力して頂き、ありがとうございます。お陰様で、周期的にこの町でサーカスを開けていますよ」

しかし、アマレがやって来たのにも関わらず、ジェフリルは全く焦る様子がなく、それどころか日頃から交流があるかのような発言をした。町の人々もそれが当たり前のように受け入れている。〝普段はサーカス団として活動している〟という話は本当みたいだな。

「ほほぅ、ならば何故その子を殺めようとする？」

だが、流石に今回の件は看過出来ないのか、アマレが顔を顰めて睨み付ける。

「それはもちろん、この子が罪を犯したからですよ。その腕輪の力でポケモン同士を無理矢理戦わせ、どちらも殺そうとした。前々からネオ・ボランティアの遣り口

は気に入りませんでしたが、人の為に活動しているのだと我慢していました。しかし、流石にこんな事があっては、堪忍袋の緒も切れますよ」

「で、でも、ボクは……」

「おや、文句がお有りなので？　なら、自分がその立場になって、殺されてから言えば良いじゃないですか。出来るものならね」

「……」

むろん、ジェフリルは聞き入れない。ボブが弱々しく抗議するが、どう考えても彼の方が正論を言っているので、すぐに押し黙った。そういうとこやぞ。

「それは違うぞ！」

すると、アマレが希望野郎みたいな事を言い出した。

「何ですか？　まさか、子供だから赦せと？　それは些か都合が良過ぎるのでは？」

「そんな事はない！　子供が道を誤らないよう導き、間違ったら叱ってやる！　それが元子供（おとな）の役目だ！　何のチャンスも与えず、未来を奪ってはいけない！」

「……まるで大人に更生の余地はないとでも言いたげですね」

「どう取られようと構わん！　少なくとも、今この場では、オレは彼の味方だ！」

さらに、リピートボールを構え、戦意を示す。やる気満々のようだ。そうかいそうかい。

『なら、私はお前の敵だな』「「ゑ？」」

「おやおや、これはこれは」「……！」

そっとジェフリルの隣に立った私を見て、子供2人と元子供が絶句する。そんなに驚く事かね？

「失礼ですが、彼はアナタのお友達だったのでは？」

『いいや、ただのお荷物だ。この機会にはっきり分からせた方が良い。お互いの為にな』

正直ね、ライドポケモンを自力で用意出来るようになった時点で、そいつはもう用済みなのよ。

「ちょっ……鳴女さん、話がややこしくなるから止めて下さい！」

『だが断る』

「それを断る！　……こうなったら仕方ありませんね。煉獄さん！」「いや、ア

マレだが？」「あの人でなしを、私と一緒に分からせてやって下さい！」「お、おう……？」

『このロリコン共がぁ！　テメェらこそ分からせてやらぁ！　結局、私が一番強くてカッコいい主人公だってなぁ！』「面白い人ですね。気に入りました。ダブルバトルと行きましょう！」

「ボム、今の内に逃げて下さい！　確か、町の西に鉄道があった筈です！」「……ボブだけど分かった！」

そして、ボブをアデルが逃がし、私たちは対峙する。余計な事を。

それはともかく、L&D初のダブルバトルの始まりだぁ！

「『今すぐ死になさい！』」

「「いい加減にしろぉ！」」

――――ジムリーダーのアマレと、ライバルのアデルが勝負を仕掛けて来たッ！

「行け、ジュダーム！」『ジュダジュダマダームジュラジュラムダァ！』

先ずはアマレがティアーザルージュラの進化形、ジュダームを繰り出す。色合い

は変わっていないが、頭身が8くらいに上がり、顔がアストラル世界の住人になっている。可愛いっちゃ可愛いけど、踊り子というより宇宙人みたいになっちゃったなぁ。

「頼みますよ、ズガドーン！」『ボボボーボボーボボォーン！』

そして、お前は準伝説を持ち出すなよジェフリル。幾ら幹部だからって、UBはないやろ。それも色違いって。

だが、味方としては頼もしい。是非とも自分ごと敵を吹っ飛ばしてもらおう。

「鳴女さん、先に目覚めないで下さいね！　ウルファング！」『ウルファアアアッ！』

アデルが繰り出したのは、ウルフルの進化形である「ウルファング」。無事に成熟した姿というか、スラっとカッコ良くなった。ヘルガーと同じレベルで地獄に居そう。フクロオオカミはやっぱり良いなぁ。

しかし、敵に回すと厄介な相手だ。種族値が少々特殊寄りになったルガルガン（真昼の姿）と言った感じで、非常に素早い上に覚える技も優秀と、攻めに関しては文句の付けようがない。その分、防御は手薄だが、殺られる前に殺っちゃうスタ

イルだから、大した問題ではないだろう。

『じゃあ、お前はここで永遠に眠っとけ！　ボルデビサス！』『ギギャアアヴォッ！』

最後はご存知、私の下僕ボルデビサス。こいつ、改めて見ると凄い形してるよね。新しく鎌状の前足が発生しただけでなく、全体的に鋭角となり、目に至っては最近の仮面ラ〇ダーっぽい複眼に変化している。背中には彗星怪獣を思わせる翅が生え、葉っぱみたいだった尻尾はＤホイール（遊星号）のように太く逞しく変じている。

何というか、宇宙群獣ばりに様々な昆虫のパーツが合体した、合成獣染みたポケモンだ。あと、蠅声為邪神にシルエットが似ている。制作時期から言って、アデルはまだ知らなった筈だが、偶然とは恐ろしいものである。

……凄い、私だけ仲間外れじゃん。皆みんな、ほのおタイプ入っているのに、くさなんだけどｗ。

だが、ここでアズレーンとか出しても足を引っ張るだけだし、その他の面子はまだ進化してない上に弱点ばっかりだから、そもそも戦いにならない。ここは素直に

相棒を頼ろう。

繰り出せる数は、全員で合わせるというルール上（※絶対厳守で罰則金有り）、お互いに1匹ずつ。両方倒れた側が負けるダブルバトル、いよいよ開始だ。

「ジュダーム、「れんごく」！」『ジュダムダァッ！』

『守れ、ボルデビサス！』『ギギャァアヴォッ！』

一番手はジュダームの煉獄。進化してから素早さに磨きが掛かり、攻撃と特攻も上がっている。耐久は脆いってレベルじゃないけどね。

しかし、等倍でダメージが通るボルデビサスを狙う事は分かっていたので、何とか守り切った。

つーか、マジで煉獄撃ってくるの止めろ。

「ウルファング、「パワージェム」！」『ウルファッ！』

次に動いたのはウルファング。ズガドーンにダメージを与えようとパワージェムを放っていく。

「甘いですね。「きあいのタスキ」で耐えるのです！」

だが、ズガドーンは気合のタスキを持っていたらしく、瀕死の一歩手前で耐えた。

それはつまり、ビックリヘッドを一発撃てるという事だ。
「ズガドーン、「ビックリヘッド」です！」『ボンバァアアアァァマンッ！』
「「ドワォ!?」」『ウルファッ！』『ジュダァ～ン！』
　このドカンと一発で耐久が紙同然のジュダームが沈み、紙が羊毛フェルトになった程度のウルファングも瀕死状態になる。
　もちろん、ボルデビサスは守るを使っていたので無傷である。つまり、私たちの勝ちだ。
「ウム、流石はスマイル団の幹部！　油断した訳ではないが、上手い事持って行かれてしまった！」「うぬぬぬぬ……ぱぉーん！」
　ハッハッハッハッ、負け犬たちが何か吠えているよ。
　しかし、危なかったのも事実。ビックリヘッドは自爆技だから、ボルデビサスが倒れた状態でズガドーンが弾けてしまうと、自動的に私たちの負けとなってしまう。
　だから、煉獄が飛んで来た時はマジでビビった。ホント、あれを当てて来るなよ……。
「だがしかし、ボブ少年は逃げ果せた！　目的は達成した！」

「いやいやいや、それもまた甘い考えですよ、くふふふ……」

それでも、ボブをジェフリルから引き離す事に成功したのは事実であり、自信満々に語るアマレだったが、それをジェフリルが鼻で嗤う。

「実を言うと、ワタクシは今日、とある人と待ち合わせをしていましてね」

「……まさか」

スマイル団の幹部であるジェフリルと二人きりで落ち合う――――わざわざそんな真似をするのは、同じ幹部クラスか、もしくは……。

「ええ、今頃ボブくんは駅で鉢合わせていると思いますよ……我らが敬愛する団長とね」

◆ヨルウィ

・ティアーザ図鑑№０１０

・分類：やむいもポケモン

・タイプ：むし/くさ

・性別：あり
・特性：だっぴ/さいせいりょく（隠れ特性）
・種族値
HP：55
こうげき：25
ぼうぎょ：65
とくこう：25
とくぼう：70
すばやさ：21
・図鑑説明
木の枝や根に擬態しながら、森で静かに暮らすポケモン。殻は硬いが中身は栄養満点で大変美味であり、ポケモンだけでなく人間からも狙われている。進化の時はより硬くなるが、更に美味しくなるので余計に狙われる。その為、進化するまで生き残れる個体は非常に少ない。また、時間帯によって3種類のポケモンに分岐進化するという、面白い特徴がある。

幽霊電車、地獄行き

幽霊電車は鬼太郎の中でも2番目に好きな話。

電車が揺れる。

「……」

視界が揺らぐ。

これから一体どうすれば良いのだろう。

何処へ向かえばいいのか、何時になればゴールなのか。最早、何一つ分からない。

「……閑散としているな」

普段なら結構埋まっている事が多いのだが、今日に限って座席の客は疎らで、スカスカである。ボブを含めても7人しかいない。

今はあまり話し掛けられたくないから別に構わないが、流石にここまで人がいないと不気味に感じてしまう。

（……というか、ここの電車、こんなに古めかしかったっけ？）

そもそも、内装からして気味が悪かった。床が腐り掛けた木の板で、壁は金属だがそこかしこが錆び付いており、座席や吊革も硬く薄汚れ、何なら空気そのものが湿って淀んでいる。

（そう言えば、誰も話すどころか動きさえしていない……）

誰も彼も皆一様に俯き、微動だにしていない。まるで死体のようだ。

「……！」

それに、今さっき気付いたが、外の景色がおかしい。まだ昼の筈なのに薄暗く、空は真っ赤に染まっている。森は消え、闇のように黒く荒れ果てた大地が何処までも続き、所々に捩じくれた岩々が立っている。

――――――フッ！

「何だ……!?」

今、窓の外を何かが横切った。かなり大きく、その上素早い。少なくとも人間ではないだろう。

――――――スッ！

今度は後部座席をナニカが通り過ぎる。
さらに、すぐ脇を、真上を、足元を……速過ぎる何者かが動き回っている。
『グルルルル……』「……ッ！」
気が付けば、目の前に凶悪な顔が。青黒い闇を懲り固め、犬の形を成した、恐ろしい魔獣。
しかし、次の瞬間には消えている。
「……えっ!?」
その上、乗客までも居なくなってしまった。何時の間にか照明も落ち、外の赤みが混じった赤黒い闇に支配された薄気味悪い車両の中に、ボブだけが１人。
誰もいない。何かはいる。光は無い。闇は腐る程ある。希望は見えない。絶望は今目の前にある。聞こえる。自分の息遣いと、ナニカが蠢く音が。狙っている。ボブの命を。
『グルァアアッ！』
「うわぁあああっ!?」
そして、鋭角の一際濃い闇の中から、さっきの魔犬が現れ、乱杭歯の並ぶ裂けた

口で食らい付いて来た。

「……!?」

気が付くと、ボブは普通に座っていた。乗客もいるし、あの魔犬はいない。外の景色は相変わらずだが……ともかく、助かった……のだろうか？

分からないが、

「あれ……服が……!?」

何故か装備を外され、部屋着姿になっていた。半袖半ズボンという短パン小僧な格好に、思わずモジモジしてしまう。普通に恥ずかしい。

いや、そんな事を言っている場合ではなかった。事態が何一つ進展していないのに、ソワソワしていてどうする。それより、ここからどうやって脱出するかを考えるべきだろう。

このまま進み続けたらヤバい、そんな気がする。直感がそう告げている。

しかし、どうしたら良いのかは、さっぱり分からなかった。

「こんにちは！」

と、乗客の一人に話し掛けられた。ボブよりも更に幼い女の子。所謂メルヘン少

女である。笑顔が眩しく、可愛らしい。思わず誘拐したくなる。
「え、あ、うん……こんにちは」
とりあえず、挨拶を返すボブ。外は真っ赤だけど。
「わたし、おねえちゃんのことしってるよ！」
「えっ、どうして？」
「だって、まえにたすけてくれたでしょ？　サイホーンにおそわれそうになったときに」
「ああ……」
そう言えば、そんな事があったような気もする。流石に何時頃だったかは覚えていないが。ボブが救った人間は数多い。正直なところ、詳しく覚えてはいなかった。
「ありがとうね」
だが、褒められて悪い気はしない。それもこんなに可愛い子から目一杯感謝されるとなれば、尚更の事。
「あ、ぼくもたすけてもらったことあるよ！」「ああ、キミはあの時の……」「おお、おお、あんときゃ本当に助かったわ」「ありがとう」「サンキューな！」

さらに、他にも老若男女問わず、次々と感謝の言葉を述べて来る乗客たち。車内は何時の間にか大感謝祭だった。

（何だ、やっぱりボクのやって来た事は、正しかったんじゃないか……）

温かい言葉に囲まれ、すっかり絆されるボブ。

しかし、よく考えて欲しい。どうしてこんなに都合良くお礼を言ってくる乗客がいるのかと。それ以前に、何時からこんなに人間が居たのかと。

そう、少しでも考えれば分かる事。

――――これが、悪意ある誰かの演出でしかない、という事に。

もちろん、絶望はすぐさまやって来た。

「……でもさぁ、オレのヒトカゲ、そいつのせいで死んじまったんだよ」

温かな人々の間を縫って、悪意ある言葉がボブへ投げつけられる。同い年くらいの、短パン小僧だ。

むろん、せっかく良い気分になっていたボブは面白くない。

「いきなり何？　意味が分からないんだけど？」

「お前がヒトカゲをその腕輪でオレから引き離したせいで、野生を知らないあいつ

は、次の朝には死んじまったよ」
「それはキミが迷惑を掛けるような事をしたからだろう？　単なる管理不行届だよ。言い掛かりは止して欲しいね」
「……言い掛かりだと？　確かに、オレは調子に乗っていたさ。相手のポケモンを必要以上に痛め付けるような真似をしていたさ」
「やっぱりキミ自身のせいじゃないか」
「だからヒトカゲを殺しても良かったのかよ!?」
「野垂れ死んだだけだよ。ボクは悪くない」
短パン小僧が幾ら言っても、ボブが聞く耳を持つ事はなかった。
確かに、彼の自業自得だろう。倒れた相手に追い討ちを掛けるような真似をしていたから、罰が当たったのだ。
だが、その罰が相棒との死別だったとして、納得出来るだろうか？
「……そう言えば、私のヤミカラス、盗み癖があるからって、勝手に逃がされちゃったっけ」
また1人、別の女性がポツリと呟く。どうやら彼女は、悪戯好きなのを迷惑だ

と判断され、ヤミカラスと引き離されてしまったらしい。

これはかなりグレーである。迷惑と言えば迷惑だが、そこまでする必要はあったのだろうか。

「アタシのポチエナは、懐いてくれなくて噛み付いたからって、没収されたわ」

今度はボブより1歳下くらいの少女。彼女の場合は、人から貰ったポケモンであるが故に懐いて貰えず、噛み付くのが危険だという事で、強制執行されたのだとか。

これは……どうなのだろう？

「儂の友達は、ゴミ捨て場で争ったのが駄目だってんで、相手のヤミカラス共々殺され掛けたよ」

そして、この世捨て人のお爺さん。彼の友達は今朝方、光る物を探そうとゴミ捨て場を漁っていたら、ヤミカラスと喧嘩をしてしまい、誰かの都合で殺されそうになったのだという。

果たして、一体誰の事なんだろうね？

「知らないよ、そんなの。人間、社会に生きているなら、公共の迷惑にならないよ

うにするのは当然の事だろう？　それが出来ない癖に、いざ自分が迷惑を被った途端に掌を返すなんて、実に都合が良いね？　痛い目を見るのも当然さ。まったく、馬鹿馬鹿しい」

当然、ボブは切って捨てる。ボブにとって、迷惑を掛けたポケモンは害獣や害鳥どころか、瓦礫同然なのだ。

「なら、どうして僕のギャラドス逃がしたの？　せっかく頑張って育てたのに……」

「それは、町で暴れるから――――」

「じゃあ、何で私からラッタを取ったの？」

「それは、店から食べ物を盗ませ――――」

「それじゃあ、オレから相棒を奪い……」

しかし、文句は延々と続く。光があれば影もある。多いのは救った人だけとは限らないのである。

「いい加減にしろよ、社会のゴミ共が！　お前らはポケモン共々、居るだけで迷惑なんだよ！　生きる価値なんて無いんだから、さっさと死ねよ、社会の為に！」

「「そうか……」」

ボブの暴言に、文句を言っていた人たちが静かになり、

『『『『言われなくても、もう死んでるよぉ！』』』』

動き出した。最期の姿、そのままで。全身がずぶ濡れな者、ガリガリに痩せ細った者、身体中が捩じくれた者、バラバラの肉片になっている者――――形は様々だが、皆一様に恨めしい、苦悶の表情を浮かべている。

この世の全てに絶望し、ボブを呪って死んだ事が丸分かりだった。

そう、彼らはボブの活動によって、相棒や友人を失い、自らを殺めてしまった者たち。関わった人間の中では少数派だろうが、確かにいたのだ。そう言った人々が。

「うわぁあああああっ!?」

その悍ましい姿に、ボブが悲鳴を上げた。

地獄はまだ、始まったばかり。

「えっ……!?」

だが、一瞬だけ目の前が真っ暗になったかと思うと、悍ましき亡者共は消え、再び一人切りとなった。

「一体どう……なぁっ!?」

さらに、今回は殆ど裸にされた。身に纏っているのは、汚らしい布が一枚だけ。

（この布は……！）

それはボブが今よりもっと幼い頃――――家族を失い、独りぼっちで生きていた時、身に付けていた物。

ゴミ箱に捨てられていた、誰の物とも分からぬ布切れだったが、当時のボブは服さえ真面に揃えられなかったので、こんな物でも有難かった記憶がある。

……記憶がある？

（もしかして……）

そういう事、なのか？

おそらくだが、この列車の内部は、ボブの記憶を基に形作られている。よくよく見れば、この車両も家族が健在だった頃に乗せてもらった物とそっくりである。確か廃線前の最後の運行に乗り合わせたのだった。

そして、今まで出遭った亡者はボブが過去に関わりのある者たち。これで記憶ではなく、偶然が重なっただけだとしたら逆に怖い。それこそ、本当に対処の仕様が無くなる。

（先ずは桜で盛り上げて、次に亡者の群れで不快にさせたとなると……）

次は本格的に苦しめ、恐怖させに来るだろう。今までの傾向からして、己が無力であると思い知らせて絶望させる事が目的だと思われる。ここでほんのり優しくしてやる理由はない。

では、今度は何で攻めて来るのか。

一番可能性が高いのは、ボブにとってのトラウマ――――――、

『ゼニィ……』『カゲェ……』『ダネェ……』

「……！」

やはり、ポケモンで攻めて来たか。ボブにはこれ以上ない絶望となるだろう。何せ家族を奪った仇敵に、丸腰で襲われるのだから。

さらに、この3匹はボブが今よりもっとずっと荒れていた頃に、八つ当たり同然にトレーナーから引き剥がした奴らだ。確実に恨まれている。殺意も一目見ただけで感じる程に高い。

「うぅぅ……っ！」

ボブは逃げ出した。過去のトラウマから。己の罪から。是が非でも認めず、自分

自身と向き合う気が一切無いのである。着の身着のままで挑むには荷が重いから、間違ってはいないが。

しかし、そんな逃げの一手が認められる程、この電車は甘くなかった。

『ギャルァアアッ！』『ニュァァ……！』『カァーッ！』『キィキィ！』『ガヴヴヴッ！』

行く手を阻む、ボブがトレーナーとの絆を断ち切って来たポケモンたち。どいつもこいつも深手を負い、苦しみながら死んでいったのが分かる。ピクシーリングの力とはそれ程までに素晴らしく、どうしようもない代物なのだ。

「……認めないぞ！　絶対に！　ボクが悪くないと言ったら悪くないんだ！　お前らポケモンは、害虫以下のゴミ虫野郎だぁっ！」

だが、追い詰められ過ぎて窮鼠猫を噛む状態となってしまったボブは、逃げるのを止めた。そこそこ高い身体能力でポケモンたちへ飛び掛かる。

『ギャヴォオオッ！』「うぐぅ……っ！」

しかし、所詮は負け犬の遠吠え、引かれ者の小唄、虚勢を張った潔くない空威張り。ただの子供が、ポケモン軍団に勝てる訳が無かった。一瞬で返り討ちに遭い、

ボコボコのボロボロにされる。全身至る所に傷が付き、骨が何本か折れている。本来なら骨も残らず死ぬ所だが、出来るだけ長く苦しめたい彼らが手加減してくれているおかげで、何とか生き延びていた。虫の息である事に変わりはないが。

「う……ぁ……うぅぅ……助けて……セレンさん……皆ぁ……！」

涙を流し、鼻水を垂らし、下を漏らし、弱音を吐いて、力なく這いずるボブ。手足が曲がってはいけない方向へ折れている為、本当にその場で蠢いているだけである。まるで芋虫ポケモンだ。

もちろん、誰も助けてはくれない。ここは地獄。ボブを苛め倒し、息絶えさせる為だけに用意された、釜の底。希望など、ある筈も無かった。

「――――まったく、だから言ったでしょう。そんなやり方じゃ潰れてしまうって」

「え……セレンさん？」

だが、そんな惨めなボブに、柔らかな声が掛かる。それはここに居るはずのない、ネオ・ボランティアの中間管理職のお姉さん――――セレンだった。

「セレンさん……！」

最後の力を振り絞り、思わず縋り付くボブ。
ボブにとって、セレンは育ての親だ。ネオ・ボランティアとしてのイロハを教え、一人前にしてくれた恩師である。彼女がいたから、ボブはここまでやって来れた。彼女がいなければ、生き延びる事さえ出来なかっただろう。
むろん、車両の特性上、このセレンが本物である訳がない。単なる夢幻の影でしかないのだ。
それでも、手を伸ばさずにはいられなかった。やはり、子供には親が必要なのである。
それもまた、この悪魔の思い通りでしかなくとも。
「そんな悪い子は、きちんと叱ってあげないとねぇ！」「ぎゃあああああっ！」
必死に伸ばしたボブの手を、セレンが踏み付ける。とても楽しそうな笑顔で。
「やっぱり、偽物なのかよ……！」
分かってはいたが、やはり悲しく、悔しい。こんな物を見せる為に、わざわざ恩師の姿を借りたというのか。
「偽物？　何を言っているのかなぁ？」

しかし、現実はもっと残酷かつ非情で、悪意に満ちていた。

「君の知ってるセレンという女は、数ある私の顔の一つでしかないよ。何せ、私は〝千の貌〟を持つ女だからねぇ」

セレンの美しい顔が、メタモンみたいに素朴で間抜けな可愛らしい顔に変わる。顔の次は体形と服装までも変わり、ちょっと小さめの道化師風の女性になった。

「え……え……？」

これは一体、何だ？

「お、お前、一体何なんだ……!?」

「私ぃ？　私はトゥハーデ鉄道の駅員、モルフォード・タメリスク。だが、それは世を忍ぶ仮の姿。時には花屋、時には受付嬢、あるいはとある地方のチャンピオン。しかして、その正体は――――」

そして、顔を半分だけ仮面を隠し、高らかに宣言する。

「スマイル団の団長、ダース・マリアボラスだよ！」

「ダース・マリアボラス……？」

それはスマイル団の首領。団員の特徴である〝ピエロ風の恰好〟という事以外は、

顔も体形も年齢も何もかもが釈然としない、謎だらけの人物。

だが、これなら納得だ。こんなにも簡単に容姿を変えられるなら、素性不明なのも頷けるし、捕まらないのも当たり前である。

しかし、それが分かった所で、ボブにとっては凶報でしかなかった。何せ死神が大鎌を持って目の前にいるようなものなのだから。

「何で……？」

「それは、私がどうしてセレンとしてアナタに接していたのか、という事かしら？　それとも、どうして今更になって正体を表してまで、アナタを閉じ込めた事について気になった？　言ったでしょ、最後のチャンスだって」

「……！」

マリアボラスの言葉に、ボブはハッとする。

そう、それは旅に出る直前に送られた言葉。

「――――アナタはよく頑張ってるわ。でもね、流石に遣り過ぎよ。結構な苦情が来ているし。だから、少し気持ちを切り替えると思って、あの子たちと一緒に旅をして来なさい。これはある意味、最後のチャンスよ」

あれは〝ネオ・ボランティアをクビにする〟なんて生易しい物ではなく、〝お前を殺す〟という意味だったのだ。それを可愛い子には旅をさせよみたいなノリと表情で告げるなんて、頭がイカレている。

「止めてよ……助けてよ……」

「アナタはそう訴えたトレーナーやポケモンたちを助けてあげたのかしら？」

「……！」

ぐうの音も出ない。

結局、ボブは社会の為だ正義の執行だのと言って、過去のトラウマに対する憂さ晴らしをしていただけなのである。それをわざわざ映像と演出で分からされたのだから、最早ボブの心は粉砕骨折だ。

「悲しい？　苦しい？　ごめんねぇ、知ってたわ～♪　だからこそ、待ちに待って、この日を迎えた訳よ～♪」

『オオォォ……』『あぁぁぁ……』『憎い……ニクイ……』『グゥゥゥ……』

さらに、マリアボラスの合図でポケモンや亡者が再びボブを痛め付けようと――

――否、止めを刺そうと、寄って集って来る。手加減をしてくれそうな様子は

もう無い。遠慮容赦なく殺しに掛かって来るだろう。

「ジェライジン、「オーバーブースト」！」『ジェァアアトォッ！』

だが、悪意タップリの袋叩きが敢行される前に、車両の屋根と壁の一部が吹き飛んだ。驚いて上を見上げれば、ウルファングの進化形であるジェライジン（おうがのすがた）と、それに跨るアマレの姿が。

王牙の姿のジェライジンは、はがね/ほのおタイプの「えんらいポケモン」で、ダイアウルフに鋼の鎧を着こませたような姿をしており、素早さこそウルファングと大して変わらないが、それ以外の能力が大幅に上昇している。その上、「オーバーブースト」という専用技で浮遊状態となって、フィールドを焼き尽くして「マグマフィールド」を展開する能力まである。まさに王の牙と呼ぶに相応しい貫禄と言えるだろう。

ちなみに、条件を変えるとルガルガンの如く「がろうのすがた」という分岐進化をするポケモンでもあり、そちらはいわ/ほのおの速攻型である。どちらを選ぶかは持ち主の好み次第だ。

しかし、今はそんな事はどうでもいい。彼女がジェライジンに跨って馳せ参じた

という事は、ボブにもまだ希望がある事を意味している。

「ウルファング、あの子を掻っ攫え！　「れんごく」！」『ウルファアアッ！』

そして、後ろに控えていたと思われるアデルとウルファングが、煉獄で周囲の亡者やポケモンたちを薙ぎ払いつつ素早くボブを回収し、即座に離脱した。

「……どうして？」

「アンタが必要だからよ。それ以上でもそれ以下でもない」

息も絶え絶えに疑問を口にするボブに、アデルが素っ気無く答える。おそらく、過去の所業を知っているのだろう。同情も憐憫も向けず、ただ使い道があるから、利用する為に手を差し伸べる。実に人間らしい手前勝手な理由である。

「それでも……ありがとう……」

だが、善意に見せ掛けた悪意に晒され、文字通り地獄を見せられたボブにとって、その冷たさが逆に心地よかった。見返りの無い優しさなど、所詮は薄っぺらなのだ。

「……ッ、お礼を言うのはまだ早いみたいよ！」「うぁっ!?」

「逃がすとでも思っているのかしらぁ～ん？」

　すると、大脱出で大団円など認めない、マリアボラスが炎の中から飛び出して来た。キッチリ煉獄に巻き込んだ筈なのに、掠り傷一つ付いていないとは驚きだが、今更屋根に出て来てどうしようと言うのか。
「そぉい♪」
『ウルゥッ！』「くっ……煉獄さん！」「アデル……！」
　と思ったら、マリアボラスは一瞬で大鎌を装備し（どっから出した!?）、それを投擲して空を駆けるウルファングに命中させた。ウルファングが苦悶の表情を浮かべ、衝撃でアデルが落下する。ボブは当たる直前にアデルが煉獄さん……ではなく、アマレに投げ渡したので無事だった。怪我のせいでこっちも苦痛の顔だったが。
「ウフフフ、私はダース・マリアボラス。聖母様だろうと食らい尽くす、闇黒の支配者なのよ」
　車両の上に落下したアデルに、マリアボラスが凄惨な笑みを浮かべて襲い掛かる。おおきく鎌を振りかぶって。
「悪いけど、私はアンタより怖い奴を知ってるのよ！」「なっ……白刃取りだと!?」
　しかし、脳天目掛けて振り下ろされたそれを、アデルは白刃取ってみせた。

「竜巻旋風脚！」「ズワォッ!?」

さらに、刃を掴んだまま二連続で回転蹴りをして、一発目で刃を根元から叩き折り、二発目でそれをマリアボラスの眉間に突き立てた。この間０・１秒の神業である。叩き上げでベアード軍最高司令官になった実力は伊達ではない。子供の頃からアデルはやる時はやる奴なのだ。

「ビックリした……面白いわねぇ、アナタ」

だが、そこまでやっても、マリアボラスは笑って済ませた。まるで新しい玩具を見付けた子供のようで、心底楽しそうである。

「アデルくん！」「……！」

ただし、素直に突っ立っている筋合いは無いので、アマレの手を借り、今度こそアデルたちは地獄の幽霊電車から離脱した。

「今回はアナタに免じて見逃してあげるわ。ジェフリルにも撤退させるように言っておく。あの時も言ったけど、ボブの事、よろしく頼むわね～♪　……次は無いから」

セレンの顔をチラ見せしながら、手を振るマリアボラスを背にして。

そして――――――、

◆ハービィ
・ティアーザ図鑑№025
・分類：はちどりポケモン
・タイプ：フェアリー/ひこう
・性別：あり
・特性：みつあつめ/ハミングボイス（隠れ特性）
・種族値
HP：45
こうげき：49
ぼうぎょ：42
とくこう：49
とくぼう：42

すばやさ：92

・図鑑説明

奇麗な森の奥で、美しい声で鳴く。発達した胸筋と翼の力でホバリングする事ができ、その状態で花の蜜を吸う。吸収した糖分を１００パーセントエネルギーに変える事で、驚異的な飛翔能力を得たのだ。

花の蜜なら何でも好きだが、吸い付く花の種類によっては身体に毒を溜め込み、それを武器として扱う事もあるという。体色が紫に染まる程に毒を吸収したハービィは、進化の時が近い。

鳴女さん、マッタネーンシティへ

今回は大都会。

「――――――ハッ!?」

『いよぉ、お目覚めか、ボブ助ちゃん』

そして、ボブが目を覚ました。

はいさいホウエン☆メラゾ～マ♪　ポケモンマスターに俺は成りたい、訳じゃない、鳴女さんだ。

ポケモン苛めが大好きなあまり、スマイル団のジェフリルくんさんの逆鱗に触れてしまい、殺されそうになった所を煉獄擬きとアデルに庇われる形で逃げ出したら、その先の駅でスマイル団の団長であるダース・マリアボラスの術中に嵌まり、悪夢に囚われている状態になっていたボブだが、何だかんだで無事に生還出来た模様。

正直な所、この馬鹿は見捨てても良かったんだけど。

しかし、アデルによると、このお馬鹿さんは重要な人物らしいので、仕方なく助けるのを認めてやったのである。そうじゃなきゃ、ジェフリルと一緒に処刑してたよ。

まぁ、命拾いしたならしゃーない。見捨てないでやろう。

「……！」

「えっ、あ……ボブくん？」

だが、私が近付くとボブはビクリと跳ね起き、アデルの後ろに隠れてしまった。

夢から覚めるまでの間に、私の所業を聞き及んでいたのかな？

ま、どうでも良いさ。

それより、せっかく駅まで来たんだから、次の町に行こうぜ。

『おら、さっさと次の町に行くぞ』

「おお、行くのか！　気を付けてな！」

『はいはい……』

本当に煩いな、アマレは。

というか、ジェフリルの側に靡いた事に対して怒ったりしないのだろうか。

「良い事だとは思わないが、所詮は何が正しいのか決めるのは人それぞれだ！　君はジェフリルと共に罰を与えるのを良しとし、オレとアデルくんは悪とした！　だから、それぞれが行動し、結果的にこうなったというだけの事！　叱るも何もない！」

『さいですか』

良い大人ですね。

「――――そして、それは君にも当てはまるぞ、ボブくん。何が正しく、間違っているのかは、自分で決めろ。ただし、後悔の無いようにな」

「はい……」

急に静かに語るアマレに、ボブが気まずそうに頷く。本当に分かってんのかね、こいつ？

「さぁ、今度こそ旅立つがいい、チャレンジャーたち！　世界は君たちが冒険する事を楽しみに待っているぞ！」

『はいはいはいはい、煩いからもうちょっと静かに言えよ！』

「それでは……」「……失礼します」

こうして、私たちはようやく次の町――――「マッタネーンシティ」を目指して、電車に乗り込むのだった。

……こんな絆の「の」字も無いような状態で旅立っちゃって、大丈夫なんかねぇ？

◆◆◆◆◆◆

鳴女たちが序盤の一大イベントをクリアした頃、現実では1時間も経っていなかった。静かに眠る鳴女とアデルの傍で、ベア子が冒険の成功を祈っている。

「おやおや、随分とお楽しみのようっスね」

と、扉も開いていないのに、何時の間にかチャラトミが現れた。

『どうやって入ったの……？』

「それはもう、通気口の隙間からチョチョイと」

『サンタナかよ』

ようするに、柱の男式折り畳み入道術で潜り込んだらしい。もしくは遊星からの物体Xかスライム的な感じ。何れにしろ、もはや人間を辞めてしまっている。鬼と遊べば鬼となる、という事か。こいつの場合は夜遊びだが。

『……取り返しに来たのですか、鳴女さんを』
「いやいや、一緒に見学でもしようかと思ってね」
『……』
ベア子としては、知らぬ間に居なくなった鳴女を取り戻しに来たのかと思ったのだが、当てが外れた。単に冷やかしに来ただけらしい。
『何もしないんですね、アナタは……』
そんな彼を訝しんだベア子が、ポツリと呟く。バックベアードは何も言わない。ヴィクターは作業に集中している。
「信じてますからねぇ、彼女を」
チャラトミは柔らかな笑みを浮かべながら、力強く答えた。その眼は空のように澄んでいる。何の迷いもない。
『どうしてそこまで断言出来るんですか？』
ベア子には分からなかった。己の愛した女が敵の手中に落ち、夢の中に閉じ込められているというのに、この落ち着きようは何なのか。このまま目を覚まさない可能性だってあるだろう。

そもそも、彼は鳴女がどうしてこんな状況になっているのか、分かっているのか？

「むしろ、何で君は断言してやらないんだい？　こんな大掛かりな事までしてさ。……鳴女さんが寝る前に言ってたけど、アデルさんは色々と誤解してるんでしょ？　本当はちゃんと頼まないと、妹さんが生贄になるのにさぁ」

しかし、チャラトミは全てお見通しだった。その上で、高みの見物に来たのである。

『悪魔ですね、アナタは。鳴女さん共々……』

他人の不幸を心底愉しむ彼の姿に、ベア子は思わずそう吐き捨てた。本当に、人間というのは悪魔だ。

「違うね。俺たちはヴェノムだ》

チャラトミがヴェノムになりつつ否定する。

《愛する者には幸せを願い、赤の他人には不幸を望む。それが人間様なのさ》

さらに、人間の屑としか思えない発言をした。チャラトミというよりカストミである。

『随分とまた最低な事を言いますね』

《人間、突き詰めればそんな物だよ。ま、君は愛する者を信じ切れてはいないようだけどねぇ》

『それは『それは違うぞ、チャラトミよ』

すると、ここでバックベアードが初めて口を出した。

《何がどう違うんですか？》

『大切な者だからこそ心配し、手を差し伸べるのだ。それ以前に、私はこやつの上司。部下の尻拭いをするのが責任者の役目だ。ここで何もしない無能は、存在する価値が無い』

まさに責任者の鑑。こんなに良い上司がいるだろうか。

《へぇ、良い大人ですねぇ》

まぁ、そんな事は屁とも思わないのがチャラトミなのだが。

彼は知っているのだ。人間は悪魔に信頼関係を問われる程、他人を信用してはいないと。チャラトミも所詮、面白半分でここに来たのだから。

だが、鳴女が全てを乗り越え、解決してみせると信じているのは事実である。

だって、彼女は本当の悪鬼羅刹なのだから。自分が唯一心の底から畏怖し、愛した女なのだから。

《ま、俺は何もしませんよ。精々愉しませてもらいましょうか》

◆◆◆◆◆◆◆

タリラリラ～ン♪　無惨様のママなのだ～♪

さて、私たちは今、マッタネーンシティ行きの電車に乗っているのだが、

「ムコニャ、「クロスポイズン」！」『ムニャァッ！』

『ゲハァアン！』「くそっ……戻れ、アゲハント！」

実はこの電車、バトルサブウェイよろしく、ポケモンバトルが出来るのだ。

というか、各駅以外は車両内で勝負する事が可能らしい。集落同士ならまだしも、都市間の運行距離はとんでもなく長いからな。

そんな訳で、車両自体がかなり広くて大きく造られており、トレーナーたちはバトルに勤しみ、それ以外の者も思い思いの時間を過ごせるようになっているのだ。ある意味ホテルである。

ちなみに、今の面子はこんな感じ。

《私のメンバー》

◆ボルデビサス（いわ/くさ）　Ｌｖ２６（♀）：「ストーンロール」「そらをとぶ」「ソーラースラッシュ」「ソーラーレイ」

◆ヨルウィ（むし/くさ）　Ｌｖ１９（♂）：「せいちょう」「メガドレイン」「まもる」「むしくい」

◆ハービィ（フェアリー/ひこう）　Ｌｖ１９（♀）：「どくガス」「メガドレイン」「エアカッター」「チャームボイス」

◆アズレーン（くさ/みず）　Ｌｖ２５（♀）：「みずのはどう」「メガドレイン」「アクアリング」「あまごい」

◆ムコニャ（あく/どく）　Ｌｖ２１（♀）：「クロスポイズン」「つじぎり」「ねこだまし」「ちょうはつ」

◆ティアーザレディアン（むし/かくとう）　Ｌｖ１８（♀）：「マッハパンチ」「むしくい」「みきり」「ビルドアップ」

《アデルのメンバー》

◆ウルファング（いわ/ほのお）　Ｌｖ２５（♂）：「アクセルロック」「はじけるほ

のお」「パワージェム」「そらをとぶ」

◆クラトン（いわ/みず）　Ｌｖ２１（♀）：「ストーンバレット」「アクアジェット」「まもる」「なみのり」

◆シダッパ（くさ）　Ｌｖ２２（♂）：「きりさく」「はっぱカッター」「たくわえる」「バブルこうせん」

◆イオーム（エスパー/ひこう）　Ｌｖ２２（♀）：「ねんりき」「チャームボイス」「かぜおこし」「うたう」

◆ティアーザアリアドス（むし/あく）　Ｌｖ２０（♂）：「だましうち」「むしくい」「いとをはく」「かげうち」

◆ジャカロップ（フェアリー）　Ｌｖ１８（♀）：「つのでつく」「おねだり」「ドレインキッス」「つきのひかり」

うむうむ、順調に育ってくれているようで何より。平均レベルは20以上だし、エースは25レベルに達しているので、次のジムに挑んでも問題は無いだろう。

『ちなみにだけど、次のジムって何タイプ使いなの？』

一勝負終えた私はローストビーフのフルーツソース掛けを頬張りつつ、アデルに

尋ねた。創造主様の先取り情報を教えてもらおうじゃないか。
「マッタネーンジムはでんきタイプの使い手ですね。ジムリーダーはホウセン。とても派手な人物だと聞いています」
『派手な人物ねぇ……』
トゥハーデジムが煉獄擬きだったから、凄く心配なんだけど。音技使ってきそう。思わず特性「ぼうおん」が欲しくなる。
『どうしよう、じめんタイプが欲しい』
「エミューンとか捕まえてみます？　バッチ1個持ってるから、20以下だったら捕まえて良い筈ですけど」
『うん？　捕まえられるレベルとか決まってんの？』
「はい。ガラル地方と同じで、捕まえられる上限が決まってるんです」
『ふーん……』
なら、途中下車――――あ、これ特急だから出来ないんだった。
「あ、そろそろ着きますよ」
とか何とか言っている内に、マッタネーンシティが見えてきた。

『凄い大都会だな』

トゥハーデシティのようなナンチャッテではない、マジもんのメトロポリスだった。流石はブリスベンがモデルになっているだけはある。自然もそれなりに豊かだし、ポケモンもたくさん生息してそうである。

「あの、すいません！」

『うん？』

と、新天地に想いを馳せていたら、ピクニックガールが声を掛けて来た。

「あなた、さっきレディアン持ってたよね？　良かったら、私のパイモンドと交換しない？　私、むしポケモンが好きなんだけど、なかなか捕まえられなくて……」

『なるほど』

その手があったか。交換もまたポケモンの醍醐味だよな。

『良いよ』「やった！　じゃあ、パイモンドをよろしくね！」

という訳で交換しまーす。

『やったー、パイモンドを手に入れたぞー』

「何でそんなに棒読みなんですか？」

『使い道が次のジムくらいだからだよ』
ま、それもまた夢と冒険の常という事で。
「それじゃあ、降りますか」
『あいよー』
そんな感じで、手持ちに若干の変更がありつつ、私たちはマッタネーンシティに到着した。
『とりあえず、ジムに挑むか』
「早いですねー」
『私はサクサク行きたいんだよ』
という事で、一番最初にジムの門戸を叩く。観光なんぞ後でいいんだよ。
いざ、マッタネーンジムに挑戦……と言いたい所だが、
『先ずはお前が行け』
「え、何でですか!?」
『トゥハーデジムでは私が先陣切っただろ。だから、今度はお前が生贄になれ』
「生贄って……」

いや、生贄以外の何物でもないだろ。それいけ、アデルちゃん！

「頭が欠けそうなんで止めて下さい」

『それはそれで面白いと思うけど？』

「ギャグに命を懸ける気は無いです」

という事で、アデルのマッタネーンジムへの挑戦が始まった。

このジムは都市の中心部にあり、ミッションコーナーの大きさもさる事ながら、ジムリーダーと戦うスタジアムに至っては、トゥハーデスタジアムの数倍はある。派手好きにも程があらーな。

「ま、とりあえず行ってきます」『行ってら～』「……頑張って」

そして、私とボブの声援を背に、アデルが挑む。

このジムのミッションは……何とリズムゲーム。行く手に待ち構える３人のトレーナーとダンシングでレボリューションして、勝てればそのまま通って良いという、優しいんだか厳しんだかよく分からない仕様である。

「き、来たわね！　あたしはスマ！　ポケモン勝負は苦手だけど、ダンスなら負けないんだからぁ！」

第一のトレーナーは対魔忍みたいな恰好のバトルガール、スマ。えらく情けない事を言っているが、こんなのが先鋒で大丈夫なのか？

「望む所です！　コテンパンに伸してやりますから！」

挑んじゃうのかよ。普通にバトルしろよ。

「びぇえええん、負けたぁ！」「口程にもありませんねぇ！」

勝っちゃうのかよ。バトルしなさいよー。

あと、観客の黄色い声援が煩い。スマが（泣き顔は別として）美女なのは認めるし、そんなのが対魔忍みたいなあ恰好でオンステージしていれば興奮するのも已む無しだろうけど、サイリウムを振り回してまで応援するな。

ちなみに、使用曲は「ｏｎｌｙ　ｍｙ　ｒａｉｌｇｕｎ」。狂いなく超電磁砲をぶちかましそう。

「次はアタシよ！　このマキヲがお前を潰してやる！」

お次は花魁っぽい衣装のバトルガール、マキヲ。ちょっと情けなかったスマとは違い、凛とした美しさが特徴的だが、結局はＲ-15指定は食らいそうな恰好なのは変わりない。

「良い度胸ですね、この私に挑もうなど。そんなお馬鹿さんは、痛い目に遭って貰いましょう」

何で戦闘力53万くらいのノリで返したんだ、アデルよ。

「負けた……！」「ホホホホホ！」

しかも勝つのかよ。何なんだお前は。ポケモンの情報が全然入って来ないぞ!?

余談だが、使用曲は「ＬＥＶＥＬ５-ｊｕｄｇｅｌｉｇｈｔ-」。相当激しい曲調だけど、よく疲れないなぁ……。

「最後は私、ヒナツルが相手をするわ。華麗に舞ってみせましょう！」

最後は何故か食堂の女将さんを思わせる格好のバトルガール、ヒナツル。神の舌を持ち、鉄鍋でジャンジャン料理しそうな見た目だが、そんな有様で踊れるのか？

「受けて立つ！」

さっきとは打って変わって、力強い啖呵で返すアデル。良い汗掻きやがって。いい加減、一回くらい負けろよ。何の為にリリースしたと思ってるんだ。

蛇足だけど、使用曲は「ｆｕｔｕｒｅ ｇａｚｅｒ」。未来さえ撃ち抜いていけ。

「やりますね。……しかし、僅差ではありますが、私の勝ちです！」「くっ……良

い勝負だったわ！」

いや、良いポケモン勝負をしろって言ってんだよ。今からするみたいだけど。

「それでは、今度はポケモン勝負で幕引きとさせて頂きます！」

――――バトルガールのヒナツルが勝負を仕掛けて来たッ！

「行きなさい、チョンチー！」『チョンチョン♪』

おっ、ヒナツルのポケモンはチョンチー（Ｌｖ２３）か。ピカチュウとかじゃないんだ。

「頼むわよ、シダッパ！」『ハッパーッ！』

対するアデルはシダッパ（Ｌｖ２３）。不思議な飴を使っていたおかげで同レベルである。タイプ的にアデルの方が有利かな。技マシンで冷凍ビームとか覚えてたら終わりだけど。

いや、流石にそれは無いか。まだ二番目のジムだしね。

「チョンチー、「でんじは」からの「あやしいひかり」！」『ビチョチョチョチョッ！』

割とガチだった。麻痺と混乱を撒くな。

「くっ……頑張って、シダッパ！　「はっぱカッター」！」『ウゥゥ……ハッパーッ！』

「なっ!?」『チョォーン！』

しかし、アデルとシダッパの絆は相当に深いようで、痺れと眩暈に悩ませられながらも、シダッパは葉っぱカッターをチョンチーにヒットさせた。それも初代を彷彿とさせる急所に当たるカッターだ。

「チョンチー、「スパーク」！」『チョチョチョーイッスゥ！』

「耐えろ、そして「はっぱカッター」！」『ハッパッパァッ！』

『チョアッー！』「うぐっ……戻りなさい、チョンチー！」

さらに、反撃のスパークにもシダッパはギリギリで耐えきり、もう一度葉っぱカッターで急所を引いてチョンチーを倒した。素晴らしい豪運である。

さて、ヒナツルの最後の手持ちは何かな？

「任せたわ、オクタン！」『キャノォオオン！』

――――オクタン!?　オクタンって言ったか、今!?

ああ、うん……確かにオクタン（Ｌｖ２６）だわ。でんきタイプの「で」の字も

無いけど、あの蛸っぽい姿はオクタンで間違いない。それ以外は全て間違ってるけど。

「止めよ、オクタン！　「でんじほう」！」『キャノァアッ！』

その上、電磁砲で止めを刺してきた。煉獄に続き、とんでもないロマン砲を搭載していやがる。

「くっ……行って、ウルファング！」『ウルファァアアッ！』

「無駄よ！　オクタン、「オクタンほう」！」『キュアァッ！』

しかも、きちんとみず技も覚えているようで、アデルのエースたるウルファングを早々に倒してしまおうと、自身の代名詞的な技で砲撃する。

「させない！　ウルファング、「そらをとぶ」からの「パワージェム」！　そして「アクセルロック」！」『ウルルルルゥ！』

だが、ウルファングは素早い動きでオクタン砲を回避し、そのまま空へ退避してから、パワージェムとアクセルロックで一気に攻め落とした。

「……負けました。先にお進みください。ホウセン様がお待ちです」

「はい。それでは、失礼します」

そして、いよいよジムリーダーに（アデルが）挑む時が来た。
果たして、ホウセンはどんな人物で、如何なる戦術を繰り出して来るのか。
「来やがったな。この俺様の妻たちを倒すとは、中々やるじゃねぇか。派手に褒め称えてやるぜ」
スタジアムの中央に、腕を組んで仁王立ちしている、筋骨隆々な背丈の高い女。おそらく１９８センチはあるだろう。袖無しの忍装束に身を包み、輝石をあしらった額当てで髪の毛をターバン状に纏め、背中には月牙天衝しそうな二本刀を差している。
まぁ、何と言うかね、
『地味に性転換してんじゃねぇぞ、宇随ぃ』
「誰が地味だこの野郎！　つーか、外野は黙ってろや！」
うるせぇんだよ、女宇随め。アマレといい、何で男じゃねぇんだよ。
……いや、今は奴の手持ちを知る方が重要だ。ここは我慢して黙っておこう。
「さて、ちょっと邪魔が入ったが、真剣勝負をする事に変わりはねぇ。俺様の譜面を前に、派手に散れぇ！」

――――――ジムリーダーのホウセンが勝負を仕掛けて来たッ！
「派手にぶちかませ、ストリンダー！」『ウッシャアアアッ！』
……って、ストリンダー!?
こいつ、初手からハイなストリンダー（Ｌｖ３０）を繰り出して来やがった。イメージに相違は無いけど、少しは手加減しようよ!?
ヤバい、悠長にアデルが三枚におろされるのを観戦している場合じゃねぇ。
『……という事で、さらばだとっつぁ～ん！』
「「ゑ？」」「えー……」
こうして、私は挑む前に敗北を悟り、戦略的撤退を図るのだった。

◆アズレーン
・ティアーザ図鑑№０６０
・分類：くさくらげポケモン
・タイプ：くさ/みず

・性別：ふめい
・特性：ほうし/うるおいボディ/あめふらし（隠れ特性）
・種族値
HP：127
こうげき：47
ぼうぎょ：113
とくこう：73
とくぼう：113
すばやさ：17
・図鑑説明
ジメジメした森の奥に潜む、未確認飛行物体。海月のように見えるが、実は茸に近い生物であり、プカプカと宙を漂いながら胞子を蒔く。森の湿度が下がると何時の間にかいなくなってしまう。森林を爆砕するメライカとは仲が悪く、出合頭に攻撃を仕掛ける。逆に繁殖を助けてくれるナツクボウシとは共生関係を築いている。

鳴女さんのマッタネーンジム攻略

でんきタイプの使い手って割と色物が多い気がスル。

マッタネーンシティはブリスベンをモチーフにしているから、当然だが海辺のポケモンが多い。

しかし、一番に多いのは、どくタイプのポケモンだろう。

メノクラゲにドククラゲ、エボシカツラやギルネックスなど、割と洒落にならん毒を持つ輩が沢山いる。マッタネーンジムもそうだった。

ならば、はがねタイプを用意して対抗すれば良いと思うかもしれないが、そうは問屋は卸さない。

何故なら、ティアーザ地方のどくタイプは〝必殺技〟を習得しているからだ。それが「アシッドレイン」と「アシッドクロス」である。

アシッドレインは文字通り〝酸性雨〟を降らせて攻撃する技（威力80／命中１０

０）で、30パーセントの確率で火傷を負わせる追加効果がある。それだけなら熱湯のどくタイプ版だが、何とこの技、はがねタイプに効果抜群を取る事が出来るのだ。

一方のアシッドクロスはアシッドレインの物理版であり、効果も完全に同じ仕様である。クロスポイズンを覚えられる奴なら大抵は習得出来るのも大きい。

この二大武器によってどくタイプは大幅に強化され、はがねタイプは肩身が狭くなってしまった。

特にクレッフィーやナットレイは実質的に４倍弱点を抱えてしまい、ティアーザ地方では採用率がかなり下がっているという。

つまり、毒を以て毒を制すのが、一番の対抗策と言える。

ストリンダーはでんきタイプも複合しているので、出来ればニドラン系統が欲しい所。それが無理なら、せめてじめんタイプが複合している何かが欲しい。

『……と言う訳で、お前、囮になれ』

「な、何で!?　放せ、放せぇ！」

『うるせぇ、早く死ね』

「うわぁあああああっ！」

という訳で、無理矢理引き摺って来たボブを森に放した。逃げられても困るので、ピクシーリングを没収しているけど、代わりにパイモンドを逃がした状態で未使用のフレンドボール（電車で貰った一点物）と一緒に預けたから、何とかなるやろ。

『パァイモォオンドゥッ！』「ひぅ……！」

……うん、これは駄目かもしれんね。ボールを構えるどころか、委縮して動けなくなってるもん。

でも、助ける気はない。使えないなら、せめて囮にはなってもらわないと。

『ブヴォオオオッ！』「あうぅっ！」

と、さっそくパイモンドが暴れ出した。このままこいつらがワチャワチャしていれば、好戦的なポケモンが寄って来る筈だ。

さぁて、何が出るかな～？

『ガニァアアン!?』

すると、さっそく「げんこつポケモン」のガニモンクが現れた。

クリスマスアカガニによく似たポケモンで、本来は孤島に棲んでいる種族なのだが、ペットブームで持ち込まれ、大陸のあちこちに生息域が広まったらしい。

だが、タイプはみず／かくとうの複合。欲しいポケモンではない。このままボブに頑張ってもらおう。

『ゲェンコツゥ！』『モンドァッ!?』

近くで暴れられて腹が立ったのか、ガニモンクがいきなりクラブハンマーを仕掛けて来た。パイモンドの無駄にデカい身体が吹っ飛ぶ。

うーん、弱い。流石は特殊版イワーク。

「うぅぅ……い、今の内に――――――」

『誰が帰ってきて良いって言ったよ』

「げはぁっ！」

逃亡犯がいたので、蹴り戻してやった。トレーナーがポケモンを見捨てちゃいかんでしょ（笑）。

「うわっ!?」『カニィイン！』

さらに、運の良い事にガニモンクの前に躍り出てしまい、標的がボブに変わった。偶然ではあるが、パイモンドを庇った形になる。感動的だね（笑）。

『ギギャギャギャ♪』

ほーら、ボルデビサスも鎌を鳴らして笑ってる。やーいやーい、ざまぁ見ろ～♪

「ううぅ……ポケモンの……ポケモンの癖にぃいいいっ！」『カニァッ!?』

しかし、ここでボブが火事場の馬鹿力を発揮。今までの鬱憤と悪夢で味わった絶望に対する八つ当たりとして放った体当たりからの突き上げが上手く決まり、ガニモンクの身体が宙に浮いた。

『モンドリャアアアッ！』『ヤナカニニィーッ！』

そして、空中で身動きの取れなくなったガニモンクに、パイモンドのアイアンテールがクリーンヒット。クラブハンマーで負わされた傷の恨みを晴らさんとしたその一撃はガニモンクを一発でKOし、ラブリーチャーミーな敵役の如く星に変えた。今夜は蟹座がハッキリと見られるかもしれない。

「……助かったよ」

『モンドゥ……！』

再び対面するボブとパイモンド。

だが、さっきとは打って変わって、何処か相手を認めるような、そんな瞳で見つめ合っていた。おや、これはもしかして？

「……良いの？」
『パイモォン！』
「分かった……」
予想通り、ボブの当てたフレンドボールに、パイモンドがすんなりと収まった。
ボブが初めて手持ちのポケモンをゲットした瞬間である。
『――――――って、囮になんなきゃ意味ねぇだろ、このクソカス共がぁっ！』
「理不尽っ！」『モンドォムヨォーッ！』
しかし、役割は全然果たしてないので、再度森へ追い立てた。その後もボブを囮にし続けたのだが、
「うひゃあああああっ！　た、たたた、頼むぅ、パイちゃん！」『パイモォオオンドォッ！』
単にボブの修行パートになっているだけの気がするのは、私だけか？
ちなみに、「パイちゃん」はパイモンドのニックネームであり、苦楽を共にする内にボブが自然と呼ぶようになった。
……いやねぇ、私もレベリングはしてるんだよ。

手持ちの平均レベルが30近くに達したし、ヨルウィ、ハービィ、ムコニャの4匹は、もう少しで進化レベルになる。条件付きの奴ばっかりだけど。

だが、お目当てのポケモンが中々出て来ない。私はじめんタイプが欲しいんだよ！

『マスタァアアアッ！』

「ひぃいいいいいいっ！」

しかし、私の願いも空しく、現れたのはガニモンクの進化形、ガニマスター（Ｌｖ２８）。

タスマニアオオガニの如くクソデカい蟹型ポケモンで、何とキングラーより大きい。ハサミはキングラーとは反対に右側が肥大化している。ステータスは見た目通りの重戦車で、攻撃力や防御面は高いが素早さは非常に低い。

タイプにかくとうが入っている上にキングラーと同程度の技範囲を持っているので、パイモンドでは荷が重いだろう。

まぁ、ガニモンクを瀕死にさせ過ぎたせいだから、ただの自業自得なのだが。

『ガニマタァアアアッ！』

とか言っていたら、さっそくガニマスターがクラブハンマーを繰り出して来た。いわ/じめんタイプかつガラス玉ボディのパイモンドが食らったら、瀕死を通り越して即死してしまう。本当に見掛け倒しだな君は。

「避けて、パイちゃん！　そして「ロックカット」！」『モンドァッ！』

だが、イワークと同じく、その見た目に反してパイモンドは意外と素早い。あくまで〝いわタイプとしては〟だが、それでもガニマスターには先手を取れる。

「続けて「いわなだれ」だ！」『パイモォオオオッ！』

『ガニギギッ……！』

さらに、ロックカットで高速化した上で岩雪崩を食らわせ怯みを狙うという、理に適った戦法で本来なら格上のガニマスターを翻弄している。

「よ、よし、今だ！　行け、ルアーボール！」『マスターベーゞ……』

そして、ゴミ箱に捨ててあったルアーボールを使い、２匹目の手持ちとなるガニマスターをゲット。

マッタネーンシティでは月に一度「ルアーボールセール」なるイベントが発生し、その日だけショップのおまけがルアーボールに変化する。似たようなイベントは各

都市で発生しており、場所ごとに違うガンテツボールが手に入る。
　そのせいか、ボブの手持ちはかなり豪華なボールに入っている。全部モンスターボールに収まっている私やアデルの面子とは対照的である。何気にバランスも良いし。
……って、違う違う。ボブの手持ち事情なんて、どうでも良いんだよ。
いい加減、手頃なポケモン、出て来いやぁ！
『……ん？』
その時、私の視界に〝ソイツ〟は現れた。
――――それから三刻程。
『「あ」』
私はマッタネーンジムの前で、アデルとバッタリ再会した。
「……今まで一体何をしてたんですか？」
『修行。そっちこそ、その様子だと勝てたようだな』
「はい、どうにか。お陰様でシダッパがジャラガンダーに進化しましたよ」
『おお、頑張ったじゃねぇの』

あのナゾノクサ擬きも進化してドラゴンになったのか。感慨深いなぁ……。

「勝てそうですか？」

『もちろん』

その為にレベリングをして、新戦力も手に入れたんだからな。

「……ところで、ボブくんはどうしたんです？」

『ん？　森に捨てて来たけど？』

「捨てて来たじゃないでしょうがぁっ！」

アデルはプラトーンみたいなポーズで叫ぶと、森へ向かってRダッシュしていった。

ま、そんな事より、いよいよ以て私自身がマッタネーンジムへ挑戦だ。

『頼もーっ！』

とりあえず、挑戦者用の入り口からジムへ進み入る。

「あっ、アナタはさっきの喧しい観客！」

『じゃかあしいぞ、スマキング』

「そんな妖怪みたいな名前じゃありませーん！」

先ずは一番手、対魔忍スマ。手持ちの強化具合を知りたいから、敢えて音ゲーには負けておいた。

余談だが、今回の曲は「ドラえもんのうた」だった。何でやねん。しかも、踊りではなく、太鼓を叩く破目になった。趣旨を変えるな。

「うへへへ、勝ちましたよ！」

『いや、わざと負けたんだよ』

「ムッキィーッ！　減らず口をーっ！　そんな悪い子は、あたしがお尻ペンペンしてやりますぅ！」

――――バトルガールのスマが勝負を仕掛けて来たッ！

「行けぇ、エボシカツラ！」『エボリューション！』

スマの先鋒はエボシカツラ（Ｌｖ２３）。

カツオノエボシをモチーフにしたポケモンで、触手の部分が電磁鞭のようになり、傘の部分に王蟲みたいな複眼が発生している。タイプはでんき/どく。

「殺ってこい、エルシアン！」『エルッシャォオッ！』

対する私の先鋒は「くろばポケモン」のエルシアン（Ｌｖ３５）。

ヨルウィの進化形であり、懐いた状態で夜にＬｖ３０以上にすると進化する。タイプはむし/あくの複合。全身が装甲で覆われ、頭に一本角が生えたラッフルズセセリのような姿をしており、色合いと凶悪な容姿のせいでバトラの成虫にも見える。

待ちに待った進化形態という事で、モルフォンもビックリな種族値の暴力具合であり、覚える技もメガホーン（進化時）、ナイトバースト（Ｌｖ３６）、破壊光線（Ｌｖ４８）、プリズムレーザー（Ｌｖ６２）と、全く以て容赦がない。補助技は若干物足りないが、蝶の舞を覚える時点で充分である。

さらに、こいつにはある秘密兵器がある。

「エルシアン、「だいちのちから」！」『ギャォオオン！』

「ウッソォ～!?」『エボラァッ！』

それが、この大地の力だ。流石は地球意思の生み出した破壊神。じめん技もちゃっかり覚えてくれる。むろん、じめんタイプが４倍弱点のエボシカツラなど、一撃必殺だ。

「うぬぬぬーっ！　こうなったら、お願いオトスパス！」『シャクトォオオッ！』

おっ、次はオトスパスか。オクタンを使うようなジムだからな。違和感はない。

でんきタイプのポケモンより明らかに強いけど。
だが、無意味である。
「エルシアン、「エアスラッシュ」！」『エンダァアアッ！』
「『オォーノォーッ！』」
バタフリーが覚えられて、エルシアンがエアスラッシュを使えない訳ないだろ！
という事で、初戦は問題なく突破。
「来たわね！　アンタの連れには負けたけど、やられっぱなしのアタシじゃないわ！」
お次は花魁道中のマキヲ。今回は普通に踊りだったけど、選曲が「オラはにんきもの」なのはどうなのか。結局はわざと負けるから、どうでも良いんだけどね。
「さぁ、今度はポケモン勝負でコテンパンにしてやるわ！」
『いよっ、人気者！』
「うるさーい！」
――――バトルガールのマキヲが勝負を仕掛けて来たッ！
「ヤッチマイナー、キデビル！」『デモォーン！』

マキヲの先陣を切るポケモンはキデビル（Ｌｖ２５）。
イエローデビルフィッシュによく似たポケモンで、でんき/あくという珍しい組み合わせのタイプを持っている。性能としては高速アタッカーであり、対を成すブルデビルよりも耐久力が低い。
「エルシアン、「メガホーン」！」『ギゴァアヴヴッ！』
『デビビビィーッ！』「ぐわばぁーっ！」
それはつまり、エルシアンに一撃で倒される、という事だ。
「クッソーっ！　仇を頼むよ、カラマネロ！」『ラクゥーケン！』
アッサリとキデビルが負けたのを受けて、マキヲが切り札のカラマネロを繰り出して来た。烏賊の癖に馬鹿力でビルドアップする脳筋野郎である。
「いや、普通に「メガホーン」するわ」『エンドォオオン！』
『イカァアアッ！』「イヤーン！」
もちろん、筋トレなんぞさせる間もなく、メガホーンで一発だ。本当に何なんだよ、このジムは。軟体動物を切り札に設定するなよ。
さて、続くヒナツルは手の内が分かっているので、普通にゲームに勝って先へ進

んだ。来るとは思ってたけど、何が悲しくて「サザエさんのうた」を熱唱せにゃならんのじゃーい。

そして、遂にこの時が来た。

『さてと……茶番劇はここまでにしようか』

「言ってくれるじゃねぇか。だが、その派手に高い鼻っ柱、今すぐにへし折ってやんよ！」

――――ジムリーダーのホウセンが勝負を仕掛けて来たッ！

「派手散らかせ、ストリンダー！」『ゲンキサンバァ～イ』

ホウセンの初手はもちろん、ハイなストリンダー……って、あれ？

『おまっ……何でロウなストリンダーになってんの!?』

「ジムリーダーは、対戦相手のレベルに合わせてポケモンをある程度（誤差が2レベル以内まで）変えられんのよ！」

『ズルい！』

「いや、ズルではねぇだろ……」

いいや、ズルい。何気にレベル35だし。技構成は「どく+でんき+音技+補助技」っ

て感じかな。

しかし、そっちがそう来るなら、こっちにも考えがある。選び抜き、鍛え上げた、私のポケモンを見るがいい。

『行け、エルシアン！』『ギゴァアアヴヴヴッ！』

私の一番手はエルシアン。大地の力で弱点を突けるからね。素早さでも勝ってるし、早々にストリンダーを倒して切り札を引っ張り出す。その上で〝新たな切り札〟で何もかも吹っ飛ばしてやるのである。

「ハッ、甘いんだよ！　「エレボリアル」だ、ストリンダー！」『ジュラアアアアアッ！』

『なん……だと……!?』『エルァッ!?』

だが、ここで予想外の事が起きた。何と後続ではなくストリンダーがレボリアルしたのだ。それも「エレボリアル」という、ダイマックスで言うキョダイマックス形態を披露して。

四つん這いだったキョダイマックスの姿に対して、こちらは二足歩行であり、尻尾が雷神の太鼓のようになっている。派手にカッコいい。

しかし、そっちがエレボリアルするなら、こっちだってレボリアルしてやらぁ！
『エルシアン、こっちも「レボリアル」だ！』『ギゴォァヴヴヴン！』
オラオラァッ、大怪獣バトルの始まりだぜぇ！
「フン……なら派手に痺れろ、「でんじほう」！」『バリバリッチャァッ！』
『ぐぉおおっ!?』『ゴアァアアアッ！』
くっ……何故、先手を!?
「エレボリアルってのは、一部の能力が二段階上昇した状態で固定されるんだよ！」
『マジかよ……！』
これでエルシアンは麻痺して、先手を取るのは絶望的――――、
『なぁんて言うと思うかぁ！　「クラボのみ」で麻痺を治癒して「ちょうのまい」！』
「何だとぉ!?」
持ってて良かった、クラボの実と蝶の舞（思い出し技）。これで速さは上回ったぞ！

『死ねぇ！　「ナイトバースト」！』『エルダァアアアアアッ！』
「ぬぐぉ!?　このっ……「エレボリアルベノム」！」『ドックラァッ！』
『うごはぁっ！』『グゥゥゥ……！』

エルシアンのナイトバーストがストリンダーを抉ったが致命傷には至らず、アシッドクロスを上書きした「エレボリアルベノム」で猛毒状態にされた上に、場を「ポイズンフィールド」に変えられてしまった。どくタイプ技の威力が上がる事に加え、どくタイプ以外はスリップダメージを受けるという、とんでもないフィールドである。

だが、死なば諸共よぉ！

『関係あるかぁ！　「エアスラッシュ」！』「「まもる」！」『この……「ナイトバースト」！』「ぐぉおおおっ!?」
『バリレナイィィ……！』『エンドォォ……！』

ストリンダーは何とか時間稼ぎをしようとしたが、一度蝶の舞を発動しているエルシアンの攻撃を受け切れる筈もなく、短期決戦のゴリ押しで道連れにする事が出来た。

これでお互いに1匹ずつ。文字通りのラストバトルだ。
「派手に勝って来い、ナマルゴン！」『ガヴヴヴァアアアアッ！』
ホウセンの大将はナマルゴン（Ｌｖ３６）。
鰭がアンテナになり、頭部にお化け染みた眼球が発生した、金色のクリオネと言った感じの姿で、タイプはでんき/ドラゴンという、ゼクロムと同じ組み合わせである。こちらは基本特性が雨降らしで、特殊アタッカー型だが。
「殺って来いやぁ、ラランテスぅ！」『しゃらんらしゃらんら～♪』
対する私は、さっき捕まえて進化まで漕ぎ着けた、ラランテス（Ｌｖ３４）だ。色違いの個体であり、本来ならティアーザ地方には生息していない筈なのだが、何故か森に1匹だけ佇んでいた為、レベルが制限ギリギリの19だった事も相俟って、衝動的に捕まえてしまった。
はっきり言って、見た目の華やかさと人気に反して、バトル性能は良くない。
しかし、私はこいつに惚れ込んだ。この何者にも縛られる気のない、自由で不貞腐れた瞳の色に。
それに、こいつはただのハナカマキリ擬きじゃないんだよ。

「吹き荒べ、ナマルゴン！」『ザァザアアッ！』

ナマルゴンの特性によって雨が降り始める。確かこいつ、「くもがくれ」とかいう意味不明な技を早い段階で覚えるんだよな。単体で使うとただの影分身だが、雨が降ってると最高段階まで回避率が上がるんだっけ。

だが、このラランテスは一味違うぜぇ！

『ラランテス、「にほんばれ」！』『しゃらら～ん！』

「何ィ、先制されただとぉ!?」

『こいつは「せんせいのツメ」を持ってるんだよぉ！』

※ムコニャが野生ポケモンから泥棒しました。

「くっ……「くもがくれ」だ！」『シュシュシュシュッ！』

やっぱり使って来たか。

しかし、雨が止んでいれば単なる影分身よ！

『食らいやがれ！　必殺、「あまのじゃく」の「ばかぢから」！』『シャラララァーン！』

「うごぉっ!?」『ナマァアアルッ！』

どうだこの野郎。カラマネロと違って両刀型だから、逃げ切れはしないぜ！
「この野郎！　「りゅうせいぐん」！」『ゴロゴロゴロォ！』
『ドワォ!?』『しゃらぁ～ん……！』
り、龍星群んんん～!?
テメェ、それがジムリーダーのやる事かぁ！
だが、流石に一発じゃ落ちないぞ。これで止めだぁ！
『ラランテス、「ばかぢから」！』『シャラァアプッ！』
「くぅぅ……ナマルゴン、「かみな――――」
『「ソーラースラッシュ」！』『シャラッシュゥウッ！』
『ナマナマシィイイ！』「クソッ、戻れナマルゴン！」
快晴のおかげで怒涛のラッシュを食らわせ、どうにかナマルゴンを落とし切った。タイプ相性なんて、レベル積んで殴り勝てば良いんだよぉ！
「チッ、仕方ねぇ。負けは負けだ。「エレキバッチ」を受け取れ。ついでに、この技マシンもな。中身はもちろん、「でんじほう」だぜ！」
『……どうも』

こうして、私は絶対に欲しかったエレキバッチと、お断りしたくて仕方ない技マシンの電磁砲を受け取るのだった……。

◆ムコニャ

・ティアーザ図鑑№016
・分類：ねこまたポケモン
・タイプ：あく/どく
・性別：あり
・特性：どくしゅ/するどいめ/えんかく（隠れ特性）
・種族値
HP：40
こうげき：55
ぼうぎょ：25
とくこう：50

とくぼう：30
すばやさ：１００
・図鑑説明
夜行性で闇に紛れて獲物を狩る。その爪には強力な毒が有り、引っ掻かれた者は忽ち命を奪われてしまう。毒の強さは変幻自在で、時には弱い毒で相手を洗脳し、棲み処に案内させてから一網打尽にするなど、悪知恵が働く。
また、夜な夜な高い所に上っては月の光を吸収し、進化のエネルギーを溜めていると言われ、その力を使って死者を蘇らせ、遠隔操作する事が出来るらしい。
一方で犬ポケモンには滅法弱く、ガーディなどに吠えられればたちどころに逃げ出すという。

鳴女さん、ドロンゴルシティへ

オラは釣りキチ？

「はぁ……はぁ……っ！」

『お、生きてたのか。……惜しい！』

「惜しいじゃないよ！　僕はまだ死にたくないんだよぉ！」

残念ながら、ボブは無事だったようだ。本当に惜しい。

しかも、手持ちがもう1匹増えている件について。生き延びた上にポケモンをゲットするとは、やるじゃな～い♪

「鳴女さん、ボブを捨てちゃ駄目って言ったでしょう」「そんな犬みたいな……」

『だって家じゃ飼えないし、良い人に拾って貰った方が……』「偽善者めがっ！」

そういう奴がいるから、捨てポケが無くならないんだぞ、とボブは捲し立てた。

お前も随分丸くなったじゃないか。全ては私のおかげだな。感謝して貢げ。

ちなみに、私たちは今、電車には乗っていない。ボブが電車恐怖症を拗らせたので、ポケモンにライド中である。ボブはパイモンドに、アデルはウルファングに、私はボルデビサスに騎乗している。パイモンドが地を這い、ウルファングとボルデビサスが空を行く感じだ。この中ではウルファングが圧倒的に速いが、ある程度は歩調……というか、飛行速度を合わせてくれているので、何ら問題はない。

あるとしたら、旅路の夜が宿無し野宿で確定している事だろう。それもこんなパサパサした場所で。何で文明の利器がそこにあるのに、使えないんだよ。やっぱり置いて行こうぜ、その生ゴミ。

「あ、ワルビルの群れだ！」

『『『『ビアビアァール！』』』』

と、砂地を直走っていたからか、ワルビルの群れが現れた。

ドロンゴルシティに続くM1番道路は、基本的に海岸沿いなので緑も多いが、波打ち際故か宿泊施設がまるで無く（ビーチはある）、間を繋ぐクラビトンタウンまで結構ある。

逆に少し内陸に寄れば小さな町が幾つかあり、休める場所も多いが、人の手が加

わっているせいか所々が乾燥しており、こうしてじめんタイプやいわタイプに襲われる事になる。

まぁ、有利だから別に良いけど。精々経験値にしてやるぜ。

「パイちゃん、「いわなだれ」！」『パイモォオンドォッ！』

『ウルファング、「れんごく」！』『ウルフォオオオオッ！』

『ボルデビサス、「ソーラーレイ」！』『ビザァアアァ！』

『『『『ビアガーデェエエン！』』』』

レベル40に差し掛かろうとしている、私たちのエースポケモンの容赦のない攻撃が降り注ぎ、ワルビルたちは砂の海に沈んだ。

余談だけど、今の面子はこんな感じ。

《私のメンバー》

◆ボルデビサス（いわ/くさ）Ｌｖ３８（♀）：「ストーンロール」「そらをとぶ」「ソーラースラッシュ」「ソーラレイ」

◆エルシアン（むし/あく）Ｌｖ３６（♂）：「メガホーン」「エアスラッシュ」「だいちのちから」「ナイトバースト」

◆ヒドクーイ（どく/ひこう）　Ｌｖ３６（♀）：「どくどく」「はねやすめ」「エアスラッシュ」「アシッドレイン」

◆アズレーン（くさ/みず）　Ｌｖ３７（♀）：「ねっとう」「ギガドレイン」「アクアリング」「あまごい」

◆ムコニャル（あく/どく）　Ｌｖ３４（♀）：「つじぎり」「アシッドクロス」「シャドークロー」「つきのひかり」

◆ラランテス（くさ）　Ｌｖ３７（♀）：「ばかぢから」「ソーラースラッシュ」「にほんばれ」「リーフストーム」

《アデルのメンバー》

◆ウルファング（いわ/ほのお）　Ｌｖ３９（♂）：「アクセルロック」「ジュエルスプラッシュ」「れんごく」「そらをとぶ」

◆クラトン（いわ/みず）　Ｌｖ４０（♀）：「ストーンバレット」「なみのり」「アクアジェット」「まもる」

◆ジャラガンダー（くさ/ドラゴン）　Ｌｖ４２（♂）：「リーフブレード」「アクアブレイク」「ドラゴンクロー」「スケイルノイズ」

◆イオーム（エスパー/ひこう）　Ｌｖ３６（♀）：「じんつうりき」「おしゃべり」「エアスラッシュ」「うたかたのアリア」

◆カロンダイト（むし/あく）　Ｌｖ３４（♂）：「アシッドクロス」「つじぎり」「ネバネバネット」「きゅうけつ」

◆ジャカロップ（フェアリー）　Ｌｖ４０（♀）：「ムーンフォース」「おねだり」「つきのひかり」「メガホーン」

《ボブの手持ち》

◆パイモンド【パイちゃん】（いわ/じめん）　Ｌｖ４９（♀）：「いわなだれ」「じしん」「とぐろをまく」「まもる」

◆ガニモンク【モンくん】（みず/かくとう）　Ｌｖ４７（♂）：「クラブハンマー」「アームハンマー」「まもる」「ビルドアップ」

◆チャバヌキ【チャバ】（ノーマル/くさ）　Ｌｖ３８（♀）：「きりさく」「リーフブレード」「やどりぎのタネ」「みきり」

うん、皆して鍛え過ぎやろ。殆ど最終進化形態になってるし。私の手持ちも無進化であるアズレーンを除けば、進化し切っていないのはボルデビサスだけである。

「クィーンのすがた」と「プレトリアンのすがた」のどっちにするか迷ってるから、まだ進化はさせないけど。

それはそれとして、ボブも結構育てたな。最高レベルがダイパの伝説（Ｌｖ４７）を超えてるじゃん。パイモンドは進化条件がクソ程面倒臭いから仕方ないとは言え、もうすぐ50代はヤバくないか。これは素直に凄いと思う。

うーん、私もポケモンにニックネーム付けてみようかなー。

と言うか、そろそろ寝よう。朝からぶっ続けで走り続けたけど、流石に１日は無理だった。せめて町に辿り着きたかったけど、思った以上に砂地のポケモンに足止めされたから仕方ない。

「ボブくんも、大分ポケモンに慣れましたね」

月明りをバックに、馬鹿デカい洞窟の中で焚火を囲んでいると、アデルがポツリと呟いた。彼女の目の前では、パイモンドとガニモンクに背もたれ、チャバヌキをヨシヨシしているボブの姿があった。お前、実はセカンドネーム「ハルモニア」だろ。

そもそも、ボブという名前自体がこいつの本名ではない。死んだ誰かの物を名

乗っているだけだ。中身と雰囲気が全然一致してないしな。
「いや、そんな事は……」
思わず否定するボブだが、説得力が皆無である。もういいじゃん、ポケモンはトモダチで。
「いやいや、素人目から見ても、ボブくんはポケモンと仲良くなれてますよ」
「そうかな？」
「ええ、そうです。だから、もう少し自信を持った方が良いですよ。お互いの為にもね」
「……はい」
それでも微妙な顔をする辺り、こいつのポケモンに対するトラウマは相当だな。
一体どんな殺され方で家族を失えば、ここまで闇が深くなるんだ？
私には分からん感覚だな。
『……って言うかさ、あんまり肩入れし過ぎなんじゃねぇの？』
「そんな事は……」
『仮にそうだとして、無意識な方が問題あると思うがね』

「……」

まったく、どいつもこいつも。そんな有様じゃ、別れが辛くなるだけだろうに。

この私を見習え。私はお前らの事、壊れにくい玩具ぐらいにしか思って無いんだぞ。もしくは将来的なオヤツだね。と言うか、アデルは何時になったら気付くのかな。早くネタばらしをして「楽しかったぜ、お前との友情ごっこ」って言わせてよー。

まぁ良いさ。私は私の生きる道を進むのみ。

さーて、寝よ寝よ。オヤスミナサト～♪

さてはて、やって来ましたよ、ドロンゴルシティ。

モデルはオーストラリアのシドニー。オペラハウスやキモイ顔のパークがあるアソコである。建物のデザインが独特で、とりあえず印象には残るって感じだ。

マッタネーンシティ以上の湾岸都市であり、ティアーザ地方の交易の殆どを担っている世界都市であり、先の名所が点在する観光都市でもある。その為、ここが首都だと勘違いされる事も多いとか。

しかし、私の目的は観光などではない。ジム戦である。前回はアデルを生贄にし

たので、今回は私が先陣を切って進ぜよう。
　……いや、待てよ？
『よし、今回はお前が行け』
「何で!?　ボクはトレーナーじゃないんだけど!?」
『いやいや、3匹もポケモン持ってるじゃないですかー』
「そんな事言われても……」
『つーか、お前のせいで電車に乗れなかったんだから責任取れや』
「……はい」
　という事で、有無を言わさずボブをジムへぶち込む。敵情視察って奴だ。その間に、私たちは観光でもしてよう。
「いえ、私はボブくんの応援に行きます。初めてのジム戦は緊張するでしょうから」
『止めはしないんだな』
　まったく、お前は本当に変な所でお人好しだな。昨日あまり入れ込むなって注意したばかりだろ。
　ま、良いさ。私一人で楽しんじゃうもんね～♪

『さーて、何処に行こうかなー』

オーストラリアと言ったらオペラハウスってイメージあるけど、音楽は自分で弾くって感覚だから、見た目しか楽しめないんだよなぁ。かと言って、真昼間からラグビーを観たいとは思わないし……。

『そうだ、動物園に行こう』

現実で言うタロンガ動物園に相当する施設があった筈。サファリゾーンやノモセ大湿原の例に倣えば、ここにも珍しいポケモンが陳列されてるだろうし、ワンチャン1匹くらい記念で手に入るかも。駄目なら奪い取ってやる。

という訳で、お邪魔しまーす♪

「ワッハッハッハッ！　ここで会ったが百年目ぇ！」

『――――って、何でお前がここに居るんだよ』

だが、入園と同時に見慣れた奴と出くわした。もちろん背は縮んでるし、何故か赤ずきんみたいな恰好をしているが、間違いなく零余子である。

「何でなんだと聞かれたら、答えてやるが世の情け！　私に黙って面白そうな事をしているから、参加配信する事にしたのよ！」

『配信だぁ？』
「……ああ、そっか。アンタ、事情を知らずにinしたんだもんね」
『勿体ぶってないで早く教えろよ、レッドキャップ』
「人を殺人鬼扱いしないでくれる？　……そんなに知りたきゃ、ポケモンバトルよ！」
　さらに、どういう訳か、ポケモンバトルをする事になった。場所が入り口付近のバトルコートだから良いけど、何でやねーん。
『そもそもお前、ポケモン持ってるんか？』
「ご心配なく！　きちんとクロックアップでティアーザ地方のポケモンを揃えて来たわよ！」
『仮面ライダーかお前は』
　何だか知らんが、この宇宙の法則を乱す手段を持っているようだ。教えろ、その方法を！
「バトル形式は50フラットで、手持ちは3匹！　お互いの指揮能力が物を言うわ！」

――――――野生の零余子が勝負を仕掛けて来たッ！

「行って、ディプソーン！」『フォオオンッ！』

零余子の初手はディプソーン。

化石ポケモンの一種で、プリンカラーになったディプロドクスのような姿をしている。タイプはアローラゴローニャと同じく、いわ/でんき。見た目通りに鈍重だが技と特性が優秀であり、雨降らしで雷を必中にしつつ高い特攻で一撃必殺を狙ってくる。長い尻尾と太ましい身体のおかげで物理技も充実していて、攻めに関しては申し分ないステータスである。

しかし、いわにでんきという弱点の多い組み合わせ故に、思ったよりも耐久力がなく、長期戦には向いていない。特に4倍弱点のじめん技を受けると、ほぼ確実に瀕死となる。そこら辺をどう補うかが、トレーナーの腕の見せ所だろう。

ふむ、雨が降り始めた事を鑑みるに、おそらく雨パの起点役としての採用かな？

『殺れ、エルシアン！』『ギゴォァヴヴヴンッ！』

だが、残念。私の先頭はエルシアンだ。お前のいわ技で弱点を突かれるが、逆にこちらからもじめん技で4倍弱点を突き返せる。

「ディプソーン、「パワードジュエル」！」『ディプロオオス！』
『ぐぬぉっ!?』『ゴヴヴヴッ……！』
何ィ、先制されただとぉ!?
素早さ種族値がハウボル系統とタメを張れるくらいにすっトロいこいつが何故……
ハッ、まさか!?
「その通り！　「せんせいのツメ」を持たせているのさ！　丸子ちゃんのＬＵＣＫブーストは、アンタだけの特権じゃないのよ！」
『チッ……やってくれる』
しかし、運が良いのはお前だけじゃないのさ！
『だが、弱点を突かれた事により、「じゃくてんほけん」の効果発動！　攻撃と特攻を二段階上げてやるぜ！』
「なっ……それは序盤で手に入るような物じゃ――――――」
『さっき入り口で１００万人入園記念で貰った』
「そんな馬鹿なぁ!?」
『馬鹿はお前だけだ！　私に逆らった事を後悔して死ぬがいい！　「だいちのち

から」！』

『ゴヴォァアアアアッ！』『フォォオオ……ッ！』

先ずは1匹目。ディプソーンをパワーアップした大地の力で叩き落してやった。

「クソッ！　こうなったら……行け、アロウズ！　大地を照らせ！」『ガヴォオオオッ！』

次なるポケモンはアロウズ。

こいつも化石ポケモンの一種で、アロサウルスをベースにカルタノサウルスの角とテリジノサウルスの前足をくっ付けたハイブリットな怪物であり、ガチゴラス並みの体格からは考えられない素早さで敵を延々追い回し、爪と牙で八つ裂きにして弱らせるという、実にアロサウルスらしい襲い方をするポケモンである。タイプはガチゴラスと同じ、いわ/ドラゴンタイプ。

ただし、特性はまるで別物で、かたいツメで物理攻撃力を上げるか、日照りで先制ソーラースラッシュで意表を突いてきたりと、結構トリッキーな戦い方をするのが特徴。そもそも見た目の割りに耐久力が無いので、搦め手を使わざるを得ないのが現状と言えるか。

「「ダイヤクロー」！」
『ジュラァアアッ！』『ギゴォヴァアアッ……！』
『くっ、戻れエルシアン！』
流石にガチゴラス並みのタイプ一致技を耐えるのは無理か。
だが、わざわざ晴れにしたのが命取りだ。何処ぞのドラゴンストーム（笑）よろしく、天候変化で自らの首を絞めるがいい！
『行け、ボルデビサス！　「ソーラースラッシュ」！』
「「ソーラースラッシュ」！」
『無駄無駄無駄ァッ！　突破不可能よぉ！　「ソーラーレイ」で止めを刺せ！』
『ギギャアアヴォッ！』『ゴギャァッ……！』
互いに等倍であり、向こうの手数の方が多いものの、耐久力は圧倒的にこっちの方が上なので、普通に殴り勝った。やーいやーい、ジュラ紀の代表格やーいやーい♪
「クッソーッ！　仇を取れ、ストレゴン！」『ボヴォァアアッ！』
最後の1匹も、これまた化石ポケモンのストレゴン。

名前からお察しの通り、ジュラ紀の代表的草食恐竜であるステゴサウルスがモチーフで、見た目も殆ど原典に近いが、肩にスパイクが生えていたり、背中の骨板が刀剣のようになっていたりと、トウジャンゴサウルスやケントロサウルスの要素も見受けられる。タイプは意外な事に、いわ/くさの複合。ただ、はがね技もそこそこ覚えるので、全く関係ない訳ではない。

『戻れ、ボルデビサス！』

基本特性が草食であり、くさ技メインのボルデビサスでは勝ち目が薄いので、ここは素直に退いておく。

『ぶっ殺せ、ラランテス！』『しゃらんらしゃらんら～♪』

だから、お前の相手は別の草だぁ！

「げっ……！」

今更後悔しても、もう遅い！

『食らえ、「ばかぢから」！』

「「ニードルガード」！」

『焼け石に水でしかないぞ！　「ばかぢから」「ばかぢから」「ばかぢから」「ばか

ぢから」！』

『シャラップゥ！』『ボワヴォッ……！』

幾ら守って反射ダメージを入れようと、この脳筋スタイルに勝てる訳が無ぁい！

「逃げる！」『逃がすかぁ！』「いいや逃げ切る！」

しかし、勝負が決した途端、零余子は即行で逃げ出した。何てすばしっこいメスガキだぁ！

『チッ、白けたな。……仕方ない、ジムに挑むか』

そろそろボブも終わった頃だろうし、お開きと行こう。

『勝負だコラァッ！』

と言う事で、私はスタジアムの前へ舞い戻った。ドロンゴルジム戦、開始である。

そして、扉を開けた、その先に待っていたのは――――――、

《お～っと、アデル選手、これは大きいコイキングを釣り上げたぁ！》

『なぁにこれぇ？』

三度の飯よりフィッシングな、釣りキチ共がコイキングを跳ね上げていた。

◆レディバ（ティアーザのすがた）
・全国図鑑№１６５
・分類：ながれぼしポケモン
・タイプ：むし／かくとう
・性別：あり
・特性：てつのこぶし／ふみん／テクニシャン（隠れ特性）
・種族値
HP：40
こうげき：80
ぼうぎょ：30
とくこう：20
とくぼう：40
すばやさ：55
・図鑑説明
夜行性のポケモンで、流れ星の夜が特に活発になる。その昔、星に乗って空から

降って来たと言われており、地元では〝流星の化身〟と呼んで神聖視している。温厚な性格で時には人助けもするが、悪人は不思議なボールに閉じ込めて連れ去ってしまうという。捕まえた悪人には、改心するまで責め苦を与えるらしい。

最近の研究により、驚異的な超能力を持つイオルブたちに対抗する為、拳を捨て去り、群れて守りを固めた事が分かった。

鳴女さんのドロンゴルジム攻略

清水に不魚住。

『何ズラ、これは？』
「いや、訛られても困るんだけど……見ての通りだよ」
『見ての通りだから困ってるんだよ』
一先ず、ジム戦を終えたらしいボブに話しかけてみたのだが、やっぱり意味☆不明だった。何で皆して釣りしてるんだよ。
「おっと、ヒンバスが釣れましたね」
あと、何でジェフリル（OMAE）まで一緒にフィッシングしてんだよ、仕事しろよ。
「地方巡業の休憩時間ですが、何か？」
『お疲れ様です』
スマイル団は真面目に働いてるなぁ……。

というか、どういう状況なんだ、これは。
「このジムでのミッションは釣りなんだ」
『そりゃあ、見れば分かるけど、勝利条件とかどうなってんの？』
「うーんとね、ジムトレーナーと一緒に釣りをして、より大きい魚を釣った方が勝ちなんだけど……」
『その口振りだと、他にも色々と条件がありそうだな』
現に今し方、ジェフリルがヒンバス釣り上げたしな。
たぶん、基本的にコイキングが多いけど、極少数だが他の魚ポケモンも混じっているのだろう。おそらくだが、そちらの方が点が高い。
だが、単純にそれだけを狙えば良いという訳ではなく、何処ぞのアプリよろしく模様によってはコイキングが得点を上回る可能性もある。かと言って、水中の魚ポケモンをハッキリと見分けるのは、素人では難しい。
つまり、なるべく大きくて活きの良い物を選びつつ、僅かな光具合の差を決め手にするのが一番良いだろう。
そうと決まれば、先ずはフィッシングだ。割と釣りは好きなんだよね。あの独特

な待ち時間が心地良いのよ。
「よく来たね、チャレンジャー。早速だけど、一緒に釣りをしようよ。勝ったらそのまま先に進んで良いからさ」
何処か日本の山奥を思わせる馬鹿デカい釣り堀（湖）の一角に、最初のトレーナーが居た。名前はマコモというらしい。ちょっとボサついたセミロングの黒髪と翡翠の瞳が特徴の可愛らしい女の子で、花柄のスクール水着と水玉模様の浮き輪が眩しい「浮き輪ガール」である。
お前、釣りする気あるんか。狐のお面をお祭り気分で付けやがって。
ま、良いさ。とりあえず釣ろう。使うのはお互いにボロの釣り竿で。
「『……』」
うーん、この、
「あっ！」『引いてる！』
よし、タイミングはほぼ同時。問題は何が釣れるかだな。魚影を見る限りコイキングばかりのようだし、模様と大きさで勝負するしかない。
……果たして、結果は？

「あちゃー、三色ニシキのコイキングかー」
『よっしゃ、ツートンの赤いコイキングだぜ！』
レア度はツートンの方が上だから、私の勝ちだ。幸先良いね。
「いきなりレア物を釣り上げるだなんて、凄いね！　普通はここでニシキを釣っちゃう所なんだけど」
『ワハハハハ！　私は運が良いのさ！』
何せ家には座敷童子が居るからな！
さて、次は誰かな～？
「……来たな。さぁ、さっさと竿を構えろ」
ドロンゴルジム第2の刺客はサビト。錆び付いた赤髪に右頬の抉れた傷が特徴的な、将来はイケメンに成長しそうな男の子だ。未来があればだけど。
だってこいつ、海パン姿なんですけど。やっぱり狐のお面を付けてるし。マコモといいこいつといい、フィッシング舐めてんのか。
いや、確かにポケモンの釣りは、現実のように難しくはないけどさ。コイキングばっかりだし、阿保みたいに食い付くし。

「『……』」

何だろう、微妙に息苦しいんだけど。さっきのゆったり空間を返して。

ちなみに、今回は良いボロの釣り竿。良いボロって何、舐めてんのか？

「……来たッ！」『こっちもだ！』

今回もまた同時。釣れたのは、

『よっしゃ、金ぴかのコイキン――――――』

『ホォグルドォ！』

『――――――ぐぅ？』

色違いの金ぴかなコイキングだったのだが、通り縋ったオニドリルがハヤテの如く掻っ攫ってしまった。そこはピジョンじゃないのかよ。無駄に色違い用意しやがって！

「フッ……オレの勝ちだな」

一方のサビトはウェーブのピンク。アラベスクタウンに引っ越しちまえ。そのまま意地悪なパープル婆に揉まれて来い。

……クソッ、釣った魚で勝負をする以上、釣果を掬われた私の負けは確定である。

つまり、ここからはポケモンバトルだ。
「そして、次もオレの勝ちだ！」
海パン姿で言われてもなぁ……。
――――海パン野郎のサビトが勝負を仕掛けて来たッ！
字面もヒデェ！
「行け、マリルリ！」『ルリマリィ～ン♪』
サビトの初手はマリルリ（Ｌｖ３５）。伝説上の生き物（ドラゴンタイプ）を正面から殴り倒す、力持ちな「みずうさぎポケモン」である。等倍でも充分に危ない。
つーか、今更だけど、ここ、みずタイプのジムなのね……。
『殺ってこい、ヒドクーイ！』『ヒュィイウッ！』
よーし、ここは素直にどくタイプで攻めよう。出番だヒドクーイ（Ｌｖ３６）。こいつは強いぜ！
『食らえ、「アシッドレイン」！』『ヒュィィィッ！』
「くっ……！」『ルリリィ……！』
何故なら、こいつは滅茶苦茶速いからな。百舌鳥の名は伊達じゃない。蜂鳥なん

て目じゃないぜ。ついでに火傷も負わせたし、本当に優秀な子だわ。ジム戦では今回が初陣だけど。

しかし、流石はマリルリ。特性を活かせていない頃から変わらない、その耐久力は純粋に脅威だ。

「――――――見えた、隙の糸！」『ルリァッ！』

『ヒュィアッ!?』『嘘ぉ!?』

さらに、何とこいつ、的確に急所に当てて来やがった。道具や特性、技の効果ではなく、長年の研鑽によるものだろう。おのれ鱗滝ィ！

クソッ、ヤバいヤバいヤバい、あるかもしれないとは思っていたけど、ヒドクーイが一撃で落とされるとは。言っちゃ悪いけど、この子クロバットより耐久力あるのよ？

せっかくの初陣で叩き落されるなんて、可哀想な事しやがって。絶対に許さねぇぞ！

『お願い、ララランテス！』『しゃらんらしゃらんら♪』

こうなったら、ララランテス（Ｌｖ３９）でゴリ押ししてやる。今回のテーマは、

「特攻」だぁ！

「マリルリ、「じゃれつく」！」『ルリルリルリルリィ！』

『ぐぉおおおっ！　……つぅーっ、ラランテス、「リーフストーム」！』『シャラララーン！』

『ルリァッ！』

フハハハ、ラランテスはリーフストームも使えるんだよぉ！

だが、問題は次に何が出て来るか、である。兎の最後っ屁のせいでHPは半分を切ってるし、相手によっては何も出来ないまま沈められる可能性もある。

「行け、ウソフキン！」『ウソフキィッ！』

出て来たのはウソフキン（Ｌｖ３７）。

……よし、勝った！

ウソフキンはティアーザウソッキーの進化形で、スナフキンのコスプレをしたウソッキーみたいな姿をしている。タイプはいわ/みずの複合。特性はがんじょう/いしあたま/よびみず（隠れ特性）の３つ。

ようするに、絶好のカモだ。

『ラランテス、「リーフストーム」！』『シャランシュッ！』
『ウソゥゥ……！』
チッ、頑丈持ちだったか。
「ウソフキン、「メガホーン」！」『ウソフキィヤァッ！』
『何だとぉ!?』
チクショウ、そう言えばこいつ、思い出しでメガホーン覚えるんだった……！
『……しゃら～ん！』
しかし、ここでラランテスが食いしばり効果を発動。私を悲しませまいと持ち堪えた。お前～♪
『やってくれたな、この野郎！　「ばかぢから」で死ねよやぁ！』『シャラララララッ！』
『ドペェーッ！』「くっ、戻れウソフキン！」
最後は馬鹿力でウソフキンを一刀両断。ギリギリではあるが、サビトに勝利した。マジで危なかった……。
『ほら、じっとして』『しゃら～』

ちょっと良い傷薬を使ってあげよう。せっかく頑張ってくれたからね～♪

さて、次のジムトレーナーはカットしていこう。どうせムラタだからね。普通に釣りで勝ちました。どっちも金ぴかコイキングだったけど、ムラタの釣果がオニコルド（オニドリルの進化形）に掻っ攫われたからね、しょうがないね。

『フゥ……変に疲れたな』

そして、いよいよジムリーダー戦に到達した。

「……」

フィールドの中心に立つは、死んだ魚のように光が無い青い瞳を持ち、無造作に伸ばした髪を後ろで纏めた、スタイルの良い女。右が無地の赤・左が黄色と緑の亀甲模様の羽織という「片身替」の姿をしており、その内側は振袖袴である。

さらに、他のジムトレーナーと同じく頭に狐のお面が。こいつだけ大人びているせいで結構な違和感がある。

まぁ、何と言うかですねぇ、

『いや、何か言えよ嫌われ者』

「……俺は、嫌われていない」

また柱（♀）かよ。ふざけんなよ冨岡義勇擬きめ。
『そうかよ。なら、証明してみせろよ』
「……」
『だから、何か言えやぁっ！』
――――ジムリーダーのサトウが勝負を仕掛けて来たッ！
「……行け」『ギャラァアアッ！』
サトウの一番手はギャラドス（Ｌｖ３９）。
あれだけコイキングを使っていたから、もしかしてとは思っていたけど、マジで出して来やがったな、赤い奴を。ロケット団かおのれは。
「馬鹿め！　ビルドアップだ、ラランテス！」『しゃらんら～♪』
しかし、使って来るのが分かっていれば、対処は簡単だ。どうせ威嚇持ちだから、それを利用してやればいい。お陰様で最初からフルスロットルですよー。
「……「りゅうのまい」」『ギャヴォオオオッ！』
勝手に龍流舞いしてろ。所詮、貴様は本当の水柱じゃないのさ。
『食らえ、「ばかぢから」！』『シャラァアアッ！』

ここはリーフストームをぶっ放したい所だが、ギャラドスは特防の方が高いので、ここはわざわざ上げてくれた攻撃力で馬鹿力を打つ。例え半減だろうと、一段階上がった状態なら結構なダメージになる筈である。

「くっ……「こおりのキバ」！」『ギャラァアアッ！』

『ぬぐっ……！』『しゃらぁ……！』

だが、ギャラドスには氷の牙がある。素の威力がゴミみたいな数値だけど、流石に弱点かつ一段階上がった状態で噛み付かれると痛いな。

とは言え、一発KOにはならないので、このまま攻める。ビルドアップも済んでるから、もう一発受けても素で耐えるからね。

「……「かみくだく」」『ギャヴォオオオォォン！』

『ラランテス、耐えてもう一発！』『シャララッ！』

『ギャラァッ……！』「……戻れ、ギャラドス……！」

今度は噛み砕いてきたが、これを耐え切り、反撃の馬鹿力で叩き落す。ついでにHPが半分以下になった為、持たせておいたオボンの実で体力もそこそこ回復し、準備は万端。

さぁ、次は何を出して来る？

「……行け、ミロカロス」『ヒィュワァア～ン！』

ミ～ロ～カ～ロ～スぅ～ッ！

マジかよー。ヒンバス混じってたから、あるいはと思ってたけど、本当に出して来るなよなー。その上、色違いのふつくしい個体（Ｌｖ３９）だし。

つーか、ギャラドスにミロカロスって、ここは本当に３番目のジムなのか？

情け容赦が無さ過ぎじゃない？

まぁ、それはそれとして、どうするかな。

ミロカロスはギャラドスと同速で意外と早いし、ラランテスじゃどの道先手を取られる。ならば、ここは賭けに出るしかない。

「……「れいとうビーム」！」『キュラァ～ン！』

くっ、技レコードを使ってやがんな。ガチガチの技構成しやがって。

……頼む、耐えてくれ、ラランテス！

『……しゃらん！』

――――――ラランテスはナキメを悲しませまいと持ち堪えたッ！

ララランテスぅ～！

これで勝ったぞ！

『ララランテス、「にほんばれ」！』『しゃららぁ～ん♪』

ララランテスが天を仰ぐと、人工の太陽が生み出され、天気が快晴となった。

「「れいとう――――」」

『「ソーラースラッシュ」！』『シャラプッシュ！』

『ヒァァァア～ン……！』「……戻れ、ミロカロス」

どうだ、流石に二段階パワーアップしたソーラースラッシュには耐えられまい。

さっさと引っ込みやがて。

……さて、問題は〝最後の１匹〟だ。３番目のジムだから、今回から３匹に増えてるんだよね。

「……行け、ダイアルド」『グヴァアアヴォォオッ！』

そして、このダイアルド（Ｌｖ４０）である。

HPしか能の無いコイキングタイプの魚ポケモンであるマスキングの進化形で、キングサーモンとマーレーコッドを足して２で割ったような見た目をしている。全

身が鋼の鱗に覆われ、頭頂部に鹿の角と藻の髪が生えた、その有様は、まるで三平が挑んだあの竜神滝の主だ。

しかし、凄いのは見た目だけではない。こいつもギャラドスやミロカロスと同じ５４０族であり、キングドラと同類のみず/ドラゴンタイプである。素早さを溝に捨てた代わりに他のステータスが凄まじく、HP種族値が１２５で残りがＡ１１９５という、とんでもない野郎だ。

しかも、特性がさいせいりょく/しぜんかいふく/マルチスケイル（隠れ特性）の3つ。自重しないにも程がある。ラストがこいつとか、嘘だろオイ。

だが、ダイアルドの素早さはラランテス以下の筈。ここは最後の鼬っ屁になろうとも、攻めるしかない。

『ラランテス、「リーフストーム」！』『シャラララァン！』

ラランテスのリーフストームが唸る。せっかく積んだのだから馬鹿力で行きたいが、無暗矢鱈に突っ込むとマルチスケイルで耐えられた上に懐に入ってしまうだけの結果になりかねないので、一発目は遠距離技で行く。

「……「りゅうのまい」」『ガヴォオオオッ！』

ダイアルドが力強く舞い上がり、リーフストームを正面から吹き飛ばしながら、凄まじい勢いで躍り出て来る。

くぅっ、やはり舞って来たか。ギャラドスの時とは違い、これは普通にキツいよー。こうなったら、やるっきゃない！

『「ばかぢから」！』「ドラゴンファング」！」

『シャラァアアアッ！』『ゴヴァアアアア！』

覚悟完了したラランテスの馬鹿力と、ダイアルドのドラゴンファング（威力85／命中１００のドラゴン物理技）が激突する。一方は祈るように鎌を突き出し、もう一方は全てを呑み込もうと大口を開いて襲い掛かった。

タイミングはほぼ同時。押し負けた方が一気に食われる、ガチンコ勝負である。

『行けぇえええええええええっ！』

「食らい付けぇえええええええっ！」

私とサトウの叫びがフィールドに轟く。無口な彼女も、３タテされ掛けているという後の無さが、テンションを天元突破させているのだろう。

『――――――シャァラァアアアッ！』『ギャヴォオオオッ!?』

しかし、勝つのは私とラランテスだ。積み上げた筋肉は嘘を吐かない。何たって、天邪鬼は千人力なんだからなぁ！

『グヴォォ……』「戻れ、ダイアルド」

リーフストームでマルチスケイルの特性を掻き消され、そこへすかさず三段積み馬鹿力を叩き込まれたダイアルドが倒れ伏し、サトウのボールへと戻されていく。

つまり、この勝負は私の完全勝利である。ヤッタネ！

いやー、マジでラランテスが3タテしちゃったよ。一番の新人なのに、何時の間にか42レベルなんですけど。嬉しいけど、頑張り過ぎじゃない？

『しゃら～ん♪』

よしよし、後でサロンに連れてってやるからな～♪

『オラ、ジムバッチ出せ！』

「……「カスカードバッチ」を渡す。それと、この技マシンも……」

という事で、「カスカードバッチ」と「たきのぼり」の技マシンを貰った。微妙にカロスの風を吹かせるな。風と言うか、滝だけど。とりあえず、おのれ鱗滝。

とにもかくにも、3番目のジム、クリアだぜ～♪

◆シダッパ
・ティアーザ図鑑№046
・分類：しだくさポケモン
・タイプ：くさ
・性別：あり
・特性：ほうし/ちょすい（隠れ特性）
・種族値
HP：55
こうげき：45
ぼうぎょ：40
とくこう：68
とくぼう：50
すばやさ：82

・図鑑説明

古いタイプのくさポケモン。種ではなく胞子で増え、乾燥に弱い為に水辺から離れられない。はっきり言ってかなり弱いが、栄養も少ないので襲われる事は稀である。ただし、そのＤＮＡには、太古の時代にドラゴンであった記憶が刻まれているという。

鳴女さん、賭け事に興じる

ギャンブルはいけません。

それからそれから。

『とりあえず、カジノ行くかぁー』

「「その発想はおかしい」」

ドロンゴルジムを見事にクリアしたのを記念してカジノに誘ったのだが、何故かアデルとボブに呆れられた。何処がおかしいんだよ？

『ポケモンと言えばスロット、スロットと言えばポケモンだろうに』

「それはカントー近郊の話だと思うけどなぁ……」

「そもそも、未成年じゃ入れないでしょうに……」

『いやいや、そんな事はないさ。な？』

私はクルリと後ろを振り返った。

「そうですねぇ。大人として注意しておくべきなんでしょうが、ワタクシも子供の頃はよく忍び込んでましたからね、あまり固い事は言いませんよ」

すると、そこには誂えたように、ディーラーの恰好をしたジェフリルが。ホント、こいつはよく働くな。過労で死ぬんじゃないのか？

つーか、お前の場合は「闇」だの「地下」だのが付くだろ、アングラ系。

「ひゃぅ……！」「ボブくん……」

ポケモンに続く第二のトラウマと再会してしまい、ボブがアデルの後ろでガクブルしている。一周回って可愛く見えて来るな。何なんだこいつは。

「でも、どうやって入るんです？」

「私は週末にここでカードディーラーをやっていましてね。その見習いという事で入場させますよ。オーナーとも親しいですし、多少の事は目を瞑って貰えるでしょう」

『へぇ……』

ピエロにトレーナーにディーラーって、マジで多彩だな、この男。他の団員も似たような者なんだろうか？

まぁいいや、私はゲームが出来ればそれで良いんだよ。という事で、カジノにGO！

「ここですよ」

「『おおー』」

ジェフリルに案内されて辿り着いた先にあったのは、例え真夜中だろうとビカビカ光って浮き上がっていそうな、まるでテーマパークのようなカジノホテル「ザ☆スピードスター」。ドロンゴルシティでは唯一の賭博場だが、逆に言えば独壇場でもある。何でもあるし、揃っていない物は無い。

『……って、パンフレットに書いてある』

「自意識過剰な売り文句ですね」

『商売なんて、そんな物だろう』

金に奇麗も汚いもないんだよ。使う奴が手を染めているか足を洗っているかの違いだけ。金は天下の周り物って言葉を知らんのかね。

ま、私は借りっぱなしの金は要らんがな。ペリカはもっと要らん。

そう、私たちは稼ぎに来たのだ。地下送りにされるんじゃなくて、する方なのさ。

「では、入場～♪」

「『お邪魔しま～す』」

そして、私たちはジェフリルの先導の下、「ザ☆スピードスター」へ入場した。

「お客様、身分証を――――って、あら、ジェフリルさんでしたか。何時も素晴らしいパフォーマンスをありがとうございます」

「いえいえ、こちらこそ、アリスとリデルがお世話になっております」

当然ながら受付嬢に身分証を求めて来たが、ジェフリルのおかげで当たり前のように顔パスである。パフォーマンスって事は、ピエロの役もやってんのかな。パーティー会場には付き物だからね。居るのはパリピだけだし。

「凄い……！」

『凄いというより、臭いな』

「確かに……」

ガヤガヤ、ジャラジャラ、ガチャガチャ。

多種多様な機械とメダルの増減する音が四方八方から耳へ攻め入り、天下ならぬ人生を分ける眩い光が目を惑わす。

それでなくとも、大勢の人間がごった返しているので、臭いだけでも酔ってしまう。〝匂い〟ではない〝臭い〟で、だ。そこら中に漂うきな臭いニオイが、人を路頭に迷わすのである。当人たちに言わせれば、アロマの香りなんだろうがね。

まぁ、雰囲気に圧倒されているのは、内外共に子供のボブだけだが。

「さて、流石に最初から自由時間とは行かないので、30分くらいはワタクシの仕事振りでも見ておいてください」

そりゃそうよね。

という事で、ジェフリルのカード捌きを見ていたのだが……まぁ、プロだわね。ちょくちょくセカンドディールとかかましてるけど、傍目には全然分からないもん。視力が良いかどうかじゃなくて、見分けられるかがカギだからね。あそこまで自然体にイカサマをされちゃあ、お終いよ。

「ああ、クソッ！　１０００万擦っちまったぜ！」

「あ～ら、だらしないわね」

「良いんだよ、どうせこんなの悪戯だからな。１０００万くらいくれてやるさ」

「負け惜しみ～♪」

うーん、参加者の会話に付いていけない。今のは敗けた側のバカップルだけど、金額がおかしいんだよね。何だ、１０００万ぽっちって。勝った側も「まだまだだね」みたいな顔してるし。お金を湯水の如く使うとは、まさにこの事か。

うーん、これは元貧乏人として物申したくなるわね。私のボンビー時代、マジで悲惨でしたよ。服が二着って。

というか、このトリオは全員どん底からの叩き上げだから、あいつらの気持ちは理解出来んだろうなぁ……。

実際に意味不明だもん。こんな事に金を使うなら、私らに一軒家を献上しろ。話はそれからだ。溝に捨てるくらいなら、全財産を寄こしやがれ。お前らに価値は無いが、お金は正直なんだよ。

「おや、その人たちは見習いかい？」

「はい。団長たってのお願いでしてね」

常連と思われる恰幅の良いおっさんと笑顔（の仮面）で対話するジェフリル。ラ○アーゲームかな？

こうして見ると、スマイル団って本当にティアーザ各地の生活に根付いてるよ

ね。団長は千の貌を持つ女らしいし、色んな所で様々な職業に根差しているのだろう。文字通り仮面を使い分けている訳だ。

そもそもスマイル団って、下っ端も含めて何人くらい所属してるんだろうね？

「幹部だけで7人は居ますね。全員合わせれば、22人くらいでしょうか」

『めっちゃ少ないな……』

少数精鋭過ぎません？

――――――と、そんなこんなで半時間。

「お疲れ様です。それでは、しばらく休憩時間としましょう。このスマイル団バッチを持っていれば、よっぽどアレなゲームでもない限り遊ばせてくれる筈です」

「『はーい』」

アレなゲームって何だろうね。「勇者達の道（ブレイブ・メン・ロード）」とかかな。負けたら「焼き土下座」みたいなね？

まぁ、冗談はさておき、さっそく豪遊させてもらおうとしよう。とは言え、所詮は子供の小遣いレベルだろうけどな。

だが、私にはそれで充分過ぎる。

『「７７７（ジャックポット）」だオラァッ！』

先ずはスロットで荒稼ぎ。これは純粋に身体能力が物を言うので、普通に勝てる。流石にこの身体じゃスタープラチナみたいな真似は出来ないので、ＧＯＯＤなイカサマを仕掛けられない内にメダルを集めないとね。

「わーい、10倍だぁ～♪」

ボブはビギナーズラックで、そこそこ稼いでいる。楽しいよね、ルーレット。

「ストレートフラッシュ」

「……ロイヤルストレートフラッシュです」

「チッ……持ってけドロボー」

「どうも～♪」

アデルは大人顔負けでカードゲームを愉しんでいた。「楽」ではなく「愉」である。平然とイカサマし掛けてるし。流石は悪の組織の最高幹部。あくタイプ技はお手の物か。

「そこの可愛いお客様たち」「少し良いかしら？」

すると、何処からともなく、仮面を被ったフリフリドレス姿の少女が２人、現

れた。
『何だお前ら？』
「わたしはアリス」「あたしはリデル」「何時も仲良し双子姉妹」「そして、このカジノの番人でもあるわ」
『ふーん……』
悪目立ちし過ぎたかな。そんで、見兼ねたカジノ側が仕掛けて来た、と。これは〝裏側〟に連れていかれるかもしれないな。
「さて、ここで質問なのだけれど」「随分とお楽しみのようだけど」「もっと面白い事、してみない？」」
やっぱりね。
「……どうします？」
『せっかくだから受けてみようぜ。面白そうだしよ』「えー」『「えー」じゃないの、お子様。お前も来るんだよ』「いや～！」
こうして、私たちはジェフリルの許可もなく、「ザ☆スピードスター」の裏側へご案内される事と相成った。

◆◆◆◆◆◆◆

《ハッハッハッハッ！　子供が裏カジノって、マジで痺れて憧れるわ、鳴女さん！》

『悪い子供じゃのー』『ほんにのー』

『でも、ある意味彼女らしいわねぇ』『泡銭にも程がある』

『ぴきゅー』「「……」」『楽しそうだわね……』

画面の向こうで裏カジノへ突き進む鳴女（児童版）の姿を見て、鳴女一派（inしている零余子以外）が指を差して笑っている。他人事のように軽々しく。

（つーか、何時の間にこんなに集まったのよ！）

そんな彼らを見て、ベア子が内心で歯噛みした。後ろめたい真似をしている自覚はあるので、こんな大っぴらに盛り上がられると、色々と思う所はある。

「……ふぁーあ」

と、ソファーで文字通り夢中になっていた零余子が目を覚ました。その頭には鳴女やアデルの使用している物よりも簡易なヘッドギアが装着されている。簡易なのは見た目だけではなく性能も同じで、本当に一時的にしか夢に干渉出来ない。だか

ら、さっさと弾き出されてしまったのだ。
まぁ、本人としては非常に危ない状況だったから、文句は無いのだろうが。
『ぴきー』「あ、おはよう、ノームくん」
嬉しそうに近寄って来たノームに、零余子が笑顔で応える。
《おや、お目覚めっスか。いやぁ、見事な負け犬っぷりでしたねぇ（笑）》
「うっさいなぁ。良いじゃん、別に。育てる時間が無かったんだよーだ！」
見事な負け犬の遠吠えである。
というか、そう……この鳴女一派大集合は、彼女から始まったのだ。
「眠れなくて暇だから、次のコラボ企画について相談を――――」
チャラトミが事態を嗅ぎ付けて高笑いに来てから30分後くらいに、零余子が現れた。寝惚けたのか、素でそうなのかは不明だが、暇潰しを兼ねて企画相談に来たらしい。
「え、何コレ、どういう状況？」
《カクカクシキジカ》
「何それ面白そう！　皆呼んで来なきゃ！」

さらに、彼から事情を聞くと、止める間もなく仲間を呼んでしまった。

そして、今に至る。実に簡潔で、ベア子にとっては傍迷惑な話である。おかげで部屋が余計に手狭く感じられる。これでバックベアードが人型形態を解除したらどうなるんだろう。

さて、そんな迷惑女子の零余子であるが、鳴女とアデルがポケモンの世界で冒険していると聞くや否や、日頃の恨みを晴らさんとログインして挑んだはいいものの、急ごしらえのパーティーではとても歯が立たず、見るも無残に負けてしまった。まさに負け犬、尻尾を巻いて逃げる駄犬だ。

さらに、割と余計な事を言い残して来ている。かなり暈してはいるが、鳴女の頭脳だと最悪あの一言だけで気付てしまうかもしれない。ベア子は気が気ではなかった。

アデルには真実を知って欲しいが、鳴女にはあまり知られたくない。その矛盾した状況が今のベア子の心情である。

ちなみに、バックベアードは「フェアプレイの精神」で黙っているが、ヴィクターは真面目に気付いていなかったりする。研究に没頭してしまうと周りが見えな

くなってしまうのだ。

無理もない。彼の開発した「夢幻干渉装置（ドリームバンド）」は、集合的無意識に干渉する事で、〝誰もが夢見た世界〟――――つまりは平行宇宙にアクセス出来るのだから。色々と条件はあるし、その世界線の本筋に関わる事は不可能だが、それでも研究する価値はあるだろう。

人の数だけ、世界（ゆめ）があるのだから。

「次は誰行く～？」

すると、あまりの負けっぷりに、もう夢の世界飽きてしまったのか、零余子が次なる多次元宇宙の冒険者（プレインズウォーカー）を誰にするか提案し出した。

（これ以上余計な事しないでよ！）

そう叫びたいが、対等主義者のバックベアードの目がある為、ベア子は何も言えず、黙るしかない。悔しいでしょうねぇ。

しかし、アデルもアデルである。ここまでお膳立てしているのに、呑気に賭け事に興ずるとは何事か。頼むからいい加減に気付いて欲しい。こちらでは2時間も経ってないが、そっちでは数十日は過ぎているだろうに。

だが、悪い事とは続く物で、ここに来て更に面倒な事態が巻き起こる。

『次はわしが行くのじゃー』

「なっ……！」

これには流石にベア子も声が出た。

まさか、アデルが一番気にしている人物（意味深）が夢の世界へ旅立とうとするとは。想定外にも程がある。永遠の幼女枠である丸子では、うっかり真実を話してしまうかもしれない。

というか、零余子は上手くいったから良いけど、何かの事故で丸子が夢に取り込まれてしまったら、それこそ取り返しが付かなくなってしまう。タイミング的にも問題しかなかった。

しかし、その零余子が現状を配信呼ばわりしていまったせいで、〝丸子の動画配信を見られる〟と思うと、ついつい心躍ってしまうベア子は、やはりバックベアードの娘なのかもしれい。何だかなぁ……。

『それじゃあ、ポケモンGOじゃ！』

「あっ……」

そして、またしても間髪入れずに丸子がヘッドギアを嵌め、夢の世界へ旅立ってしまった。その上、定位置は六部の膝枕。リア充爆発しろ。

（どうなっちゃうのよ、これ……）

ベア子は考えるのを止めたくなったが、ギリギリで思い止まった。

だが、本当にどうなってしまうのだろう。この物語が何処へ向かうのか、それは創造主にすら、もう分からない……。

◆ジャカロップ

・ティアーザ図鑑№０３２
・分類：おねだりポケモン
・タイプ：フェアリー
・性別：あり
・特性：メロメロボディ／てきおうりょく／フェアリースキン（隠れ特性）
・種族値

HP：45
こうげき：50
ぼうぎょ：30
とくこう：55
とくぼう：30
すばやさ：125

・図鑑説明

オドシシのように立派な二本角は見掛け倒しで、触ってみると軟らかく温かい。光合成に使っていると言われている。非常に警戒心が強く、敵と遭遇すると脱兎の如く逃げ出すが、焚火をする旅人には可愛い仕草で餌をおねだりする強かさも持っている。

日中は光合成で栄養を蓄えているが、夜は月の光で進化のエネルギーを溜め込んでおり、石に反応して様々な形態へ進化するという。

鳴女さんの悪意とアデルの決意

このニブチンガァ！

アリス&リデルに案内されたそこは、
「うぉおおおっ！」「うがぁあああ！」
『イオラァッ！』『レディァアンッ！』
ポケモンに使役された人間が死闘を繰り広げる、地下闘技場でした。
ハァ～イ、皆。ちっちゃなちっちゃな鳴女さんだよ～。
いやぁ、二次創作とは言え、ポケモンの世界に迷い込んでから随分経つけど、バッチはまだ3個目だし、私たちは何時になったらクリア出来るんだろうね。正直、この展開に飽きている人も居ると思うんだ、結構な割合で。
それでもね、冒険は途中で投げ出しちゃ……駄目なんだよ。
あるいはプロットが路頭に迷っている、とも言える。そっちの方が普通に駄目だ

わ。

まぁ、それはそれとして。

双子姉妹のアリスとリデルの誘いに乗る形でやって来たが、この有様には驚いたね。ポケウッドの「タイムゲート トラベラー」じゃん。使役してるのレディアンとイオルブだし、使われてるのカラテオーとヤマオトコーだし。やっぱりヒューマンボールが使われてるのかな？

ともかく、ここが真面な施設でない事は、よーく分かる。流石は裏カジノって所か。

『何なんだ、ここは？』

「見ての通り」「闘技場よ」「参加者は人間のみ」「生き残った者だけが出られる」「ここはそういう場所」「死の剣闘大会ね」

『ふーん……』

あ、主役は人間なのね。口振りから察するに、参加者同士で殺し合い、最後の一人だけが脱出権（えいよ）を勝ち取れるって訳だ。マジで剣闘士じゃん。

『でも、どうやって人間同士で争わせてるんだ？　状況から察するに、指示を出

すのはポケモンなんだろ？』

「その通り」「これを見て」

と、アリスとリデルが手品の要領で〝とあるボール〟を見せてきた。

「これはわたしたちが開発した「ヒューマンボール」」「人間のみを対象とした唯一無二のボールよ」「これに囚われたが最後、ポケモンが許してくれるまで解放される事はない」「あとは何かの事故で死んだ時くらいかしらね」「指示系統はポケモンバトルと一緒」「その人間が可能な技を最大４つまで駆使して戦うの」「瀕死になった方が負けね」「もちろん、ポケセンなんて便利な物は使えないから、大抵はそのまま死ぬけどね」

『へぇ……』

やはり、ヒューマンボールなのか。それなら納得だな。

「な、何でこんな事を!?」

しかし、理屈が納得出来ないというか、そもそも現状を受け入れられない奴が１人。むろん、お子供なボブである。

「それはどういう意味？」「どうしてこんな非人道的な真似をしているのかって事

かしら？」

「そうだよ！　この人たちが何したって言うんだ！」

ま、初見じゃ驚くよな。

だけど、よく考えれば分かる事だろうに。

幹部か下っ端かは知らないが、こいつらはスマイル団の一員だ。仮面を付けてるし、ジェフリルもそれっぽい事を仄めかしている。凡そ間違いないだろう。

そして、スマイル団はポケモンを傷付ける人間を許さない。ようするに、こいつらは〝それだけの事〟を仕出かしているのである。

「こいつらは、所謂マフィアや密売人に当たる人間」「つまりは裏社会の住人よ」

「その中でも、とびっきり質の悪い――――ポケモンを使い捨てるように殺した奴らを集めたの」「自分がされる側になってもらう為にね」「部下はわたしたちが皆殺しにしているから逃げようは無いし」「そもそも生きて還すつもりもない」

「そんな……」

おいおい、驚いてる場合か、ボブよ。私たちがここへ誘い込まれたって事は、つまりは〝そういう事〟なんだろう？

「もちろん、あなたも例外じゃない」「団長やジェフリルは許したようだけど、あたしたちはそんなの知らない」「知った事じゃない」「ポケモン（トモダチ）を死なせた人間は、「死」以外の償いをさせる気が無いのよ」「だって……」

絶句するボブに、アリスとリデルがピエロの恰好に早着替えして、仮面を半分だけ外してから宣告する。

「「わたし（あ）たち、人を殺すのが、大好きなんだもぉ～ん♪」」

「……！」

なるほどね。子供の心が純真だと思うのは、人間の大人だけって訳だ。どういう教育を施したら、こんな面白い人間になるんだか。

それにしても、スマイル団に狙われ過ぎだろ、ボブ。団長の正体がアレだったから仕方ないとは言え、全力で命を刈り取られそうになっとるやん。

「「先ずは一投」」

すると、有無を言わせずアリスとリデルがヒューマンボールをボブに投げ付けた。2つ同時に繰り出す事で、確実に捕獲する狙いがあったのだと思われる。

「ひっ!?」「……っ、させませんよ！」

だが、すっかりヒーロー&ヒロインの関係になってしまったアデルが庇ったせいで失敗。代わりに彼女自身が捕獲されてしまった。

――――――って、あれ？

『何で私まで～！』

ボサッと見てたら、残る流れ弾が私に飛んで来た。理不尽なり～。

「あらら、まさかの大失敗」「アデルは良いとして、ナキメまで収まっちゃうとは」「でもこれ、既にオッズが始まっちゃってるのよね」「仕方ない。ジェフリルのお気に入りならヒューマンバトルでも勝ち残れるだろうし、今は〝こっち〟を先に片付けてしまいましょう」「すぐに殺すのは勿体無いけど」「ここまで来て、逃がす方が馬鹿よね」

「ひぅぅ……！」

ボールの外から、アリスとリデルの世間話が聞こえる。〝あいつムカつくぶっ殺そうよ〟という、悪ガキなら珍しくもない会話である。本当に殺してしまう事を除けば、だけど。

あーらら、ボブも遂に年貢の納め時かー。

『パイモォンドォ！』『ガニマタァッ！』『チャバヌキィ！』

「「……」」

だが、奴の手持ちが自発的にボールから出て立ち塞がったらしく、流石にアリスとリデルも動きを止めたようだ。

『しゃらんら～♪』『ゑ？』

さらに、何故か私までボールから繰り出された。後ろを見れば、そこには「してやったり」という顔のラランテスが。という事はつまり、

『お前、何時の間に賭けに参加してやがったんだ!?』

『しゃらんらら～♪』

『何ィ、前に使った事があるだとぉ!?』

曰く、ここで〝前のトレーナー〟を処分したんだとか。お前も悪魔やないか。

『しゃらしゃら、しゃららんが』

しかし、私を始末するつもりは無いらしく、単に嫌な予感がしたから先回りしていたらしい。そりゃあ、見知った顔が死の裏舞台に案内しようとしてたら、嫌でも気付くよな。

だけど、何でそんな事を？

『しゃららきー』

ああ、十中八九ボブ狙いだろうけど、三人揃って連れて行こうとしたから、咄嗟に判断したのか。

ちなみに、もう1個の方はアデルのカロンダイトが持ち主扱いになっているらしい。何気に凄いなあいつ。

……つーかさ、

『何で普通にポケモンと会話で来てる訳？』

「それがヒューマンボールの機能」「ポケモンの意思を言葉として伝える事が出来るのよ」「まぁ、わたしたちはそんな物がなくても話せるけどね」「友達だからね」

『ヤベェな、スマイル団……』

Nの同類ばっかりじゃん。末恐ろしいクソガキ共だわ。

「それはそれとして、出て来たのなら丁度良い」「ナキメはどうする？　参加自体は強制だけど、別に〝降参〟という形で棄権しても良いし、その場合でもペナルティとかは負わせないわ」「そのまま出られるし、何なら慰謝料とかも払うけど？」

『うーん……』
確かに美味しい話ではあるんだけど……、
「……！」
チラリとボブの方を見ると、怯え切った目で助けを求めて来ていた。
――――ニヤリ。
『いや、参加しよう。アデルも一緒にな』
「ゑ？」
『そんで、アデルが優勝したらボブを含む全員で地上へ生還して、私が優勝したら私だけが生還って事にしよう』
「ああ、なるほどね……」
私の魅力的な提案に、アリスとリデルが顔を綻ばせる。
いやねぇ、私もいい加減付き合いきれなくなってきてるのよ、アデルやボブとの友情ごっこ。ここいらでそろそろ白黒ハッキリ付けようや。
私だけが楽しめるようにねぇ！
『カロォオン』「……良いでしょう、受けて立ちます」

と、影の中から現れたカロンダイトに呼び出され、アデルが憤懣遣る方ない表情でこちらを睨み付けて来る。良い度胸じゃねぇか、このニブチン女が。

言っとくけど、怒って良いのは私だけだよ？

……何せ、もう知ってるからな。

『それじゃあ、ちょっくら殺し合いと行こうか』「望む所です」「あわわわ……」

こうして、私たちは闇のゲームへと身を投じるのであった。

とりあえず、〝私の為に争わないで〟みたいな顔止めろ、ボブ。

◆◆◆◆◆◆

アデルは激怒した。

かの邪知暴虐の女王を除かねばならぬと決意した。

アデルには本当の悪魔（ニンゲン）が分からぬ。

アデルはベアード軍の最高司令官である。常に敵と戦い、蹂躙して来た。

けれども、底知れぬ悪意に対しては、人一倍に鈍感であった……。

――――冗長が過ぎたか。

皆さんご機嫌よう、アデル・フォン・アスワングだ。この世界ではポケモント

レーナーをやっている。どうしてこうなった……。

さらに、今は自分の手持ちポケモンに使われる魔法少女になっている。本当に、何がどうしてこうなったのか、さっぱり分からない。

だが、これだけは分かる。鳴女は一貫して敵なのだと。

私は油断していた。安心しきっていた。大敵がすぐ傍に居るというのに。

そう、鳴女は最初から私に協力するつもりなど無かったのである。この地下闘技場で行われるヒューマンバトルに託けて、自分だけ助かろうとしているのが、その良い証拠だ。それどころか、この瞬間を迎えるまで内心で嘲笑い、後は存分に嬲りものにしようとしている。これを邪悪と言わずに何と言うのか。

……正直なところ、私は彼女と分かり合いたいと思っていた。友人関係は無理かもしれないが、仲間意識くらいは共有出来れば、と願っていた。この夢の旅路で、少しでも距離が縮まって欲しかった。

ベアード軍の最高司令官として在り続けてきた身として、自由奔放・唯我独尊に今を生きる鳴女が羨ましかったのかもしれない。

しかし、それは叶わぬ夢、虚しい妄想だった。

鳴女は私を仲間だと思っていないし、何なら生き物として見ていない。彼女にとって、アデル・フォン・アスワングという女は、叩けば踊り狂う玩具でしかないのである。

そんな鳴女が、私の為に丸子を差し出す訳が無かった。

事実、あの会議でもベアード軍に協力するとは言ったものの、丸子の事柄に関してははぐらかしていたような気がする。

なのに、彼女の最終選別試験や大会議を乗り越え、宴の席を共に過ごし、この世界を共に歩んで来た事で、すっかりその気になってしまっていた。今思うと滑稽な話だ。

そう……そうだとも。世の中、結局は騙される奴が悪い。幾ら嘆こうが、訴えようが、負け犬には遠吠えしか出来ず、負け組は枕を濡らすしかない。

だが、私はそんな事は認めないぞ。

私はアデル・フォン・アスワング。ベアード軍の最高司令官。

しかし、今はただの人間、子供のアデルちゃんである。地位も名誉も、ベアード様の思惑や鳴女の事情など知った事か。何で私ばっかりこんな目に遭わなきゃいけ

ないんだ。

以心伝心？　何それ、美味しいの？

誰がこの夢の舞台を用意したのかは知らないが、そもそも何でそんな回りくどい事をするんだよ。

これでも若干脳筋な自覚はあるから、言われなきゃわからないし、それを分かって黙っていた奴らの全員がムカつく。鳴女はもちろん、ベアード様も、ベア子様も、その他大勢も、皆同類だよ。

もう知らない。頼みもしない。我慢ばかりの中間管理職なんて、もううんざりである。この危機的状況に置かれて、自分の本音が分かったような気がする。

皆死ね。私の邪魔をする奴は皆殺しにしてやる。倫理観だの忠誠心だの、そんな物クソ喰らえだ。もうやーだ、やーめた。

こうなったら、力尽くで私に従わせてやる！

「うぉおおおおっ！」

「……」

ああ、そう言えば今は対戦中だっけ。カロンダイトは「ガンガンいこうぜ」とし

か言って来ないし、この如何にもあくどい社長閣下様みたいな野郎はスットロいしで、全然気付かなかった。

つーかさぁ、

「ウザい」「ボゲェ!?」

私は八つ当たり同然に、男の腹を貫いた。トレーナーポケモンのコロトックが悔しがっているが、割とどうでも良い。私は今、このムシャクシャを誰かをグシャグシャにして晴らしたいんだよ。

だから、死ね。

そして、早く次の生贄を寄こせ。

鳴女とは決勝まで行かないと殺し合えないようだから、サクサク殺したいんだよ。

「……どうした、来ないのか？」

「ひっ……」

「来ないなら、こっちから行くぞ！」

「うぎょあああああああああ！」

私は次なる対戦相手――――小規模なマフィアのボスっぽい男の股間を掴

み、握り潰しながらもぎ取った。それだけでもう、男は海老のように跳ね回り、やがて息絶えた。あまりにも呆気ないので、死体を雑巾絞りにして血の雨を降らせてやった。トレーナーポケモンのバタフリーが絶句している。いい気味である。

鳴呼、だけど足りない。この煮え滾るマグマのような怒りは、こんな〝お遊び〟じゃ収まらない。もっと、もっとだ。Ｈｕｒｒｙ!! Ｈｕｒｒｙ!! Ｈｕｒｒｙ!!

「や、止めろ、来るなぁあああっ！」

「悲鳴を上げろ！　豚のようなぁ！」

「プギィイイイイイイイッ！」

また一つ、命が散った。薄汚い花火だ。何の価値もない。

――――鳴呼、何て卑しいんだ、私は……。

◆イオーム

・ティアーザ図鑑№０２４

・分類：おかめポケモン

・タイプ：エスパー／ひこう
・性別：あり
・特性：マイペース／びびり（隠れ特性）
・種族値
HP：75
こうげき：35
ぼうぎょ：52
とくこう：102
とくぼう：51
すばやさ：92
・図鑑説明
とてもマイペースなポケモン。飛ぶのはあまり好きではなく、枝に止まってボーっとしている事が多い。おかめ模様のポッチャリ顔が可愛らしいと人気のポケモン。
その一方で物真似が上手くお喋りであり、ペラップと仲良くお話している姿が度々目撃されている。そこがまた可愛いと、両方手持ちに入れるトレーナーも結構

いる。

鳴女さん、グラディエーターになる

鳴女さんはやはりこうあるべキ。

飛び散る肉片、砕ける骨格、彩る血飛沫。
『おーおー、殺ってるねぇ。おしっこチビリそうだよ、うんうんうん♪』
遠目に起こるその惨劇を、私は心を躍らせながら眺めていた。
アローラ～、視聴者の諸君。ポケモントレーナーの鳴女だよ。いや、今は使われる方か。どうでも良いけど。
そんな事より聞いてくれ。私たちは今、紆余曲折の展開を経て、ドロンゴルシティの地下闘技場で、どう考えても違法なバトルロワイヤルというか、グラディエイトな決闘に参加している訳だが……遂にネタバレの時間ですよ。
いやー、長かったね。ここに至るまで、様々な事を積み重ねて来た。最終選別試験から始まり、会議&祝賀会でその気にさせておきつつ、夢の世界でちょくちょく

フラグを立てて、この闘技場にて漸く真相が明かされる。

そう、私は最初からお前に協力する気なんて無いし、それとは知らずに大喜びしている姿はお笑いだったぜ。

だからこそ、あの壊れっぷりが映える。間違いなくバズるだろう。少なくとも、私の脳内ＳＮＳでは蜂が飛び回っています（笑）。

さて、とりあえず現状を説明するとしようか。

ここは地下闘技場。デザインはまさしくコロシアムで、ジムスタジアムばかり見てきた身としては少し違和感があるが、ここは言いっこ無しで。収容人数が10万人を超える規模であり、とても地下施設とは思えない広さだ。観客の大半はポケモンだが。

さらに、ここではポケモンバトルではなく、ヒューマンバトルが行われる。スマイル団の逆鱗に触れるような事をやらかした〝訳アリ〟な人間たちが、ヒューマンボールによりポケモンの支配下に置かれた状態で殺し合う、実に素敵な闇のゲームである。

優勝賞品は自由と解放。それ以上でもそれ以下でもそれ以外でもない。生きて還

れるだけ有難いと思え、という事だろう。賭けも行われているので、損得勘定が関係するのは観客だけかもしれない。

ルールは総当たりではなく、厳正なあみだくじで組まれたトーナメント形式。勝った者は生き残り、負けた者に待つのは死だ。

ま、散々ポケモンの命を弄んできた奴らだから、誰も同情なんてしないだろうけど。ポケモンしかいないからな、客席に。

そんなデスマッチに、私たちは飛び込みで参加している。繰り手は私がラランテスでアデルはカロンダイト。優勝賞品は己の生存権とボブの命運である。私が勝ったら私以外は皆死に、アデルが勝てば二人仲良く地上に戻れる。とても分かり易い、シンプルなルールだ。

ちなみに、トーナメント形式という関係上、組み合わせは時の運次第なのだが、運命の悪戯か、私たちは決勝に上り詰めるまでは戦えない。「決勝で会おう」とか、フラグにも程がある。

そして、今現在、私は控室から先に戦っているアデルの様子を見ていたのだが……まぁ、ブチ切れてるね。はぐれ研究員にマフィアのボスや密猟者と、見事に犯罪者

が揃い踏みで、その上どいつもこいつも銃やらナイフやらで武装していたのだが、誰の例外もなく破壊されていた。

殺された、ではない。文字通り、破壊されている。アデルの拳や蹴りが、相手の身体を切り裂き、粉砕しているのである。猗窩座かお前は。これまで雌化した柱共とジム戦を繰り広げてきたが、女版の十二鬼月と戦うのは、前世でも今世でも初めてかもしれない。楽しみだ。

さて、その為には、私も決勝まで勝ち上がらなければならない。

既に夢から覚め始めているのか、本体の身体能力が反映されてきているような気がする。それはアデルも同じ事だろう。

止めどない衝動に心を燃やされ、身体が興奮状態になっているのかもしれない。良い事である。

さぁ、それじゃあ、アデルだけがお楽しみというのもつまらないし、そろそろ私も本気を見せるとしよう。殺し合いは大歓迎だぜ。

「お前がオレの相手か。これは余裕だな！」『ストラァオッ！』

と、コートで出迎えてくれる、哀れな生贄（ヤギ）さん（トレーナーポケモンはストライ

ク）。ここまで見事に三下だと、逆に尊敬出来るな。地下落ちする前はブラック企業の社長（見た目は平社員並みに若い男）だったのか、妙に偉ぶってるけど、お前が戦うんだからね？

つーか、今まで何を見てきたんだね、君は。アデルの試合を観た後だと、絶対にそんな台詞は吐けないと思うんだけど。武器を持っていない所を鑑みるに、もしかしたら武術を嗜んでいるのかもしれないが、脅威は感じない。

だって、元のステータスが反映され始めている私を相手に、達人程度じゃ相手にならんのよ。

でも、せっかくだから最初くらいは華を持たせてやろう。

『ほら、来いよ。先ずはこの可愛い顔を殴ってみろ』

「いや、逆に遣り辛いんだけど……」

むぅ、ポケモンを死なせるような奴が、何を躊躇う事があるというのか。仕方ない、煽るか。

『何だ、子供一人殺せないのか、腰抜けが』

「腰抜けだと……誰にも、腰抜けだなんて言わせない……！　ぶん殴ってやるぞ、

その面を！」

この程度でいきり立つとか、「3」のマーティみたいな奴だな。声がティモンなんだよ。デロリアンに乗って時間でも旅行してろ。ハクナマタタだ。

ま、お前がこれから行くのは、あの世だろうけどなぁ！

「うぉらぁっ！」

意外と素早い動きで距離詰め、宣言通り容赦なく顔面を殴って来る若社長。うん、高みでふんぞり返っていた割にはやるじゃないか。

『……ハァ』「なっ……微動だにしないだと⁉」

だが、無意味だ。

こう言っては何だが、所詮こいつは人間なのである。幾ら超人的な能力を持っていても、本物の鬼に戻りつつある私に、敵う訳が無いんだよなぁ。

「……うぉおおっ！」

一瞬だけ驚いた若社長だったが、すぐさま追撃の態勢に入った。こちら側の一般人を12ダースくらいぶち殺せそうな殺人拳の連打が私の顔面を襲う。

『フゥ……』「そんな、馬鹿な……！」

しかし、やはり無意味だった。若干拍子抜けだな。スーパーマサラ人が存在するような世界だから、こういう腕に自信のある類の人間なら、そこそこ戦えるかと思ったが、何の事は無い、あの町がおかしいだけのようだ。

なら、こいつにもう用はない。興醒めしたとは言え、中々面白い反応を見せてくれた礼に、一撃で決めてやろう。

『えい』「ぺぇっ！」

という事で、瞬歩ではなく響転（ソニード）で目の前から消えた後、脳天に拳を振り下ろして、そのまま地面の一部にしてやった。血の彼岸花が広がり、私を真っ赤に染め上げる。

嗚呼、何て気持ち良いんだ……。

「ひぃぃ、や、やめ……やめ……ＬＵＵＵＵＵ！」

『はい、終わり♪』

「ま、待て、話せば分かばぁあああああ！」

『約束通り、放してやったぞ』

「うぉおおおおおおおぎゃあああああ！」

『いや、何なんだ、お前は。頭の使い方間違ってるだろ』
「い、いや、止めて、お願いよ！」
『だが断る』
「ぎゃあああっ！　死にたくな――――ぴぎぃいいいっ！」
『それも断る。いいから死ね、雌豚』
そんな感じで、私は次々と放り込まれる地下送り野郎共を、続々とあの世へ送り届けてやった。これぞ送り人である（笑）。
うーん、やっぱり物足りないなぁ。所詮はポケモン殺して粋がるような馬鹿共か。下らない。
まぁ、ともかくＤＩＥジェストでお送りしたが、いよいよ決勝間近。このバトルに勝てば、晴れてアデルとの大血戦だ。
いやー、楽しみだねー。この場にいる人間で唯一相手になりそうなやつだからな。それに、今のあいつは怒りでブーストが掛かっている。癇癪起こした子供がどれだけ足掻けるか、お姉さんに見せてごらんよ～♪
さて、それはそれとして、準決勝の哀れな生贄ちゃんは誰なのかな～？

ま、誰が来ようが同じだろうけどねー。

――――ところがどっこい。

『やっほー、鳴女。元気にしてたかぇ？』

『今度はお前かよ』

相手は我が家のマスコット枠、丸子だった。何でやねん。

ちなみに、トレーナーポケモンはカラマネロ。違和感は無いけど、確か「タイムゲート トラベラー」ってむしタイプが主体じゃなかったけ。それ言ったら私のトレーナーポケモン、ララランテス（くさタイプ）だけどさ。

ようするに、〝人に害意〟があればそれで良いのだろう。カラマネロとか、その筆頭だからな。

さらに、よく見ると観客の傾向にもかなりの偏りがある。レベルアップや石など〝特殊でも自然界でどうにかなる〟タイプの進化をするものばかりで、通信進化組は殆ど見受けられない。居ても目が荒んでいる。それはトレーナーポケモンも同じ。むしタイプが多いのは、やはり種族値の問題か。

何れにしろ、人間に対するヘイトだけは共通しているのが特徴って事か。

まぁ、それは良い。そんな事は分かり切っている。問題は丸子だ。

『いやー、零余子が面白そうな事しとるから、わしも参加したくなってのー』

『なるほどね』

大体あいつのせいか。よし、起きたら処刑だな。今度はサイコロステーキじゃなくてすり身にしてベア子に食わせてやる。あいつもあいつで、今回は余計なお世話をしてくれたようだしな。

『……それはつまり、私に殺されても文句は言えないって事だよな？』

悪いが、私は私に逆らう全てを許さない。例えマスコットだろうがインキュベーダーだろうが、死ぬまで殺し続けてやるぞ。

『フフフ……キャハハハッ！』

すると、丸子は不敵に、心底楽しそうに嗤い、腕を六本に増やす。

この世界に特殊能力は持ち込めないようだが、あくまであれは血鬼術ではなく身体機能の一部だからか。相変わらずのカイリキーである。それをカラマネロが操っているのがじわる。

『おまえとわしが出会った日の事、覚えとるかの？』

『文字通り手も足も出ずに回収されたっけな』

『そうじゃそうじゃ。その事を後悔はしとらんが……少しくらい、リベンジはしたいって思うじゃない？　あんた、今は身体能力しか反映されてないんでしょ？　しかも、全盛期からは程遠いレベルで……』

『……』

そう、今の私は所詮お子供。幾ら身体能力が反映され始めようと、子供と大人では体格差が顕著だ。溜められるエネルギーも、リーチも全く違う。どんなに頑張っても覆せない、〝物理的に届かない〟のである。本来なら、それを無限城の能力で補えるのだが、今は使えない。

つまり、パワーは同等かそれ以上かもしれないが、手数とリーチの差でそれを上手く当てられない、という問題があるのだ。

だが、逆に言えば、懐に潜り込んでしまえばこっちの物。その阿修羅モードが弱点となるのである。

ようは、先に相手に噛み付いた方の勝ちなのだ。

なるほどなるほど、実に子供らしく分かり易い。相手が弱っていれば尚更だよな。

……いいだろう、分からせてやる。
幼女を、分からせてやるぅ！
『何かマズい独白が聞こえた気がするんじゃが!?』
『気のせいだぁあああああああああああ！』
そして、私と丸子の戦いが始まった。
あの時は一方的だったが、これ程分かり易く挑発までして来たんだ、今度は楽しませてくれるんだろうなぁ!?
『フンッ！』『甘い！　でぁっ！』『うぉっ！』
先ずは響転的な物で間合いを詰め、顎を粉砕しようとしたのだが、丸子には上手い事ひらりと躱され、右ボディからの左フックとチョッピングライトが奇麗に決まってしまい、私は華麗に吹っ飛ばされた。
うーむ、やはり手数の差が痛いな。腕力こそ予想通りこちらが上だが、こうも連打されると防ぎ切れん。是非ともインファイトで殴り勝ちたいが、これは厳しいかもな。
『よし、お前は今日から、踊るちんちくりんではなく、殴るちんちくりんだ！』

『夕方に放送したらアウトじゃろ、それ……』

何の文句があるのだ、せっかく昇格させてやったのに。ノリが完全に負け犬⇒馬の骨って感じだけど。せめて凡骨になってから出直して来い。

『減らず口はそこまでじゃっ！　食らえっ！』『うぉっ!?』

と、丸子がフィールドの瓦礫を掴んでぶん投げてきた。以前見た戦い方である。そう言えばこいつ、見た目で誤解されがちだけど、中距離が得意なガンナータイプなんだよね……。

手の届かない所から手数に物を言わせた投擲を連打してくる。文字に起こしてみると、普通に厄介だな。

しかし、素手でしか戦えない私ではどうしようもない――――という事もない。

『せいっ！』『フン！』『何ィ!?』『オラァッ！』

握り潰すのは無理だが、キャッチ∞リリースしてやればいいのだから。

『やるではないか！　そんなちんまいボディでも、平然とやり返して来るか！　いいぞぇ、それでこそじゃ！　ならば、もっと面白い事をしてやろう！』

だが、丸子もその程度は想定内だったようで、然程は驚かず、むしろ更に愉しそうに笑った。

『さあ、遊び続けよう。夢から覚めるまで、時が、尽きるまでぇ！』『ドワォ!?』

さらに、観客席へ飛び込んだかと思うと、ビリリダマやマルマインを引っ掴み、文字通りの爆弾ボールとしてぶん投げてきた。威力は大した事は無いが、ヒットと同時に爆発してしまうので、投げ返す事が出来ない。とても理に適った戦法だ。

というか、観客を使うのはありなのか？

『しゃらんら～♪』『なるほど……』

ラランテス曰く、こんな見世物に来たのだから、自分の身は自分で守れ、という事らしい。

一応、光の壁やリフレクターが張られているようだが、あくまで軽減なので、気休め程度なのだとか。

ま、普通は丸腰の人間に負けたりはしないからね、ポケモンは。完全に自業自得である。被害者も手を出せば加害者だからな。巻き込まれても、文句は言えまい。

しかし、どうする。流石にこのままじゃヤバい――――――、

『キャハハハハッ！』『ズワォ!?』

とか何とか言っていたら、さっきとは毛色の違うダメージが入った。

見ると、使われたのはアローラゴローニャ。確かに爆発するけどさ！

『何じゃ何じゃ、もう終いかの？　これではつまらんではないか！』『ホホホホッ！』

防戦一方の所に、とんでもない爆弾を叩き込まれ、見事に天を仰いだ私を、丸子とカラマネロがケラケラと嗤っている。元より悪い子なのは知っていたが、こうも馬鹿にされるとね……。

――――ブチィイイッ！

そして、私の中の何かが切れた。

『ヴォァアアアアアアアアアアアッ！』

『ひっ……！』

突如、雄叫びを上げて復活した私を見て、丸子が怯えと焦りが入り混じった表情を浮かべたが……もう遅い！

『ヴァルァアッ！』『うわっ!?』

天をも砕く拳でフィールドに地震と地割れを引き起こし、丸子の足を取る。

『ハァアアッ！』『ぐおぉっ!?』

さらに、縺れた隙を突く形で妖力込みの殺人拳を叩き込む。それ自体は防がれたが、ガードした腕は吹き飛ばしたので良しとしよう。これで残る腕は二組。

『……舐めるなぁっ！』

更なる連打を叩き込もうとしたのだが、腕を掴んで止めるという、何とも器用な遣り方で防がれてしまった。

これで私は打つ手が無くなった……と言うとでも、思っていたのかぁ!?

『このっ……！』『フゥッ！』『何だとぉっ!?』

すっかり反撃を封じた気でいた丸子が放って来た左右のボディブローを、私は脇を閉める事で逆に封じ返した。

そう、こいつは忘れていたのだ。パワーそのものは、私の方が上だという事を。

そして、残る腕を掴み返して広げてしまえば、ほら、そこにカチ割って下さいと言わんばかりの脳天が。これは、砕くしかないよなぁあああっ！

『ハッ！　フゥッ！　ヴォァアアッ！』『がっ！　ぐっ！　ぎっ！　……かはっ

！』

丸子のがら空きな頭に、何度も何度も頭突きを叩き込む。額から血が噴き出そうが、白目になろうが、関係ない。

『ヴォルァアアアッ！』『ぐげぎゃばぁっ!?』

最後は衝撃で腕を引き千切る威力のヘッドバッティングを食らわせ、カラマネロ諸共壁に張り付けにしてやった。ズルリと剥がれ落ちた丸子は痙攣するばかりで、最早動けない様子だった。

……死んだか？

いや、キッチリと殺してやる。

私を怒らせるのが全部悪いんだから、お前はここで死ぬんだよぉっ！

『ゴヴァアアア――――ウゴァッ!?』

だが、いよいよ以て止めを刺そうとした、その瞬間。今度は私が吹っ飛んだ。背後からの強烈な衝撃で倒されたのである。

一体何がと振り返れば、気絶したテッカグヤと、

「誰を殺そうとしている、ふざけるなぁ！　いい加減にしろ、このヤローッ！」

それを投げたと思われる、般若の形相を浮かべたアデルの姿が。

――――――ふざけてんのは、お前だ、このやろぉおおおっ！

◆ウルファング

・ティアーザ図鑑№００５
・分類：フクロオオカミポケモン
・タイプ：いわ/ほのお
・性別：あり
・特性：もうか/もらいび（隠れ特性）
・種族値
HP：75
こうげき：85
ぼうぎょ：55
とくこう：１０５

とくぼう：55
すばやさ：１１２

・図鑑説明

番いで行動する習性。夫婦の絆で獲物を仕留めるのだ。主な獲物はミミッカやワロルーで、身体の大きなオーガルンには連携攻撃で対抗する。尻尾の炎は１５００℃に達し、全身からパワージェムを放つ。

元々は大陸全土に分布していたが、移住して来たガラル人やカントー人に「家畜を荒らす害獣」と誤解され、狩り尽くされて絶滅した。実際はルガルガンの仕業だったようだが、それが知られたのは絶滅した後だった。

ちなみに、タスマニー島のイメージキャラクターの１匹として絶賛され、それを受けて化石から現代のティアーザ地方に蘇った。野生に帰化したウルフルやウルファングを捕まえる事は禁止されている。

血で血を禊ぐ戦い

スーパー血みどろフィーバータイム

『ヴォァアアアアアアッ！』

横槍を後頭部に食らった鳴女が血走った目で咆哮している。目の周りにも血管のような物が浮き出ており、傍目には化け物にしか見えない。

さらに、身体中に黒紫色のオーラが迸り、怪電波のような妖気が放出され始めた。まだ弱々しいが、その本質は来訪者と同様の物。脳を直接侵し、自らの眷属へと染め上げる死の波動だ。浴び続ければ、ポケモンでさえ己の変質を抑えられない。

それが分かっているのか、観客の半数は晒される前に逃げ始め、残るは自ら壁を張って守りの態勢に入っている。光の壁で防げる辺り、鳴女の怪電波は特殊攻撃に該当するようである。

居るだけで全てを書き換え、秩序ごと破壊していく。まさに来訪者の生き写し。

しかし、今は感心している場合ではない。今目の前にいるこいつは、明確な敵なのだから。

――――そう、アデル・フォン・アスワングの本当の戦いは、これからだ。

『ヴァアアッ！』「……ッ!!」

アデルの身体能力でさえギリギリ視認出来る程の速度で距離を詰めた鳴女が、阿保みたいな量の妖力を込めた〝殺神拳〟を放って来る。咄嗟に即席の魔力バリアを張ったおかげで無事だったが、ただガードしただけではアデルの上半身が吹き飛んでいた事だろう。破壊神（なりめ）を相手にするとは、そういう事である。

だが、攻撃は一発限りではない。嵐のような一撃必殺が、右から、左から、下から、上から、縦横無尽に襲い来る。それら全てを真面に防いでいてはあっという間に消耗してしまうので、時に見切り、時に受け流しながら、アデルは最小の被弾率で往なしていく。

『ギャヴォッ！』「ぐっ!?」

しかし、鳴女は別にボクシングをしに来た訳ではないので、上に集中して下がお留守になったアデルの足を払い、倒れる前にスマッシュで殴り飛ばした。全身に薄

く魔力を漲らせる事でカバー範囲を広げていたおかげで胴体は無事だったものの、アデルの肋骨に数ヶ所ヒビが入った。身体強化を施してヘビーアロイくらいに硬くなっていたというのに、この有様だ。ピンポイントバリアなんぞしていたら、命が幾つ有っても足りない。

だが、何時までもやられっぱなしのアデルではなかった。

「つぇあっ！」『グヴァッ!?』

バウンドする方向を調整する事で鳴女の上に回り込み、魔力全開のドロップキックを食らわせた。鳴女も妖気の壁を張っていた為、頭はまだあるが、流石に一時的にスタンしてしまう。

そんな隙だらけの状態を見逃す程、アデルは優しくない。

「ドラァッ！」『ヴォァアアッ！』

腕の力で着地をキャンセルし、そのまま新体操の如く地を跳ね、鳴女の脳天に踵落としを食らわせる。徹底的に脳を機能不全にする作戦のようである。

しかし、ここで鳴女が反撃に移る。

「はぁっ！」『ギャヴォオオオッ！』「なっ……ぐげばっ!?」

アデルの魔神パンチを、何とダメージを受けている筈の頭突きで相殺し、腕を掴んで引き寄せながらもう一発叩き込み、最後は裏拳で顎を撥ね上げた。

おそらく、スタンしながらも頭部に妖力を集中させ、ピンポイントバリアで殴打したのだろう。実に頭のおかしい遣り方だ。

そして、今度こそ地面に倒れたアデルを蹴りで浮かばせ、それを華麗にキャッチ。膝を着き、太腿に叩き付けながら力を加え続け、背骨を粉末にしようとする。

「……づぁあああああっ！」『ヴォァオオッ!?』

だが、アデルも負けてはいなかった。驚いた事に自ら肩と太腿の関節を外し、拘束が緩んだ瞬間を狙って頭突きを食らわせ、そのまま抱きかかえるように飛び付き、脚で首を絞めつつ投げ落とした。

さらに、魔力を鋭角に纏いながら、鳴女の腹に拳を叩き込む。

『ゴハァッ！』

思わず鳴女が血を吹き出す。

「ぐっ……!?」

しかし、胃酸と混じり合い猛毒の血液となっていたそれを浴びたアデルもまた、

大ダメージを受ける。酸で皮膚が焼け爛れるように、左半分が見せられないような状態になった。

これ以上浴びるのはマズい。アデルは一旦距離を取った。その隙に鳴女も起き上り、血を拭いながら睨み付ける。

だが、静寂は一瞬。すぐさま両者共に動き出し、拳を交える。

『ハァアアッ！』「くっ……！」

一発一発が人体を粉砕するレベルの、鳴女のバレットパンチが連続で放たれる。あまりの速さに、アデルは防戦一方である。

『フゥッ！　ハァッ！　ヴァォオッ！』「げぶぅっ！」

そして、前に集中し始めた所で下から燕返しでガードを解きつつ顎を撥ね上げ、間髪入れずにホワイトファングに繋げ、アデルを地面にキスさせた。更に頭を蹴り飛ばそうとする鳴女だったが、

「――――ずりゃおぅっ！」『ギャゴァアアッ！』

アデルは凄まじい反応速度で足を受け止め、その勢いを利用して自らは起き上りつつ鳴女を持ち上げ、団扇を仰ぐように地面に叩き付けた。

「ふんぬぅううううっ！」『ゴァァ……！』

さらに、今度は頭を掴んで無理矢理立たせると、そのまま力一杯抱き締める。背骨どころか内臓丸ごと大ミンチな、凄まじいベアハッグだ。もちろん、吐血を浴びないよう、口の位置を気にしながら。

……メリメリメリメリッ！

凡そ人体から聞こえてはいけない、大木をへし折るような音が当たりに響く。

『ギャヴォオオオオオッ！』「うがぁっ！」

しかし、鳴女が好き放題にやられている訳もなく、妖力を体内で爆発させ、自身が瀕死になるのと引き換えに、アデルにも致命的なダメージを与えつつ、拘束からも抜け出した。

その上、アデルにとっては絶望的な事態が起きる。

『グルルルル……！』

（こ、こいつ、再生力まで反映され始めてやがる……ッ！）

何と未だ人体であるにも関わらず、鬼としての再生力が適用され始めている。

一方、アデルは元が魔女だからか、それとも混血だったからか、鳴女のように傷

は癒えない。これではジリ貧である。何としてでも、回復が追い付かないレベルの一撃を叩き込み、完全に沈黙させなければ。

その為にも、鳴女には更に怒り狂って貰わねば。

「ペッ……来いよ、雑魚鬼。お前の思い通りになる事なんぞ、何一つない事を教えてやる」

『ギャァヴォオオオオォァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！』

アデルの安っぽい挑発に見事に乗っかってしまう鳴女。完全に頭に血が昇っているのだろう。それとも、〝思い通りにならない〟という言葉に引っ掛かったのか。

何れにしろ、これが最後の勝負だ。

『グヴォァアアアッ！』

「だりゃあああああっ！」

鳴女が上から、アデルが下から、ほぼ同時に拳を放つ。エネルギー自体は互いにガス欠気味なので、直撃すれば只では済まないだろう。というか、確実に死ぬ。妖力や魔力のバリアで軽減していたからこそ、まだ原形を保っていたのだから。

だが、ここでアデルは更なる勝負に出た。

「シッ……！」『グゥッ!?』

何と下はフェイントだったのである。本命は左の上――――――ドラゴンフィッシュブローによるカウンターだ。

――――――ゴバァアアアアアンッ！

肉身が出しちゃいけない音がした。鳴女の身体が仰け反る。

『……ガァッ！』

それでも、鳴女は反撃した。腕の力だけでアデルの顔面を吹き飛ばそうと拳を振るう。

しかし、アデルの素早いシフトウェイトによって躱される。

そして、全魔力を拳にのみ集中させながら、「∞」を描くように身体を動かす。この後に待っているのは、超新星爆発のようなデンプシーロールである。

ゴバァン！　ドガァン！　ズガァン！　バギョァッ！　メギャァッ！　ドワォッ！　ズワォッ！　ゴギャアアン！

一発ごとに爆発音が鳴り響き、鳴女の顔面が左右に超速で振り子にされる。あま

りに音が連続し過ぎて、爆竹の如く耳をつんざく。こんなの特撮で防衛隊の戦闘機が怪獣を攻撃する場面くらいでしか聞けないだろう。

『……、……、……、……ッ！』

最早、再生もバリアも追い付かず、悲鳴すら上げられない。超合金並みの強度を誇る頭蓋骨にヒビが入り、顎が砕け散って、眼球が破裂する。それはもう、見るも無残な、モザイクを何枚重ねても足りなくなるような、悍ましい有様だ。

それでも、アデルは止めない。鳴女が死ぬまで、殺すのを止めない。

「ぐっ……!?」

だが、流石に彼女も限界はある。攻撃にエネルギーの全てを回した為、１０８発目辺りを放った所でアデルも動きが止まり、膝を着いた。

「……」

息を切らせ、意識が途絶えそうになりながらも、アデルは鳴女を見た。俯せで倒れる彼女は、痙攣すらしていない。ほぼ死体である。

「……」

さらに、今度は丸子を見る。気絶はしているが、一応は生きている。腕は何時の

間にか2本の状態になっていた。自分たちが戦っている間に、何とか治したのだろう。

「……」

そして、アデルは少しずつ冷め始める頭で考え、

「鳴女……」

『……』

「――――お願い、力を貸して。奪おうとした事は謝るから……丸子の命、預からせて。妹を、救いたいのよ……」

遂に言えた。

そう、アデルはやっと理解したのだ。結局のところ、自分は奪う側だという事を。鳴女が丸子をどう扱っていようが関係ない。妹の為と宣い、鳴女の大切な〝物〟を掠め取ろうとしたのだから、意地悪も憤りも当然。

ここ暫く鳴女と共に居たからこそ分かる。

鳴女は〝奪われる〟事に敏感だ。過剰な程に。聞けば、人間時代は思い通りにいかない事の連続ばかりだったという。そんな彼女から毟り取ろうとすれば、相応の

態度を取られるのも仕方ない。
　鳴女は本当の悪魔である。欲しい物は全部欲しいし、手に入れた物は絶対に手放さない。
　……だって、人間だもの。
『……よく言えました』
　すっかり冷え切った鳴女が、ポツリと呟く。寝言かもしれないし、そうじゃないかもしれない。
　ともかく、そろそろ夢の時間も終わりである。二人の身体が少しずつ透け始めた。ダメージの蓄積で、この世界における仮初の肉体（アバター）を維持出来なくなったのだろう。冒険はここまでだ。
　後は夢から覚めるだけ――――――。
◆◆◆◆◆◆◆
「何だ……これは……？」
　事の顛末を見送ったボブが、思わず呟く。
　本当に、これは一体どういう事なのだろうか。

己の命運を賭場（ベット）に出され、始まってしまった殺し合い。鳴女は言うまでもないが、アデルまでも人が変わったように虐殺の限りを尽くし、自らと闘技場を血で染め上げ、決勝の舞台に立った二人は、まさしく血みどろの戦いを繰り広げた。どちらも完全に人間を辞めている。ポケモンでさえ怯えて逃げ出すなど、化け物と言うしかないだろう。

戦いは一進一退の攻防を極め、互いが互いを殺し尽くす、悍ましい物だった。勝った方が人類最大の脅威となる。そんな感じの血戦であった。

しかし、結果はドロー、相討ちだった。強いて言うなら、先に倒れたのは鳴女だが、アデルもまた戦闘不能の状態であり、それ以上は無いと言い切れる。

さらに、戦いの終わりと同時に二人の身体が透け始め、やがては露と消えてしまった。

そして、闘技場には観客も含めた誰も彼もが、居なくなった。

彼女たちは、一体何だったのだろうか。

突然現れ、言いたい事、やりたい事を盛大にやらかした挙句、忽然と消えてしまった。それはまるで夢幻であり、一陣の風であり、通り雨のような存在であった。

二人がボブに齎した影響は計り知れない。
「あーあ、消えちゃった」「でも、どうなるの、これ？」「賭けが成立しなくなったんだから……好きにしても良いんじゃない？」「それもそうね」「そうしよう」「そうしよう」
「……！」
だが、自分を付け狙う、この殺し屋姉妹は紛れもない現実である。
アデルと鳴女が消えた今、彼女たちを止める者はいない。好き放題に殺られるだけだ。
「そうはいきませんよ、お二方」
「「……！」」「あっ……」
しかし、そこで意外な人物から待ったが掛かった。
「何のつもり、ジェフリル？」「これはあたしたちの獲物なんだけど？」
そう、アリス&リデルと同じスマイル団の幹部、ジェフリル・マーダーである。
仲間同士で対立するとは、これはどうした事か。
「貴女たちこそ何のつもりですか？　この方はきちんと反省し、確かな絆を育ん

だのですよ？」

まぁ、あの荒療治でも駄目なら完璧に見捨てましたけどね、とジェフリルは語る。

つまり、スマイル団としての意向に反しているのは、アデルとリデルの方なのだ。団長やジェフリルが見逃すと言った人間を手前勝手な理由で、反省しているにも関わらず殺そうとするなど言語道断、という事だろう。

「そんなの知らない」「相談もなく決めたんだから、こっちも勝手にするだけ」

だが、そんな大人の理屈、子供には通じない。子供はこの世で最も純粋で残酷な生き物なのだから。

「やれやれ、素直に反省し許し合えるのが子供の美徳なら、叱られて拗ねるのは子供の悪徳、という事でしょうか。良いでしょう。そこまで聞き訳がないというのなら、分からせてあげますよ」

アデルとリデルの開き直りに、ジェフリルはまったく仕方ないな、とボールを構えた。四の五の言うのは止めて、ポケモンバトルで黙らせる事にしたらしい。

「二対一で勝てるとでも？」

「……いいや、２ＶＳ２だよッ！」

さらに、ここまで怯え縮こまっているだけだったボブまでもがバトルに参加した。ボブもまた、〝脱皮〟の時を迎えようとしているのである。

「良いでしょう。今の貴女なら、隣を任せても良さそうですからね」

「うん……」

「気に入らない」「気に食わない」「だから死んで？」

「そっちがね」

そして、異世界人の居なくなった世界の一角で、取り残された者たちの戦いが始まった。

世界は一つではない。宇宙は一つとは限らない。未来は絶望しかないのかもしれないが、可能性だけなら無限大にある。

正史（ゲーム）には存在しない大陸が在る、この世界もまた、ある意味一つの真実なのだから。

（まぁ、あいつら大概何でもありだから、またひょっこり現れるかもしれないし）

ボブは戦う。己の信じたい事だけを信じて……。

◆ボルデビサス
・ティアーザ図鑑№００２
・分類：しんりょくポケモン
・タイプ：いわ/くさ
・性別：あり
・特性：しんりょく/てきおうりょく（隠れ特性）
・種族値
HP：１００
こうげき：87
ぼうぎょ：１００
とくこう：90
とくぼう：１００
すばやさ：12
・図鑑説明
古代ティアーザ語で「疾風の通り魔」の意味する名前を持つ、生粋の戦闘狂。と

ても凶暴な性格で、吊り上がった複眼で敵を探し出し、鋭い前足の鎌で切り裂く。走って逃げる相手は転がって追い掛け、空へ逃れる獲物は背中の翅で飛んで仕留める。葉っぱの尻尾でも栄養は充分に補給出来るのだが、生き物を切りたくて仕方ないのだ。同族も例外ではなく、近くにいるだけで共食いを始める。ただし一番嫌いなのはクラトンとクラビトン。

　これ程までに凶悪なポケモンだが、女王たるレギオノイズの命令には忠実で、命を投げ打ってでも守り抜く。この時ばかりは群れで行動するという。

影に潜む者たち

今回からは日本妖怪サイドデス。

鳴女たちが一夜の夢で一喜一憂していた頃、日本のとある屋敷にて。

『それでは、後程に……』

「分かりましたわ。次はもっと面白くなるかと思いますので、お楽しみに」

2つの人影が、蝋燭揺らめく奥座敷にて、密談をしていた。

1人は頭の大きな老人、もう1人は白いスーツの若々しい女性。2人共かなり悪い顔をしている。一体、何を話し合っていたのだろう。

しかし、答えが出る前に、女性は退出してしまった。赤毛混じりの黒髪と真紅の瞳を持つ、容姿端麗かつ逞しい姿の少年を侍らせながら。

『またお会いしましょう、大空 つばめさん』

そんな彼女――――内閣総理大臣・大空 つばめを見送った老人が、ポツリ

と呟く。

『結果は上々のようですねぇ？』

すると、老人の後ろに控えていた、赤ら顔で馬鹿デカい頭の鬼がヒソヒソと尋ねた。彼の名は朱の盆。その恐ろしい顔で人を恐怖に陥れ、最期はショック死させてしまう、案外と怖い妖怪だ。

『はい。まさか、あの腑抜けた彼女がここまで盛り返すとは思いませんでしたが、これで面白くなってきましたよ』

そして、朱の盆に答える、この蛸頭な老人こそ、日本妖怪の総大将――――ぬらりひょんである。と言っても所詮は自称であり、直接的な戦闘よりも交渉事に長けている、見た目通りのお人なのだが。

さて、この悪玉系妖怪の２人だが、今日はつばめと法案に関する密談を交わしていた。

ここ最近、日本中で様々な怪奇現象が頻発している。やれ狐につままれただの、鬼を見ただの、魔物に襲われただの、直接・間接を問わず被害が続出しているのだ。逃げ出した大逆の四将が各地で好き勝手な事をしているのだろう。

さらに、過去の刑部狸による侵略行為や、つい最近巻き起こった内閣総辞職ビーム事件なども相俟って、国民は妖怪に対する認識を改め、〝確かに存在し害を為す存在〟としてのイメージが浸透し始めていた。ようするに〝害獣は駆逐しよう〟と考え出したのである。

そして、何故だか若返ったつぼめは、それらを上手く利用し、とある法案と実働部隊を設立する事にしたのだ。

そう、瘟鬼（人に害を為す正体不明の化け物の事）を抹殺する、退魔師の集団――「鬼殺隊」の誕生である。

だが、その為には人気と任期が足りない。

そこで、政財界に根深く関わっている人物……というか、ぬらりひょんに接触したのだ。既に何回か密談を交わし、鬼殺隊の創立もほぼ確定となっている。当のぬらりひょんは刑部狸よりもよっぽど狸爺だった。

しかし、滅ぼされる側である妖怪のぬらりひょんが、何故につぼめの意見に賛同を示したのか。それは彼の最終目標――「妖怪の復権」を成す為である。人間の生み出した文明の光を消し去り、闇の世界を取り戻す事こそ、ぬらりひょん

の目的なのだ。

その為には、妖怪と人間は完全に対立せねばならず、いずれはド派手な戦争を巻き起こして貰わねばならない。だからこそ、妖怪憎しなつばめを煽り立てたのである。

とは言え、そこはつばめ側も織り込み済みのようで、目下熾烈な腹の探り合いと裏工作が勃発している。鬼太郎や鳴女ではあり得ない、〝大人の時間〟と言えるだろう。

『ガァ！　ガァ！』

『ぬっ!?』『これは……鬼太郎の物ですね』

だが、今日も今日とて悪巧みをしていたぬらりひょんの下へ、１羽の化け鴉が現れる。ここが知らせた者にしか辿り着けない「迷い家（マヨイガ）」の大屋敷であるにも関わらず、だ。

さらに、その嘴には１通の〝招待状〟が。差出人は、もちろん鬼太郎。明日の夜に奈落村へ来て欲しい、使いも出す、と書かれている。

『どうしますかぁ、ぬらりひょん様？　どう考えても罠っぽいですが』

『そうですねぇ……』

これは悩ましい。良い意味でも、悪い意味でも。

朱の盆の言う通り、地獄の裂け目に呼び出すなど罠としか思えないが、これまで潔癖症かと言わんばかりの正義厨だった鬼太郎がこんな真似をするとなると、それはそれで面白くもある。本当にどうすべきか、悩ましい限りである。

『如何致しましょうか、黒坊主さん？』

そこでぬらりひょんは、この場に潜むもう１人の〝影〟に尋ねた。

『良いんじゃないですかね～？　妖怪は妖怪同士、仲良くすれば……』

鼠とも虎とも付かない顔をした、墨汁を懲り固めたような人型の妖怪が、一種独特の声色で答える。何か性分でアドリブ入れそう。

彼の名は「黒坊主」。大逆の四将の１人だ。

『なるほど、それが〝ご主人様〟の意向ですか』

『その通りです』

しかし、それは世を欺く仮の姿。本来の彼は、とある人物に仕える腹心でしかない。

『つまり、〝黒雲坊〟様も参加為されるという事で？』

『ええ、影ながらに』

その人物とは、遥か太古の昔に大天狗・赤嵐坊との争いに敗れ封印された筈の天狗王・黒雲坊である。黒坊主の役目はただ一つ。主たる黒雲坊を復活させる事。彼もまた、ぬらりひょんを利用する為に接触したに過ぎない。むろん、お互いにそれは分かり切っている。

『なるほどなるほど。それでは、ショータイムと行きましょうか』

そして、黒坊主及び黒雲坊の意見を取り入れたぬらりひょんは、鬼太郎の誘いに乗る事を決意するのだった。

さぁ、君の後ろに黒い影……。

◆黒坊主

明治時代という、妖怪にしては新し過ぎる時期に登場した変態妖怪。夜な夜な美女の口にディープキスをかますという、もう言い訳の仕様がないくらいの好き者で

ある。その姿は名前通り黒くて生臭い坊主みたいなシルエットをしている以外、よく分かっていない。見るに堪えない奴という事だけは分かる。

鬼太郎の世界では美人画に封印されていた凶悪な妖怪として登場。やたらと強い能力を与えられる事が多く、火を吹いたり、水を毒に変えたり、ボディーランゲージを始めたりする。水が共通の弱点。６期では大逆の四将の１人に数えられた。残りの面子が由緒正しき大妖怪なのに対して、こいつだけ明治の変態妖怪なので、明らかに浮いている。

今作では悪の天狗王・黒雲坊の配下として登場。主復活の為、ぬらりひょんを利用しつつ暗躍している。こいつもまた、ぬらりひょんと同じ策略タイプである。

悪と正義の会談

地獄への信頼度の低さヨ……。

地獄の裂け目、「奈落の谷」の最南端――――「奈落村」。かつては盗賊村とも呼ばれた悪人たちが住まう小さな集落だったが、自ら復活させたヤトノカミによって滅亡した場所。

一時は鳴女のお遊びにより蠅声為邪神（ハバエナス）とその眷属が大繁殖した危険地帯と化していたが、今は元の命亡き村落に戻りつつある。

だが、今この村には、大変似付かわしくない立派な屋敷がある。ぬらりひょんが召喚した迷い家だ。ぬらりひょんと迷い家はリンクしており、割と好きなタイミングで出し知れする事が可能で、場合によっては自分がそこに転移して逃げ込んだりも出来る。それがぬらりひょんの持つ「ぬらりくらりな捉えどころの無さ」に拍車を掛けていて、両者を捕捉するのは容易な事ではない。

だからこそ、鬼太郎が正確な居場所を把握していた事に、ぬらりひょんは驚きを隠せなかったので、こうして誘いに乗って来た次第である。鬼太郎の使わした、一反木綿に乗って。

さらに、到着と同時に座標を合わせ、迷い家を呼び寄せた。流石に敵陣で腰を据える気にはならなかったのだろう。どんな話になるか、まだ分からないしね。

ちなみに、今回は腹心の朱の盆に加えて、蛇骨婆とかまいたちも連れて来ている。最悪の場合、彼らの手を借りた実力行使も厭わないつもりらしい。

『やぁ、ぬらりひょん。久し振り』

と、迷い家で茶を立てていたぬらりひょんたちの前に、鬼太郎がひょっこり現れた。玄関からきちんと入り、下駄も脱いでいる。礼儀正しくてよろしい。

しかし、その姿はあまりにも酷い有様だった。

『き、鬼太郎さん、ですか……？』

ぬらりひょんも思わず聞き返してしまう。

口元をマスクで、左目を包帯で隠し、全身の至る所に機械仕掛けの義体を組み込んだ、ゾンビと言うか、フランケンシュタインの怪物を失敗したような、悍ましい

外見になっているのだから当然だ。
しかも、地獄童子や蒼坊主の肩を借りないと、立っている事さえ難しい状態である。何がどうしてそうなったのかは、言うまでもない。
『それが、〝地獄を見た〟代償ですか』
ぬらりひょんがゴクリ、と生唾を呑む。
彼は様々な密偵を全国各地に放ち、恒常的に情報をかき集めており、鬼太郎が地獄で修行を積んでいる事は知っていた。それが、もうすぐ終わるであろう事も。
だが、奈落の谷の特性により口伝えでしか聞いていなかったので、鬼太郎の〝惨状〟を直視するのはこれが始めただった。
衝撃的だった。明確に悪を掲げるぬらりひょんたちから見ても、今の鬼太郎は恐ろしく、気持ちが悪かった。何故そんな状態で生きていられるのか、不思議でならない。目玉のおやじもそうだが、幽霊族の生命力と精神力は大概にして理不尽だ。
『ああ、昨日ようやっと試練が終わってね。解放されたって感じだよ。それより、お前に話があるんだ、ぬらりひょん』
しかし、当の鬼太郎は、そんな事より話し合いだと言わんばかりだった。言い方

が完全に「やっと追試が終わったからカラオケ行こうぜ」って感じである。そんな軽い話題じゃなかろうに。

『……猫娘さんに泣かれますよ』

『もう泣かれたよ。号泣だった』

『いやいやいや……それは』

そりゃそうだろ、と言いたい。大丈夫なのか、この男は。敵だ悪だ云々の前に、年長者として心配になって来る。

『お前、少女漫画だったら、猫娘が闇落ちしちゃうぞ？』

『というか、その姿を見ただけで卒倒しそうじゃがの。猫娘が可哀想だわい』

『男として、それはどうなんですかねぇ、鬼太郎よぉ？』

『そうだな、もっと言ってやってくれ。こいつは、ちょっと自分の命に頓着しなさ過ぎなんだよ』

『ノーコメントで……』

ついでに、かまいたち、蛇骨婆、朱の盆、果ては地獄童子や蒼坊主にまで総スカンを食らっている。無理もないが。

『うーん……』

こんな女を笑顔で泣かせるような奴なんかと、本当に話し合いが成立するんだろうか。急に不安になってきた、ぬらりひょんであった。

『酷いなぁ、皆』

『『『『『いや、お前が悪い』』』』』

『声を揃えなくても。それよりほら、話し合いをしようよ。正直、座ってるのも辛いから。出来ればもう、何時までも横になり続けていたいくらいだし』

『『『『『……』』』』』

ここまで弱ってしまって、修行をした意味はあるのだろうか、とは誰も言わないし、言えない。それこそ、パッキリと折れて粉々になってしまいそうだったから。

まぁ、こんな有様では戦えない事くらい、本人が一番理解しているだろうから、ここは何も言わずに見なかった事にしてあげるのが優しさという物だろう。何らかの目途くらい立っていると信じたい。あと、ちゃんと立てるようになって。猫娘に「鬼太郎が立った！」って言わせてあげなさい。可哀想でしょ。

それより、起き上がる事さえ辛い男が、一体全体何を話したいのか、ぬらりひょ

んは気になって仕方なかった。手紙には詳細は書かれていなかったので、余計に気になる。

そして、死に体の鬼太郎は、目だけをギラギラと輝かせながら、ぬらりひょんの長い妖生の中で最も衝撃的な、爆弾をぶちかました。

『ぬらりひょん、僕たちと同盟を結ばないか？　そこに隠れ潜んでる、天狗の使いっ走りもね』

そう、あの時に鬼太郎が下した決断とは、ぬらりひょんとの同盟関係だったのだ。

『……驚きました』

これには、ぬらりひょんも素直に驚いた。

というか、さっきから驚いてばかりだが、これが一番ビックリした。まさか、鬼太郎が〝同盟を結ぼう〟などと提案してくるとは。

普段であれば正気を疑う所だが、今の鬼太郎はとっくに正気を失っているので、疑う余地すらない。罠の可能性も有るが、それなら招き入れた時点で嵌めればいい話であり、これ以上は切りが無いだろう。

ならば、本当の事だと思えばいい。少なくとも、目の前で死に掛けているこの男

は、紛れもなく自分と手を組むつもりなのだと。
『しかし、それで私に何のメリットがあるのですか？』
だが、受け入れるかどうかは別問題だ。
ただでさえ相反する思想の持ち主なのに、身も心もトチ狂った今の鬼太郎を信用出来るかと問われれば、否と言うしかないだろう。
最低でも、こちらにメリットが無ければ、聞くに値しない話である。
『――――――まず、お前は「来訪者」について、どこまで把握している？』
しかし、鬼太郎の返答は質問文だった。学校のテストだったら０点だが、こういう話し合いの場では、その限りではない。
むしろ、上手い切り返し方だ。何せ、ぬらりひょんもまた、世界最後の日を間近で見た一人なのだから。
『さてね、もうすぐ復活間近である、としか……』
ここで、ぬらりひょんは嘘を吐いた。本当はそれ以上の事を知っているし、〝対抗策〟も用意している。
だが、この場で話すつもりは毛頭無かった。

『充分だよ』

何故なら、鬼太郎もまた嘘を吐いている。地獄で何を見て、どんな事を知り得たのかは不明だが……本っっっっっ当にこっそりと、〝サイン〟を送ってきた事からも、それが分かる。

つまり、そういう前提で話し合いをしよう、という事である。

さぁ、ここからは〝騙し合い〟の時間だ。

『なら、鳴女については？』

『当然、知っていますとも。本格的な話し合いはまだですが、既に接触を持っていますよ』

『じゃあ話は早い。あいつとも話し合いの場を持ちたいんだ。掛け合ってくれるかな？』

『――――――それはつまり、私に裏切れという事ですか？』

『そうは言っていない。今の状況が、僕たちだけじゃ手に余るってだけの事さ。ただでさえ「来訪者」が復活しそうなのに、大逆の四将が地獄から逃げ出すわ、よく分からない名無しの男がうろついてるわで、てんやわんやなんだよ。初めは鳴女を倒す為だけだったのに、どうしてこうなったのかなぁ……』

淡々と、静かに進む話し合い。誰も口出しせずに、二人の会話に耳を傾けている。当人たち以外は、嘘か誠か全く分からないからである。

しかし、この会談は最初から嘘八百。真実を織り交ぜた嘘しか語っていないので、誰も何も分からなくて当然だ。

『結局の所、目的は何です？』

『単純な話、「来訪者」を倒す為にも一時で良いから僕と一緒に戦ってよ、って所かな。実際、四の五の言ってられないだろ？』

『話になりませんね。今の貴方と情報を共有するメリットが何もない。せっかくのお誘いですが、帰らせてもらいますよ』

さらに、分かり易い形で同盟は決裂。両者共に退散する運びとなった。

――――そう、鬼太郎とぬらりひょんの思惑通りに。

『……ぬらりひょん様、よろしかったのですかぁ？　鬼太郎を袖にして。まぁ、あんな条件で承諾してもらおうってのは、何かの冗談だと思いましたが』

『ええ、あれは彼のジョークですよ。何から何まで、嘘っ八百です』

そして、奈落村を離れ、別の拠点で迷い家を展開した所で、ぬらりひょんが種明

かしをする。

『同盟は、成立しました』

『『はぁ？』』

さらに、今知られる衝撃の真相。何とあの冗談みたいな話し合いで、同盟が成立したというのだ。

『あの、ぬらりひょん様、まるで意味が分からないのですが？』

流石に話に付いていけない朱の盆が、困惑タップリに質問する。蛇骨婆やかまいたちは黙っているが、気持ちは同じだった。

『まずはこれを見て下さい』

すると、ぬらりひょんは右の小指をピンと立てて見せる。そこには、鬼太郎の毛髪と霊毛ちゃんちゃんこの融合した糸が一筋巻き付いていた。

『それは、鬼太郎の……』

『そうです。彼は誰にも見られぬよう、私の小指にこっそりとこれを巻き付け、あるサインを送って来ました。〝監視されている。だから、お前が裏で動いてくれ。代わりに僕が〝囮〟になるから。それが今回の同盟の内容だ〟とね』

『どういう意味です？』

『朱の盆さん。私の能力、覚えていますか？』

『ぬらりひょん様の能力？　それはもちろん――――』

と、そこまで言った所で朱の盆も、蛇骨婆やかまいたちも気付く。陰に引っ込みっぱなしの黒坊主も同様である。

ぬらりひょんの能力。それは不可視と幻惑。ぬらりと現れ、ひょんと消える。その実態は雲を掴むよりも難しく、どんな目も誤魔化せる。だからこそ、大逆の四将を逃がす事が出来たのだ。

『本当に、彼には驚かされますねぇ。流石は慎吾さんの息子と言った所でしょうか』

鬼太郎の悪い成長振りに、ぬらりひょんが心底嬉しそうに嗤う。これは面白い事になった、と。

『さぁ、これから忙しくなりますよ、皆さん。我々の当面の仕事は〝舞台の裏方〟です。先ずはつばめさんとの協力関係を密にしつつ、ぬらりくらりと事を進めましょう。〝浄玻璃（かがみ）〟に映らないように、ね……』

『合点です』『あい分かった』『へいへい、了解ですよ』『……』

そして、闇は蠢き出す。陰の意志を汲み取り、成す為に。それはぬらりひょんにとっても、重要な事だから。

◆ぬらりひょん

日本妖怪の総大将を自称する爺。夕暮れ時に忽然と現れたと思ったら、ぬらりくらりと糾弾を躱してご相伴を分捕り、知らぬ間に消えている傍迷惑な妖怪。その正体は蛸と言われているが、詳細は不明。むしろ、正体不明が正体かもしれない。

鬼太郎の世界でも総大将を自称。時期による性格やカリスマ性が段違いで、3期や5期は悪の帝王に相応しい事をやってのけているが、4期の彼は憎めない悪役であり、6期は政治犯みたいな奴になった。1期はちょい役で2期には登場しない。意外な事だが、原作での彼はライバルでも何でもなかったりする。

今作では6期の彼がほぼそのまま登場。目標も変わっていないが、来訪者の事も勘定に入れており、様々な暗躍を繰り広げている。大逆の四将を逃がしたのも、もちろん彼。黒坊主とは一応の協力関係を築いている。目玉おやじとはライバル関

係だが、息子の鬼太郎に関しては、若干孫を見る目が入っている。その為、ゲゲゲの人造人間になった彼を見て、割と本気で驚いていた。

我は訴え求めたり

今作では不遇な〝彼〟の命運や如何ニ……。

とある日、とある場所で。

《ううぅ……》

1人の子供が泣いていた。見た目は黒いローブに帽子を被り、不気味な仮面を被った怪し過ぎる大男だが、中身は子供――――どころか、生まれてすらいない赤子である。

彼は名無し。文字通り、名前すらない鬼子。

遥か昔、人と妖怪が共存出来ていたが、結ばれる事は禁忌とされていた時代。人間の母親と鬼の父親を持つ存在として、彼は生まれようとしていた。

だが、彼は名無しのままで終わった。誕生する前に、両親共々殺されてしまったからだ。ようは水子である。

しかし、名無しの魂は成仏出来ず、この世の悪意を吸収し凝り固まった末に、〝本当の化け物〟として再誕した。妖怪でも人間でもない、現世を呪う者だ。

《ぐぅぅぅ……》

そんな彼が膝と手を着き、（精神の）歳相応に泣いている。大の男が嗚咽を漏らしているのは、シュール極まりないが、この場には誰もいないから問題は無かろう。むしろ、彼の今現在の状況の方が、よっぽど大問題だった。

名無しは世界を悪意と絶望に染める為、様々な事を計画していた。母方の子孫である真名に呪印を施し、彼女の周りにいる人や妖怪と対立するように仕向け、溜りに溜まったストレスを餌に、己の存在を確かな物とする為に。

――――この世に生まれる事すら許さず殺したのだから、仕返しされても文句は言えないだろう？

それが名無しの基本的な思考回路。

だからこそ、文字通り影となって暗躍していたのだが……ある日突然、その遠大な計画は破綻し始めた。

そう、鳴女という本当の悪魔が降臨したのである。

初めは特に問題は無かった。やる事と言えば配信活動と妖怪狩りだけだし、むしろ人の悪意を助長させる事に一役買っていた。〝人気者〟という存在は、良くも悪くも〝目立つ〟からだ。嫉妬や憧れ、僻みや羨望を集める広告塔として。

だが、彼女はあまりに目立ち過ぎた。演奏技術は冗談抜きで上手いし、何ならゲームの技術も高いし、そもそもトークがかなり面白い。

もちろん、ある程度のヘイトは仕方ないが、それを抜きにしても絶大な人気を誇り、誰よりも暗黒的な存在の癖に、夜の大都市に聳えるブルジュ・ハリファの如く輝き、人々を熱狂させていた。

まるで、誘蛾灯に群がる羽虫のように人間たちは光に踊らされていたのである。それは名無しの求める悪意ではない。

さらに、もう1つの趣味である妖怪狩りの方も問題だった。ある時を境に全く遠慮節操が無くなり、妖怪たちがゴッソリ減ってしまったのだ。脅威の根源が1つに纏まっただけとも言えるが、鳴女自体は視聴者には優しい上に基本的に引き籠りなので、結果的に人々は夜の闇に潜む影を恐れなくなり始めた。これでは仕込みをする前に逆戻りである。

真名と鬼太郎たちだけなら、こんな事にはならなかった。彼らには明確な隔たりがあり、仲良しなのは表面的な物だけだったからだ。

しかし、スーパー悪目立ち野郎の鳴女と接触してしまった事により、妙な連帯感と〝強い意志〟を持ち始めてしまい、〝弱い心を利用する〟名無しの付け入る隙がどんどん減っていった。特にヒロイン勢の想いは半端ではなく、見ているだけで胸焼けするような勢いだった。

そんな事ばかりが続き、いよいよ以て焦り出した名無しは、遂に鬼太郎たちの前へ明確に姿を現し、計画を推し進めようとした――――のだが。

『邪魔だ、どけ』

《うぁあああ！》

まさかの鳴女が乱入。理由も「ゴムをお届け」という意味不明な物。禁忌を犯して生まれた存在である名無しからすれば、酷いジョークである。

しかも、妖怪の喰い過ぎで洒落にならないレベルでパワーアップしており、とても名無しの手に負える存在ではなくなっていた。

自分は悪意を上手く吸収出来ずに伸び悩んでいるのに、向こうはチーターとか、

あまりにもあんまりである。

そして、鳴女の妖気が混じった火砕流で火達磨にされ、文字通り泣く泣く退く事になった。

その後は大逆の四将が逃げ出した事により、多少は持ち直したものの、鳴女どころか鬼太郎まで覚悟完了してしまい、何より肝心要の真名が行方知れずになってしまった。これでは〝彼女を媒体に存在を確立させる〟という、最終目標が成し得ない。むろん、手伝ってくれる者は皆無だ。

もう泣きたくなって来たし、今現在は本当に泣いている。こんなのってないよ。神も仏も信じちゃいないが、これは酷い。

何だ、最初から生まれて来るなってか。じゃあゴム付けろよ（↑無い）！

……嗚呼、誰か助けて。

「――――――エコエコアザラク、我は呪い怨みたり」

《……！》

すると、名無しの慟哭に世界が答えたのか、はたまたただの偶然か。彼の前に堂々と現れた。行方不明になっている筈の、真名が。

しかし、今の真名は、最後に見掛けた彼女とはかけ離れた、凄みのある〝魔女〟になっていた。本場本元の魔女であるアデルやアニエスとは一味違う、日本の呪術師に西洋文化がハイブリットした、より恐ろしい存在に。

恐ろしい存在に。

偶然ではない。真名は自分の隠れ潜むこの場所を正確に把握し、魔術を用いて現れたのだ。

「ねぇ、アナタでしょ？　私に呪いを掛けてくれたのは？　凄いよねぇ、これ。東洋と西洋の占星術をここまで完璧に融合させるなんてさ。〝この道〟を進んでみたから実感出来るけど、本当に感心するわ。私には〝師匠〟がいるけど、アナタは独学でここまでに至ったんだよね？　うんうん、偉い偉い」

さらに、名無しの仕掛けた施しも完全に見抜かれた上で、〝組み直されて〟いる。もはや、真名も彼の手に負える存在では無くなったようだ。

そして、大魔女の真名は持ちかけて来る。

「そんな偉い子のアナタに尋ねたいんだけど……君、私の子供になる気は無い？」

悪魔の取引を。

◆エコエコアザラク

ある意味魔法少女なダークヒロイン系主人公、黒井 ミサの織りなす、ホラーオムニバス……というか、ミサのグロテスクな日常物語である。

〝残酷な魔女だが女子中学生でもある〟彼女が織りなす物語は、はっきり言ってサイコであり、普段は容赦がない筈の悪人を気紛れで見逃したかと思えば、善人としか思えない奴をレクター博士形式で処刑してみたりと、その情緒不安定振りが垣間見える。

一方で女の子としての一面もちゃんとあり、イケメンに現を抜かしたり、少年誌でやる事かと言わんばかりに剥かれたりもする。対象年齢を考えろ。

この世界での彼女と「エコエコアザラク」の扱いは、〝漫画は無いけどキャラクターが実在している〟といった感じ。

鬼殺隊

この世界の鬼退治は全然哀しくないから困ル。

――――地の獄、底の底。

元は皇族を避難させる為の避難シェルターとして作られた、この地下施設は今、全く別の目的を持つ場所として使われている。

「ハッ！」「てぁっ！」

バトルコートのような所で、激しくぶつかり合う2人の男女。女の方が幾分か若い。おそらくはデキているのだろうが、ただのカップルという訳でもない。

何故なら、拳で大地を割り、蹴りで大岩を切断しているような、超人だからだ。

2人の名は石動零（いするぎれい）（♂）とサヤ（♀）。かつて源頼光と共に各地の邪悪な妖怪を封じていた、退魔師一族「鬼道衆」の末裔である。

本来は彼らだけでなく、そこそこの規模を持つ集団だったのだが、過去に鬼太郎

ファミリーと交戦した末に、戦闘の要であった鬼巫女率いる不老不死たる〝伝説の七人〟を失い大きく弱体化し、その後も細々と山奥で生き延びていたものの、大逆の四将が解き放たれた事により壊滅的な被害を受け、今の状態となった。零とサヤは鬼道衆の数少ない生き残りなのだ。

「頑張っているようね」

「「つばめさん！」」

そして、そんな2人の窮地を救ったのが、他ならぬ若返った大空 つばめである。彼女としては自らに施した〝改造〟の程度を知る為の、謂わば「ついで」だったのだが、結果として2人の命を救う事となり、こうして己の庇護下に置いている。

「……そんな貴方たちには、ご褒美の稽古を付けてあげましょう」

さらに、つばめは2人の戦いの師でもあり、元より高かった零とサヤの戦闘能力を更に昇華させたグランドマスターなのだ。別にジェ〇イではないけど。

「さぁ、〝扉〟を開くわ……」

「「はい！」」

だが、その能力は偉大と言っていい、凄まじい物である。

彼女の能力――――それは〝時空間の形成〟。この世界とは時間の流れが異なる、まるで時が止まってしまったかのような異世界へのゲートを開く、という物。小難しい事を抜きにして表現するなら、簡易的な「精神と時の部屋」を生み出す能力だ。

正しくは、それっぽい場所にチャネリングする力なのだが、結論は大して変わらないので、気にしなくてもいい。

ともかく、つばめはその能力を使い、たった数十日で数十年分の修行を積み、自らを高めた。

そして、地力を上げた後は、零やサヤを含む〝妖怪に憎しみを持つ子供たち〟を集め共に修練し、やがては「鬼殺隊」の基幹となる面子を取り揃えた。その数、隠密や医療班などの後方支援も含めて72人。非戦闘員ですら並みの妖怪であれば自力で倒す事が出来る、恐るべき戦闘集団である。

しかし、内閣総理大臣とは言え、ただのおばちゃんでしかなかったつばめが、一体どうやってこんな能力と若さを手に入れられたのだろうか？

その秘密は、物理的に内閣が総辞職した日に手に入れた〝とある細胞〟……「鬼」

の血に汚染された幽霊族の肉片にある。

焼野原の中で立ち尽くしていた時、それが空から落ちてきた。呆けて口を開けていたせいか、つばめは偶然にも摂取してしまったのだ。

すると、身体が急速に若返り、奥底から力が漲って来た。それが全ての始まりだった。

初めの数日は単に身体が全盛期になっただけだったが、やがて〝妖気〟や〝霊気〟に近いエネルギーが体内で生成されだし、それにより身体能力にバフを掛ける事が出来るようになった。

さらに、しばらくすると時空ゲートの前身となる、亜空間への入り口を開く能力が開花し、中にいる間は外と時間の流れが僅かに異なる事に気が付いた。

そして、つばめはその力を積極的に利用し始める。時間に縛られないのなら、好きなだけ趣味に時間を使えばいい。

先ずは勉強から始めた。〝妖怪(てき)〟を知る為に。空間の出入り口は同時に2つまで展開でき、ある程度の距離を瞬時に移動する事も可能なのも相俟って、つばめは各地の資料を読み漁った。中には一般公開出来ない物や、読む事自体が間違いな〝禁

書〟も含まれており、急速に知識を蓄えて行った。

さらに、何時からか知らない誰かが夢枕に立ち始め、様々な言葉を囁くようになった。それは〝別世界〟の情報であり、〝技の型〟や〝呼吸法〟について知る事が出来た。

〝彼〟曰く、その呼吸は「鬼」を退治する為の技術で、身体能力を高めるだけでなく、「鬼」への特効力を得られるのだという。無数に存在する〝技の型〟は、それを活かす為の兵法らしい。

……何と言うか、ジョ○ョの波紋みたいな設定である。あちらも特殊な呼吸法により、太陽の力を得る事で吸血鬼を滅せられるようになる技術だ。

というか、波紋にしろチャクラにしろ氣にしろ、何らかの特殊能力の根幹には呼吸が深く関わっている。ならば、彼の教えてくれた呼吸法にも応用が利く筈である。

幸い時間ならタップリある。亜空間形成の能力は使えば使う程に効能が上がり、時を置き去りにし続けるので、やろうと思えば何時までだって、外の時間を気にせず引き籠っていられる。

こうして、つばめは新たな力を得て、ある決意をするに至った。

そう、妖怪退治の専門家集団「鬼殺隊」の結成だ。

ここ最近の妖怪による被害は目に見えて異常な数値であり、それだけ化け物に対する憎悪を抱く人間も多い。人員集めには苦労しなかった。

その目的は、人々に害成す妖怪を退治し、〝人間主導の国家〟を確立させる事。

だが、それはある意味建前で、本質的にはつばめを含む隊員たちの復讐であり

――――――〝彼〟が囁く、「来訪者」の討伐が最終目標である。

その結果、日本から悪の妖怪は駆逐され、人間主導の国家になる、という訳だ。

ようはついでである。

しかし、零やサヤたちはそれでも良いと思っている。つばめにどんな思惑があろうと、自分たちの命を救い、敵討ちの機会を設けてくれた事に変わりは無い。

「今回はいよいよ〝月の呼吸〟の最終奥義を伝授するわ。覚悟なさい」

「「はい！」」

そして、鬼殺隊は今日も修練を積み、前へ進み続ける。数多な妖怪の屍道を築きながら……。

◆鬼殺隊

１０００年以上前に産屋敷一族が中心となって結成した戦闘集団であり、文字通り「鬼を殺す私設部隊」。規模は数百人程で、主に関東圏で活動する。隊士は「呼吸」をする事で自らの身体能力を上げ、「鬼」に特効力を持つ「日輪刀」を振るい、頚を斬り飛ばして殺害する。

過激な「鬼」被害者の会とでも言うべき組織であり、上から下まで「鬼」が憎くて仕方ない、ちょっと異常な人間たちが揃い踏みだが、中でも「柱」と呼ばれる者たちは、どっちが化け物か分からなくなる力を有している。

しかし、人知を超えた怪物である「鬼」を相手取る以上、殉職率も半端ではなく、そもそも最終選別試験を乗り越えるまでに大多数が死ぬ、超絶ブラックな組織である。

しかも、あくまで私設部隊なので政府非公認であり、その上帯刀までしている為、「鬼」だけでなく人の目まで気にしなくてはいけなかったりする。

一狩りしようぜ

モンハン楽しー。ちなみに武器は片手剣一筋。盾は鈍器。

闇の携帯獣世界で一悶着があってから数日。

『おい、アデル。一狩り行こうぜ』

「お前は何を言っているんだ……」

アデルをクエストに誘ったら、何故か疑問符を浮かべられた。その一言から察しろよ。

……やぁ、諸君。バッチは3つしか集められなかったけど、無事に夢から覚めた鳴女さんだ。

そんで、今目の前で頭に「?」が浮かんでいるこいつが、アデル・フォン・アスワング。つい最近、ちょっと本気で殺し合った仲だ。

いやー、デバフが掛かっている上に子供ボディというハンデまで背負っていたと

は言え、マジで三途の川が見えたのは槐の邪神や鬼太郎との戦い以来だったわ。割と頻繁だとか言ってはいけない。私もそう思ってるから。

なーんで皆、私の事を危険視して排除しようとするのかね。こんなにも魅力的な女だというのに。

「それはお前の性格が悪いからだ」

ヒデェ言い草だなぁ。

『何だよ、ちょっと友情ごっこをしつつ心の中で嘲笑ってただけじゃないか』

「お前はゲスだ。それ以上でもそれ以下でもそれ以外でもない。もう一度言おう。お前はゲスだ」

そこまで言うか。大事だからか。

まぁ、アデルからすればそうなるか。妹の命が関わってるんだもんね。分かった上でやったんだけど（笑）。

だってさぁ、仕方ないじゃん。家の大事なラッキーアイテムを使われるんだから、少しくらい意地悪しても良いだろうが。ちゃんと頼まれればOKしたんだし。

『という事で、水に流そうぜ？』

「お前を三途の川に流してやろうか」
あーもう、これだよー。
ちなみに、アデルはあれ以来、私に対して敬語を使わなくなった。
親密度が増したのか、はたまた敬うような相手ではないと判断されたのかは知らないが、こいつは敬語よりもドスの利いた喋り方が似合っていると思う。何もしなくても威圧感のある見た目だからね。中身はポンコツだけど。
『まぁ、それはそれとして、狩りに行こうぜ』
「いや、だから意味が分からないんだが……」
『そのまんまの意味だよ』
「だからこそ分からないんだよ！」
えー、モンスターをハンティングしに行く以外、どんな意味があるって言うんだ。
「……モンハンは苦手なの」
意外と普通の理由だった。正直でよろしい。
『何だ、まさか自分で狩る方が楽だからとか言わないだろうな？』
「流石にそこまでじゃないけど、概ねそんな感じね。アクションゲームをすると身

体まで動いちゃうし」

『脳筋だな』

「お黙り！」

いるよなー、そういう奴。邪魔で仕方ないし、やられたらやり返してやるけどね。

『……安心しろ。別にゲームをしようってんじゃない』

だが、何の問題もない。ノープログレムである。

『実際に狩りをするのさ』

「……！」

そして、私が特別な襖を召喚してやると、アデルは驚きつつも納得した、という顔になった。

「――――〝異界〟にも繋げられるようになったのか」

そう、〝それ〟が答えだ。

ヴィクター曰く、前回のポケモン世界は単なる夢現ではなく、平行世界にアクセスした結果なのだという。ティアーザ地方も、ネオ・ボランティアやスマイル団も、ボブと新たなポケモンたちも、確かに存在していた、という事である。

そもそも、夢自体が曖昧な事象であり、脳の働きによる物だけとは言い切れない事例も多い。それこそ、魂だけが抜け出して現世や常世を彷徨っている、としか言い様のない時すらある。前回はそれを利用したのだ。

さらに、そのアクセス方法として、ヴィクターは私の「無限城」や姑獲鳥の「夢幻香」を参考にしたという。亜空間を繋げられるのなら、夢の異世界とだってリンク出来ると踏んだのかもしれない。

それはつまり、私にも出来るという事である。何せ参照元だからね。

しかも、それだけではない。

『ほれ、大事なモンだろ。狩りのオトモにでもしな』

「これは……」

私が投げ渡した物を見て、アデルが絶句する。

そりゃそうだ。夢の産物である筈の、モンスターボールが６個あるのだから。

これこそが、贋作と真作の違い。ヴィクターの怪しい機械は夢を繋げるだけだが、私の無限城は夢の産物を持ち帰れる。

もちろん、何でもOKという訳ではなく大きさの制限があり、具体的に言うと襖

（今の所は最大で八畳敷）より大きい物は持ち込めない。襖が壊れたらアウトだからだ。

ついでに、襖が閉まった時点で夢との繋がりも断たれるので、ポケモンボックスみたいな別の場所とリンクしている物は無用の長物と化す。ポケモンの場合は6個ずつ引き出して持ち帰ればいいので、大した問題ではないが。若干面倒臭いけど。

ようするに、私の無限城は〝夢の広がる能力〟という事である。向こうの技術を丸パクリも出来るし、大抵のモンスターは卵で持ち帰れば飼いならす事も可能だ。

何せ私の妖気は相手の脳内情報を書き換える力があるみたいだからな。魔獣や怪獣の調教はお手の物よ。超獣は無理かもしれんけど。

そして、ポケモンと違ってモンハンの世界にいるモンスターは文字通りの脅威であり、生物兵器として申し分のない能力を持っている。武器や防具といった装備品も捨て難い。侵略する価値はあるだろう。

『ま、単にクエストをやってみたいだけなんだけどね』

「ぶっちゃけたな」

『そりゃそうよ』

だって、夢と冒険の世界を旅出来るなら、富と名誉を命懸けの狩りで得る世界を満喫してみたいじゃないか。何だかんだで私も身体を動かすのが好きだしねー。

「……まぁ、我が軍のプラスになるのなら」

『じゃあOKって事で、皆で狩りに行くか！』

そういう事になった。

◆モンスターハンターシリーズ

カプコン製のアクションゲーム。所謂「狩りゲー」の始祖とも言うべきシリーズであり、出た当初こそあまり話題に上がらなかったものの、武器や装備の多様性に魅力的なモンスターなどの要素が合わさり少しずつ人気を高めていき、今や大人気タイトルとなった。

基本的に村や街の外に広がる秘境へ赴き、クエスト対象になったモンスターを狩猟し、その死骸から剥ぎ取れる素材などを使って武器や装備を強化して、次の狩りへ挑戦するというルーティンのゲームであり、内容そのものは単調だが、敵が普通

に化け物なのでゴリ押しが通用せず、シビアなタイミングの下に敵の弱点を突いて行くという、無双ゲーとは違うハラハラ感が味わえる。

ちなみに、モンハン世界は過去に「超文明」とでも言うべき物が存在していたが、それが滅んでしまい、文明が変な形で衰退した状態にあるらしい。

クエスト①：拠点の確保

狩りの前の準備は大事。

『お～ぷん、せさみぃ～♪』「何でや」

さーて、いざ行かん、モンハン世界へ！

「おー……」

襖を開けた先に待っていたのは、色濃い原生林でした。

天を突くような巨木が並び、地面の殆どが落葉で埋まるか苔生している。そこかしこに流れる小川は水道水の数百倍は透き通り、匂い立つ程に美しい。今の日本じゃ絶対に見られん光景やな。あそこの岩とか、削ったら身体が徐々に部分欠損する呪いが掛けられそうだし。

「まさに「もののけ」って感じですね」『マジでいるけどね』『ピキピキ』『遠足で来たら楽しそうじゃのー』『……虫がウザい！』『外って素晴らしいわー』

付いてきた鳴女一派（チャラトミ、零余子+ノーム、丸子、六部、姑獲鳥。他はお留守番）も感無量である。

『思わず焼き払いたくなっちゃうわね』『環境破壊は気持ち良いですもんね！』

対するベア子とヴィクターは情緒の欠片もない台詞を吐いている。自重しろ。

『つーかさぁ、何でお前らまで来たんだよ？』

『アデルが心配で』『ベア子ちゃんが心配で』

何て優しい世界なんだ。ウチだったら「知るか死ね」で終わりなのに……。

余談だが、地下闘技場で瀕死に追い込んだ事を丸子は気にせず、六部も仕方なしとしたそうな。明らかに喧嘩売ってたもんな、あの時の丸子は。

「しかし、こんな森の中にいて、大丈夫なのか？」

『大丈夫だ、問題ない』

「うん、絶対ヤバいよね？」

そりゃそうじゃ。モンスターの棲み処だもん。

『ギャアッ！　ギャァッ！』『ギュィーギュィー！』

さっそく、朱色の毛が生えたディノニクスみたいな小型の鳥竜種――――イ

ズチの群れが現れた。動きもそれに近いが、尻尾がゼノモーフよろしく鎌状なっている為、尾撃も織り交ぜて来るのが厄介な奴だ。

頭数は3。所謂「狩猟班」に相当するグループで、陽動+挟撃をするスリーマンセルになっている。

「おい、どうするんだよ？　こっちは武器も防具も持ってないんだぞ？」

明らかにこちらを襲う気満々のイズチグループを前に、アデルが渋い顔で言う。

『普通に殴り勝つさ』

という事で、私は縮地走法で一気に距離を詰め、一番近いイズチの顎を撥ね上げ、打ち下ろし、タックルで吹っ飛ばした。それだけでイズチはくたばった。命とは儚い物である。

『私らは人間じゃないんだぞ？　大型ならまだしも、小型モンスターに苦戦する程弱くは無いだろうに』

「確かに……」

そう、私たちは強い。人間ではないからだ。ゲームを見る限り、この世界の住人も充分に人間を辞めているが、それでも私たちには及ばないだろう。

むろん、私たちとて、好き放題出来る訳ではない。〝入界〟にあたり、様々な制限が掛かるからである。

先ず、魔法攻撃などの飛び道具は使えない。その世界における〝世の理〟が違う為か、放電が出来る条件が決まっているように、空気中をエネルギーが上手く伝導しないのだ。

一応、オーラを放出するような事は可能だが、すぐに霧散してしまうので、妖気で押し潰すような真似は推奨出来ない。

ただし、逆に言えば空気中でなければ問題無いので、武器や防具、己の拳などに宿して叩き込む事は可能。さっきの攻撃も、拳に妖気の爆弾を付与した状態で殴ったから二発で落ちたのである。

さらに、私に関しては無限城の転移能力が使えない。世界間の繋がりを維持する為に、出入り口がその2つに固定されてしまうからだ。「モンハン世界↑無限城↓私たちの世界」みたいな感じ。扉の向こうはすぐブリガドーンなので、便利と言えば便利だが。無限城を退避所にするのも有りっちゃ有り。

つまり、私たちは弓矢や銃弾以外の飛び道具が使えない、身体能力だけが頼りの

超人みたいな状態なのである。
「そうと分かれば……オラァッ！」《ヴェィッ！》
『ギャア!?』『ギェッ！』
もちろん、その程度なら小型モンスター程度では相手にならないのは実証済み。
今度はアデルとチャラトミがそれぞれ残るイズチたちを殲滅した。
『さて、移動するか』
しかし、何時までも留まっているのが良くないのも事実。何故なら、こいつらを含むデイノニクスタイプの鳥竜種は親玉を呼び寄せる習性があるからだ。流石に何の備えも無しに大型モンスターを相手にしたくはない。
「当てはあるの？」
『無けりゃ動かんよ』
そう、私は1度だけモンハン世界に先行している。ゲートを作ったんだから当たり前だが。
『……イズチが群生しているという事は、「カムラの里」ですか？』
と、ベア子が質問する。お前、さてはライズまでやってるな。ヘビーユーザーめ。

『いいや、「コムリの里」って場所だな。この先の谷間にある』

だが、残念ながらカムラの里でエンジョイは出来ないんだなー。

ここから一番近く、拠点として現実的なのは、少し進んだ所の大きな谷底にある小さな村「コムリの里」しかない。

『どんな所ですか？』

『盗賊村』

『将来的に滅びそうな名前ですね……』

うん、私もそう思う。暗い未来で千年アイテムの材料に使われるビジョンしか浮かばない。

一応、まだ遠目に見ただけだが、どいつもこいつもならず者って感じで、装備も職業：盗賊みたいな風体だし、カムラの里のような和気藹々さを期待すると、かなりガッカリすると思う。ノリで言えば、西部劇か世紀末を想像するとマシかもしれない。

まぁ、侵略拠点にするつもりだし、別に馴れ合う必要はないだろう。その方が気楽である。

『という事で、ポケモンGO！』『行け、お前たち！』
『ギガァッ！』『ヒュヴィッ！』『ウルヴォッ！』『ジュラァッ！』
だから、ポケモンに跨り、とっと拠点（候補）へGOだ。
ちなみに、ボルデビサスには私とチャラトミ、ヒドクーイには零余子とノーム、ウルファングにはアデル一行、ジャラガンダーには丸子と六部が乗っている。ポケモンって、名前に反して割とデカい奴いるよねー。最大に関しては精々恐竜サイズだけど。
そして、自前のオトモに跨り進む事しばらく。
「ここがコムリの里……なのか？」
『まぁ、何て言うか、だよね……』
漸くコムリの里に辿り着いたが……本当に何と言うか、だよなぁ。
建物の雰囲気はカムラの里と似ているが、暗色系かつ飾りがおどろおどろしく、何処かの狩猟民族の集落に迷い込んだ感が半端じゃない。住民が手に槍持って取り囲んで来てもおかしくなさそう。流石に住民はモンハンらしい格好だが、それでも漂う世紀末感が治安の悪さを臭わせる。

連れてきた自分が言うのも何だが、大丈夫なのかここ？

まぁ、詳しく知る必要性は皆無だから、さっさとハンターギルドに行こう。里で一番デカい建物がそれだから分かり易くていい。外観はギルドと言うよりシンジケードだけど。

という事で、さっそくお邪魔しまーす。

『うーむ……』

内部も大体想像通り。こいつら絶対に堅気じゃない。ジロジロ見られてるけど、目を合わせないようにしよう。関わると面倒臭そうだから。

「いらっしゃいませ～。外から来た方ですね～？」

チンピラ共の波間をすり抜け、ギルドのカウンターまで辿り着くと、糸目な美人さんに歓迎された。雰囲気や喋り方も相俟って、何だか猫みたいな受付嬢である。個人的に〝糸目キャラには何かある〟と思ってるから、こいつには注意しておこう。

「えっと、ハンターに登録したいんですが」

この中では一番真面目っぽいアデルが代表して、ハンター登録の手続きをする。

「はい、構いませんよ～。こちらの用紙に記入して下さ～い。あと、新人講習は必

ず受けて下さいね～、受付は何時でもやっていますので～」
　間の抜けた声で記入用紙が渡されたので、とりあえず筆を走らせる。書き書き。
……はい、お終い。
「はいはい、どうも～。……あらま、既にイズチを1匹ずつ討伐してますね～。武器をお持ちなので～？」
「はい、一応は。でも、ここで新たに買い替えようと考えています」
「なるほどなるほど～。分かりました～」
　うむ、上手いぞアデル。伊達に最高司令官はやってないって事か。何時もこうなら言う事ないんだけど……。
　その後の初心者講習兼里クエスト★1シリーズについては恙なくクリアした、とだけ言っておく。既に小型モンスターを倒してるから、納品だの採集だの操竜だの、ライズでお勉強済みの事ばっかりだったしね。
　ただ、1つだけ違う要素として、外伝作品の「ストーリーズ」における「オトモン」のように、野生のモンスターをオトモにする事が出来るようになっている点が上げられる。専用の道具を使い、モンスターの急所にスイッチ式の猛毒カプセルを

移植する事で、〝恐怖〟により従わせる、というシステムのようだ。やってる事がネオ・ボランティアと一緒なんだよなぁ……。

ま、私たちにはモンスターボールという、もっとずっと使い易く、オトモにも優しい道具があるから、何の問題も無いけどね。一先ず技術だけパクっちゃいましょう。

「随分と早かったですね～。しかも、一発で合格とは、驚きです～。……そんな貴女方にビッグチャ～ンス♪　つい最近、礼拝堂跡の付近にオサイズチが巣食っていて、とっても邪魔なんです～。退治してくれたら、ハンターランクを１つ上げちゃいますよ～」

おお、さっそく来たか、緊急クエスト。これをクリアしないと何時までもロクなクエストを受けられないし、武具や装備の強化も出来ないので、これは受けるしかないよねー。

「はい、お願いします」

「……ちなみに、クエストは基本的にソロかツーマンセルなので、チーム分けをして下さ～い。別に全員で行っても良いですが、ロクな稼ぎになりませんよ～？」

なるほど、そう言えばモンハンって基本はソロプレイだもんな。ターゲットは1匹しかいない訳だし、稼ぎが減るのも納得である。

ならば、さっそく独断と偏見で振り分けるとしよう。オトモは貸し出しにするとして、なるべく戦い易いコンビにしないとな。

ちなみに、組み合わせの結果はこんな感じ。

・チーム「マガイモノ」……ハンター：私+チャラトミ、オトモ：ボルデビサス、ララランテス

・チーム「ヒカゲモノ」……ハンター：零余子+姑獲鳥、オトモ：ヒドクーイ、ジャカロップ

・チーム「ソトナルモノ」……ハンター：ベア子+ヴィクター、オトモ：アズレーン、ムコニャル

・チーム「ヤッカイモノ」……ハンター：丸子+六部、オトモ：カロンダイト、イオーム

・チーム「ブライモノ」……ハンター：アデル+現地の人、オトモ：ジャラガンター、ウルファング

……1つだけ仲間外れがいるとか言ってはいけない。

『お前だけボッチだな（笑）』

「やかましいわ！」

だから、代わりに私が言っておいた。やーいやーい。

まぁ、現地の人と仲良くやってくれ。あわよくば情報を盗めるよう努力しろ。ガンバ！

その後は各々が初期の装備を整え、里の出口に立った。真面なのが「ブライモノ」の連中しかいないな。

『それじゃ、行くとするか。また生きて会おう』

「勝手に殺すな」

さぁ、それじゃあ、オサイズチを狩りに行きますかぁ！

◆コムリの里

カムラの里から程近い、巨大な谷底に造られた小さな集落。立地条件の関係上、

完全な自給自足であり、交易などはしていない。比較的最近出来た場所なので、まだまだ発展途上という感じ。

　里長のコムリは元々カムラの里の出身であり、フゲンたちと凌ぎを競っていたライバル関係だったが、50年前の百竜夜行でマガイマガドと交戦した際に心が折れ、荒んでしまい、誰も近寄らない谷底で新たな里を起こした。

　その為か、住人は訳アリな奴ばかりで、一応は真面なクエスト自体もしているが、他にも行商人や他のハンターを襲って身ぐるみ剥いでしまうなど、職業：山賊みたいな連中である。

クエスト②：鎌鼬竜オサイズチの討伐

オサイズチにしろアオアシラにシロ、操竜になるとやたら頼もしくなる奴結構いるヨネ。

『三位一体、オサイズチ～♪』
「……急にどうしたんスか？」
『いや、何となく……』
狩場のメインキャンプでちょっとだけ駄弁る私とチャラトミ。
そう言えば、２人で出掛けるのは久し振りかもな。感覚的な問題だろうけど。
ちなみに、装備はチャラトミが大剣で、私は片手剣だ。ハンターと言えば片手剣だろ。
チャラトミの大剣は鉱石系の最初期装備である「アイアンソードＩ」に、自分の血肉を染み込ませた改造品であり、まるでマガイマガドのように禍々しいデザイン

に変容している。性能的には「攻撃力：90、会心：0、属性：毒」って感じ。どんな改造を施した所で、最初の装備なんぞこの程度の物だろう。

私の片手剣も「ハンターナイフI」で、しかも未改造品だが、何故か「鬼火属性」が付与されている。あれか、私が「鬼」だからか。

……個人的には狩猟笛も使ってみたいが、そうなると玄上ちゃんに出張ってもらうのが一番になってしまうので、今回は遠慮しておく。ヌルゲーは好きじゃないし、何より楽器は武器じゃないのよ。

「しっかし、まさかリアルに「一狩り行こうぜ」出来るとは思わなかったっスねぇ」

『それには私も同意する』

この世界へのゲートを開けたのは、ただの偶然だった。

初めて異世界にお邪魔するには一旦眠る必要があるらしく、その時の〝夢見〟によって開ける扉が変化するらしい。我が能力ながら博打性が高いスキルだな。今回は事前にモンハンライズをしていたおかげだろう。

しかし、ギャンブル性があるからこそ選ぶ楽しさがあるし、何より異世界人ならではの〝特典〟もある。

『……で、〝これ〟が今回の獲物だ』

という事で、私はマップを開いた。

そう、これが異世界転移の特典。物語ならチートな能力を、ゲームなら操作性能を持ち込める。

さらに、偵察用の使い魔を作成する能力は健在なので、それも合わせれば、少なくとも狩猟範囲内の敵状は筒抜けである。

狩りは情報が命だ。敵を知らなければ返り討ちに遭う。ヌルゲーは大っ嫌いだが、舐めて掛かるような真似はしない。郷に入れば郷に従いつつも、便利な物は使わせてもらおう。

「礼拝堂の前にオサイズチが5体も居座っていますね」

「礼拝堂跡」のマップはカムラの里の「大社跡」に似た構成で、礼拝堂を最奥に13のエリアに分かれており、大社跡とは逆に奥へ行けば行く程、傾斜が深まっていく地形になっている。

解説によれば、元々は大社跡で信仰されていた宗派とは別の密教が行われていた場所で、信者が向こうよりも少なく肩身の狭い思いをしており、その結果こんな谷

底の奥地に礼拝堂を建てたのだと思われる。
まぁ、結局はどちらも滅んだのだが。諸行は無常である。
『他には……げっ、エリア５にクルペッコがいやがる』
クルペッコとは、皆大嫌いな他力本願系の鳥竜種だ。
ラッパやメガホンみたいな頭に極彩色の羽毛を持つ中型サイズのモンスターで、他のモンスターの声真似をして呼び寄せる特徴があるのだが、ランダムでとんでもない奴まで召喚する為、最悪の場合は仲良死し兼ねない、ヘイトしか湧かないモンスターである。
確かこの辺りには生息していない筈なのだが、何でいるし。とりあえず関わらないようにしよう。
「とりあえず、他の４頭は別動班に任せて、俺たちは一番手前のオサイズチとイズチの群れを倒しちゃいましょう」
『そうだな』
同じクエストに４班も向かわせるなんて手持ち無沙汰になりはしないかと心配したが、この分なら問題無いな。

つーか、何でこんなに繁殖するまで放っておいたんだよ。馬鹿じゃねぇの。

『それはそれとして……』

エリア13から程近い、エリア10の湖に居座っている、このモンスター何だろう？見た目は赤ピンクに染まり孔雀みたいな飾りの付いた馬鹿デカいガーグァって感じなのだが、こんな奴いたっけか。ティアーザ地方の前例があるので、正史には存在しないモンスターである可能性もあるから、意識だけはしておきたい。

ともかく、さっさと奥まで行って、オサイズチをハンティングだ。ボルデビサスに跨って、優雅な低空飛行の旅と洒落込もう。

『えいえい』『ギャァアアッ！』

道中で出遭った雑魚敵はゲームで鍛えた動きで制圧。片手剣は盾で殴る物。

《オラオラァッ！》『ピギャアアアッ！』

チャラトミさんや、大剣を太刀みたいに軽々と振り回すのは止めて頂けます？

そんなこんなで鉱石やアイテムをしっかり回収しつつ、進む事しばらく。

『いたいた……』「群れてますねぇ」

西洋の本場というより、大正時代によくあった〝西洋風〟の廃屋近くに、イズチ

が数匹と馬鹿デカいイズチが1匹いる。あの馬鹿デカいイズチが、オサイズチである。攻撃パターンは同じような系統のドスバギィやドズフロギィと似通っており、尚且つ体液飛ばしに属性が無いという残念な仕様だが、あの鎌尾の一撃は只管に痛いので、しっかりと避けながら狩ってしまうとしよう。

『とりあえず、ジャンピング爆弾！』『ギャオォオオッ!?』

開幕の挨拶は、大タル爆弾の投擲からだ。これ、翔蟲受けで体勢を即座に立て直せるのよね。

『せいっ！』『ピギィッ！』『ギュギャァッ！』

続いて、滑り込みからの切り上げコンボでオサイズチをぶん殴りつつ、他のイズチも巻き込み牽制。

『チャラトミィッ』《アイサーッ！》『グギャアァォッ！』

そして、怯んだ所にチャラトミが大剣で強襲。その一撃でイズチ共を殲滅し、オサイズチにも手痛いダメージを与えられた。

『……仕掛けて来るぞ！』《了解！》『ギィイイッ！』

だが、この世界の生物は基本的にタフであり、そう簡単に死にはしない。尻尾の

部位破壊には成功したが、それでも体当たりなどは仕掛けて来る。
ま、大振り過ぎてまるで当たらんがね。初心者御用達の雑魚大型種だから、苦戦はしないわー。
『ギガァヴォッ！』『しゃらんらしゃらんら～♪』『ギギィィツ!?』
さらに、オトモに連れてきたボルデビサスとラランテスがこれでもかとフルボッコにする。鎌鼬が蟷螂みたいな奴らにやられとる……。
『ていっ、せいっ、ドラァッ！』《せいぁっ！》『ゴギャアアッ！』
そして、シールドバッシュコンボと大剣の一撃により、オサイズチが倒れた。討伐完了だ。
『……って、何だか物足りないなぁ』
「下位装備とは言え、経験者ですからねー」
苦戦するとは思えなかったが、ここまであっさり倒せると、何だか物足りなくはある。あのデカいガーグァでも狩ってみるか？
「――――っ、鳴女さん！」
と、チャラトミが急に声を出して森の一角を指差した。そこにいたのは、

『クルペッコ……！』

何時から覗いてやがった。というか、これはもしかして……！

『アヴォオオオオン！』

すると、クルペッコが狼の遠吠えのような声を出し、

『グヴォオオォオンッ！』

「『ジンオウガだとぉ!?』」

さらに、声に釣られてジンオウガが出現した。ダイヤウルフと竜を融合させたような、滅茶苦茶マッシブでバリバリな雷狼竜である。

――――――って、いやいやいや、下位とは言え、この装備でジンオウガはマズい！

その上、呼んだクルペッコは逃げてやがるし。どうすんだよ、この状況!?

しかし、弱り目に祟り目は付き物だった。

『ガァァグヴァアアッ！』

「『ドワォッ!?』」

知らぬ間に、あのガーグァみたいな奴までエリア移動して来ていたのだ。

こいつ、近くで見ると本当にデカいな。ジンオウガと殆ど同じサイズなんだけど。大きさが似通っているという事は、実力的に同格である可能性が非常に高い。

ヤバい、マジでどうしよう。モ、モドリ玉が欲しい……！

『ヴァォオオオッ！』『ガァグァアアッ！』

『お？』「あいつら、喧嘩を始めましたよ」

だが、現れたガーグァっぽい奴は私たちには目もくれず、ジンオウガに向かって金切り声を上げている。頭や尻尾の飾り羽まで開いて、完全に挑発してやがる。

『グルヴォオオッ！』『ギャガァアアッ！』

そして、あっという間もなく、縄張り争いが始まる。これは操竜に繋げられるチャンスである。少し離れた所から見ていよう。

『ヴァルゥッ！』

先ずはジンオウガの攻撃。

例の「お手」3回でデカいガーグァ（「グラガグァ」というらしい）をバシバシと切り裂き、尻尾の振り下ろしで吹っ飛ばす。

『ガァグァアアアッ！』

しかし、グラガグァは倒れるどころか全く怯まず、クルルヤックよろしく嘴で連続攻撃。あのジンオウガを後退させた。

さらに、そのタイミングで何故か尻を向けたかと思うと、いきなり大量の無精卵を生み出して、ジンオウガに浴びせた。

この卵、1つ1つが爆弾になっているらしく、威力も小タルと大タル級の爆発力が入り混じっており、それをビシュテンゴの柿の如く飛ばしてくる為、見極めて防ぐのは容易ではない。というか、ガードでどうにか出来る気がしないのだが……。

『アヴォオオン！　ガヴォオオン！　……グヴォァアアアアッ！』

だが、そこはタフで強い牙竜種。多少面食らいはしたものの即座に蓄電を開始し、「超帯電状態」となって反撃に打って出た。雷を伴う激しい連撃がグラガグァを襲う。

しかし、ここで予想外の事が起きる。

『グァァ……ギャォオオオオッ！』

何と攻撃を受け切るばかりか、それを糧にグラガグァも超帯電状態となり、真っ赤な稲妻を纏った。そんな馬鹿な。

『ガグァアアヴォオオオオッ！』『グヴォオオッ!?』
「『嘘ぉっ!?』」
その上、大きく口を開けると、ラージャンもビックリな電撃ブレスをぶっ放した。
お前は本当にガーグァの親戚なのか!?
だが、これは千載一遇の大チャンスだ。今の一撃で、ジンオウガが操竜待機状態になった。ここは乗っからせてもらう！
『行け、私のジンオウガ！』『ゴヴァアアアッ！』『グァッ!?』
人の操作が加わったジンオウガはさっきまでとは動きがまるで違い、瞬く間にグラガグァをぶっ倒した。同時にジンオウガも力尽き、虫の息になる。こいつら攻撃力が高過ぎるやろ。
『チャラトミ、ボール持ってるか!?』
《はい、ラブラブボールとムーンボールを1個ずつ！》
『何でオシャボ持って来た!?』
まぁいい、この際ボールの種類なんて関係ない。どっちも気絶してる、今が捕まえ時なんだよぉ！

『せいっ！』《オラァッ！》

そして、投げたボールで2匹を無事にゲット。オトモン化する事に成功した。

嗚呼、疲れた……まだHR2なのに、何でジンオウガやグラガグァと戦わなきゃならんのじゃーい。

「……帰りますか」『そうだね』『ギャォッ！』『しゃらら～♪』

とにもかくにも、当初の目的であるオサイズチは討伐した。ついでのイベントがヤバ過ぎたけど。ゴリゴリと精神も削られたし、さっさと帰ってご飯食べよう……。

◆グラガグァ

本来は天敵であるジンオウガの背にいる「超電雷光虫」を何度か捕食した、選ばれしガーグァのみが到達出来る突然変異の鳥竜種。

アンジャナフを超える巨躯とジンオウガに匹敵するパワー、無尽蔵とも言える体力を持つ化け物で、超電雷光虫を食べた影響により放電やブレスを放つ事が可能となった。他にも無精卵に爆発性の体液を混ぜ込んで疑似的な爆弾として発射する能

力も得ており、接近する事さえ困難な強敵である。

ちなみに、派手な体色と飾り羽を持つのは異性へのアピールではなく、ジンオウガを挑発して戦いに持ち込む為で、攻撃の最中に超電雷光虫を貪り食べる。むろん敵の反撃に晒されはするが、イビルジョーも根を上げる底なしの体力と回復力のおかげで、何の問題も無い。

ただし、〝牙竜種を興奮させる電磁場を羽から放って挑発する〟という特性上、何の旨味もないマガイマガドまで呼び寄せてしまう事があるのが玉に瑕。

また、元がガーグァなので、この巨体の割りに人懐っこく、ガーグァの頃から育ててくれた相手であれば、甘える仕草すら見せるという。

クエスト③：岩竜バサルモスの狩猟

「どうしてバサル、すぐに爆発してしまうん？」
「真面に斬り合うのが阿保らしゅうて、爆破してるからや。やっぱり邪魔な岩盤は発破解体やで」

やぁ、皆の衆！
わしじゃよ、丸子じゃよ～♪
つい最近、鳴女をぶち切れさせてしまい、ふるぼっこにされたばかりじゃが、今日もわしは元気じゃ。ま、妖怪だからねー。
そんで、今回はもんはんとか言うげぇむの世界に入り込み、はんたぁをする事になった訳じゃが――――これがまぁ、面白いの何の。
お前ら恐竜かと言いたくなる化け物共を相手に、知恵と勇気と技術を持って、命懸けの戦いを挑むとか、単純に燃えるじゃろ。雑魚を蹴散らす無双げぇむも良い

が、こういう達成感のある強敵を相手取るのもわしは好きじゃ。

さらに、今度の異世界旅行には六部も付いて来てくれておる。まさに百人力じゃ。わしらが揃えば、どんな敵にだって負けはしないぞぇ。

「はぁ～い、皆大好き、緊急クエストの時間ですよ～♪」

そんなこんなで大型もんすたぁと戦って来たわしらじゃが、ここで昇格する為の行事が起きたようじゃの。

内容はばさるもすとか言う岩竜を狩猟しろ、との事。こやつはぐらびもすという鎧竜の幼生で、放っておくと進化してしまい、多大な被害を齎すから、子供の内に狩っておくのが定石なのだそうじゃな。

さらに、ぼるぼろすやぷけぷけなど、他にも大型もんすたぁが頻繁に出現しており、それらも同時に狩猟して欲しいとの事じゃ。鳴女は迷わずぷけぷけを、零余子はぼるぼろすを、あでるはりおれいあを選んだから、わしらは素直に岩竜狩りをするとしよう。

という事で、出発じゃ～♪

『はいよー、かろ～ん！』『グモグモ』

舞台は「砂岩地帯」という岩の多い砂漠地帯。入り組んだ地形が面倒じゃが、礼拝堂跡よりは歩き易いので、今回は楽に進めそうじゃ。

ちなみに、乗り物ぽけもんは「かろんだいと」という大蜘蛛。移動は遅めだが、馬力と特殊能力に長けておる。特に毒攻撃が強力じゃな。他にも糸で縛り付ける事も出来る。これらの能力に何度助けられたか。

『何度乗っても慣れんのぅ……』

しかし、相変わらず潔癖な六部はあまり好かんようで、毎回乗る度に嫌な顔をしている。そんなに嫌なら、自分の乗り物を捕まえれば良いのに。

そう言えば、鳴女たちは「じんおうが」と「ぐらがぐぁ」とか言うもんすたぁを捕まえとったな。わしも何か捕まえてみたいのー。今回の獲物である岩竜でも良いぞぇ。

『キィッ！』『ギャァッ！』

おっと、雑魚敵の登場じゃ。確かあれは、「ふろぎぃ」じゃったか。毒を吐きよる厄介な連中じゃ。ここはかろんに頑張ってもらおう。かろんは元から毒持ちなので毒には強い。

『クォオン！』『ギィッ!?』『ギャギャッ！』

さらに、毒蜘蛛だからか、糸を武器に戦う事も出来る。粘つく投網で縛り上げ、痺れ毒を食らわせる。まさに忍びの技よ。あっと言う間に、有無を言わさず、ふろぎぃたちを始末した。素晴らしい。素材失礼します。

『うーん、おともが強過ぎるのぅ』

『だが、油断は大敵じゃぞ。大型モンスター相手に、こうは行かないからな』

『確かに……』

おともが強いのは嬉しいが、頼り過ぎも良くない。あくまで彼らは補助役じゃからの。わしらがしっかりせねば。

さて、それはそれとして、狩猟対象の岩竜は何処におるのかの？

『マップを見てみたらどうじゃ？』『それもそうじゃの』

敵状把握こそ勝利への近道。せっかく便利な能力を貸し出されとるんじゃから、有効活用せねばの。

『えーっと、十一番地におるようじゃ』

『他のモンスターはどうじゃ？』

『うーむ……七番地に「くるるやっく」、三番地に「ぼるぼろす」がいるの』
『ふむ、ならばボルボロスへ先に仕掛けよう。操竜状態にしてバサルモスに挑み、乗り換えてからクルルヤックの方へ誘導しよう。それが一番率が良い』
『うむ、それで行くかぇ』
流石は六部、頼りになるのぅ。商家の一人息子は伊達ではないな。
それじゃあ、一番近場のぼるぼろすへ挑むとしよう。そうして渇いた岩場を進む事しばらく。
『ボロァアアァァッ！』
『居おった』『仕掛けるぞ』
小さな湖の傍に、ぼるぼろすとやらがいた。岩と泥に塗れた頭突き恐竜のような姿で、尻尾が棍棒になっているのが特徴じゃの。
おそらく、頭突きと尻尾で殴るのが主な格闘戦術じゃろう。問題はどんな特異能力を持っておるかじゃな。別名が土砂竜じゃから、泥でも吐き付けて来るのかの。
そうなると、接近戦は危険かもしれんな。
まぁ、わしは双剣じゃから、嫌でも近付かねばならんのじゃが。

とは言え、六部の弓で援護があれば、そこまで苦労はすまい。
そもそも、こいつはただの乗り物じゃから倒す必要も無いし、さっさと操竜状態にするとしよう。

――――――ピィイイイッ！

会敵とほぼ同時に、まるで沸騰した薬缶のような音を立てて、ぼるぼろすが突撃してきた。

『食らうものか！』

わしはそれを軽く横へ移動する事で、簡単に躱す。やはり重量級、力はあっても速度はそこまでではない。すぐさま足元に潜り込み、切り付けた。

『ぬぅ、硬いのぅ……！』

だが、感触は今一。鳥竜種のようにはいかんか。武器もまだ「ぴこ・めりす」の一番目だからのぅ。目指せ、「ぐれいす・そうる」じゃな。

『ロァアアッ！』『危なっ!?』

とか何とか考えていたら、ぼるぼろすが尻尾をぶん回して来おった。知っとるぞ、あれを食らったら、内臓が破裂とかするんじゃろ？

しかも、身体をぶるぶると震わせたかと思うと、人一人は飲み込んでしまいそうな泥塊を幾つも放って来おったから、さぁ大変。あまりに近過ぎて、避けるのが精一杯じゃった。

『グヴォォオオッ！』

そして、退路を塞いだ所に、頭を大きく振り被り、潰しに掛かって来る。こ、こやつ、強いぞ!?

『こっちじゃ！』『ゴァッ!?』

しかし、そこに閃光玉が一つ投げ込まれ、ぼるぼろすの目を晦ませる。六部じゃな。わしは咄嗟に目隠ししたから大丈夫じゃが、ぼるぼろすは堪った物ではあるまい。

『せいっ！』『ウボロォッ！』

さらに、怯んだ所に六部の連弓が炸裂。見事に昏倒させ、操竜状態に持ち込んだ。流石は六部、頼りになるのぅ！

『それじゃあ、ちっとばかし乗らせてもらおうかのぅ！』『ボルヴァアァッ！』

という事で、手透きのわしがぼるぼろすに跨る事にした。六部は泥を被るのが嫌

じゃろうからな。わしが一肌脱いでやろう。

『見敵必殺！』『ボロォォッ！』

『バヴォオオオッ！』

岩の谷間を進む事しばし、狩猟対象である岩竜ばさるもすを発見した。

見た目は岩山。ぼるぼろすが小さく見えるくらいにでかい。如何にも力一辺倒と言った感じで、動きは非常に緩慢。振り返るのでさえ、そこそこの時間を要していた。

だが、その分だけ装甲の厚さは相当な物で、切り掛かっても弾かれるのが目に見えている。あと、何か溶岩とか吐き出しそう。

とりあえず、攻撃してから乗り換えじゃ！

『行け、ぼるぼろす！』『ボルァッ！』

『バヴォッ!?』

ふむ、流石は大型もんすたー同士。硬くともだめーじは入るようじゃの。動きが鈍いから、反撃の暇を与えずに黙らせる事が出来る。

『バヴォォォ……』

よしよし、地に伏せたな。あとは最後にでかいのを一発入れてから、こやつに乗り換えて――――、

『丸子、今すぐ離脱しろ！』『……ッ！』

しかし、いよいよ乗り換え準備に入ろうとした瞬間、六部が声を上げた。何だか分らんが、六部は勘が鋭い。わしは殆ど反射的にぼるぼろすから飛び退いた。

そして、まさにその刹那。

『グラヴォオオオオッ！』

ばさるもすの外殻が弾け飛んで、より厳つい見た目の竜へと変じた。

『ゴヴァアアッ！』『ボロァッ！』

さらに、大きく口を開けたかと思うと、溶岩どころか火砕流のような熱線を吐き、ボルボロスをあっと言う間に退けてしまった。

これは、もしや……!?

『……マップの表示が「グラビモス」に変わっておる！』『くっ……！』

事前情報よりも体躯が大きかったから何か変だとは思っておったが、やはり成体になったのか。厄介じゃな。

『一旦退くぞ！』『分かっておる！』

どう考えても、今の装備では勝ち目がない。精々他のもんすたーを操竜して弱らせるくらいしか方法が思いつかん。幸いこやつはそこまで早くはない。先ずは逃げながら考えるとしよう。

だが、運という物は、何処までも偏って流れる物らしい。

『ぬっ、何じゃあれは!?』

『ティガレックスじゃ！』

何と行く先に通りすがりのてぃがれっくすが現れてしまった。

てぃがれっくすと言えば、「轟竜」の名が示す通り、凄まじい咆哮で衝撃波を発生させる事で有名なのだそうじゃ。他にも狂ったように繰り出してくる突進は避け辛く、離れていても岩をかっ飛ばしてくると言う。何と面倒な事か。

前門のてぃがれっくす、後門のぐらびもす。諺としては間違っておる気がするが、今の状況にはピッタリじゃな。

――――――いや、待て。冷静に考えろ。これはある意味では良い巡り合わせじゃ。

『六部！』『分かっておる！』
『ギャオォオオオオオオ！』
わしが目配せすると、言うが早いか、六部はかろんから離脱し、未だこちらに興味を示さないてぃがれっくすを攻撃。自らに敵意を向けさせた。
むろん、戦うつもりなど毛頭ない。初期装備で勝てる程、どちらも甘くはないからじゃ。
だからこそ、同士討ちをさせて、弱った所に止めを刺す！
卑怯でも何でもない、これは命の奪い合いじゃからなぁ！
『グラヴォッ！』『ゴギャアアッ！』
さっそく、誘い出されたてぃがれっくすとぐらびもすが争いを始める。彼らは基本的にちっぽけな人間よりも、目の前の脅威を優先する。
その間に、わしは持ち合わせた大樽の爆弾を全て投入可能な状態にする。置いて使ったりはしない。こういう乱戦の時は、こう使うんじゃ！
『そりゃあっ！』
『ゴルォ!?』『ギャオッ！』

わしはかろんから離脱しつつ、空中から爆弾を投げ落とす。本来は設置型じゃが、そんな悠長な事を言っている場合ではない。なるべく、ぐらびもすに当たるようにぶん投げ、爆風で叩き付けられる前に翔蟲で体勢を立て直し、即座にかろんに戻る。これを三回程繰り返す。

その過程で、てぃがれっくすは逃げ出した。元々蚊帳の外じゃったからの。付き合いきれなくなったんじゃな。……予定通り。

『せぇい！』

『グヴォオオッ！』

そして、残るぐらびもすに、爆破で装甲が削れた箇所へ鋭い連撃を叩き込む。これは刃毀れ確定じゃな！

『こっちじゃ、うつけ者！』

『グルヴォォォ……バヴォッ!?』

『馬鹿め、ハンターの知恵を舐めるでないわ！』

さらに、六部が怒るぐらびもすへ攻撃を仕掛け、自分へ敵意を向けさせ、見事に落とし穴へ誘導。

『今じゃ、丸子！』『合点じゃ！』
捕獲用麻酔玉で眠らせた後、持ち合わせのへびーぼーるでげっとしてやった。目的は狩猟じゃから、これでくえすとは完了じゃな。
『ふぅ……帰るかの、丸子』
『そうじゃな』
ついでにぎるどに文句を入れてやる。鳴女の時といい、情報管理があまりに杜撰過ぎるぞ！

◆グラビモス
岩竜バサルモスの成体で、別称は「鎧竜」。
その名の通り、凄まじい装甲厚の動く岩山で、リオレウスやディアブロスを超える巨体を誇る。
パワーはもちろんの事、確実性の高いブレス攻撃（通称「グラビーム」）や溶岩弾など、様々な意味でバサルモスをグレードアップした存在。あと、これでも飛竜

種だから一応は飛べたりする。
その分、動きはバサルモスに輪を掛けてすっトロいが、自慢の岩壁装甲で全てを弾き返しまう為、何の問題も無い。
まぁ、そんなグラビモスも、覇竜アカムトルムの前では手頃な御馳走なのだが……。
そして、何故かモンハンライズに出して貰えなかった可哀想な奴。バサルモスは居るのに。同じような被害者に、ドスジャギィやドスファンゴなどがいる。

クエスト④：千刃竜セルレギオスの狩猟

セルレギオスってウザいですヨネー。というか飛び続ける奴は基本的に苦手。片手剣だもんナァ……。

「あらまビックリ～♪」

毎回毎回巻き起こるトラブルに業を煮やして陳情したら、真ゲスプレイされたでござる。貴様をハントしてやろうか。現代の日本だったら確実に社会的な死を迎えるわよ？

――――――はいはい皆、おはよう食。零余子だよ。

さて、朝の一発目から殺意満天な始まりだけど、仕方ないよね。だって、ギルドの対応がこれなんだもの。丸子の所にはティガレックスが通り縋るし、私の方なんか空からバゼルギウスが急襲して来たんだぞ、コラァッ！

「……まぁ、冗談はこれぐらいにして」

冗談になってないし、顔が割と本気なんだけど？

「近頃、観測班でも把握し切れないモンスターの出現が多くてね。たぶんだけど、百竜夜行が近いのかも」

フーン、なるほどねぇ。

原因がライズと同じく風雷神の古龍が原因でマガイマガドが便乗している形なのか、それとも別の要因が存在するのかは不明だが、それなら大型モンスターの大移動があっても不思議ではない。

「一応、こっちも最大限の努力はしてるし、ハンターにはそれも込みで挑んでもらってるんだけどね。そもそも、嫌なら断ればいいだけだし」

「ぬー」

ぐうの音も出ない。確かにその通りだ。

とは言え、このやり場のない怒りを我慢する気は無い。だから、何かクエストよこせや。

「そんな苛立つアナタに、素敵な緊急クエストをプレゼントするわよ～ん♪」

「緊急クエスト？」

「ええ。これをクリアしたら、晴れて上位ハンターの仲間入りよ」
「おお……」
それは美味しい。
しかし、上手い話には裏がある物。どうせ面倒な奴が相手なんでしょ？
「内容はセルレギオスの狩猟よ」
「セルレギオス!?」
うわぁ、また面倒なモンスターが出てきたな。
セルレギオスと言えば、閉じた松ぼっくりみたいな鱗と頭の一本角が特徴的な飛竜種である。怒ると鱗が前へ向かって逆立ち、本当の意味で松ぼっくりになる。
レックス型とレウス型の丁度中間くらいの骨格を持っており、飛ぶのが非常に上手く、空を縦横無尽に飛び交いながら脚で攻撃を仕掛けて来る。
さらに、全身の鋭い鱗を弾丸の如く発射してくる事もあり、当たると裂傷状態になってしまう。故に「千刃竜」の異名を持ち、多くのハンターから「ウゼェ」と忌み嫌われている。正直、私も好きじゃない。
だが、昔のモンハンと違い、コムリの里には「翔蟲」があるので、こちらもある

程度は空中戦を挑める。セルレギオスは攻撃力には優れるが、レウスと同じく細身で軽い為、割と簡単に叩き落せる。そうなればこっちの物だ。

ガハハハ、勝ったな。風呂入って来る。

「いや、風呂じゃなくてクエストに行きなさいよ」

「当たり前にマインド・ハックしてんじゃないよ」

という事で、セルレギオスの狩猟を受ける事にした。

『やっと終わったの？　話が長いわね』

ちなみに、コンビ相手はまさかの姑獲鳥である。厳正なあみだくじの結果とは言え、こいつと組むなんて御免被りたかったなぁ。

「うるさいわよ、アバズレが。待つのが嫌なら、自分で行きなさいよ」

『それこそ嫌よ。ワタシは数少ない自由を謳歌したいんだから』

私、こいつ嫌い。母親みたいに目上振るから。本当は誰よりも子供染みた性格してる癖に。

……いや、一番ガキ大将なのは鳴女だから、最下位ではないか。

まぁいい。私の武器と装備の関係上、こいつとは相性が良い。今回も仕方ないか

ら、コンビを組む事を許してあげましょう。
「なら、さっさとついて来なさいよ。これをクリアしたら、ようやく上位ハンターになるんだから」
『あらま、それは嬉しいわね。是非とも頑張りましょう♪』
「ふん……」
やな感じぃー。
◆◆◆◆◆◆
そして、時と場所は移り、「鍾乳岩窟」。
溶岩が冷えて固まったようなカチコチの大地が何処までも広がり、その所々に大穴が空いている、という地形で、降りた先には迷路のような鍾乳洞が広がっている。主にバサルモスやイソネミクニなどが生息している。前者は鉱物を食べる為に、後者は地底湖に潜んでいるからだろう。
何れにしろ、翔蟲無しでは落ちたが最後、一々道を行ったり来たりしなければならない、はっきり言ってクソミソなフィールドだ。
ただ、鉱石がそこら中で採掘出来る為、素材集めには向いている。あと、何故か

地表部に蜂の巣がいっぱいあるので、これもまた重宝する。

これで相手がセルレギオスじゃなければなぁ……。

そもそも、ジャングルの秘境みたいな場所に棲んでいる筈のお前がなんでここにいるんだよ。あれか、また誰かに棲み処を追われたのか。

ま、とにかく狩猟を始めるとしよう。

「先ずはハチミツと鉱石集めね！」

『そんな悠長な事してて良いの？』

「分かってないわねー。素材集めをしないなんて、ハンター失格よ？」

ハンターの仕事はモンスターの狩猟が主だが、納品や採集クエストもあるし、何より装備を作るのに金と素材が掛かる。こうした小さな努力をコツコツと積んでおくと、後で楽になるのである。特にハチミツは、ある意味で鉱石以上に使い道があるので、積極的に集めておくといい。

『……分かったわよ。それじゃあ、一旦二手に分かれて、ターゲットを探しつつ素材を集めましょう』

「そうね、それじゃあバイバイ♪」

『随分と嬉しそうね』

そりゃそうだろ。ほれ、早くあっちに行け、シッシッ！

「それじゃ、一緒に素材集めしようか、ノームくん！」『ピキュッ！』

という訳で、ここからはノームくんとハチミツデートね。

ノームくんはこの世界でもトンガリ帽子と人間形態を入れ替えられる上にオトモとしてカウントされていないので、色々と手伝いをして貰っている。単純に人手が増えるし、何より有事の際に大活躍してくれるのだ。

『ルゥギャアアアッ！』

そんなこんなで呑気に特性：みつあつめしていたら、セルレギオスがエリア移動して来た。もう少しじっとしてればいいのに、忙しい奴だな。

しゃーない、挑むとしよう。

「オラオラオラッ！」

『ルヴォオオオッ!?』

武器を抜き、撃ちまくる。

私の武器は「王弩ライカンⅠ」。鳴女に頼んでジンオウガの素材を分けて貰った

事により出来上がった特注品である。攻撃力が高くブレも無い、使い易いライトボウガンだ。反動が若干大きいのが難点だが、そこは使い方次第だから、気にしても仕方ない。

ライトボウガンはガード不能な分、機動力と連射力に優れているんだから、ガンガン撃つべしだ。撃って撃って撃って、撃ちまくる～♪

「弾込め頼むよ、ノームくん！」『ピキッ！』

さらに、私にはノームくんという頼れるサポート役がいる。以心伝心、心も身体も通じ合っているから、私が欲しい物を的確に込めてくれるし、いざとなれば岡目八目の視点で危機を察知してくれる。こんなにちっちゃいのに、飯伏銀なのだ。

『ルギャォオン！』

おっ、飛び上がったか。セルレギオスはレックスに近い飛竜種だから最初は着陸しているが、ある程度攻撃すると飛翔して反撃してくるのがパターンである。

しかし、その戦法に苦しめられたのは過去の話。今は「鉄蟲糸技」という、必殺技があるのよ！

「そぉい！」『レギャヴォッ!?』

鉄蟲糸技の「扇回跳躍」で空中へ躍り出て、そのまま弾丸を撃ち込み、すぐさま叩き落す。

そして、怯んでのた打ち回っている所へ、起爆竜弾を設置しつつ、容赦なく撃ちまくる。死ね死ね死ね、死んだモンスターだけが良い素材になるんだぁ！

『ルギャヴォオオッ！』

すると、復活したセルレギオスが怒り状態になった。相変わらず松ぼっくりですね。怒っていると落としにくい筈だから、ここはオトモを乗り回して、距離を取りながら様子を見よう。

ちなみに、私のオトモはヒドクーイ。全身毒塗れの死鳥ポケモンだ。触れただけで毒に侵されるので、本来なら跨る事など不可能なのだが、不死身の私には関係ない。

むしろ、敵の反撃で毒を盛れるのだから、有難いくらいである。猛毒万歳。

『レギャアアアッ！』

「うへぁっ!?」

ヤバい、アホな事を考えていたら、鱗が一発当たっちゃった。

その上、衝撃でヒドクーイから落されてしまった。マズいマズい、ノームくんもピキピキ騒いでる。これは大技が来る前振りだ。まさかの連続キックかぁ!?

『ギャォオオ……キャアアッ!?』

『せいやっ！』

と、危ない所で姑獲鳥が登場。「ブレイクフォールンI」というグラガヴァの素材から作れる狩猟笛でヘッドバッティングし、セルレギオスを墜落させる。

さらに、気絶しているのを良い事に三音旋律を決めて、私の体力を回復し、その他色々をアップしてくれた。よしよし、それで良い。それこそが狩猟笛の本領だからね。

「……遅い！」

だが、遅い。何処で何をしていた。

『ちょっとフリーサイドクエストを達成したくてね』

この野郎、立派にハンターしやがって。

「……もういいわ。さっさと倒すわよ！」『言われずとも！』

さぁ、ここからは私たちのターンだ――――と意気込もうとした、その時。

「うきゃあ!?」『地震!?』

突然、地面が大きく揺れ出した。

しかし、自然現象としての地震ではない。何かを掘り起こす音がするし、段々と揺れがせり上がって来ているからだ。

『ピキューッ！』

これは……ヤバい！

「退避！」『分かってる！』

そして、私はヒドクーイに跨り、姑獲鳥はオトモがジャカロップなので翔蟲を使って、空中へ退避した、まさにその瞬間だった。

『ジェルァアアアッ！』

地面を捲り返して、見覚えの無いモンスターが現れた。

全身が茶褐色の分厚い甲殻に覆われ、リオレウスに似た顔立ちとクシャルダオラのような骨格を持つ、巨大で逞しい飛竜種。飛ぶのはそこまで上手くなさそうだが、パワーとスピードを両立出来ていそうである。

一体何だ、こいつは!?

『「シェルレウス」よ！』「はぁっ!?」

今明かされる、衝撃の真実ぅ。

姑獲鳥曰く、このモンスターは絶滅種である筈の、シェルレウスなのだそうだ。

何で知ってるし。

『前に図鑑で見たから間違いないわ！』「はぁ……」

暇なんですねぇ？

『呆けてる場合じゃないわ！　シェルレウスが絶滅した原因は、環境適応能力の低さから。つまり、種族としての身体能力は相当な物の筈よ！』

「マジでか！」

『レギャアアッ！』『ジェルァアアアッ！』

とか何とか言っている間に、セルレギオスとシェルレウスが縄張り争いを始めた。

空へ舞い上がり、一方的な攻撃を加えるセルレギオスに対して、シェルレウスは自慢の装甲でダメージを無効化している。幾ら鱗を撃ち込もうと蹴りを入れようと、まるでバサルモスやグラビモスを剣で切り掛かった時のような音がするばかりで、全然堪えていない。

確かに姑獲鳥の言う通り、身体能力は相当な物らしいわね。

『グルゥゥゥ……ジェラォオオッ！』『ルギャヴォッ!?』

と、攻撃を受け続けていたシェルレウスが、前脚に力を入れたかと思うと、セルレギオスの上を取る程の大ジャンプをして、ナルガクルガのように翼を刃の如く使った三連撃を叩き込んで、地面へ叩き落した。

そして、リオレウスよろしく滑空しながら尾撃と毒を食らわせ、着陸後は動けないよう腕で押さえつけつつ、至近距離から火炎放射を叩き込んだ。何、その即死コンボ!?

どうしよう、セルレギオスは瀕死になったけど、このままじゃ狩猟達成の証が回収出来ないんだけど。

『フッ！』「あっ!?」

すると、姑獲鳥が持って来ていたスピードボールでセルレギオスをゲットしてしまった。

『逃げるわよ！』「えっ、あ、うん!?」

さらに、有無を言わさず戦線離脱。ギルドへの報告も兼ねて、さっさとトンズラ

してしまった。

――――――あれ、これってつまり？

『セルレギオス、ゲットだぜ～♪』

「このアマぁあああああっ！」

私だけオトモンの捕獲に失敗してしまった、という事である。チクショウ！

「今度は絶対に捕まえてやるからなぁ、シェルレウスぅ！」

『ジェラァ？』

意味不明な負け犬の遠吠えに頚を傾げるシェルレウスに中指を立てつつ、私は泣く泣くクエストから帰還するのだった。

ちなみに、標的は狩猟しているので、無事に上位ハンターにはなれましたとさ。

チャンチャン♪

◆シェルレウス

絶滅種とされる、リオレウスやリオレイアの祖先に当たる飛竜種。

茶褐色の分厚い甲殻と逞しい前脚を活かしたパワーファイトが得意で、初めは攻撃を受けて様子見をしてから一気に攻め立てるのが基本パターン。

また、殆ど滑空しか出来ない翼はナルガクルガの如く鋭い刃であり、大型モンスターも一撃でダウンさせる威力を誇る。ついでに食らうと裂傷状態になってしまう。

さらに、尻尾に毒がある上に火炎放射まで出来る為、一度攻めを許すと回復する暇は全くと言っていい程にない。

このように凄まじい力を持つ本種であるが、急激な環境の変化に適応出来ずに絶滅した――――かに見えたが、一部の個体が地下へ生活の場を移し、隠れるようにして生き延びていた。

クエスト⑤：甲殻竜シェルレウスの捕獲

シェルレウスの戦い方のイメージはジンオウガ+マガイマガド+リオレウスって感じデス。つまり回復の暇を与えない苛烈な攻撃がコンセプトでスネ。

はい、皆さん、こんばんは。

ワタシはベアトリス＝バックアップ・コアソウルズ。あのバックベアードの一人娘よ。だけど、個人的には気軽にベア子と呼んで欲しいわ。これでも親日家ですもの。

さて、さっそくで悪いけど、ちょっと愚痴を良いかしら？

ワタシ、何でこんな所でハンターやっているの？

……いや、分かってはいるのよ。ワタシが勝手に付いて来ただけだって事は。

でもさぁ、鳴女をほったらかしにしとくとか、怖過ぎじゃない。前はアデルを嵌めて遊ぼうとしてたし、何より初対面時で死に掛けたし。あの時はワタシもヴィク

ターもヤバい状態だったわ。鳴女と言うより、丸子ちゃんたちのせいだけど。

でも、ワタシは全力で鳴女のせいにするわ。だって、今でも丸子ちゃんの動画ファンですもの。本当に、何なのかしらね、あの子は。あそこまで自由奔放・元気溌剌に生きてみたいものだわ。

――――――って、流石に関係ない話をし過ぎたわね。そろそろ現実と向き合いましょう。

ワタシは今日、零余子たちと共同戦線を張る事になっているわ。何でも以前取り逃したシェルレウスが、緊急クエストの対象にされたらしいのよ。零余子としては是が非でも捕まえたいらしいけど、シェルレウスの猛攻を防御が出来ないライトボウガンと狩猟笛だけじゃ不安だから、近接戦に特化してるワタシたち協力して欲しいんだって。自分たちはワタシたちへの協力に大分渋った癖に、虫のいい話よね。

ちなみに、シェルレウスと言うのは、ギルドに絶滅種として認定されている飛竜種のモンスターで、甲殻竜と呼ばれるだけの装甲厚と、セルレギオスも真っ向から叩きのめす馬鹿力が特徴よ。強さ自体は前回零余子が目撃して報告してるから、今回の調査はどちらかと言うと生態調査に近いわね。

まぁ、内容が「捕獲」になってるから、最期は解剖されて終わりかもしれないけど。

だけど、それは零余子が許さないか。素材だけ提供して、後は自分のオトモンにするつもりかも。

良いわよねぇ、オトモン。ワタシとヴィクターも持っているわ。ワタシがリオレイアで、ヴィクターがリオレウスね。どちらも亜種で、ピンクとブルーという分かり易い組み合わせをしているわ。まさに夫婦ね。

そして、シェルレウスはそんな彼らの先祖であり、宿敵でもある存在。零余子の報告を鑑みて、ギルドとしては〝シェルレウスと正面切って戦う事は不可能に近いから飛翔能力を上げた〟と考えているようね。本当かどうかは知らないけど。

ただ、体重と靭力、パワーを考えると、確かに真っ向勝負は危険ね。リオ夫婦は飛べる分、かなり軽いから。気を引き締めていきましょう。

「あ、ベア子ちゃんたち、おはよう。今日はマルチクエスト、ありがとね～♪」

『……』

と、コムリのギルドに到着した所で、零余子から声を掛けられた。姑獲鳥はこち

らを見もしない。やな感じ。

『別に良いわよ。これをクリアすれば、ＨＲ７になるからね』

『いやー、感慨深いねぇ。だけど、こんなに時間を要しているというのに、向こうに戻れば精々数日。感覚がおかしくなるねぇ～♪』

口と頭で別の事を言っている彼は、ヴィクター・フランケンシュタイン。ワタシの相棒よ。

元々は単なる「フランケンシュタインの怪物」でしかなかったけど、創造主に成り代わる事で晴れて今の〝知性と野性〟が同居した、マッドサイエンティストになったらしいわ。あくまで本人談だけどね。真相はフラスコの中よ。

『まぁ、それは置いておいて……シェルレウスの動向はどうなっているの？』

「移動はしていないみたい。観測班によれば、普段は鍾乳岩窟の最奥地で静かに過ごしているらしいわ」

『獲物を待ち構えている、の間違いじゃない？』

「そうとも言う。……あそこ、貴重な鉱石や原珠がゴロゴロあるみたいだからね」

へぇ、ゴツイ見た目をしている割に、意外と待ち伏せ型なんだ。ディアブロスも

あれで草食らしいから、こっちの常識はあんまり通じないのかもね。
しかし、鉱石や原珠と言ったレア物でハンターを釣っている可能性があるとなると、知能の高さも留意しなければなわないわ。ティガレックスのような〝戦いの天才〟とは別に考えた方がいいのかも。
ともかく、ここでまごまごしてても仕方ないし、さっさと出掛けるとしましょう。準備は済んでいるしね。
「……あ、そうだ！」
『何よ？』
「トイレ行っていい？　待ち時間にコーヒー飲んだら、ちょっとね……」
『早くしなさい』
オマエはハンター失格だ！
◆◆◆◆◆◆
所変わって、鍾乳岩窟。
さらに、今回はその下層部に来ているわ。シェルレウスを捕獲する為にね。
『幻想的ね』「確かに。スマフォ、持ってくれば良かったかも」

……だけど、そんな野暮な事は抜きにして、今はこの景色を堪能したいわ。ここにはあんまり来た事が無いからかもしれないけど、本当に奇麗よねぇ。鍾乳洞のあちこちに色とりどりの鉱石が生えていて、それらが七色に淡く光っているんですもの。気分は「耳をすませば」の劇中劇よ。あの魔法の洞窟も一度で良いから行ってみたいわねぇ。

『おお、これは今まで見た事の無い鉱石だ！　宝の山だな、ここは！』『ちょっとくらいガメても良いわよねぇ？　インテリアに良さそう♪』

そして、ヴィクターと姑獲鳥は情緒の欠片も無いわねー。物欲センサーがビンビンよ。こういう奴らが真っ先にシェルレウスの罠に掛かるんだろうなぁ……。

まぁ、それはそれとして、

『はいはい、そろそろ行きますよ、お二方』

『『もうちょっとだけ』』

『お黙り！　さっさとなさい！』

『『うひーん』』

「何か母親みたいだなぁ……」

やかましいわ。どいつもこいつも子供みたいな事ばっかりしやがって。いい加減にしなさい！

……コホン。という事で、ワタシたちは鍾乳岩窟の奥へ歩を進めた。ちょっと目移りしそうになったが、他の面子がもっと目の色を変えていたので、逆に落ち着いて対処出来た。オマエら何しに来たんだ。

――――――カサッ！

だが、流石に何かが動く物音がしたら、警戒せずにはいられない。ハンター云々は別として、戦いにおける索敵は基本である。

しかし、この音の小ささだと、おそらくは小型モンスターだろう。シェルレウスが物音一つ立てないくらい静かだとは思えないしね。

さて、鬼が出るか、蛇が出るか……答えは？

『キキィィイッ！』

『蜘蛛だぁあああっ！』

現れたのは、妃蜘蛛ヤツカダキの幼虫、ツケヒバキ。子犬大の蜘蛛型モンスターに糸の塊を乗っけた、若干可愛くも見えるデザインが本来の姿なのだが、コイツは

亜種なのか、身体が更に大きくなり、糸が紫色に染まっていて、普通に気持ち悪い。

『キィ！』『ケェッ！』『ピキャーッ！』『キチキチキチ！』『ピキキキッ！』『ピィピィ！』『キャアッ！』

「ちょ……多過ぎぃ!?」

さらに、これが1匹や2匹ではなく、鍾乳石の陰から、壁の穴や隙間から、そこら中のありとあらゆる場所から、次から次へと這い出て来た。キモイ！

そして、流石にこの数はヤバい。ライズで「百虫夜行」なんてクエストがあったけど、そんなの非にならないくらいの数だった。本当に１００匹現れるとか、冗談じゃないわよ！

『ケァアアッ！』

『うへぇ、ヤツカダキまで!?』

『スキャアアッ！』

『こっちにはネルスキュラまでいるんですけど!?』

その上、ヤツカダキ本人や懐かしのネルスキュラまで現れた。

ヤツカダキは先の通り、ツケヒバキの成体――――というか女王個体に当た

る存在で、こちらは糸を白無垢のように纏っているのが特徴。蜘蛛形綱をモチーフとした鋏角種らしい姿をしているが、実は折り畳み式の長い首を持っていたり、もう1つのモチーフである絡新婦の如く火を吐く、恐ろしいモンスターだ。ただ、コイツは亜種なのか、ツケヒバキと同じく紫色をしているが。

一方のネルスキュラは馬鹿デカい蜘蛛そのものなのだが、こちらもこちらで〝狩った獲物の皮を背中に張り付ける〟という嫌な設定を持っていて、それにより自身の弱点を補う悪知恵も有している。背中の糸膜を見る限り、ヤツカダキの糸を利用しているのだろう。ヤツカダキは火に強いが雷には弱いから、絶縁体としては不向きな筈だが、亜種だと耐性が変動しているんだろうか？

そもそも、コイツらは何でこんな所にいるのかしら。確か鍾乳岩窟はバサルモスやイソネミクニが主な生息モンスターだった気がするんだけど。観測班のミスか、もしくは何処かから移動して来たのかしら？

どちらにしろ、この馬鹿みたいな数と真面に戦う意味は無い。さっさと撤退しましょう。

『食らえ、こやし玉！』

という訳で、モンスターを散らせるこやし玉を使ったのだが、

「……逃げないわよ!?」『嘘でしょ!?』

何とコイツら、逃げるどころか興奮して襲い掛かって来た。臭い物には蓋だと言わんばかりに、一斉攻撃を仕掛けて来る。

『仕方ないわね、戦うわよ！　作戦名は「島津の退き口」！』

「強行突破しろってか!?」

『他に方法が無いでしょ！　活路はワタシたちが開くから、アナタたちは援護して！』『お供するよ、ベア子ちゃん！』

「分かったわよ！　姑獲鳥！」『はいはいはいはい！』

そんな感じで、ワタシたちは〝強行突破〟を敢行した。ワタシの「狐刀カカルクモナキⅡ」（太刀）とヴィクターの「タイタンアームズ」（チャージアックス）が敵を切り、零余子の「王弩ライカンⅡ」（ライトボウガン）と姑獲鳥の「ブレイクフォールンⅢ」（狩猟笛）の援護攻撃で道を開く。

むろん、全員を蹴散らすのは不可能だが、活路だけは開ける。今はそれでいい。生きて帰る事こそ、ハンターに最も必要な目標なのだから。

幸い、不意打ち同然の行為だったので相手は面喰い、その間に無理矢理突破する事は出来た。

だが、足は止めない。追い付かれて取り囲まれたら、今度こそヤバいからね。オトモンを使うという手もあるが、どの子も狭い場所では真価を発揮出来ない。ここは素直に逃げるが勝ちだろう。

そうして走り続ける事、しばらく。

「ここは……」

『どうやら、知らぬ間に最下層へ辿り着いてしまったみたいね……』

ワタシたちは、駄々っ広い空間に出た。

「ここもまた凄いわね」

『確かに。ドワーフが造ったって言ったら、素直に信じられるわ』

そこは、巨大な地下都市だった。

東京ドームを鼻で笑いそうなくらい広大な空間に、西洋式かつ石造りの廻廊が組まれ、それらと一体化した家々が所狭しと戸口を開けている。全てに七色の鉱石が使われている為、造形美と合わせて、とても奇麗だわ。洞窟の奥底に、こんな遺跡

があるとは。

　たぶん、滅ぶ前は立派な鉱山都市として栄えていたんでしょうけど、今は誰も居ないからか、ちょっとした虚しさも感じる。盛者必衰とは、こういう事を言うんでしょうね。奥州藤原氏の中尊寺金色堂を見た後の気分に似ているわ。凄いけど儚い、みたいな。

「……ただね、私は今、凄く嫌な予感がしてるのよ」

『奇遇ね、ワタシもよ』

　今は廃墟と化した地下都市。その割に埃や汚れが少なく、あまりに奇麗過ぎる。まるで、今でも誰かが使っているみたいに。

　いえ、違うわね。誰かじゃなくて――――ナニカ、よね？

『キキィィッ！』『キキャアッ！』

　噂をすれば何とやら。撒いた筈のツケヒバキの群れやヤツカダキたちがゾロゾロと現れた。それも、さっき以上の数で。

　どうやら、ここが本拠地だったようね。あっと言う間に囲まれてしまったわ、まったく……。

さーて、ここからどうした物か。ちょっと勿体ない気もするけど、この広さならオトモンを展開しても問題なさそうだし、四の五の言っていたらマジで殺られそうだから、ここは遠慮なく――――――、

『グヴォルルルル……！』

と、しばし逡巡していたら、何処からともなく低い唸り声が聞こえて来た。

『ピギィッ！』『ギャギャギャッ！』『キャォオッ！』

さらに、さっきまであれだけ殺意に満ちていたヤツカダキたちが急に怯えだして、文字通り蜘蛛の子を散らすように逃げ出した。残されるは、ワタシたちハンターのみ。

「お次は何だ？」

『分かってて聞いてるでしょ？』

「モチのロン」

そして、遺跡の奥に見える、燃え上がる炎。これは、言うまでもないでしょう。

『ジェラァアアアアッ！』

お目当てのモンスターである、シェルレウスの登場だ。

噴き上がるマグマのような火炎が１本通ったかと思うと、辺り一面が火の海となり、その炎の中からシェルレウスが飛翔するかの如く現れたのである。何それ、カッコいい。

だが、これはマズいかもね。前回は落ち着いていたようだけど、今回は最初から怒り状態のようだ。

魔戒騎士の烈火炎装を思わせる炎を纏った姿は、何処までも少年心を燃え上がらせ、少女であるワタシでさえ魅了させる程に雄々しいが、その状態から繰り出される攻撃は、まさに烈火の如しだろう。

結論：さっきよりヤバい。誰か助けて。

『ヴォオオオオッ！』

「『うわっ!?』」

すると、さっそくシェルレウスが攻撃を仕掛けて来た。マガイマガドばりの跳躍から繰り出される、ジンオウガのような「お手」三連撃である。

「ぐへっ!?」

どちらも同じタイミングで躱したのだが、避ける方向が悪かったのか、零余子

だけに直撃した。ジンオウガと同様のノリで真横に回避しようとしたのだろうが、シェルレウスにはナルガクルガを思わせるブレード状の翼があるので、ちょっと怖かろうと飛び込むように斜め前に避けるのが正しい。

――――――って、言ってる場合じゃないか。

『ヴィクター！』『分かってる！』

『ギャヴォオオッ!?』

既に即死コンボの態勢に入っていたシェルレウスの横面を、ヴィクターのタイタンアームズが捉える。魔戒騎士と違って、炎を纏っている部分は肉質が柔らかくなるみたいね。その分、攻撃力は増してるんでしょうけど。

『はぁっ！』『シッ！　シッ！　タァッ！』

『グルルル……！』

さらに、ワタシのカカルクモナキと姑獲鳥のライカンのコンボ攻撃が決まる。ゲージを溜めてしまえばこっちの物だ。そこにオトモたちの攻撃も加わり、シェルレウスへ瞬く間にダメージを蓄積させる。

余談だけど、ワタシのオトモは空飛ぶ海月お化けのアズレーンで、ヴィクターは

性悪系の化け猫であるムコニャルね。水と毒を同時に叩き込めるから、手数の少なさを補ってくれる良いメンバーよ。

『ジャラヴォオオオオッ！』

しかし、シェルレウスは全く疲れた様子を見せず、更に怒りを増して、ラー最終形態（ゴッドフェニックス）を思わせる大炎上した姿となった。

『グヴヴウウウッ！』

『がっ!?』

そして、両腕に炎の鞭を形成したかと思うと、全フィールドを一周する薙ぎ払いを繰り出して来た。これは効くぅーッ！

一応、その場に伏せるか上空に逃げれば良いんだけど、予備動作からの展開が速過ぎて、初見じゃ避けるのはまず無理ね。

というか、マジでこの一撃はヤバかった。たった一発で、もう瀕死寸前なんですけど。

『ジェラォオオッ！』

さらに、間髪入れず「お手」を繰り出すシェルレウス。本当に攻撃が苛烈だな、

キミは！

『ハッ！』『グヴォオオッ!?』

だが、そこで入る閃光玉による助け船。こういう所よね、マルチの良い所って。

というか、これは確かにソロじゃ無理だわ……。

「てりゃあっ！」

続いて零余子の爆弾投下が入り、

『大丈夫？』『……どうも』

その間に姑獲鳥が旋律で回復してくれて、ワタシも戦線に復帰した。

よし、ここまで来たら、遠慮はいらない。行け、オトモンたちッ！

『ギャォオオッ！』『キギャアアッ！』『レギャヴォオオッ！』

いよいよ以て投入されたリオレウス、リオレイア、セルレギオスによるリンチが始まる。通常形態ならまだしも、自分の炎で肉質が軟くなったシェルレウスでは受け切る事は不可能であり、ようやくのた打ち回る状態となった。

今がチャンス。これ以上引き延ばしたら、こっちが押し負けるわ。一気に畳み掛ける！

『『『はぁあああああっ！』』』

『ジェラァアアアアアアアア！』

そして、一斉攻撃を叩き込んだ後に痺れ罠で拘束し、捕獲用麻酔玉を食らわせた所で、遂にシェルレウスは沈黙した。

「オラァ、リベンジだこの野郎ぉおおおっ！」

さらに、零余子のレベルボールが当たり、無事にゲット出来た。

これにて一件落着――――になれば良かったんだけどねぇ。

「あ、信号弾だ」『ゑ？』

疲れた身体に鞭打って、どうにかこうにか鍾乳岩窟を抜け出したワタシたちの目に飛び込んで来る、打ち上げられた信号弾。通常に使われる物とは違う、特別かつ危急のクエストを告げる合図。これはつまり、

「百竜夜行が発生したみたいね」

『そうみたいね。早く戻りましょう』

コムリの里存亡の危機が、たった今始まったのである。

◆ヤツカダキ（亜種）

古龍の血を取り込み変異したヤツカダキの亜種。炎に加えて毒を扱うようになり、糸の攻撃の全てに毒属性が付与されている。耐性も変化しており、水に殊更弱くなったが、その代わりに雷属性に対して強い抵抗力を持ち、麻痺にならないという特性もある。

糸で絡めて毒状態にした上で拘束する→火炎放射を食らわせるという即死コンボを頻発してくる、かなり面倒な奴である。素直に防具や耐性を強化して挑もう。攻撃モーション事態は大して変わりないので、覚えてしまえば対処は楽。

ただし、多くの場合「炎も雷もお断り」なネルスキュラと共生している為、油断していると背後から狩られる可能性もある。ついでに亜種のツケヒバキがバンバン毒と炎を撒き散らして来るので、ネルスキュラやヤツカダキが居なくても普通に殺されてしまう事すらある。下手な大型モンスターよりよっぽど厄介な敵だと言える。

ちなみに、シェルレウスとは〝獲物を追い込む猟犬とその主人〟と言った関係で、忠実な犬となる事で捕食を免除して貰っている（シェルレウスには炎も毒も殆ど通じない上に刃がそもそも通らない）。それでも何時までも留まっているとついでに

殺されてしまうので、役目が終わるとさっさと逃げ出してしまう。

クエスト⑥：百竜夜行

奇しき赫耀のバルファルク強ェ……。

「諸君！　遂にこの時が来た！　来てしまった！　しかし、恐れる事は無い！　苦汁を舐めさせられたのも過去の話！　我々は万全の準備と対抗策を用意して来た！　つまり、負ける要素など無い！　我々は勝てる！　絶対、確実にだ！　故に、立ち上がれ、同士たちよ！　この百竜夜行を乗り切ろうぞ！」

「おーっ！」「やってやるぜぇ！」「汚物は消毒だぁ！」「ヒャッハー！」「漲るぁっ！」「ぶっ殺してやるぜ！」

何だかギルドが盛り上がっている。里中の人間が集まり、武器と防具で身を固め、殺る気と熱気で溢れ返っていた。

その中心に立つは、里長のコムリ。老いて尚力漲る姿は、里のハンターたちにも負けていない。

「……何だこれは？」

まぁ、そんな狂気的なヒートアップに、私は付き合うつもりなど無いのだが。

――――ごきげんよう、諸君。アデル・フォン・アスワングだ。

今朝は寝起きが悪く、そもそも狩りに出掛ける気分でも無かったので、久々にお昼過ぎまで眠り扱けるという怠惰な時間を過ごしていたのだが、急に里が騒がしくなり、どうしたものかとやって来たら、この有様という訳である。

……イカンなぁ。これじゃあ、まるで鳴女じゃないか。流石に気を抜き過ぎているか？

「いや、何って……百竜夜行ですよ、アデルさん！」

と、ドッタンバッタン大騒ぎに加わらなかった、この世界における私の相棒たるメラル女史が、呆れ半分で言って来た。

いや、そんな事を言われても、私からすれば完全に他人事なんだけど。どいつもこいつもロクデナシの救いようのない人間ばかりだし、こんな里が幾ら滅ぼうがどうでも良い。むしろ消えた方が世の為、人の為だろう。

一応、メラルはまだ真面なので、少しくらいは気に掛けるが、こいつもこいつで

問題ありなので、命を懸けてまで守る気にはなれない。精々、逃げ道を確保してやるだけだ。

異世界人に肩入れし過ぎるとロクな事にならないと、前回の転移で学んだんだよ。私にとって大事なのは、妹のアニエスだけである。

しかし、今は鳴女たちが出払っているので、完全な他人事とは言えないだろう。少なくとも、奴らが信号弾を見て、クエストから帰って来るまでは持たせなければ。戦い方は適当で良いや、面倒臭いし、阿保らしいし。

「……滅茶苦茶やる気無さそうですね」

「実際に無いしな」

ついでに義理も義務も無い。仕方なく少しだけ付き合うだけだ。

そもそも、半分旅人のような外から来たハンターに、そこまで求める事自体が間違いだろう。何で赤の他人の為に命を張らなきゃならんのか。馬鹿馬鹿しいにも程がある。

とは言え、真面目に戦わないとこちらも危ないので、殺る時は殺るさね。

――――――ここの砦、防衛箇所が一つだけで楽な分、途中で逃げ出そうとして

もモンスターに殺られるから、ある程度は敵を削らないとどん詰まりになるし。里長の性格の悪さが伺える。

「まぁ、やるだけの事はするさ」

さぁて、一欠けらもやる気は無いけど、一丁やりますか、百竜夜行。

◆◆◆◆◆◆

コムリの里の砦。それは里の入り口をそのまま利用したもので、カラクリ式のバリスタや大砲を起動すれば、即ち砦の完成である。

実に簡素というか手抜きな仕様だが、逆に言えば常日頃からモンスターの襲撃に備えているという事であり、この里独自の戦い方を考慮すれば、これでも遜色は無い。

だが、そうは問屋が卸さないのがモンハンのにくい所。これだけ装備を整えても、失敗する時はあっさりと失敗するのだ。

それに現れるモンスターの種類、という問題もある。ゲームだとバサルモスやヨツワミドウにフルフルが破砦役で、オサイズチなどの突撃部隊とアケノシルムら航空戦力が全力で邪魔をしてくるという、中々に厭らしい構成だったが、果たしてコ

ムリの里を襲うチームは如何なるものか。
そして、そんな化け物たち相手にどう立ち回るのか、とくと拝ませてもらうとしよう。
「来たぞぉ！」「百竜夜行の始まりだぁ！」
と、さっそく百竜夜行開始の合図が出た。左右を断崖絶壁で塞がれた狭き門に、無数のモンスターが押し寄せる。
……で、肝心の構成メンバーはと言うと、
・破砕役：グラビモス、バサルモス、アンジャナフ
・突撃隊：ジンオウガ、イビルジョー、リオレイア、ラージャンｅｔｃ
・機動隊：バゼルギウス、リオレウス
いやいやいやいやいや、ふざけてんのか。
破砕役は何となく納得出来るが、イビルジョーとラージャンを同居させるなよ。
空はバゼルギウスがカバーしてるし。滅茶苦茶やり難いじゃん、これ。
「皆の者、モンスターを解き放て！」
「「「「「了解！」」」」」

しかし、里長以下コムリの住民たちは慌てる事無く、自らの僕たちをけし掛けた。弱い物はクルルヤックルから強い物はディノバルドまで、様々なモンスターが戦場へ投入される。どいつもこいつもヌシモンスターのように狂走し、百竜夜行の魔物たちへ襲い掛かった。

「ひゃはははは！」「汚物は消毒だぁ！」「死んだモンスターだけが良いモンスターだぜぇ！」

さらに、乱戦の最中へ放たれる、ハンターたちのバリスタ攻撃。中には大砲や速射砲も混じっている。

なるほど、上手いやり方である。ある意味、里が一丸となって戦っていると言ってもいい。高みの見物と言われれば、それまでだが。

だが、それが何時までも通じる程、世の中甘くは無かろう。

『ガヴォオオッ！』『グラヴォッ！』

さっそく、押し合いへし合いをすり抜けた破砦役が、関門へ向かって突進して来た。面子はアンジャナフとグラビモス。相手に取って、不足は無い。

「メラル！」「了解です！」

先ずはメラルの仕掛けた痺れ罠で拘束。動きを止めた所に、Ｇタル爆弾をお見舞いして部位破壊を行う。

「いざ参る！　せやぁっ！」

『ギャオォッ！』『グヴォッ!?』

そして、私はここでようやく武器を構えた。特製のクィーンレガリア（操虫棍）を手に宙を舞い踊る。操虫棍は空中戦が得意な機動兵器だ。矛先から相手の体液を吸い取り、武器に様々なスキルを付与しながら戦うのである。

だが、エキスを取れないと火力が出ず、ガードも出来ないので、戦闘中の管理が大変な、玄人向きの武器でもある。実に私好みの武器だ。双剣とどちらにしようか迷ったが、丸子が使っていたので止めた。戦力の幅を出す意味でも、被りは避けたい。

『グヴォオオッ！』

おっと、グラビモスが復活したか。アンジャナフはメラルとオトモたちに任せて、私はこいつを仕留めるとしよう。拘束中にエキスはたっぷり吸わせて貰ったので、最早遠慮はいらない。

死ぬまで叩きのめしてやる！

「ハッ！　フッ！　トァッ！」

『グヴォォオォォン……ッ！』

突きから始まる舞空棍術を喰らわせ、反撃を砦の壁走りで躱しつつ背後へ回り、再び空へ駆け上がり降竜でぶっ叩き、グラビモスを倒した。

百竜夜行に参加するモンスターは、見た目程の強さは無い。恐怖に駆られ、及び腰のモンスターなど、化け物でも何でもない。ただの木偶の坊である。

そんな感じで、大半のモンスターを同士討ちで減らし、討ち漏らしを私たちハンターが狩り、砦を守り続けたのだが、

『グルヴォオオッ！』

「来たか……」

ここでまさかのマガイマガドが乱入。

ジンオウガと同じ牙竜種で、落ち武者と猛虎を掛け合わせたような姿をしており、鬼火纏というライズ初出の特性を利用して、回復の暇を与えない猛攻を仕掛けて来る。飛竜種どころか古龍にすら平気で喧嘩を売る、とんでもないモンスターだ。

さらに、モンスターを食えば食う程に体力が無尽蔵に増えていくという特殊能力を持っていて、百竜夜行に便乗して現れる事が多いのだという。それによりカムラの里は一度半壊の憂き目にあった模様。

「だが、最早貴様など敵ではない！　殺れぇっ！」

しかし、里長はマガイマガドが闖入してくる事は予想済みだったようで、次なる一手に出た。残ったモンスターたちを残らず突撃させ、ダメージを与えつつ、わざと食わせる。

『グヴゥゥ……！』

目に見えて動きが鈍るマガイマガド。モンスターたちを縛り付ける毒は、この時の為の物だったらしい。

なるほど、上手いな。相手の特性をそのまま利用して弱らせるとは。流石は里の長を務めるだけの事はある。

だが、このまま高みの見物を続けられる程、大型モンスターは甘くない。

『グルヴウウッ！』

「さ、里長！　マガイマガドが動き始めましたよ!?」

そう、大型モンスターには〝これ〟がある。少しずつだが耐性を得られてしまうのである。特にマガイマガドは大食らいかつ回復力が凄まじいので、毒によるスリップダメージが追い付いていないのだ。モンスターも派手に使い切ってしまった為、けし掛ける事も出来ない。

しかし、弱っているのも事実。ここは一気に攻め滅ぼしたい所だが、

「ど、どうします、里長!?」

「全員、Gタル爆弾を抱えて突撃せよ」

「はぁ!?　あいつに特攻しろと!?」

「その通り。里の為だ、喜んで死ぬがいい」

すると、里長がまさかの桜花作戦を発令。ハンターたちに特攻を命じた。

「ふざけんなよ、このクソ爺！　楽に狩れるからって従って来たが、もう止めだ！　俺は抜ける！」

「そうはいかんな」

「げぶはぁっ!?」

当然、従う者などいないのだが、里長が鈴をチリンと鳴らすと、掴み掛ろうとし

たハンターの１人がもがき苦しみ、そのまま死亡した。くたばり方が下僕モンスターたちと全く一緒である。

　これは、まさか――――――、

「貴様らの装備には、下僕共と同じ毒が仕込んである。儂が一鈴鳴らすだけで、同じ末路を辿るのじゃ。苦しんで死ぬのも一思いに死ぬのも貴様らの勝手だが、逆らわん方が良いと思うがなぁ？」

「ぐっ……！」

「そもそも、この断崖絶壁の里に退路などある筈なかろう。貴様らは人の道を外れた落後者。元より生きておる価値など無い。せめて、一花咲かせてから散るがいい。はっはっはっはっはっ！」

　うーん、この。まさしく絵に描いたようなクソ爺だ。生きる価値が無いのはお前も同じだろうに。

「お、お爺ちゃん？　まさか、ワタシにも……？」

「当然じゃ。孫なら少しは孝行せい、この役立たずが」

「……！」

さらに、実の孫――――メラルに対してもこの態度。冷血にも程がある。確かにこいつは大して役に立たないが、それでも孫に言う台詞ではない。

……まったく、付き合ってられんな。

「いい加減にしろ、このクソ爺」

「がっ……!?」

という事で、悦に入っている里長の胸に、クイーンレガリアの矛先をぶち込んでやった。血の泡ぶくを吐きながらも、必死に鈴を鳴らしているが、私には何の影響もない。

「き、貴様、何故、毒が……！」

「ウチには優秀な科学者がいるんでね」

とっくに仕込みには気付いていたし、除去も既に完了している。だからやる気が無かったんだよ、私は。

まぁ、流石に孫を含むハンター全員に仕掛けているとは思っていなかったが。

とりあえず、王様気取りの老害は、とっとと死ね。

「諸君！　里長は私が討ち取った！　だから、次が私の里長だ！　異論は無いな

!?」

ビクビクと未練がましく生にしがみ付く里長だったナニカを放り投げ、もちろん鈴も破壊し、ハンターたちに呼び掛ける。命の選択を。

「私はお前らに死ねとは言わない！　だが、逃げ道が無いのは事実！　だから、引っ込んで援護してろ！　奴は私が倒す！」

「……！」

フム、全員異論は無いようだな。死ぬ確率は高いが、前線に出るよりはマシだろう。

「む、無茶ですよ！」

と、メラルが引き止めようとして来た。本当は行かせたい癖に。

「そうでもないさ。私たちにとってはね」

むろん、私も無謀な真似をする気は更々無い。崖っぷちに見えたのだ、あいつらの姿が。……遅いんだよ。

さぁ、決着を付けようか、怨虎竜。

◆マガイマガド

ライズのパッケージを飾る、「怨虎竜」とも呼ばれる牙竜種のモンスター。「鬼火纏」という特殊スキルと〝虎〟の名に恥じない凄まじい猛攻が特徴であり、縄張り争いでは飛竜種どころか古龍にも襲い掛かる恐ろしい化け物である。

モンスターを食えば食う程、無尽蔵にパワーアップするというチート染みた能力が有り、スタンピードな百竜夜行に便乗して現れる事が確認されている。その特性により、カムラの里は過去に甚大な被害を被ったらしい。

コムリの里にも百竜夜行で夜食フィーバーにし現れた……かに思われたが？

ちなみに、モチーフが猫科なので、休憩中にはゴロゴロと毛繕いをする様も見られる。意外と可愛い。

クエスト⑦：怨虎竜マガイマガドの討伐、そして！

さらばコムリの里ヨ！

『おぅおぅ、やってんねー』《どうにか間に合いましたね》

眼下で吠え滾るマガイマガドの姿を見て、とりあえず一安心。里が壊滅して火事場泥棒が出来ないかと思ったぜ。

やぁやぁ、諸君。一流ハンターの鳴女さんだよー。

うん？　ハンターなんぞやってないで、いい加減に鬼太郎と戦えって？　知らんなぁ。

まぁ、それよりも今の狩猟だ。現在、百竜夜行の終盤にマガイマガドが襲撃し、里が絶賛大ピンチ中である。

ちなみに、里長のコムリは既にくたばっているらしい。詳細は不明だが、鎧に毒を仕込んでるような奴だから、アデルの逆鱗に触れてぶっ殺されたんだろう。あ

いつ、理由もなく部下や身内を蔑ろにする輩が大嫌いだからな。予定調和でしょ（笑）。

さてさて、それはそれとして、どうしたもんかねぇ？

……マガイマガド、欲しいんだよなぁ。攻撃の隙が少ない上に威力もあるし、特性さえ発揮出来れば無限に戦える。オトモンでも操竜でも活躍出来る、素晴らしいモンスターだ。

正直、ポケットに収まりそうもない古龍よりよっぽど役に立つ。条件があるのかもしれんけど、あいつらボール使えないんだよ。マスターボールなら、弱った所に投げれば行けるのかもしれんけど、勿体なくて使う気にならん。ポケモンあるあるである。

「……おい、ボケっと見てないで手伝え！」

『仕方ないなぁ……』

怒られちゃった♪

いやぁ、あまりにも1人で頑張ってるから、ついつい高みの見物しちゃったよ。

だが、そいつは私のペットだ。誰にも渡さん。

『行け、ジンガ！』『ヴァォオオン！』
《殺れ、グランガァ！》『ギャォオッ！』
という事で、私たちも参戦。
『やってやるのじゃー！』『死ぬがいい！』
『紫玉寄こせやぁ！』『欲張りねぇアナタ』
『お待たせ、アデル！』《ウッシャアア！》
そして、他のメンバーも次々と戦場へ乱入し、マガイマガドをフルボッコにする。
比喩ではなく、本当に一方的なリンチである。
『……グガァッ！』
『戻れ、ジンガ！』
《グランガァ、「はかいこうせん」！》『ガグァアアアッ！』
『グルヴォォッ!?』
何せ、こっちは何時でもモンスターをボールに戻せるのだ。常にヒット&アウェイしているような物である。殴っては戻し、殴っては戻し、その繰り返し。食らう事で無尽蔵に回復するマガドと言えど、この戦術の前ではどうしようもあるまい。

そのままタコ殴りにされていたまえ。

『グヴヴゥゥ……！』

おっと、ようやく体力が尽きて来たか。毒も回っているようだし、さっさとゲットして回復の薬を使ってやろう。

「ううっ……!?」

しかし、いよいよ以てボールを投擲しようとしたその瞬間、生き残っていた受付嬢が突然頭を抱えて苦しみだした。

《死ねぇ！　死ねぇ！　死ねぇえええっ！》

さらに、ギャァアアンと目を見開き、エフェクトの掛かった声で物騒な事を叫び出す。何か見た事あるぞ、これ。具体的に言うと、風神雷神の古龍夫婦とかの辺りで。

このパターン、もしかして――――――、

『キャァアアアアアッ！』

凄まじい地鳴りと浮遊感。谷間の全てを吹き飛ばすような勢いで大地が捲れ上がり、地中から巨大な化け物が現れた。

鰭の無いプレシオサウルスを思わせる姿をしており、胴体の側面から七本の触手が生えている。この触手、先端が一つ目の蛇のような頭になっており、それぞれが独立して動かせるようだ。

だが、特筆すべきは、その桁違いの大きさだろう。ダラ・アマデュラと同等かそれ以上の巨体を誇り、八つの谷と八つの峰を覆う八首八尾の巨龍である。体感だけど。

まぁ、何と言うですかね、

「な、何故ここにヤトノカミが!?」

『知るかそんなもん！』

どう見ても日本爆裂な超古代妖怪ヤトノカミです、本当にありがとうございました。マジで何で居るし。確かに古龍種って言われても信じられるけどさ！

『一旦退避！』

ともかく、ここは一度距離を取ろう。奴は石化ブレスを吐く。物理的なガードが不可能な理不尽攻撃をわざわざ食らってやる筋合いは無い。

「ひぃっ！」「助け――――――」

さっそく、逃げ遅れた里の者たちが石化していった。

「い、嫌だ……死にたくな――――――」

ついでにアデルの相方だったメラルも石化。絶望の淵に沈め。

「儂は間違っていたというのか……どうすれば、良かったんじゃ……」

あと、しぶとく生きていた里長コムリも石となる。やり方が間違っているとは言わんが、お前は存在自体が間違ってるんだよ。

『シャアアッ！』

そして、ヤトノカミの咆哮で残らず砕け散った。これにてコムリの里、終了～♪

まぁ、どうせ口封じに全員殺すつもりだったし、手間が省けたわね。周囲から孤立している集落だからこそ、あんなにもボールをポンポン使ってたんだよ。情報はなるべく秘匿しておくに限る。

『グルヴヴッ……！』

おお、マガマガは生き残ってたか。てっきり巻き込まれて死んだかと思ってたけど。流石は牙竜種、動きが素早い。空も飛べるしね。

しかし、これ以上の継戦は無理だろう。猛毒状態かつ瀕死寸前だからね。

『という事で、マガドゲットだぜ～♪』『ガヴゥゥ……！』

という訳で、思い切ってマスターボールを投げてみました。君はここで伏せていたまえ。頭文字Mだから丁度良いし。

『死ねぇえええっ！』『危なっ!?』

ついでに、その数瞬後に石化ブレスが過ぎったから、二重の意味で丁度良い。

おい貴様、人のマガドに何してくれてんじゃあっ！

『アデル、お前……調子はどうだ？』

私は近くに退避していたアデルに声を掛けた。メラルを躊躇なく見捨てる辺り、こいつも大分染まって来てるねぇ。元々感化され易い奴だからな。

「――――行けそうだ！」

すると、アデルは手をグッパーしながら己の調子を確かめ、力強く答え――――、

『デュワッ！』

さらに、眩い光と共に巨大化した。

そう、私が確かめたのは、アデルの枷の外れ具合。私たちは異世界に来ると大幅

に能力を制限されてしまうが、時間経過で徐々に調子を取り戻していく。世界の法則と個人差により外れ具合はマチマチで、今回は最後まで私は解放されなかったが（というか、私は次元連結システムでもあるので、そもそも外れ難いんだけど）、アデルはどうにか間に合ったようだ。

だからこその、巨大化だ。この蠅声為邪神（ハバエナス）でも見せた技により、敵と同じ土俵で戦う事が出来る。

とは言え、それでも子供と猛獣くらいのサイズ差があるのだが。どんだけデカいんだよ、お前は。

つーか、よくこんな馬鹿デカい奴を正面から倒せたな、鬼太郎。そう考えると全盛期の彼はそれはもう凄まじい物だったろうし、修行を積んだ今となっては、正真正銘の化け物になっているかもしれない。

戦いたくねー。命は大事にだよ。

『デァッ！』『キャァヴォオオオッ！』

そして始まる、大怪獣バトル。闇の巨人と暗黒の蛇神が戦ってる。石化ブレスは強力だが、あくまで妖術の類に近い技なので、魔法に長けるアデルなら対抗魔術で

何とかなる。

『グフハハハッ！』『ぐっ……！』

ま、地力では明らかに負けているのだが。そりゃあ、あのサイズ差じゃね。巨体をグルングルンと回して八本の首を連続で叩き付ける、モンスターで言う所の必殺技でアデルを崖壁へ貼り付けにした。

……こりゃヤバいな。

『おい、お前ら行くぞ！』

《合点です！》『了解じゃ！』『分かっておる！』『しょうがないわねぇ！』『もう一踏ん張りよ、姑獲鳥。そしたら帰ってお風呂入るんだ……』『頑張って、アデル！』《ヤッテヤルゼェ！》

私の合図で、全員が己の武器に自らの全霊を込める。枷が外せなくても、物に力を宿す事は出来る。それを思い切りぶん投げてやれば、即席の水爆ミサイルの完成だ。

『闇魔大王によろしくなぁあああっ！』『ギャヴォオオッ!?』

怯んで動けないアデルに止めを刺そうと身体を回し始めていたヤトノカミに、9

本の武器が突き刺さる。8本は頭部に、1本は胴体に直撃し、今度はヤトノカミが怯んで動けなくなった。

『はぁあああっ！　……デリャアアッ！』

『ギャアアアアアアアアアアアッ！』

さらに、その隙を突いて、アデルの必殺光線が炸裂。ヤトノカミは内部から大爆発した。その衝撃で谷にあった何もかもが吹っ飛び、見るも無残な奈落の底と化したが、とりあえずクエスト達成だな。

……報酬を払ってくれる人が居ないのが、問題だけどね。

「おめでとうございます～♪　クエスト達成ですね～♪」

と思ったら、まさかのひょっこり受付嬢からサプライズプレゼント（つまりクエスト報酬の授与を）された。生きとったんかいワレェ。

「そりゃあ、生きてるよ。この程度で死ぬ程、軟じゃないもん。人間と一緒にしないでよね」

『……お前、何者だ？』

私の質問に、受付嬢が答える。

「コムリの里の美人受付嬢のヒガナ・アマデュラ。だが、それは世を欺く仮の姿。

時には駅員のモルフォード・タメリスク、時にはスマイル団の団長ダース・マリアボラスでもある、「千の貌を持つ女」。その正体は……」

そして、何者でもないナニカが、その正体を垣間見せる。黒く禍々しい外殻を持つ、人型生命体――――外なる神。

『たまにはあっちにも来てよね。良い暇潰しになるし、ボブも待ってるかもよ。それじゃあね。ウフフフ……ギャハハハハハハッ！』

さらに、意味深な事を言い残して、ナニカは去った。

『……帰るかぁ』《そうっスね》

まぁ、疲れたから、元の世界に帰るけど。色々試したい事もあるし。

「……」

『何をボーっとしてんだよ？』

元に戻ったアデルがボケっと里の跡地を眺めていたので、ちょっと話掛けてみたら、

「……まるで「奈落の谷」だな」

そんな事を呟いた。

まぁ、気持ちは分かるけど、考え過ぎじゃね？
『諸行は無常な物さ。そんな事より、置いて行くぞ』
「はいはい、分かりましたよーだ」
そして、これからの事に備える為、私たちは元の世界へと帰還するのだった……。
さーて、次は何をしようかなー。

◆ヤトノカミ
第5期の鬼太郎におけるラスボス。姿がヤトノカミというよりヤマタノオロチなのは内緒。
遥か太古の昔に闇魔大王によって封印された古代妖怪であり、凄まじい巨体と神力を持つ蛇神。その息は生きとし生ける者を石化させ、妖力を放つだけで百鬼夜行を引き起こすなど、常軌を逸する能力を持つ。性格も凶暴で、殺す事と奪う事しか考えていない。
闇魔大王に本体を倒された後、八つあった魂を分割され、その内の一つは人間の

魂に宿る形で封じられた（残りは己の牙から生まれた大蛇女が持っていた）。本来は絆パワーによって解放される事はない筈だったのだが、現代社会の荒んだ人間関係のせいで封印が綻び、風祭 華の代になって遂に復活。日本中を壊滅させようとしたが、チート・オブ・チートな鬼太郎の放った地獄究極奥義の頂点・列闘星覇によって、自分が石化して砕け散った。

今作における彼は、八つの内の六つの魂を異世界に飛ばす形で復活の機会を狙っていた。残りは原典通り大蛇女と、とある人物の魂に封印されている。

つまり、もう5回は遊べるド～ン♪

鳴女さん、ママになる

？？？：『ばぶぅー』

『おーい、ジンガ。餌の時間だぞー』『ガヴガヴガヴ！』

厳つい尻尾をブンブン振りながら、心底嬉しそうにガーグァの丸焼きを貪る、ジンオウガのジンガ。

『ほーら、毛繕いの時間だぞー、マガド』『グルル～♪』

髪を使って毛繕いをしてやると、気持ち良さ気に喉を鳴らす、マガイマガドのマガド。

……こいつら、完全に犬と猫だな。それで良いのか、牙竜種筆頭。

やぁやぁ、皆の衆。ハンター改め、ウーチューバーに復帰した鳴女さんだよ。

とは言え、こちらとあちらでは相対時間のズレがあるから、数日しか経ってないんだけどね。配信にも余裕で間に合ってるし。

さて、さっそくだが経過報告と行こう。

先ずはこの状況についてだが……まぁ、見ての通り、無限城を模様替えして、礼拝堂跡や鍾乳岩窟など向こうの環境を再現しつつ、放し飼いにしている。

面子は私のジンガとマガド、チャラトミのグランガァ（グラガグァ）、零余子のシェレオス（シェルレウス）、姑獲鳥のセレン（セルレギオス）、丸子のぐらびぃ（グラビモス）、六部のクズハ（タマミツネ）。他にも餌になる小型モンスターや現地生物をエリア毎に繁殖させている。追々造設して種類も増やす予定だ。

アデルのディーノ（ディノバルド）とランラン（ラージャン）、ベア子のモモカ（リオレイア亜種）とヴィクターのブルー（リオレウス）はブリガドーンの方で飼うらしい。何でも〝丁度良い場所〟があるんだとか。私程じゃないけど拡張性あるよね、あそこ。

そんな感じで、生態調査も兼ねたモンスターの飼育が、両陣営で行われている。ポケモンたちも同様で、各々の好む環境で、偶にバトルをしたりしながら、伸び伸びと暮らしている。常識外れではあるけど、彼らも生物だってはっきり分かんだね、うん。

これら全てを戦力化出来たら、最早言う事はあるまい。武器や防具の素材にもなるし。

「ところでさぁ、鳴女」

ふと、近くでボケーっと見ていた零余子が尋ねてくる。

「……最近、太った？」

『ほほぅ、ハンバーグになりたいようだな』

「なりたくないよ!?　いや、デレカシーに欠けるのは重々承知だけど、確実にポッコリしてるよ、お腹が」

私のお腹を指差しながら。何だ、そんな事か。

『そりゃあ、妊娠してるんだから当然だろうに』

「サラッと重大発言したね!?」

そこまで重大かぁ～？

『ほぼ毎日ハッスルしてれば、自然とこうなると思うけど？』

「そうだけどそうじゃないでしょ!?　……いや、まぁ、確かに連日連夜大運動会だけれども！　一体何時から妊娠してたのよ!?」

『うーんと、着床したのは三日前かなぁ』
「三日三晩で臨月なの!?　嘘でしょ!?」
そう言われましても、鬼だからとしか言い様がないです。
「えっと、妊娠期間の長さは置いておくとして――――何で今更？」
うん、最もな質問だね。
『約束したからな』
「誰と？」
『無惨様と』
「ぶぼしゃあっ!?」
私の無惨様発言に、零余子が盛大に吹き出した。
「どどど、どういう事なのよ、それは!?」
『明日になってからのお楽しみ～♪』
「何よそれ!?　滅茶苦茶気になるぅーっ！」
その後、私は零余子の質問を曖昧に濁しつつ、寝床へ向かった。胎教は大事だからね。

◆◆◆◆◆◆

つぎのひ！

『ほぉ～ら、元気な男の子ですよ～♪』

「嘘だぁん!?」

つい今朝方に生まれた我が子を見せたら、零余子が信じられない物を見る目で叫んだ。大げさな奴だな。

「ギャオスかお前は！」

『当然だ』

「当然なんだ!?」

怪獣ではないが、超遺伝子は持ってるからね。

そして、この子はそのＤＮＡを色濃く受け継いだ、超神童という訳である。

「あっ、でも可愛い顔してるかも……」

おくるみに包まれた赤ちゃんを見て、零余子が顔をにへらっと綻ばせながら、触りたそうに手をわきわきしている。白髪に赤目というアルビノ系の雪見大福がそこに居るんだから、撫でたくて仕方ないよねぇ。

だが、残念だったな、零余子よ。たぶん、お触りなんてしたら大変な事になるぞ？

「ちなみに、名前は？」

『無惨』

「嘘だぁあああああっ!?」

嘘じゃないんだなぁ、これが。

『あぶぅ！』

「……っ！」

我が子……もとい、無惨が一泣きすると、零余子は自然と平伏した。

うーん、この光景を再び目にする日が来ようとは、感慨深いねぇ。後は魘夢、轆轤、病葉、釜鵺が居ればパーフェクトにパワハラ会議だったのに。惜しい。

「な、鳴女、もしかして、この子って――――」

『その通り。中身は理想の上司様だよ』

「嘘ぉーん……」

『そして、これが約束でもある。現世での肉体を用意するってな』

ちなみに、産声はちゃんと上げました。それも元気溌剌に。良かったねぇ、今回は茶毘に付され掛けなくて。日に弱いのは相変わらずのようだけど（笑）。

《笑い事ではないわ！　陽光で焼け死ぬ事は無くなったとは言え、結局は日の下を歩めぬではないか！》

無惨がテレパシーで文句を言っている。

……何かやっぱり呼び捨ては慣れんな。様付けしとこう。

《歯が無いから肉は無理として……零余子の血でも吸ってて下さい。そうすれば、その内耐性が出来ますから》

実際に私がそうだったしね。もう零余子（こいつ）が青い彼岸花でいいよ。

《むっ、そうなのか？　その万年サボり魔が？》

《はい。とりあえず、零余子のおっぱいでも飲みましょうか。あれも血液から作られますからね》

《妊娠してないのに出る訳ないだろ！》

《出るんだなぁ、これが》

今世の零余子は何でも有りな状態だからな。何だったら、私のでもええのよ？

《……どうしても飲まなきゃならんのか？》

《肉体的には人間に近いですからね。赤ん坊の仕事は飲んで眠る事ですよ》

今の無惨様は〝半鬼人〟とでも言うべき状態で、成長するにつれて完全体となり、様々な能力や耐性を得る事になる。それまでは見た目通りの赤ん坊だ。

まぁ、仕方ないよね。かの幽霊族でさえ、生まれたばかりの時は非力なのだから。

《それに無惨様、オギャるの大好きでしょ？　身体はバブみを求めてるんでしょう？》

《誰がオギャるか！　人聞きの悪い事を言うな！　まるで私が変態みたいだろうが！》

《最期はあーんなにバブバブの赤ん坊になってたのに～？》

《それはそれだ！　私にも大人としてのプライドがある！》

うーむ、相変わらず面倒臭い人だな。

『無惨様はおっぱいをご所望だぞー』「はいぃっ、ただ今ぁっ！」

《あっ、おいコラ、貴様……それは卑怯――――おふぅっ!?》

という事で、有無もバブも言わさずに、ダブルぱふぱふの刑に処した。どうだ、

嬉しかろう!?

「……それはそうと、結局の所、無惨様を今になって生まれ変わらせたのはどうして？」

無惨様を胸に埋めながら、零余子が尋ねる。締まらねぇなぁ。私も丸出しだけどさ。

『決まってるだろ』

それはもちろん、

『最後が近いからだよ……世界のな』

カウントダウンが始まったからさ。

◆パワハラ会議

ある意味で伝説となったトンデモ会議。

推しキャラの累が水柱に殺された腹癒せに、意外と骨の有りそうな魘夢以外の下弦の鬼を全員処刑した。殆ど八つ当たりに近いが、下弦の鬼はどいつもこいつも

サボり魔（特に零余子）ばかりなので、余計な部署の解体する意味も、一応はあった……が、正直デメリットの方が多かった気がする。

この一件により無惨は読者より「鬼柱」の称号を贈られ、「鬼殺隊筆頭」「パワハラの呼吸」「頭無惨」「女装趣味」「あっ、ペイズリーだバーカバーカ」などと賞賛されるようになった。

終わりの始まり

何となく買った「シャイニングパール」、まだ封すら切ってない事実。何故こんなにも抵抗があるんだロウ。

「袈裟斬り！」
『『せいっ！』』
「水平斬り！」
『『てぇい！』』
「ジャストラッシュ！」
『『はぁっ！』』
私の指示に合わせて、数多くのホムンクルスが素振りする。このグループは「片手剣」だが、他にも「双剣」や「大剣」に「弓」など、様々な武器で練習中である。
……やぁ、諸君。私だ、アデル・フォン・アスワングだ。

つい先日、何故か復活したヤトノカミをどうにか討伐し、モンハンワールド（タイトルの方ではなく世界線的な意味の「ワールド」）から命からがら帰還したのだが、怪我に見合うだけの凄まじい戦力を得られた。モンスターや現地生物も然る事ながら、〝素材〟や〝技術〟の入手が一番大きい。

その結果が〝これ〟だ。ほぼ忠実に再現した防具や武器を手に訓練する、使い魔軍団の完成である。

ホムンクルスのような直立二足歩行はそのまま装備し、吸血蝙蝠や魔犬などの動物的な連中はオトモ系の装備を使っている。おかげでモンハン気分が未だに取れていない。

まぁ、戦術強化の為だから考えない事にしよう。

ちなみに、持ち込んだモンスターの一部はこちらで繁殖させている。ディノバルドとラージャンは難航しているが、リオ夫婦の方は上々だ。元が亜種だった事もあってか、希少種や特殊個体も次々と生まれている。時空の歪んだブリガドーンだからこそ成せる業だろう。

鳴女はそれを個人で行える訳だが。本当にチートな奴である。

あっ、そう言えばあいつ、遂に懐妊したらしいわね。その数日後に出産したそうだけど。どうなってるんだ、あいつの身体は……。

余談だが、私はティンカーベルなのでよろしく。……誰か良い人を紹介して。

『おやおや、精が出ますな』

と、ボンヤリ下らん事を考えていたら、通りすがりのヴォルフガングに声を掛けられた。今日も優雅なダンディで何より。

「それはそうだろう。ベアード様曰く、「来訪者」の復活が間近らしいからな」

鳴女が出産に踏み切ったのも、その関係だとか何とか。まるで意味が分からんぞ。

『そのようですね。しかし、これ程の戦力があれば、何の問題も無いのでは？』

「いいや。こいつらはあくまで雑魚狩り用だ。獣相手の技は人間には通用せん」

『……例の「鬼殺隊」ですね』

「そうだ。鳴女曰く〝悪鬼羅刹すら殺す異常者集団〟らしいからな」

狂った人間程厄介な物は無い。

獣のように食らい付き、野生に有るまじき執念で襲い続ける、本当の悪魔たち。

知恵と勇気を振り絞り、時には神すら滅ぼす、勇者と言う名の狂人。

化け物を殺すのは、何時だって人間なのだ。

むろん、無策と言う訳ではない。そちらはそちらで育成中である。毒は同じ毒で以て制する物だ。

『それはそうと……妹君の方はどうなさるおつもりで？』

「……」

アニエスは今、鬼太郎たちと共にある。難民であるマレーシア妖怪への対応を機に、本格的に向こうへ味方するつもりらしい。

――――いい気な物だな。誰のせいでそうなったと思っている。

戦力強化は元から決まっていた事だし、あんな話も聞かない連中に慈悲を掛ける程、私もベアード様も優しくは無い。〝皆仲良く手を取り合う〟など絵空事である。

それだけならまだ分かるが、全滅の憂き目にあった直接的な原因は、間抜けにもヴォルフガングを住処に案内してしまったお前自身なんだぞ、アニエス。

「手は尽くした。後は運命に委ねるさ」

『……』

私の曖昧な返答に、今度はヴォルフガングが何とも言えない表情で沈黙した。

まぁ、言いたい事は分かる。でもね……私もそろそろ、疲れて来たんだよ。話を聞かない、聞き入れない奴が多過ぎる。仕事量も多過ぎる。誰か助けて。

「……さて、私もそろそろ上がるよ。リオレイアの卵か孵りそうなんでな」

『すっかりブリーダーが板に付いて来ましたね』

「ほっといてくれ」

癒しが欲しいんだよ、私は。この疲れた心に潤いを！

そういう意味では、アニマルセラピーは効果的だ。生まれたてのリオレウス（かリオレイア）に刷り込みして、第三の親として甘えて欲しい。可愛いんだよ、あいつら。プチリュウとかフェアリー・ドラゴンみたいで。円らな瞳で擦り寄って、ペロペロして来るんだよねぇ～♪

他にもジャラガンダーやジェライジン（最近進化しました）も子供生みそうだし、ブリガドーン内部は（モンスターに限って）ベビーラッシュが来ている。これがまた可愛いの何の。

嗚呼、何て幸せな空間なんだ……。

《急報、急報！》

と、またしても下らん事を考えていたら、伝令係のホムンクルスがいそいそと駆け寄って来た。そんなに慌ててどうした。

《――――つい先程、多数の空間変換が起こりました！　ポケモンたちによる、世界侵食です！》

さらに、今告げられる衝撃の凶報。

どうやら、世界がポケモンワールドに取り込まれつつあるらしい。単なる侵攻ではなく、情報ごと書き換えて来る辺り、コズミックホラー感が溢れている。

……って、いやいやいやいや！

「まるで意味が分からんぞ!?」

《あと、ヒガナ・アマデュラを名乗る魔女より、「中々来ないから、こっちから遊びに来ちゃった♪」との伝言が……》

「あのクソアマァアアアアッ！」

誰か、私に安息日をくれッ！

◆ポケモン

地球とは遠く離れた星に住む、不思議な不思議な生き物。姿形は様々だが、摩訶不思議な技や特性を持ち、〝ある程度自分の大きさを変えられる〟という共通能力がある。現地の人々はその能力を利用し、自らの手持ちとしてバトルしたり共同生活を営んでいる。

元々は「ポケモン」というドメインは外来種である可能性が示唆されており、生態系を乗っ取る処か文明そのものを書き換えて侵食したかのような印象も与える、若干怖い部分もある（単なる死に設定だろうが）。というか、ポケモンに都市伝説は付き物である。レジ系とかね。

終わる世界

久々の更新。疲れてるのよモ〇ダー。

――――東京都、渋谷区。

「おねぇちゃん、あれかって～！」

「あのなァ……花魁道中なんて、もっと年食ってから言えよ」

袖をクイクイと引っ張り、割と無茶な事を言って来る阿呆な妹に、俺は溜息を吐いた。

俺の名前は梅田六花。今はな。

今の俺になるずっと前……「鬼」だった頃の俺は、妓夫太郎と名乗っていた。上弦の陸という、かなり上位の「鬼」だったのだが、吉原へ潜入捜査に来ていた音柱とその部下たちとの戦いに敗れ、妹共々殺された。

その後、俺たちは地獄の業火に巻かれ、永遠の苦しみを味わう――――筈

だった。

しかし、何の因果か、妹と一緒に新たな生を受けた。要するに、人間として生まれ変わったのである。何故か俺だけ性別が変わってしまったが。

「駄目だよ、姫花。姉さんにそんな金がある筈ないじゃないか。君は本当に馬鹿だなぁ～」

「ばかじゃないもん！　ひめかはてんさいだもん！」

「ハッハッハッハッ、面白い事を言うね。俺より天才な奴がいる筈ないじゃないか。やっぱり姫花は馬鹿だなぁ～」

その上、要らん奴まで付いて来た。

そう、今世の俺には妹が２人いる。１人は梅だった姫花。もう１人は、かつて上弦の弐の位に居た「鬼」……即ち童磨だった円花。こいつもまた何故だか女になっている。

ちなみに、姫花は前世の記憶を持っていない。丸っきり全てを忘れている。俺を慕ってくれる事に変わりはないが。

円花の方は……よく分からん。口振りからして覚えていそうなものだが、肝心要

の自身の名前は忘れていたりと、中途半端に継承されている。こいつの場合、元から感情が死んでる奴だから、単に興味が無くて忘れたのかもしれんけど。

ともかく、俺は２人の姉であり、例えそれがあんぽんたんと性格破綻者だとしても、大事な妹である事は変わりない。今は俺しか、こいつらを養ってやれないからな。

両親はとっくに他界した。俺の親にしては珍しく真面で優しい人たちだったが、交通事故で呆気無く死んだ。良い奴程早死にするって、本当なんだな。

そして、天涯孤独の身となった俺たちだったが、幸いにも俺は成人出来ていたので、どうにかこうにか３人で慎ましく暮らしている。

まぁ、円花がこっそり投資で稼いでいたおかげでもあるのだが。こいつ、性格は別として、人間として無駄にハイスペックなんだよな。自他共に認める天才であり、本物の神童なのだ。頼むから妖しい宗教とか始めないでくれよ。

さて、そんなズッコケ三姉妹である俺たちが、何故渋谷にいるのかと言うと、単純に服を買う為である。今月は先月の頑張りのおかげで、割と羽振りが良いんでね。せっかくだから、偶には良い服を買ってみよう、という事になったのだ。

――――――前世では、こんな平和な事、全然出来なかったからな。人間時代も、「鬼」になってからも。

「……おねぇちゃん、おねぇちゃん」

と、またしても姫花が袖を引っ張って来る。今度は何を強請る気だと身構えた俺だったが、

「あそこにぴかちゅうがいるー」

「は？」

続く言葉に、思わず呆けてしまう。こいつ、とうとう頭が……、

「姉さん、俺、疲れてるのかな～？　そこにあの有名な電気ネズミが居るんだけど？」

だが、おかしいのは現実の方であるらしい。何せ、あの童磨だった円花が引き攣った笑みを浮かべているのだ。

『ピカチュ？』

「嘘ぉ!?」

果たして、妹たちの指差す先には、確かにピカチュウが居た。実写映画で見た、

あの毛玉っぽいあれである。
「まめぱとだぁ」『ポルッポー！』
「おわっ、木からケムッソが降って来たよ!?」『ケム～ル』
さらに、周りを見渡してみれば、至る所にポケモンの姿が。一体何時の間に。というか、そもそもこれは何がどうなってるんだよ!?
「ぽっぽっぽ、まめぱっと～♪」『クルポッポ～♪』
能天気な奴だな、お前は！
「姉さん、これ、どう思う？」
「どうって言われてもなァ……」
ゲーム風に言うなら、「野生のポケモンが現れた」ってなるんだろうが、ここは現実だ。電脳世界じゃない。いや、転生がある時点で充分に非現実的ではあるんだけども。
そんな事より、今は状況整理である。
「うひゃーっ!?　ウチのポチがご立派様にぃ!?」『グラァッ！』
「……鯉って、こんなたい焼きみたいな姿だったっけ？」『ゴイゴイィ！』

「何この可愛い生き物～？」『ギエピーッ！』「……やっぱ可愛くないわ」

周りの雑音を聞く限り、渋谷各所で同時多発的に、既存の生き物がポケモンに変質し始めているらしい。二次創作とかで偶に見るパターンだ。

現実がポケモンの世界に侵食される、みたいな感じである。俄かには信じ難いが、現実として目の前にストライクが飛んでいるので、受け入れるしかないのだろう。

問題は何が原因でこうなったか、だ。理由も無く世界が書き換わる筈もない。

『ギャヴォオオッ！』

「……っ！」

しかし、悠長に考えている暇は無さそうである。変質したポケモンの一部が進化し始めたのだ。

ポケモンは進化すると、大抵は凶暴になる種族が殆どであり、今し方に水路から飛び出して来た凶悪ポケモンのギャラドスは、その筆頭と言える。怒ると大都市１つを丸ごと滅ぼすモンスターなんて、友達になれる気がしねぇよ。

「おい、２人共逃げ――――――」

「きゃあっ!?」「うわぉっ!?」

『グギャアアアアアアアア！』

一目散に逃げてしまいたかったが、そうは問屋が卸さなかった。陸に上がったギャラドスが暴れ始めたのである。自身の急激な変化に驚き、暴走しているのかもしれない。

『グルァアアッ！』『ギャヴォオオン！』『ギギャアアッ！』

しかも、それに触発されたのか、仲間のコィキングが次々と進化して暴れ出した。

ヤバいぞ、このままじゃ……！

「姉さん、姉さん」

すると、円花が俺の肩を叩いて、

「赤ギャラ！」「うるせぇよ!?」

確かに色違いが混じってるけど、何ならちょっとゲットしてみたいけど、そんな事言ってる場合じゃ無いんだわ！

「あっ、「ぽっぽー」が！」

と、あろう事か、姫花がその渦中に向かって走り出した。

『クルポ……』

どうやら、さっき遊んでいたマメパトが巻き込まれ、深手を負って倒れているらしく、それを助けるつもりなのだ。出会って数秒でニックネームを付けるんじゃねぇ！

「馬鹿戻れ！」

「やだーっ！」

クソッタレがぁ！

「ぽっぽー！」『クルル……！』

『ギャヴォオオオオオオ！』

「ひぅ……！」

チクショウ、マメパトは抱きかかえられたようだが、このままじゃ諸共捻り潰される。出だしが遅れたせいで、俺や円花の足でもギリギリ救出が間に合わない。

やめろ、ふざけるんじゃねぇぞ！

「世界を跨いでまで、俺から取り立てるなァアアアアっ！」「うわ、こりゃ無理だねぇ。バイバ～イ」

ギャラドスの暴れる攻撃が姫花を挽肉に変えようとする様に、俺は雄叫び、円花

は普通に諦めた。この薄情者！

『ギャヴォッ!?』

だが、その尾撃が姫花たちを捉える事は無かった。

『こんな小さい子に、何してんのよアンタはぁっ！』

突如、空から降って来た、奇抜な鎧に身を包んだ誰かさんが、ギャラドスをぶっ飛ばしたからだ。それも1匹だけでなく、共に暴れていた奴らを一網打尽シュートである。マジかよ。

『もう大丈夫よ。お姉さんの所に行きなさい』

「ふぇえええん、ありがどぉおおおおお！」

無事を確かめ、姫花を俺たちの下へ退かせる、謎の誰かさん。目元以外は完全にアーマー化しているので素顔は不明だが、只者では無いだろう。

……何せ、バイザー越しに見えた目が、「鬼」と同じだったからな。

それよりも、気になるのはその鎧だ。銀と紫、龍と虎が入り混じった奇抜なデザインをしており、背中には三叉鉾のような翼が、尻には十文字槍を思わせる尾が生えている。

そして、俺はそれらの要素に見覚えがあった。
「バルファルクとマガイマガドの魔改造装備だとぉ!?」
そう、天彗龍バルファルクと怨虎竜マガイマガドの特徴を取り入れた、オリジナルのハンター装備だったのである。ポケモンの次はモンハンかよ！
まるで意味が分からねぇぞぉ!?
「おい、あんた――――――」
『下がってて。まだ終わってない』
しかし、質問は謎のハンターに遮られた。翼を変形させ、攻撃形態となる。
『ガルァアアアア！』
すると、完全に伸びているギャラドスたちを吹き飛ばし、その中心に埋もれていた赤いギャラドスが怒りの叫びをあげた。
さらに、突然殻のような物に包まれたかと思うと、何とメガギャラドスにメガシンカしやがった。トレーナーとの絆も無いのにメガシンカとか、そんなの有りか。
『ギャヴォオオオン！』
謎のハンターを噛み砕こうと、猛烈な勢いで襲い掛かるメガギャラドス。

だが、小柄で動きの素早い謎のハンターは僅かなステップだけで牙を回避し、
『煩い』『ヴゴッ、グゲェッ!?』
翼を変形させてワンツーパンチした。バルファルクの動きそのままですやん。
『フンッ！』『ギャヴォオオッ!?』
今度はマガイマガドの尻尾から鬼火砲（オニビーム）を放つ。パンチというか、正拳突きを二連打ァされて怯んでいたメガギャラドスは避けられず、墜落した上で引っ繰り返る。頭がピヨってジタバタ藻掻く姿は、まるで進化前のコイキングだ。
『フッ、ハッ、シャアアッ！』『ウギャヴォッ！』
そして、マガドっぽい腕による散魂鉄爪三連撃からの、奇しき赫耀式ハイメガキャノン+鬼火砲（オニビーム）というとんでもないオーバーＫＩＬＬで、完全に瀕死状態へ追い込んでしまった。怖過ぎるだろ。これ絶対ハンターのする事じゃない。
「かっこいい～♪」『ポッポ～♪』
平和だなお前らは！
「姉さん、俺にもあれ買ってくれよ」
お前は完全に沈黙してろ！

『大丈夫？』

謎のハンターがシャドー〇ーンみたいな足音でこちらに戻って来る。ムーブがもうラスボスなんよ。

『……って、流石にこの恰好じゃ怖過ぎるか』

そう言って、謎のハンターは鎧を脱いだ。脱いだと言うより、粒子化してダイマックスバンドらしき物に収納された、というのが正しい。

果たして、その中身はというと――――――、

「お、女ァ？」

まさかのおねいさんだった。紫髪のシニヨンに透き通るような白い肌、抜群のスタイルが目に眩しい。妙に高い声をしているとは思っていたが、まさか女だったとは。良い顔しやがって。目はやっぱり「鬼」のそれだけど。

『ええ、そうよ。悪い？』

「いや……」

例え同性でも嫉妬してしまう美貌に思わず嫌な顔をしてしまったが、命の恩人にその態度は流石にあれなので、俺は素直に謝った。

「あんたは、強いからなァ。……妹たちを、助けて欲しい。頼むぜェ、おい」

そう、この場において重要なのは、容姿ではなく強さである。大事変中の渋谷から生き延びるには、こいつに頼るしかない。

『もちろんよ。アタシ、そこまで薄情じゃないから』

……ウチの2番目にも見習ってほしいなぁ。

『さぁ、行くわよ。掴まって』

「わーい、おそらのたび～♪」「はっはー、楽しそー」「じゃあ、せめて感情込めろやァ」

こうして、俺たちは謎の猫っぽい大人のおねいさんと一緒に、渋谷脱出を目指すのだった……。

◆バルファルク

別名「天彗龍」。鈍い銀色の甲殻に覆われたドラゴンで、猛禽類のような顔と三叉鉾を思わせる一対の翼を持っている。

とんでもない高度に存在する「遺群嶺」を生息地としており、きちんと目撃されるまでは単なる不吉の予兆としか見られていなかった。

大気を体内で変換して発生させる「龍気」を使って様々な攻撃を仕掛けて来るのが特徴で、翼のジェットで空を飛んだり、可変式の翼で殴ったり、ブラスターやハイメガキャノンを放って来たりと、もはや生物というより「ドラゴン型のモビルアーマー」と言われた方が納得出来る有様である。

謎のハンターの装備には奇しき赫耀の物が使用されており、改造も自分の手で行った。

混沌の最中

そう言えば何で無惨の鬼って探索系の能力者が少ないんでしょうカネ。脳筋野郎共よりそっちの方が絶対に役立つノニ。

東京都、井の頭公園。

都会の中とは思えない程に自然豊かな場所であるが、ここの池には何年か前より、不思議な生き物が棲み付いている。

それは、ある2匹の鯉と野ネズミ。一方は不気味な模様の付いた馬鹿デカい錦鯉で、もう一方は五毛のヒメネズミという、正反対の組み合わせだ。錦鯉は池で優雅に泳ぎ、ヒメネズミは小島に取り残された一本椚の上（それも出所不明の小鳥用の巣箱）で暮らしている。精々鴉くらいしか寄り付かず、春は羽虫、夏は毛虫、秋はドングリと、食べ物に困らない事に加え、冬は洞や岩溝で安心して眠れる為、非常に棲み易い環境が整っているのである。

見た目も種族も全く違う2匹だが、この安住の地で、訪れる人々に生暖かく見守られながら、ぬくぬくと暮らしていた。何時しか2匹はぐりとぐらのように親しまれ、今やこの池のマスコットと化している。

しかし、ここまで違う2匹が、一体どうして寄り添うように暮らしているのか。

《どうだ半天狗よ、今日の作品は。名付けて「夢の跡」！》

《……魚の死骸とゴミの寄せ集めを作品とは……恐ろしい恐ろしい！　玉壺は頭が足りておらぬ！》

《喧しいぞ！　大体お前こそ、そんな枝木を集めただけの屑山を屋敷と称するなど、脳足りんではないか！》

《ＺＺＺｚｚｚ……》

《面倒臭いからって寝るんじゃない！　冬眠にはまだ早いだろうが！》

答えは、2匹共元は「鬼」だから。

己が因果故か、玉壺（ぎょっこ）は錦鯉、半天狗は野ネズミと、完璧に畜生道へ叩き落されている。上弦の「鬼」だったせいもあり、普通の生き物とは言い難い能力を持っているとは言え、無様な物だ。因果応報とはこの事である。

ちなみに、玉壺が「肺呼吸」と「器用な胸鰭」、半天狗が「人間並みの視力」を獲得しており、共通して「無駄に長い寿命」と「相互の交感」を持っている。

ようするに、2匹はズットモなのだ。本人たちの意思は別として。

というか、会話が出来るのは2匹の間だけだし、何かしらの事故でもない限りお互いに手出し出来ないので、必然的に平和な関係となる。本人たちの意思は別として。

まぁ、こいつら2匹共自分の事しか考えてないし、基本的に相互不干渉でいれば、特に問題はないだろう。

「今日もお前らは仲が良いなぁ……」

こいつさえ来なければ。

《《また来やがったよ》》

岸辺から小島（こちら）を眺める1人の少年に、玉壺と半天狗が同時に溜息を吐く。

金髪金眼で、凛々しいが何処か憂いを帯びた顔をした、高校生くらいの男の子。

平日だからか学ランを着ている。土日祝日でもないのに、ここに居る事自体がおかしいのだが。

彼の我鳴桃善。付近の高校に通う受験生だ。
つまり、絶賛ナイーブな面倒臭い奴である。
「……あいつにも見習ってほしいぜ、まったく」
彼の言うあいつとは、2歳年下の後輩である桑島照善の事だ。
照善は捨て子であり、桃善とは同じ施設出身の謂わば義兄弟の間柄で、何かに付けて兄貴分である桃善に頼ってばかりだった。何なら今でも泣き付いて来る始末である。
だが、何だかんだで桃善も受験生。大学生ともなれば大人の仲間であり、志望校がかの有名な城南大学である為、照善に構っている暇は確実になくなる。
その時、照善が自立出来るのかと言うと……非常に心配だ。不安しか無いし、何なら絶望すらしている。施設長が嘆くのも当然だ。無理して大人になれとは言わないが、せめて幼児からは卒業しろ。少年くらいにはなれ。高校生にもなって「よしえも〜ん！」なんて言うんじゃありません。
「いや、俺も悪いか……」
桃善は自他共に認める天才なので、正直なところ試験は普通に受かりそうなのだ

が、こうも不安要素があると愚痴くらい零したくなる。

というか、つい先程とうとう堪忍袋の緒が切れて、「いい加減にしろ！　先生がお前に掛けた時間は全て無駄だった！　お前はどうしてそうも他人にしがみつく！」と怒鳴ってしまった。

普段は真面目で厳しい一面はあれど暴言を吐くようなタイプでは無いのだが、日頃のストレスと「受験」という人生初の苦境に立たされた事が重なり、自制が利かなくなってしまったのだろう。

何せこの時の彼は、貧しい施設を少しでも潤す為に、受験勉強だけでなく家事全般やアルバイトまで並行していたのだから。そんな所にピーピー泣き言を言われたら、そりゃあ切れもする。理由が「勇気出して告白したのに、振られた上に彼氏っぽい奴に財布取られた」などという情けない物なら、尚の事。

しかし、生真面目が故に全部１人で背負い込みがちな彼は、泣き喚いて家出した照善の後姿を見て冷静になると、一気に罪悪感が圧し掛かり、こうして塞ぎ込んで池を眺めている、という訳だ。

大体全部、照善が悪い。

あと、地味に一番心労が掛かっているのは、おそらく義息たちに家出された施設長である。じっちゃんは泣いて良い。

《《いや、勝手に納得されても……》》

まぁ、そんなの玉壺と半天狗には関係ないのだが。

そもそも、家庭内事情までは把握していないので、共感もクソも無い。愚痴られてもチンプンカンプンなだけだ。

さらに、スーパー手前勝手なこいつらに、大して知りもしない少年を慰める気など毛頭なく、

《《ご飯くれ》》

それどころか、動物らしく餌を強請りに行った。人の心無いんか。

「ハッ、お前らも結局あいつと一緒じゃねぇかよ……」

《《わーい》》

苦笑いしつつも、きちんと餌をあげる桃善は普通に良い奴である。

「――――それにしても、今日は随分とざわついてるな。何かあったのか？」

《《……？》》

と、餌やりを終えた桃善が、周囲を見渡しながらポツリと呟く。彼は生まれながら聴覚に優れ、昔から気配を察知するのが上手かった（曰く「ざわ……ざわ……」とするらしい）。

ここに結構長く棲んでいる筈の玉壺や半天狗でも気付かないような、何かが起こっているというのだろうか？

「うわぁあああああああ！」

「≪≪ゑ？≫≫」

その答えは、林の中から飛び出して来た、照善と共に。

『イワァアアアクゥッ！』『パイモォオオンドゥ！』

「≪≪何じゃこりゃあああああああああああ!?≫≫」

顔中から色々と汚い液を飛ばしながら走る照善を追い掛けて来たのは、岩蛇ポケモンのイワークとパイモンド。超デカいポッポたちだ。

「お、おい、照善！　お前、一体何を連れて来たんだよ!?」

≪ぬぁあっ、こっちに来るな！≫≪儂らの家が壊れるぅ！≫

だが、その巨体は伊達ではなく、進路上のあらゆる物を破壊し、ついでに池の小

島も吹っ飛ばした。

《やってられるかぁ！　私は逃げーる！　……って、つまるなコラァッ！》

《ヒィイイイッ、苛めないでくれぇ！　そして逃がすかぁ！》

安全第一、搦め手万歳の2匹は首尾良く逃げ出し、仲良く喧嘩をしつつも事なきを得た。

「がっ……!?」「あ、兄貴ィ!?」

しかし、只の一般人である桃善が咄嗟に動ける筈も無く、見事に跳ね飛ばされる。手足が嫌な方向に捩じれ、鈍い音共に地面へ叩き付けられた。

「う、嘘だろ、おい……何でこんな事に……」

さっきまでの逃げ足は何処へやら。桃善の無惨な姿に、照善は呆然と立ち尽くした。

「馬鹿野郎……早く、逃げろ……！」

「で、でも……」

「……いいから行け！　こんな事に巻き込みやがって、目障りだ、消えろ！」

「……っ！」

照善は知っている。桃善がきつい言葉を投げ掛けて来る時は、一等大事な事を隠そうとしている場合が殆どである事を。

傷を見れば分かる――――彼はもう、助からない。

「……うぅぅ……嫌だ！　兄貴を置いて行くなんて、オレには出来ない！」

「この……！」

「だって、オレ、まだ兄貴に何も返せて――――」

「……上から来るぞぉっ！」

だが、現実は何処までも容赦がない。葛藤も、涙の別れすら許してくれない。

「ぐっ!?」

水に塗れてパニックになったイワークとパイモンドが放った岩雪崩の内、一発が照善の頭を直撃した。血を吹き出しながら、バタリと倒れる照善。

（くそっ、本当に何だってんだよ、畜生……こんな終わり方しか出来ないのか、俺は……！　認めない……俺は絶対に、認めないぞ……！）

薄れ行く意識の中で、後悔と絶望が渦巻く桃善。

「エコエコアザラク……我は呪い、縊りたり……」

しかし、現実とは時に気紛れな運命を呼び込む。

《ドワォ!?》《これはどうした事じゃ!?》

何処からともなく響いて来た声に呼応するように、玉壺と半天狗の姿がムクムクと変貌し、やがて過去3人しか見た事が無いらしい最終形態と憎珀天の状態に成った。

《何だかよく分からんが、よくもやってくれたなぁ！》《弁償しろ、悪者めらがぁ！》

『『イヴァアアアアク！』』

そして、怒れる玉壺と半天狗が「鬼」の力でデカいポッポらを叩きのめす。

「シィィィ……！」「照善……」

むろん、周りの事なんか全然考えていない2人の戦いで、桃善は今度こそ挽肉になり掛けたのだが、青天の霹靂が如く動いた照善に救われた。

「……何で寝てるんだ、お前は……」

気絶したままで。そんな馬鹿な。

「……」「あ……」

「あらあら、痛そうねぇ？」

さらに、本能的に〝それ〟を察知したのか、玉壺たちを変貌させた声の主の下へ、照善は桃善を運んだ。

〝それ〟は、一見すると何の変哲もない、只の女子中学生に思える。

だが、身体中から溢れる邪悪なオーラと、肩に背負っている四つ目の赤子が、彼女の異質さを物語っている。

「それじゃあ、さっそく治してあげるわ」

「……嘘だろ？」

そして、それを証明するかのように、指を一振りするだけで、桃善の致命傷を治癒してしまった。

「あ、あんたは一体……」

「内緒♪　……それじゃ、義弟さんと仲良くね」

しかし、桃善の疑問には答えず、すぐさま踵を返してしまう。

「ご苦労様。もう戻って良いわよ」

《《……ぇはん♪》》

ついでに、イキって破壊活動をしようとしていた玉壺と半天狗も元の鯉と野ネズミの姿に戻し、

「はい、今晩のおかず」

《《いやぁあああ！》》

「いや、流石にそれはちょっと……」

「なら、ペットにでもしてあげて。……たぶん、ここにはもう棲めないだろうから。アナタたちも、早く東京――――というか、関東から出た方が良いわよ。死ぬから」

色々と不吉な事を言い残して、今度こそ居なくなってしまった。景色に溶けるように、スゥっと。

「待っててね、鬼太郎、ねこ姉さん。ウフフ……」

最後に一度、空を駆ける一筋の奇しき赫耀を見上げて。キーエフ・キュリアンのそれによく似た、とても純粋で悍ましい笑みを浮かべながら。

「何だかよく分からんが……」

とりあえず、やるべき事は１つ。

「起きろ馬鹿。……帰るぞ」
「うぇはぁすっ!?」
《《……》》
帰ろう。良い子だから。

◆玉壺
上弦の伍を務める鬼。壺から生えた半魚人という大分人間を辞めた姿をしている。
自称・天才的芸術家であり、歪んだ美意識を反映させた魚っぽい何かを壺っぽいガラクタから召喚する。
基本的に正面切って戦うタイプではなく、壺の瞬間移動で奇襲したり、毒を持った魚群ミサイルで弾幕を張ったり、泡に閉じ込めたりと、かなり陰湿かつチキンな戦い方をする。
真の姿は過去に3人しか見た事が無いらしいが、4人目となる霞柱：時透 無一

郎には殆ど手も足も出ずに頸を切られ、敗死した。

人間の時は益魚儀という名前で、この時から人間性は破綻しており、〝動物を悪戯半分に殺す〟〝様々な魚を縫い合わせて「芸術」と抜かす〟〝水死体（自分の両親）を美しいと感じる〟など、異常な行動が目立っている。まさになるべくしてなった「鬼」である。

そんな事ばかりしていたからか、今世では自分が散々殺して来た魚に生まれ変わった。

凍える世界

キュレムの専用技って名前の割りに使いにくいのが多いナァ……。

俺の名前は桑原(くわばら)保志(やすし)。
額と両頬に付いたX字の傷が特徴な、ペットショップの長男だ。
とは言え、両親が離婚し、妹は親父に引き取られた為、実質的に一人息子である。
だから何だって話だが。
そんな事より、聞いて欲しい事があるんだよ。
――――店で保護していた孤児のムクドリの雛が、何時の間にかムックルになってたんだ。
何を言っているのか分からねぇと思うが、俺にもよく分からん。本当に朝起きて見てみたら、何故だかムックルになってたんだよ。
『ピキュピキュピピッ！』

ほら、本人も鳴いてアピールしている。可愛いけど煩い。
「母ちゃん母ちゃん！　あのムクドリがムックルになってる！」
「保志保志！　大変、ウチのハト次郎がマメパトになってる！」
「「えぇ……」」
しかも、ムックルだけでなく、我が家の家禽であるカワラバトのハト次郎までもがポケモン化しているようだ。
ちなみに、俺の母ちゃんは初代ポケモンが小学生の時に直撃した世代なので、案外とポケモンに詳しい。何なら俺よりもやり込んでいる。自称「最強の鳥使い」であり、主に序盤鳥+後半の鳥たちを使う。流石はペットショップの店長である。
「モ、モンスターボール、何処かに無いかしらねぇ？」
「……母ちゃん」
「な、何よ！　ポケモンマスターに、私はなるのよ！」
だからなのか、母ちゃんは慌てふためくどころか、マメパトをゲットしようとソワソワしていた。ブリーダーがトレーナーに転職するんじゃないよ。
「……って言うか、よく見ると、他の鳥たちもポケモンになってるぞ!?」

一呼吸おいてから周囲を見渡してみれば、籠の中（ゲージ）の鳥たちが、１羽残らずポケモン化している。ポッポにオニスズメ、ホーホー、モクロー、ペラップ、ドデカバシなど、実に母ちゃん好みの物ばかり。何か１羽だけ最終進化形がいるけど、気にしたら負け。

何なんだよ、これは。何がどうなってやがる!?

「えー、モンスターボール、モンスターボールはいかがですかー？」

と、店先から物売りの声が。何で売ってるんだよ。

「お、丁度良いじゃん。保志、買って来てよ」

「状況に順応し過ぎだろ!?　少しは騒げよ!?」

「いいからいいから。ちゃんと10個単位で買いなさいよ。プレミアボールも欲しいから」

「ゲーム脳め……」

環境適応能力の高い母ちゃんに金一封（１万円）を渡され、買い出しに行かされる俺。どうしてこうなった。

「……あいつがそうか」

そして、店を出てみれば、さっそく売り子を発見。赤いレインコートにバスケットと、まるで童話の赤ずきんのように見える。中身は言うまでもなく、女の子だろう。

「あー、えっーと……すいません、ちょっとそれを買わせてもらいたいんですけど？」

「あ、ハイ！　でも、試しも無しに買ってもらうのもアレなので、ちょっと今から実践して――――」

「……お前、零余子か!?」

その上、中の人は自分の見知った顔だった。

そう、売り子の彼女は、俺の同級生だった零余子であった。

◆◆◆◆◆◆

「あらあら、零余子ちゃんじゃない。久し振りね。何か家庭の事情で引っ越してたようだけど、元気そうで良かったわ」

「いえ……」

母ちゃんに勧められるまま、お茶と菓子を頬張る零余子。その隣に座るは、もち

ろんこの俺、保志だ。幾ら昔馴染みとは言え、こんなカップリングみたいな位置取りをするのはどうかと思うのだが。

まぁ、実際に昔はかなり仲が良かったからな。

あんな事さえなければ。

「それじゃあ、後は若い二人でごゆっくり～♪　私は店番してるからね～♪」

「あ、おい――――――」

「バイバイキ～ン♪」

「ば○きんまんか！」

さらに、母ちゃんはしたり顔で店に戻ってしまった。チクショーメーッ！

「どうやら、お母さんは知らないみたいね」

すると、総統閣下していた俺に、零余子の方から話し掛けて来た。

意外だ。てっきり、話すのも嫌だと思ったのに。

「いや、あんたの事は未だに許してないわよ？」

ナチュラルに心を読むのは止めて下さい。

そう言えば、こいつは昔から勘が鋭いと言うか、やたらと大人びてた所があったな。普段はおちゃらけてるけど、本心では色々と分かってます的な感じ。まるで転生系のラノベ主人公である。

だが、彼女の持つチート能力は、どちらかというと敵寄りだった。しでの鳥もビックリな、とんでもない再生力持ちだったのだ。

しかし、ラノベ主人公と違い、零余子の場合は都合があまりにも悪過ぎた。

まず、シチュエーションが最悪だった。交差点のど真ん中という、嫌でも目に付く場所で、本人の否やもなく勝手に発現してしまったのである。

見るも無残なハンバーグとなった少女が、巻き戻しの如く元の姿になったのを目の当たりにすれば、周囲の人々が彼女に対してどう思うのかなど、想像に難くない。

何せ、俺がそうだったからな。

……そう、その現場に俺も居合わせていたのだ。

俺はその日、零余子と一緒に帰路に着いていた。

家の方向が違うので完全な遠回りだったのだが、零余子とはそれなりに仲が良かった事と、当時の俺たち一家がかなりの不和を抱えていたのもあり、なるべく家

に居たくなかったのである。

そして、彼女に家庭内事情を愚痴りながら歩いていた時、〝それ〟は来た。

「保志、危ない！」「えっ!?」

飲酒運転の末、暴走して突っ込んで来たのは、10トン級の大型トラック。零余子に突き飛ばされていなければ、俺がハンバーグになっていただろう。

「うぅぅ……っ！」

「と、父ちゃん!?」

さらに、運転手はまさかの親父だった。

陶芸家になる夢を叶えられず、知り合いの口利きで入社した物流の仕事で何とか生計を立てられてはいたものの、実質母ちゃんに寄生しているも同然だった親父は、随分と鬱憤を溜め込んでいた。それは少し前から家庭にも表れていて、夫婦喧嘩の要因になっていた。

そして、職場の同僚から忠告されたのが止めとなり、完全に自棄酒をかっ食らい、ヤンキー気取りで暴走させた――――と、後に出所した親父と偶然出会った時に語られた。

本来なら過失運転致死+飲酒運転でしばらくは出られない筈だが、母ちゃんが文字通り最後の情けで罰金を肩代わりしてくれたのと、犠牲者である零余子が居なくなってしまった事、事件の内容があまりに奇怪過ぎて犠牲者扱いになったのが俺だけだったのが重なり、〝致死傷〟にならなかったおかげで、思ったよりも早く出られたのだ。あいつが子持ちで、その子供である妹が懇願したのも大きい。あいつ、かなりの親父っ子だったからな。今では二人共東北の方に引っ越して、夢にまで見た陶芸家としての道を歩み始めているらしい。

ともかく、零余子は咄嗟の正義感で俺を助けたのにも関わらず、他ならぬ俺のせいで社会的に追い詰められ、あっという間に蒸発してしまった。

母ちゃんが知らなかったのは、全力で俺が黙っていたのと、周囲の人が気を遣ってくれたからだ。流石にロクデナシの親父を庇ってポンと数百万円を払える漢気を見せた母ちゃんに、嫌な思いをさせるのは気が咎めたのだろう。

その優しさを、少しは零余子に向けても良かったのでは、とはとても言えない。

「く、来るな、化け物！」

……あの時、思わず言ってしまった一言は、今でも俺の脳裏に残っている。言わ

れた零余子の絶望し切った顔も。
　しかし、全ては手遅れ。俺は母ちゃんに隠し事をしたまま、零余子に謝る事も出来ないまま、今日まで生きて来た。
「言っとくけど、謝らないでよ。ムカつくだけだから」
「……」
　だが、謝罪の機会は永遠に来ないようである。
　ま、今更謝られても困るだけだし、俺が罪悪感を薄れさせるのを快く思わないのもよく分かる。俺だったら顔見た瞬間にぶっ殺すだろうからな。
　犯人が謝罪し反省しているからと言って、被害者や遺族が許してくれるとは限らないのだ。
「……お前、今はどうしてるんだ？」
　なので、俺は話題を変える事にした。幸い話もしたくない程に怒ってはいないようだし、せっかく久しぶりに会えたのだから、少しくらいは話したい。
「とある女の庇護下で、ウーチューバーをやってるわ」
「思ったより充実してるじゃん」

さっきの売り子姿から、てっきり人には言えないようなバイトをさせられてばかりだと思っていたが、それは杞憂だったようである。

「……後でチャンネル登録しておくよ」

「そりゃどうも。ついでにスパチャもしておいてね」

「はいはい……」

こうして話していると、やっぱり昔を思い出しちまうなぁ。

でも、今更縁りを戻すというのは都合は良過ぎるし、このまま少し話したらお別れか。こいつも、俺なんかと関わるより、今の生活を楽しむ方が幸せだろう。

「それはそうと、そのモンスターボール……本物なのか？」

と、話が一段落した所で、俺はずっと気になっている事を尋ねた。何せモンスターボールだ。幾らポケモンが現れたからって、捕獲用具までぽっと出するなんて都合が良過ぎる。

「本物よ。ほら」

「おお……！」

それは零余子も思っていたのか、部屋まで付いて来たムックルに向けてボールを

ポイっと投げた。
　すると、ムックルはアニメやゲームよろしく光となって吸い込まれ、ボールがカタカタと揺れ出す。
『ピキュピキュピキキッ！』「あら、出ちゃったわ」
　しかし、零余子に掴まるのは嫌だったようで、全力でボールから出て来た。それでも2回は揺れてたから、やっぱり捕まり易いんだろうな。序盤鳥だしね。
　だが、このボールが本物だとして、今度はそれを多量に持ち歩いているこいつが何だって話になる。
「あんたがお気に入りみたいね。ボールは売ってあげるから、まぁ、上手くやんなさいな」
「もう行くのか？」
「昔みたいで嫌だからね」
「……」
　ただ、零余子はこれ以上話していたくはないようなので、追及は止めておこう。
俺にそんな資格はない。

こうして、俺たちは何の和解も理解も出来ないまま、再び分かれる……筈だった。

「きゃあああああっ!?」

母ちゃんの悲鳴が、聞こえて来るまでは。

◆◆◆◆◆◆

「母ちゃん、何が――――――寒っ!?」

慌てて店の方へ出た俺と零余子が見たのは、一面の銀世界。雪と氷で全てが閉ざされた、氷結世界だった。

「あ……」「……砕けてる」

さらに、氷漬けにされた上で、粉々に砕かれた母ちゃんだった物体。

『クォルルルゥッ！』

そして、一連の出来事を引き起こしたであろう犯人――――――、

「「フリーザー！」」

それは、伝説の冷凍ポケモン「フリーザー」だった。見る者を圧倒する冷酷な美しさは、間違いなくこの種族の特徴である。

しかし、今はそんなのはどうでもいい。

いや、良くない。

「よくも母ちゃんを！」「よしなさい！」

『コォオオオッ！』

零余子が制止したが、そんなの知った事じゃない。こいつは、母ちゃんを殺したんだ。絶対にゆ〝る〝さ〝ん〝！

『カォオオッ！』

「あっ……！」

しかし、伝説のポケモン相手に、スーパーマサラ人でもない俺が敵う訳も無く、あっと言う前に冷凍ビームに呑み込まれた。

「円舞一閃」！」『コォルルッ!?』

……かに思われた時、零余子の炎煌めく一閃によって、ビームは中断される。

『ギャォオッ！』

「輝輝恩光」！」

『コァアアッ!?』

さらに、怒れるフリーザーのエアスラッシュを、零余子は螺旋を描くように駆け

上がりながら、火柱を伴う一撃で以て叩き落した。お前何時から化け物以上の存在になっちゃったの!?

『キィィ……！』

「逃がすかっ！」

『カッ――――――！』

そして、形勢不利と見たフリーザーは逃げようとしたが、零余子の放ったマスターボールによって、あっさりと掴まってしまった。

「……」

開いた口が塞がらない。絶句するとはこの事だ。

「……」

零余子も何も語らない。一言も喋らないまま、何故だか自分の手首を切り、母ちゃんだった肉片に掛けていく。

「……うぅっ』

すると、まるであの日の零余子の如く、凄まじい速度で再生し、母ちゃんは元の姿に戻った。

『ガァアアッ！』「うわっ!?」

さらに、鬼の形相を浮かべたかと思うと、獣のような動きで俺に襲い掛かって来た。

「せい！」『ガッ……！』

しかし、俺の肩口に噛み付き、血を啜り始めた所で、零余子が入れた当て身によって意識を刈り取られてしまった。

「……これで、お母さんはあんた無しじゃ生きられなくなった。生かすも殺すも見捨てるも、あんた次第。これは、私なりの復讐……仕返しみたいな物」

「そ、それってどう言う――――」

「ボールもサービスしておくわ。それじゃあ、さようなら」

そして、零余子は薄ら寒くも、何処か寂しそうな笑みを浮かべながら、今度こそ立ち去って行った。残されたのは、氷から解き放たれたポケモンたちと俺、それから意識の無い母ちゃん。

「母ちゃん……」

よくは分からないが、俺の母ちゃんは命拾いした代わりに化け物にされてしまっ

たらしい。その上、俺の……おそらくは血を吸わなければ、死んでしまうようだ。

「〝私なりの復讐〟か……」

つまり、同じ目に遭えと言っているのだ、零余子は。やはり、壊れた関係は二度と修復出来ないんだな……。

「――――――これは、大変な事になったな」

「……！」

と、そこへ現れる、見知らぬ男。

だが、黒い詰襟に「滅」の一文字が刻まれた羽織を纏っている事を鑑みるに、こいつは大空総理大臣が結成したとかいう、「鬼殺隊」の一員か。

だとすると、マズい。ポケモンは言うまでもなくモンスターだし、さっきのをチラッとでも見られたとしたら、母ちゃんも妖怪扱いされてしまう。

「仕方ない……」

案の定、鬼殺隊の男は「日輪刀」を抜き、母ちゃんへ切っ先を向けた。

「ま、待ってくれ！　……いや、させない！　母ちゃんは狩らせないぞ！」

そう、俺は試されている。目の前の鬼殺隊の男にだけではない。零余子の用意し

た悪意に、己の覚悟を試されている。
「分かっているのか？　そいつも、そいつらも、もう普通の生き物じゃないんだぞ。お前の都合なんて、聞き入れやしない」
「分かってるよ、そんな事は！」
「頼むだけで許されるなら、鬼殺隊は存在しないぞ。そもそも、そいつらが他の人間を傷付けたとして、どう責任を取るつもりだ？」
「責任とか知るか！　俺は俺たち以外の事なんてどうでも良いんだよ！」
母ちゃんが殺されるつもりはないし、変化したとは言え店の鳥たちを狩られるのは嫌だ。あの日、零余子の心を殺した俺が、今更責任なんて取れるか！
「行くぞ、ムックル、マメパト、他の皆も！」
『ピキュピピ！』『パットーッ！』『ホォオクゥン！』『ポッポォッ！』『ペラップゥー！』『デカァアアハシッ！』
「……！」
〝俺たち〟は、必ず勝ってみせるぞ！

◆フリーザー
・分類：れいとうポケモン
・タイプ：こおり／ひこう
・性別：ふめい
・特性：プレッシャー／ゆきがくれ
・種族値
HP：90
こうげき：85
ぼうぎょ：１００
とくこう：95
とくぼう：１２５
すばやさ：85
・図鑑説明
雪山で寒くて死にそうな時に目の前に現れるとされる、伝説の鳥ポケモンの１つ。周りの空気を冷やして雪を降らせ、尻尾をたなびかせながら空を飛ぶ姿は素晴

らしく美しいが、実態は命を氷結させる恐ろしい冷凍ポケモン。
ガラル地方に亜種が確認されているが、現在では収斂進化を遂げただけの完全な別種であると言われている。

命を狩る者

頑張れ村田さん！

東京都、葛飾区。
『ギャヴォオオオッ！』
突如進化したギャラドスが大暴れしている。
「水の呼吸、捌ノ型「滝壺」！」
そんな暴れん坊に、崩れた足場を利用して大ジャンプした詰襟姿（羽織は無い）の少女が、刃を叩き付ける様に斬り掛かる。その剣圧は女の子どころか人間とは思えない程に重く激しい。
『グヴヴヴ……ギャラァッ！』
「きゃあっ!?」
しかし、ギャラドスは一瞬怯みはしたものの、即座に体勢を立て直し、詰襟の少

女へ襲い掛かった。理性をかなぐり捨てた攻撃技「暴れる」だ。少女も頑張って避けているが、攻撃が激し過ぎて、何れは直撃してしまうだろう。

「泉の呼吸、弐ノ型「鉄砲水」！」「わっ!?」

だが、止めを刺される寸前で別の詰襟が割り込み、少女を助けた。

彼の名は村田（むらた） 幸季（こうき）。サラサラの黒髪に素朴な顔立ちが特徴の青年である。恰好も他の一般隊士と同じであり、はっきり言って目立たない。モブ代表って感じだ。

しかし、彼はモブだが雑魚ではない。もうすぐ羽織を纏わせて貰える程の実力者である。

『ギャヴォオオオッ！』

「引っ込んでろ！　泉の呼吸、捌ノ型「間欠泉」！」

『グギェェッ!?』

追撃しようと突っ込んで来たギャラドスに対して、下から打ち上げるようにカウンターを決め、今度こそスタンを取った。その間に少女を安全圏に逃がし、

「馬鹿野郎！　みずタイプに水の呼吸使ってどうすんだ！　素直に雷の呼吸の使い手に任せろ！」

「す、すいません……」

思い切り叱り付けた。その勢いは、まさしく瀑水の如しだ。

だが、何時までもお袋さんをしている場合ではない。己の変化に付いていけず暴れ回るポケモンは、まだまだ居るのだから。

『……ギャラァアアッ！』

「しつこいな、こいつも！」

と、気絶から回復したギャラドスが、再び襲い掛かって来た。無傷という訳ではないが、瀕死状態には程遠い。もっと手数を稼げば結果は違ってくるかもしれないが、その前にこちらが被弾して大ダメージを受けてしまうだろう。

（やはり、今までの傾向からして、呼吸の変化がそのままタイプ相性になっている。水系統の呼吸じゃ、精々怯ませる程度か……）

駆け付けるまでの戦いと、ギャラドスの立ち直りの早さから、村田は呼吸の種類がポケモンのタイプの相性に対応している事を確信していた。さっきの発言も半ば以上冗談では無かったが、予測は正しかったらしい。

（ならば！）

――――――――キンッ！

「おっ、いきなり〝呼ばれた〟と思ったら、丁度良い相手がいるじゃねぇか。こんな四倍弱点野郎なら俺でもやれるぜ！」

納刀を合図に、村田は雷の呼吸の使い手を呼び寄せた。隊士は全員つばめから「武器納めが救難信号になる」と言われていて、自分が不利な相手が現れた時は無理をしないよう厳命されている。転移能力を持つ彼女であれば、状況に応じた人員を即座に送り込める。

「何だ、お前かよ……」

「失礼な奴だな！　せっかく呼び出しに応じてやったのに、その言い草はねぇだろ!?」

まぁ、時と場合によるので、人選までは思い通りにいかないのだが。

事実、召喚された隊士は、村田があんまり好きではない少女だった。

彼女は河原斗賽子（かわはらとさこ）。蜘蛛の巣のように白髪の混じった短髪とイキった笑顔、胸部のミサイルが特徴。好物はサイコロステーキ。

呼び出された理由からも分かる通り、斗賽子は雷の呼吸の使い手で、実力で言え

ば村田と同レベルの隊士である。
だから召喚されたんだろうが、村田としては遠慮したかった。それは斗賽子の性格と、出会いが関係している。
二人は初任務でツーマンセルを組んだのだが、彼女は当初からイキりまくっており、村田の忠告を無視して単独で突っ込み、返り討ちになりそうになった所を後から追い付いた彼に救われ、それ以来、斗賽子は何かと村田に突っ掛かるようになったのである。
その為、女性――――というか、グイグイ系にそこまで免疫が無い村田は、斗賽子が若干の苦手意識を持っているのだ。
余談だが、初任務の討伐対象は、火と鉄糸を操る絡新婦という妖怪だったりする。
『ギャォオオッ！』
「うるせぇなぁ！　とりあえず倒されとけや！　獣の呼吸、壱ノ牙「お手付き」！」
『ヴゴァッ!?』
しかし、先の通り斗賽子の実力は確かな物。襲い来るギャラドスを、タックルで

逆に強襲し、雷を纏った殴打を酸連続で食らわせ、瀕死状態へ追い込んだ。

斗賽子の武器は、刀からかなりかけ離れた形をしており、中央に持ち手の付いた三日月型になっている。それを万力のような握力で握り締め、ぶん殴るように斬り付けるのである。

元々は普通に雷の呼吸の型を使っていたのだが、何故か壱ノ型が上手く出せず、密かな悩みとしていた時に、村田の〝殴るような剣技〟に救われた事で、自らも同じような道を突き進み、その結果こうなった。

ケモノであって、ケダモノに非ず。それが斗賽子の「獣の呼吸」だ。

「相変わらずヤバいな」

「そうか？」

「少なくとも女の子のする事ではない」

「何でだよ!?　暴力は全てを解決するだろうが！」

「その考え方がヤバいって言ってんの！」

……恩人である当の村田には引かれている事には気付いていない模様。

『ガァアギィイン！』

「チッ、今度はニドキングか……！」

と、今度は地面を突き破って、野生のニドキングが現れた。こいつもまた興奮状態であり、目に見える相手を攻撃しようとしている。

「――――俺が行く！　斗賽子はその子を頼んだぞ！」

ニドキングはどく/じめんタイプ。雷の呼吸から派生した獣の呼吸では相性が悪い。なので、村田は自らが前に出た。

『グガァッ！』

ニドキングが毒突きを繰り出して来た。毒を纏ったド突きが村田に迫る。

「泉の呼吸、壱ノ型「湧き水」！」

それに対して、村田は水面が揺れるように攻撃を躱し、ニドキングの顎を打ち上げる。

『ガァ……!?』

すると、ニドキングの視界が湧き水の如く歪み、たたらを踏んだ。

「泉の呼吸、肆ノ型「海嘯」！」『グギャッ!?』

さらに、そこへ村田の追撃が叩き込まれる。まるで河を逆流する津波のような

荒々しい連撃がニドキングの手足を捉え、完全に運動機能を奪い去った。
『グッ……！』
「させるか！　泉の呼吸、伍ノ型「土砂降り」！」
『グガァァ……』
そして、破れかぶれにヘドロ爆弾をぶちかまそうとしたニドキングに、打ち下ろすような凄まじい居合切りが炸裂し、瀕死状態へ追い込んだ。
「……カッコいい」
そんな彼の様子を、少し離れた位置から斗賽子が見つめていた。頬を少し赤らめながら。
「あ、あの、ちょっと良いですか？」
と、呆けていた斗賽子に、少女の隊士が質問する。
「ん、どうした？」
「河原さんの武器は分かるけど、村田さんの日輪刀は何で〝鉈〟なんですかね？それに、どうして斬ってるのに、打撲みたいな傷ばかり出来るんでしょう？」
「ああ、そういう事か」

少女の疑問に、斗賽子は納得した。村田の使う泉の呼吸は、初見だとかなり型破りに見えるからである。

「あいつ、「棟」で殴ってるんだよ。つまり、骨を砕いたり、衝撃で神経を乱すのが主な攻撃方法なのさ」

「えぇ……」

そう、泉の呼吸は割とえげつない。

水の呼吸が流れるように、どちらかと言えば上から攻撃するのに対し、泉の呼吸は逆手持ちで下から殴打を食らわせるのが特徴である。斗賽子の言う通り、殴打によりスタンを取るのが得意な呼吸だ。これが結構有用で、先に動きを鈍らせてしまう事で、確実に止めを刺す事が出来る。実際ニドキングはまず脳震盪でバランスを崩された上で、手足の運動能力を奪われた為、ロクに反撃出来ないまま狩られてしまった。

「な、何でそんな暴力的な技を？」

「暴力的って……いや、確かに暴力的だけど。何か、出身が関係してるらしいよ。詳しくは教えてくれないけど」

「は、はぁ……」

村田の実家はマタギでもやってたんだろうか。

ともかく、これで周囲の安全は確保された――――かに思われたのだが。

『バヴォオオオオッ！』

3人を覆い隠す、巨大な影が差す。空を見上げれば、頭でっかちな飛竜（ワイバーン）が、岩のような爆発性の鱗をばら撒き、そこら中を空爆している。

「「バ、バゼルギウス!?」」

間違いない。あれは爆鱗竜「バゼルギウス」である。3人共、ポケモンもモンハンもやってるから、すぐに分かった。

「くっ、何がどうなってやがる！」

「そんな事より、お館様に連絡だ！」

「は、はい！」

だが、呆けている場合ではない。〝趣味が爆撃〟という危険生物を野放しにしては、ポケモン以上の被害を齎してしまう。

『グギャアアアアァヴォッ！』

「「今度はディアブロス!?」」

さらに、瀕死で動けないギャラドスやニドキングをご自慢の二本角で吹き飛ばしつつ、地下から砂漠の暴君「ディアブロス」まで現れた。こんな真似をやらかす奴は、1人しかいない。

「くそっ、一先ず足止めだけでもするぞ！」

「「了解！」」

『ヴェァアアアアヴォッ！』

「「滅茶苦茶うるせぇ！」」

そして、バゼルギウスは他の隊士に任せ、村田たちは咆哮を上げるディアブロスへ立ち向かうのであった。

◆村田

「鬼滅の刃」に登場する一般隊士。特徴が無いのが特徴という、ザ・モブって感じの人だが、女子も羨むキューティクルヘアーは彼のアイデンティティー。

一応、最終選別は突破したし、何ならあの冨岡 義勇と同期だったりするが、才能はあまりなかったらしく、どちらかと言うとサポートとして活躍した。その一般人から抜け切れていない、人柄の良さから割と人気はあるようだ。

今作では勝手に熱海出身にされた。

今世でも水の呼吸が上手く行かず、八つ当たりでその辺の岩に斬り掛かったら、折れた刀身の棟が頭に直撃し、その時偶然視界に入った間欠泉を見て、泉の呼吸を編み出した。奇麗に斬るのは苦手だが、力仕事をしていたおかげで〝持ち上げるように殴る〟のは得意だったので、逆手持ちの鉈でスタンを取る戦法を思い付いた模様。

初任務の際にサイコロステーキ後輩を助けたせいで、彼女に熱く絡まれているが、本人としてはちょっと迷惑に思っている。

ちなみに、今回助けた後輩少女の名前は「後藤 珠代（ごとう たまよ）」。

這い寄る混沌

「(・ω・)」うー！(／・ω・)／にゃー！

東京都、墨田区――――スカイツリーの頂点。

『つまんなーい』

馬鹿とイキリは何とやら。

東京で一番高い場所に何事も無く陣取っていた、スマイル団の団長ことダース・マリアボラスは、深々と溜息を吐いた。それはもう、心底つまらなそうに。

彼女の眼下では、自身が呼び寄せたポケモンたちが、好き勝手に暴れ回っている。正確には召喚ではなく、現地の生物を変質させたものだが、この際それはどうでもいいだろう。彼らがこの世に実在し、被害が続出しているのは紛れもない事実である。

しかし、人々も逃げ回るばかりではない。大空 つばめをお館様とした「鬼殺隊」

が駆け付け、ポケモンたちを次々と討ち取っている。大半は瀕死状態で済んでいるが、柱級の隊士を相手にした者は……考えない方が良いだろう。

だが、それも所詮は多勢に無勢。変化したポケモンはそこら中に居る上に、どんどん増え続けている。マリアボラスが健在な限り、終わりはない。倒した数より現れる数の方が多いだろう。

『……ん？』

しかし、侵食開始から暫く経った頃、状況に変化が起こった。

『あれは……バゼルギウスか』

突如、葛飾区の方にバゼルギウスが出現し、空爆を始めたのだ。

さらに、直ぐ近くからディアブロスが現れ、それを皮切りとして23区の各地にモンハンのモンスターが現れていく。ポケモンたちも対抗しているが、流石に大きさが違い過ぎる。搦め手やタイプ相性で有利に戦えている者もいるが、体格以上に体重差で押されている者が殆どである。見た目の割りに軽い奴が多いからね、ポケモン。

そして、それに便乗するかの如く、攻勢を強める鬼殺隊。漁夫の利と言ってしま

えばそれまでだが、人の身で強大なモンスターたちを相手取る以上、卑怯千万は誉め言葉だろう。

そんな事より、モンスターたちの召喚主だ。

『これはもしかして、もしかするのかな～？』

ポケモンたち以上に暴れ回るモンハン世界のモンスターたちを見て、マリアボラスは実に楽しそうに笑った。こんな事が出来るのは、自分が知る限り、鳴女しかいないと。

◆◆◆◆◆◆◆

だが、現実はそこまで彼女の思い通りにはいかなかった。

――――べべん、べんべん！

『……』

破壊し尽くされ、瓦礫ばかりの更地を歩く、琵琶の女。

しかし、彼女は鳴女ではない。むしろ、芸妓の無惨に零余子や姑獲鳥の要素を付け加えたような姿をしている。

（鳴女は言っていた。なるべく凶暴性の高い種族を呼び寄せて、ポケモンにぶつけ

ろと）

彼女の名は「玄上」。進化を重ね続け、自律思考だけでなく、人間の姿に擬態する能力まで得た、鳴女の琵琶である。元々付喪神になっていた彼女だが、この度晴れて一人前の妖怪となったのだ。正確には、鳴女と同じ「鬼」だが。

さらに、無限城の媒介役だった事も相俟って、鳴女と同レベル……否、転移能力に関しては、それ以上に使い熟す事が出来る。何せディアブロスのような怪獣レベルの大きさも平然と、何度も何度も呼び寄せられているのだから。

だが、まだまだ「鬼」としては赤ちゃんなので、直接的な戦闘能力は低め。ちょうど原作における鳴女と同様である。

「あっ、こいつもしかして、鳴女か!?」

「いや、容姿が全然違うぞ!?」

「擬態しているだけかもしれないだろ！」

「確かに……」

「ともかく、襖に気を付けろ！　想定通りに対処すれば、何とか生き延びられる！」

「わ、分かった！」
『……』
なので、玄上は真面目に戦う気は微塵も無い。襖攻撃への対策として背中合わせで周囲を警戒する鬼殺隊のモブを前にしても、全く気にも留めていなかった。
『さようなら』
「「あっ！」」
言うが早いか、玄上は己を襖で転移させ、
『グワヴォオオオォォォン！』
「「げっ、ティガレックス!?」」
置き土産として轟竜「ティガレックス」を召喚した。
『ゴガァアアアアアッ！』
「「わきゃーっ！」」
轟く咆哮による衝撃波で、隊士たちが吹き飛ばされる。
「クソッ、耳栓が欲しい！」
「物理的にどうこう出来る代物か!?」

「スキルの話だよ、スキルの！　つーか、何なんだよあの女！　鳴女みたいなのがもう1人いるなんて聞いてないよ～」
「泣き言言ってる場合か！　食い止めるぞ！」
「チクショーメーッ！」
『ギャヴォオオオオオオ！』
それでもミンチになったりはせず、即座に反撃に打って出る辺り、鬼殺隊なら異世界でも狩人としてやって行けるかもしれない。
――――――べべん！
「な、何だお前!?」「一体何処から!?」
『……』
『グゴォオオオオッ！』
「「ぎゃーっ、イビルジョーだぁ！」」
そして、転移する度に同じような事を繰り返し、次々と災厄をばら撒いていく、玄上なのであった。

◆◆◆◆◆◆◆

「よろしかったのですか、ベアード様？」

そんな仕組まれた地獄絵図を、異空間から見下ろす西洋妖怪たち。黒玉状態のベアード、ヴィクターと合席するベア子、百年物のワインを嗜むウォルフガング、鳴女から貰った血酒を味わうカミーラと、アデル以外の者たちは例外なく寛いでいる。

まぁ、そう言うアデルも立ってはいるが、全然焦っていなかった。予定通りの流れだからだ。

『構わん。鬼狩り共を活躍させ、人間と妖怪を敵対させるのは当初から予定していた事。このまま狩らせろ』

そう、これはあくまで前哨戦。ポケモンたちが出しゃばって来るのは想定外だが、鬼殺隊を前面に押し出すのは、あの会議にて、最初から決まっていた事である。

だから、彼らは此度の戦いに手出しをするつもりはない。鬼殺隊も割と頑張っているし、何より鳴女一派が工作活動を続けている。

さらに、異界や闇の中から、あの女たちが帰還した。遅かれ早かれ、この騒動は鎮まるだろう。ならば、ドッシリと腰を据えて、高みの見物をするくらいが丁度良い。

（……喧嘩を売る世界を間違えたわね、団長さん）

そして、何もしない事にモゾ痒い思いをしていたアデルも、赫い凶星と闇の魔女に続く、鬼殺隊以外の第三勢力の姿を見て、気にする事を止めた。

◆玄上

鳴女の使う琵琶が付喪神となった後、完全な「鬼」と化したもの。主人と同じく陽光を無効化し、無限城の能力も使えるが、戦闘力はあまり高くない。表面上は非常に無口だが、心の中では結構毒吐いている。中身はまさしく原作の鳴女そのもの。

名前の由来は村上天皇の愛した琵琶「絃上」に肖った物。元は父親の商売道具だったが、実の娘を売り飛ばそうとした報いを受けた末に、その娘――――鳴女に拾われ、彼女の一部となった。他人はぞんざいに扱うが、道具は大切にする鳴女の事はかなり気に入っている模様。

闇黒の使徒

ギエピーッ！

「はぁあああああっ！」

『クォォォ……ッ！』

鬼殺隊の一般隊士が一人――――尾崎（おざき） 日紗子（ひさこ）が、冷凍コンテナから逃げ出したクレベースに斬り掛かる。彼女の呼吸は「炎」なので、こおりタイプのクレベースには通りがいい。

とは言え、防御が馬鹿高いクレベースのHPを削るのは、効果抜群でも至難の業だ。さっきから何度も型を叩き込んでいるのだが、一向に弱る様子が無い事がそれを示しているだろう。

しかし、退く訳にはいかない。

「ひぅぅぅ……！」

「大丈夫よ！　お姉ちゃんが、絶対に守ってあげるから！」

彼女の後ろには、親と逸れた子供がいるのだから。

『カォオオオッ！』

そんな二人目掛けて、クレベースが「スターゲイジー」という水の魚群を放つ技を繰り出して来た。ロックブラストなどと同じ連続攻撃であり、威力もそこそこある。ポケモンの相性は一方的ではなく相対的なので、炎の呼吸を使う尾崎にとっては手痛い攻撃である。

「炎の呼吸、肆ノ型「盛炎のうねり」！」

通す訳にはいかないので、尾崎は炎の壁のような剣技で攻撃を防いだ。それでもやはり弱点なので防ぎ切れず、何発か当たってしまっている。今まで蓄積したダメージも含めて、尾崎は思わず膝を着いた。

『コォオッ！』

「くっ……!?」

と、動けぬ尾崎に向かって、クレベースが圧し掛かりを仕掛けて来た。麻痺状態云々の前に、あれを食らったらぺっちゃんこカン・カンだろう。今すぐ避けねば死

ぬ……が、身体は動かない。全長６メートルの巨体が、影を差しながらゆっくりと落ちて来る。これは向こうが遅いのではなく、尾崎の身体が死を覚悟してしまったからだろう。

「アカネちゃん、「コズミックパンチ」！」『オリャーッ！』

『カォオオオッ!?』

だが、クレベースの巨体が着弾する事はなかった。横から割り込んで来た、やたら強そうなピッピ（♀）に殴り飛ばされたからだ。

「大丈夫？」

「あ、ハイ」

さらに、彼女のトレーナーと思しき少女が登場。見た目はピカブイの女主人公だが、髪が青く、瞳が赤い。まるで綾波 レイちゃんである。

「私はアオイ。よろしくね」

「は、はぁ……とにかく、どうもありがとう」

「良いって良いって。困った時はお互い様だからさ。それはそれとして――――」

『コァアアアアッ！』

そして、ポケモントレーナーのアオイは、未だに倒れないどころか再び圧し掛かりを繰り出して来たクレベースを睨み付け、

「それ！」『コァッ!?』

プレミアボールを投げ付けた。直ぐに抜け出されてしまうが、真の狙いはボールinによる空白時間。

「はぁっ！」『カオッ！』

元に戻った瞬間を狙って、アオイが顔面パンチを食らわせる。鋼より硬いという氷が砕けた。

『クォオオオオオッ！』

「うぬぅ……つぇあっ！」

『カギャアアアアッ!?』

さらに、怒ったクレベースの捨て身タックルを正面から受け止め、パワーリフトを決めた。あの巨大な氷塊を持ち上げて投げ飛ばすとは、流石は超マサラ人。地力が違い過ぎる。

「さて、あなたはその子を守ってあげて。私が〝元凶〟をブッ飛ばしてやるからさ」
「う、うん、分かった……！」
　この世界における鬼殺隊は「無理せず生き延びる」事がモットー。クレベース以前にもバンギラスやゴローニャなど、相性の悪いポケモンと連戦が続き、体力的にも限界に近い事は分かっていたので、尾崎は素直にアオイの提案に乗った。
「まだ行ける」は「もう危ない」。戦場において、足手纏いは最大の敵なのだ。
「さてと……」
　尾崎が子供を連れて撤退したのを見届けたアオイは、〝元凶〟の佇むスカイツリーの方を見上げ、
「行くよ、ハヤテ！」『ホォグルドォッ！』
　オニドリルの特異進化形態であるオニステルに跨り、飛翔するのだった。
◆◆◆◆◆◆◆
　やぁ、皆、こんばんにちは。
　私の名前はアオイ・シズナ。でも名前で呼ばれるのは嫌だから苗字のアオイで呼んでね。

ちなみに、見た目はピカブイの女主人公の色違いだけど、中身は転移者かつ憑依者で、本職はロケット団の裏番長（工作員とも言う）だよ。胸に輝く「トキワ・コンツェルン（TK）」のバッチを見たまえ。

実はこれ、ロケット団の「R」を捩った物なんだよね。内部に廉価版のグリーンバッチが仕込んでるから、奪ったポケモンもコントロール出来る、ロケット団員の必須アイテムなんだよねぇ。

さて、そんな悪の女主人公である私だが――――何なんだろうね、この状況？

確か一番新しい記憶では、あの性根の腐り切ったポリゴンZのダークバージョンのせいで致命傷を負い、意識を失った筈なんだけど。ここはもしかして死後の世界とかだろうか？

まぁ、地獄絵図ではあるけれども。そこら中にポケモンやモンハンのモンスターが溢れ返ってるし、それに伴って東京は壊滅状態だし。

しかし、何か鬼太郎や鬼滅のキャラクターみたいなのもいるから、死に瀕して世界線を跨いで別の世界に転移してしまったのかもしれない。それなら何で傷まで癒

えてるんだって話だが、気にしたら負けかも。
そんな事より、この騒動の元凶である。チラッと見えたが、あの人ロケット団に成りすましてた美人スパイの人じゃん。ついでにシルフカンパニーをロケット団の代わりに襲ったスマイル団の団長さんでもあるし。
あの時は特に何もせず撤退して行ったけど、世界を跨いで悪事を成すとは。まるでサカキ様じゃないか。
だが、それをしていいのはレインボーロケット団、つまり私たちのサカキ様のみ。お前なんぞお呼びじゃないんだよ、メタモン顔め！
という事で、さっそく空から強襲しようかと思ったのだが、
『マァントォオオッ！』
『ドラァアアアンッ！』
『ピジョォオヴァヴッ！』
前方からカイリュー、ヤドラン、ピジョンが向かって来た。ヤドランが飛んでいるのは違和感があるが、メガヤドラン状態だから、まぁ良いか。敵対するなら迎撃するのみ！

『ギュァアアアアアアアアッ！』

『『プギャーッ！』』

だが、戦う前に退場してしまった。

「青電主、ライゼクス……！」

ヒクイドリを凶悪にしたような顔、昆虫の翅を思わせる翼、そして青白い電光。間違いない。「空の悪漢」にして「ライトニングリヴォルト」の異名を持つ特殊個体、「青電主ライゼクス」だ。只でさえ凶暴なライゼクスの中でも特に凶悪な能力を持つ、最強最悪の二つ名個体である。

おそらく、さっきカイリューたちを吹き飛ばしたのは、青電主の必殺技「ライトニングブレード」だろう。鶏冠に纏った電撃の大剣でぶった切る、ド派手な攻撃だ。流石は〝影だけを残して消却される〟威力。空棲系のモンスターや、でんきタイプが弱点や等倍のポケモンでは相手にならない。

それはつまり、今の私は超ピンチという事である。あれを使うって事は、既に「青電荷状態」になってるだろうからな。

『キュガァアアアアッ！』

さっそくライゼクスが無数の電磁球を放って来る。あれを浴びるとライゼクスに引き寄せられ、その後に必殺のライトニングブレードを食らう破目になる。

「アキト、「まもる」！　そしてメガシンカ！」

『ブゥゥゥン！』

なので、私はスピアーのアキトを繰り出して、守るで防ぎつつメガシンカさせた。

ライゼクスは元々リオレウス並みの飛行能力を持っている上に、青電主は鶏冠を破壊しないと目晦ましが効かない。だから、速攻アタッカーのメガアキトでゲキガンパンチを食らわせて叩き折ってやるのだ。

『ギャォオオオッ！』『ブヴゥゥウウウン！』

電磁球を放ち逃げ道を防ぎつつ激しい攻撃を仕掛けて来るライゼクスに対して、回避と守りを交互に繰り返して隙を伺い毒突きで頭を狙うアキト。大きさがあまりに違う為、完全に羽虫の抵抗だが、毒を伴う攻撃なので蜂の一刺しでもある。このまま毒状態まで持って行きたい所だが、

『ブブブブッ！』

『グゥゥ……キュガァアアアッ！』

『ビィービィー!?』

鶏冠は破壊出来たものの、代わりに攻撃の終わり様に電磁球を食らってしまった。マズい。このままでは特に意味の無い暴力がアキトを襲う。ならば！

「アキト、「とんぼがえり」！」『ブゥウウン！』

何かされる前に攻撃するまでだ！

蜻蛉返りは高速で突撃し、その反動で手持ちに戻る交代技。あの巨体に突貫なんて自殺行為だが、ライトニングブレードを食らうよかマシである。それに鶏冠が壊れたのなら、最早遠慮はいらない。

「ハヤテ、「ねこにこばん」！」『ホグルドァッ！』

『ギャオッ!?』

ウチのハヤテが使う猫に小判は特別なのだ。何せフラッシュの効果も付いて来るからな。閃光を食らっても墜落しないのは凄いが、そういう問題ではない。

「ユウキ、「めらめらバーン」！」『ブッブイッ！』

『グギィィッ！』

そして、ライゼクスの目が眩んでいる間に、アキトと交代で飛び出した相棒イー

ブイのユウキがめらめらバーンを食らわせる。確定で火傷（というか炎やられ）にさせる技。モンハン世界のモンスターは状態異常が時間経過で解除されるし、ライゼクスも既に解毒しているから、ある意味で丁度良いだろう。物理ダメージも軽減出来るし。

「よし、戻ってユウキ！　行け、アキト！　「どくづき」！　ハヤテも「ねこにこばん」！」

さらに、ユウキが落下する前にアキトと交代し、ハヤテと協力しつつ攻め立てる。火傷が治癒したタイミングで上手く毒状態にも出来た。これは中々良い流れである。

『……グギャアヴォオオッ！』

すると、苛立ったライゼクスが、色々と行程をすっ飛ばしてライトニングブレードを放って来た。狙いなんぞ有って無いような物だが、偶然にも私とハヤテの方に振り下ろされる。こういう事故が怖いんだよ、モンハンのモンスターは！

「ハヤテ、「ステルスバード」！　アキト、お願い！」『ブゥウウン！』

騎乗状態では躱せないだろうから、私はハヤテにステルスバードを指示して、自

分はアキトへ飛び付いた。ステルスバードはひこうタイプも加わった「ゴーストダイブ」で、異空間に回避しながら攻撃出来る素晴らしい技である。おかげでライトニングブレードを躱して、ライゼクスに手痛いダメージを与えた。

しかし、そこはG級の特殊個体。そう簡単には落とされない。ウチの面子、レベル90台の歴戦王ばっかりの筈なんだけど。二つ名個体は化け物か!?

『ギャォオオオッ！』

と、怒り狂ったライゼクスが、半狂乱になりながら飛び掛かって来た。まだ目が見えてないので、普通に破れかぶれだけど、その巨体で自棄になられるのはヤバいって！

「このっ……！」

『ジュラァアアア！』

『グギャッ!?』

だが、何処からともなく現れた何かが、怒れるライゼクスを吹き飛ばした。既にダメージが蓄積した事も相俟って、今度こそ墜落し、二度と飛翔して来る事は無かった。

「虹色の蛇……？」

そして、脇に目をやれば、ムゲンダイナを超える長大な身体と虹色の美しい鱗を持つ、空を舞う大蛇が。羽も空気袋も無いのに飛ぶとは、まるでハクリューのようだ。

さらに、日本昔ばなしよろしく、大蛇の上に跨る一人の子供。エーテル財団のそれと似ているが、より重厚な団員服に身を包む、私と同い年くらいの少年（？）。

この子は一体……？

「大丈夫？」

すると、その謎の子供が話し掛けて来た。声が妙に高いが――――、

「えっと、君は？」

「ボクはボブ。「ネオ・ボランティア」のボブだよ」

まさかのボブだった。これは、そういうアレなのかな。深入りはしないけど。ネオ・ボランティアとか、エーテル財団みたいな組織名出て来たし。

ただ、その虹色の大蛇は気になる。ポケモンなのか、それは？

「えっと、そのポケモンは？」

「この子は「ユルングルム」。ティアーザ地方の伝説のポケモンの1匹だよ。この子に導かれて、ボクはこの世界に来たんだ。キミもそうなの？」

「ええっと……」

待って、情報量が多い。

確かティアーザ地方って、現実でいう所のオーストラリア大陸の事だよね。何でも自然豊かで珍しいポケモンが沢山いるが、仄暗い歴史と前科持ちが蔓延る、意外とダークな地方なんだとか。別名も「暗黒大陸」だし。アポロさんがそんな事を言ってた気がする。

そんな犯罪天国みたいな地方の伝説のポケモンなのだから、当然凄まじい力をお持ちなのだろう。何かオセアニア神話の中に、似たような名前の蛇神がいたから、こいつは善玉寄りかな？

ともかく、伝説のポケモンに認められるような子が居るのは心強い。元凶の人は確実に強いだろうからね。さっきのライゼクス戦で思い知ったけど、やっぱり手数の多さは大事よ、うん。

「まぁ、そんな所ね。それより、君はどうするつもりなのかな？」

「――――――〝あの人〟を止めに行く。〝あの人〟には色々と言いたい事はあるけど、お世話になったのは確かだから」

そう言って、ボブはスカイツリーの方を複雑な表情で見据えた。ようするに、目的は同じって事か。ならばここは、

「なら、一緒に行かない？　私もあいつに用があるし」

「うん、分かった！　よろしくね」

「あ、ハイ」

あーん、眩しい。その素直さは目に毒だわー。

「じゃあ、行きますか！」「おーっ！」

そして、この騒動を鎮めるべく、私たちは元凶の待つスカイツリーへ向かった。

「……」

空を行く赫い凶星や、地を這いずる四つ目の赤子を横目に。

◆ギエピー

穴久保版ポケットモンスターの主役ポケモン。

色々とぶっ飛んだ内容の穴久保版ポケットモンスター出身なだけあって、こいつもかなりハッチャケており、下品で怪力で金に汚いという、ピッピにあるまじき特徴を持つ。

こいつのせいでピカチュウに続く「ピッピアイドル化計画」は頓挫したと言ってもいいが、この漫画のおかげでポケモンの認知度は上がったとも言える（何せアニポケが自粛させられた時も元気に連載していた）。ついでに、後の「タマゴグループ」や「コンテスト」、「まるころ」のコンボ攻撃など、先見の明とも言える概念を次々と叩き出したりもしている。

まぁ、ギエピーと言えば「ミュウスリー」という人が大半だろうが。顔だけピッピで身体はミュウツーのまま「これでボクもミュウスリーだッピ！」と言い放った1コマは、幼心に強烈な印象を植え付けた事だろう。

ちなみに、ポケモン版の両津勘吉みたいなキャラをしているだけあって、腕っぷしは確かであり、ポケモンリーグ制覇どころか伝説のポケモンすら倒すという、アニポケのピカチュウですら成し遂げられなかった偉業を打ち立てていたりする。流

石はピッピだッピ。

東の都の眠れない夜

???：「お前は失敗作だ。デュミナスだ！」

東京都墨田区、夕暮れのスカイツリー。

『来たか……』

『こんにちは……いえ、もうこんばんはね、何処かの誰かさん』

ダース・マリアボラスは、空から降り立つ赫い凶星――――フル装備状態の猫娘を見詰め、

『お疲れさん』

『……問答無用か！』

いきなり影の塊を撃ち出して来た。着弾と同時に空間が圧縮され、文字通り炸裂範囲内にあった物体を消滅させる。まるで小さなブラックホールである。あれが直撃したらと思うと、ぞっとする。

知る人が見れば、それはゴーストタイプ技の「シャドーボール」だと分かるのだが、威力があまりにも違い過ぎる。そこらのポケモンが出せるパワーではない。

それこそ、特攻に長けた伝説のポケモンでも無ければ。

『アンタは一体――――』

「やっぱり、ポケモンなんですね、あなたは」『あぶぅぅぅ！』

と、壁をハイハイでよじ登って来た四つ目の巨大な赤ん坊と、その〝母親〟が颯爽と現れる。ボロボロの魔法使いのローブに調布市立中学校の制服という、異色な組み合わせをした魔法少女――――犬山 真名の再登場である。その身に纏う闇は以前名無しの下へ訪れた頃よりも色濃く、ヘドロのように濁り渦巻いており、見ているだけで臭いまで伝わって来る。まさに吐き気を催す邪悪、悪に限界のない女だ。

「久しぶりです、ねこ姉さん」

『……アンタも一体どうしちゃったのよ』

「ねこ姉さんもあんまり他人の事は言えないと思いますよ？」

『そりゃそうだけど……』

あまりにもあんまりな変わり様に猫娘は狼狽するが、確かに真名の言う通り、彼女自身も大分様変わりしている。どう考えても藪蛇なので、今は目の前の敵に集中するとしよう。

「颯爽登場、銀河美少年！」「違いますよ!?」

『ホォグルドォ！』『ジュラァアアアッ！』

さらに、アオイとボブのポケモン組も登場。現状、最も強いであろう戦力がスカイツリーに終結した。

『ウフフフ、いいねぇ。退屈してた所だし、丁度良いわよ、うんうんうん♪』

しかし、過剰戦力とも言える彼女たちを目の前にして、マリアボラスは慌てず騒がず、余裕たっぷりに嘲笑ってみせた。そののっぺりした笑みに、絶対の自信を感じさせる。とてもムカつくドヤ顔である。

『なら、それに相応しい舞台を用意しましょうか！』

その上、指パッチン１つでスカイツリーを青い結晶が覆い尽くし、まるで花開くように決戦の舞台を形成する。エンティ（CV：竹中 直人）が根城にした、あの結晶塔そっくりの様相だ。

『ついでに、オーディエンスもねぇ！』

『コォォォォ……！』『ガヴォオオッ！』『ヒュルァアッ！』『バヴォォオオッ！』『バディルバディル……！』『フォフォフォフォ』『シュィイイン！』『カォオオオン！』『ギィガァヴヴヴッ！』『キシャアアヴォッ！』

しかも、もう1つのパッチンでウルトラホールを形成。空間をガラスのように叩き割り、マイナスエネルギーが形を成すように、ウツロイド、マッシブーン、フローチェ、デンジュモク、ツンデツンデ、ズガドーン、カミツルギ、テッカグヤ、アクジキング、アーゴヨンが次々と現れた。

ちなみに、全員色違いである。どうやらマリアボラスは色違いコレクターのようだ。

「……貴女は一体、何なんですか!?　何でこんな事をするんです!?」

そんな伝説をも凌駕する異常事態を前に、ボブが叫ぶ。

『何故かって？　〝暇潰し〟に決まってるじゃない』

「なっ!?」

『人間だって同じような事をしてるでしょう？　いや、人間だけじゃない。虫け

らでさえ復讐するし、脊椎動物なら大体が〝遊び〟感覚で虐殺だってする。ほら、何もおかしい事じゃない。自分たちだけが理不尽な目に遭わないと思うのは大いなる間違いよ、人間さん？　それとも、分かりやすい理由が無いと気が済まないのかしら？　全く以て、ブゥァカじゃねぇのぉ!?　キャハハハハハハ！』

そう、動物は生きる目的以外でも他の生物を害する。肉体的にではなく、精神面をケアする為に。知恵ある悪魔は誰の心にも存在する、謂わば生命体としての本能。それを殊更気にする人間が狂っているだけ。

結局、最後は誰しも自分さえ良ければ、それでいいのだから……。

『そもそも、私が誰かって？　言ったでしょ、私の名はダース・マリアボラス。だが、それは数ある顔の1つに過ぎない。ある時は美人受付嬢、ある時は人気の駅員さん、またある時はX獣を狩る夜襲部隊！　しかして、その正体は――――』

そして、ボブの質問に応えるかの如く、ダース・マリアボラスが遂にその正体を顕わにする。

正中線を境に左右で白と黒に分かれた、ダークヒーロー染みた甲殻に身を包む、人型知的生命体。各所に配された宝玉や触手状の髪の毛が、音を奏でるように輝

き、見る者を圧倒する。

「お前、あの時夢に出て来た……」

美しくも不気味で、邪悪の権化とでも言うべきその姿に、アオイは見覚えがあった。

見た者を永遠の闇に捉え、最終的にダークライへ変えてしまう、覚める事の無い悪夢の登場人物にそっくりだったのである。

『へぇ……〝マガツキの悪夢〟から生還出来るなんて、君も化け物だねぇ。……そう、その通り！　私は這い寄る混沌、悪の権化！　邪神「ナイラーア」よ！　ギャハハハハハ、ヴフハハハハハハハハッ！》

そう、それはティアーザ地方の闇を統べる一族の一柱、外なる神ニャルラトホテプと似たような性質を持つポケモン、邪神「ナイラーア」だ。

◆ナイラーア

・分類：げどうポケモン

・タイプ：あく/じめん

・レベル：不明

・性別：不明
・種族値：HP：113　A：97　B：103　C：151　D：103　S：113　合計：680
・図鑑説明
外宇宙から来たと言われる邪悪なポケモン。最強最悪の邪神「アザスト」の忠実な僕と嘯きつつも全てを見下すエゴイストで、誰かが苦しみのたうつ姿を見るのが趣味という、正真正銘の外道。
その実、中身は空っぽ同然であり、〝その時代で最も邪悪な人間の魂〟を基本人格として取り込み、行動する習性を持つ。
何時だって、本当の悪魔は人間なのだ。
《ギャヒャハハハハハッ！》
『来るわよ！』
ダース・マリアボラス改めナイラーアの指示で、ウルトラビーストたちが一斉に動き出す。
マッシブーン、フェローチェ、アーゴヨンの虫型組はアオイとその相棒へ。

ツンデツンデ、ウツロイドの鉱物組はボブとユルングルムへ。
デンジュモク、カミツルギ、テッカグヤの植物組は真名と四つ目の赤ん坊へ。
アクジキング、ズガドーンの悪霊組は、
「――――――くっ、バレたか！」
亜空間から奇襲を仕掛けようとしていた、抜刀状態の大空 つばめへ、それぞれ攻撃を仕掛ける。
《イヒャハハハハハハハハ！》
『掛かって来なさい、この悪魔め！』
では、肝心要のナイラーアの相手はと言うと……モチのロン、猫娘である。たった一人で天地を統べる戦闘能力に身を包んだ、最強のワンマンアーミーたる彼女を〝面白い玩具〟として認識し、襲い掛かったのだ。
所詮、ナイラーアにとって、この諍いは単なる暇潰しにしてお遊び。大した意味も無い、理不尽極まるレクリエーションである。
《ギヒハハ、アヒャハハッ！》
『日本妖怪を舐めないでよね！』

だが、理不尽に抗ってこそ生物。降り掛かって来る火の粉は、例えそれが隕石だろうと撥ね除けてこその人間だ。猫娘の身体には、その血が半分は流れている。
だからこそ、全力で戦う。今も何処かで鬼太郎が見てくれていると信じて。
（アタシはアナタに守られたい訳でも、守りたい訳でもない！　一緒に肩を並べて戦いたいのよ！）
それが猫娘にとっての全てだから。
何故こんな異常事態に鬼太郎がやって来ないのかなど、この際どうでも良い。
むしろ、彼の手を借りずに戦果を持ち帰って、認めてもらいたいとすら思っている。決して正義感だけで戦っている訳ではないのである。
その為にも、
『死ねぇえええええっ！』
今ここに、東京最後の日を飾る夜戦が始まる……！

◆ナイラーア

・分類：げどうポケモン
・タイプ：あく/じめん
・性別：不明
・種族値
HP：113
こうげき：97
ぼうぎょ：103
とくこう：151
とくぼう：103
すばやさ：113
・図鑑説明
外宇宙から来た、最強最悪の邪神「アザスト」の忠実な僕と嘯く、邪悪なポケモン。誰かの生涯を破滅させ藻掻き苦しむ様を至上の喜びとする正真正銘の外道で、大地の力を巧みに操り悪逆非道の限りを尽くす。必殺技は「せんのむぼう」と「はいずるこんとん」。

姿を自由自在に変える能力があり、幾つもの顔を持って社会の闇に紛れて人を嘲笑う存在と言われているが、実際の中身は完全なる虚無で、〝最も邪悪な人間の魂〟を基本人格として取り込み行動する。

そう、本当の悪魔はナイラーアではなく、それを操る人間なのである。

それぞれの戦い

何だかんだで１００話。ここまで続くとは思わなかったナァ……。

『ガヴォルァアアッ！』『ヒュルリリリッ！』『ギシャアアアヴォッ！』
マッシブーンとフェローチェが地上から、アーゴヨンが空中からアオイを攻め立てる。
「行くよ皆！」
『オリャッピ！』『ブイ！』『ホグルドォッ！』『フラァリリリッ！』『クァアアン！』『ブゥゥウウン！』
しかし、アオイは慌てず騒がず、全ての手持ちポケモン（相棒ピッピ（NN：アカネ）、相棒イーブイ（NN：ユウキ）、オニステル（NN：ハヤテ）、オーレン種のラフレシア（NN：ヒナゲシ）、オーレン種のニドクイン（NN：アンズ）、メガスピアー（NN：アキト））を繰り出した。

彼女は超マサラ人にして憑依転生者。潜り抜けて来た修羅場の数も質も違う。伝説のポケモンとの連戦や多勢に無勢だった事も、これが初めてではない。突如飛来したガラルフリーザーに殺され掛け、マサラ人の紅一点に何度も勝負を挑まれ、通常色の超獣軍団に袋叩きにされた経験は、常人では得難い物だ。

だからこそ、アオイは自信を持って全力をぶつけられる。6体同時運用という人間離れした業も、自分であれば可能だと確信して、全てのポケモンを繰り出したのである。

そもそも、全員が漏れなくレベル90台なので、伝説とは言え、ぽっと出の野生ポケモンに負ける理由が無かろう。

「ヒナゲシちゃん、「ムーンフォース」！　アンズちゃん、「りゅうのはどう」！」

『フラワーッ！』『クィインン！』

『ヒュルリリッ……！』

先ずは動きの素早いフェローチェを遠距離攻撃で牽制し、

「ハヤテ、「ねこにこばん」！　アキト、「げきりん」！」

『ホグルォッ！』『キキュィイイッ！』

『ギギャアアッ!?』
空を飛び回るアーゴヨンに目晦ましをしつつ的確に弱点を突き、
「ユウキ、「めらめらバーン」！　アカネちゃん、「ゆびをふる」！」
『ブッブゥイ！』『スラァアアシュ！』
『ガヴォルァアアッ！』
力任せに突っ込んで来るマッシブーンを炎の壁と空気の刃（指を振るで発動した「エアスラッシュ」）で逆に押し返した。
だが、それくらいで終わる程、伝説のポケモンは生易しくは無い。
『ギシャアアアッ！』
『ヒュルリリリッ！』
『ガヴォオオオッ！』
アーゴヨンはヘドロウェーブや大文字を撒き散らし、フェローチェが華麗な飛び膝蹴りを披露して、マッシブーンは吸血で体力の回復を図る。この反撃でメガスピアー、オーレンラフレシアが落とされ、相棒イーブイは瀕死寸前の大ダメージを負った。

しかし、これは庇ったり、流れ弾が偶然当たってしまった結果によるもの。一気に不利になった、とは言い難い。

何故なら、しなければいけない指示の数が実質半分になったのだから。

『ヒュルリィッ！』

「ハヤテ、「ステルスバード」からの「ねこにこばん」！」

『ホグルドォァ！』『ビギャッ!?』

アーゴヨンの猛攻から逃れる為に影に潜んだオニステルが、突如フェローチェの前に現れ、再び飛び膝蹴りを放とうとしていた彼女の目を眩ませた。

当然、技は失敗し、フェローチェは自爆する形で大ダメージを受け、

「アンズちゃん、「だいちのちから」！」

『クァアアン！』『ビュリリリィッ！』

オーレンニドクインの大地の力による突き上げにより、止めを刺された。

そこへ図らずも手隙となったアーゴヨンが龍星群で狙撃しようとするが、

「フン！」

『ギッ!?　……ゴァアアッ！』

「甘い！　アカネちゃん、「コズミックパンチ」！」
『オラーッピ！』『ゴギャアアッ！』
ボールゲットキャンセルで動きを止められ、出た瞬間を相棒ピッピにぶん殴られて、あえなく再起不能（リタイア）に。
「ユウキ、「ブイブイブレイク」！」
『ブッブゥ……イイイッ！』『グヴォォォ……ガヴォオオッ！』
「させるかぁっ！」『ヴソォオオオッ!?』
さらに、最後の力を振り絞った相棒イーブイのブイブイブレイクがマッシブーンを襲い、反撃する前にアオイの拳でKOされた。
そう、トレーナーがトリを飾るのだ。
いや、その流れはおかしい……かもしれないが、それこそが超マサラ人である。
ポケモン世界の田舎者は化け物か。
◆◆◆◆◆◆
「シバイヌキ、「リーフブレード」！」『イヌキライィッ！』
『フォォォ……キャアアアアッ！』

「……っ、「まもる」だ、シバイヌキ！　そして戻れ！　……頼むよ、パイちゃん！」『ダイパァアアッ！』

一方、ボブはそんな器用な真似は出来ないので、ツンデツンデをユルングルムに任せつつ、高速かつ不規則に飛び回るウツロイドにシングルバトルを挑んでいた。

幾ら改心し、ポケモンにも懐かれているが、最近まで〝一緒に戦う〟という事を知らずに生きて来たボブでは、ポケモンたちのポテンシャルを十全に発揮出来ているとは言えなかった。致命的なまでに経験不足なのだ。

「……ごめん、パイちゃん！　止めだ、ガニマスター！　「アクアブレイク」！」『ガニマータァッ！』『キキャアアアアアアッ!?』

だが、未熟者なりに一生懸命頑張っているのが分かっているからこそ、ポケモンたちは共に戦うのである。今のボブであれば、命を懸けても良いと。その心意気になら従えると。

『ジュラァアアアッ！』『バディルバディル……！』

そして、ユルングルムとツンデツンデに至っては、勝負にすらなっていない。ユルングルムはディアルガやパルキアと同格の禁止伝説級であるのに対して、ツンデ

ツンデは準伝説系だ。ついでに言えば、みず/ドラゴンの特殊アタッカーに、特殊方面が大して硬くない奴が勝てる筈もなかろう。

結果は蹂躙。分離と合体を繰り返すツンデツンデの変則的な攻撃も、蛇のように素早くドラゴンのように硬いユルングルムには大して通じていなかった。流石は破壊と創造の神。

むろん、無傷とは言えないが、自己再生でどうにでもなるので、ダメージレース的に最初から勝ち目は無かったと言える。まさしく種族値の暴力……。

「もうこいつ1人で良いんじゃない？」は禁句。

「ありがとね、皆！　ユルングルムも！」

ともあれ、ボブが素直にお礼を言える良い子に育ったのは、素晴らしい事である。おめでとう。

◆◆◆◆◆◆

『デンショォオオクゥッ！』

デンジュモクが金平糖のような頭部が火花を散らせながら発光し、断線したコンセントを思わせる手から稲妻を放つ。完全な興奮状態であり、特攻173にブース

トが掛かった放電攻撃は、控えめに言っても雷を連打されているのと変わり無い。着弾点は凶悪な電圧により弾け、痕跡ごと消失する。生身の生き物が喰らえば一溜りもないだろう。

『おぎゃあああああっ！』

しかし、四ツ目の赤ん坊は、ちょっと嫌そうな顔をするだけで、大したダメージは受けていなかった。精々煤が付くぐらいにしか効いていない。

まぁ、これも当然の結果だろう。彼は名無し本来の姿にして、偉大なる魔女の加護を受けた、人でも妖怪でもないモノ。鳴女に火達磨にされていた頃とは違うのだ。

『あぶっ！』「ありがとね」

そんな事よりも、彼にとっては母なる魔女――――犬山 真名に類が及ばないかが大事である。

絶望に打ちひしがれ、独り泣いていた所に現れて、救いの手を差し伸べてくれたのは、己が呪った彼女だった。

だが、真名は伝説の悪魔王と恐ろしき黒魔女に師事を得て、自分では到底抗えぬ強大な魔法少女となっており、誘われるがまま、その手を取った。

そして、息子としての名を授かり、身も心も魂さえも彼女に捧げる事で、この世に実体を持って顕現する事が出来た。

それを〝切れる事のない絆で結ばれた親子（かぞく）〟と取るか〝契約に縛られた使い魔（どれい）〟と取るかは人それぞれだが、少なくとも彼にとっては前者であった。何故なら、二人は零余子とノームと同じく、文字通りの一心同体なのだから。

『カヴォオオッ！』『シュキィイイッ！』『コァアアアアン！』

しかし、そんなの関係ねぇウルトラビーストたちは、容赦なく一斉に攻撃を仕掛けて来た。デンジュモクの雷が、カミツルギのリーフブレードが、テッカグヤのヘビーボンバーが、二人を襲う。

「エロイムエロッサイム、我は訴え求めたり……来たれ、リリス、ベルゼブブ」

『呼ばれて飛び出て！』『ブンブブン！』

そんなウルトラビーストたちに対して、真名は使い魔を召喚して対応した。使い魔と言っても、彼女が使役するのは師匠のような「白悪魔」ではなく、いざとなったらこちらを裏切り兼ねない「黒悪魔」の類であり、もう1人の師匠の影響か、七大魔王やソロモン72などのキリスト教系統の物が多い。

だが、有効範囲が狭い分、顕現した個体は師匠が呼び出す者よりも強力で、魔術頼りで身体能力はさっぱりだったリリスやベルゼブブも、超獣相手に肉弾戦を行える程度にはパワーアップしている。

「出でよ、ケルベロス、アムドゥスキアス、マルコシアス――――」

さらに、膨大な魔力により、一度に最大で12体の悪魔を呼び出せる為、手数の多さに関しては真名の右に出る者はいないだろう（※鳴女一派は除く）。魔王や邪神の類が12体も現れるのだから、相手取る方は溜まった物ではない。デスタムーアやオルゴデミーラにダークドレアムなどのボスキャラに取り囲まれたような物である。

『シュキィイイン！』

「うるさい」

『キラレェエエエ!?』

そして、ラスボスたちを力尽くで使役している真名本人も当然強い。少なくとも、隙を突いて辻斬りしようとしたカミツルギを、魔法のステッキ1本で伸してしまう程度には。

「ヤッチマイナー」
『『ギャース！』』
こうして、ウルトラビーストたちは数の暴力に圧倒され、あっという間に完封されるのであった……。
◆◆◆◆◆◆◆
『フォフォフォフォ！』『ギィガァアヴヴ！』
一方、大空つばめだけは、数の暴力に晒されていた。道化師のように不規則な特殊攻撃を繰り出してくるズガドーン、何でも飲み込む大口で只管に突っ込んで来るアクジキングという、中々に面倒な組み合わせだ。
どちらかを攻撃しようとすると、片方に不意打ちされる。
さらに、少しでも隙を晒すと挟撃までされる。これが怖い。
「……フン！」
だが、つばめは焦ってはいなかった。
住民の安否という後顧の憂いは、既に子供たちが排除している。後は殺されずに生き残るだけ、それだけである。何も気にせず戦える事の、何と喜ばしい事か。

そもそも、魑魅魍魎の類と人間とでは、圧倒的な差がある。鬼しろ妖怪にしろポケモンにしろ、死ねばそれで終わりという脆弱な人間は、何時だって不利なのだ。

しかし、化け物を殺すのもまた、何時だって人間である。

例え我が身が名状し難い悍ましいナニカになっていたとしても、人間だと思っているのが自分一人なのだとしても、つばめは己が人間なのだと確信している。

人間は魂の、心の、意志の生き物なのだから。

――――――自らを脅かす外敵を排除する。

この果てしない恨みつらみがある限り、つばめは本当の悪魔でいられる。その為だったら、何だってやれる。

だからこそ、

「宙の呼吸、弐ノ型！　「虫食いの穴」！」

『ギガヴォッ!?』

こんな人間離れした技も使える。

宙の呼吸は空間の妙技。「虫食いの穴」は、文字通りワームホールとなって、つばめの〝突き〟を、空間転移によって送り出し、死角からの一撃として放つのであ

る。

『フォフォフォフォフォ！』

「宙の呼吸、参ノ型！　「事象の地平面」！」

『ブフォッ!?』

そして、怯んだアクジキングの穴を埋めようと襲い掛かって来たズガドーンには、「事象の地平面」を食らわせる。空間を一文字に切り裂き、光さえも脱出不可能な特異点を発生させ、崩壊と同時に〝固体化した光〟という有り得ない謎物質を散弾の如く放つ技だ。この物質はそれ自体が特異点であり、物理的に防ぐ不可能な現象のような物で、回避出来なければ確実に身体を切り裂かれる。

「これで終わりだ！　宙の呼吸、壱ノ型！　「宇宙の灯台」！」

さらに、2匹がたたらを踏み、一直線に並んだ所で、つばめの壱ノ型が炸裂する。これは参ノ型とは逆に指向性を持たせた放射線を斬撃として飛ばす技で、謂わば〝吐き出す〟攻撃であり、軸線上の物体は分子を破壊されて崩壊してしまう。その様は虹色の灯台が立ったように（もしくはたなびくオーロラのように）見える為、この名が付いた。

『グヴヴヴ……』『ズガドド……』

物理的というより概念的な攻撃には、流石の準伝説のポケモンと言えど耐え切れず、宙を見上げるように引っ繰り返った。

まぁ、空間使いによる殺傷力マシマシの攻撃を食らって、原型を留めている方がおかしいのだが……。

ともかく、これでウルトラビーストは全滅した。

『てぁあああああっ！』《ギャァハハハハァ、ヴフハハハハハッ！》

しかし、まだ終わりではない。一番の大物が、未だに健在なのだから。

◆宙の呼吸

大空 つばめの使用する呼吸という名のナニカ。空間使いというだけの事はあり、空間を繋げたり圧縮したり崩壊させたりと、やりたい放題やっている。これらの技は全て「特異点」扱いの為、物理的に防ぐのが不可能という特徴があり、殺されたくなくば避けるしかない。

ちなみに、技名は相対性理論や天文学の用語が由来となっている（特にブラックホールやホワイトホールなどの空間関連が多い）。宇宙までも自由に羽ばたきたいという彼女の内なる願いと、化け物は絶対にぶっ殺してやるという純粋な殺意が反映された結果だろう。

始まりの終わり

？？？：『始まりがある物には何時か終わりが来る』

『キャォオオッ！』

猫娘が怒涛の攻めを展開する。

先ずは翼脚による上下のダブルウィング、振り下ろした翼脚を軸にして蹴たぐりの二連撃、それから尻尾を突き出して地面に突き刺し、ビシュテンゴの如く大回転。

さらに、散魂鉄爪の乱れ引っ掻きからのサマーソルト、最後は翼脚と尻尾によるウルトラハイメガキャノンを発射した。

《アヒャヒャヒャヒャッ！》

だが、そのどれもがナイラーアには通じなかった。上手く躱し、往なし、防いでしまったのだ。伝説のポケモンの癖に守るを覚えてるとか渋い。

《ギヒヒヒヒ、イヒョハハハハハハハッ！》

と、今度はこちらの番だと言わんばかりに、ナイラーアが鐘を鳴らすように頭を揺らしたかと思うと、顔面から無数の鉄面皮を生み出して、嵐の如く撃ち出して来た。

これぞナイラーアの専用じめん技「せんのむぼう」。千を超す無貌を発射してダメージを与える、連続攻撃系の技である。一発一発が40も威力があるので、ゲームで言えば真面に食らうと自爆くらいのダメージを受けてしまう。

むろん、じめんタイプである関係上、高速飛行を可能とするひこうタイプには当たらない。射程は長いが、低空を這うように発射する為、上空は範囲外なのだ。

しかし、ここはゲームではないので、完全な無効化もまた不可能であり、もしも羽休め＝着陸でもしていたらどう足掻いても避けられないし、飛んでいても避けられずに当たってしまえば普通にダメージを受ける。

そして、飛翔しなければ当たってしまうという事は、逃げ道を潰され易いという意味でもある。

《ギャァハハハハァ、ヴフハハハハッ！》

案の定、ナイラーアは第二の専用あくタイプ技「はいずるこんとん」で追撃して

来た。こちらも混沌の闇が這いずるように追いかけて来るのだが、千の無貌と違い、攻撃は上に伸びる。闇の中から芽吹く暗黒の魔の手が、追い縋り、引き摺り下ろすように襲い掛かって来るのである。

『ぐっ！』

これにはさしもの猫娘と言えども避け切れず、叩き落されてしまった。ダメージも相当な物だったようで、上手く起き上る事が出来ない。

《キャハハハハッ！》

さらに、ナイラーアが止めのシャドーボール十連打を放って来る。あれを真面に食らったら、命は無いだろう。

『……キィアアッ！』

だが、猫娘は力を振り絞り、翼を折り畳んで尻尾をピンと伸ばした突撃形態へ移行。バルファルクとマガイマガドの高機動振りっを再現した、凄まじきブレイブバードを繰り出した。それも5連続。ハンターだったらとっくに3乙している。

《グゥフヒヒヒ……！》

しかし、そこは伝説のポケモン。たたらを踏みはしたが、倒れる事は無く、不気

味に笑いながら継戦の構えを取った。まだまだイケるらしい。

『ハァッ！』

《ギヒヒ!?》

すると、このままでは共倒れになると判断した猫娘が、〝奥の手〟を発動する。腕甲に仕込まれた、巨大な鈎爪――――アイスボーンでお馴染みの「クラッチクロー」、その改良版だ。このクラッチクロー改、連結部が翔蟲の糸が使用されており、大型モンスターなら即座に操竜出来る他、小型であれば暫しの間だが完全に拘束する事も可能である。

そして、ナイラーアはどちらかと言うと小型のモンスター。というか、ポケモンは大抵が拘束対象だ。

『はぁあああッ！』《ギヒャホハヒヒッ!?》

完全に身動きを封じられたナイラーアに、猫娘の容赦のない攻撃が浴びせられる。先ずは右ボディーブロー、続いて左と右の膝蹴り、頭突きと来て、翼脚と尻尾で串刺しにして、最後は全火力を零距離でフルバースト。

――――――ピィィィィーッ……！

《ギッ……》

この怒涛の連撃には、流石のナイラーアも反り返るようにしな垂れ、命の鼓動を止めた。

――――――ドクン……ドクン……ドクドクドク……ドッドッドッドッ！

《ギャフハハハハッ！　ヒャッホッハッハッハッハッハッ！》『なっ!?』

……かに思われたが、白銀に輝く人型ボディに巨大な腕のような一対の翼と骨格を思わせる後光を差し、黒いゲル状物質で全身が覆われた、天使とも悪魔とも付かない不気味なオリジンフォルムに形態変化して、クラッチクローの拘束を力尽くで引き千切った。

《キヒャホホホホッ！》

『ギィィ!?』『ガヴォォ！』『ギゲェッ！』

さらに、自らが呼び寄せ、敗退して瀕死となったウルトラビーストたちを、這いずる混沌で次々と取り込み、エレボリアル状態へ移行。迸る邪悪なオーラを無数のシャドーボールとして手当たり次第に発射し、既に瓦礫の山同然の東京都を更地にし始める。

『このぉっ！』「ふざけた真似を……！」「やったれハヤテ！」「頼むよ、ユルングルム！」「この穢らわしい化け物がぁ！」

『あぶぅうう！』『ホグルドァッ！』『ジュラアアッ！』

もちろん、猫娘たちも一斉に攻撃を仕掛けるが、

《イィッヒッヒッヒッハッハッハッ！》

全然堪えないどころか、千の無貌をレボリアル化させた「悪しき煌めきのトラペゾヘドロン」を発動。目や口、手足に耳、鼻など、あらゆる人体の部位を蓮コラ状態にした、混沌極まる凧形二十四面体が津波となって押し寄せる技である。

その圧倒的な威力により、結晶塔は崩壊、猫娘たちは投げ出された。

『ぐっ……！』「ぐぅっ……！」『あぶぅ……！』

これは効く。レボリアルは能力が全て一段階上昇した状態で巨大化する上に、吸

収したウルトラビーストたちにより、今のナイラーアは全能力がＭＡＸまで上がっている。攻撃力も大きさも段違いだ。

「デカくなるのは！」「そっちだけじゃない！」

「ユルングルム、エレボリアル！」「戻れハヤテ！　そして、アカネちゃん、ダイマックス！」

『ジュドラァアアッ！』『ミュヴスリィダッピィィ！』

だが、ポケモンの力で素早く退避していたボブとアオイはまだ健在であり、それぞれユルングルムと相棒ピッピを巨大化させて対抗した。三つ首となり翼の生えたユルングルムがナイラーアに絡み付いてハイドロポンプを零距離で浴びせ、どこか人間めいた姿の相棒ピッピが強化された拳で力任せにぶん殴る。

《ギェァホォオオオオッ！》

『ジュラッ！』『ドピーッ！』

しかし、ナイラーアはそれでも倒れず、這いずる混沌でユルングルムを無理矢理引き剥がし、シャドーボールを拳に込めたデンプシーロールで相棒ピッピごと殴り飛ばして、千の無貌で追撃した。

そして、止めに特大のシャドーボールを放つ。光さえ無に帰す暗黒空間の塊である。食らえば禁止伝説だろうと即死するだろう。

「――――――宙の呼吸、肆ノ型！　「降着円盤」！」

だが、発射直前にナイラーアの右腕に円盤状の闇が発生。輪の中心から光を放ちながら回転し、丸鋸の如く切断した。

これぞ死を告げる肆ノ型。特異点の円盤を発生させ、切断した物同士の因果関係をも断ち切り、最初から無い事が当たり前にしてしまう大技だ。

これを食らった部分はどうあっても再生出来ず、影響の及んでいない部分を抉り取って切り離さなければならないという鬼畜使用だが、〝宙返りしながら放つ〟という技の出だしがある関係上、そもそも隙を突かなければ当てられない、ハイリスクハイリターンな必殺技である。空間転移でこっそり近付いて不意を突いても尚、狙った頚を斬り落とす事が出来ないくらいには命中率が低い。

とは言え、シャドーボールを中断させ、ナイラーアの内部に溜め込んだエネルギーを外へ漏れ出させるという快挙は成した。

後は、それを利用出来る者が扱うのみ。

『……キュァアアアアアッ！』

猫娘が何度も息を吸い込むように、周囲のエネルギーを鎧に取り込んでいく。

「皆、ねこ姉さんに力を！」

『ばぶぅ！』『仕方ないわね！』『持ってけドロボー！』

さらに、重体を引き摺ってでも呼び出した悪魔たちの力を、真名が掻き集めて譲渡する事で、その勢いは加速度的に増した。

それに伴い猫娘の全身が赤紫色の炎で包まれ、やがてウルトラヴァイオレットな人型生命体へと身を変じる。

この形態こそ、猫娘のファイナルモード「神霊現生」。バルファルクの龍気活性やマガイマガドの鬼火と同じような特性であり、自らを現象化させる能力だ。

今の彼女に触れた者は一瞬にして蒸発するであろう。

そう、生きるプラズマとして攻撃し、この世の全てを物質昇華させるという、ある意味で化け物らしさを突き詰めたような技なのである。まさに神霊、まさしく怪物。猫娘を阻める者は、最早存在しない。

『キィイイイッ！』《ギヒヒャホォアッ!?》

煌めく流星群の如く、猫娘がナイラーアを蜂の巣にしていく。宙の呼吸と同じく、触れた瞬間消滅するのだから、防ぎようが無かった。

しかも、こちらはトリッキーさが無い分、純粋に速い。それも目で追えるような物ではなく、気付いた時には終わっていた、というくらいに。

『――――――ハァッ……はぁ……ふぅ……！』

しかし、こんな大技がノーリスクで放てるはずも無く、猫娘は瞬く間に消耗し、ナイラーアをビークインにしたと同時に動きが止まり、輝きも失ってしまった。この技は命を削る技なのだ。

だが、やり遂げた。ここまでされれば、幾ら何でもナイラーアが生き残れる道理は、

《……グフヒヒハハハッ！》

『……ッ、クソがぁ……っ！』

無かったのだが、死なば諸共とばかりに、ナイラーアが最後の這いずる混沌で猫娘の身体を絡め取った。どんなにジェット噴射をしても離れられそうにない。

おそらく、ダイマックスやレボリアルしたポケモンが起こす爆発に巻き込んで、

道連れにするつもりだろう。

『うぐ……！』

「頑張って、ねこ姉さん！」「往生際が悪過ぎる！」「いい加減にしろ！」「さっさとくたばれやゴラァッ！」

口汚く罵倒しつつ真名たちが援護するが、最期の意地なのか、どうしても混沌の束が断ち切れない。くたばり損ないの往生際は何処までも最悪だった。

と、その時。

――――――べべん！

戦場に琵琶の音が鳴り響き、意固地に巻き付いていた這いずる混沌の闇が切り離された。

《……！》

急ぎ離れる猫娘の後姿を悔しそうに睨みつけながら、ナイラーアがゆっくりと仰向けに倒れ、たった独りで大爆発した。跡には何も残らなかった。

何もかもが空っぽな存在であるナイラーアが、本当にこれで死んだかどうかは不明だが……。

ともかく、今は琵琶の音の発生元だが――――言うまでもないだろう。

〝彼女〟である。

『いやぁ、派手にぶっ壊したねぇ。実に爽快、素晴らしい』

何処からともなく、自然発生するように現れる鳴女。強大な魔王を倒した後に、何の前触れも無く悠然と現れるその姿は、まさしく大魔王や大邪神と表現するのが相応しい。

「……出て行くなと言われていただろう。不本意だが、お前は私たちにとっては大事な身なのだから」

そして、鳴女を追うように転移して来たのは、ベアード軍の苦労人、アデル。どうやら、鳴女がここに現れるのは計画には無かった事のようだ。

『知らんなぁ～。私は行きたい時に、思うがままに赴く。私がルールだ』

「えぇ……」

だが、鳴女は最高に自分勝手だった。自由気儘にも程がある。

とは言え、悪い事ばかりではない。

「――――化け物共め！　私は宣告する！　鬼滅の刃の名の下に、鬼殺隊は

貴様らと命ある限り戦うと！」

と、重たい身体に鞭打って、つばめが切っ先を向けて宣戦布告した。ボロボロな姿で、それでも力の限り叫ぶ様は、強大な悪に立ち向かう勇者その物であった。非常に画になる一枚である。

『フ～ン、勝手にすればぁ？　軽く捻ってあげるよ、おばさん』「お前なぁ……」

しかし、鳴女はやっぱり鳴女だった。人間如きと真面に会話する気など、欠片も無かった。

『それじゃ、後片付けはよろしく～♪』「……」

その上、言うだけ言ったらあっさりと帰って行った。何しに来たんだ、こいつは。

ともあれ、事態が収束したのも事実だし、〝後片付け〟が必要なのも真実。変質したポケモンたちが消える事は無いし、離散したモンハンのモンスターたちを呼び戻す術もない。何より更地と化した東京を首都として維持するのは不可能だ。

まさに、やる事が山積み状態である。

だが、ここには世界線を越えた、様々な人材が揃っている。もうすぐ鬼殺隊の面々も駆け付けるだろう。

「……悪いけど、復興を手伝ってくれないかしら、何処かの誰かさんたち？」
クルリと振り返り、そう宣うつばめの笑顔は、全く以て悪びれていなかった。
◆◆◆◆◆◆
――――ここではない何処か、今ではない何時か。
『悪戯が過ぎるぞ』
『アナタの口からそんな言葉が出るとは思わなかったわ』
『いいから帰るぞ、詩織。どうせ、あの世界は終わりだ』
『……はいはい、分かりましたよーだ。いっしーには敵いませんねー』
『その名で呼ぶなアバズレ』
『何をぅ!?』
闇は混沌とした大地へと還った。

◆平野 詩織
ウルトラマンシリーズでも飛び抜けてハードな作風で有名な「ウルトラマンネク

サス」に登場する女性。作中の防衛組織（というか実働部隊）「ナイトレイダー：Aユニット」に属する女戦士でもあり、日頃はコスメやスィーツに興ずる女子だが、いざとなれば命懸けで異星獣を蜂の巣に出来る凄い女。

しかし、最大の特徴は男運の無さで、昔馴染みに何時の間にか彼女が出来ていたり、傷心を癒してくれた新しい彼氏が全ての元凶だったりと、枚挙に暇がない。せめて前作や次回作の防衛組織に入隊出来ていれば……。

やっぱり「A」が付くと駄目なんか。

最後の晩餐

東京事変の後日譚的な話。

《化け物共め！　私は宣告する！　鬼滅の刃の名の下に、鬼殺隊は貴様らと命ある限り戦うと！》

画面の向こうで、大空 つばめが日輪刀を構えて、力強く宣言する。その切っ先の向かう場所には、銀髪の魔女と黒髪の鬼女が。二人の素性は知る由も無いので伏せられているが、見る人が見れば分かる程に良く映えている。一般人の目線でも、彼女らが東京中を巻き込んだ一騒動の首謀者というか、黒幕に見えるだろう。

何故なら、そう思わせるように現れたのだから。

《――――以上の理由により、東京都は都市機能を完全に失った為、長野県長野市松代町を「第二新東京市」、神奈川県箱根町を「第３新東京市」と改め、遷都する事となりました。第二新東京市は生産と発電をメインとした工業区画、第３

新東京市は経済性と居住性を重視した運用をする見通しで……》

さらに、別のチャンネルに切り替えれば、東京都の終わりと、都市機能を二分した新たな「東京市」の設立が発表されている。

この話は真実と嘘が半々であり、表向きは紹介の通りだが、裏の顔は造兵廠（第二新東京市）と要塞都市（第３新東京市）である。千葉と東京の沿岸部を壊滅させた内閣総辞職事件の時から手を付け始めた突貫工事も良い所の都市計画だが、そこはつぼめのチート能力と鬼殺隊士の化け物染みた体力と腕力に物を言わせた力押しにより、急ピッチとは思えない速さで完成した。

そして、人々は何も知らずに、どちらかの都市へ次々と移住し始めている。

どう考えても色々とおかしな話なのだが、人間とは現金な物で、便利な物が据え膳されれば有難く頂いてしまう物だ。溺れる者は藁をも掴むと言うし、真面な思考をする余裕が無いのだろう。

《妖怪は敵です。東京都に現れた大小様々なモンスターたちも、根本的に相容れる存在ではありません。そこで京都跡を「カントー地方」と改め完全な隔離地区とし、区内から出て来た物に関しては「害獣」として処理する事とします。妖怪に関

しても、目撃情報があれば随時鬼殺隊へ連絡をして頂きたく――――――》

また、更に別のチャンネルでは、つばめ本人による記者会見が開かれ、魑魅魍魎（妖怪を含む魔物、ポケモン、モンハンのモンスターなど）の類との完全な対立を宣言していた。全てを害獣扱いしているので、知恵が有ろうが無かろうが関係なく殺処分する、と公式に発表したのである。

これもまた平和ボケした日本とは思えない過激な発言だが、流石に首都を壊滅させるような生物たちを保護しようと考える者など殆どおらず、むしろ大衆には歓迎を持って受け入れられた。それ程に酷い目を見た、という意味でもある。数百万人規模の死者と、その倍以上の負傷者を出したのだから、当然の反応であろうが。

また、帰る家を失くした人々が一斉に疎開した事もあって、東京大事変とは直接関係の無い避難先の他県民までもが妖怪たちに悪印象を抱いており、日本全土が〝妖魔は死すべし慈悲は無い〟という歪な人間至上主義に染まりつつあった。

こうして、人々の生活は思ったよりも早く回復したものの、妖怪を含む〝人外〟との間に埋めようのない深い深い溝が出来てしまったのだった。

◆◆◆◆◆◆◆

――――――この世界の何処か、闇の中。

『……凡そ予定通り、ですな？』

『そうね。人間は愚かだけど、何とかと鋏は使い様だわ』

移動式城塞「妖怪城」の天守閣で、九尾の狐の姉弟が次々と流されるTV映像を見てほくそ笑んでいた。復活後、表立って動く事の無かった彼らだが、裏では力を蓄える為に尽力していた。おかげで中国妖怪軍は以前を遥かに超える規模と勢力を持つに至っている。

『それもこれも、アナタのおかげかしらね、黒雲坊？』

玉藻の前が対面に座る人物――――黒雲坊に話題を振った。

顔立ちこそ息子の黒鴉に似ているが、〝作成〟の過程によるものなのか全身が真っ白で、凶悪かつ鋭い真紅の眼を持つアルビノとなっている。服装に関しては、赤乱坊や息子への当てつけなのか、赫い修験装束に身を包んでいた。

『いやいや、部下が優秀だっただけの事よ』

「……勿体無きお言葉、有難う御座います」

さらに、その傍らには黒坊主が恭しい態度で立っている。

まさに絵に描いたような悪代官とその部下だが、黒雲坊の言葉は謙遜でも何でもなく本音であり、心の底から黒坊主の事を労っている。何故なら、今の黒雲坊の肉体を作り上げたのは、この黒坊主だからだ。

黒坊主は水質を汚染する能力を持つが、美人画が本体なだけあって〝思い描く姿を絵として実体化する力〟もあり（※ただし自分が汚染した水が溶液としてしようされている場合に限る）、それにより黒雲坊の身体を3Dモデルとして創り上げ、そこに必要な素材を嵌め込んでいく事で完全な肉体を構成したのである。

基本は黒鴉の血液だが、それだけでは再び返り討ちに遭う可能性もある為、変幻自在な身体を活かして様々な生物の血肉をこっそりと収集し、遺伝子レベルで設計し直して完成させたので、黒雲坊は見た目こそ黒鴉の色違いだが、中身は最早天狗とは言い難い、キメラ状態となっている。

しかし、雑種だからと言って弱いという訳ではなく、今目の前で余裕たっぷりに黒雲坊たちを見据える九尾の狐たちと同等か、それ以上の力を秘めている。まさに悪の天狗王と呼ぶに相応しい化け物となって、この世に完全体として舞い戻ったのだ。

だが、それ程までに力を高めても、来訪者には勝てない。感覚的に分かってしまう。だからこそ、黒雲坊は中国妖怪たちとも協力する事にした。

そう、知っての通り、黒雲坊は鬼太郎やぬらりひょんとも繋がっている。それどころか、鵺とも擦り合わせをしているので、伊吹丸以外の四将と関りが有ったりする。

そして、そんな事は謀略に長ける九尾の狐たちは、とっくに知っている。分かった上で、黒雲坊の提案に乗ったのである。

『そんなに謙遜しなくても良いのよ。こっちも天狗の秘術を手に入れられたからね』

これこそ、話に乗った最大の理由。九尾の狐たちは、とある理由により、天狗の秘術を欲していたのだ。

遥か太古の昔、天を翔る一匹の狗(おおかみ)から授かりし叡智を、長い時間を掛けて独自の技術に昇華させた妖怪世界の修験僧、それが日本の天狗族。

元々の天狗は中国の妖怪で、流星と共にやって来た宇宙からの来訪神であり、その一部が海を越えて日本へ渡り、現地の生物を改造して人型となったのが、日本の天狗たちだ。

その為、姿形は一定しておらず、様々な〝品種〟が作られたが、現在まで生き残れたのは鳥類をベースとした「鴉天狗」と、人間をベースとした「鼻高天狗」のみである。始祖の天狗が来日したのは人間が蔓延る以前の話なので、歴史が古いのは鴉天狗だ。

そんな太古より続く技術集団の知識はまさしく宝の山で、彼らにしか成し得ない神業も数多い。

しかも、鼻高天狗と鴉天狗では伝授された技術に違いがあり、天狗全体が天狗ポリスとして纏められる際の統一戦争――――つまり、赤乱坊と黒雲坊の戦いを最後に失われたテクノロジーなど、本当に腐る程にある。

その最たるものが、「傀儡術」と「魂移し」だろう。それがあったからこそ、器を破壊された黒雲坊は生き残れたのである。

そんな天狗の、それも真の鴉天狗系統の叡智を手に入れられるとなれば、協力しない手はあるまい。

『カハハハハハ、それはこちらも同じ事よ。九尾の力は素晴らしいな』

まぁ、黒雲坊の方も伝説の存在である九尾の狐たちの血肉を得られたので、割と

ウィンウィンなのだが。

『……さて、何時までも邪魔するのも悪いな。今日はもうお暇するとしよう。行くぞ、黒坊主』

『承知致しました』

と、話は終わりだとばかりに、黒雲坊は黒坊主を伴って、蒸発するように姿を消した。残されるは九尾の狐たちのみ。

『奴ら、どう動きますかね？』

すると、黒雲坊と全く会話をしていなかったチーが、ようやく口を開いた。彼とはそれなりに因縁があるので、あまり喋りたくないのである。

『最終的な目標は皆同じ。後はそこに至るまでの過程が違うだけ。何時どう動くのかのチキンレースになるでしょうね』

そう、まさに玉藻の前の言う通り。

ぬらりひょんもバックベアード軍も鳴女一派も、鬼太郎ファミリーでさえも、東京事変の時に動く事は無かった。言うまでもなく嵐の前の静けさであり、一度始まってしまえば、スーパーセルのような暴風雨となるだろう。

その為にも、今は優雅に準備を進めるだけ。
『さぁ、つまらない話し合いは終わり。食事にしましょうか？』
『ええ。今日は満漢全席ですから、楽しみにしておいて下さい』
『あら、そんなにサービスされちゃって、食べきれるかしら？』
中国妖怪たちの、最後の晩餐が始まる。

◆黒雲坊

第5期で起こった様々な怪事件の黒幕たる驚異の天狗王にして、天狗ポリスのエースである黒鴉の実父。

遥か太古の昔、赤乱坊との戦いに敗れ肉体を失ったが、隠れ里に魂だけで逃げ延び、息子の肉体を奪う事で現世に舞い戻ろうと暗躍していた。最終的に黒鴉が四十七士に覚醒した影響で身体から追い出されてしまい、大天狗・黒鴉・鬼太郎という無理ゲーにも程がある最強トリオの猛攻により、今度こそ魂ごと滅び去った。

今作では部下である黒坊主に己の魂を託しており、原典通り初めは黒鴉の身体を

奪おうと画策していたが、鳴女の出現を機に考えを変え、様々な魔物の遺伝子の良い所取りの完璧な肉体を再構成する方向にシフトした。

ちなみに、中の人は初代ねずみ男であり、嫁を食う狐であり、悪魔の白イタチであったりもする。

鳴女さん、新婚旅行する

※鳴女さんはチャラトミくんとけつこんしまシター。

やぁやぁ諸君、物凄く久し振りだが、鳴女さんだ。

いやねぇ、どいつもこいつも好き勝手にし過ぎなのよ。あのメタモン顔は〝ポケモンを現代社会に持ち込む〟とか言う二次創作でありそうな展開をするし、大空つばめは鬼殺隊だけに留まらず第３新東京市だのカントー地方だのを設立しやがるし。今更エヴァンゲリオンとか要らんのよ、絶対に福音にはならないから。

まぁ、その分こっちも好き放題させて貰ったが。

モンハン世界のモンスターたちを持ち込む事で一方的な展開になる事を防げたし、つばめのおかげで全世界へ向けて〝妖怪と人間は敵である〟と発信する事が出来た。この敵対関係は元々バックベアードとの計画に組み込まれていたので、結果的に楽が出来た形になる。ストイックに修羅の道を行く鬼太郎ファミリーや、闇に

潜む古今東西の悪妖怪たちを表舞台へ引き摺り出すには、これくらいやらないとな。

それはそうと、鬼太郎ファミリーのヒロイン共、化け物染みた強さになってたねぇ。

猫娘は魔改造ハンター装備で半ば古龍化してるし、真名は一癖も二癖もある黒魔女（ブラック・マジシャン・ガール）になってるし。悪魔召喚、じゃないのよ。

鬼殺隊の面々も凄まじく、ポケモンどころかモンハンのモンスターすら討伐するという、生身の人間とは思えない超常的な力を発揮している。特にお館様のつばめは異次元の強さで、私と同じ空間使いとなっているばかりか、転移も破壊も創造も自由自在な神の如き存在となっていた。色々と参考になる能力も多かったので、悪い事ばかりではないけど。

ただ、一番驚いたのは、あのボブが伝説のポケモンに選ばれていた事かな。何か帰り際に「思い出した……ボクは……ワタシは、メラル……ボブはワタシの――――」とか悟ってたし、アデルも魔女の力なのか「今度は間違えるなよ」とか言葉を投げ掛けてたし。まるで意味が分からんぞ。

残る1人は本当に知らん。誰、あのピカブイ主人公の色違い？

……何と言うか、皆知らぬ前に強くなってたなぁ。
もちろん、私も手を拱いてばかりだった訳じゃないけどね。むしろ色々やってましたよ。チャラトミともヤッてましたよ～♪
さてさて、世界が最後の日に向けて加速していく中、私はこれから何をすべきなのかと言うと、
『それでは、私とチャラトミの結婚を記念して、新婚旅行に出掛けようと、思いまぁーすっ！』
「待ってました！」『『『『『イェーイ！』』』』』『ぴきー』『『……』』』
この度、私たち出来ちゃった婚する事になったので、新婚旅行に出掛けるべきだと思うのだよ。
「ちょっと待て」
おやおや、どうしたのだね、アデルさんや？
「この際、何処に出掛けようと突っ込む気は無いが、何故全員で行く必要がある？あと、何で私とカミーラを呼んだ」
何を今更。そんな事決まってるじゃないか。

『結婚式に親族や友人を呼ぶのは当然だろう？』
「何時から私とお前が友達になったんだよ……」
つれない事を言うなよー。
何時までもティンカーベルなのも可愛そうだし、そろそろお前にも春を迎えさせてやろうという、私の心遣いが分からんのかね？
「いや、その発想と発言はおかしい」
『アデル様、ワタシは何時でも……』
「……お前も乗ってんじゃないよ！」
叱るアデルとモジモジするカミーラ。うんうん、良い画になるなぁ。
「大体、何で私とカミーラだけなんだ？　ちゃんとベア子様やヴォルフガングたちにも声を掛けたのか？」
『ああ、あいつら今かなり忙しいみたいだから。あと、〝末永くお幸せに〟って口を揃えて言ってたぞ？』
「どういう事なの……？」
百合ってるが良い、って事じゃない？

妖怪その気になれば性別の壁だって乗り越えられるんだから、頑張れよ、色々とさ。それに熱愛気味な奴を蔑ろにしてるとロクな事にならんぞ。

「――――はぁ、まぁいい。お前が意味不明なのは今に始まった事じゃないし、ベア子様たちがそういうノリを好むのも今更だから、もう何も言わん。今ベアード様に確認を取ったら、『ＧＯＯＤ　ＬＵＣＫ！』って言われたしな」

まったくどいつもこいつもって顔をしてるけど、お前の本心は分かってるぞ。慰安旅行にする気が満々ですねぇ？

「それで一体何処へ行くつもりなんだ？　奈落村みたいな展開は御免だぞ？」

『何で自分の新婚旅行を試練にしなきゃいけないんだ、ふざけるなよ!?』

「いや、お前も大概ふざけてるからな!?　今まで人を散々な目に遭わせて来ただろ、貴様！」

知らんなぁ、そんな事は私の管轄外だ。

「……で、結局の所、何処へ行くんだ？」

いい加減張り合うのも面倒になったのか、アデルが話を切り上げて結論を求めて来た。そういう態度は人間関係を悪くするのだが、私たちは「鬼」と妖怪だから問

題ないか。私もそろそろ飽きて来たし、発表しちゃいましょう！

『お前の故郷にだよ』

そう、私たちが選んだのは、南国の小さな島国――――アデルの生まれ故郷、フィリピンである。ついでにニューギニア島にも行く予定だが、それは言わんどこ。後のお楽しみだ。

こうして、私たち〝鳴女一派〟はアデルとカミーラを（無理矢理）連れ立って、東南アジア諸国へと飛ぶのだった……。

◆フィリピン

東南アジアの一国にして、ＡＳＥＡＮの加盟国。

国全体が７０００もの島で構成されており、地域ごとの多種多様な文化を楽しめる南の島国である。首都はルソン島のマニラ。発展途上国な上に独立後の様々な混乱と災害により金欠気味で、国外へ出稼ぎに行っている若者たちの仕送りが一番の経済的財産という程に困窮している。

元が少数部族の多民族国家である為、様々な妖怪の伝承が成されており、特にアスワングの一族が有名である。

鳴女さん、結婚式を挙げる

ついにやっちゃったカー。

フィリピン。東アジアに存在する、ＡＳＥＡＮ加盟国。

大小７０００にも及ぶ島からなる島国で、地域によって異なる多種多様な文化を楽しめる、南洋の楽園――――と言えば聞こえは良いが、二度に渡る独立の失敗（アメリカの植民地だったり日本の占有地にされていた事があった）と共和国樹立後の政治的な大混乱により、一気に世界経済から置き去りにされてしまった発展途上国でもある。

つまり、ちょっと貧乏なのだ。現状、最も当てになる財源が国外へ出稼ぎに行った若者の仕送りという時点で察して欲しい。貧富の差も激しく、中には明らかに堅気じゃない奴までいる。他にも自称イスラム国の皆さんを始めとするテロリストや頻発する自然災害など、問題は山積みである。

しかし、観光事業が盛んな南国リゾートなのも事実で、見所も沢山ある。首都マニラを始めとする都市部は驚く程に発展している為、ハングリーな若者には物足りないかもしれないが、資本主義に疲れた中年以降が静かに暮らしたり、観光地として訪れる分には問題ないだろう。観光業を除けば農業や漁業などの第一次産業がメインなので、老後に農家として生活したい人にはお勧めかもしれない。

また、鉱業面は潜在的に高いポテンシャルを秘めており、鉱山夫として働けば案外と稼げる可能性もある。重労働に目を瞑ればの話だけど。

そうした様々な面を持つフィリピンであるが、ある意味一番特徴的なのは、棲んでいる魔物の面々だろう。

何を隠そう、フィリピンの魔物は、その多くが吸血鬼なのだ。

島という物は生物相が偏り易いものだが、それは魔物も同じであり、〝無数の島と人種から成る南洋の国〟という中々に特異な条件も相俟って、フィリピンの魔物は非常に愉快な事になっている。

と言うのも、妖怪や魔物の殆どは人食いなのだが、狭くて許容出来る人口に限りのある島国では、大陸のように野放図に人を取って食う事は出来ない。そんな事を

すれば、あっという間に餌が枯渇してしまうからである。

妖魔は人間を見下して憚らないが、彼らにとっては生産者に当たる存在なので、根絶やしにしてしまえば、諸共滅ぶ種族は結構いる。人と妖魔は手を取り合えないが、共存しない訳にはいかない、とても微妙な関係なのだ。

……話を纏めよう。

ようするに、フィリピンの魔物には人を殺し尽くさない生態を求められているのである。だからこその吸血鬼だ。血は吸い過ぎなければ死なないし、再利用も出来る。仮に殺すにしても、生殖機能を高めたり、燃費を良くして試行回数を減らしたりなど、ただ捕食する以上の意味を見出している。

そして、その生態的なニッチに収まっているのが「アスワング」である。

アスワングとは現地の魔物の総称で、吸血鬼でありながら日本妖怪並みに多様な姿と特性を持つ、摩訶不思議な一族だ。これがある1匹の吸血蝙蝠から伝染し種族として定着したのだから、適応拡散と収斂進化の賜物と言えるだろう（基本的に飛べない生物は海洋島に辿り着けない）。

むろん、他地域のような巨大生物や凶暴な種族も居るが、そちらは個体数が少な

いか既に絶滅している。

また、人間から派生して生まれた存在もいる。マンバランやマンククラームなどの「魔女」の類がそれだ。彼女たちは土着の蟲妖怪や悪霊の媒介者（ベクター）であり、元が人間である為、アスワング族とは持ちつ持たれず共存している。中には異種間で子供を儲ける場合も少なくない（基本的に魔女は何かしら人外との〝契約＝セ○クス〟によって成り立つ事が多い）。

◆◆◆◆◆◆◆

「――――――で、その混血児の1例が、そこのアデル・フォン・アスワングさんなんですよ」

『フ～ン……』

やぁ、諸君。マガンダン・アラウ（こんにちは）。只今マクタン島でバカンス真っ最中な鳴女さんだ。傍らにはもちろんチャラトミ（こいつ）が居るし、何ならアデルとカミーラも居る。今は眩しい太陽の下、白い砂浜でビーチチェアに寝そべっているので、全員が水着姿である。

それにしても、チャラトミの会話は情報量が多いなぁ。一体何処から仕入れて来

るんですかね、その専門家顔負けな知識は。聞いてて面白いから良いけどさ。

言われて思い出したけど、アデルって純粋な魔女じゃなくて、吸血鬼とのハーフなんだよね。カミーラも元はキーエフ・キュリアンとか言う人間だったらしいし、意外と純血種の魔女や吸血鬼が少ないんだな、ベアード軍。

いや、確かドラキュラ一族も対等な協力者として居るんだっけ？

まぁいいや。ベアード軍の動向なんて知った事じゃない。今は新婚旅行中なんだよ。

『そんな事より、日に焼ける吸血鬼が存在する件について』

『はい、新鮮な気分です！』

『いや、あのねぇ……』

私の皮肉に満面の笑みを浮かべるカミーラが案外と可愛い件について。誰だ、こいつをオバサン呼ばわりする奴（※猫娘）。

そっか、こいつ生まれながらに病弱で兄妹共々ロクに外へ出られなかったから、実質的に今回が初めての日光浴なのか。提供した私や零余子の血で陽光を克服したおかげだな。日に焼けるんじゃなくて、日で焼け死ぬ立場だったからね。

青い空の下、眩しい太陽を目一杯浴びられる事に感動する辺り、こいつの根本的な部分はキーエフ時代で止まってるのかもな。

「そう言えば、式は何時何処で上げるんだ？　マクタン島はリゾート地だから、ホテルで上げる事になるぞ？」

おっ、食い付いて来るねぇ、アデルさん。やっぱりフィリピン人としてはオススメしたい教会があるのかもしれない。フィリピンはカトリックが国教だからな。

だが、心配はご無用。私には無限城というチートスキルがあるし、チャラトミｗｉｋｉでしっかり下調べもしてある。予約も完了済みだ。あっと言う間に結婚式会場ですよ。

『さて、そろそろ一旦切り上げて結婚式すっかー』

「二次会するかー、みたいなノリで言うなよ……」

わはははは、褒めても何も出んぞ。

◆◆◆◆◆◆

と言う事で、わざわざマニラ大聖堂へ移動して披露宴を開いたのだが。

『病める時も健やかなる時も、富める時も貧しき時も、妻として愛し、敬い、慈し

む事を誓いますか？』
『何でここに居るんだ貴様』
神父役がヴォルフガングだった。何でや。忙しいんじゃなかったのか。
『病める時も健やかなる時も、富める時も貧しき時も、妻として愛し、敬い、慈しむ事を誓いますか？』
『村人Ａかお前は』
うーん、この調子だと、ベア子たちも居そうな気がする。
『何時かワタシも袖を通したいわね』『絶対に似合うよ、ベア子ちゃん！』《フム、良いワインだな》
居たよ、普通に。何サラッと来賓席に座ってんだよ。あと少しは興味を持てアード。
『……まぁいいか。誓います誓います』「誓いまーす」
どうせ悪ノリで来たんだろうし、今更突っ込まんさ。それよりも式を進めよう。
『それにしても、まさかお前とこんな事をする日が来ようとはな』
「最初の出会いは最悪でしたからね」

『主にお前がな』

「はて、何の事やら？」

こいつも良い性格になったよなぁ。やっぱりチャラいままだけど、そこがまた良い。変に気取る奴よりずっと魅力的だ。

『そう言えば、人前でするのは初めてかもな』

「ここに真面な人間は存在しないっスけどね」

『人間どころか妖怪や魔物ばっかりだもんな』

こうして見ると、本当に奇跡のような面子だな。色々と有りはしたけど、楽しい連中だよ。是非とも末永くお付き合いしたいしたいね。特に大尉さんとお父様。これからも誠心誠意、動画投稿致します。

さて、すべき事をするか。今まではなぁなぁだったけど、改めて向き合うと、お前は掛け替えのない存在だよ。

『それじゃ、これからもよろしく』「オッケ～♪」

そして、私たちは公衆の面前で、初めてのキスを交わすのであった。

『……おい、ウェディングケーキのデザインをバベルの塔にした理由を言ってみろ』

ちなみに、入刀するケーキの形は傲慢の末に倒壊した巨塔だった。ふざけるなよ貴様ら。

◆アスワング

フィリピンの吸血鬼一族。大小７０００の島から成る限られた土地にやって来た吸血蝙蝠が適応拡散と収斂進化をした果てに、日本妖怪ばりに様々な姿形を持つようになった。

西洋の吸血鬼と違い、ニンニクや聖水も平気だし陽光も効かないが、交雑種はそうでもなかったりもする。中にはアカエイやガチョウの尾で作った鞭に弱い奴もいる。ただのMとか言ってはいけない。

ちなみに、日中は人の姿で社会に溶け込んでいる種族が殆どなので、仲良くなっていると襲われないどころか、他のモンスター的な連中から守ってくれたりもするらしい（結婚しよ）。

アデルとカミーラ、初めての夜

※別にそういうお話ではありません。

「それで、どうして今になって結婚なんかしたんだ？」

私は疑問をそのまま口にした。

……御機嫌よう、諸君。ベアード様に確認を取ったら、何故か未だにバックベアード軍最高司令官のままであるアデル・フォン・アスワングだ。

まぁ、鳴女（あいつ）は個人では最強格だが指揮官には向いてないから、名義上だけの最高司令官である方が都合が良いんだろう、お互いに。面倒事を双方から押し付けられたとも言うが。

嗚呼、誰か私の疲れ切った心を癒してくれ……。

それはそれとして、さっきの疑問である。こいつ、何で急に結婚式なんて挙げたのだろう。しかも、こんな南方の発展途上国で。自国で充分に豪勢な挙式が出来た

だろうに。

……何か狙いがあるのか？

『したいからした』

このアマァ！

恍けやがって、チクショウめぇーっ！

『別におかしくはないだろう。世界最後の日が近いんだから、遣りたい事は済ませておきたいだろう』

「お前がそんな玉かかよ」

『いや、アワビしかないよ？』

「そういう事じゃねぇよ！」

カミーラも聞いてるんだから、下品な話は止しなさい！

この子、普段は妖艶な美女を気取ってるけど、内心は小さな女の子なんだから！

『＝＝＝＝』

ほら、顔面が紅潮しちゃってるからぁ！

つーか、可愛いな君。そんな妙齢の女性って感じの見た目でモジモジするとか、

ギャップが過ぎるよ。外見は成長していても、やっぱり中身は出会った頃のままだなぁ……。

『ま、その内分かるさ。具体的に言うと最後の七日間くらい』

「お前、どんだけ旅行する気なんだよ……」

『1ヵ月くらい？』

「いや、長過ぎだろ」

『イージャン、凄いジャン、長いジャ～ン♪』

「腹立つわぁ……！」

というか、1ヶ月も海外に居る気かよ。

いや、こいつは何時でも無限城で日本に帰れるし、何なら無限城が実家なくらいだから、実質的には日帰りか1拍2日の感覚で遊びに行っているような物か。便利な奴だな。

ま、こいつが嘘吐きで腹黒なのは今更だから、考えるだけ無駄か。その時になれば明かされるだろう。否応無しにね。

それよりも、私が考えるべきは世界最後の日をどう戦い、如何にしてアニエスを

生き延びさせるか、だ。

今の所、最終戦争「新生ブリガドーン計画」は上手く事が運んでいる。妖怪と人間の関係性は最悪な物となり、先程地獄の方でも動きがあったと連絡があった。

しかし、こういう上手く行き過ぎている時程、何かしら問題が起きるもの。

そして、この今更なタイミングでの新婚旅行。物凄く嫌な予感しかしない。絶対何かあるよ、この後。所謂フラグ成立である。

『さて、今日はもう遅いし、寝るかー』

「まだ7時にもなってないんだが……」

『夜更かしはお肌に悪いのよ？』

「ほぼ毎日動画配信してる奴に言われたくない」

『そうかい。なら、良い子はさっさとお寝んねしな。私はこれからヤる事があるんだよ』

「結局遊ぶんじゃん……」

だが、その後は意外と何事も無く夜を迎えた……。

「何故同じ部屋なんだ？」

『鳴女さんの意向ですね』
「あのアマ……」
と言うとでも思っていたのかぁ？
……何でだよ。どうしてカミーラと同じ部屋なんだよ。
いや、ベアード組って事で分けたんだろうから、そこは良いんだけどさ、何故にダブルベッドにしたし。しかも色がピンクって。どう見ても狙ってます、本当にありがとうございました。
「まったく、どうしてどいつもこいつも……」
『あ、あの、ワタシは一向に構いませんよ？』
「いや、あのねぇ？」
君はどうしてそう、私をそういう目で見るのかな？
いやね、私もそこまで朴念仁じゃないから、彼女の想いは気付いてるつもりだし、妖怪同士なら性別なんて大差ないんだろうけど……だからって、ねぇ？
私の母親、元人間だからね。というかお前も元は人間だろ、キーエフ・キュリアン（現カミーラ）。

ま、良いさ。どんなに大人ぶっても中身はキッズだから、1人で寝るのは寂しかろう。知ってるぞ、お前が何時も寝る時にぬいぐるみを抱っこしてるの。一々狙ってるよね、君。大きいお友達なら沢山出来るかもしれんが、それは本人の望む所では無いだろうしなぁ……。

『ま、先ずはシャワーで身を清めて来ますわね』

「準備万端じゃねぇか」

どういう事なの？

「はいはい、とにかく寝るわよ」

『あぁっ、そんな強引に……♪』

「……いや、喜ぶなよ」

その気になっている所を申し訳ないが、問答無用でカミーラをベッドへ放り込み、私も寝間着に着替えて床に就いた。良い子は早く眠りましょう。

正直、私も日頃の疲れとストレスで疲れ切ってるから、ゆっくりじっくり眠りたいしね。

それじゃあ、お休みなさい……。

◆◆◆◆◆◆◆

――――――で、本当に爆睡してしまった私だったのだが。

「んぅ……？」

何か寒くて目が覚めた。重い瞼を開け、擦りながら隣を見ると、何故かカミーラが居ない。お花を摘みにでも行ったのだろうか？

私もちょっと催す物があるし、ついでに様子を見に行くか。

「……あれ？」

居ない。部屋付きのトイレにはもちろん、廊下の共同トイレにも居なかった。

ちなみに、他の部屋を尋ねてみようとしたのだが、

※しばらくお待ち下さい。

チクショウ、どいつもこいつもお楽しみしやがって！　恥を知れ！

《恥を知れ！》

「うきゃぁおおおっ!?」

野生の赤ん坊が現れたッ！

……って、こいつは確か、鳴女の息子の「無惨」だっけ？

もう言葉が話せるのかとも思ったが、単にテレパシーを使ってるだけだった。超能力を持っているのもどうかと思うが。

暗がりから真っ白で目が赤い赤ん坊がフワフワと現れるとか、もうホラー映画の冒頭なのよ。止めてよ、意外とホラー系好きじゃないんだから。妖怪の癖にとか言われるかもしれないが、演出として明確に驚かしに来てるから、種族に関係なくビックリするんだよ。死角から急に何かが飛び出して来たら仰天するでしょう、君も!?

――――いや、ちゃうねん。そないな事を気にしとる場合じゃ無いんよ。

問題はカミーラが何処に行ってしまったのかって事だよ！

……心配し過ぎかなぁ？　あの子も長い年月は生きてるし、流石に迷子になったりは――――しそうな気がする！

「えっと、無惨……くん？」

『無惨様だ』

えっ、何コイツ、可愛くないんだけど……鳴女にそっくりでムカつく。

「おい、頭無惨」

《何だと貴様ァーッ！》

「ちょっと聞きたいんだが、カミーラを見なかったか？　大人のお姉さんって感じの吸血鬼なんだが？」

我ながら馬鹿な質問をしている気がするけど、他に口を挟めそうな奴が居ないから、このクソ生意気なガキに聞いてみるしかない。

《ああ、さっきホテルの外に出て行ったぞ。何か目が虚ろだったし、夢遊病にでも罹っているのかもな》

「確保ォーッ！」

じゃあな、と飛び去ろうとした無惨を拉致した。貴重な情報源、それも鳴女の息子となれば、逃がす訳にはいかんよなぁ？

《は、放せ！　放せぇ！》

「そう言わずに奇妙な友情を感じようじゃないか」

《貴様、鳴女みたいな事を言うんじゃない！》

……やっぱり似て来てんのかな、私。やーだー。

ともかく、この００１みたいな超能力ベイビーが居れば、行方不明のカミーラも

ササッと探し出せる事だろう。

さぁ、私たちの奇妙な冒険の始まりだぁ！

――――――なんて適当なノリでホテルの外へ出た私と無惨だったが、

「《ここは何処だ》」

迷子になった。何時の間にか霧掛かった深い森の中に居た。駄目じゃん。

「おい、助清」

《誰が犬神家の一族だ。言っておくが、きちんと奴の気配を探った末に辿り着いたんだぞ、この森に》

「うーん……」

こいつの能力は保証付きだろうし、道に迷ったというより、迷わされたと言うべきか？

と、その時。

『ガブガブ』

霧の中から、一つ目で毛むくじゃらのゴリラ型モンスターが、ぬぅっと顔を出した。

「お前……あの時のブソか？」

ブソ。ミンダナオ島に伝わる、人の腐肉を好んで喰らう食屍鬼。姿は見ての通りで、人を罠に掛けて殺そうとする邪悪な妖怪だが、基本的に脳筋の馬鹿なので逆に騙し返されて痛い目に遭う事が多いという、ちょっとバカワイイ奴。

この子はその中でも、私が幼い頃に出遭った個体だ。あの時はお互いに子供だったが、こんなに大きくなっているとは。とても海を跨いで迷子になった阿保の子と同一個体とは思えない。

『ウンガウガ、アガヴヴヴ！』

「……私を探していただと？」

しかし、懐かしい与太話に花咲かせるかと思いきや、逼迫した様子で私を探していた旨を伝えて来た。一体何が起きていると言うんだ？

『ウギャウガーン！』

「最近、森が騒がしい？　アスワングの一族やマンババランたちが動いているって？」

何それ、結構な大事じゃない？

だけど、やっぱり要領を得ないな。森がどう騒がしいと言うのだろう。
『ウガガウガァン！』
「……カミーラっぽい奴が森の奥に行ったのを見た!?」
それを早く言ってくれよ！
こうなっては仕方ない、
「行くぞ、無惨！」
《様を付けろデコ助！》
「無惨サマーズ！」
《だからそれ鳴女の考え方！》
そういう事になった。
そんなこんなで、私たちはブソに導かれるまま森の奥へ向かって行ったのだが、
そこに待っていたのは、
「《ええぇ……》」
如何にも出ますって感じの、古びた洋館が物々しく聳え立っているのだった……。

◆ブソ

フィリピンのミンダナオ島に潜む、毛むくじゃらの魔物。アスワングの一族やマンババランなどの魔女族とは関係ない、現地の生物が変化した系統の妖怪。今では絶滅したとも、僅かながらも生き残っているとも言われているが、真実は定かではない。一説では、こいつもアスワングの一種だとも言われている。

腐肉を食らうスカベンジャーであり、特に人の死体が好み。その為罠を張ったりもするのだが、おつむが足りない頭無惨な奴なので、よく騙し返される憎めない奴。たぶん、仲良くなればおすそ分けしてくれそう。

ちなみに、アデルと知り合いの個体は、故郷のミンダナオ島で遊んでいたら海に落っこちて、そのままマクタン島に流れ着いた、飛び抜けて阿保の子だったりする。

ザ・ハウス・オブ・ザ・マッド

個人的に銃を使うゾンビ物と言えばこっちのイメージ。キュリア～ン。

「何なんだ、ここは？」

《知らんがな》

一体全体、この洋館は何時からこの場所に建っているのだろうか。窓ガラスが殆ど割れ、壁は塗装が剥がれるばかりか穴が開いてる場所まであり、全面が隈なく蔦が巻いている。放棄されてから相当の年月が経っているのだろう。少なくともここ数十年では利くまい。キノコ生えてんぞ。

「ここが一体何なんだ？」

『ウンバウガ、ウーヴー』

「マッドハ〇ス？　その名前はアカンのよ……」

『ウンバラララ、ウバ、ウゴン！』

「ハウス・オブ・ザ・マッドって」

名前を変えりゃいい訳じゃないのよ、ブソさんや。

まぁ、この子は同族に比べればマシだけど、基本的に頭が弱々だからな。自分で確かめるしかない。

「あなたは、他のアスワングたちにこの事を報せて。出来れば応援を寄こして頂戴」

『ウガウン！』

とりあえず、腕力以外は頼りになりそうもないブソにはお引き取り願って、いざ入館！

――――――ギィィィィ……。

触れるだけで開いてしまう扉を潜ると、案の定とても汚かった。ガラスの破片や元は壁材だった瓦礫が散乱し、その上から落ち葉の絨毯が掛かり、天井には蜘蛛の巣のカーテンが垂れ下がっている始末。廃墟なのだから仕方ないが、もう少し何とかならなかったのだろうか。玄関ホールの筈なのに、足の踏み場も無いんだけど。

とは言え、悪い事ばかりでもない。足の踏み場もないとはつまり、誰かが歩けばすぐに分かるという事。よーく見てみれば、カミーラの物と思しき足跡があるし、それ以外の物もある。歩幅と形からして、二足歩行か……。

「どう思う？」

《フム……数が多いな。直立二足歩行こそしているが、どいつもこいつも真面な姿をしてないぞ。これじゃあまるで動く死体（ゾンビ）だな》

だが、流石に見ただけで全てを把握するのは無理なので、無惨に調べてもらう事にした。超能力者なんだから、サイコメトリーくらい有るだろうと思ってはいたが、本当に持っていると逆に引くなぁ。マジで００１じゃん、こいつ。

つーか、ここにゾンビ居るの？　嫌過ぎるんですけど……。

《問題無かろう。相手は高がゾンビだぞ？》

「私、ホラーが苦手なんだってば。特にゾンビとか生理的に受け付けない」

《敵は殺すのに？》

「それはそれ。これはそれ」

《何だそれは……おっと、お出ましだぞ》

ついつい尻込みしていたら、廊下の向こうからやって来てしまった。ゲームや映画で散々見て来た、ノソノソと歩く腐乱死体たち。一応服は着ているが、ボロボロの布切れに近いし、肌どころか見えちゃいけない物が露出してしまっている。ホルモンとか、レバーとか、ミノとかが。

うへぇ、暫く焼き肉が食べられなくなりそう……。

《馬鹿な事を言ってないで、さっさと迎撃しろ。触るのが嫌なら魔法で焼いてしまえ》

「結局焼肉なんだよなぁ……」

そう言いつつ、しっかりと魔法でヘッドショットを決めていく。ゾンビの弱点は頭って相場が決まってんのよ。

うわっ、汚い。私の傍に近寄るなァーッ！

「――――――って、流石に多くない!?」

さっきから【火炎弾（ファイヤー・ボール）】をグミ打ちしているのだが、一向に数が減らない。上の階から、廊下の奥から、次々とゾンビが現れ、腐った焼肉に変わっていく。それでも減らない、途切れない。そんなすし詰め状態で来られても……密です！

というか、出力を抑えているとは言え、火の玉をバンバン放っているのに、館が炎上する様子が一向に見られないのは、一体どういう事なのか。

否、壊れてはいるのだが、何故かすぐに元の形に戻っている。まるで奈落村の廃屋みたいだ。そんなに直りが早いのなら、いっそ新品に生まれ変わればいいのに。雰囲気を大事にしてるのかな？

……とまぁ、下らない事を考えられる程度には余裕があった。

無惨の言う通り、高がゾンビ、動く死体の群れ。攻撃が当たらなければ動作は鈍いし、攻撃も単純な引っ掻きや噛み付きばかり。これなら奈落村の死人憑きラッシュの方がまだ歯応えがあった。あっちはモンスターとかも出て来たからな。

――――――ドギャアアン！

『フヴヴヴゥ……ッ！』

「ドワォ!?」《何だ!?》

すると、ミチミチになった死体たちを鷲掴んでバッタバッタと投げ飛ばし、通路

の奥から巨大な何かが姿を現した。

全身がサイバーパンクな強化外骨格で武装され、身の丈以上の戦斧を持った、5メートルはあろうかという巨人。歩く度にガシンガシンと硬質な音が響き、口元のガスマスクからは疫病を齎しそうな黒煙を漏らしている。ぎらつく油の血液のみが、唯一生物らしさを感じさせた。触ったら譫言、ひきつけ、そして死を齎されそう。

◆『識別コード：Ｔｙｐｅ 27 Ｃｈａｒｉｏｔ（チャリオット）』

◆『弱点：各所関節部』

「えっ、何これ!?　ボスキャラ!?」

《知らん！　ともかく迎撃しろ！》

「お、おう！」

言われるがままに【火炎弾】を放ってみたのだが、

――――――バチィン！

「魔法反射装甲だとぉ!?」

こ、こいつ、魔法を跳ね返す、だと!?

鋼鉄の襲撃者（ヘビーメタル・レイダーズ）みたいな真似しやがって。キース・ハワードって呼ぶぞ！

『ホヴォオオォ……ッ！』

「危なっ！」《のわーっ！》

さらに、驚いた隙を突いて、サイボーグ野郎が戦斧を力任せに振り下ろして来た。動きこそ鈍いが、一撃で大理石をバラバラにする威力を持っているので、下手な避け方は出来ない。ちゃっかり振動でこっちの足を取って来るし。耐震スキルが欲しくなる。

しかし、一番の問題は奴の装甲に魔法が通じない事である。

躱しながら古代魔法の【超電導波（サンダー・フォース）】や【破壊光線（デストロイ・ギガ・レイズ）】とかも放ってみたのだが、何れも反射されてしまった。おかげでこっちは魔力の払い損だ。

かと言って、物理ダメージを伴う【鉄硬弾（アイアン・バレット）】では威力が足りないのか、全て装甲厚の前にカキンと弾かれてしまう。どうすりゃいいねん。

《おい、貴様。弾丸に魔法を込めて撃ってみろ》

と、意外な所から光明が。

……そうか。魔法である筈の【鉄硬弾】が反射されないって事は、実態を持つ攻撃は跳ね返せないのか。それならそれで、お誂えの武器がある！

「【召喚魔法（サモン・ゲート）】！」

私は虚空に魔方陣を描き、そこからメラルの遺品である「ネコ獣砲ニャノン」を取り出し、魔法効果の弾を込めて撃ち出した。

『フヴヴウァッ……！』

効果は大有りで、火炎弾と氷結弾の熱疲労コンボでダメージを蓄積していき、止めの竜撃弾（ぽいナニカ）で完全に胸部装甲を破壊した。ついでにギュウギュウ詰めのゾンビ軍団も蜂の巣にしてやった。

「せぇいっ！」

『グヴァァ!?』

ネコ獣砲ニャノンをしまい、代わりに呼び出したクィーンレガリアで襲い掛かる。傷口からエキスを吸い取り、自身にバフを掛けながら怒涛の連撃を繰り出す。

サイボーグ野郎も必死に抵抗するが、如何せん鈍間過ぎる。装甲という武器を

失ったお前では相手にならんよ。

『ゴヴァァァ……！』

限界を迎えたサイボーグ野郎が、汚い息を吐きながら倒れ伏す。その際に全身の鎧も解除され、機械とも生物とも言い難い本体を晒した。キモイ。

つーか、何だこの油。武器ごと私を侵食しようとしやがる。これが本体なのか？

ともかく、このまま放っておくのは確実にヤバいので、浄化魔法と火炎魔法の重ね掛けで奇麗さっぱり消し去ってやった。そういうのは効くのね。油には魔法耐性が無いのか、単に熱に弱いのか。うーむ、よく分からん。

「結局、こいつは何だったんだ？」

《いや、分からんて。……むっ、誰か来るぞ》

「えぇ、まだおかわりがあるの？」

とりあえず、無惨の見ている方へ視線を向けてみると、そこには白いワンピースドレスと鍔帽子を被った、貴婦人のような女性が。身長が３メートル近くあるから、すぐに人外だって分かるけど。

『あ～ら、アデルじゃないの。相変わらず独身貴族のようねぇ？　臭いで分かる

わ』

というか、幼馴染のオルチーナ・ドミトレスクだった。

彼女はハンガリーとルーマニアの境目に領地を構えていた元貴族かつ女吸血鬼で、右翼曲折の果てに国を追われて海を渡り、ハンガリーに移住して来た。

そして、そのまま現地のアスワングと結婚、ベイラ・カサンドラ・ダニエラという3人の娘を儲けた勝ち組でもある。手紙で知った事だが、最近4女も生まれたらしい。リア充爆発しろ。

「……煩いわよ、没落貴族」

『お生憎様。今はホテルやカジノも経営している現役貴族よ』

「チクショウ！」

だから苦手なんだよ、こいつ。会う度にマウント取って来やがって。鳴女とは別ベクトルでムカつく。

『いい加減、良い相手を見付けなさいな。良いものよ、娘は。どの子も手が掛かるけど、そこから学ぶ事も多いわ』

「急に真面目な話をするなよ」

やめてよ。私のメンタルライフはとっくに０よ！

「――――――って言うか、何でアンタがこんな所に居るのよ？」

そうだよ、先ずはそこが問題なのよ。こいつは確か、ルソン島のマニラに居る筈なのに。

『娘が攫われたのよ』

「ゑ？　あの分身能力を持つ三姉妹が？」

驚きの展開だった。

ベイラ・カサンドラ・ダニエラの３人娘は吸血鬼であると同時に蟲使いのマンババランでもあり、身体を無数の魔蟲に分裂させる事が出来る。

この魔蟲、低温には弱いが凄まじい繁殖力を持っていて、襲い掛かった相手の血肉を食べる事で爆発的に増殖、ほぼ不死身と言って差し支えないスタミナを発揮するのだ。

ついでに体積を増やして巨大化も出来たりする。大きさは精々数メートルだが、そこらの雑魚妖怪を相手にするには充分だろう。

もちろん、その母親であるオルチーナにも可能で、そのサイズは私の巨大化すら

上回る。何処まで行っても、見上げるしかない……ッ！

『いいえ。攫われたのは、４女のローズよ。私の留守中にいきなり家に押し掛けて、あっという間に立ち去って行ったらしいわ。ベイラたちを真っ先に液体窒素で無力化した辺り、私たちの特性を理解している相手のようね』

「そうなのか……」

そんな奴が、この屋敷の何処かに存在している？

その上、カミーラにまで手を出して。……こいつはメチャ許せんよなぁ？

『似たような施設があと３つ有って、今は現地のアスワングたちと協力しながら、４手に分かれて調べているわ。……それで、あなたはこれからどうするつもりなのかしら？』

そりゃあもちろん、決まっている。

「ご一緒させてもらうわよ、マダム」

『こちらこそお願いするわ、バチェラーフドゥ』

「しつこい女は嫌われるぞ！」

そういう事になった。

果たして、この洋館の奥に何が待っているのやら……。

◆オルチーナ・ドミトレスク

「バイオハザード ヴィレッジ」に登場するボスキャラ。見た目は白で統一された格好の貴婦人と言った感じだが、八尺様を超す高身長を持つ。人間の血を吸うという吸血鬼染みた特徴を持つが、これは先天的な血液疾患によるもの。性格はとんでもないドSで、些細な事で侍女を血祭りにあげた挙句、モロアイカという化け物に変えてしまう。

その正体は、ラスボスであるマザー・ミランダが、スペイン風邪で死んだ自分の娘を蘇らせる為に行った、〝特異菌の人体異色〟という実験の被験者。それにより異常なまでの再生力と馬鹿みたいに高い身長、不老の力を得た。

ただし、適合率こそ高い物の、ミランダに言わせれば〝成功〟では無かったようで、事実〝毒物に異常に弱い〟〝血液疾患が悪化した〟といったデメリットも生まれている。

ちなみに、作中で語られる「四貴族」はあくまで〝マシな４人〟という意味でしかなかったが、彼女の場合は被験者となる前はどこぞの没落貴族だったので、オルチーナだけは正しい意味で「貴族」である。

この作品では特異菌の移植者ではなく、本物の吸血鬼となって登場。噛まれてなったので純血種では無いものの、ドラキュラやカミーラとタメを張れる強さを手に入れている。

しかし、世界大戦のごたごたの果てにエクソシストにぶっ殺されそうになり、故郷を追われる形でフィリピンまで遥々やって来た。その後は現地のアスワングと結婚し、４人の娘を儲けている。表向きはゲームと同じ姿を取っているが、年齢は自在に操れるので、夫や娘の前では別の姿で過ごしている。

余談だが、ドイツ系の幼馴染が居たが、大戦の最中に死別している。

ザ・ハウス・オブ・ザ・サイコ

久し振りの更新ナリー。

「オラオラオラオラァッ！」

『目障りよ、死に直しなさい！』

《良いぞ、全て壊すんだぁっ！》

ガンガンガンガンキモイ命を真紅（まっか）に燃え上がらせていく私たち。マッチョだろうがチェーンソーを持っていようが、雑魚は雑魚なのよ。

しかし、数が多いな。それに何か顔ぶれが大体同じような気がする。まるでコピー商品である。

「工場で生産でもしてるのか？」

『ゾンビを？』

「いやまぁ、そうだけどさ……」

ここまで似たような奴ばかりだと、型番有りの人造生物って感じがするんだよね。ゲームの遣り過ぎかなぁ……って、待てよ？

「ゲーム……？」

何か引っ掛かるぞ。思い出せ、私！

《何か「ＨＯＤシリーズ」のゾンビみたいだな》

「それだぁ！」

無惨のおかげで思い出した。そうだよ、「ザ・ハウス・オブ・ザ・デッド（略して「ＨＯＤ」）」だよ！

ＨＯＤはセガを代表するガンシューティングゲームで、第一作目は洋館を舞台にゾンビを撃ちまくる、まさしく「死の家」と呼ぶに相応しい出来栄えだ。

本作におけるゾンビは厳密に言うと死体ではなく、遺伝子操作により誕生した〝ミュータント〟とでも言うべきクリーチャーであり、見た目が腐っているのは合成生物が故の不安定さが原因である。

まぁ、劇中で死亡した人物が後にゾンビ化して現れたり、何なら制作陣がゾンビ呼ばわりしたりしているので、正直そこまで徹底している訳でもないようだが……。

また、チャプター毎に登場するボスのオーバーテクノロジーっぷりも有名で、空中を浮遊したり属性魔法を使って来たりと、意味不明な能力を備えている。名称が大アルカナで統一されている事も含めて、何かスタンドっぽいんだよね。最初に倒したチャリオットなんて、まんまシルバーなサイボーグだし。

「……あれは現実を参考にした物だったのか？」

鬼太郎ファミリーがそうであるように、過去の体験をメディアミックスした例は幾つもある。HODシリーズも、その1つなのだろう。そう言えば、カミーラの本名に思いっきり〝キュリアン〟って入ってましたね。あの子、ゲームの登場人物でもあったんだ。ダニエルしか出て無いけど。

ま、良いさ。ゲームが過去を参考にしているのなら、ある程度の事前情報を得られているも同然。楽勝だな。風呂入って来る。

《おい、帰ろうとするな》

「あ、バレた？」

《鳴女みたいな奴の考えている事は手に取るように分かる》

「全然嬉しくないけど凄いな」

『ほら、馬鹿言ってないで先に進むわよ』

「《はーい》」

お母様に従いますよ～だ。

そんなこんなで、サムだのシリルだのカゲオだのエビタンだのモウラーだのと言った、懐かしい面々を次々と撃ち殺し、時にはリアルファイトで殴殺しながら進み続けると、

『キヒヒヒッ！　血祭りに上げてやるぞ、貴様ら！』

「《お久しぶりです》」

『何の話だ!?』

鳥頭に蝙蝠の羽を持つ、石悪魔（ガーゴイル）のような人造生物（ヒューマノイド）――――Ｈａｎｇｅｄｍａｎ（ハングドマン）が現れた。

◆『識別コード：Ｔｙｐｅ０４１Ｈａｎｇｅｄｍａｎ』

◆『弱点：翼以外全部』

蝙蝠タイプの小型ゾンビ「デビロン」のドス個体であり、ご自慢の翼で空中を舞い踊りながら爪で引っ掻いて来るのが特徴のボスキャラだ。

だが、その細身が災いして防御力が低く、翼以外の全て身が弱点という哀しみを背負った敵でもある。全身を装甲化したＣｈａｒｉｏｔとは真逆のコンセプトキャラだと言えるだろう。

その分、機動力が厄介な敵であるが、これだけ手数が揃っていれば問題あるまい。

『ＤＩＥ（死ね）！』

「『お前がな！』」

さぁ、覚悟の用意は出来ているか!?

「とりあえずパス！」『ええっ!?』

こいつを相手に鈍重なヘビィボウガンなんぞ背負っていられいられないので、隣にパスしてからクイーンレガリアを召喚し、飛び上がった。そのムカつく面、ダイレクトアタックしてやんよ！

『キィキィ！』『キチチッ！』『ピキャアッ！』

「邪魔邪魔ジャマーッ！」

Ｈａｎｇｅｄｍａｎの指示で襲い来るデビロンの群れを、真っ向から叩き潰す。

こんなヒトダマコウモリ擬きに負ける程、私は雑魚じゃない。背後からの援護射撃

もある。よく初見の武器を扱えるね、オルチーナ。
「お前もだぁ！」
『ギェエエッ!?』
まさか正面突破して来るとは思わなかったのか、Ｈａｎｇｅｄｍａｎは面白いくらいに攻撃を食らい、墜落した。
『……ハッハァアアッ！』
「何だと!?　いやーん♪」
と言うとでも思っていたのかと言わんばかりに、何事も無く引っ掻いてきた。幸い攻撃力は大した事無いが、空中で叩かれた以上、落ちるのはこちらである。
しかし、打撃を与えたからには、操虫棍の効果でエキスを奪い取って――――、
『無駄だ！』
「なっ……ベホマァアアアアッ！」
やろうとしたら、何故か逆にこっちの妖怪エキスが吸い取られた。な、何でやねーん！

『オレ様には能力反射装甲が備わっている！　特殊能力は無意味だぜぇ！』
「何だ、その後出しジャンケンみたいな設定！」
ふざけるなよ貴様ぁ！　どうして素直に殺されないんだ！　私はお前の苦しむ姿が見たいんだよ！
『凄い手前勝手な事を考えていそうな気がする！』
マインドスキャンするんじゃねぇ！　野郎、ぶっ殺してやる！
「操虫棍が通じない？　ならいらねぇよ、こんなもん！」
『ウギャオッ!?』
という事で、私は役立たずな武器を投げ槍して、Ｈａｎｇｅｄｍａｎの額を穿った。
「波、波、波が出る５秒前！　【超電導波（サンダーフォース）】！」
『ゲロォオオオッ!?』
さらに、口から【超電導波】……と見せ掛けた気光ブレスを発射、今度こそＨａｎｇｅｄｍａｎを叩き落してやった。
『ば、馬鹿な……オレには魔法反射装甲も備わっているのに……』

「このブレスは魔法攻撃ではなく、純然たるエネルギー攻撃。つまり物理的なダメージなのだ」
『何だそのオレ様ルール!?』
「喧しい！　文句はランランに言え！」
『えっ、誰、パンダ!?』
「いいや、家のラージャン（いやしキャラ）だ！』
『絶対に嘘だぁっ！』
「煩い黙れ、そして死ぬが良い！」
死んだゾンビだけが良いミュータントだぁ！
「やっぱりそれ返せ、オルチーナァッ！」
『いや、勝手過ぎない!?』
「うるせぇ！　お前も殺すぞ！」
『いや切れ過ぎでしょ!?』
知るかぁ！　私はもっとゆっくりと余暇を過ごしたかったんだよぉ！　それをお前らがぶっ壊したんだ！　だから、今度は私が全部ぶっ壊してやるぅっ！

『た、助けてくれぇ……！』
「OK！」
『プギャアアアアッ！』
『《これは酷い》』
そして、私はオルチーナから奪い返したニャノンで、戦闘力53万みたいな命乞いをするＨａｎｇｅｄｍａｎを穴開きチーズにしてやった。どうだ、楽になっただろう？
「はぁっ……最っ高に気持ち良いぃいいいっ！」
『《……》』
「……何か言いた気だな？」
『《疲れてるのよ、アデル》』
「じゃかぁしいぞコラァッ！」
さぁ、いい加減この馬鹿騒ぎを終わらせようか。やる事はもちろん皆殺しだぁ！
◆◆◆◆◆◆
その後、しっかりと回収したクイーンレガリアとネコ獣砲ニャノンで雑魚敵をク

ラッシュしながら、屋敷の奥へ奥へと進んでいたのだが、何時の間にか内装が変化していた。白いサイバーな壁・床・天井が続く、例の未来オーバーな研究施設である。

ゲームをした当初は「1個人でこんな施設持てるか」と突っ込み、後に公式から「カレッブ・ゴールドマンが出資していた」と回答が為され、「例えそうでもオーバーテクノロジー過ぎるだろ」と再突っ込みしたものだ。「スタンドの矢を使いました」と言われた方がまだ納得出来る。それは今でも変わらない。こんな意味不明な施設を誰にも知られずに作るなんて、それこそ魔法でしょ。

「そう言えば、3姉妹はどの辺りに居るんだ？」

『ちょっと待って。……うん、うん、分かった。3人共、もうすぐこっちに合流出来るそうよ。あっちでは目ぼしい成果は無かったみたいね』

「そうか……」

今更だけど、血の繋がりで距離を問わず念話が出来るって便利な能力だよね。血縁者にしか適用されないって弱点にも繋がるんだろうけど、それでも破格の能力である。念話通信って妨害され易いからね。

逆に言うと、そんな凄い能力が有るにも関わらず、ローズと交信が出来ていないという今の状況は、それだけ異常事態という事だ。少なくとも、ローズの身にとんでもない事が起こっているのは確かね。早く見付けてあげないと。まだ赤ちゃんだもん。

「よし、それじゃあ次はこっちに――――――」

『キュァアアアアッ！』

角を曲がろうとしたら、糸に巻かれた。何じゃこりゃあ!?

「フゥン！」

『《スゲェ馬鹿力》』

「レディに何て事を言うんだ！」

私は魔女という名の妖怪なんだ、これくらいは簡単よ。

いや、それよりも、この糸の出所は何処だ？

『キシャアアアアッ！』

「《お久しぶりですｐａｒｔ２》」

すると、向こうから飛び出して来た。

全身が鋼鉄の装甲で覆われた、馬鹿デカい蜘蛛。皆大好き、ＨＯＤ切ってのクソ雑魚ボスキャラ、Ｈｅｒｍｉｔ（ハーミット）である。

だが、この個体も何らかのアレンジが加えられているのか、甲殻が毒々しい紫色になっている上に、まるでＨＯＤ４のＬｏｖｅｒｓを彷彿とさせる巨大な鋏角が発生している。ノリも踏襲しているのなら、あれで弱点をガードするのかもしれない。

◆『識別コード：Ｔｙｐｅ６８０３Ｈｅｒｍｉｔ』

◆『弱点：頭部』

「おりゃー」『そーい』

とりあえず、魔弾と鉤爪で攻めてみました。

――――ガキガキガキィン！　ボキィッ！

『「硬ぁっ!?」』

魔法も能力も無効化する様子は見られないが、単純に馬鹿硬かった。煤すら付いてないんですけど。

しかし、こいつも所詮はＨｅｒｍｉｔ。パープルになろうが、頭を殴れば一巻の終わりだぜぇ！

『ボァアアアアアアッ！』

『「火ィ噴いて来たぁっ!?」』

お前は何時からヤツカダキになったんだ。

『キュァアアアアアッ！』

『「スライディングぅ！」』

さらに、小蜘蛛を放って糸で引っ張って貰う、お馴染みの動きまで再現。その上、亜種個体を参考にしているのか、毒の塊まで吐いて来た。

お前、幾らクソ雑魚ナメクジだからって、他作品の力を借りるんじゃない！

つーか、どうすりゃ良いんだ、こいつ。ダメージ自体が与えられないんじゃ、どうしようも――――、

《ハンドパワーです！》

『キィイイイイッ!?』

おおっ、出たな超能力ベイビー。そうか、装甲が分厚いだけで魔法や超能力は通

じるんだな。だったら搦め手で弱らせてやる！

「【重力砲（グラビティ・キャノン）】！」

『無駄無駄無駄ァッ！』

という事で、閃光玉で目晦ましてから高圧の重力を発生させる魔法で足止めし、動けなくなった所にオルチーナが只管炎と氷の魔法をぶち込んで行く。Ｃｈａｒｉｏｔ時にもやった、熱疲労作戦だ。これで装甲が無力化……、

『キュアアアアァオオオッ！』

「『いや、だから硬いって！』」

されなかった。Ｃｈａｒｉｏｔだったら今頃紙装甲になってる筈なのに。一体何で出来てるんだ、その甲殻!?

《いや、効果はありそうだぞ》

しかし、全くの無意味という訳でもなく、少しではあるが、装甲にヒビが入り始めた。

ならば、このまま行けば勝てると言いたい所だが、明らかに手数が足りてない。Ｈａｎｇｅｄｍａｎの時とは逆に、ぶっ壊してもぶっ壊しても斃れないんですけど

!?

マ、マズい、これじゃあ今すぐにでも魔力が枯渇して――――――、

『『そうは行かないわぁっ！』』

『ギュアアアアアアアアッ!?』

と、魔力切れというＲＰＧみたいなピンチに陥った私たちの前に、口元が汚い３人の美女が現れた。ベイラ、カサンドラ、ダニエラの吸血鬼３人娘が合流したのである。

「よしゃあああっ！」

『死に晒せぇええ！』

《いい加減にしろ！》

『ギィィ……ッ！』

そして、勝負の流れを掴む為、３姉妹とも協力して遠慮の無い魔法攻撃を仕掛けた事により、Ｈｅｒｍｉｔはようやく斃れた。くそっ、モンハンみたいな耐久力しやがって、恥を知れ！

「……終わらせるわよ！」『そうね』《もう疲れた……》

さぁ、後はラスボスの顔を拝むだけだ。張り切って行こう！

……魔力が切れちゃったけど。

◆ベイラ、ダニエラ、カサンドラ

オルチーナ・ドミトレスクの娘たちで、所謂中ボスポジションのキャラクター。厳密に言うと〝娘役〟であり、オルチーナと血の繋がりは存在しておらず、カドゥを女性の死体に植え付け、そこから生まれた蠅のような生物が群体となって人に擬態しているだけである。これらの虫は肉食で、何人ものメイドが犠牲となっている。虫の集まりなので物理的なダメージは与えられないが、寒さが弱点であり、凍り付くとそのまま死んでしまう。

ベイラは物静かで頭が切れ、カサンドラは快楽殺人鬼、ダニエラは痛々しいメンヘラと、それぞれ個性は有るが、基本的に人間を見下している上に真面な戦闘経験が無い為、イーサンという化け物の前に屈する事となった。

本作ではきちんと血の繋がった娘で、アスワングの能力として虫に分裂はするも

のの、ちゃんと生身が存在している。末妹のローズを猫可愛がりしており、此度の一件では母親であるオルチーナよりも先に、目を血走らせて逆襲した。

ザ・ハウス・オブ・ザ・キュリアン

探し物は何ですか？

『いやー、大変だったわ。何か生産プラントっぽい所にさぁ、怠けないナマケモノみたいな奴が居たのよ。スッゴイ動くし、滅茶苦茶跳んで来てビックリしたわ』
『こっちはミミズドラゴンのクインテットだったわ。硬い上に一斉攻撃を仕掛けて来るから、マジヤバかったわよー』
『私の所は歌う蛸が居たわね。アレ絶対にクトゥルフ神話の出身よ』
……どうやら、３姉妹は各々でボス戦を経験して来たらしい。何故かＨＯＤ４のボスとは交戦していないようだが、何か意味があるのだろうか？
意味と言えば、そもそもどうしてローズは攫われたのだろう。アスワングでありマンババランでもあり、ヴァンパイアの血も引いているという稀有な血統なのは認めるが、逆に言えばそれだけである。わざわざドミトレスク一家を総出で敵に回す

リスクを冒してまで実行する意義は薄い。
そうだ、考えろ、私。自棄っぱちのトリガーハッピーになってる場合じゃ無いのよ。私は未だに最高司令官なんだ。己を鼓舞しろ。頑張れ私、頑張れ。私は今までよくやって来た。私は出来る子なんだよ。今日も、これからも、疲れていても、俺が挫ける事は絶対にない、たぶん。
《炭治郎かお前は》
「ペガサス・J・クロフォードか貴様は」
嗚呼もう、やんなっちゃう。プライバシーって物が無いのか。
《そんな事より、地下への秘密通路があるみたいだぞ》
「出たなサイコメトリー。ズルいんだよ」
《いや、別にズルくても良いだろ。最終的に勝てば良かろうなのだ》
ウィ～ンウィンウィ～ンと無惨が地下への隠し通路を発見した。
ちなみに、入り口の場所であるが、
「……って、何でトイレなんだよ？」
『《秘密の部屋だからじゃない？》』

「そういう問題か……？」

トイレの中だった。それも水洗のレバーがスイッチである。隠す気あんのかと言いたくなるが、一応はギミックが設けられており、蓋を閉めた上でレバーを前に引っ張り、丁度3回転半してから押し込むと開くようになっている。地味に面倒な仕掛けだ。

「ともかく、入ってみようか」

『『えー、嫌なんだけどー』』

「ローズがどうなっても良いのか」

『『さぁ、急ぎましょう！』』

相変わらずのシスコン振りね、君たち。

さぁ、そろそろこの馬鹿騒ぎも終わらせようか。

◆◆◆◆◆◆◆

微妙に汚い便器が動き、スルスルとせり上がって来た螺旋階段を下りて行くと、

『グヴェエエエイッ！』

『わきゃーっ!?』

スチームパンクな壁を叩き壊して、巨大な手がベイラを掴んだ。
むろん、すぐに分裂して脱出したのだが、この汚い薄紫色の手は、もしかして

――――――――、

『グヴェァィィ！』
「《出たな正義（まさよし）！》」
野太い４本の腕を持つ、死斑に爛れた巨人のゾンビ、Ｊｕｓｔｉｃｅ（ジャスティス）こと正義くんである。だらしなく垂れた舌と手数を全く活かせないアホの子っぷりが人気で、一部のユーザーからはＨＯＤのマスコット扱いまでされている。最初に戦うボスだからね、仕方ないね。
◆『識別コード：Ｔｙｐｅ００５３Ｊｕｓｔｉｃｅ』
◆『弱点：舌』
とは言え、クソ雑魚ナメクジだったＨｅｒｍｉｔでさえ魔改造が成されていたのだから、油断せずに行こう。事前知識なんて大して役に立たないと今回の戦いで思い知ったからね。私はデータを捨てる！
『『食らい尽くせ、「カドゥボルス」！』』

『グヴェエエエッ!?』

まぁ、私が手を出すまでも無い気がするけど。３姉妹の「悪魔の羽虫（カドゥボルス）」が蹂躙するだけの簡単なお仕事です。

『『『ベホマラァアアアッ!?』』』

と思ったら、３姉妹が苦しみ始めた。元々悪い顔色が更に悪化し、Ｊｕｓｔｉｃｅと殆ど同じ紫色になっている。

『ど、どうしたんだい!?』

『『お、お腹が痛い……！』』

『トイレの中で？』

「……食中りしてんじゃねぇよ」

どうやら、Ｊｕｓｔｉｃｅのお肉は妖怪にも通じる程の猛毒だったらしい。不死身に近い吸血鬼が腹を下すとは驚きだが、とりあえずは回復魔法を――――――、

バチィイイイン！

ええっ、魔法が跳ね返された!?

何だ、このマホカンタみたいな毒は。Ｊｕｓｔｉｃｅの能力は、ナノサイズの魔法反射装甲を敵に取り込ませる事で、内部から破壊する事だったのか!?

殺されるのが前提のスキル止めて。月の兎かお前は。どっちかって言うと〝獅子身中の虫〟って感じだけど。

『ど、どうしよう、アデル!?　このままじゃ、娘たちが……』

……って、言うとる場合か。魔法で解毒出来ないとなると、一体どうすれば――――。

「あっ、そうだ！」

私たちには〝アレ〟がある！

《あっ、おいコラ!?》

「これを飲むんだ！」

私は知らんぷりをしていた無惨から哺乳瓶を奪い取り、苦しむ３姉妹に差し出した。

『『何それ？』』

「零余子印の苺ミルクだ」
『『えぇ……』』
納得し兼ねるのは認めるけど、効果は保証付きだから！
『す、凄い、本当に治ったわ』
『それに美味しいわね』
『良薬口に苦しって言うけど、これは別物ね』
すると、あーら不思議。毒は奇麗さっぱり無くなった上に、体力と魔力まで全回復した。威力がヤバ過ぎるだろ、零余子のミルク。零余子は癒しの神だった……？
『あら、本当に美味しい』
お前も飲むなよ、オルチーナ。
いや、魔力がカツカツだったから、私も飲むべきなんだろうけど、
《……》
無惨の視線がねぇ！
《私の食事を返せ》

「仕方ないでしょ」
《じゃあ出せ》
「無茶言うなよ」
《そうだな、生娘には無理だろうて》
「この……！」
煽りやがって、このお子様め！
フーンだ、飲んでやるもんね。お前の分ねぇから。牛乳でも絞ってろ。
それにしても、本当に何なんだ、この施設は。水面下で動いていたにしろ、魔法に詳し過ぎるだろ。錬金術師なのか、ここの主は。
――――いやまぁ、何となく誰が取りを飾るのかは予測が付くけどね。ＨＯＤの顔と言えば、あの人でしょ。
と、そんな感じでワチャワチャしながら、地下施設を攻略していたら、
「『あっ』」
カミーラとバッタリと鉢合わせした。怪我も洗脳の痕跡も見られず、五体満足のようだが……。

「一体今まで何をしていたんだ。心配して探しに来たんだぞ」
『す、すみません//』
おい、もじもじしてないで状況を説明しろ。
『それが、夢の中で父に呼ばれた気がして……気が付けばここに居ました。どうしてかは、よく分かりません』
しかし、カミーラ自身にも分かっていないようで、どうにも釈然としない。
「というか、アナタの父親は――――――」
『はい、既に亡くなっています。ワタシが生き埋めにされた、あの日に……』
この子がまだキーエフ・キュリアンであった頃、実兄のダニエル・キュリアン共々不治の病に侵されていた。父親であるロイ・キュリアンはそれを嘆き、研究するも叶わず、2人は死の淵にあった。
そして、己の無力に精神を病んだ彼は、オカルトに手を出すばかりか、恐ろしい生体実験をし始める……。
その後、初代カミーラの粉骨に侵されたキーエフは現代のカミーラとして蘇った末に暴走し、ダニエルはどうにか新薬が間に合い助かったものの、その頃にはロイ

はすっかり気が狂っており、生涯分かり合う事が無いまま天寿を全うする事となる。

さらに、カミーラは暴走の最中に〝世界お化け旅行〟をしていた鬼太郎たちに見付かり、死闘の果てにロイは死亡、カミーラは最後まで自分を取り戻せぬまま生き埋めとなった。

そして、時は経ち、地下の暗黒世界で悲しみの果てに覚醒したカミーラは、修行中の私に封印を解かれ、三度この世へ舞い戻った。

それが昔カミーラから聞いた、彼女が吸血鬼として生まれ変わり、私と出会うまでのあらましだ。カミーラの事以外、すっかり忘れていたよ。父親とか実兄の名前とかね。

そう、今回の騒動が起きるまでは。

だが、〝ロイ・キュリアンが実は生きていた〟なんて安直な展開は流石に無いだろうし（と言うか年齢的に無理）、オカルトに手を出していたからと言って、１個人でここまでの騒動は起こせないだろう。ゲーム本編宜しく、確実に裏で糸を引いている黒幕が居る。もしくは「ＨＯＤⅢ」よろしく、「Ｗｈｅｅｌ ｏｆ Ｆａｔｅ」みたいなプログラムが存在するのか。

「その答えは、この先にありそうね」
『そうですね』
カミーラのすぐ近くで、誰かを招き入れるかのように口を開いている、更なる地下へと続くエレベーター。ここまで来たら、意地でも正体を暴いてやろうじゃないの。
◆◆◆◆◆◆
そんなこんなでエレベーターを下って行くと、そこには初代ＨＯＤの終点（ラストステージ）を彷彿とさせる八角柱の広大な空間。真ん中には如何にも未完成品が封印されていそうな機械が鎮座しており、
『『『ローズ！』』』
その目の前には、カプセルinしたローズの姿が。デザインがどう見てもオキシジェン・デストロイヤーの容器だが、そんな入れ物で大丈夫か。
――――ジジジッ！

しかし、突如として壁から現れた〝ナニカ〟が立ちはだかる。

壁面を構成していたであろう銀色のナノマシンの集合体であり、悪魔を思わせる人型生命体の周りを、金属片で形作られた巨大なリング（よく観るとコロシアムみたいな形をしている）が土星輪のように回転しているという、若干シュールな姿をしている。特に飛行する為の機構は見当たらないが、激しく帯電している事を鑑みるに、電磁浮遊しているのかもしれない。

《ワタシハ、キュリアン。全テヲ治シ、取リ戻ソウ。アノ頃ノ、ワタシタチヲ》

「《まさかのお前かよ》」

どう見てもＷｈｅｅｌ（ホイール）ｏｆ（オブ）Ｆａｔｅ（フェイト）です、本当にありがとうございました。

しかし、書き換わり始めた壁面に〝Ｗｈｅｅｌ（ホイール）ｏｆ（オブ）Ｆｏｒｔｕｎｅ（フォーチュン）〟と表示されている辺り、こいつも既存の〝彼〟とは別物なのだろう。色んな意味で。画面の一部が家族の写真だったり、思い出の品や場所だったりするから、尚の事〝これは違う〟と感じさせてくれる。そのどれもが楽しそうなのが、何とも……。

◆『識別コード：Ｔｙｐｅ０００Ｗｈｅｅｌ ｏｆ Ｆｏｒｔｕｎｅ』

◆『弱点：不明』

《オオォォォ……ッ！》

「このっ、問答無用か！」

と、Ｗｈｅｅｌ ｏｆ Ｆｏｒｔｕｎｅが運命のルーレットを回し始めたので、急いでＵＮＫＮＯＷＮ（笑）な弱点である胸部の六芒星を撃つと、「β」の文字で止まった……「β」って？

《アアッ！》

いや、煩いよ。輪っかを変な物に作り変え始めやがって。

『ハヴォオオォォン！』

「《「Ｗｏｒｌｄ」だぁ!?》」『時は止まりそうもないですけどね』

いや、それはマズいよ!?

Ｗｏｒｌｄと言えばＨＯＤ４のラスボスであり、何故かEXの方で本気を出した冷凍仮面ライダーである。全身が冷え冷えのクリスタルで構成されており、蜻蛉のような顔と翅（折り畳み式が６枚）に胸部の丸分かりなＵＮＫＮＯＷＮが特徴で、見ての通り氷の魔法攻撃を得意としている。

そう、魔法だ。超能力の類かもしれないが、氷塊弾や氷の斧ならまだしも、氷龍

を召喚して攻撃するなんて、魔法と変わんないでしょ。それは他のラスボスにも言える事だけど。

つーか、〝ボスの姿を模した結晶体で攻撃する〟ってＥｍｐｅｒｏｒだろ、それは。何で退化したし。

『コォオオオオッ！』

ほーら、言ってる傍から、氷の龍が襲い掛かって来た！

「はい、これパス！」

『だから、何で私!?』

「いいから、あのＵＮＫＮＯＷＮ（笑）を撃て！　多分それで攻撃をキャンセル出来るから！」

『いや、ゲーム脳止めろ！　あと、せめて多分じゃなくて絶対にして、お願いだから！』

「煩い、黙れ、早く撃て！　行くぞ、カミーラ！」『……ハイッ！』

とりあえず、ネコ獣砲ニャノンをオルチーナにパスして、私はクイーンレガリアを手に、カミーラを伴ってＷｏｒｌｄに立ち向かった。ＨＯＤのラスボスは必ず１

つは「画面外攻撃」とかいう卑怯な技を持っているので、Ｗｈｅｅｌ ｏｆ Ｆｏｒｔｕｎｅが生み出したＷｏｒｌｄも似たような扱いなのだろう。そうだと良いな～。

だから、私たちは背後に隠れるＷｈｅｅｌ ｏｆ Ｆｏｒｔｕｎｅを攻撃するのだ。

『あの氷を砕くよ、お前たち！』

『『Ｙｅｓ､Ｙｏｕｒ Ｍａｊｅｓｔｙ Ｍａｊｅｓｔｙ!』』

『真面目にやりなさい！　お母さん怒るよ！』

もちろん、氷龍とＷｏｒｌｄはオルチーナたち任せ。幸いＷｏｒｌｄは単なる偶像なのか、魔法反射装甲や能力反射装甲みたいな卑怯極まるスキルは持ってないみたいだし、問題あるまい。

「はぁっ！」『てぁっ！』

――――――カキィィンッ！

「お前は持ってんのかい！」『残念でしたね……』

だが、本体であるＷｈｅｅｌ ｏｆ Ｆｏｒｔｕｎｅには両方共が備わっているよう

で、物理的なダメージ以外は通らないようだった。その癖、向こうは電気魔法で遠距離攻撃をし放題。ズルいぞ貴様。

だったら、死ぬまで殴ってやらぁっ！

《グヴォオオ……！》

プラズマ弾の迎撃をカミーラに託し、私はとにかくＷｈｅｅｌ ｏｆ Ｆｏｒｔｕｎｅの「六芒星の呪縛」を殴打し続けた。飛び交う流れ弾を避けながら接近するのは至難の業だが、元来より近接戦に難の有るＷｈｅｅｌ ｏｆ Ｆｏｒｔｕｎｅの反撃は懐に潜り込めば大して痛くないので、割と簡単に攻撃モードをキャンセル出来た。Ｅｍｐｅｒｏｒ染みた電磁ソードを装備出来るようだが、だからどうした。

『『カッチカチやぞー』』

まぁ、そうこうしている内に、３姉妹は氷漬けにされてしまったが。相性が悪いから仕方ないけど、もう少し頑張ろうよ。君たちのお母さん、滅茶苦茶撃ってるよ？

《フォオオオッ！》

『ハァアアッ！』

「《その日人類は思い出したぁ!?》」『祈った所で何も変わらない事をですか？』

さらに、Ｗｈｅｅｌ ｏｆ Ｆｏｒｔｕｎｅが再びルーレットを回し、「Ω」で電極針が止まったかと思うと、ＨＯＤ界の巨人こと Ｍｏｏｎ（完全体）が戦場にログインした。筋肉の繊維が丸出しな悪魔然とした巨人であり、超大型巨人よろしく高温と光熱を武器とするラスボスである。弱い癖に画面占有率が高いんだよ、お前は。

『『『解けました！』』』

「《さっさと働け》」『忙しい人たちですね……』

その馬鹿みたいな熱のおかげで3姉妹が解凍されたので、とりあえず結果オーライって事で。

「芸が無いなお前はぁ！」《やったれやったれー》

《グヴォオオッ！》

とは言え、やる事はさっきと変わらない。オルチーナたちが攻撃を食い止めて、私たちがダメージを稼ぎつつキャンセルさせるだけ。ラスボス級に有りがちな〝作業〟って奴だ。仕方の無い所は有るんだろうけどね。

そもそも、〝ランダムに攻撃が変化する〟って、一見すると厄介だけど、実際は

お互いに面倒なだけなのよ。どっちもパターンが分からないから。欠陥品じゃねぇか。

「――――――という事で死ね！」

《ヴォオオオオオォォ……!?》

そんな流れ作業を通算で6回くらい繰り返した所で、Ｗｈｅｅｌ of Ｆｏｒｔｕｎｅは遂に力尽きた。ＭＯＴＨＥＲまで召喚しやがって。お母さん同士が小競り合うヘンテコな構図が生まれちゃったでしょうが。

《……ダニエル、キーエフ、君タチニハ、ワタシガ必要ダ。……ソウダロウ？》

『それはそっちの方でしょう、父さん』

崩れ行くＷｈｅｅｌ of Ｆｏｒｔｕｎｅに対して、にべも無い答えを返すカミーラ。その表情は憎んでいるようでもあり、悲しんでいるようにも見えた。彼女の過去を鑑みると、こちらとしても何とも言い難い物がある。

ともかく、これで全てはハッピーエンド――――――となる筈も無く、

『『『あっ、ローズが！』』』

Ｗｈｅｅｌ of Ｆｏｒｔｕｎｅが消えるのと同時に、ローズの入ったカプセルが

機械の中に取り込まれる。
さらに、不気味なピアノの音を奏でながら機械が展開し、
《久し振りだな、現世の諸君。地獄の底より、私は還って来た！》
中から白銀の悪魔が姿を現した。
◆『識別コード：Ｔｙｐｅ０Ｍａｇｉｃｉａｎ』
◆『弱点：不明』

◆ローズマリー・ウィンターズ
ご存知「バイオハザード ヴィレッジ」に登場する、ウィンターズ夫妻の愛娘。究極完全態かびるんるん（特異菌の完全適合者）とアルティメットドキンちゃん（生物兵器「エヴリン」の力を引き継いだ適合者）が両親である為か、「７」のラスボスを鼻で嗤う潜在能力を秘めており、その力をマザー・ミランダに狙われる事となる。
具体的にどういう能力なのかは、今の所は不明。一方通行さんよりヤバいのかも

しれない。少なくとも神にも等しいマザー・ミランダを〝人が倒せる程度の存在〟に弱体化出来るくらいに凄いのは確定である。

本作では「エヴリローズ・ドミトレスク」として登場。こちらでもヴァンパイアとアスワングのハイブリットなので、色々とヤバい能力を持っており、そこを閣下に狙われる事になる。今回は五体こそ満足ではあるものの、水中酸素破壊剤の容器に押し込められてしまったが、大丈夫なのだろうか……。

ザ・ハウス・オブ・ザ・デビル

黒幕は一体誰なんでしょウネー？

《幾星霜……待ちに待ったこの日が、遂に来た！　私を完成させる、この時が！　この幼き命は生贄であり、貴様らは歴史的瞬間の目撃者なのだ！　さぁ、私に殺される事を光栄に思い、雪花のように散るが良い！》

「Ｍａｇｉｃｉａｎ（マジシャン）」。

それは永遠の未完成にして、ＨＯＤシリーズを代表するボスキャラである。所々が欠けた白銀の装甲に身を包み、トランザムの如く空中を高速移動しながら、赤の魔術師よろしく火球を叩き付けて来る姿は、まさしくスタイリッシュ。見た目もサイバネティックな悪魔だし、ＢＧＭもカッコ良いし、初見のプレイヤーは誰もが「お前のようなゾンビがいるか」と思った事だろう。実際、彼はミュータントなので、ゾンビではないのだが……。

そんなＭａｇｉｃｉａｎ閣下が、目の前に浮いている。たぶんＨＯＤ４ＳＰ時くらいの流暢な言葉を並べて。

これはもう、

「《サイン下さい》」

《何故そうなる。初対面だろう、貴様らは》

そう言われましても。閣下は閣下してるんですよ！

《知るか、死ねぃ！》

しかし、そんなの関係ないＭａｇｉｃｉａｎ閣下は、当たり前のようにトランザムを仕掛けて来た。相変わらず速いし、カッコ良い。

……って、言うてる場合か。Ｍａｇｉｃｉａｎ閣下がお相手して下さるんだから、全力で応えねば！

「行くぞ、カミーラ！」『えっ、あっ、ハイ！』

私はクイーンレガリアを手に、カミーラは火球を両手に、襲い来るＭａｇｉｃｉａｎ閣下へ飛び掛かった。

「喰らえっ！」《喰らわん！》

私の空中攻撃は、物の見事に躱された。本当に素早い。残像すら質量を持っているから、多方向から攻撃されているような物だ。

だが、私は１人じゃない。頼もしい部下が居る。鳴女と違って、信用も信頼も出来る、素晴らしき吸血鬼が！

『調子に乗るなよ、欠陥品！』《貴様に言われたくはない！》

紫色の鬼火と、真っ赤に燃え上がる火球が入り乱れ、打ち消し合う。目まぐるしい化学反応によってポンポンと弾ける様は、まるで花火の打ち上げである。食らったら魂ごと蒸発しそうだが。

ちなみに、同じ場に居合わせている筈のドミトレスク一家はと言うと、

『『『ローズ返せゴラァッ！』』』

《貴様らの相手はこっちだッ！》《フフフ！》《フハハハッ！》《ハッハッハッ！》《ハーッハッハッ！》

『『『複製品が出て来た!?』』』

Ｍａｇｉｃｉａｎ閣下の複製品と戦っていた。そう言えば、ＨＯＤ４ＳＰでそんな事してたわね。この閣下も自らのレプリカントを製造出来るというのか。システ

ムそのものが黒幕っぽいしね。これは助力に期待するのは無理かな。

まぁ良いさ。せっかくの閣下との晴れ舞台だ。しっかりバッチリと地獄へクーリングオフしてやろう！

「カミーラ！」『了解！』

《グォオオオオオッ!?》

と言う事で、コンビネーションアタックをかましてみました。伊達に上下関係を積んではいないのよ。

そして、見事に弱点である筋肉部分を焼き貫かれまくった閣下は、何時ものように自爆オチ――――――、

「『やったか!?』」

《馬鹿め！　それは死亡フラグだ！　祝福されし完成を、とくと見よ！》

――――――しなかった。

ローズを取り込んだ機械から何か（たぶんローズの神血）を吸収し、その姿を変えていく。爛れた筋肉が蘇り、その上に白金色の装甲が形成され、背後に後光のような巨大なリングが顕現する。

さらに、そのリングに青白い炎が灯り、６枚（正確に言うと翼の先から翼が生えているので12枚）の焔翼を差す、神々しくも禍々しい姿となった。

これぞＭａｇｉｃｉａｎ閣下の完成形。本来在るべき姿なのだろう。その名は、

◆『識別コード：Ｔｙｐｅ ∞ Ｄｅｖｉｌ』

◆『弱点：なし』

「《『おおー！』》」

《拍手をしている場合か!?》

いや、だって、こんな姿を見せられたら……ねぇ？

良く出来ましたねぇ～って言いたくもなるでしょ？

《フン、おふざけはここまでだ。塵も残らず消えるがいい！　ハァアアアアッ！》

「『うわぁっ!?』」《さらばー！》↑※１人だけテレポートで逃げた

Ｍａｇｉｃｉａｎ閣下改めＤｅｖｉｌ閣下が天を仰ぐと、四方八方にゲートが現れ、そこから蒼い焔が噴き出した。鋼鉄も一瞬で蒸発する、完全燃焼系の業火である。

「このっ！」『閣下の分際で！』

《無駄無駄無駄なのだァーッ！》

「『瞬間移動を連発するな！』」

しかも、高速移動どころか空間転移を自由自在に使い熟し、全ての攻撃を回避しつつ、あらゆる方向から攻撃を仕掛けて来る。

《時よ止まれ！　世界（Type β）！》

「『……ドペェーッ!?』」

そして、この時間停止能力だ。たった数秒間だが、戦闘中に無防備かつ無意識状態に持ち込むとか、卑怯にも程がある。

《フハハハハッ！　これぞ完成した私だ！　最早誰にも止められぬ！　世界よ、今こそ全ての命の時を止めよ！》

クソッ、魔王ムーヴかましやがって！

しかし、勝ち目がまるで無いのも事実。世界すら御する力の持ち主を相手に、私たちは無意味――――、

「『なぁんて言うと思うかぁっ！　【世界の終焉（エンド・オブ・ザ・ワールド）】！』」

《何ィッ!?　時を止め返しただとぉ!?　う、動けぬぅ！》

古代魔法を舐めるなよ。初見ならまだしも、時間停止なんて使い古された能力が、今更通じると思うか！

ラスボスなんてな、破壊力以外を追求すれば大抵時間関係の能力に落ち着くのは、周知の事実なんだよ！

敵を知り、己を知れば、百戦危うからず。世界中に知れ渡ってるような能力（スタンド）は、弱点も露見しているような物だ。その為の知恵の実であり、叡智（まほう）なんだよぉ！

所詮、貴様は井の中の蛙。お前より理不尽な奴、私はとっくに見て来た。世界は閣下が思うより、ずっと広いんですよぉっ！

「喰らいやがれッ！」『ワタシの未来、返して貰うわ！』

「『オラオラオラオラオラオラオラオラオラァ！』」

《馬鹿な!?　……くっ、何時の日か、必ず復活し――――――》

「『続きはＷＥＢで！』」

《グワバァアアアアアアアアアアアアアアア！》

最後は私とカミーラの魔法を込めた拳が多段ヒット。ピクリとも動けぬＤｅｖｉ

1閣下を速やかに爆散せしめた。南無三！

『終わりましたね……』「そうだな……」

『『『こっちも終わったわよー』』』

《ウム、大儀であった》

『『『『「死ね、このクソ赤子」』』』』

奇妙な夜祭も、これで終わり。後はローズを物言わぬガラクタと化した機械から取り出して、帰るだけである。

それにしても、一体どうして今更、こんな事が起きてしまったのだろうか。意味不明な事続きで気にしている暇が無かったが、流石に原因を追究しない訳にもいくまい。

『その答え、私がくれてやろう！』

「……は？」

すると、何処からともなく襖が現れ、鳴女がピシャッと登場した。

おい、お前まさか……「サプライズ」だとか言わないだろうなぁ？

『サプラ～イズ♪』

本当に言いやがったぁ！

「――――――ストリウム光線！」

『危なッ!?　いきなり何をしやがる！』

「それはこっちの台詞だぁ！　どういう事か説明しろぉ！」

幾ら貴様とて許し難い物はあるぞ！

《ああ、なるほど、そういう事か》

「おう、何だ無惨。ノコノコ戻って来やがって。何が言いたい？」

すると、無惨がポンと何かを閃いたようで、したり顔を浮かべる。幼児虐待してやろうかクソが。

《鳴女はあれだ、何時までも煮え切らないアデルとカミーラをくっ付ける為に、肝試し的な何かを企画したんだと思うぞ》

「『はぁ!?』」

《あと、おそらくだが、一部始終を動画にしている筈だ。〝アデルとカミーラがてぇてぇ過ぎる〟とか、そんなタイトルで》

『おー、よく分かりましたね。流石は我が子』

さらに、今明かされた衝撃の事実。カミーラが居なくなってから今に至るまでの全てが、文字通りの茶番劇だったのである。無限城ちっちゃい物倶楽部の奴らは、ガヤよろしく拍手までしてやがるし。

だが、そう考えると納得の行く部分も多い。カミーラを夢現にしたのは姑獲鳥だろうし、ｍａｇｉｃｉａｎ閣下を完成させたのは鳴女だろう。情報提供者はチャラトミ辺りか。ハイスペックな連中が揃ってるからな、鳴女一派は。

まぁ、それはそれとして、

「『ゲッタービームッ！』」

《『だから危ないって!?』》

「喧しいわ！　ドミトレスク家まで巻き込んでおいて、何を言ってるんだ貴様！」

『そうですよ！　人の過去にまで踏み込んで！』

『『『やーっておしまい！』』』『あぶー』

プライベートって言葉を知らんのか、貴様らは。

「まぁまぁ、お二方、ドミトレスク家の皆さんも落ち着いて下さいな」

「チャラトミぃ……！」

「これはロイ・キュリアンが死後に発動するよう仕掛けておいたプログラム。遅かれ早かれこうなっていたでしょうし、俺らが介入しなかったら、ローズは跡形もなかったと思いますけど？　一応、あれでも弱体化はさせてたんですからねぇ」

「ぬぅ……」

そう言われると、強く出られない。

「……ちなみに、何時から気付いてたんだ？」

「旅行に出る少し前ですかね。何か俺の組んだシステムにクラッキングしようとしてた奴が居たから、逆にハッキングしてやって、そうしたら発信源が分かったんで、新婚旅行のついでに解決しちゃおうかなと。世界最後の日が近いのに、余計な真似はされたく無かったっスからね～」

「あっ、そう……」

嗚呼もう、やんなっちゃう。

「――――という事で、ウチの阿呆が済まないな」

『別に良いわよ。何だかんだで楽しめたし、ローズを取り戻せたのなら万々歳だわ。……行くよ、お前たち』

『『ハァ～イ♪』』『あぶぅ～♪』

私が謝罪すると、オルチーナはそこまで怒る事なく、娘たちを連れて帰って行った。器の大きい奴だわ、ホント。私だったら絶対に許さないけどな。

『それはそれとして、どうするよ？』

「あ？」

『今ここでプロポーズとかしないの？』

「あのなぁ……！」

鳴女（こいつ）、今ここで殺しちゃおうかなぁ!?

たった1人でも最終戦争してやるぞ、私はぁ！

『ワ、ワタシは何時でもOKですよ……？』

「あのねぇ……」

『アデル様はワタシの憧れであり、救世主（メシア）です。この世の誰よりも敬愛しています。……それに、独りは嫌なんですよ、ワタシは』

「……」

だが、カミーラまでもが勢いで押し通そうとしている。……何なのよ、この状況

は。

『良いじゃん、応えてやんなよー。どうせ魔女と吸血鬼なんだから、性別なんて有って無いような物だし。後悔は後先立たないって言うよ？　私だって、チャラトミが蒸発し掛けた時は、マジで頭がグチャグチャになったからな。なぁなぁにするのも良いけど、何時かはそのツケを払わなきゃいけないくなるんだぜ？』

「鳴女……」

だけど、私にどうしろってんだよ。

『ようは素直になれって事。別に嫌いじゃないんだろ、そいつの事。断るにしろ受け入れるにしろ、1度はきちんと話すべきだと、私は思うがね』

クソッ、鳴女の分際で真面な事を言いやがって！

……しかし、素直になれ、か。私はカミーラをどう思ってるんだろうね。最初に出会った時は、小汚い格好で泣きべそを掻く哀れな子供くらいにしか感じなかったし、殆ど気紛れで保護したような物だったが――――。

『アデル様！　今日は何処へ行きましょうか!?』

「フム、そうだな。レニングラードの方へ攻めてみるか。あそこは今、パーティー

の真っ最中だからな。魂も集めやすい」
『ハイ、頑張りましょう！』
それでもカミーラは文句1つ言わず、健気に付いて回って、
「……今日の予定は？」
『ロンドンへ向かいます。ヴィクター・フランケンシュタインの忘れ形見が舞い戻って来たようですよ』
「それは中々に面白いわね」
『はい、ベアード様もそのように仰っていました』
「なるほどな……頼りにしてるぞ」
何時しか、どんな者よりも信頼できる部下になり、
『アデル様、この店なんてどうでしょう？　人間にしては腕が立つようですよ？』
「アナタは良いの？」
『ワタシはアデル様を見ているだけでお腹いっぱいです』
「どういう事なの？」
『そういう事です♪』

「なぁに馬鹿な事を言ってるのよ」
『あはははは』
偶に2人で出かけてみたりして。
「――――そうか」
……何だ、私ってば、誰よりもカミーラと一緒にいるし、心も開いてるじゃないか。それこそ、実の妹よりも。
「私の何処がそんなに良いの？」
『全てですよ。素直になれない所が、特に』
「そう。……なら、不束者だけど、これからも宜しくね」
『……ッ、ハイ♪』
そう答えるカミーラの笑顔は、キーエフだった頃から変わらない、素朴で素敵な物だった。
『うーん、いやー、てぇてぇね！』
『「お前はムカつくから死ね！」』
『うぉおおおおおおおお!?』

黙ってろや、この鬼！

――――――こうして、私とカミーラは晴れてパートナーとなったのであった。

めでたしめでたし？

◆◆◆◆◆◆◆

後日、ガゼル半島（東ニューブリテン州）とニューアイルランド島の間の海に浮かぶ、名も無き孤島にて。

『アデルめ、マジで撃って来やがって。どういう事なの？　……そうか照れ隠しか！　なら仕方ないね！』

私は人気の無い、森の奥にある広場で休憩していた。

やぁ諸君、私だ。つい先日、アデルとカミーラの石波ラブラブ天驚拳で吹き飛ばされ掛けた、鳴女さんだよ。あの女、何もあそこまで怒る事ないじゃん。高がドッキリ仕掛けたぐらいでさー。

ま、おかげで良い動画が撮れた訳だが。再生数も凄かったし、ウハウハでしたよ。今度また仕掛けてみようかなぁ。

それはそれとして、そろそろ私が一体どうしてこんな所に居るのか、諸君も気に

なって来たんじゃないか？

　実を言うと、〝これ〟が今回の旅行における本命だったのよね。もう終わったけど。

『……鳴女!?』『何故ここに居やがるんだ!?』

　と、森を抜けて、人影が2つ現れた。1つがもう片方に寄り掛かり、2人3脚でやっとこさ歩いている状態だ。言うまでも無く、鬼太郎と地獄童子である。地獄童子はそこまで変わりないが、鬼太郎の変貌振りが凄い。髪が全て白髪となり、生身は手に取れる程度しか残っていなかった。後は全部白骨で、呪物の義体により埋め合わせているような状態だ。それでも股間の物が残っているのは、男としての意地かねぇ？

　まぁ、そんな事はどうでも良い。こいつら……否、鬼太郎の目的は分かり切ってるからな。

『久し振りだな。……そして遅かったじゃないか。メリー・エプペケルだったら、既に美味しく頂いたぞ』

『……！』

私の言葉を聞いた途端、元々悪い顔色が一気に蒼白となる。
そう、〝幸福の島〟の女酋長「メリー」こそが私の目的である〝品〟であり、鬼太郎が求めた人物である。大方、修行を終えた後に手に入れたかったようだが、先を越させて貰ったよ。ざまぁ～♪

『……地獄童子、少し外してくれないか』
『おい!?』
『大丈夫だ。立って話すくらいは出来る』
『……分かったよ』
すると、鬼太郎は何故か人払いをして、私と2人きりになった。なぁに、秘密の会話でもしたい訳？
『――――――何が目的だ』
『人が欲しがる物を奪い取るって、最高に面白くない？』
『なるほど、お前らしい』
よく分かってるじゃないか。

『ならば、質問を変えよう。……メリーはお前の中に居るのか？』
『ああ。しっかりと〝解放〟してやったよ』
『そうか……』
と、鬼太郎は何処か憑き物が落ちたような顔となり、
『それじゃあ、ここで決着を付けようか？』
男として、一肌脱いだ。
『そうかい。……前からお前の事、食べちゃいたいって思ってたんだよねぇ』
私もそれに応える。
――――そして、幸福の島からまた1つ、命が消えた。

◆◆◆◆◆◆

……地獄の底、真・閻魔殿「大会議の間」。
『これは一体どういう事だ!?』
見た目は無骨な大男、役職は地獄の十三王が1人、五官王が叫ぶ。普段から威圧的ではあるが、ここまで取り乱した姿は早々拝めるものではない。
だが、無理もないだろう。「大逆の四将」の逃亡により、只でさえ混乱している

地獄で、亡者の殆どが消失するという、前代未聞の大事件が起きてしまったのだから。

『……地獄のそこかしこに、〝こんな物〟が設置されていました。それと〝これ〟も。何時からあったのか、この変生王の目を以てしても見抜けなんだ……』

そんな彼に、濃緑色の髪を持つエルフのような顔立ちの女性が答える。地獄における6番目の裁判官、変生王（もしくは「変成王」）だ。

地獄の王は13人おり、通常は閻魔大王（5番目）までに大まかな判決が下り、それ以降は精査や再審を行う。変生王は6番目なので、精査役の1番手を担っている。ある意味、本当の地獄はここから始まると言っていい。これ以降の裁判は、何処へ堕ちるかではなく、何処まで堕とされるかが決まる為、〝お前は具体的にこういう事をされる場所に行くよ（笑）〟と事細かに説明され続ける破目になるのである。まさに鬼畜の所業だ。

そのトップバッターたる変生王が円卓に投げ入れたのは、摩訶不思議な機械と、緑色の毛皮に覆われた小悪魔「グレムリン」の死骸。

『具体的に、それはどういう代物なのかね～？』

眉毛の生えたサンショウウオの化け物みたいな顔をした、五動転輪王が質問する。どう見ても妖怪の類だが、これでも十三王の１人なのでご安心を。

ちなみに、役割は最後通告。彼の下に来る亡者は大抵極悪人なので、阿鼻地獄かそれに近い場所に堕ちる。

『……おそらく、転移装置のような物じゃろう。機械に詳しいグレムリンであれば、造作もあるまい』

それに対して、長い眉と髭が特徴的な、陰陽師を思わせる格好の御老人、泰山王が返す。四十九日に結審を行う王であり、翁とオカメが先っぽに付いた人面幢というアイテムで亡者を容赦なく裁く（嘘吐きをその場で火炙りにする）、割と怖い爺さんである。陰陽道の主祭神でもあり、鬼道衆とも関りが深い。

『そう、問題は誰が何の為に、グレムリンを地獄に潜ませたかって事ね』

と、素顔を布で殆ど覆い隠している不思議少女、蓮華王がピッと指を立てた。彼女は五動転輪王の後――――つまり、死刑宣告をした亡者に追い打ちを掛ける係で、〝二度と助からないよｗｗｗ〟とドヤ顔で言うのが役目。そこまで苛めなくても……。

余談だが、十三王は元々「十王」であり、彼女を含む残る３人は新参者だったりする。だからと言って、優しい訳では微塵も無いのだが。

『分からんものを議論しても仕方あるまい。閻魔大王様は崩壊寸前の地獄を支えるので手一杯だ。それよりも、これからどうするかを論じるべきだろう』

ある種不毛な討論に、五官王の相棒である宋帝王。黄色い狩衣に身を包む彼は堕淫を裁く王で、五官王と共に閻魔代理を認められている、特別な役職でもある。ようするにお偉いさんの中のお偉いさんだ。その為、特に蓮華王などは即座に黙り、彼の話に耳を傾ける。

『こうなれば、地表の妖怪たちの一掃も已むを得まい』

『正気か、宋帝王!?』

『正気だとも。現に彼らのせいで地獄のバランスは完全に崩れた。この辺で威厳を示さねば、余計に付け上がり、終いには手遅れとなるぞ』

『うぬぅ……』

宋帝王の過激な発言に違和感を覚える五官王だが、そう言われてしまうとぐうの音も出ない。かつて親交を結んだ鬼太郎ファミリーと敵対するのは心苦しいもの

の、事態は彼１個人の意見を通せる程、余裕のある物では無かった。
　何せ閻魔大王は地獄を支える為に真・閻魔殿の奥で仮死状態に陥っているし、その彼が精魂尽き果ててしまえば、来訪者が解放されてしまうからだ。
『まぁ、それも仕方ありませんね』『そうだな』『流石に、彼らもやり過ぎた』『では、具体的な内容を詰めていきましょう』
　さらに、閻魔大王が不在なのを良い事に、勝手に地上侵攻を企てる十三王たち（五官王は除く）。やはりトップが欠けた組織など、烏合の衆という事なのだろう。
（……計画通り）
（これで大願成就となる、か……）
　そして、その渦中でこっそりとほくそ笑む人物がちらほらと。灯台下暗しとはよく言ったものだが、十三王の中に地上のスパイが紛れ込んでいるのだ。
　だが、誰も気付かない。ここにはねずみ男のような、目敏い猜疑心の塊は居ないのだから……。
（順調ね……）
　さらに、補佐官の中にもそれらしい人物が居た。今や閻魔大王の右腕とまで呼ば

れるに至った、心優しき〝筈〟の亡者――――天童 ユメコ、その人である。

（会議は任せます）

（心得た。君は後ろに下がっていたまえ。……後は頼むぞ）

（分かっています）

そして、スパイの1人とこっそりと目配せをし合い、会議室を後にする。

……世界最後の日を再始動する為に。

「待っててね、鬼太郎さん。……これで最後よ」

本当の終わりが、今始まる。

◆Ｍａｇｉｃｉａｎ

Dr・キュリアンの最高傑作の1つで、「Ｗｈｅｅｌ of Ｆａｔｅ」の対となる存在。所々が欠損した白銀の装甲に身を包んだ悪魔のような姿の生命体で、トランザ

ム並みの高速移動で敵の視界から逃れながら、火球を撃ち付けて来る。
本来は全身が装甲化された無敵の存在であったが、出資者の嫌がらせでプログラムを書き換えられ、未完成である代わりに、生みの親であるキュリアンの命令さえ聞き入れない自由な生命体として世に解き放たれた。
しかし、恋人を助けに来たローガンと謎の男「G」により撃破され、「再臨」と「復讐」を捨て台詞として誓いながら爆発四散した。その後も宣言通り黒幕を変えながら何度も復活し、ＡＭＳの前に立ちはだかっている。
今作ではほぼ史実通りの末路を辿ったが、〝キュリアンが保険の意味で残していたプログラム〟が勝手に作動し、Ｍａｇｉｃｉａｎの完成品を作り続けていた。その結果、科学と魔術が融合した完全態「Ｄｅｖｉｌ」として、この世に降臨する事となる……が、やっぱり殺された。世界のインフレは、祝福されし完成を見た彼でさえ置き去りにしたのだ。

運命の戦争

先ずは手始めに……。

「なぁ、姉さん」
「何だよ、円花」
「ゴシャハギ！」『グヴォオオオッ！』
「冷静に伝えるなよ!?」
通りすがりのゴシャハギに何時もの張り付いた笑みで指を差す円花に、俺――
――梅田六花は全力で突っ込み、すぐさま踵を返した。
ここはカントー地方。東京都の跡地に設けられた禁足地。ポケモンやモンハンのモンスターが跋扈する、世界でも有数の危険地帯である。
『ガヴォオオッ！』
「追って来るねぇ♪」

「見りゃ分かるよ！　……クソッ！　行け、リザードン！」『バギュアッ！』

そんな恐ろしい隠れ里に、何故ただの人間が居るのかと言うと……俺らがポケモントレーナーだ。

政府の方針により、ポケモンとモンハンのモンスターを１ヶ所に押し込め、超大型巨人でも越えられない「命の壁」によって取り囲み、完全に隔離状態となったのだが――――彼らを手持ちやオトモンにしていた人間も一緒に閉じ込められた。大空総理大臣様がポケモンとモンハンのモンスターを害獣とし、それらを所持している者も人でなしとして扱っているからである。

よくそんな過激な差別主義者が総理大臣でいられるなとは思うが、あの大災害を考えれば仕方無いだろう。世間が受け入れるのは対岸の火事までだからな。降り掛かる火の粉は払い除けられるのは当然と言える。それが例え同じ人間だとしても。

だが、押し込められる方は堪った物じゃない。災厄の原因とは言え、彼らのおかげで命を拾った身としては、撮り上げられるなんて御免だし、かと言って甘んじて処刑（処罰に非ず）される気も無いので、差別されようと禁足地に踏み入る以外、道が無かったのだ。

そして、同じ境遇の物同士で身を寄せ合い、己の相棒たちの力を借りながら、独自の生活を始めたのである。

『ヴォオオオオッ！』

「リザードン、「かえんほうしゃ」！」『バォオオオオッ！』

『グヴヴヴ……ゴァアアアアアッ！』

「クソッ、流石に牙獣種は体力が多いな！」『グゥゥゥ……』

「――――――狩猟を開始する！」

「うぉっ!?　ハンターか!?」『バギュアッ!?』

しかし、人が集まれば派閥が生まれる。ポケモントレーナー、ポケモンレンジャー、モンスターハンター、モンスターライダー、ｅｔｃ……数え出したら切りがない。

強いて言えば、派閥はポケモン派とモンハン派に大別され、モンハン側は更にハンターとライダーに二分される。これらの派閥は基本的に相容れず、小競り合いまでは行かないが、お互いに不干渉を貫いている。どれかがピンチに陥っても、自分にも火の粉が降り掛からない限りは援助も援護もしないのだ。

だから、こうして森の中で雪鬼獣に襲われているトレーナーの卵をハンターが助

けるなど、普通は有り得ない事なのである。

「おおっ、フィオレーネさんじゃん！　リアルで見ると、中々に良い女だねぇ。そう思わないかい、姉さん？」

「俺に聞くなよ。つーか戦えよ……」『ドォーン』

というか、サンブレイクのヒロイン枠である「フィオレーネ」その人だった。モンスターが居るからって、モンハン世界の登場人物まで存在していいのか？

まぁ、助けてくれるなら、別に何でも良いさ。

『ヴォオオオッ！』

「ファルコォォォン、パァァァンチッ！」

『グヴォオオオッ!?』

おお、咆哮に滅・昇竜撃を合わせて昏倒させたぞ。盟勇クエストでもバシバシ当ててくれていたが、その実力は顕在か。

……つーかさ、本当にこいつはフィオレーネ本人なのか？

今、明らかに「ファルコン・パンチ」って言ったぞ。実は中身だけ別人とか、そんなノリだったりして。現に俺たち姉妹という前例があるから、転移・転生が有り

得ないとは言い切れない。
　結局、使えるモノは使うという方針に変わりは無いけど。
「吹き飛べ！」『グヴォァッ……！』
　とか何とか言っている間に、フィオレーネにゴシャハギが討伐された。散々罠で嵌めて爆破して、最後にジャストラッシュを決めるとか、実に片手剣らしい戦い方をしている。素材もしっかり剥ぎ取っちゃってまぁ。
「フゥ……ここは何処だ？　キミたちは？」
「「ポケモントレーナーです」」
「ほぅ、ここにはポケモンも居るのか。中々に面白い世界だ」
「「……」」
　うーん、こいつやっぱり憑依者なんじゃ……？
「ところで、近くに集落は無いかな？　この森で目を覚まして以来、全く休息を取っていないのでな。代わりと言っては何だが、私で良ければ護衛をしよう。なぁに、これでも騎士団筆頭なんでね。実力は保証する」
「は、はぁ……」

「ま、良ーんでない？」
そういう事に為った。

◆◆◆◆◆◆

カントー地方、「トキワシティ」……と言う名のナニカ。
東京大事変の後、東京都はほんの数十日で緑溢れる大自然と化した為、その一部を切り開いて各々が集落を起こし、ゲームにちなんだ名前で呼んでいる。なので、シティと言えど赤・緑時代の「タウン」ぐらいしか発展していない。ホワイトフォレストみたいなのが散在していると考えると、イメージし易いだろう。
「おねぇちゃんたち、おかえり～」『ケェエエエン！』
そんなトキワシティ（笑）の自宅にて、仮称「トキワの森」から帰還した俺たちを、末妹の姫花（ひめか）が出迎える。相棒の「ぽっぽー」ことケンホロウも元気一杯だ。元は一介のマメパトに過ぎなかった彼だが、姫花を守る為なのか、猛烈な勢いで進化を果たし、今では頼もしい護衛役になっている。他にもラランテスやニンフィアも控えているので、例え同じポケモントレーナーだとしても、姫花に手を出すのは容易な事ではない。

まぁ、そんな輩は俺が直々に手を下してやるがな。黒いリザードンの火が吹くぜぇ。

ちなみに、俺の手持ちはさっきも見せた黒いリザードンに、赤いギャラドスとパープルなプテラの3匹。見事にでんきタイプで沈められるパーティーである。サトシには勝て無さそう。一応は切り札がもう1匹居るけど、そいつとは日が浅いからなぁ……。

一方、円花の手持ちは、ヒスイクレベース、ラプラス、ユキメノコ、アローラキュウコン、ハルクジラの5体。全員、ある日に難破した貨物船の中から出て来たのを捕まえた個体だ。こいつ、本当に何でも有りだな……。

「おねえちゃん、そのひとだれ～？」

と、姫花がフィオレーネを指差す。前に会った謎の覆面ハンターに比べたら怪しさは薄いからか、割と躊躇なく近寄っていく。この好奇心、吉より凶と出る事の方が多いから、いい加減に矯正しないとマズいかぁ？

「あー、通りすがりのハンターの――――」

「フィオレーネだ。ちなみに、ハンターではなく騎士だから、そこの所は宜しく」

「――――――だ、そうだぜ」
正直どっちも同じだろうがよ。
「そーなのかー」
そーなのだー。全然理解してないね、キミ。別段問題無いけどさ。
「さて、色々と聞きたい所だが……」
「そうだな。先ずは自己紹介と行こう。私はフィオレーネ。とある王国で騎士団の筆頭を務めている」
うん、それは知ってる。散々ゲームでやったからね。
「しかし、ある日、メル・ゼナという古龍の毒に倒れてな。……で、目を覚ましたら何故か知らない森の中にて、途方に暮れていた所にゴシャハギの唸り声と女の子の声が聞こえた物だから、急いで馳せ参じた訳だ」
「ふーん……」
つまり、自分もどうして森の中に転移したのか分かっていないと。というか、転移した事自体が分かって無いようだな。
「それじゃあ、先ずは誤解をとく所から始めようと思うが……ここはアンタの知る

世界じゃない。元は東京って大都市で、今は「カントー地方」って名前で呼ばれてる。アンタのよく知るモンスターと、ポケモンって不思議な生き物が跋扈する、一般人は立ち入り禁止の〝禁足地〟さ」

「東京!?　カントー地方だと!?　というかポケモンも居るのか！　ケンホロウが居る時点でそうなんじゃないかとは思っていたが、そいつは是非見てみたい物だな！」

……確信した。こいつ、側だけフィオレーネで、中身は別人だな。本人も「あ！」って顔しているが、今更遅いぞ。

「えーっと……」

「ああ、良いさ。別にアンタがラノベに有りがちな憑依転生者だろうと、見た目がフィオレーネである事には変わりない」

「〝さん〟を付けろよデコ助」

「開き直ったな。いや、まぁ良いけど。ともかく、そういう事だから、色々と宜しく、フィオレーネさん」

「よろしい」

よろしいじゃねぇよ。これ絶対に中身はオタク野郎だな。それも面倒臭いタイプの。

「ちなみに、俺の中身は〝妓夫太郎〟だ」

「ああ、どうりで見た事あると思ったよ。性別も年齢も違うから、面影くらいしかないけど」

「なぁ、2人共、自分たちだけで盛り上がるの止めない？」

「「地獄に落ちろクソ野郎」」

「いきなり酷くない？」

良いからお前は黙っとけ円花。

「――――とりあえず、ここが私の居るべき場所ではない事は分かった」

「そりゃ有難い。で、どうするつもりだ？」

「唄にあるように、還るべき場所を見付けるさ。〝向こう〟は色々と立て込んでいるんでね」

「そうか……」

今までの言葉から察するに、時系列的にはガイアデルムが這い出て来るよりも前

だな。少なくとも、まだメル・ゼナが討伐されておらず、キュリアを野に放った元凶として扱われている頃だろう。

だが、同時に疑問点が浮上し始めている時期でもある。こいつがサンブレイクのプレイヤーなのは間違いないとして、何処までクリアした経験があるのか次第だが……。

「ガイアデルムは現れたか？」

「誰だ、そいつは？　そんな盟勇居たか？」

あ、こりゃあ体験版か序盤ぐらいしかやってないな。

……このまま見過ごすのも手だが、ちょっとくらいはチートをくれてやるか。ただし、ネタバレを回避する為にも、ほんのちょっぴりだけどな。

「まぁ、還れるかどうかも分からん内に言うのも何だが……メル・ゼナは殺さん方が良いぞ」

「何だそれは？　どういう意味だ？」

「さてね……」

「おい、まさかそれ、ネタバ――――――」

と、フィオレーネが何か言おうとした、その時。

『ケェエエン！』「ぽっぽー？」

突如、ケンホロウのぽっぽーが外に向かって金切り声を出す。殆ど同じタイミングで手持ちのモンスターボールがカタカタと揺れ始め、外も俄かに騒がしくなる。チラリと窓から覗いてみれば、森中のポケモンやモンスターが空を見上げて吠えているではないか。

それはまるで、恐ろしい何かへ必死に威嚇しているようであり、

「あれは……」「何だ!?」「おいおい、こりゃ凄いね」「どらごーん！」

俺たちもポケモンたちに倣い、外へ出て天を仰いでみれば、何時の間にか空は闇黒に染まっていて、

『グゥゥゥ……バァォオオオオオオオオォァン！』

ブラックホールのような次元のゲートから、巨大なドラゴン――――伝説の黒龍「ミラボレアス」がカントーの地に降りようとしていた。

◆ミラボレアス

禁忌の古龍にして、伝説の黒龍とも謳われる、圧倒的な破壊者。その名は「運命の戦争」を意味しており、人類やモンスターどころか、他の古龍とさえ敵対している。

ドストレートに邪悪なドラゴンといった姿をしており、口から国をも1晩で焼き尽くす程の爆炎を吐く。事実、遥か昔に存在した、現大陸の殆どを支配していた巨大国家「シュレイド王国」を滅ぼし、東と西に分断してしまった。

現在は自らが手を下し廃墟へ変えた「シュレイド城跡」へ陣取り悠久の時を過ごしているようだが、常に滞在している訳でもなく、何らかの条件を満たした時に、天を切り裂いて現れるという。この事から、ミラボレアスは時空を超える能力があるとする学者もいる。

似たような禁忌の古龍は他にも存在が、大国1つを実際に滅ぼしている点から、黒龍が1番の実害を出していると言える。

この世界に現れたのは、一体何の為だろうか……？

破壊神

平成ゴジラシリーズの怪獣ではバトラが一番好きデス。

突如、異界より舞い降りた、黒き邪龍。
絵に描いたような、ファンタジーのドラゴンそのままの姿をしたそれは、出現して暫くは宙を舞うだけだったが、ふとある１点――――――カントー地方に目を向けると、
『ゴァアアアアアアアッ！』
口から猛烈な爆炎を吐いた。
１秒……先ず地面からあらゆる物が蒸発し、
２秒……空気さえも燃え上がり、原子崩壊を起こし始め、
３秒……それで、全てが消え去った。
後に残るは、気化し損ねた岩盤がグツグツと煮え滾る、煉獄の大地のみ――――

――、

『……！』

と言いたい所だったが、驚いた事に、カントー地方は無事だった。

正確に言うと、モンスターやポケモン、人間が密集している1区画だけは無傷で、残りは上記の通り灼熱の地獄と化している。逃げ遅れた者がどうなったかは……想像するまでも無いだろう。

では、何故ここだけ無事なのかと言うと、カントー全土のポケモンたちが、全PPを消費して分厚い光の壁を張ったからである。

だが、それまでだ。黒龍の吐いた爆炎――――それも全然本気ではない、軽い挨拶代わりの炎を防ぐだけで、全ての壁張り要員は行動不能になった。それ程の威力があったのである。

『コォォォ……！』

むろん、自分以外を一切認めないこの邪龍が見逃してくれる筈も無く、今度は〝溜め〟を入れた、本気の爆炎を吐こうとしている。まさしく、カントー地方〝最後の日〟だ。

――――――バギャアアアッ！

しかし、そこで思わぬ横槍が入る。煮え滾る大地の底から、赤紫色の稲妻が迸り、黒龍に直撃したのである。

『ギゴォォアアヴヴヴッ！』

さらに、煉獄を突き破って、巨大な蟲が現れる。黒をベースとして極彩色の模様が入った棘々しい甲殻で覆われ、天をも貫きそうな１本角を持った、馬鹿デカい芋虫。

地球生命（ガイア）が生みし戦闘破壊獣――――――「バトラ」だ。

彼の役目は、地球生命を脅かす存在を武力で以て徹底的に破壊する事。即ち、今も尚我が物顔で空を舞う黒龍――――――「ミラボレアス」の撃退である。

『ギガァアアッ！』

と、バトラが角だけでなく、眼からも稲妻状の破壊エネルギー……「プリズム光線」を乱れ撃ちし、ミラボレアスを墜としに掛かる。

しかも、凄まじい機動性により当たらないと見ると、口や気門から炎王龍「テオ・テスカトル」のような粉塵を放出し、空中で放電の向きをランダムに変えるという荒業を披露した。

『ガヴォッ……！』

流石のミラボレアスもこれは避けられず、轟音と共に墜落する。

だが、その程度で死ぬ筈もなく、翼も活かした６足歩行で急速に接近しながら爆炎を吐き、バトラを火やられ状態に追い込む。

もちろん、別世界で怪獣王の放射熱線にも平然と耐えて見せたバトラが斃れる訳もないので、むしろ怒りを更に増して猛進する。

巨大怪獣が大いに暴れながら高速で移動した為、道中の森や集落は消し炭となったが、そんな事は致し方のない犠牲だとばかりに、２匹は気にも留めない。

『ゴギャアアアヴヴヴン！』

『ギガァッ！　ギゴァヴォ！』

そして、紅蓮滾るカントーの地にて、地球生命の存亡を懸けた大怪獣バトルが幕を開けた。

◆◆◆◆◆◆

やぁ、俺の名前はフィオレーネ。何故か中身だけ彼女と入れ替わった（もしくは上書きされた）、憑依系の転生者だ。記憶や経験は身体が覚えていても、それをコントロールするのは俺という、ウルトラマンティガみたいな状態である。

一応、周りに気を使って一人称は「私」にしてるし、口調もそれらしくしてるから、転生物を知らない人には「何か変わった？」ぐらいにしか思われていない筈だ。同じような立場の六花ちゃんには即行で気付かれたけど。彼女、中身はあの妓夫太郎らしいね。必然的に残りの姉妹も中の人が誰なのか想像が付くが、あまり追求しない方が身の為だろうなぁ。

まぁ、それはそれとして、

「何じゃこりゃあああっ！」

「知るか！　オマエの所のバケモンだろ！　さっさとお持ち帰りしろ！」

「無茶を言うな小娘ぇ！　そっちこそ、あの戦闘破壊獣をどうにかしろ、役目でしょ！」

「ゆうたみたいな事言ってんじゃねぇよ！」

「まぁまぁ、２人共、お茶でも飲んで落ち着きなよ」
「「お前は存在してはいけない生き物だ！」」
「それは無惨様なんじゃないかなぁ？」「おちゃおいしー」
もう駄目だこれは。人間がどうにか出来る相手じゃない。
つーか、ミラボレアスってあんなデカかったっけ？
確かにモンハン世界じゃ大きい方だけど、バトラとタメを張れるようなサイズじゃなかったと思うけど。口から平成版みたいな放射熱線吐いてるし。
こんなゴジラVSバトラみたいな状況、どうしろってんだよ！
ゾ、ゾーフィを呼べぇ！　今すぐゼットンを起動するんだ！
「それが地球ごと滅ぶだろうが！」
ですよねー。ついでに起動まで数日掛かるし。もう駄目だぁ、お終いだぁ！
「クソッ、せめてカントーの住民たちを避難させられないものか……！」
「無理だねぇ。さっきの光の壁でエスパータイプの連中は軒並みダウンしてるし、モンハンのモンスターたちも恐慌状態だから、逃げられるのは精々ひこうタイプ使いか飛竜のライダーくらいなんじゃない？」

この円花（やろう）、冷静に言いやがって！

「……それか、馬鹿みたいに余ってる初代「わざマシン30」を使うとかね。あれならモルフォンだろうとブーバーだろうと覚えられるからねぇ」

「「それだ！」」

中身は確か「テレポート」だったよな。まさに今1番必要としている技である。

「――――――というか、あんまり違和感なく「それだ！」って言ったけど、わざマシンもあるのか」

「ああ。何か知らんけど、ガラクタの一部が変形して出来たらしい。詳しくはオレも知らん」

それで良いのかカントー地方。

まぁ、ガラル地方では巣からわざレコードが出て来るくらいだし、ポケモンの不思議なエネルギーが奇跡を起こしたのかもしれない。そう思っておこう。夢と冒険の世界だからね、あそこは。

「ならば、君たちはわざマシンの回収と習得に努めてくれ！　私は騎士らしく、殿を務めよう！」

本来のフィオレーネさんだったら、そう言う筈だ。命を捨てる気は更々無いから、あくまで囮をするだけだが。俺の意見とフィオレーネさんの意志、双方の折衷案がこれである。〝いのちをだいじに〟って奴だ。その為には、機動力が要るな。

「えーっと……そこの雲母（きらら）みたいに飛べる犬！　君に決めたっ！」

『ウルファァングゥ!?』

とりあえず通りすがりの、空飛ぶほのおタイプのフクロオオカミみたいなポケモンを、翔蟲でライド・オン。

こいつの名前は……ウルファングとでも呼んでおこうか。さっきから「ウルファング」って鳴いてるし。アニメ準拠で適当に名付けさせて貰ったが、存外様になってる気がする。

という事で、宜しく頼むぞ、ウルファングくん！

『ウルファァッ！』

顔面に火を噴かれた。

「ファルコン・パンチ！」

『キャィン!?』

殴り返した。
「……今度余計な事したら、その頚斬り落とすぞ」
『クゥ～ン……』
よし、暴力は全てを解決するな。無限の彼方へ、さぁ行くぞぉ！
そんな感じで、俺たちは荒れ狂う2大怪獣へ向かって飛び立った。
「カッコつけんなよ、ヘタレ野郎め」
すると、後方から黒いリザードンに跨った六花の姿が。どうやら、一緒に戦ってくれるらしい。ヘイトが分散するのは有難いけど、〝ここは任せて先に行け〟みたいな事はするなよ、寝覚めが悪いから。
「誰がそんな事するかよ。オレには守らなきゃいけない奴らが居るんだ」
「そうか。なら死なない程度に頑張れ」
「言われなくても！」
それじゃあ、一狩り行こうぜぇ！
◆◆◆◆◆◆◆
『ギゴァアヴヴッ！』

バトラが1本角に稲妻を纏いながら振るう。

『グヴォォッ！』

さっきまでは火花が散る程度の一撃だったが、今度の角撃は違った。邪悪に染まったミラボレアスの甲殻をいとも容易く切り裂き、内部にまでダメージを与えた。

地球の意思により生み出されたバトラは、地上で起きた事をインプットされている。中でも鳴女が用いた、微小化した酸素による分子破壊攻撃は大いに参考となった。

つまり、微小化した酸素を高濃度で放出し、敵の甲殻を分子破壊したのである。

この攻撃には防御力は意味は無く、食らった時点でお終いだ。

……常軌を逸した再生力がない限り。

『――――――グルヴォァアアアッ！』

一旦は沈黙したミラボレアスだったが、一瞬だけ眼光が赫く染まったかと思うと、全身をマグマのような紅熱が血走り、凄まじい憤怒の蒸気を上げながら甲殻が赤黒く変色する。その過程で傷は溶けるように塞がり、新品同然のボディとなった。

これぞ「焔の禍」、「運命を解き放つ者」。伝説を遥かに上回る災厄たる怒れる邪

龍……〝紅龍ミラボレアス〟の爆誕である。

『ガヴォォォッ！』

さらに、ミラボレアス……否、ミラバルカンが再び宙を舞った。空中から爆炎を吐くつもりだろう。

『ギガァアアッ！』

しかし、バトラの射程と火力を舐めてはいけない。１本角と両眼から放たれるプリズム光線は、数キロ先の相手にも正確に命中する。

『……ゴァアアアアッ！』

だが、不意打ちならまだしも、極限状態となったミラバルカンに集束の甘いプリズム光線など、大したダメージにはならない。もっと成長せねば。

『グギャヴォオオォォン！』

爆炎で地上を焼き払うかと思われたミラバルカンだったが、地表ではなく天空へ向けて爆炎の塊を吐き、そこで炸裂させ、無数の隕石として降り注がせた。

『ギゴァアアア……ッ！』

マグマにも耐えるバトラの甲殻も、この超高温には敵わず、少しずつひびが入る。

『ギャヴォオオオオッ！』

これをチャンスと見たか、ミラバルカンは隕石攻撃を中断し、全身に爆炎を纏い、レンズフレアの如く破壊の光を放ちながら、バトラ目掛けて体当たりを敢行した。着弾と同時に核爆発が起こり、周囲一帯を纏めて蒸発させる。この攻撃には、流石のバトラも消滅――――――、

『……』

しなかった。

しかし、完全に沈黙してしまい、動く様子はまるで見られない。

『グルルル……ゴァアアヴッ！』

そんなバトラを鼻で嗤いながら、ミラバルカンが襲い掛かるが、

――――――バチバチバチィ！

『ギゴァアアヴヴヴッ！』

バトラの身体が赫いプラズマ粒子に変換されたかと思うと、その場で変態、成虫

形態となった。

『ゴルァッ！』『グゥォッ!?』

そして、自らも空へ舞い上がり、完璧に集束された強力無比なプリズム光線でミラバルカンを攻撃する。これには堪らずミラバルカンも墜落した。

『ギゴァアアヴッ！』

『……ギャヴォッ！』

『ゴァヴゥゥゥッ!?』

だが、更なる追撃は許さず、角で切り裂こうと接近するバトラを、ミラバルカンは体内で熱エネルギーを炸裂させ、衝撃と爆光をばら撒き、吹き飛ばす。

『ガァアアアッ！』

しかし、成虫となったバトラは死なない。地球生命を脅かす存在であれば、例え隕石でも迎撃する事が使命の彼は、並大抵の攻撃では斃れないのである。仮に死ぬとしても、それは相手を道連れにする時だろう。

『ギゴァアアヴヴッ！』

『グルヴォァアアッ！』

こうして、舞台を地上へ戻し、大地を這いずるミラバルカンと再び舞い上がったバトラが迎撃するという、大怪獣超決戦が再開されようとした、その時。

「暴れ過ぎだ！」『バギュァアアアッ！』

「いい加減にしなさーい！」『ウルゥッ！』

2人の勇者が現れ、2大怪獣へ立ち向かう。黒いリザードンに跨る六花と、ウルファングを駆るフィオレーネだ。

「つーか、どっちを攻撃するんだ!?」

「ミラボレアスだ！　バトラは地球生命の代行者だから、侵略者を攻撃した方が覚えは良いだろう！」

「なるほど、そういう事なら……行け、リザードン！　「りゅうのはどう」！」

『バヴォオオッ！』

「ウルファング、「パワージェム」！」『ウルォオオオッ！』

『グルヴァッ!?』

さらに、突然の闖入者を睨んだミラバルカンのその眼を、ピンポイントで攻撃。

『ゴギャアアアアヴォオオオッ！』

結果、更に怒らせてしまった。

「おい、全然効いてないぞ!?」

「当たり前だ！　このサイズ差で、相手が禁忌の古龍なら、一般ポケモンの技程度、蚊に刺されたような物だろう！」

「じゃあ、どうするんだよ!?」

「足りない分は、他で補え！　私に良い考えがある！　六花、少し頼む！」

「あ、おい、何処行くねーん!?」

しかも、何故かフィオレーネは踵を返し、六花1人が取り残されてしまった。何でやねん。

『ギャヴォオオン！』

「くそったれがぁ！」『ギュァッ！』

さらに、目にゴミが入った怒りでミラバルカンのヘイトが完全に六花へ向いてしまい、彼女は空を全力で逃げ惑う破目になる。爆炎がすぐ脇を掠め、牙が真横でガチリとなり、隕石が四方八方から襲い掛かって来た。それでも落ちない辺り、両者

の絆と的の小ささが窺える。とは言え、墜とされるのも時間の問題だろう。

だが、悪い事ばかりではない。

『ギゴァヴヴッ！』

『グルォッ……!?』

ヘイトが六花に向かっているという事は、余所見をしているも同然であり、フィオレーネの想定通りに、バトラの攻撃がミラバルカンを襲った。別にバトラは協力する気など更々無いが、使える物は何でも利用する所存である。敵の敵は都合の良い味方だ。

「待たせたな！」『カニドウラク！』

さらに、六花を囮にするという騎士に有るまじき行為をしたフィオレーネが、何処からか拾って来た野生の矛砕ダイミョウザザミにライド・オンして現れた。

『カニカマボコ！』『キュァアアッ！』『バリバリダァッ！』『パヴォオオオン！』『グヴェアアヴォッ！』

しかも、その背後には大勢の二つ名持ちモンスターを引き連れたウルファングが遅れて登場。口に咥えた大量のエンエンクで纏めて誘導したらしい。

つまり、フィオレーネはモンスターハンターライズ：サンブレイクの出身らしく、操竜三昧でミラバルカンを斃すつもりなのである。
「死ねコラァッ！」『オダヤカニ！』
『ギャヴォッ!?』
先ずは矛砕の水泡ブレスで水属性やられを付与しつつ蟹パンチを叩き込み、
「征夷大将軍アタック！」『ハナヤカニ！』
鎧裂でズバズバと切り裂いて、
「ディアブロス、「ギガインパクト」！」『グヴェアアアアアヴォッ！』
『ゴヴァアアアッ！』
鏖魔の必殺捨て身タックルでミラバルカンを薙ぎ倒した。サイズ差があるとは言え、二つ名持ちたちの攻撃はそこそこ利いているようだ。
「翔蟲を貸すから、お前も乗れ！」
「マジかよ!?　つーか、どうやって操るんだよ!?」
「考えるな、感じろ」
「説明しろ！　……ああ、もう！　どうにでもなれぇえええっ！」

加えて、翔蟲を付与された六花が荒鈎爪に跨り、攻勢に乗っかる。手隙の黒いリザードンはウルファングと協力して、タイミング良く操竜が出来るよう、二つ名たちを空から攪乱し続けた。

『ギャヴォオオオオオッ！』

もちろん、ミラバルカンもやられっぱなしではない。隙を見て爆炎を吐き、巨体を振るって、二つ名たちを蹴散らす。

しかし、やはり手数の多さには対処し切れず、何よりバトラが折を見て邪魔をして来るので、思うように反撃出来ないまま、少しずつダメージが蓄積していく。幾ら体力が無限大エナジーでも、再生が追い付かない程の連撃を叩き込まれては、身体にもガタは来る。

「地球の力、お借りします！」『ギゴヴァゥッ!?』

そして、最後の最後に、ちゃっかりフィオレーネがバトラを操竜。直接攻撃で止めを刺しに行った。

ちなみに、この時フィオレーネは翔蟲ではなく大翔蟲を使っており、激昂ラージャンもビックリで怪力で巨体過ぎるバトラを制御している。流石は後にラスボス

を拳で叩き落す女である。

「食らえ、「しねしねこうせん」！」『バドォオオオッ！』

『グギャヴォオオオオオッ……！』

まるで意味不明な破壊光線がミラバルカンを穿ち、遂に禁忌の古龍を追い詰めた。

『……グガァアアッ！』

すると、ミラバルカンは上空に火球を放つと、そこに次元の扉を形成、踵を返して逃げ始めた。とうとう再生力が追い付かなくなったらしい。少しでも時間を稼げればその限りではないのだろうが、ここでそれは無理という物だろう。ここは逃げるが勝ちだ。

「「逃がすな、撃ち落とせ！」」

『グガァアアアアッ……!?』

しかし、今更そんな都合の良い展開など許される筈も無く、無慈悲な二つ名持ちたちの一斉攻撃+バトラの全力攻撃によって撃ち落とされ、地表に激突したと同時に大爆発を起こし、今度こそ死亡した。無数の属性やられで脆弱化していた甲殻で耐えるのは、流石に無理があった。

――――――ドクン……ドクン……！

それでも、不死身の心臓だけは止まる事無く、崩壊し始めた時空の乱流に乗って、異世界の彼方へと消えて行った。何時かきっと元の黒龍へと再生し、別世界へ現れる事を想起させながら。

「短い間だったが、世話になったな」

「おい……!?」

「無限（ゆめ）の彼方へ、さぁ行くぞーッ！」

さらに、これ幸いとばかりに、フィオレーネが時空乱流の中へ飛び込んで行く。元の世界に還れる保証も無いし、行く先など知らないが、ここに留まるつもりが更々無かった彼女は、迷う事無く突き進んだ。内心ではこれを夢だと思っているからこその思い切りの良さだが、はてさてどうなる事やら……。

「……まさしく嵐だったな」

そして、六花とリザードンだけが取り残される。二つ名たちは正気に戻って散り

散りとなり、ウルファングも逃亡、
『ゴヴヴゥゥ……』
肉体的に限界に達していたバトラは自らを封印して卵へと還り、深い深い地球（ガイア）の底と潜って行った。
「これで終わり……な訳ねぇか」
だが、これは始まりに過ぎない。
『フォフォフォフォ』『クホホホホ』『ニタァ……！』
第３新東京市の方角から、フルフルによく似た頭部を持つ、純白の汎用人型決戦兵器――エヴァンゲリヲン量産機が９体、こちらへ向かって飛来してくるのが見えたからだ。
「何が始まるってんだよ……」
……世界最期の日さ。

◆バトラ

〝黒いモスラ〟の異名を持つ戦闘破壊獣。名前は「バトルモスラ」の略で、その名の通り幼虫の時点でゴジラとタメを張れる恐るべき生命体である。

地球の意思が外敵を排除する為に生み出した存在であり、マグマの熱やゴジラの熱線にも耐える強靭な甲殻と、あらゆる物を破壊するプリズム光線を武器に、地球生命を脅かす者を徹底的に破壊する。

ゴジラシリーズでは宇宙の彼方から飛来する巨大隕石（後のスペースゴジラと思われる）を迎撃する為に誕生したが、この作品では来るべき世界最期の日に備えて覚醒を待っていた……のだが、突然やって来たミラボレアスに危機感を覚え、急遽孵化した。

ちなみに、鬼滅の連中が次々と転生しているのは来訪者のせいだが、それ以外の存在が馬鹿みたいに集結しているのは、来訪者という癌に蝕まれて焦りに焦った地球意思の手違いの姓である。

つまり、今回の一件は地球意思の見せた隙が原因だったりする。

鳴女さん、生配信する

《フォフォフォッ！》《グヘェァァッ！》《フォァァァォ！》《クコココ！》《ヒヒヒヒ！》《ガォガォグォ！》《イヒィィィ！》《アヘアヘアヘ！》《ケヒィィン！》

召喚された9体のエヴァンゲリオン量産機が、カントー地方を蹂躙している。ミラボレアスとバトラの喧嘩に巻き込まれ疲弊し切った住民とポケモン、モンハンのモンスター（長いから「ガチモン」と呼称する）たちに勝ち目は無く、次々と踏まれ、殴られ、噛み砕かれていく。そこに慈悲は一切ない。

『こちらに見えますは、エヴァンゲリオン量産機になりま～す。そして、今蹂躙されているのは、カントー地方の皆様で～す』

そんな有様を映し出した画面を指差しながら、私は陽気に解説を進めた。

……やぁ、久し振りだな、諸君。鳴女さんだ。ちょっと新婚バカンスに出掛けてたけど、ようやく戻ってきたから、ついでに生配信もしちゃうよ♪

題して、「鳴女さんの令和ロック物語 最終章：世界最期の日を見届けろ！」って所かな。

そう、私たちは今、遂に始まった世界最期の日に直面している。

ただし、画面越しにだが。無限城に皆で集まって、人間共の愚かな内輪揉めを、高みから見物しているのだ。

ちなみに、皆というのは鳴女組の面子だけではない。日本在住の、チャンネル登録をしてくれているメンバーも召喚している。理由はもちろん、安全圏から見学して貰う為である。私はユーザーを大事にする主義なのよん。

「あのー、すいません……」

と、メンバーの1人が手を上げた。彼は確か、

『高橋翔（ショウ・タッカー）さんじゃないか。どうかしたのかな？』

バックベアードやヴォルフガングと同レベルのヘビーユーザー、NN：ショウ・タッカーさんだ。相変わらず勘のいいガキは嫌いそうな顔してますね。一発錬金しとく？

「えっと……ここは何処で、どういう状況なのですかな？」

気にする所はそこなのね。目の前に和風サイクロプス（♀）がいるというのに。

まぁ、無限城に招かれたのは私のファンばかりだし、最近はしょっちゅう妖怪だ

の怪物だのが取り立たされているから、仮に私が「鬼」だとしても、今更驚かないのだろう。流石にフワッと転移しちゃった事に関してはビックリしてたようだけど。この前つばめがテレビで発した「お前ら殺す！」宣言も影響しているのかもしれない。

つまり、ここに来た奴らは、ハナから変な奴らだという事である。

『ここは無限城。何時ものライブ会場にして、私の居城だ』

「ようするに、貴女の創り出した亜空間という認識でよろしいか？」

『ああ、概ねその通りだ』

「……という事は、貴女が死ぬと、ここも消えてなくなると？」

『半分正解だな。そこに居る玄上ちゃんは私の分身。彼女と私、両方が死ななければ、影響は無いさ』

「そうですか、安心しました」

あ、安心出来ちゃうんだ。良い感じに狂ってますねー。

「つまり、俺らは安全って事？」

「ま、そういう事なんじゃないかな？」

「つーか、鳴女氏、妖怪だったのか」
「今更？　この前テレビでやってたじゃん。ネットでもニュースになってたし」
「それもそうか。だからって、ファン止めたりはしないけど」
「そもそも、あの放送があった後も普通に動画見てたし、世論なんてどうでもいいよ。引きこもりのオタクには関係ない」
「……ってか、あの総理大臣、ちょっと極端過ぎるしな。付いて行けねぇよ」
「うん、私も私もー」
　それは他のメンバーも一緒なようで、特に私が「鬼」である事を気にする素振りは無かった。無残様曰く「お前に同調する奴は皆変」らしいから、こいつら全員精神がキマっているのだろう。それでこそ私のファンたちだ。
「それはそうと、何故カントー地方は襲われているんですか？」
　再びタッカー氏が質問して来る。自発的に挙手してくれる人が居ると、話が進め易くて助かるねぇ。
「それに関しては俺から話しましょう！」
『おっ、久々のチャラトミｗｉｋｉキター！』

　すると、今度はチャラトミが解説役を買って出た。正直、私はペチャクチャ自由に喋るタイプだから、真面目なプレゼンに関しては、こいつの方が適任である。夫が活躍してくれるのが嬉しいだけかと聞かれれば、否定は出来ない。だって女の子だもん。

「総理大臣のつばめ氏は、カントー地方の人間とポケモンやガチモンたちを攻撃する事で、「戦争」の引き金を引きたいんですよ」

「戦争？」

「そう……人間と、それ以外とで殺し合う、血みどろの戦争をね」

　大空 つばめは人間至上主義であり、鬼殺隊の面子もそれは同じ。妖怪か、ポケモンか、ガチモンかは、関係ない。人間以外は皆敵なのだ。

　だから、一応は人間が居るから、化け物ごと1ヵ所に取り囲むだけで済ませているが、故有れば攻撃するし、根絶やしにしたいと思っている。今がその時である。

　そして、正義漢の鬼太郎が率いる日本妖怪たちを焚き付け、戦場に引きずり出し、芋蔓式に他の勢力も戦いに巻き込むつもりなのだ。人間至上主義のつばめらしい、自分の事しか考えていない発想である。

結局の所、彼女は自分の復讐を遂げたいだけなのだ。自分の人生を滅茶苦茶した妖怪を滅ぼして、憂さ晴らしをしたいと、そういう事だろう。それに同調する隊士たちも、同じ穴の狢である。鬼殺隊は何時の世も変わらないなぁ……。

だが、そうは行かない。

例え、それが全勢力にとって予定調和だとしても、私が目立たないのは許せん。

何故なら、私はウーチューバー。令和をロックに生きると決めた配信者。バズる為なら、何でもしてやるのさ！

『……という事で、先に行く。ちゃんと来いよ』

「了解っス。存分に楽しんで下さいな」

私は玄上にゲートを開かせ、この世の煉獄と化したカントー地方へ躍り出た。

『ホォ？　……ゲァアアッ！』

私の転移に気付いたエヴァ量産機の1体が、ATフィールドを展開する。呆けたり、無謀な挑戦をしない辺り、優秀なダミープラグを使っているようだが、甘いな。

デカけりゃ強いって訳じゃないのよ。

『……』

私は爪を妖刀に変え、更にそれを大きく延長する。これぞEVA（エバー）さんを遥かに超える、ウルトラスーパービッグサーベル！

『グヴゥゥゥ！』

私が何をするのか察したのか、量産機がATフィールドを厚くし、万が一に備えてクロスガードの構えを取ったが……無駄な事だ。何故なら、私は無敵だからさぁ！

『ゴパォアッ!?』

『……』

先ずは1体（エーステ）。自分よりも遥かに巨大な、色んなナマモノをクチャクチャしている、気色の悪いフルフル擬きを一刀両断した。真ん中から二枚に卸された量産機が、私が見下ろす中で、ゆっくりと崩れ落ちる。

そう、今の私は空をも飛べるのである。強大な妖力で磁場を歪め、翼も推進器も無しに、宙に浮かべるのだ。端的に言えば、ドラゴン○ールの舞空術である。便利だよね、この能力。飛べるし、浮かべるなんて、まさに魔法よねー。

『グヴェェェ！』『グケェェッ！』

おっと、他の量産機も邀撃に来たか。あの使い勝手がカス以下な大剣ではなく、

量産型の「ロンギヌスの槍」を標準装備だ。金掛かってんねぇ。

『……』

『ゴゲッ!?』『グベァッ!?』

向かって来た木偶の坊を、バッサバッサと斬り捨てる。どちらも一刀の下、一撃必殺で仕留めてやりましたよ。所詮は有り合わせの素材で造った廉価版か。弱過ぎる。

ま、これなら簡単に誘い出せそうね。バックベアードも納得するでしょ、タブンネ。

『フン……』

――――さぁ、ここからは私のエレクトリカルストリームだ。死にたい奴から掛かって来なさ～い★♪

◆エヴァンゲリオン量産機

「新世紀エヴァンゲリオン」の劇場版に登場する、汎用人型決戦兵器「エヴァンゲ

リオン」の量産機。フルフルを擬人化したかのような、気持ちの悪い見た目が特徴。こう見えて折り畳み式の翼で空を飛べる。秘密結社「ゼーレ」の虎の子兵器であり、S2機関による無限の活動時間、渚カヲル（タブリス）の思考パターンをインプットしたダミープラグ、ATフィールドを貫通する量産型「ロンギヌスの槍」、そして中途半端な再生能力によって、何度でも何度でも蘇って襲い掛かって来る。必殺技は「鳥葬」。サード・インパクト発動時には口が裏返って雑で気色悪い綾波コラと化した。何故そうなった……。

　この世界線では鬼殺隊が狩ったポケモンやガチモン、人間を素材につばめの細胞を混ぜ合わせて造った、イコール・ドラゴン・ウェポン染みた混沌兵器。ダミープラグもつばめの思考パターンを採用している。

　だが、あくまで量産型なので、つばめたち鬼殺隊は更なる隠し玉を用意している。

勇壮

――――――「鬼殺隊」本部、という名の異空間「桃源郷」。

《カントー地方上空に「鳴女」出現》

《量産型エヴァ、各機戦闘態勢に突入、及び交戦開始》

《量産型エヴァ3号機、8号機、1号機、ロスト。自己再生機構、発動せず。まるで歯が立ちませんね》

隊士（こども）たちから次々と入る報告に、大空 つばめが顔を顰める。発進させたエヴァ量産機は既に3体も失っており、残る機体も全く歯が立っていない。体格差を物ともしないパワーと、空間使い故の特殊性により、ATフィールドも自己再生機構も、まるで役に立っていないのだ。

「所詮は有り合わせね。……まぁ良いわ、目的は果たしたようだし」

だが、つばめは焦らない。余裕綽々の表情で、戦場の一場面に目を向ける。そこでは、時空を転移して新たな乱入者が姿を現そうとしていた。

◆◆◆◆◆◆◆

「あの馬鹿、先走りやがって……」

カントー地方で大暴れする鳴女を見て、アデルが溜息を吐いた。まさに「やりやがったよ」という感じ。傍に立つカミーラも「やれやれ」という顔をしている。

『中々に派手ではないか。篝火には丁度良い』

しかし、バックベアードとしては、むしろ「良くやった」という事なのか、不敵に目を細めた。

『どうしますの、お父様？』

そんなバックベアードに、彼の娘であるベア子が尋ねる。とは言え、答えは決まっているような物。鳴女が火種を撒いた以上、戦争は避けられない。避ける意味も無い。何故なら、それこそが目的なのだから。

『――――諸君、戦争だ』

バックベアードが強大な妖気を迸らせながら、開戦の狼煙を上げる。即ち、超時空要塞「ブリガドーン」の発進である。

《座標固定》《時空転移開始》《エネルギー充填率、40％……50、60、70、80、90……１００％！》《「ブリガドーン」、発進！》

こうして、時空の壁を突き破り、巨大戦艦がカントー地方に現出した。戦争の始まりだ。

◆◆◆◆◆◆

一方その頃、天狗ポリス鞍馬山総本部。

『カントー地方上空、新たな時空転移を確認！』

『……「ブリガドーン」、来ます！』

遠目の術式「千里眼」にて、戦局を見守っていたカラス天狗たちから、聞き捨てならない報告が入る。完全なイレギュラーであるミラボレアスとバトラの出現には目を瞑っていたが、エヴァ量産機と鳴女の交戦、それに続く「ブリガドーン」の転移を見過ごす訳にはいかないだろう。彼女らが出て来た以上、被害がカントー地方程度で済む筈がない。

『大天狗様、流石にこれ以上は……』

『……鬼太郎の方はどうなっている』

『まだ帰還の報告は受けていません』

『そうか……』

黒鴉の質問に、大天狗は難しい表情を浮かべる。

天狗ポリスが、今の今まで手を出していなかったのは、鬼太郎が未だに「幸福の島」から帰還していないからである。戦旗となる人物が不在のまま戦争を始めるのは士気に関わるが、同じくフィリピンに出向いていた鳴女が、カントー地方で好き勝手に暴れているという事は、そういう事なのだろう。信じたくはないが、だからと言って何時までも手を拱いている場合ではない。

戦争は――――世界最期の日は、もう始まっているのだ。

『……仕方ない。我ら天狗ポリスは、これより死地へ飛び立つ。しかし、無謀も犬死も許さん。必ずや勝鬨を上げて、帰還しようぞ！』

大天狗の言葉に、カラス天狗たちが『オオォーッ！』と拳を上げる。

彼らはこの日の為に備えて来た。世界が終わり掛けた、あの日から。もう、あの悪夢を繰り返させはしない。カラス天狗たちの士気は、鬼太郎が居ずとも充分に高かった。

（鬼太郎。お主が戻ってくると、信じておるぞ）

（信じているぞ、鬼太郎殿）

しかも、誰もが鬼太郎の帰還を諦めていなかった。開戦には間に合わなかったが、それでも必ず駆け付けて来ると信じて、戦場へ向かう。

『動力点火』

『炉心稼働率、九割を超えました！』

『帆を張れ！』

『了解！　帆船型飛行戦艦「宝船」、全艦発進！』

さらに、鞍馬川や貴船川など、鞍馬山周辺の川底をモーセの如く割って、無数の宝舩が浮上する。見た目こそ帆船だが、その実態は妖力によって空を進む飛行船であり、様々な武器を満載にした機動戦艦である。全体の指揮は大天狗が執り、各艦のカラス天狗がそれを受けて舵を取る形になる。

さぁ、世界の命運を賭けた、戦の時間だ。

◆◆◆◆◆◆◆

妖怪横丁、ゲゲゲの森。

『どうするんだい、親父さん？』

「ブリガドーン」と「宝舩」の発艦を妖怪テレビで確認した蒼坊主が、目玉の親父

に尋ねる。

　否、最早「目玉の」親父ではない。この日の為に用意した仮初の肉体に収まった、慎吾としての姿を取っている。本体とも言える赤い瞳の眼を持つ、銀髪の偉丈夫である。服も見た目だけだが当時の物を再現しているので、蒼坊主としては懐かしさを禁じ得ない。

『鬼太郎は必ず来る。儂らは儂らの戦いをしよう。……皆を集めてくれ』

『あいよ』

　ゲゲゲハウスを後にする蒼坊主を見送り、慎吾はちゃんちゃんこを着直す。正真正銘、彼にとっても最後の戦いが始まる。

『皆、よく集まってくれた。……この戦いで、全てが終わる。鬼太郎はまだ来ていないが、それでも儂らならやり遂げられると、信じておる。日本妖怪の意地を見せるのだ！』

　そして、蒼坊主の呼び掛けで集まった妖怪たちに向けてエールを送り、士気を高揚させる。悲壮感は、まるでない。皆、鬼太郎の不死身っぷりを良く知っているのだ。だからこそ、気後れする事無く戦いに臨める。

『さぁ、行くぞ！』
終わりを、始めよう。

◆宝船

七福神が乗っているアレ。作品によっては終末思想の狸や日本妖怪のやくざが乗ったりするが、今作では殺る気満々の天狗ポリスの皆さんが搭乗している。風が無くとも進めるし、何なら空も飛べる、摩訶不思議な機動戦艦であり、砲弾の代わりに松明丸や水龍丸をぶちかましてくる、とんでもない帆船である。

鳴女さん、高みの見物をする

空から見下ろす戦場は気持ち良いゾォ！

『おや、漸く始める気になったか。どいつもこいつも出歯亀だな』

空中に現れた「ブリガドーン」や「宝船」を見て、私は思わず嘆息した。

……やぁ、諸君。この私、鳴女さんだぜ。

いやはや、どの勢力も腰が重くて困るね。もう量産型エヴァ、全部髪しちゃったよ。

ま、戦争の引き金なんて誰も引きたくないわな。全責任が圧し掛かるもんね。

だが、私は一向に構わん。何故なら、責任を負う気など毛頭ないからだ。やるだけやって、後は野となれ山となれ、が私のモットーである。やーい、やれやれー。

「行くぞ、我ら鬼滅の刃の下に！」「行きますわよ！」

『日本妖怪の底力、見せてやれ！』

おっと、地上戦も始まったか。左右から鬼殺隊と日本妖怪の大津波が押し寄せてくる。陣頭指揮は鬼殺隊が石動零と石動サヤで、日本妖怪側は……蒼坊主1人？

黒鴉は天狗ポリスの指揮官だとしても、鬼太郎は――――――、

『ああ、なるほど。〝信じてるぞ鬼太郎〟って事ね』

なら、ここはつまらない場所になるかもな。相手をするのも面倒だから、高みの見物でもしてよう。という事で、散（という名のラ〇ダージャンプ）！

「なっ、消えた!?」「上ですわ！」

『構うな！　このまま突っ込め！』

おうおう、血気盛んですねぇ。あっという間に大混戦ですよ。

村田隊士、滅茶苦茶頑張ってるじゃん、独自の呼吸法なんて編み出しちゃってさ。後藤似の女隊士も奮闘していらっしゃる。サイコロステーキ先輩っぽい女子は……うん、何あれ、ケダモノ？

それにしても真名ちゃん、君、変わり過ぎじゃないかな。児泣き爺と砂掛け婆は、何か知らんけど若返ってるし。アンタらヤバい薬でも決めたんか？

刃と爪が交わり、血肉が湧き踊る。怒号と悲鳴が木霊して、この世の地獄でタッ

プダンスだ。
いやー、壮観壮観。これは良い見世物である。まるで人がゴミのようだぁ！
《黒鴉様、子刻方向に鳴女が！》
『構わん、撃ち方始め！』
《了解！　全艦、攻撃用意！》
……って、おいコラ、ちょっと待てや。
《水龍砲、撃てぇ！》
と、宝船が舳先からプラズマ化した水素の加粒子砲を一斉掃射してきた。お前ら何時から科学サイドになった。
『バーリア！』
とりあえず、バリアだよバリア。
《バーリア！》
後ろの「ブリガドーン」もバリアした。おい、パクるなバックベアード。
《これは最初から搭載されている機能だ。前回の大戦で学んだのでな》
『あっそう……』

つーか、話し掛けてくるなよ。天狗ポリスも必死に頑張ってるんだからさ。

《ならば、その努力に報いろう。……主砲、発射！》《ぶっぱなすのじゃ～♪》

『おぉおおおおおっ!?』

すると、バックベアードの鶴の一声で、「ブリガドーン」が主砲を（丸子の声で）発射した。「C」の欠けた所から魔力のビームを撃つ感じ。一瞬で射軸上の空気が燃え尽きて、稲妻を迸らせている。波動砲かと見紛う程の、とんでもない威力である。ちょっと火傷しちゃっただろうがよ！

《五番、六番、八番艦、蒸発！》

《七番、九番艦、余波により撃沈されました！》

『散開しろ！　狙いを一ヵ所に定まらせるな！』

当然、直撃した「宝船」は瞬時に消滅。周りの2隻も巻き込まれて墜落した。それでもまだまだ居るのは内緒。蜘蛛の子を散らすって、こういう事を言うんだろうなぁ。大きさがダンチだけど。

《逃がすと思っているのか。……ベア子、やれ！》

《了解ですわ、お父様！》

と、何処からともなくベア子の声が聞こえて、「宝船」艦隊の背後に時空の歪が発生。

《黒鴉様！　巽刻（たつみこく）方向に時空転移を確認！》

《識別、初代「ブリガドーン」！》

『何だと!?　新造するだけでなく、修復までしていたのか!?』

出現したのは、第一次世界最期の日で活躍した、初代「ブリガドーン」。

そう、バックベアードが乗っているのは二代目であり、初代の方はベア子が指揮を執っている。コアは大戦時から変わらず、アデルとアニエスの母親「ザンビア」が使われている。「エヴァ」といい「ブリガドーン」といい、何で母親の魂をコアにしたがるんだろう？

《主砲発射！》《了解、ベア子ちゃん！》《了解です、ベア子様♪（CV：野〇藍）》

おっとと、こっちも主砲を発射したか。威力は二代目よりも劣るが、それでも「宝船」を一撃で蒸発させる程度の火力はある。これは酷い挟み撃ちだ。

《全機発進！》

《露払いよ！》

『クケケケ！』『コツコツコツ♪』『バギャットォ！』『ボチャケェ！』『ピキキキ！』
『ギュァアアッ！』『バリバリダァッ！』『キュァアアッ！』『ヒュルァッ！』『ピュウウウッ！』

さらに、西洋妖怪お得意の使い魔軍団が投入される。それも全員が飛竜種に跨った、ガチモンライダーズである。火力も体力高い高軌道戦闘機（竜）とかズル過ぎる。

うーん、こりゃあ空中戦は勝負あったか？

《そうは行きませんよ》

《きゃあああああ!?》

しかし、そう簡単に終わらないのが日本妖怪だ。突然、空の彼方から撃龍槍みたいな物が飛んできて、初代「ブリガドーン」のバリアを貫通しつつ、串刺しにした。表面に突き立てられた程度だが、それでも西洋妖怪の陣営に与えた影響は大きい。あのバリア、あくまでエネルギーの障壁だから、大き過ぎる質量までは止めきれないのよね。それが対抗呪文が付与されているとあれば、尚の事。

《圧縮した妖石を槍状に加工した徹甲弾……この用意周到さ、ぬらりひょんか！》

《ご名答。そして初めまして、バックベアード殿。先代がお世話になったようで》

そして、現れたるは八幡船によく似た飛行戦艦（黒塗り）が十数隻。むろん、乗り手はぬらりひょん一派である。総大将様の能力で姿を隠してたな、これは。

《今回の貴様はそちら側という訳か。蝙蝠め》

《誉め言葉と受け取っておきますよ。続けて撃て！》《了解ですぅ～！》

《きゃうぅっ!?》《またやられた！　硬くてぶっといの！》《チョー痛いんだけどぉ!?》

さらに、またしても初代「ブリガドーン」に集中砲火。落とし易い、それでいてバックベアードが庇い立てしたがる方から攻撃する辺り、戦いという物をよく分かっている。汚い流石ぬらりひょん汚い。

うむむ、これはそろそろ手を貸してやらないと、いい加減にマズいかなー。アデルに文句を垂れられるのも嫌だし……。

――――――ドギャヴォオオオッ！

『ドワォッ!?』

いや、今度は何よ!?

《ぬらりひょん様、本艦の真下から「妖怪城」が出現！　攻撃を受けています！》

《中国妖怪……玉藻前とチーですか！》

《その通りよん、ぬらちゃ～ん♪》《漁夫の利は得させんよ、裏方ども》

……って、何だ中国妖怪の皆様かよ。出て来るとは思ってたけど、今になって出陣か。女狐が指揮を執るだけに、慎重で狡猾なタイミングだな。まさに漁夫の利を得に来ましたって感じ。

それにしても、随分と派手な登場のし方をするねぇ、戦場のど真ん中の地面を突き破るとかさ。地上戦をしている連中が大分減ったじゃん。あはは、人や妖怪が死んでるんですけど～♪

あと、前々から思ってたけど、その「妖怪城」ってどういう代物なの？

紫禁城みたいな本丸の真下から凧の触手と蟲の節足がいっぱい生えてるとか、気

持ち悪いんだが。マジきしょーい。死ね。爆ぜろ。それからたこ焼きに為れ。食わずに捨ててやる。

『あらまびっくり～♪』

いやはや、初代&二代目「ブリガドーン」に「宝船」と「八幡船」、タコムシな「妖怪城」と来たか。上も下も大混乱、大混乱～♪

役者が揃いも揃っちゃって、本当に……た～のし～ぃ♪

◆八幡船

主に倭寇の際に用いられた、日本の海賊船。教科書にも載ってるアレ。古代日本では他国への海賊行為を「バハン」と言い、その当て字の1つが「八幡」である。由来は定かではないが、一説には「海上安全を祈願して八幡大菩薩の幟を立てたから」と言われている。罰当たりにも程がある。

今作ではぬらりひょんの飛行戦艦になっている。黒塗りなのは「黒船」をイメージしたから。

これが戦争

とある戦場の一場面

「食らえ！　風の呼吸、伍ノ型「木枯らし颪」！」
『グギャッ！』『ギギィィッ！』『ギャヴォッ!?』
「鬼殺隊」一般隊士：赤甲颪（しゃっこうおろし）が迫り来る使い魔や日本妖怪を斬り捨てる。人知の及ばぬ化け物を相手に大立ち回りだ。
「くっ……はぁ……はぁ……！」
しかし、その息は絶え絶えで、最早立っているのがやっとの状態である。戦い始めて既に1時間は経過しているのだから、当然だろう。
『ウォオオオオ！』
『セァアアアッ！』
「ぐぅ……このっ！」

だが、敵は待ってくれない。妖怪は次から次へと湧いてくるし、使い魔もドンドン投入されてくる。

特に厄介なのが、使い魔側だ。どいつもこいつも飛び道具ばかり使ってきて、刀剣類は本当に寄り付かれた時にしか抜かない。徹して近接戦を対策している。鳴女が齎したであろう武器もそうだが、何より「鬼殺隊」に対する戦い方が上手過ぎるのである。相当な修練を積んだのだろう。

かと言って、日本妖怪が弱いという訳ではない。基本的な身体能力が高いし、使い魔と違って生命力も高く、相当な深手を負わせなければ、倒しても倒しても襲って来る。鬼太郎ファミリーに隠れがちで陰が薄いが、その底力は油断ならないと言える。

『チョアアッ！』

さらに、泣きっ面に鉢と言わんばかりに、地を裂き現れた「妖怪城」から無数の「兵馬妖」が出陣してきた。

兵馬妖は、竜のような馬「竜馬」や黒い麒麟「角端獣」に跨った、傀儡人形の兵団だ。黒雲坊が秘密裏に九尾姉弟へ提供した、「天狗傀儡」の技術を応用した物で

あり、材料が尽きるまでは延々と増産出来る。言ってしまえば、馬が本体の兵器群である。もしくはスタンド使いの馬。

日本妖怪や使い魔たちに加えて、こんな連中まで投入されては、人の身で抗う事は不可能だろう。日輪刀も折れてしまったし、まさしく絶体絶命。

そう、普通の人間ならば。

「くっそぉ……！　鬼札、「ストライク」！」

追い詰められた颯は、「鬼札」を切る事にした。

鬼札とは、予め殺しておいた化け物……彼の場合はポケモンのストライクの魂を封じた呪符で、これを破る事により〝呪い〟を受けて、その力を行使出来るのだ。

しかし、あくまで一時的な物であり、破れた札は二度と使えない上に身体への負担も莫大な為、本当に危険な場合以外に使うのは自殺行為である。

まぁ、現状がバリバリに鬼気迫っているので、鬼札を切る以外の選択肢はないのだが……。

『……しゃらぁあああああああっ！』

『ぐぉっ!?』『グゲッ!?』『ギギギ……！』

両腕が鎌になった颪が、山から吹き下ろす強風のように、妖怪や使い魔、兵馬妖を屠っていく。その俊足は音の速さを超えており、衝撃波すら生みながら、眼前の敵を葬り去る。

『くはっ……！』

だが、そこまでだ。限界に限界を重ねた颪の体力は底を突き破り、命が零れ落ちている。鬼札が解けた彼は、最早立ち上がる事さえ不可能だった。

『ガガギギガガ！』

そんな颪を殺そうと、自律行動中の傀儡が迫る。

「せぇい！」「あ……」

『ギゴ……ガガ……！』

もう駄目だ、お終いだ、と思ったその時、誰かが彼の命を救った。同じ「鬼殺隊」の潤衣（うるおい）マリモである。２人は同期で、お互いに認め合うライバルだ。石動兄妹や村田組とは程遠いが、それでも充分に強い。この大乱戦の中、ここまで生き残っているのが、その証拠である。

「まったく、世話が焼けるわね！」

そう言って、マリモが手を差し出してきた。顔が少しだけ赤い。

「ハハハ、相変わらずキツい……」

こんな状況にも関わらず、何時もの強気な彼女の姿に、颯は思わず「やれやれ」と苦笑いを浮かべる。一瞬閉じた瞼の裏には、今までの思い出が走馬灯となって駆け抜けていた。

『グルルル……』

「……え？」

そして、再び目を開けた時、彼の目に飛び込んで来たのは、超帯電状態のジンオウガと――――顎から上を失い、脳漿を撒き散らしつつ倒れ伏すマリモの姿。彼女は雷狼竜に頭を噛み砕かれ、生命活動を停止……死んだのだ。文字通り迅雷の如く迫ってきたジンオウガに不意を突かれたのであろう。あまりにも呆気ない最期である。

『アヴォオオオン！』

「うぁ……びぃっ!?」

さらに、物理的にも精神的にも動けぬ颯もまた、ジンオウガのライジングお手付

きにより上半身を潰され、地面の染みとなった。砕けた骨や破裂した臓器が混じり合った、斑模様のミートソースの出来上がりだ。不味そう。

しかし、この惨劇も戦場で起こった一場面に過ぎず、同じようなシチュエーションが秒単位で量産されていく。そこに人間や化け物という括りは存在しない。死は平等に訪れる。

そう、これが戦争……世界最期の日である。

◆赤甲 颪と潤衣 マリモ

「鬼殺隊」のモブ隊員。2人揃って入隊し、最初こそお互いに反目し合っていたが、任務を熟す内に打ち解け、今では将来を誓い合う仲となっている。この戦いを生き延びられたら結婚するつもりだった。死んだけど。

いもうと

ようやくこの人が出て来マス。

『行け、「松明丸」！』
『ギュヴァアアッ！』
『くそっ、効かない！　……ぐぁあああああっ！』
また1羽、烏天狗が墜ちた。「松明丸」を撃ったは良い物の、リオレウスに殆ど通じず、逆に火球で反撃されてしまったのだ。
『飛竜たちに「松明丸」はあまり意味がない！　「水龍丸」で撃ち落とせ！』
『了解！』『てやぁっ！』『そりゃそりゃそりゃ！』
『ギギャッ!?　……ギュガァアアアッ！』
一応、黒鴉の的確な指揮により幾つかは墜とし返してはいるが、1体に付き数羽掛かりと、明らかに火力不足である。

しかも、向こうにはリオレウスだけでなく、ライゼクスやセルレギオスなどの高機動な飛竜種が揃っており、彼らに守られる形でバゼルギウスがドンドン空爆している為、全く以て手が足りない。

はてさて、どうした物か……。

「【雷撃（サンダー・ボルト）】」

『キェエエエエエッ!?』

すると、何処からともなく雷魔法が放たれ、使い魔のライダーごと、セルレギオスを一撃で仕留めた。

「ライゼクス以外は電気が弱点よ！」

『アニエス殿か！』

放ち手は、バックベアード軍の裏切者にして、今は鬼太郎たちの味方となっている魔女、アニエス。かのアデル・フォン・アスワングの実妹だ。姉程の技巧は無いが、膨大過ぎる魔力を有しており、威力だけなら姉以上を誇る。

『助かったぞ』

「それはお互い様よ。……こんな私を受け入れてくれたんだからね、日本妖怪は」

黒鴉の謝礼に、アニエスは首を振る。

彼女は姉と違ってバックベアードの遣り方に前々から疑問を持っており、第1次世界最期の日の後、母親のザンビアがブリガドーンのコアにされた事を知ったのが決定打となって、完全に離反。バックベアードが弱っている隙に「アルカナの指輪」を盗み出し、再度の侵略を止めようとした。

だが、正義感ばかりが先行する性格が災いして短絡的な行動をしがちだった上に、西洋妖怪の追撃や鳴女の出現により、亡命先の鬼太郎ファミリーに多大な迷惑を掛けてしまった。一時は険悪な関係になったものの、真名が取りなしてくれたおかげで和解し、日本妖怪と協力して戦う事を決意したのである。

そう言った経緯がある為、アニエスは協力的ではある物の、少しばかり自虐的なのだ。

『鬼太郎殿は、君の事も大切な仲間だと思っているよ』

「……ありがとう。じゃあ、ジャンジャン行くわよ！」

しかし、今は戦いの最中。感傷に浸っている暇は無いし、呆けている場合でもない。せっかく弱点を共有したのだから、とにかく眼前の敵を斃す事が優先である。

「【雷撃】【雷撃】【雷撃】！」

『第壱隊は天狗風でアニエス殿を援護！　他の者は、「水龍丸」に「松明丸」を当てて、爆発させろ！』

そして、アニエスを中心として反撃を開始する。【雷撃】でダメージを与え、「水龍丸」と「松明丸」による水蒸気爆発により、次々と飛竜を墜とす。電気の通じないライゼクスに【氷弾（アイスバーン）】を当てる事も忘れない。

《――――――入電！　「ブリガドーン」より高魔力反応検知！》

だが、それも長く続かなかった。

『主砲か!?』

《いえ、移動しています！　おそらく敵機の増援です！》

『数は!?』

《……一機です！》

『何だと……!?』

「まさか……！」

「宝船」からの報告に、アニエスは嫌な予感を覚える。

――――――ズドドドド……ドゴォオオンッ！

さらに、凄まじい閃光と轟音と共に、果たしてそれは、現実の物と為った。

《十二番艦がやられました！》

『これが個人の力か!?』

ブリガドーンから発進した敵機は物凄い勢いで上昇したかと思うと、瞬時に身を翻して急降下しつつ、擦り抜け様に「宝船」を蜂の巣にして撃沈した。

その正体は、「クラリチェレガリア魔改」を中心に堕天使のような機械翼を取り付けた、特製のバックパックを背負う、バックベアード軍最強の魔女――――――、

「姉さん……！」

即ち、アデル・フォン・アスワングその人だった。

《迎撃態勢！　撃ち落とせ！》

「……」

降下から再び上昇の軌道を取ったアデルに「宝船」たちは必死に防御弾幕を張る

が、彼女の機動力は常軌を逸しており、全ての攻撃を躱した上でもう1艦を爆砕してしまう。まさに圧倒的だ。

「止めて！」

次の「宝船」を墜とそうとしたアデルに、アニエスが魔法を放った。

「……」

アデルは簡単にそれを回避し、今度はアニエスへ襲い掛かる。

「くっ……！」

真面にやり合ったら押し負けると本能的に察したアニエスは、アデルを引き離す意味も込めて、背を向けて上昇した。アデルもそれに追従する。光る雲を突き抜け、フライアウェイ。

「姉さん、もう止めてよ！　どうしてそこまで戦争をしたがるの!?」

「……アニエス」

そして、姉妹は対峙する。大気圏のその先で、地球を眼下に捉えながら。

「どうして、だと……？　フフフ、ははは……」

この期に及んで子供染みた事を抜かす妹に、アデルは思わず冷笑した。

自分が一体何をしたのか、分かっていないのだろうか。手前勝手な正義感でバックベアード軍を掻き乱し、亡命先に迷惑を掛け、剰え「戦争なんて間違ってる」などとは……。

「ハッハッハッハッハッ！」

「ね、姉さん？」

しかし、何より許せないのは、それを姉である自分に向けて言った事である。

アデルはこれまでアニエスを守ろうと様々な努力をしてきた。バックベアードの不信を買ってまで鳴女たちと接触し、幾多の試練を乗り越え、遂にアニエスがブリガドーンのコアにされる事態を回避した。

後はアニエスの身柄を確保し、説得するだけだったのだが――――流石に、もう疲れた。

最近、少しずつ思っていた事ではあるが、こいつは一体何様なのだろうか？

何処までも自分勝手に振る舞い、悲劇のヒロインを気取って、自分を間違っていると宣う、このガキは何なのだろうか？

これなら、何時もふざけてばかりだけど、理解を示してくれる、鳴女の方がよっ

ぽどマシだ。

「何が、どうしてだ……ふざけるなよ！」

アデルの堪忍袋の緒は、完全にブチ切れた。

「お前に……お前に、私の気持ちが分かってたまるかぁあああっ！」

「くっ……姉さぁあああん！」

こうして、何処まで行っても擦れ違う、虚しい姉妹喧嘩が始まった。

◆アニエス

ご存じアデルの妹で、膨大な魔力の持ち主。西洋妖怪の一派であり、彼女の一族は代々バックベアードに仕えてきたという。

しかし、バックベアードの「ブリガドーン計画」に疑問を抱き、その要となる「アルカナの指輪」を盗み出し、日本へ逃れた事で、鬼太郎と関わる事となる。

正義感が強いものの、それに振り回されてしまう事が多く、結果として西洋妖怪・日本妖怪共に多大な迷惑を掛けてしまった。元来は心優しい性格で、「追われ

る身」という状況が彼女の心を空回りさせてしまったのだろう。

この世界でも基本的な部分は変わらないが、アデルを取り巻く環境が魔窟と化しており、正直、彼女が居ようが居まいが、物語にはあんまり影響が無かったりする（そもそも「アルカナの指輪」に予備がある上に、「ブリガドーン計画」の内容が異なっている）。精々、アデルの胃をスポンジ状にした事ぐらいだろうか？

鳴女さんの令和ロック物語

著者　ディヴァ子

発行日　2023 年 2 月 21 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-
https://syosetu.org/novel/264722/

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。